

頭註

國譯本草綱目

第六册

春陽堂藏版

原著　明　李時珍

監修・校註　理學博士　白井光太郎

顧問　木村博昭

考定　理學博士　牧野富太郎

考定　理學博士　脇水鐵五郎

考定　岡田信利

考定　矢野宗幹

考定　木村康一

譯文　鈴木眞海

頭註國譯本草綱目　第六册

目次

本草綱目草部第十七卷　下

本草綱目草部第十八卷 上

本草綱目草部第十八卷　下

蔓草類

本草綱目草部第十九卷

本草綱目草部第二十卷

本草綱目草部第二十一卷

本草綱目草部

第十七卷　下

草の六

天雄（本經下品）附子の地中にあつて年を經て長大となつたものの名。

釋名　白幕（本經）　時珍曰く、天雄なるものは、附子を種ゑてそれに生じ、或は變つて出來るものだ。形狀は長くして子を生ぜぬ。故に天雄といふ。その物の長くして尖つたものを天錐といふ。それは姿態を形容したものだ。

集解　別錄に曰く、天雄は(一)少室の山谷に生ずる。二月に根を採つて陰乾する。

弘景曰く、今は八月中旬に採つたものを用ゐる。天雄は附子に似たもので、細くして長く、三四寸ばかりのものだ。これと烏頭と附子との三種は、もと(二)建平に產したところから三建と呼ぶ。今は(三)宜都、(四)佷山のものが最も好し。所謂る西建である。錢塘地方のものは所謂る東建であつて、氣力が小弱で似も付かない。故に西(五)氷は猶ほ東白に勝れりといふ。天雄は、灰で(六)殺したときに(七)水强なものがある。

(一)少室ハ隰草類葵ノ註ヲ見ヨ。
(二)建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(三)宜都ハ山草類巴戟天ノ註ヲ見ヨ。
(四)佷山ハ今ノ湖北省宜都縣ノ西五十支里、長陽縣ノ地、即チ漢ノ佷山縣、隋ノ佷山縣ノ地ナリ。
(五)金陵本、氷ヲ水ニ作ル。
(六)殺ハ毒ヲ滅殺スルコト。
(七)水强ハ一說ニ木張ノ誤。

(八)綿州、龍州ハ附子ノ註ヲ見ヨ。

それは佳品でない。

恭曰く、天雄、附子、烏頭は、いづれも蜀道の(八)綿州、龍州に産するものが佳し。餘處にはたとひ有つても力が弱く、到底似もつかない。陶氏が、この三物は倶に建平に産したから名けたといふは誤りだ。烏頭の苗は堇——音は靳(キン)——と名ける。爾雅に『芨は堇草なり』とあるがそれだ。今はその堇を建と訛るので、遂に建平が解釋の引合に出されたのだ。

承曰く、天雄に關しては、諸説に十分盡されてゐる。ただ始めに種ゑたままで附子や側子を生ぜず、年を經て獨り長大になつたそのもののことだ。蜀地方では、栽培して天雄の生ずるのを非常に忌む。それは收穫の利益が薄いからで、養蠶に白殭の出るを忌むと同樣だ。

時珍曰く、天雄に二種ある。一種は、蜀地方で附子を種ゑてその中に生じた長いもの、或は種ゑた附子が盡く變じて成長したもの、卽ち芋を種ゑてさまざまな形狀のものが出來るやうな類である。一種は、他の地方に生ずるもので、草烏頭の類のやうに自然に生じて發育するものだ。故に別錄の烏喙の註に『長さ三寸已上のものを天

雄といふ」とある。即ちそのものだ。藥に入れるには蜀の產で(九)釀制を經たものを用うべきものである。或は、重さ二兩半、(一〇)象眼のあるものを用ゐるが佳しともいふ。その他は附子の條參照。

【修治】 斅曰く、炮き(一一)皺めて皮と尖底を去つて用うべきものである。或は附子に施すやうな方法で陰制するも差支なし。大明曰く、凡そ丸、散には皮を去つて用ゐる。飲藥には皮共に生で使ふが甚だ佳し。

時珍曰く、熟して用ゐる一法としては、十兩づつを酒で七日浸し、土坑を掘つて炭半(一二)秤でその坑内を赤く煅き、火を去つて醋二升を沃ぎ、乾くを候ち熱するに乘じて天雄を入れ、上から小盆を蓋せて一夜置き、取出して臍を去つて用ゐる。

【氣味】 【辛し、溫にして大毒あり】 別錄に曰く、甘し、大溫なり。權曰く、大熱なり。乾薑でそれを制するがよし。之才曰く、遠志が使となる。腐婢を惡み、豉汁を忌む。

【主治】 【大風、寒濕痺、歷節痛、拘攣、緩急。積聚邪氣を破る。金瘡。(一三)筋骨を强くし、身體を輕くし、步行を健にする】(本經) 【頭面風の去來疼痛、心腹の結

(九)釀制トハ鹽水ニ漬ケタリ、小便ニツケタリスルコト。
(一〇)象眼トハ苞皮ノ印痕ヲ云フナラン。
(一一)本草原始ニ破ニ作ル、然レドモ皴メテ收斂セシムル意ナラン。
(一二)一秤ハ十五斤。
(一三)本經ニ骨節ニ作ル。

聚、關節が重くして步行不能なるを療じ、骨間の痛を除き、陰氣を長じ、志を強くし、人をして武勇ならしめ、力作して倦まざらしめる】(別錄) 禹錫曰く、按ずるに、淮南子に『天雄、雄雞。志氣益す』とあり、注に『天雄一箇を取り、雄雞の(一四)腸中に入れて搗いて(一五)食へば、人をして勇ならしめる』とある。【風痰、冷痺、軟脚、毒風を治し、能く氣喘促急を止め、禽、蟲の毒を殺す】(甄權) 【一切の風、一切の氣を治し、陽道を助け、水臟を温め、腰、膝を補し、精を益し、目を明かにし、九竅を通じ、皮膚を利し、血脈を調へる。四肢不遂。胸膈の水を下し、痃癖、(一六)癰結を破り、膿を排し、痛を止め、骨を續ぎ、瘀血を消す。背脊傴僂、霍亂轉筋。汗を發し、陰汗を止める。炮いて含めば喉痺を治す】(大明)

發明　宗奭曰く、虛寒を補するには必ず附子を用ゐ、風患者には多く天雄を用ゐる。やはり大なるものを取る。その尖角は熱性多くして肯て下部に就かぬものだ。故にその(一七)敷散の功力を取るのである。

元素曰く、天雄以外に能く上焦の陽虛を補し得るものがない。

震亨曰く、天雄、烏頭は氣が壯んで形の堂堂たるものだ。下部に用ゐる藥の佐と

(一四)一說ニ腸ハ服ノ誤。
(一五)大觀ニ食上ニ生ノ字アリ。
(一六)癰ハ癥ノ誤ナリト云フ。
(一七)敷散ハ上行ヲ云フ。

すべきものである。

時珍曰く、烏、附、天雄は、いづれも下焦、命門の陽虚を補する藥であつて、下を補するは結果に於て上を益することになるのだ。上焦の陽虚ならば心肺の範圍に屬する。その場合には參、芪を用うべきものだ。天雄を用うべきものではない。且つ烏、附、天雄の尖は皆下に向つて生ずるもので、その氣は下行する。その臍は上に向つて苗を生ずる處だ。寇宗奭は、それを『背て下に就かぬ』といひ、張元素は『上焦の陽虚を補す』といつたが、いづれも尖を上に向ふものと誤認したためだ。ただ朱震亨だけが『下部に用ゐる藥の佐となる』といつたのは見方として正しいが、まだ意味の說明に於て明確でない。雷斅の炮炙論の序に『咳逆の數數なるには、酒で熟雄を服す』とあるは、天雄を炮いて研り、酒で一錢を服することをいつたものと思ふ。

【附方】 新三。【三建湯】元陽が素より虛し、寒邪が(一八)外攻して、手、足が厥冷し、大、小便が滑數し、小便が白く濁り、六脈の沈、微なるを治し、(一九)固冷を除き、元氣を扶け、また傷寒陰毒を治す。烏頭、附子、天雄を、いづれも炮いて皮、

(一八)外攻ハ外部カラ浸犯スルコト。
(一九)固冷ハ厥冷ニ同ジ。

臍を裂き去り、等分を吹咀して四錢づつを、水二盞、薑十五片と八分に煎じて溫服する。（肘後方）【男子の失精】天雄三兩を炮き、白朮八兩、桂枝六兩、龍骨三兩を散にし、半錢づつを酒で服す。（張仲景金匱要略）【大風惡癩】三月、四月に天雄、烏頭の苗、及び根を採つて土を去り、洗はずに搗いた汁に細粒の黑豆を漬けて皮を摩り去り、なほ皮の落ちぬときは一夜漬けて取出し、晒し乾してまた浸し、此の如く七回繰返す。かくて初めには三箇を吞み、漸次に六七箇まで增加する。房事、豬、魚、雞、蒜を禁ず。犯せば直ちに死亡する。

側子（別錄下品）附子の側に著て出來た根の名。

【釋名】**萴子**　時珍曰く、附子の側に生ずるから名けたものだ。許愼の說文には萴子と書いてある。

【集解】弘景曰く、この物は附子の邊角の大なるものを削り取つたものだ。昔は用ゐなかつたが、近來の醫師が脚氣の治療に用ゐて多く效驗がある。

恭曰く、側子、附子は、いづれも烏頭の下旁に出るもので、その小なるものを側

(一)當陽ハ今ノ湖北省當陽縣ノ地ナリ。此ニハ當陽以南揚子江マデノ地ヲイフ。山南ハ隰草類漏盧ノ註ヲ見ヨ。嵩高ハ今ノ河南省登封縣ノ嵩山。齊、魯ハ今ノ山東省地方ヲ指ス。
(二)夔州ハ今ノ四川省夔州ノ地ニシテ、劍南マデトイフハ今ノ四川省東北部一帶ヲ指ス。

子といひ、大なるものを附子といふ。此に附子の角を側子としてゐるが、事實はさうでない。(一)當陽以南、江左、山南、嵩高、齊、魯地方の附子には、時に大豆ほどの角のあるものもあるが、(二)夔州以北、劍南までの地方から出る附子の角はただ黍、粟ほどのものだ。側子としての用に足る筈はない。近來都下では、いづれも細附子を用ゐて效を擧げてゐる。角を取るといふことは未だ嘗てないことだ。

保昇曰く、現に附子の邊には、確かに大棗核、及び檳榔ほどの角がある。形狀は自ら一顆を成し、且つ小さくない。乃ち烏頭の旁に附子が出る。附子の旁に側子が出る。甚だ明かだ。

時珍曰く、側子といふは、附子の旁に粘著し連つた小さいもののことだ。故に呉普、陶弘景は、いづれも附子の角の大なるものを指してゐる。その又側子より更に小なるものは漏藍子だ。故に楊氏の附子記に『側子、漏藍は耕作者が重用視せずして勞役者の欲しがるままに與へてやる』とある。

修治 附子に同じ。

氣味 【辛し、大熱にして大毒あり】普曰く、神農、岐伯は大毒ありといふ。

八月に採收する。畏、惡の關係は附子に同じ。【主治】【癰腫、風痺歷節、腰、脚の疼冷、寒熱鼠瘻。又、胎を墮す】（別錄）【脚氣、冷風、濕痺、大風、筋骨の攣急を療ず】（甄權）【冷酒で調へて服すれば、全身の風疹を治するに神妙である】（雷斅）

【發明】機曰く、烏頭そのものは生育の主腦たる元種であつて、母としての氣を得てゐる。中央に居を占め、守つて移らないものだ。側子はその旁側に散生するもので、その體に一定の位置がなく、その氣は輕く揚るものだ。四肢に發散し皮毛に充て達するに適する治風の藥である。天雄は長くして尖り、その氣は上に親しむ。これは上焦の陽虛を補するに適するものだ。木鼈子なるものは、前記各種の物の餘分の氣が結成したもので、形體も見る影もない粗末なものだ。湯に入れては服せぬがよい。服めば視力を喪失することがある。

時珍曰く、唐の侍郎元希聲の癱瘓風を治する藥に側子湯といふがあつて、外臺祕要に記載してあるが、藥として多くは記錄されない。

漏藍子（綱目）

附子の極めて瘠小となつたものの名。

【釋名】 **木鼈子**（炮炙論） **虎掌**（日華） 時珍曰く、これはまだ附子にならぬ些細なもので、藍から漏るほど小さいといふところから命けた名稱だ。南星の最小なるものも虎掌と名け、この物も類似してゐるところからやはり同一名稱がある。大明會典の記載に『西川成都府の歳貢は、天雄二十對、附子五十對、烏頭五十對、漏藍二十斤』とあるが、用途が判然せぬ。

【氣味】 【苦く辛し、毒あり】 斅曰く、これを服すれば視力を喪失する。

【主治】 【惡痢、冷漏瘡、惡瘡、癘風】（時珍）

【發明】 時珍曰く、按ずるに、楊士瀛の直指方に『凡そ年久しき漏瘡患者の元陽を囘復するには、漏藍子などの物を加減して用うべきものだが、若し用うべからざる者に對して輕輕しく用ゐると、熱氣が虛に乘じて結核に變ぜしめ、害をなすこと就中甚しい處がある』とある。又、按ずるに、類編に『ある者が兩足に瘡を生じ、臭潰して近けぬ有樣だつたとき、ある夜、五夫人祠の軒に寢て、夢に、漏藍子一箇を生で研末し、膩粉少量を入れて井水で調へて塗るといふ方の神授を受け、その法の通りに治療して果して癒えた』とある。蓋しこの物は服餌には堪へぬが、ただ瘡科

の藥だけにはよいものだ。

附方　新一。【一切の惡痢】種種の下痢、及び休息痢には、百歲丸——漏藍子の大なるもの一箇、阿膠、木香、黃連、罌粟殼各半兩を共に炒り焦して性を存し、乳香少量を入れて末にし、糊で梧子大の丸にし、年齡一歲に對し一丸の割合で米飲で服す。（羅天益衞生寶鑑）

(一)烏頭（本經下品）

和名　うづ
學名　Aconitum Fischeri, Reichb. ?
科名　うまのあしがた科(毛茛科)

校正　拾遺の獨白草を併せ入る。

釋名　**烏喙**（本經）卽ち兩頭尖。**草烏頭**（綱目）**土附子**（日華）**奚毒**（本經）**耿子**（吳普）**毒公**（吳普）また帝秋と名ける。**金鴉**（綱目）苗を**茛**　音は艮（ゴン）**芨**　音は及（キフ）**菫**　音は近（キン）と名ける。**獨白草**（拾遺）**鴛鴦菊**（綱目）汁を煎じたものを**射罔**と名ける。普曰く、烏頭とは、形が烏の頭のやうだといふ意味で、兩岐があつて相合し、烏の喙のやうなものを名けて烏喙といふ。喙、卽ち烏の

(一)牧野云フ、烏頭ハ蓋シ主トシテA. Fischeri, Reichb. ヲ指スカトモ思ヘドモ果シテサウ斷言シテヨイカ私ハ躊躇スル。此屬ノ種類多ク又疆域廣大ナ支那デアルカラ、烏頭ノ名デ諸方カラ出ル生藥品ヲ精査シタラ其原植物ハ必ズシモ一種デハナイデアラウト思フ。

口である。

○恭曰く、烏喙、卽ち烏頭の異名だ。この物には三岐のものはあるが、しかし兩岐のものは少ない。烏頭の兩岐のを烏喙と名けるならば、天雄、附子の兩岐のものをば何と名付けたものだらう。

○○時珍曰く、これは、烏頭の特產地以外の土地に野生したもので、俗に草烏頭といひ、また竹節烏頭ともいふ。江北に出るものをば淮烏頭といふ。日華子の所謂る土附子がそれだ。烏喙とは兩岐が偶生したもののことで、今俗に兩頭尖と呼ぶ。形に因んだ名稱であつて、その實は一物だ。附子、天雄の兩岐偶生したものも烏喙といふが、功力はやはり天雄と同一のもので、此にいふ烏頭とは違ふ。蘇恭はこの間の事實を知らぬところから、反つてこれを疑つたのである。草烏頭から取つた汁は晒して毒藥を作る。それは、禽獸を



〔附圖〕

——草烏頭——

射殪すに用ゐるところから射罔なる名稱があるのだ。後魏書に『遼東、塞外では、秋、烏頭を採收して毒藥を作り、禽獸を射る』とあり。陳藏器が引用した續漢五行志の『西國には獨白草といふが生える。それを煎じて藥を作り、箭に敷いて人を射れば直ちに死ぬ』とあるは此にいふ烏頭で、川烏頭のことではない。菊譜に『鴛鴦菊』とあるは烏喙の苗のことだ。

集解　別錄に曰く、烏頭、烏喙は(二)朗陵の山谷に生ずる。正月、二月に採つて陰乾する。長さ三寸以上のものは天雄である。普曰く、正月に始めて生える。葉は厚く、莖は四角で中が空だ。葉は四枚四枚と相當り、蒿とよく似てゐる。

弘景曰く、今は四月に採つて用ゐ、また八月にも採る。莖の汁を搗き搾り、日光に晒し煎じて射罔を作る。獵夫がそれを箭に傅けて禽獸を射ると十歩にして倒れる。人間に中ればやはり死亡するから、速かに解毒の方法を講ぜねばならぬ。朗陵は汝南郡の管內だ。

大明曰く、土附子を生で皮を去り、搗いて濾した汁を澄清し、少しづつ添加しながら日光で晒乾して膏を作る。それは射罔と名けて毒箭を作るものだ。

(二)朗陵ハ附子ノ註ヲ見ヨ。

○時珍曰く、處處にある。根、苗、花、實はいづれも川烏頭と同樣であるが、ただこれは野生のもので、又、釀造して用ゐるといふ方法もなく、その根は外部が黑く內部が白く、皺があつて枯燥なる點が異ふのである。しかし毒の點はより以上に激甚なものだ。段成式の酉陽雜俎に『雀芋は、形狀は雀の頭のやうで、乾地に置けば反つて濕り、濕地に置けば反つて乾く。飛鳥がこれに觸れれば墮ち、走獸がこれに遇へば僵れる。やはり草烏に類似したものだが、毒は更に甚しい』とあり、又『建寧郡の烏勾山に牧靡といふ草がある。烏鵲が誤つて烏喙を食つて中毒すると、必ず急にこの草を食つてその毒を解す』とある。牧靡とは何の藥であるか判然せぬ。

修治 ○時珍曰く、草烏頭は、或は生で用ゐ、或は炮いて用ゐ、或は烏大豆と共に煮熟してその毒を去つて用ゐる。

烏頭 **氣味** 【辛し、溫にして大毒あり】 ○別錄に曰く、甘し、大熱にして大毒あり。○普曰く、神農、雷公、桐君、黃帝は甘し、毒ありといふ。○權曰く、苦く辛し、大熱にして大毒あり。○大明曰く、味苦く辛し、熱にして毒あり。○之才曰く、莽

草、遠志が使となる。半夏、栝樓、貝母、白斂、白芨と反し、藜蘆を惡む。時珍曰く、丹砂、礜石を伏し、豉汁を忌み、飴、糖を畏れる。黑豆、冷水は能くその毒を解す。

主治　【中風、惡風でぞくぞくとするものには汗を出し、寒濕痺、欬逆、上氣を除き、積聚寒熱を破る。その汁を煎じたものは射罔と名け、禽獸を殺す】(本經)【胸上の痰冷で食物の落付かぬもの、心腹冷(三)痰の臍間(四)痛で俛仰すべからざるもの、目中痛で長時間物を視得ざるものを消す。又、胎を墮す】(別錄)【惡風の憎寒、冷痰の心を包むもの、腸腹の㽲痛、痃癖氣塊、齒痛に主效があり、陽事を益し、志を強くする】(甄權)【頭風、喉痺、癰腫、疔毒を治す】(時珍)

烏喙　一名 **兩頭尖**　氣味　【辛し、微溫にして大毒あり】普曰く、神農、雷公、桐君、黃帝は毒ありといふ。權曰く、苦く辛し、大熱なり。○畏、惡の關係は烏頭に同じ。　主治　【風濕。男子の腎濕で陰(五)寒して癢きもの。寒熱で歷節掣引し、腰痛して步行不能のもの。癰腫の膿結。又、胎を墮す】(別錄)【男子の腎氣衰弱して陰汗するもの。(六)瘰癧の歲月に亙つて消せぬもの】(甄權)【大風、頑痺に主效がある】

(三)大觀ニ疾ニ作ル。
(四)大觀ニ痛下ニ肩胛痛ノ三字アリ。
(五)大觀ニ寒癢ヲ囊痒ニ作ル。
(六)大觀ニ癰腫ニ作ル。

（七）大觀ニ靑ニ作ル。
（八）大觀ニ痺下ニ痛字アリ。

（時珍）

射罔 【氣味】【苦し、大毒あり】之才曰く、溫なり。大明曰く、人が射罔の毒に中つたときは、甘草、藍（七）汁、小豆葉、浮萍、冷水、薺苨を用ゐれば、いづれもその一味だけで禦ぎ得る。【主治】【尸疰、癥堅、及び頭中風（八）痺】（別錄）【瘻瘡、瘡根結核、瘰癧毒腫。また蛇咬には、先づこれを肉の四畔に塗り、漸次に瘡に近づければ、習習として病を逐ふて骨に至る。瘡に熱膿、及び黃水のあるにはこれを塗る。もし膿水なくして生血の出るもの、及び新たなる傷破には塗つてはならぬ。立ろに人を殺す】（藏器）

【發明】 時珍曰く、草烏頭、射罔は非常な毒藥であつて、川烏頭、附子などのやうに人工で栽培し、加ふるに釀制を施して毒性を殺したものとは比較にならぬ。中風の頑固なもの、及び急病以外には輕しく投ずべきものでない。甄權の藥性論に、この物を、陽事を益し、男子の腎氣衰弱を治すといつてあるが、そのままには認め難い。この類のものは、ただ能く風を搜し、濕に勝ち、頑痰を開き、頑瘡を治するに止まつて、毒を以て毒を攻むるだけのものだ。川烏頭や附子などのやうに、右腎、

命門を補する功力のあらう筈はない。吾が蘄州の知府郝某は、醫術の心得のあることを自負してゐたが、適ま風癬を病んだとき、草烏頭、木鼈子の藥を過多に服したので、腹に入ると直ちに痲痺し、遂に治術の施しやうなき狀態に陷つた。大いに警戒すべきことである。

機曰く、烏喙は、形が烏嘴のやうで氣が鋒銳だ。經絡を通じ、關節を利するに適し、蹊を尋ね、徑に達して直ちに病所に達するものである。煎じて射罔としたものは能く禽獸を殺す。これは勿論氣が鋒銳捷利でなければならぬわけだ。

楊清叟曰く、凡そ風寒濕痺、骨の內部の冷痛、及び損傷が骨に入つて年久しく痛みを發するもの、或は一切の陰疽、腫毒には、いづれも草烏頭、南星等分に少量の肉桂を加へて末にし、薑汁と熱酒で調へて塗るが宜し。まだ破れぬものは內消し、久しく潰れてゐるものは能く黑爛を去る。この二藥はその性、味が辛烈であつて、能く惡塊を破り、寒熱を逐ひ、冷のものをば消し、熱のものをば潰すものである。

【附方】　舊四、新四十八。【陰毒傷寒】生草烏頭を末にし、葱頭に蘸けて穀道の中に納れる。これを提盆散と名ける。（王海藏陰證略例）【二便不通】即ち前記の方である。

これを霹靂箭と名ける。【中風癱瘓】手、足が顫掉し、言語が蹇濇するには、左經丸――草烏頭を炮いて皮を去つて四兩、川烏頭を炮いて皮を去つて二兩、乳香、沒藥各一兩を末にし、生烏豆一升を、頭と翅を去つた斑蝥三十七箇と共に煮て豆が熟したとき蝥を去り、豆を取つて焙じ乾して末にし、よく和して醋麪糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを溫酒で服す。(簡易方)【癱瘓頑風】骨節の疼痛、下元の虛冷、諸風痔漏の下血、一切の風瘡には、草烏頭、川烏頭、兩頭尖各三錢、硫黃、麝香、丁香各一錢、木鼈子五箇を末にし、熟蘄艾と共に揉み軟げ、一塊にして紗紙で包み、燒いて病所を熏ずる。これを雷丸と名ける。(孫天仁集效方)【諸風の不遂】朱氏の集驗方では、生草烏頭、晩蠶沙等分を末にし、生地龍を取つて搗き和し、少量の醋を入れて糊で梧子大の丸にし、四五丸づつを白湯で服す。甚だ妙である。多く服してはならぬ、麻する處のあるものだ。これを鄂渚小金丹と名ける。○經驗濟世方では、草烏頭四兩を皮を去り、大豆半升、鹽一兩と共に沙瓶で三伏時煮て、豆を去つて烏頭を取り、木臼に入れて三百杵搗いて餅にし、焙じ乾して末にし、酒糊で梧子大の丸にし、十丸づつを空心に鹽湯で服す。これを至寶丹と名ける。【一切の頭風】神

應丹――生草烏頭、生天麻を各洗つて等分を擂り爛らし、汁を絞つて盆に傾け入れ、地上に一小坑を掘つて中を火で燒いた中へその盆を入れ、每日竹片で一囘づつ攪きまぜて夜間はそのまま露らし、かくて膏にし得るまでに晒して小さき錠にし、その一錠を三服に分け、葱、薑の自然汁を好き酒に和して熱服する。(乾坤祕韞)【一切の風證】頭風、痛風、黃鴉吊脚、風痺のいづれを問はず、生の淮烏頭一斤、生川烏頭一箇、生附子一箇をいづれも末にし、葱一斤、薑一斤を共に擂つて泥のやうにしたもので和して餠にし、盤の中へ草を鋪いて楮葉を載せた上へその餠を置き、その上をまた草と楮葉とで蓋ひ、餠に汗が出て黃ばむを待ち、一晝夜晒して舂いて末にし、生薑から取つた汁で煮た麪糊で和して梧子大の丸にし、一日二囘、三十丸づつを服す。服して後、身痺し、汗が出て癒える。風に當らぬやうにする。(乾坤祕韞)【破傷風病】壽域方では、草烏頭を末にし、一二分づつを溫酒で服して汗を出す。○儒門事親方では、草烏尖、白芷をいづれも生で研末し、半錢づつを、冷酒一盞に葱白一根を入れて共に煎じた湯で服し、少頃して葱白の熱粥を食ひ、汗を出す。立ろに癒える。【年久しき痲痺】或は歷節の走氣で疼痛し、不仁なるには、男女に拘はらず、神授

散――草烏頭半斤を皮を去つて末にし、一箇の袋に半まで豆腐を入れてその中にその末を入れ、その上にまた豆腐を塡充して壓搾して乾かし、それを鍋に入れて一夜煮る。その藥は石のやうに堅くなるものだ。それを取出して晒し乾して末にし、五分づつを、冷風濕氣には生薑湯で服し、麻木不仁には葱白湯で服す。(活人心統)【風濕痺木】黑神丸――草烏頭を皮のまま生で研り、五靈脂と等分を末にし、六月六日に水を滴らして彈子大の丸にし、四十歳以下の患者は六回に分服し、病の甚しきには一丸を二服にして薄荷湯に溶かして服す。微し麻する感じがあるを度とする。(本事方)【風濕走痛】黑弩煎丸――兩頭尖、五靈脂各一兩、乳香、沒藥、當歸三錢を末にして醋糊で梧子大の丸にし、十丸乃至三十丸づつを就寢時に溫酒で服す。油膩、濕麪を忌む。妊婦は服してはならぬ。(瑞竹堂方)【腰、脚の冷痛】烏頭三箇を皮、臍を去つて研末し、醋で調へて貼る。須臾に痛が止む。(十便良方)【痛みを作す膝風】草烏、細辛、防風等分を末にし、靴下の中へ摻り、また護膝の内に入れる。能く風濕を除き、歩行を健にする。(扶壽方)【遠路歩行のための脚腫】草烏、細辛、防風等分を末にして靴の底に摻り、また草鞋を水で微し濕してこれを摻つて穿く。千里を

歩める。甚だ妙だ。（經驗）【脚氣の掣痛】或は胯間に核あるには、生草烏頭、大黄、木鼈子を末にし、薑汁煎茶で調へて貼る。〇又、ある法では、草烏一味を末にし、薑汁、或は酒糟と共に搗いて貼る。（永類方）【濕滯足腫】朝は輕く暮に重きもの。草烏頭一兩、生薑一兩を共に研り、一夜置いて藥力を(九)交感せしめ、蒼朮一兩、葱白一兩と共に研つて一夜交感せしめ、各焙じ乾して末にし、酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを酒で服す。（艾元英如宜方）【除風、去濕】脾、胃の虚弱、久積冷氣で飲食の減少するを治す。草烏頭一斤、蒼朮二斤を、白を去つた陳皮半斤、生甘草四兩、黑豆三升、水一石で共に煮て乾し、ただ烏、朮のみを揀り取つて晒し焙じて末にし、酒糊で梧子大の丸にして焙じ乾して取り收め、二三十丸づつを空心に溫酒で服す。麻を覺えれば漸次に丸數を減ずる。これを烏朮丸と名ける。（集簡方）【偏、正頭痛】草烏頭四兩、川芎藭四兩、蒼朮半斤を、生薑四兩と、鬚のままの生葱一把を搗き爛らしたものと共に瓷瓶に入れて固く封じ、春は五日、夏は三日、秋は五日、冬は七日間土中に埋め、取出して晒し乾し、葱、薑を揀り去つて末にし、醋麪糊で和して梧子大の丸にし、九丸づつを就寢時に溫酒で服す。立ろに效がある。（戴古渝經驗方）【頭

(九) 交感トハ交互ニ操作スルコト。

(一〇)腦洩ハ腦漏ノ一名ニテ、蓄膿又前額竇加多兒ニ當ルモノナラン。

風の久患】草烏頭尖を生で一分、赤小豆三十五粒、麝香一字を末にし、半錢づつを薄荷湯で冷服し、更に痛の左、右に隨つて鼻に嗃ぐ。(指南方)【風痰頭痛】體虛で風に傷み、痰飲を停聚して上厥し、或は偏、或は正の頭痛するには、草烏頭を炮いて皮、尖を去つて半兩、川烏頭を生で皮、尖を去つて一兩、藿香、乳香を皂子三箇ほど末にし、二錢づつを薄荷と薑の湯で食後に服す。(陳言三因湯)【婦人の頭痛】血風の證には、草烏頭、巵子等分を末にして葱の自然汁で調へ、痛の左、右に隨つて太陽、及び額上に塗る。眼に入らぬやうにし、風を避ける(濟生方)【臭穢なる(一〇)腦洩】草烏を皮を去つて半兩、蒼朮一兩、川芎二兩をいづれも生で研末して麪糊で綠豆大の丸にし、十丸づつを茶で服す。一切の熱物を忌む。(聖濟總錄)【耳鳴、耳癢】流水、及び風聲の如くなるは、治療せねば聾となる。生烏頭を掘り取つて濕のあるうちに棗核ほどの大いさに剉み、耳を塞いで一日二回づつ易へる。三日以內で癒える。(千金方)【喉痺口噤】開かずして死せんとするには、草烏頭、皂莢等分を末にして麝香少量を入れ、牙に搽り、幷に鼻中に嗃ぐ。牙關は自ら開く。○濟生方では、草烏頭尖、石膽等分を末にし、一錢づつを醋で皂莢を煮た汁で薄く調へて腫上に掃き入る。數

回涎を流してその毒が破れる。【虚壅の口瘡】口全體、舌にまで及ぶものには、草烏一箇、南星一箇、薑一大塊を末にし、就寢時に醋で調へて手の心、足の心に塗る。或は草烏頭、吳茱萸等分を末にし、蜜で調へて足の心に塗る。（本事方）【口、鼻の痔蝕】穿ち透るものである。草烏頭の燒灰に麝香等分を入れ、末にして貼る。【風、蟲の牙痛】草烏を黑く炒つて一兩、細辛一錢を末にして揩り、涎を吐出する。○ある方では、草烏、食鹽を共に黑く炒つて摻る。（海上方）【寒氣（二）心痛】三十年の長きものには、射罔、食茱萸等分を末にして蜜で麻子大の丸にし、一日三回、二丸づつを酒で服す。これは劉國英が祕した方である。（范汪東陽方）【寒瘧、積瘧】巴豆一箇を心、皮を去り、巴豆の大いさほどの射罔を皮を去り、大棗一箇を皮を去り、搗いて梧子大の丸にし、早朝發作に先つて一丸づつを白湯で服す。（肘後方）【脾寒の厥瘧】先に寒し後に熱するを寒瘧と名ける。ただ寒するだけで熱せず、顏色の黑いものを厥瘧と名ける。寒多く熱少なく、顏色が黃にして腹痛するを脾瘧と名ける。三者いづれもこれを服するがよし。賈耘老は二十年間これを用ゐ、屢々實驗上の效果を擧げた。蛀のつかぬ草烏頭を皮を去り、十四回沸湯に泡けて少時盞で蓋ひ、それを切つて焙

（二）心痛ハ胃脘痛。

（一二）結陰詳ナラズ、陰證ニテ熱無キヲ云フナラン。

じ研り、稀糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを薑十片、棗三箇、葱三本の煎湯で早朝に服して棗で壓し、人が十支里歩む時間を隔てて再び一服する。絶對に湯を飲んではならぬ。飲めば藥の效力が發生せぬものだ（蘇東坡良方）【腹中の癥結】飲食を妨げ、身體の羸痩するには、射罔二兩、椒三百粒を搗いて末にし、雞子白で和して麻子大の丸にし、毎服一丸から漸次三丸に增加し、癒えるを度とする。（肘後方）【水泄寒痢】大草烏一兩を用ゐ、一半は生で研り、一半は灰に燒き、醋糊で和して綠豆大の丸にし、七丸づつを井華水で服す。生物、冷物、魚肉を忌む。（十便良方）【泄痢注下】三神丸——淸濁混沌たるものを泄瀉注下し、或は赤く、或は白く、腹臍が刺痛し、裏急後重するを治す。草烏頭三箇を皮、尖を去り、一箇は火で炮き、一箇は醋で煮、一箇は灰に燒き、末にして醋糊で綠豆大の丸にし、二十丸づつを、水瀉には流水で服し、赤痢には甘草湯で服し、白痢には薑湯で服す。魚類、腥きもの、生もの、冷物を忌む。（和劑局方）【（一二）結陰下血】腹痛するには、草烏頭を蛤粉で炒つて皮、臍を去り、切つて一兩、茴香を炒つて三兩を用ゐ、三錢づつを水一盞、鹽少許を入れて八分に煎じ、滓を去つて一夜露らし、五更に冷服する。（聖濟錄）【老人の遺

尿】遺失しても判らぬには、草烏頭一兩を七日間童尿に浸して皮を去り、鹽と共に炒つて末にし、酒糊で綠豆大の丸にし、二十丸づつを鹽湯で服す。（普濟）【內痔の出ぬもの】草烏を末にし、津液で調へて肛門內痔に點ければ反つて出る。そこで枯痔藥を點ける。（外科集驗方）【疔毒の初期】草烏頭七箇、川烏頭三箇、杏仁九箇、飛羅麪一兩を末にして無根水で調へ、口だけを殘して搽り、紙で蓋ふ。乾けば水で潤ほす。（唐瑤經驗方）【疔毒惡腫】生烏頭を切片して醋で熬り、膏にして攤して貼る。翌日根が出る、〇又、ある方では、兩頭尖一兩、巴豆四箇を搗いて貼る。疔は自から拔出する。（普濟方）【疔瘡發背】草烏頭を皮を去つて末にし、鬚のままの葱白と搗き和し、豌豆大の丸にして雄黃を衣にかけ、一丸づつを、先づ葱一本を細かに嚼んで熱酒で送下する。或は惡心して三四口嘔するときは、冷水を一口飲めば止む。かくて汗の出る程度に寢具を厚く被る。また頭風をも治す。（乾坤祕韞）【惡毒諸瘡】及び發背、疔瘡、便毒等の證には、二烏膏——草烏頭、川烏頭を瓦で井華水に磨り落し、その汁を塗る。瘡に口あるには四邊に塗り、乾けば再び塗る。また單に草烏のみを醋で磨つて塗るもよし。（永類方）【大風癬瘡】全身黑色となり、肌體が不定時に麻木

し、痺痛するには、草烏頭一斤を刮り洗つて皮を去り、極めて清淨にして攤して乾し、清油四兩、鹽四兩と共に銚に入れて深黄色に炒り、鹽と藥だけを銚內に留めて餘分の油を傾け出し、再び黑色になつて烟の出るまで炒り、その一箇を裂いて見て心の內部が米粒一點ほど白色が殘るだけを適當とし、白い部分が多いときは再び炒り、熱に乘じて杵き篩つて末にし、醋麪糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に溫酒で服す。草烏の毒性は制し難いものだから、五七日間は黑豆で煮た粥を食つてその毒を解す。(繼洪澹寮方)【全身の瘡】陰囊、兩脚が就中甚しきには、草烏一兩を鹽一兩を溶かした水に一夜浸し、赤く炒つて末にし、猪腰子一頭分を膜を去つて煨熟し、竹刀で切つて搗き、醋糊で綠豆大の丸にし、三十丸づつを空心に鹽湯で服す。(澹寮方)【一切の諸瘡】未だ破れぬものには、草烏頭を末にし、輕粉少量を入れて臘猪油で和して搽る。(普濟方)【瘰癧の初期】未だ破れずして寒熱を作すには、草烏頭半兩、木鼈子二箇を米醋で細かに磨り、搗爛した葱頭、蚯蚓糞少量を入れ、調勻して上に傅け、紙條を貼つて氣孔を通じて置くが妙である。(醫林正宗)【馬汗の瘡に入つたもの】腫痛するは急に治療を要する。遲れるほど毒が深くなるものだ。生烏頭

末を瘡口に傅ける。良久して黄水が出て癒える。(靈苑方)【蛇、蠍の螫傷】射罔を傅けて頻りに易へれば血が出て癒える。(梅師方)【沙虱の中毒】射罔を傅けるが佳し。(千金)

(一)白附子(別錄下品)

和名　はくぶし
學名　*Aconitum koreanum*, R. Raym.?
科名　うまのあしがた科(毛茛科)

釋名　後の發明の項を見よ。

集解　別錄に曰く、白附子は蜀郡に生ずる。三月に採收する。弘景曰く、この物は久しく絶えた。一向に眞物はない。

恭曰く、もとは(二)高麗に產したが、今は(三)涼州以西に產する。蜀郡には一向にない。砂磧、下濕地に生え、獨莖で鼠尾草に似て、細葉が周匝して穗の間に生える。根は形が天雄に似たものだ。

珣曰く、徐表の南州異物志に『(四)東海、新羅國、



〔白附子〕

(一)牧野云フ、白附子ハ享保年間ニ肥前ノ長崎ヘ一度其名デ其生苗ガ渡ッタ事ガアッテ、其時ノ苗ノ寫生圖ガ今、矢野宗幹理學士ノ手許ニアル。白井博士ノ考說デハ、是レ或ハA. Napellus, L. デハナカラウカトノ事デアルガ或ハA. Anthora, L. カモ知レヌ。又人ニヨッテハ之レヲA. koreanum, R. Raym.デアルトスルモノモアル。「集解」ニ本ハ高麗ニ產シタトモアルカラ此品ヲ充テルガ正當トモ思

及び遼東に生ずる。苗は附子(ぶし)とよく似たものだ』とある。時珍曰く、根は草烏頭の小さいものにそのままで、長さ一寸ばかり、乾いたものは皺文(すうもん)があり、筋がある。

(三)【氣味】【辛く甘し、大温にして小毒あり】保昇曰く、甘く辛し、温なり。大明曰く、毒なし。珣曰く、小毒あり。藥に入れるには炮いて用ゐる。杲曰く、純陽であつて、藥勢を導いて上行する。【主治】【心痛、血痺、顔面のあらゆる病。藥勢を行らす】(別錄)【中風の失音、一切の冷風氣、面皯(めんかん)、瘢疵(はんし)】(大明)【諸風冷氣で足弱く、力無きもの。疥癬、風瘡、陰下の濕癢。頭部、面部の痕には、面脂に入れて用ゐる】(李珣)【肝の風虚を補す】(好古)【風痰】(震亨)

【發明】時珍曰く、白附子は陽明の經の藥であつて、附子と相似てゐるところからこの名稱を得たのであるが、附子の類ではない。按ずるに、楚國先賢傳に『孔休は頬に負傷して瘢があつたので、王莽(わうまう)が、玉屑(ぎよくせつ)、白附子香を賜はつて瘢を消させた』とある。

【附方】新十二。【中風の口喎】半身不遂なるには、牽正散――白附子、白殭蠶(はくきやうさん)

フ。葉ハ北裂片ガ狭長ナモノデアル。

(二)高麗ハ土部纂、金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)涼州ハ石部雄黄ノ註ヲ見ヨ。

(四)東海トハ今ノ山東省ノ濱海地方ヲ指ス。新羅國ハ山草類人參ノ註、遼東ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(五)木村(康)曰ク、滿洲及朝鮮市場ノ白附子ハきばなのとりかぶとヲ用ヰ居ル事ヲ知レリ。きばなのとりかぶとハ Aconitum Koreanum R. Raym. ナリ。文獻—南滿洲衛生研究所報告、昭、四。

(六) 暑風暑毒トハ傷暑チ云フナラン。暑ニ中リ發熱煩悶スル病。
(七) 生料トハ生鮮ナル藥材ノ意。

蠶、全蠍、いづれも等分を生で研つて末にし、二錢づつを熱酒で調へて服す。（楊氏家藏方）【小兒の(六)暑風】暑毒が心に入つて痰が正孔に塞がり、昏迷し、搐搦するは危急の證である。(七)生料にして瞑眩する劑たるこの丸以外では、その病を伐ち退けることが不可能だ。三生丸——白附子、天南星、半夏を、いづれも皮を去つて等分を生で研り、猪膽汁で和して黍米大の丸にし、病兒の大、小を量つて薄荷湯で服し、その兒を側臥させて痰水を嘔き出さすれば甦る。（全幼心鑑）【風痰の眩運】頭痛し、氣鬱し、胸膈の利せぬには、白附子を炮いて皮、臍を去つて半斤、石膏を紅く煆いて半斤、硃砂二兩二錢半、龍腦一錢を末にし、粟米飯で小豆大の丸にし、三十丸づつを食後に茶、酒の任意のもので服す。（御藥院方）【偏、正頭風】白附子、白芷、猪牙皂角を皮を去り、各等分を末にして食後に茶清で服し、少頃の間仰臥する。（普濟本事方）【痰厥の頭痛】白附子、天南星、半夏等分を生で研つて末にし、生薑の自然汁に浸した蒸餅で綠豆大の丸にし、食後に四十丸づつを薑湯で服す。（濟生方）【赤、白汗斑】白附子、硫黃等分を末にし、薑汁で薄く調へ、茄蔕に蘸けて一日に數回擦り込む。（簡便方）【顏面の皯䵳】白附子を末にし、就寢時に漿水で顏を洗つてから、そ

の末を白蜜で和し、紙に塗つて貼る。久くして自から落ちる。(衛生易簡方)【耳から膿水の出るもの】白附子を炮き、羌活一兩と末にし、猪と羊の腎各一箇にそれぞれ末半錢を入れ、濕紙で包んで煨熟し、五更に食つて溫酒で飮下す。(聖濟錄)【喉痺腫痛】白附子末、枯礬等分を研末して舌上に塗り、涎を吐出する。(聖惠方)【偏墜疝氣】白附子一箇を末にして唾液で調へて臍を塡め、その上に灸を三壯、又は五壯すれば治す。(楊起簡便方)【小兒の吐逆】定まらず、癎風で喘息するには、白附子、藿香等分を末にし、半錢づつを米飮で服するが良し。(保幼大全方)【慢痺驚風】白附子半兩、天南星半兩、黑附子一錢を、いづれも炮いて皮を去つて末にし、二錢づつを生薑五片を水で煎じた湯で服す。また大人の風虛を治し、吐を止め、痰を化す。宣和年間、眞州の李博士が、これで吳內翰の女孫の病を治療して甚だ效があつた。康州の陳侍郎が風虛を病んで極端な精神昏逆に陷つたときも、吳內翰がこの藥を三四服與へて直ちに癒えた。(楊氏家藏方)

(一)虎掌（本經下品）天南星（宋開寶）

和名　まひづるんなてんしやう
學名　Arisaema heterophyllum, Bl.
科名　てんなんしやう科（天南星科）

【釋名】　虎膏（綱目）　鬼蒟蒻（日華）　恭曰く、根の四畔に圓牙があつて、一見虎の掌のやうなところからこの名稱がある。

頌曰く、天南星、即ち本經にいふ虎掌であつて、小なるものを由跋と名ける。古方には、多く虎掌を用うとあつて、天南星と言つてない。南星なる名稱は近代に起つたもので、唐時代の、中風、痰毒の方の中にこれを用ゐて以來、別にこの名稱を採用したのだ。

時珍曰く、虎掌とは、葉の形が似てゐるからの名稱で、根が似てゐるのではない。南星とは、根が圓く白く、形が老人星のやうな形狀だから南星と名けたものだ。即ち虎掌であつて、蘇頌の說に甚だ明白である。宋の開寶に、南星の條を重出したのは當を得ない。本書にはこの條中に併入した。

【集解】　別錄に曰く、虎掌は(二)漢中の山谷、及び寃句に生ずる。二月、八月に

(一)牧野云フ、虎掌ハ即チ天南星デアル此天南星ハまひづるてんなんしやうヲ指シタモノデアル。小野蘭山ハ虎掌ト天南星トヲ別トスル蘇頌ノ說ニ從ヒ、虎掌ヲうらしまさう(A. Thunbergii, Bl.)トスレドモコレハうらしまさうデハ決シテナイ。若シ此蘇頌ノ曰フ如クスレバ天南星ハ我がやまこんにやく(Amorphophallus Kiusianus, Makino.)ニ類シタこんにやく屬ノ一種ノ樣ニ見エル。植物名實圖考ノ天南星ノ條下ニモ此屬ノ一種ガ Arisaema 屬ノ中ニ畫イテアル。然シ今私ハ此ニハ此本草綱目ノ著者時珍ニ從ヒ虎掌ト

天南星トヲ一トスルソシテ前記ノ通リ之レヲまひづるてんなんしやうニ充ツル事ヲ敢テスル。從來我邦ノ本草家天南星ヲ謂ユル和名ノてんなんしやう（A. Japonicum, Bl.）トスレドモ中ツテ居ナイ事ヲ斷言スルガ、然シ支那ハ土地ガ廣イカラ倘他ノ同屬ノ品種ヲ矢張天南星ト呼ンデ居ル事ガアルト想像スル事ガ出來ル。即チA. Tatarinowii, Schott. ノ如キ是レデアル。

（二）漢中ハ石部特生礜石ノ梁州ノ註參照。宛句ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。

（三）大觀ニ胦ニ作ル。

（四）安東ハ山草類延胡索ノ註ヲ見ヨ。

採つて陰乾する。弘景曰く、近道にもある。形は半夏に似てゐるが大きいだけで、四邊に子があつて虎の掌のやうなものだ。今では多くは三四片に破つたものを用ゐる。方藥には甚だ用ゐない。

恭曰く、これは由跋の宿根のことだ。その苗は、莖が一本で莖の端に一枚の葉が生え、枝丫（しあ）が莖を（三）挾けてゐる。根は、大なるものは拳ほど、小なるものは雞卵ほどで、すべて扁柿に似て四畔に圓牙があり、一見虎の掌のやうだ。由跋といふはこの物の新根で、大いさは半夏の二三倍ほどあり、四畔に子牙がない。陶氏の說の、半夏に似たといふは由跋のことだ。



〔虎掌・天南星〕

保昇曰く、莖の端に八九枚の葉があり、花は莖の間から出る。

藏器曰く、天南星は（四）安東（あんとう）の山谷に生ずる。葉は荷のやうで獨莖だ。根を用ゐる。

○頌曰く、虎掌は、今は(五)河北の州郡にある。初生の根は豆ほどだが漸次に長大し、半夏に似て扁たく、年久しきものは根が圓く、一寸ほどにもなり、大なるものは雞卵ほどあつて、周圍に三四箇、或は五六箇の圓牙を生ずるものだ。三、四月苗が生え、高さ一尺餘の獨莖で、上に爪のやうな尖つて圓い五六出の葉があつて散り擴がり、一窠に七八本の莖が生え、時に一莖を出して穗になり、鼠尾のやうで直上に伸び、中から匙のやうな一枚の葉が生えて、莖を包んで房になり、旁に一口を開き、上下が尖つてゐて、中に微青褐色の花があり、麻子大ほどの實を結ぶ。實は熟すれば白色になり、自から落ちて地上に散布し、その子一粒から一窠を生ずる。九月苗が殘びてから根を採取するものだ。現に(六)冀州地方では菜畑の中にこれを種ゑ、天南星と呼んでゐる。

○又曰く、天南星は處處の平澤にある。三月苗が生え、荷梗に似たもので、莖は高さ一尺ほど、葉は蒟蒻のやうで兩枝相抱く。五月蛇頭に似た花を開き、七月穗になつて石榴子に似た紅色の子を結ぶ。二月、八月根を採る。その根は芋に似て圓く扁たく、蒟蒻とよく似たものだ。世人は多く誤り採つて、一向にその異同を知らずに

(五)河北ハ黄河以北今ノ河北省ノ地ヲ指ス。

(六)冀州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(七)江州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。
(八)彙言ハ草下ニ南星ノ二字アリ。
(九)大觀ニ芽ニ作ル。

ゐるが、蒟蒻は、莖に斑があつて花が紫だ。南星は、根が小さく柔かで、膩があつて肌が細かく、炮けば裂け易い。その點で辨別し得る。南星、即ち本經の虎掌であつて、大なるものは四邊一面に牙子があるが、採收の際に削り去る。(七)江州に産する一種の(八)草は、葉は大いさ掌ほどあつて、表面が青、背が紫で、四畔に(九)牙があつて虎掌のやうだ。三四葉が一本に生える。冬も青く、花、實は結ばない。心疼、寒熱積氣を治す。やはり虎掌と同名のものだから此に附記する。

時珍曰く、大なるものを虎掌、南星といひ、小なるものを由跋といふ。一種類のものだ。今はまた俗に、大なるものが鬼臼、小なるものが南星だといつてゐるが、甚しい誤だ。

修治 頌曰く、九月に虎掌の根を採り、皮、臍を去つて器中に入れ、五七日間湯に浸して一日三四回湯を換へ、涎を洗ひ去つて暴乾して用ゐる。或は、再び火で炮いて裂いて用ゐる。

時珍曰く、凡そ天南星を用ゐるには、一兩以上のものに限るがよし。風痰を治するに生のものを用ゐることがある。その場合には、溫湯で洗淨してから白礬湯、或

は皂角汁に三晝夜浸し、日毎に水を換へ、暴乾して用ゐる。熟のものを用ゐる場合には、必ず黄土地に深さ五六寸の小坑を掘り、炭火で赤く燒いて好き酒を沃ぎ、その中へ南星を入れ、瓦盆で覆ふて灰泥で固濟し、一夜置いて取り出して用うべきものである。急の場合に用ゐるには、濕紙で包んで煻火の中で炮いて裂く。又、風熱痰を治する一方法は、酒に一夜浸して桑柴火で蒸し、その甑中に絶えず酒を洒いで蒸氣を猛烈ならしめ、一伏時して取出して竹刀で切り開く。味が舌を痲せぬやうになれば熟したのである。まだ熟せぬときは再び蒸し、痲せぬやうになつて止める。脾虛で痰多きものの場合は、生薑の渣と黄泥とで南星を包んで煨熟し、泥を去つて焙じて用ゐる。南星麴を造る法は、薑汁と礬湯で南星末を和して小さい餅にし、籃内に入れて楮葉で包み蓋ひ、表面に黄色の衣がつくを待ち、取り出して晒して貯へる。膽星を造る法は、南星を生で硏末し、臘月に取つた黄牯牛の膽汁で和劑して膽の中に入れ、風の吹く場所に懸けて乾かす。年久しく經たものほど佳し。

（一〇）**氣味**　【苦し、溫にして大毒あり】別錄に曰く、微寒なり。普曰く、虎掌は、神農、雷公は苦し、毒ありといひ、岐伯、桐君は辛し、毒ありといふ。大明曰

（一〇）木村（康）曰ク、天南星ノ市場品ハ和産ノ天南星ノミニ限ラズ、倘未ダ明ニ原

く、辛烈にして平なり。杲曰く、苦く辛し、毒あり。陰中の陽であつて、升す可く、降すべく、乃ち肺經の本藥である。震亨曰く、この藥の力を下行せしめんとするには、黄蘗で導く。之才曰く、蜀漆が使となる。莽草を惡む。大明曰く、附子、乾薑、生薑を畏る。時珍曰く、防風と配合すれば麻せぬ。牛膽と配合すれば燥せぬ。火力を加へて炮けば毒とならぬ。生は能く雄黄、丹砂、焰硝を伏す。

【主治】 【心痛寒熱、結氣積聚、伏梁、傷筋痿、拘緩。水道を利す】(本經) 【陰下の濕、風眩を除く】(別錄) 【疝瘕腸痛、傷寒時疾に主效があり、陰を强くする】(甄權) 【天南星は、中風麻痺に主效があり、痰を除き、氣を下し、胸膈を利し、堅積を(一一)攻め、癰腫を消し、血を散じ、胎を墮す】(開寶) 【金瘡、折傷の瘀血には、擣いて傅ける】(藏器) 【蛇蟲の咬傷、疥癬、惡瘡】(大明) 【上焦の痰、及び眩運を去る】(元素) 【破傷風で、口噤し、身强するに主效がある】(李杲) 【肝風虛を補し、痰を治する功力は半夏に同じ】(好古) 【驚癇、口眼喎斜、喉痺、口舌の瘡糜、結核、(一二)解顱を治す】(時珍)

【發明】 時珍曰く、虎掌、天南星は、手、足の太陰、脾、肺の藥である。味は

植物ヲ決定スルニ至ラズ。てんなんしやうノ根莖ハ一種ノザポニンヲ含有スルモ未ダ精査ヲ經ズ。味辛烈ニシテ食スレバ咽喉及消化器ニ炎症ヲ起ス。又子實ニモ毒アリト云ヒテ有毒植物タリ。然レドモ多量ノ澱粉ヲ含有スルガ故ニ、其製造原料トスルヲ得ルノミナラズ之ヲ煮レバ食ス可シト云フ。

(一一)火觀ニ破ニ作ル

(一二)解顱ハ腦水腫。

辛くして麻す。故に能く風を治し、血を散ずる。氣は溫にして燥である。故に能く濕に勝ち、涎を除く。性は緊にして毒である、故に能く積を攻め、腫を拔き、口喎舌糜を治す。楊士瀛の直指方に『諸風の口噤には南星を用ゐ、更に人參、石菖蒲を佐とするがよし』とある。

附方　舊十、新二十九。【中風、口噤】目を閉ぢ、口を塞ぎ、藥を下す門なきには、開關散——天南星を末にし、白龍腦と等分を五月五日の正午に合はせ、中指に末を點けて齒に揩り、二三十回大牙の左右に揩る。自ら口が開くものだ。また破棺散と名ける。(經驗方)【諸風の口噤】天南星を炮いて剉み、大人は三錢、小兒は三字を、生薑五片、蘇葉一錢を水で半減に煎じ、雄猪膽汁少量を入れたもので溫服する。(仁齋直指方)【小兒の口噤】牙關の開かぬには、天南星一箇を煨熟して紙に裹み、庖丁で斜めに剪つて一小孔をあけ、その氣を口中に透らす。牙關が自から(一三)開くものだ。ある方では、生南星を薑汁と共に擦れば自から開く。【小兒の驚風】墜涎散——一兩重さの天南星一箇を、酒を換へて七伏時浸して取出し、新しい瓦に載せて週廻から炭火で炙いて裂き、濕地に合せて火毒を出して末にし、硃砂一分を入れ、

(一三)大觀ニ譚子方ヲ擧グ。

(一四)兩眉ノ中間ヲ云フ。

毎日正午に一服、半錢づつを荊芥湯で調へて空心に服す。(經驗方)【吐瀉慢驚】天王散――小兒の吐瀉、或は、冷藥の誤服から脾虛して發した風痰慢驚を治す。重さ八九錢の臍を去つた天南星一箇を、黃土に掘つた深さ三寸の坑を炭火五斤で赤く煆いて好酒半盞を沃いだ中に入れ、その上に炭を二條に架け渡し、發裂するを候つて取り出して剉み、再び炒熟して末にし、その末五錢、煨熟した天麻の研末一錢、麝香一字を和勻し、三歲の小兒は半錢を生薑、防風の煎湯で調へて服す。また久嗽、惡心をも治す。(錢乙小兒方)【風癇の痰迷】墜痰丸――天南星を九蒸九晒して末にし、薑汁麪糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを人參湯で服す。石菖蒲、麥門冬の湯もよし。(衛生寶鑑)【小兒の癇瘖】癇後に瘖して言語不能なるには、天南星を濕紙に包んで煨き、末にして二字を雄猪膽汁で調へて服す。(全幼心鑑)【治癇、利痰】天南星を香しく煨いて一兩、硃砂一錢を末にし、猪心血で梧子大の丸にし、一丸づつを防風湯に溶かして服す。(普濟方)【口眼喎斜】天南星を生で研末して薑の自然汁で調へ、左の喎斜には右に貼り、右の喎斜には左に貼る。(仁存方)【角弓の如く反張するもの】南星、半夏等分を末にし、薑汁、竹瀝で一錢を灌ぎ下し、そこで(一四)印堂に灸する。(摘玄方)

【破傷中風】胡氏の奪命散——又、玉眞散と名ける。打撲、金刃傷、及び破傷風、濕に傷んで發病し、强直して癎の如きものを治す。天南星、防風等分を末にし、水で調へて瘡に敷く。水を出すこと妙である。そこで一錢を溫酒で調へて服す。已に死んだものも心さへなほ溫ならば、熱した童尿で二錢を調へて灌ぐ。爭闘、毆打の內傷、墜落、壓傷等には、酒と童尿とで續けざまに三服灌げば甦る。また煎じて服するもよし。(三因方)【破傷風瘡】生南星末を水で調へて瘡の四圍に塗る。水が出て奏效する。(普濟方)【婦人の頭風】目を攻めて痛むには、天南星一箇を用ゐ、地に坑を掘つて赤く燒いた中に入れ、醋一盞を沃ぎ、氣の透らぬやうに隙なく蓋ひ、冷えるを待つて研末し、一字づつを酒で調へて服す。重體のものは半錢を服す。(千金方)【風痰頭痛】忍び難きには、天南星一兩、荊芥葉一兩を末にし、薑汁糊で梧子大の丸にし、食後に薑湯で二十丸づつを服す。○又、上淸丸——天南星、茴香等分を生で研末し、鹽醋で煮た麪糊で前記の法の如く丸にして服す。(いづれも經效濟世方に記載がある)【風痰頭運】目眩し、吐逆し、煩懣し、飮食の落ち付かぬには、玉壺丸——生南星、生半夏各一兩、天麻半兩、白麪三兩を末にし、水で梧子大の丸にし、三十丸づつを、先

づ水を煎沸した中に入れて煮て五七沸し、漉出して放置し、溫なるうちに薑湯で呑む。（惠民和劑局方）【涕を流す腦風】邪風が腦に入つて鼻中が硬結し、遂に髓涕を流すには、大きく白い南星を切片し、沸湯に二回泡けて焙じ乾し、二錢づつを、棗七箇、甘草五分と共に煎じた湯で服す。三四服すれば、硬物が自から出て腦氣が流轉し、髓涕は自から收まる。また大蒜、華茇末で餅にし、紗を隔てて顖前に貼り、その上から熨斗で熨す。或は香附、華茇末を頻りに鼻中に吹く。（直指方）【小兒の風痰】熱毒の壅滯に心を涼し驚を壓する。抱龍丸――牛膽、南星一兩に金錢薄荷十片、丹砂一錢半、龍腦、麝香各一字を入れて研末し、煉蜜で芡子大の丸にし、一丸づつを竹葉湯に溶かして服す。（全幼心鑑）【壯年男子の風痰】及び中風、中氣の初起には、星香飮――南星四錢、木香一錢、水二盞、生薑十四片を六分に煎じて溫服する。（王碩易簡方）【心竅の痰迷】壽星丸――心膽が驚に襲はれたために精神がその舍るところを失ひ、或は痰が心竅に迷つたために恍惚として健忘となり、妄言し、怪しきものを見るを治す。天南星一斤を、先づ一尺の土坑を掘つて炭火三十斤で赤く燒き、酒五升を入れて滲み乾かした中に入れ、盆で隙なく覆ふて灰で氣の走らぬやうに塞

(一五)大觀ニ濟下ニ方字アリ。

ぎ、翌日取出して末にし、琥珀一兩、硃砂二兩を末にして共に生薑汁で打つた麪糊で梧子大の丸にし、一日三回、三十丸乃至五十丸づつを人參、石菖蒲の煎湯で服す。(和劑局方)【風痰の注痛】方は羊躑躅の條にある。【痰濕の臂痛】右邊の痛むには、南星、制した蒼朮等分、生薑三片を水で煎じて服す。(摘玄方)【風痰欬嗽】大天南星一箇を炮き裂いて研末し、一錢づつを水一盞、薑三片を五分に煎じた湯で溫服する。毎日朝、晝、晩に各一服する。(千金博(一五)濟)【氣痰欬嗽】玉粉丸——南星麴、半夏麴、陳橘皮各一兩を末にし、薑の自然汁で打つた糊で梧子大ほどの丸にし、四十丸づつを薑湯で服す。寒痰には、橘皮を去つて官桂を加へる。(東垣蘭室祕藏)【氣を淸し、痰を化す】三仙丸——中脘の氣滯、痰涎煩悶、頭、目の淸快ならぬを治す。生南星を皮を去り、半夏と各五兩を、いづれも湯に七回泡けて末にし、自然薑汁で和して餅にし、竹篩の中に鋪いて楮葉で包み覆ひ、黄を生じて麴となるを待つて晒し乾し、二兩づつに香附末一兩を入れて糊で梧子大の丸にし、四十丸づつを食後に薑湯で服す。(王璆百一選方)【中を溫め、滯を散ず】飲食を消化し導く。天南星を炮き、高良薑を炮いて各一兩、砂仁二錢半を末にし、薑汁糊で梧子大の丸にし、五十丸づつ

を薑湯で服す。（和劑方）【酒積、酒毒】左の方を服すれば解す。天南星丸――形の正しい天南星一斤を、土坑を赤く燒いて酒一斗を沃いだ中に入れ、盃で覆ひ泥で固濟して一夜置き、取り出して酒を和した水で洗淨し、切片して焙じ乾し、末にして硃砂末一兩を入れ、薑汁麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。蔡丞相、呂丞相が嘗て用ゐて效驗があつた。（楊氏家藏丸）【吐、泄の止まらぬもの】四肢が厥逆し、虛風で人事不省なるは、これを服すれば陽を回復する。これを回陽散と名ける。天南星を末にし、毎服三錢を、京棗三箇、水二鍾を八分に煎じた湯で溫服する。なほ不省なるときは再服する。〇又、ある方では、醋で南星末を調へて足の心に貼る。（普濟方）【腸風瀉血】諸藥の效なきには、天南星、石灰を黃色に炒り焦して末にし、酒糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを酒で服す。（普濟方）【吐血の止まぬもの】天南星一兩を豆ほどの大いさに剉み、爐灰汁に一夜浸して洗淨して末にし、一錢づつを自然銅を磨りおろした酒で調へて服す。（勝金方）【初生兒の顖に貼る】頭熱で鼻の塞るものには、天南星を炮いて末にし、水で調へて顖上に貼り、手を炙つてそれを熨す。（危氏得效方）【小兒の解顱】顖が開いて合はず、鼻が塞つて通ぜぬには、天南星を

炮いて皮を去り、末にして淡醋で調へ、緋の帛に塗つて顖門に貼り、手を炙つて頻りにそれを熨す。立ろに效がある。（錢乙小兒直訣）【解顱脫臼】上に收まらぬには、天南星末を薑汁で調へて兩頰に塗る。一夜にして收まる。（醫說）【小兒の口瘡】鵞口のやうに白屑あるは、服藥を要せぬ。生天南星を皮、臍を去り、研末して醋で調へ、男は左、女は右の足の心に塗る。（閻孝忠集效方）【（一六）走馬疳蝕】骨に透り、腮を穿つには、生南星一箇を心の部分を剜り、中に雄黄一塊を入れて麪で裹み、燒いて雄黃が汁となつたとき盞子で隙なく合はせ、火毒を出し麪を去つて末にし、麝香少量を入れて數日その瘡を拂ふ。甚だ效がある。（經驗方）【風、蟲の牙痛】南星末で孔を塞ぎ（一七）霜梅で（一八）龠住して涎を去る。（摘玄方）【（一九）喉風、喉痺】天南星一箇を心を剜り、白殭蠶七箇を入れて紙で包んで煨熟し、研末して一錢を薑汁で調へて服す。病甚しきには灌ぐ。涎を吐いて癒える。これを如聖散と名ける。（博濟方）【痰瘤結核】南星膏——皮肌、頭部、面部に生じた瘤、及び結核で、大なるは拳ほど、小なるは栗ほどになり、或は軟く、或は硬く、疼まず、癢からぬを治するには、この藥を用ゐるがよし。輕輕に早速針、灸を用ゐてはならぬ。天南星の大なるもの一箇を研り

（一六）頰部ノ寒壞疽ヲ云フ。俗ニハクサ。
（一七）霜梅ハウメボシ。
（一八）龠ハ罨ノ古字、龠住ハ罨包ノ意。
（一九）喉風、咽喉粘膜加多兒喉。痺ハ扁桃腺炎。

爛らし、好き醋五七點を滴らし、もし生の南星のないときは乾いたものを末にして醋で調へ、先づ針で刺して氣を透してから貼る。癢く感ずるときは頻りに貼つて效を取る。（嚴子禮濟生方）【身體、面部の疣子】醋で南星末を調へて塗る。（簡易方）

由跋（別錄下品）

前條虎掌（まひづるてんなんしやう）ノ嫩球莖デアル。

釋名

集解　恭曰く、由跋といふは虎掌の新根のことだ。半夏よりも一二倍大きく、四畔にまだ子牙の生ぜぬものである。その宿根が卽ち虎掌だ。



〔由　跋〕

藏器曰く、由跋は林下に生ずる。苗は高さ二尺ほどで蒟蒻に似てゐる。根は雞卵ほどのものだ。

保昇曰く、春季に一本の莖が抽き出で、莖の端に八九枚の葉がある。根は圓く扁くして肉が白い。

時珍曰く、これは天南星の小なるものだ。その氣がまだ十分でないから服食には堪へない。故に醫方には用ゐることが稀なのだ。しかし、重さ八九錢乃至一兩あるものならば氣が十分だから用ゐて佳し。あたかも附子に附いて生ずる側子は附子に及ばないやうなものである。

【正誤】弘景曰く、由跋はもと、(一)始興に產したが、今ではやはり一般に栽培する。形狀は(二)烏翣のやうで地に布き、花は紫色だ。根は附子に似てゐる。苦酒に磨つて腫物に塗ればやはり效がある。

恭曰く、陶氏のいふものは(三)鳶尾根、卽ち鳶頭のことだ。又、虎掌は半夏に似てゐるといふ。それがために鳶尾を由跋といひ、由跋をば半夏といふわけになつたのだが、これは半夏に對する正確な智識を缺くのみならず、鳶尾と由跋とにも正確な智識を缺いてゐる。現に南方では由跋をやはり半夏といつてゐる。

時珍曰く、陳延之の小品方にも、やはり東海鳶尾を由跋としてあるのだから、その訛誤は餘程古いものだ。

【氣味】【辛く苦し、溫にして毒あり】【主治】【毒腫、結熱】(本經)

(一)始興ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。
(二)烏翣ハ射干ノ一名ヒアフギ。
(三)鳶尾ハイチハツ。

(一)牧野云フ、我邦ニハこんにやくノ野生ナク、往時ヨリ普通ニ作リアルモノハ皆原ト支那カラ渡シタモノデアル。球莖中ニまんなんガアツテ謂ユル菎蒻ガ造ラレル。九州南部ニ野生セル同屬品やまこんにやく(同名ガアル)卽チ A. kiusianum, Makino. ニハまんなんヲ含マズ、タダ澱粉ノミアツテ菎蒻ガ出來ヌ。

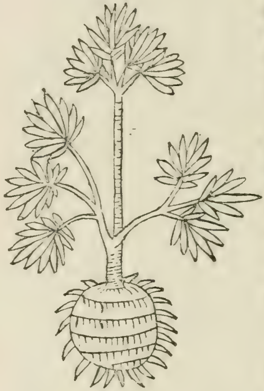
(二)吳中ハ山草類前胡ノ註ヲ見ヨ。

(一)蒟蒻(宋開寶)

和名 こんにやく
學名 Amorphophallus Konjac, K. Koch.
科名 てんなんしやう科(天南星科)

釋名 蒻頭(開寶) 鬼芋(圖經) 鬼頭

集解 ○志曰く、蒻頭(しやくとう)は吳、蜀に產する。葉は由跋、半夏に似て、根は大いさ碗ほどある。陰地に生ずるもので、雨が葉の下へ滴つて子が生える。又、斑杖といふがある。苗はこれとよく似たもので、秋になつて眞直に出た花が咲いて赤色の子がなり、根は蒻頭のやうだ。毒の猛烈なもので、食ふわけに行かない。虎杖にも斑杖なる名稱はあるが、これと同一物ではない。



〔蒟蒻〕
―蒻頭―

○頌曰く、江南、(二)吳中に白蒟蒻(はくくしやく)なるものを產し、やはり鬼芋といふ。平澤に極めて多く生ずるもので、地方人はこれを採つて天南星だといひ、如何にも辨別が付か

ぬ。商人の所持するものは往往にしてこの物だ。但し南星は肌が細膩なもので、蒟蒻は莖に斑があり、花が紫だが、南星は莖に斑がなく、花が黄色だからその點が異ふ。

時珍曰く、蒟蒻は蜀中に產し、(三)施州にもあつて、やはり鬼頭と呼んでゐる。(四)閩中でもこれを栽培する。栽培には樹陰の下が適するもので、坑を掘つて糞肥を積み、春季に生えた苗を五月になつてそれに移植すると、長さ一二尺になる。南星の苗とよく似てゐるがただ斑點が多いものだ。舊根からもやはり苗が自生する。滴露から子を生ずるといふが、蓋しさうではない。二年を經た根は碗や親芋ほどになり、外理は白く、味はやはり人を痲す。秋後に根を採り、外皮をよく淨擦して、或は搗き、或は片に切り、釅灰汁で煮て十餘沸し、幾回か水を換へて淘り洗ひ、更に五六回煮ると凝り固つたものとなる。それを切片して苦酒、五味に淹けると食用になる。灰汁を用ゐなければ固まらないものだ。その固つたものを細い絲に切り、沸湯でゆがいて五味で調理して食ふと、さながら水母絲のやうである。馬志が『その苗は半夏に似てゐる』といひ、楊愼が丹鉛錄に『蒟醬、卽ちこのものだ』といつたのはいづ

(三)施州ハ山草類都管草ノ註ヲ見ヨ。
(四)閩中ハ山草類黄連ノ註ヲ見ヨ。

れも誤だ。王禎の農書には『饑饉救濟の材料として、山に生ずるものに(五)枌、葛、蒟蒻、橡、栗などの利用すべきものがある。この物もやはり人民の食物として有益なものだ』とある。斑杖といふその物は、天南星の類にして斑のあるものだ。

根 (六)【氣味】【辛し、寒にして毒あり】李廷飛曰く、性は冷である。甚だ人體に益せぬ。冷氣の人は少し食ふがよし。生では喉を刺戟して血を出す。

【主治】【癰腫、風毒には腫上に摩し傅ける。搗き砕いて灰汁で煮て餅にし、五味で調理して食へば消渇に主效がある】(開寶)

【發明】機曰く、按ずるに、三元延壽書に『ある(七)瘵病患者が、あらゆるものを忌まずに食ひ、ある時隣家で蒟蒻を作るを見てそれを貰つて食つた。美味だつたので遂に多量に食つたところ、瘵病はそれで愈えた。又、數人の(八)腮癰患者もこれを多く食つて皆癒えた』とある。

【附錄】(九)菩薩草(宋圖經) 頌曰く、江浙の州郡に生ずる。冬を淩いで凋まず、秋、冬に花があり、蒻頭のやうな赤色の子が直ほく出る。冬季に根を採つて用ゐる。味は苦し、毒なし。諸種の中毒に主效がある。毒を食つたときは酒に研つて服

(五) 枌葛ハ二物デ、枌ハ楡ノ皮、葛ハ葛根ノ澱粉ヲ指ス。

(六) 木村(康)曰ク、根莖ハ約五〇%ノ蒟蒻マンナンヲ含有ス。葉ハコニインニ類スルアルカロイドヲ含有スルト云フ。根莖ヨリ蒟蒻粉ヲ製シ、食用ノ蒟蒻ノ原料トシ、又布帛用ノ糊料トス。

辻暢太郎: Bull. Coll. Agr. Imp Univ. Tokyo, 1894(2)115, Chauliguet, Hebert et Heim: Compt. rend. 1897 (124) 1368.

前田炭—東醫、大、六(三一)三九九。大槻虎雄—化誌、昭、三(四九)二九八。

(七) 瘵病ハ肺結核。

(八) 腮ノ癰ナラン。

(九)牧野云フ、菩薩草ハ能ク列ラヌ一草デアル。

(一)牧野云フ、半夏ハ一ニ Pinellia tuberifera, Ten. ノ學名ヲ有スルガ、原ト之レノ名ハ Arum ternatum, Thunb. デアツタユエ、其原種名ヲ採ツタ下ノ學名ヲ用ウレバヨイト思フ。
(二)會意ハ義理ヲ考ヘテ附ケタ名デアルトノコト。
(三)槐里ハ今ノ陝西省興平縣ノ東南ニ故城アリ。
(四)扶風ハ山草類赤箭天麻ノ註ヲ見ヨ。
(五)青州ハ石部雲母ノ註、吳中ハ山草類前胡ノ註ヲ見ヨ。

す。又、諸蟲傷には、搗汁を飲み、幷に傅ける。婦人の妊娠欬嗽には、搗き篩つて蜜で丸にして服すれば效がある。

(一)半　夏（本經下品）

和名　はんげ、からすびしやく
學名　Pinellia ternata, Breit.
科名　てんなんしやう科（天南星科）

釋名　**守田**（本經）　**水玉**（本經）　**地文**（別錄）　**和姑**（本經）　時珍曰く、禮記月令に『五月半夏生ず』とある。蓋し夏の半に相當するといふ意味だ。故に守田と名けるのであつて、(二)會意の名稱である。水玉といふは形容だ。

集解　別錄に曰く、半夏は(三)槐里の川谷に生ずる。五月、八月に根を採つて暴乾する。普曰く、微丘に生じ、或は野中に生ずる。二月始めて生え、葉は三枚づつ集つて生える。花は白色で圓く、上を向いてゐる。

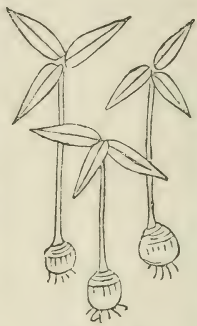
弘景曰く、槐里は(四)扶風の管轄下である。今は第一位のものは(五)青州に產し、吳中にもある。肉の白いものを佳しとする。如何に陳くとも差支なし。

恭曰く、所在いづれにもある。平澤に生ずるものを羊眼半夏と名け、圓く白くし

(六)大觀ニ異ノ次ニ問南人說苗乃ノ六字ガアル。
(七)齊州ハ石部附錄諸石龍涎石ノ註ヲ見ヨ。
(八)大觀ニ毎ニ作ル、誤ナルコトト必セリ。
(九)大觀ニ似而ノ下ニ光字アリ。

て勝れたものとしてある。ところが、江南には大いさ徑一寸ほどのものがあつて、南方では特にそれを貴重のものとし、近來は兩者を互用してゐるが、その功果の狀態は大いに(六)異ふ。これは苗が似てゐるので由跋（ゆはつ）を半夏と誤つたのだ。

○頌曰く、所在にあるが、(七)齊州のものを佳しとする。(八)二月苗が生え、莖が一本でその端に三枚の葉が生え、淺緑色で頗る竹葉に(九)似てゐる。しかし江南に生ずるものは芍藥（しやくやく）の葉に似てゐる。根は下に相重つて上が大きく下が小さく、皮が黄で肉が白い。五月、八月に根を採り、二日間灰に裹（つゝ）み、湯で洗つて暴乾する。蜀の圖經には『五月採つては虛して小さく、八月採れば實して大きい。平澤に生じた甚だ小さいものを羊眼半夏と名ける。由跋は甚だよく半夏に似てゐるが、苗が同じくない』とある。


〔半　夏〕

○斅曰く、白傍䓻子（はくはうきし）は眞に半夏に似てゐるが、ただこれは咬めば微し酸味が加つてゐる。藥用には入れない。

修治　弘景曰く、凡そこれを用ゐるには、十回ばかり湯で洗つて滑かなものを盡くなくする。さうせねば毒があつて咽喉を刺戟するものだ。方の中に半夏があるときは必ず生薑を用ゐる。それは毒を制するためである。

斅曰く、修治方法は、半夏四兩を、白芥子末二兩、釅醋二兩を攪き廻して濁らせた中に投じ、三回洗つて用ゐる。もし涎を洗ひ盡さずに用ゐれば、氣逆して肝氣を怒滿せしむるものである。

時珍曰く、半夏を完全に修治するには、ただ洗つて皮垢を去り、湯に泡けて逐日湯を換へ、七日間浸して晷乾し、切片して薑汁を拌ぜ、焙じて藥に入れる。或は、研末し、薑汁を入れた湯に三日間浸し、澄まして涎水を瀝し去り、晒し乾して用ゐる。これを半夏粉といふ。或は、研末し、薑汁で和して餅にし、日光で乾して用ゐる。これを半夏餅といふ。或は、研末し、薑汁白礬湯で和して餅にし、楮葉で包んで籃に入れ、黄衣の生ずるを待つて日光で乾して用ゐる。これを半夏麴といふ。白飛霞の醫通に『痰の範圍の病には半夏を主とし、造つて麴にしたものが就中佳し。濕痰を治するには、薑汁、白礬湯を和し、風痰を治するには、薑汁、及び皂莢の煮

〔一〇〕木村(康)曰ク、半夏ハからすびしやくヲ正條トス。支那産ハ本邦産ヨリ甚大形ニシテ徑一〇粍前後ノモノアリ、近縁ノおほはんげモ用ウベシ。

成分　からすびしやくハ有效成分ハ不明ナレドモ、フイトステリン、イソ油酸及一種ノアルカロイドヲ含有スト云フ。おほはんげハ鎭痙、祛痰、健胃、發汗及驅蟲劑トシテ用ヰラレタルモ、コニイン樣ノアルカロイドヲ含有ス。半夏固有ノ香ハ少量ノ精油ニ起因

汁を和し、火痰を治するには、薑汁、竹瀝、或は荊瀝を和し、寒痰を治するには、薑汁、礬湯に白芥子末を入れたものを和す。これはいづれも麹に造るの妙法だ』とある。

根〔一〇〕 **氣味** 【辛し、平にして毒あり】 別錄に曰く、生では微寒、熟すれば溫である。生では人をして吐かしめ、熟すれば人をして下さしめる。湯で滑かきものを洗ひ盡して用ゐる。元素曰く、味は辛く苦し、性は溫である。氣、味俱に薄く、沈にして降る、陰中の陽である。好古曰く、辛は厚く、苦は輕い、陽中の陰であつて、手の陽明、太陰、少陰の三經に入る。

之才曰く、射干が使となる。皂莢を惡み、雄黃、生薑、乾薑、秦皮、龜甲、及び烏頭を畏る。權曰く、柴胡が使となる。羊血、海藻、飴糖を忌む。

元素曰く、熱痰には黃芩を佐とし、風痰には南星を佐とし、寒痰には乾薑を佐とし、痰痞には陳皮、白朮を佐とする。多く用ゐれば脾、胃を瀉す。諸血證、及び口渴するものには用ゐることを禁ずる。それは津液を燥するからである。妊婦はこれを忌む。生薑を用ゐれば害はない。

ス。灰分八・一九%ニシテ其中カルシユム一四・八%マグネシユム四九・四%ナリ。中山太郎―薬誌、大、一三(五〇九)五五一。久保直太郎―南満醫學雑誌、大、一一(一一)植成、研、二三一。江馬暁男―中外醫事新報、二三八。

主治　【傷寒寒熱、心下堅く胸脹るもの、欬逆頭眩、咽喉腫痛、腸鳴。氣を下し、汗を止める】(本經)【心腹、胸膈に痰熱が滿結するもの、欬逆上氣、心下急痛、堅痞、時氣嘔逆を消す。癰腫を消し、痿黄を療じ、顏色を悅澤にし、胎を墮す】(別錄)【痰を消し、肺氣を下し、胃を開き、脾を健にし、嘔吐を止め、胸中の痰滿を去る。生で癰腫を摩す。瘤癭の氣を除く】(甄權)【吐食反胃、霍亂轉筋、腸腹の冷、痰瘧を治す】(大明)【寒痰、及び身體を寒くし、冷物を飲んで肺を傷めた欬を治し、胸中の痞、膈上の痰を消し、胸寒を除き、胃氣を和し、脾濕を燥し、痰厥頭痛を治し、腫を消し、結を散ずる】(元素)【眉稜骨痛を治す】(震亨)【肝風虛を補す】(好古)【腹脹、目を瞑し得ぬもの、白濁、夢遺、帶下を除く】(時珍)

發明　權曰く、半夏を使用するには、虛して痰氣のあるものに加へて用ゐるがよし。

頌曰く、胃冷嘔噦には、方藥として最要のものである。

成無已曰く、辛は散ずるものであり、潤ほすものであつて、半夏の辛は、逆氣、結氣を散じ、煩嘔を除き、音聲を發し、水氣を行らし、而して腎の燥を潤ほす。

（一）經ハ素問ヲ指スモノナラン。
（二）泣ハ涙ノ意。

好古曰く、（一）經に『腎は五液を主り、化して五濕となす』とあつて、その液は、腎自らの臟に入つては唾となり、肝に入つては（二）泣となり、心に入つては汗となり、脾に入つては痰となり、肺に入つては涕となる。痰あるを嗽といひ、痰なきを欬といふ。痰そのものは欬に因つて動く脾の濕であつて、半夏は能く痰の標を泄するが、痰の本を泄することは不能である。本を泄すとは腎を泄することだ。欬は無形のものであり痰は有形のものであつて、半夏は、無形に對しては潤の作用をなし、有形に對しては燥の作用をなす。結果に於いては、濕を流し、燥を潤ほすこととなるのである。俗に半夏を肺の藥としてあるは誤りだ。嘔吐を止めるのは足の陽明に作用するからである。痰を除くのは足の太陰に作用するからである。柴胡が使となるところから、現に柴胡湯中にはこれを用ゐるが、それは嘔を止める爲めではあるが、やはり柴胡、黃芩の往來寒熱に對する主效を助けるのであつて、これまた足の少陽、陽明に作用するのだ。

宗奭曰く、今一般には、半夏をただ痰を去るものとのみ心得て脾を益することをば言はないが、蓋し益脾の效は、この物の能く水を處分する力に因るのであつて、

脾は濕を惡み、濕すれば濡困し、困すれば水の處分が不能となる』經に『水勝つときは瀉す』とある。ある男子は夜間數〻厠へ行つたが、ある人が、生薑一兩、半夏、大棗各三十箇、水一升を甕瓶へ入れ、慢火で燒いて熟水にし、時時に呷はせるとそれで已んだ。

趙繼宗曰く、世間の醫師は丹溪が『二陳湯は一身の痰を治す』と言つたことを無批判に墨守して、凡そ痰あるものでさへあれば皆用ゐてゐるが、そもそも二陳湯の中には半夏がある。半夏はその性が燥烈なものだ。風痰、寒痰、濕痰、食痰の場合ならばまことに適當だが、勞痰、失血の諸痰の場合にこれを用ゐては、反つて能く血液を燥して病勢を增加する。心得て置くべきことだ。

機曰く、俗間では、半夏は性燥にして毒あるところから、多くは貝母をこれが代用とするが、貝母は太陰、肺の經の藥、半夏は太陰、脾の經、陽明、胃の經の藥であつて、代用し得べき理由はない。そもそも欬嗽の吐痰、虛勞の吐血、或は痰中に血の見えるもの、諸鬱の咽痛、喉痺、肺癰、肺痿、癰疽、婦人の(一三)乳難は、すべて貝母を嚮導とする。半夏は禁ずべき藥である。しかし、涎は脾の液であつて、美味

(一三)乳難ハ乳癰ノ誤ナラン。

なる(一四)膏粱、炙煿はいづれも能く脾、胃に濕熱を生ずる。それで涎が化して痰となり、久しきに亙れば痰火が上攻して昏憒せしめ、口噤し、(一五)偏癈し、僵仆し(一六)蹇濇し、言語不能となり、生死旦夕に迫る。かかる場合には、半夏、南星以外では治すべきものがない。若し貝母を以て代用するならば、それは首を伸べて死を待つやうなものである。

時珍曰く、脾に濕が留らねば痰は生じない。故に脾は痰を主るの源、肺は痰を貯へるの器といふのだ。半夏は能く痰飲、及び腹脹に主效があるもので、その體たるや滑にして味辛く、性は温である。涎は滑にして能く潤ほす。辛、温は能く散じてやはりよく潤ほす。故に濕を行つて大便を通じ、竅を利して小便を泄するのである。所謂『辛は氣を走して能く液を化し、辛は以てこれを潤ほす』とはこの事實だ。潔古張氏は『半夏、南星は、痰そのものを治するから欬嗽が自から癒えるのだ』といひ、丹溪朱氏は『二陳湯は、能く大便を潤ほし、また小便を長からしめる』といひ、聊攝成氏は『半夏は辛にして散である。水氣を行つて腎の燥を潤ほす』といつてある。又、和劑局方には『半硫丸を用ゐて老人の虚祕を治す』とある。いづれもその滑、

(一四)膏粱炙煿ハ美食ヲ指ス。
(一五)偏癈ハ半身不隨。
(一六)蹇濇ハ足ガ利カナクナルコト。

潤の作用を中心としたものだ。世間一般に南星、半夏を性の燥なるものと心得るは誤である。濕が去れば土が燥して痰涎が生ぜぬのだ。二物の性が燥なるためではない。古方には、咽痛、喉痺、吐血、下血を治するに多く二物を用ゐてある。禁劑ではない。二物はまた能く血を散ずるものだから、破傷、打撲はいづれもこれを主藥とする。ただ陰虛、勞損は濕熱の邪ではないのであつて、それに竅を利し濕を行る藥を用ゐては、二重にその津液を竭す結果となる。それは醫師の罪だ。藥の咎といへやうか。甲乙經には『これを用ゐて不眠症を治す』とある。これをしも果して性燥なるものといへやうか。岐伯は『衞氣が陽に行れば陽氣が滿ち、陰に入るを得ずして陰氣が虛する。故に目を瞑り得ぬのである。これが治法は、半夏湯一劑を飲ませる。それで陰、陽が通ずれば立ろに安らかに眠れる』とある。その方は、千里長流の水八升を一萬回汲み揚げて淸きもの五升を取り、葦の薪で煮て大沸し、秫米一升、半夏五合を入れて一升半に煮取り、一日三回、その汁一盃づつを飲み、反應のあるを度とする。病の新たに發つたものは、一盃飲盡せば安眠し、汗が出て病が已む。久しきものも三回飲めば十分だ。

(一七)法制ハ修治ノ條ニアリ。

(一八)紅半夏法トハ硃砂ヲ衣トスルヨリノ名ナリ。

附方

舊十五、新五十三。【(一七)法制半夏】痰を清し、飲を化し、脾を壯にし、氣を順にする。大半夏を湯で七回洗つて焙じ乾し、再び洗ひ焙じ乾し、同様に七回繰返してから濃米泔に一晝夜浸し、一兩毎に白礬一兩半を溶した温水に五日浸して焙じ乾し、鉛白霜一錢を溶した温水にまた七日浸し、漿水を用ゐて慢火で煮沸し、焙じ乾して取收め、一二粒づつを嚼んで薑湯で溶して送下する。(御藥院方) 【(一八)紅半夏法】風熱を消し、痰涎を清し、氣を降し、咽を利す。大半夏を前記の方法の如くにして湯に浸して焙制し、毎一兩に龍腦五分を入れ、硃砂を衣にして染め、先づ燈草を一重約一指の厚さに鋪いた上へその半夏をならべ、その上を再び燈草で一指厚に蓋ひ、炒豆で焙じて乾くを候つて取出し、一二粒づつを嚼んで温水で送下する。(御藥院方) 【痰を化し、心を鎭める】風を祛り、膈を利する辰砂半夏丸――半夏一斤を七回湯に泡け、末にして篩ひ、三日間水に浸して生絹で濾し、滓を去り澄清して水を去つて晒し乾し、一兩に辰砂一錢を入れ、薑汁で打つた糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを薑湯で服す。これは周府の方である。(袖珍) 【痰を化し、氣を利す】三仙丸――方は虎掌の條を見よ。【痰を消し、胃を開く】胸膈の壅滯を去る。斗門方では、

半夏を湯泡し焙乾して末にし、自然薑汁で和して餅にし、濕紙で裹んで香しく煨き、その餅二錢を、熟水二盞に鹽五分を入れて一盞に煎じた湯で服す。大いに痰毒を壓し、及び酒食傷を(一九)治するに極めて效驗がある。○經驗方では、半夏、天南星各二兩を末にし、水五升で壜の中に入れて一夜浸し、淸水を去り焙乾して再び研末し、二錢づつを水二盞、薑三片の煎湯で服す。【中焦の痰涎】咽を利し、頭、目を淸くし、飮食を進める。半夏を七回湯に泡けて四兩、枯礬一兩を末にし、薑汁で打つた糊、或は煮た棗肉で和して梧子大の丸にし、十五丸づつを薑湯で服す。寒痰には丁香五錢を加へ、熱痰には寒水石を煆いて四兩を加へる。これを玉液丸と名ける。(和劑局方)

【老人の風痰】大腑熱で意識不明なるもの、及び肺熱で痰が實して利せぬには、半夏を七回泡けて焙じ、硝石半兩と末にし、白麪を入れて搗きまぜ、水で和して綠豆大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。(普濟)【膈に壅る風痰】半夏半斤を酸漿に一夜浸し、溫湯で五十回洗つて惡氣を去り、日光で乾して末にし、漿水で搜して餅にし、日光で乾して再び研つて末にし、五兩づつに生龍腦一錢を入れ、漿水の濃脚で和して雞頭子大の丸にし、紗の袋に入れて(二〇)風の吹かぬ場所で陰乾し、一丸づつを好

(一九)治字、大觀ニヨリ補フ。

(二〇)大觀ニハ通風處ニ作ル。

き茶、或は薄荷湯で嚼んで呑下す。（御藥院方）【搜風、化痰】志を定め、神を安んじ、頭、目を利す。辰砂化痰丸――半夏麴三兩、天南星を炮いて一兩、辰砂、枯礬各半兩を末にし、薑汁打糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを食後に薑湯で送下する。（和劑局方）【痰厥中風】省風湯――半夏を湯に泡けて八兩、甘草を炙いて二兩、防風四兩を用ゐ、半兩づつを、薑三十片、水二盞で煎じて服す。（奇效方）【風痰の頭運】嘔逆し、目眩し、顏色青黃で脈の弦するには、水煮金花丸――生半夏、生天南星、寒水石を煆き、各一兩、天麻半兩、雄黃二錢、小麥麪三兩を末にし、水で和して餅にし、水で煮て浮き起つた時漉出し、搗いて梧子大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。極めて效がある。また風痰咳嗽、二便不通、風痰頭痛をも治す。（潔古活法機要方）【風痰、濕痰】青壺丸――半夏一斤、天南星半兩を各湯に泡け晒し乾して末にし、薑汁で和し餅にして焙乾し、神麪半兩、白朮末四兩、枳實末二兩を入れ、薑汁麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。（葉氏方）【風痰喘逆】兀兀として吐かんとし、眩運して倒れんとするには、半夏一兩、雄黃三錢を末にし、薑汁で浸した蒸餅で梧子大の丸にし、三十丸づつを薑湯で服す。已に吐いたものには檳榔を加へる。

（活法機要）【風痰喘急】千緡湯——半夏を湯で洗つて七箇、甘草を炙き、皂莢を炒つて各一寸、薑二片、水一盞を七分に煎じて溫服する。（和劑局方）【上焦の熱痰】欬嗽するには、制した半夏一兩、片黃芩末二錢を薑汁打糊で綠豆大の丸にし、七十丸づつを淡薑湯で食後に服す。これは周憲王が親製の方である。（袖珍方）【肺熱痰嗽】制した半夏、栝樓仁各一兩を末にし、薑汁打糊で梧子大の丸にし、二三十丸づつを白湯で服す。或は栝樓瓤を煮熟したもので丸にする。（濟生方）【熱痰欬嗽】煩熱し、顏色赤く、口燥き、心痛し、脈の洪、數なるには、小黃丸——半夏、天南星各一兩、黃芩一兩半を末にし、薑汁で浸した蒸餅で梧子大の丸にし、五七十丸づつを食後に薑湯で服す。（潔古活法機要）【小兒の痰熱】欬嗽、驚悸するには、半夏、南星等分を末にして牛膽汁で和し、膽の中に入れて風の當る處に懸け、乾くを待つて蒸餅で綠豆大の丸にし、薑湯で三五丸づつを服す。（摘玄方）【濕痰欬嗽】顏色黃に、身體重く、橫臥を好み、驚に食物不消化を兼ね、脈の緩なるには、白朮丸——半夏、南星各一兩、白朮一兩半を末にし、薄糊で梧子大の丸にし、五七十丸づつを薑湯で服す。（活法機要）【氣痰欬嗽】顏色白く、呼吸迫り、ぞくぞくとして悪寒し、憂鬱にして樂まず、脈の

(二一)結胸ハ脾胃虛ニ同ジ、胃病デ痛ミノアルモノ。

(二二)停痰冷飮ハ留飮。

濇するには、玉粉丸――半夏、南星各一兩、官桂半兩を末にし、糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。(活法機要)【(二一)小結胸痛】痛が正しく心下に在つて、按ずれば痛み、脈の浮にして滑するには、小陷胸湯を主とする。半夏半斤、黃連一兩、栝樓の實して大なるもの一箇を用ゐ、水六升で先づ栝樓を三升に煮て滓を去り、他の二味を入れて二升に煮取り、三回に分服する。(仲景傷寒論)【濕痰の心痛】喘急するには、半夏を油で炒つて末にし、粥糊で綠豆大の丸にし、二十丸づつを薑湯で服す。(丹溪心法)【急傷寒病】半夏四錢、生薑七片、酒一盞を煎じて服す。(胡洽居士百病方)【結痰の出ぬもの】發音清からずして年久しきものも亦よし。玉粉丸――半夏半兩、桂心一字、草烏頭半字を末にし、薑汁に浸した蒸餠で芡子大の丸にし、一丸づつを就寢時に含んで嚥む。(活法機要)【(二二)停痰冷飮】嘔逆するには、橘皮半夏湯――半夏を水で煮熟し、陳橘皮と各一兩を用ゐ、四錢づつを生薑七片、水二盞を一盞に煎じて溫服する。(和劑局方)【停痰留飮】胸膈滿悶し、氣短く、惡心し、飮食の落付かぬもの、或は痰水を吐くには、茯苓半夏湯――半夏を湯に泡けて五兩、茯苓三兩を用ゐ、四錢づつを、薑七片、水一鍾半を七分に煎じて服す。甚だ捷徑であ

(二三)支飲ハ留飲ニ同ジ。

(二四)悸忪ハムナサワギ。

る。(和劑局方)【(二三)支飲で嘔するもの】嘔患者は元來渇するものだ。渇せぬは心下に支飲があるからで、喘するに似て喘せず、嘔するに似て嘔せず、噦するに似て噦せず、心下がむかむかする。いづれも小半夏湯を用ゐるがよし。七回湯に泡けた半夏一升、生薑半升、水七升を一升五合に煮て分服する。(張仲景金匱要略)【噦逆で死せんとするもの】半夏生薑湯を主とする。卽ち前記の方である。【痘瘡の噦氣】方は上に同じ。【嘔噦眩悸】穀食の落付かぬには、半夏加茯苓湯——半夏一升、生薑半斤、茯苓三兩を切り、水七升で一升半に煎じて溫服する。(金匱要略)【不眠症】發明の項を見よ。【心下の(二四)悸忪】半夏麻黃丸——半夏、麻黃等分を末にし、蜜で小豆大の丸にし、一日三回、三十丸づつを服す。(金匱要略)【傷寒乾噦】半夏を熟洗して研末し、生薑湯で一錢匕を服す。(梅師方)【嘔逆、厥逆】內に寒痰がある。半夏一升を滑を洗つて焙じ研り、小麥麪一升と水で和して彈丸ほどの丸にして水で煮熟し、初めには四五丸を呑み、日毎に三回服して漸次に十五丸まで增加し、その都度煮て呑む。病の減退を覺えたならば再び作つて呑む。羊肉、餳、糖を忌む。これは許仁則の方である。(外臺祕要)【嘔吐反胃】大半夏湯——半夏三升、人參三兩を白蜜一升

(二五)大觀ニ一ニ作ル。

(二六)皮ハ恐クハ香ノ誤。

(二七)瓱ハ盞ノ誤ナラン。

と水一斗二升を和して百(二五)二十回揚げたもので三升半に煮取り、一日二回、一升を温服する。また膈間の支飲をも治す。(金匱要略)【胃寒の噦逆】停痰、留飲である。藿香半夏湯――半夏を湯に泡け黄色に炒つて二兩、藿香葉一兩、丁(二六)皮半兩を用ゐ、四錢づつを水一盞、薑七片で煎服する。(和劑局方)【小兒の吐瀉】脾、胃の虚寒には、齊州の半夏を七回湯に泡け、陳粟米と各一錢半を、薑十片、水一(二七)瓱半を八分に煎じて温服する。(錢乙小兒)【小兒の痰吐】或は風壅のために發るもので、或は欬嗽し、發熱し、飲食すれば直ちに吐くものである。半夏を七回湯に泡けて半兩、丁香一錢を用ゐ、半夏末を水に和して丁香を包み、更に麪で包んで煨熟し、麪を去つて末にし、生薑の自然汁で和して麻子大の丸にし、二三十丸づつ陳皮湯で服す。(活幼口義)【妊娠嘔吐】半夏二兩、人參、乾薑各一兩を末にし、薑汁麪糊で梧子大の丸にし、一日三回、十丸づつを飲で服す。(仲景金匱要略)【霍亂の腹脹】半夏、桂等分を末にし、水で方寸匕を服す。(肘後方)【小兒の腹脹】半夏末少量を酒で和して粟米大の丸にし、二丸づつを薑湯で服す。瘥えぬときは增加する。或は火で炮いて研末し、薑汁で調へて臍に貼るも佳し。(子母祕錄)【黄疸の喘滿】小便が自から利しても

熱の取れぬものには、半夏、生薑各半斤、水七升を一升五合に煮取り、二回に分服する。ある患者は氣結して一旦死んだが、心下が暖だつたのでこの藥少量を口に入れると遂に活きた。(張仲景方)【伏暑の引飮】脾、胃の利せぬには、消暑丸——半夏を醋で煮て一斤、茯苓半斤、生甘草半斤を末にし、薑汁麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを熱湯で服す。(和劑局方)【老人の虛祕】冷祕、及び痃癖冷氣には、半硫丸——半夏を炮いて炒り、生硫黃と等分を末にし、自然薑汁で煮た糊で梧子大ほどの丸にし、五十丸づつを空心に溫酒で服す。(和劑局方)【失血の喘急】吐血、下血、崩中、帶下の喘急、痰嘔、中滿、宿瘀には、半夏を扁平に搥き、薑汁で和した麪で包んで黃色に煨つて研末し、米糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。(直指方)【白濁、夢遺】半夏二兩を十回洗つて切り破り、木猪苓二兩と共に炒つて黃色にし、火毒を出して猪苓を去り、煨いた牡蠣一兩を入れて山藥糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを茯苓湯で送下する。腎氣が閉ぢたために一身の精氣が包容し把持されず、ために妄行して遺するものには、この方を用ゐるがよし。蓋し半夏は利する性があり、猪苓は水を導いて腎氣を通ぜしめるものであつて、この場合は下元が虛し

(二八)解ハ蓖麻附方ノ條ニ出ヅ。

(二九)大觀ニ黄下ニ白字アリ。

(三〇)大觀ニ古今錄驗ニ作ル。

て衰弱したものとは同一でない。(許學士本事方)【(二八)八般の頭風】三回にして效が現はれる。半夏末に百草霜少量を入れて紙撚に卷き込み、烟に燒いて鼻中に嗅ぎ、口中に水を含む。涎が出るときは吐き去つて再び含む。(衞生寶鑑)【少陰の咽痛】瘡が生じて言語不能となり、聲の出ぬには、苦酒湯を主とする。半夏七箇を打ち碎き、雞子一箇の頭に一箇の孔を開け、(二九)黄を去つて苦酒を少し滿て、その中に半夏を入れ、鐶子を用ゐて炭火の上に据ゑて煎じ、三沸して滓を去り、盃中に入れて時時に嚥む。極めて效驗がある。なほ瘥えぬときは再び試みる。(三〇)(仲景傷寒論)【喉痺腫塞】生半夏末を鼻中に嗅ぐ。涎が出て效がある。(集簡方)【咽の中の骨硬】半夏、白芷等分を末にし、水で方寸匕を服す。嘔き出すものである。羊肉を忌む。(外臺祕要)【重舌、木舌】脹大して口を塞ぐには、半夏を醋で煎じて含漱する。○又、ある方では、半夏二十箇を水で煮て再び炮き、熱に乘じて卽時に酒一升に浸して密封し、良久して熱して漱ぎ、冷えてから吐き出す。【小兒の顖陷】乃ち冷である。水で半夏末を調へて足の心に塗る。【顏面の黑氣】半夏を焙じて研末し、米醋で調へて敷く。風に當らぬやうにする。回數に拘はらず朝から晩まで試み、三日後に皂角湯で洗ひ落す。顏は玉

のやうに麗くなる。(摘玄方)【癩風で眉の落ちるもの】生半夏と羊屎を焼き焦したものの等分を末にし、自然薑汁で調へて日毎に塗る。(聖濟錄)【盤腸生產】出產時に子腸が先づ出て、分娩後に收まらぬものを盤腸產と名ける。半夏末を頻りに鼻に嗜げば收まる。(婦人良方)【產後の(三一)運絕】半夏末を冷水で和し、大豆大の丸にして鼻中に納れる。直ちに癒える。これは扁鵲の法である。(肘後方)【小兒の驚風】生半夏一錢、皂角半錢を末にし、少量を鼻に吹き入れる。これを嚏驚散と名ける。直ちに甦るものだ。(直指方)【突然死して寤め甦らぬもの】半夏末を鼻中に吹けば直ちに活きる。これは南岳(三二)夫人紫靈魏元君の方である。【五絕急病】一は自縊、二は墻壓、三は溺水、四は魘魅、五は產乳である。いづれも半夏末を大豆一丸ほど鼻中に納れる。心の溫なるものならば一日にして活きる。(子母祕錄)【癰疽發背】及び乳瘡には、半夏末を雞子白で調へて塗る。(肘後方)【(三三)吹奶の腫痛】半夏一箇を煨き研つて酒で服す。立ろに癒える。ある方では、末をその腫痛の左、右に隨つて痛む方の鼻に嗜げば效驗がある。(劉長春經驗方)【打撲傷の瘀痕】水で半夏の末を調へて塗る。一夜にしてその痕がなくなる。(永類鈐方)【遠路步行で生じた足(三四)趼】方は上に同じ。(集簡方)

(三一)運絕ハ眩運シテ氣絕スルコト。

(三二)大觀ニ大夫ニ作レドモ誤ナリ。

(三三)吹奶ハ乳癰。

(三四)趼ノ誤、趼ハ胝也。謂足胝起如繭。

【金刃の骨肉に入つて出ぬもの】 骨脈中に入つたものには、半夏、白斂等分を末にし、一日三回、酒で方寸匕を服す。二十日に達すれば自から出る。(李筌太白經) 【飛蟲の耳に入りたるもの】 生半夏末を麻油で調へて耳門の外部に塗る。(本事方) 【蠍、蠆の螫傷】 半夏末を水で調へて塗る。立ろに痛みが止まる。(錢相公篋中方) 【(三五)蝸螻五孔】 五孔の相通ずるものには、半夏末を水で調へて日毎に二回塗る。(聖惠方) 【咽喉骨硬】 半夏、白芷等分を末にし、水で方寸匕を服す。嘔出するものである。羊肉を忌む。(外臺祕要)

莖涎 主治 【煉り取つて髮眉に塗れば、墮落したものが生える】(雷斅)

(一)蚤休 (本經下品)

和名 どくけしつくばねさう (新稱)
學名 Paris polyphylla, Sm.
科名 ゆり科 (百合科)

釋名 **蚤休**(別錄) **螫休**(日華) **紫河車**(圖經) **重臺**(唐本) **重樓金綫**(唐本) **三層草**(綱目) **七葉一枝花**(蒙筌) **草甘遂**(唐本) **白甘遂** 時珍曰く、虫蛇の毒はこの草を得て治すれば直ちに休む。故に蚤休、螫休などの諸名がある。重臺、

(三五)證狀詳ナラズ。

(一)牧野云フ、我邦ニハ產セヌガ、其形狀ハ蕭ダ能クくるまばつくばねさう (P. quadrifolia, L. var. obovata, Reg. et Til.) ニ似テ居ル。

三層はその葉の形狀に因んだもの、金線重樓はその花の形狀に因んだもの、甘遂はその根の形狀に因んだもの、紫河車はその功用に因んだものだ。

集解　別錄に曰く、蚤休は(二)山陽の川谷、及び冤句に生ずる。

恭曰く、今の重樓、(三)金線といふ草がそれである。一名重臺といひ、南方では(四)甘遂と呼ぶ。一本の莖に六七枝の葉があり、王孫、鬼臼、蓖麻などに似て葉が二三層に著いてゐる。根は肥大な菖蒲のやうで、肌が細かく、脆く白い。

保昇曰く、葉は鬼臼、(五)牡蒙に似て、年久しきものは二三重になる。根は紫參のやうで、皮は黃、肉は白色だ。五月根を採つて日光で乾す。


〔蚤休〕
一紫河車一

大明曰く、根は尺二、蜈蚣のやうで、大いさは肥えた紫菖蒲ほどある。

頌曰く、卽ち紫河車のことだ。今は(六)河中、河陽、華、(七)鳳、文州、及び江淮の地方にもある。葉は王孫、鬼臼などに似て二三層をなし、六月黃紫色の花を開き、

(二)山陽ハ隰草類女菀ノ註ヲ見ヨ。冤句ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。

(三)大觀ニ金線ノ二字ナシ。

(四)大觀ニ廿ノ上ニ草ノ字アリ。

(五)牡蒙ハ紫參ノ一名。

(六)河中ハ石部石中黃子ノ註、河陽ハ隰草類瞿麥ノ註、華州ハ石部花乳石ノ註、文州ハ石部礜石ノ註、江淮ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。

(七)鳳州ハ西魏ニ置ク。今ノ陝西省漢中府鳳縣ソノ地ナリ。

(八)粘、彙言ニ秔ニ作ル、從フ可シ。

(九)木村(康)曰ク、成分ハパリヤン W. P. 100.

蕊が赤黄色で、上に金絲があつて垂下してゐる。秋、紅色の子を結ぶ。根は肥えた薑に似て、皮が赤く肉が白い。四月、五月に採收する。

宗奭曰く、蚤休は、旁枝がなくてただ一本の莖が伸び出で、高さ一尺餘になり、頂端に四五枚の葉がある。葉は岐があり、苦杖に似て、中心からまた莖が起ち、やはり同じやうに葉が生える。ただ根を藥用に入れる。

時珍曰く、重樓金線は處處にある。深山の陰濕の地に生え、ただ一本の莖が上に伸び、葉と葉との中心を當る。その葉は綠色で芍藥に似てゐる。凡て二三層で、一層毎に七枚の葉が附き、莖の端に夏季に花を開く。花は七瓣で、金絲蕊がある。長さ三四寸のものだ。王屋山に產するものは五層、七層にもなり、根は鬼臼、蒼朮などのやうな形狀で、外部は紫で內部が白い。(八)粘、糯の二種ある。外丹家では、これを採つて三黃、砂、汞を制するに用ゐる。藥に入れるには、洗ひ切り焙じて用ゐる。俗間の諺に『七葉一枝の花、深山これ我が家、癰疽に如し遇ふ者は、一に手で拈擎するやうにせよ』といふはこの草だ。

根 (九) 氣味 【苦し、微寒にして毒あり】大明曰く、冷なり、毒なし。雄黃、丹

(一〇)除、大觀ニハ除トアレドモ本草原始ニハ陰トアリ、從フ可シ病名ナリ。

砂、蓬砂、及び鹽を伏す。**主治**【驚癇で頭を搖り、舌を弄し、熱氣が腹中に在るもの】(本經)【癲疾。癰瘡には蝕を(一〇)除き、三蟲を下し、蛇毒を去る】(別錄)【生で一升を食へば、水を利す】(唐本)【胎風で手足の搐するものを治し、能く吐泄し、瘰癧を治す】(大明)【瘧疾寒熱を去る】(時珍)

發明 恭曰く、醋に磨つて癰腫、蛇毒に傅ければ甚だ效がある。時珍曰く、紫河車は足の厥陰の經の藥であつて、すべてこの經の驚癇、瘧疾、瘰癧、癰腫に適するものだ。道家には服食の法があるが、果して效果のあるものか否か判らない。

附方 新五。【服食法】紫河車の根を用ゐ、竹刀で皮を刮去り、骰子大に切つて塊麪で裹み、瓷瓶に入れて水で煮て浮いたとき漉出し、凝冷してから新しい布袋に入れ、風の吹く處に懸けて乾くを待ち、三丸づつを五更の初刻に東に向ひ咒文を念じて井水で服し、三服連進する。それでよく粮食を絶つて生存するやうになる。若し飮食物を攝取せんとするならば、先づ黑豆の煎湯を飮んでから、次に藥丸を稀粥に煮て少しづつ食ふ。咒文は『天朗氣淸金雞鳴。吾今服藥欲長生。吾今不飢後不渴。賴得神仙草有靈』といふのである。【小兒の胎風】手足の搐搦するに

（二）鼠莽ハ莽草ノ一名。

（三）穀賊ハ穀ノ芒刺咽喉中ニ著イテ、出ヅル能ハザルモノ。

（一）牧野云フ、鬼臼ハ一ニ八角蓮トモ稱スルコト植物名實圖考ニ出テ居ル。德川末葉時代ニ鬼臼デアラウト云フモノ一度世ニ出デ、之レヲかさぐさ、一名つりがねさう、一名つりがねおさト呼ンダ。其圖ガ一ハ本草圖譜ニ出デ一ハ地錦抄附錄ニ出テ居ル。然シ兩者其葉狀等ニ多少相

は、蚤休、卽ち紫河車を末にし、半錢づつを冷水で服す。（衞生易簡方）【慢驚で搐を發すもの】陽證を帶ぶるものには、白甘遂末、卽ち蚤休一錢、栝樓根末二錢を共に慢火で黄色に焦がして研りまぜ、一字づつを、麝香、薄荷の煎湯で調へて服す。（錢乙小兒方）【（二）鼠莽の中毒】金線重樓根を水に磨つて服すれば癒える。（集簡方）【咽喉の（三）穀賊】腫痛するには、重臺の赤色のもの、川大黄を炒り、木鼈子仁、馬牙消半兩、半夏を湯に泡けて一分を末にし、蜜で芡子大の丸にして含む。（聖惠方）

（一）鬼臼（本經下品）

和名　はすのはぐさ（新稱）
學名　Podophyllum versipelle, Hance.
科名　めぎ科（小蘖科）

校正　圖經の璚田草を併せ入る。

釋名

九臼（本經）　**天臼**（別錄）　**鬼藥**（綱目）　**解毒**（別錄）　**爵犀**（本經）　**馬目毒公**（本經）　**害母草**（圖經）　**羞天花**（綱目）　**朮律草**（綱目）　**璚田草**（綱目）　**獨脚蓮**（土宿本草）　**獨荷草**（土宿）　**山荷葉**（綱目）　**旱荷**（綱目）　**八角盤**（綱目）　**唐婆鏡**

弘景曰く、鬼臼は、根が射干のやうで、白くして味が甘い。九臼相連つて毛あるも

違ガアルガ、此ノ様ナ形狀ヲ呈シタ草ハ其後何處カラモ發見シナイカラ、今其レガ何ノ科デ何ノ屬ノモノカ能ク分ラヌ。臺灣ニ鬼臼ニ似タ同屬ノ一種みやをさうヲ產シ其學名ヲ P. pleianthum, Hance. ト稱スル。

(二)九眞ハ芳草類山薑ノ註ヲ見ヨ。

のが良し。故にかく名けたものだ。

時珍曰く、この物は有毒で、臼の形が馬眼のやうなところから馬目毒公と名け、蟲を殺し、毒を解するところから犀の字の名があり、その葉が鏡のやうでもあり、盤のやうでもあり、荷のやうでもあつて、新苗が生えれば舊苗が枯死するところから、鏡、盤、荷、蓮、害母などの諸名がある。蘇東坡詩集に『瑤田草は、俗に唐婆鏡と號す。卽ち本草の鬼臼なり。歲ごとに一臼を生ず。黃精の根の如くにして堅く瘦せたり。以て穀を辟く可し』とある。宋祁の劍南方物贊には『羞天花は蜀地の處處にある。莖に依つて花が綴りつき、葉がそれを蔽ふて自から隱れてゐる。俗に羞天と名けるが、予は改めて羞寒花と呼んだ。卽ち本草の鬼臼である。贊に曰く、寒を冒して茂り、莖修く葉廣く、莖に附いて花を作し、葉はその上を蔽ふ。以てそれ自ら蔽ふは、羞るところあるものの若き狀なり』とある。○別に羞天草といふがあるが、これとは同物でない。卽ち海芋のことだ。

集解　別錄に曰く、鬼臼は(二)九眞の山谷、及び冤句に生ずる。二月、八月に根を採る。

弘景曰く、鬼臼は山谷中に生ずるもので、八月に採收して陰乾する。射干、朮などに似たものもあり、又、鉤吻に似たものがあつて、二種類ある。錢塘附近に產するものは、味が甘く、上に叢毛があり、最も勝れてゐる。會稽、吳興に產するものは、大きくして味は苦く、叢毛がない。力は劣る。今の馬目毒公は、形狀は黃精の根のやうで、その臼の部分が馬の眼に似て柔潤である。當今の方家は多く鬼臼を用ゐるが、毒公を用ゐるといふは稀だ。何ゆゑにかやうに甚しい隔りを置くのであらうか。

恭曰く、鬼臼は深山巖石の陰に生ずる。葉は蓖麻、重樓などのや



〔七葉鬼臼〕
—羞天花—

うなもので、一本の莖が生えて莖の端に一枚の葉があり、また兩岐のものもある。一個年に一本の莖が伸びて、その莖が枯れると一箇の臼になる。假令ば生えてから二十年經てば二十箇の臼があるわけだ。必ずしも九臼と限るわけはない。根の肉、皮の鬚、いづれも射干に似たもので、今俗間で用ゐるものは多くは射干である。しか

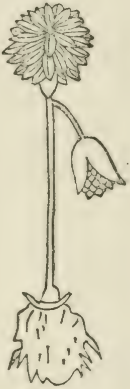
し江南地方からも別のある物が貢出されて來るが、眞物ではない。現に荊州の(三)當陽縣、硤州の(四)遠安縣、襄州の(五)荊山縣の山中からいづれも貢納するが、やはり極めて得難いものだ。

○頌曰く、今は(六)江寧府、滁、舒、商、齊、杭、襄、峽州、(七)荊門軍にもある。いづれも蘇恭の説明の通りだ。花は莖の間に生じて色赤く、(八)三月に開いて後に實を結ぶ。また一説には、鬼臼は深山の陰地に生じ、葉は六出、或は五出で鴈の掌のやう、莖の端に一枚の葉が出て繖のやうになり、朝は東に向ひ、暮には西に傾く。蓋し太陽の出沒に隨ふのだ。花は紅紫色で荔枝のやう、正しく葉の下に在つて常に葉に蔽はれ、未だ嘗て日光を見ない。一年に一本の莖が生え、枯れると一箇の臼が生じ、八九年經てば八九箇の臼になる。かやうに一年に一臼が生じて一臼が腐ち、つまり新陳代謝が行はれるところから、俗に害母草と呼ぶのである。芋魁、烏頭などのやうなもので、やはり新苗が生えれば舊苗が枯死し、前年の(九)臼が腐ちるのだといふ。而るに本草の注には『全く射干に似たり』と謂つてある。現に射干の體狀に似てゐるには相違ないが、臼の形が淺く薄く、鬼臼とは大いに異ふ。鬼臼は、八九

(三) 當陽縣ハ今ノ湖北省當陽縣ノ地ナリ。荊州ハ石部石炭ノ楚ノ註參照。
(四) 遠安縣ハ今ノ湖北省遠安縣ノ地ナリ。硤州ハ峽州ノ訛。峽州ハ石部部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。
(五) 荊山縣ハ今ノ湖北省南漳縣ノ西ニアリ。襄州ハ石部理石ノ註ヲ見ヨ。
(六) 江寧府ハ山草類白鮮ノ註、滁州ハ山草類人參ノ註、舒州ハ山草類萎蕤ノ註、商州ハ石部丹砂ノ註、齊州ハ石部滑石ノ註、杭州ハ山草類朮ノ註ヲ見ヨ。
(七) 荊門軍ハ宋ニ置ク。今ノ湖北省當陽縣ニ治ス。
(八) 大觀ニ三ヲ二ニ作ル。
(九) 大觀ニ臼ヲ塊ニ作ル。

箇の南星が側比し相疊つてゐるやうなものだ。しかし色、理が正に射干そのもののやうだから、これを使用するには、その苗を取り寄せてよく確める必要があるが、商人の手にはなかなかないものだ。

時珍曰く、鬼臼根の形狀は天南星が相疊つたやうなところから、商人は、小さきものを南星だといひ、大きいものを鬼臼だと稱してゐるが、非常な誤謬だ。按ずるに、黄山谷集には『唐婆鏡は葉底に花を開く。俗に羞天花といふ。卽ち鬼臼であつて、一歳毎に一箇の臼を生ずる。十二歳に滿ちたものならば藥用になる。當今の方家は、鬼燈檠を鬼臼としてゐるが誤だ』とあり、又、鄭樵の通志には『鬼臼は葉が小さい蓮の葉ほどで、形は鳥の掌のやうだ。一年に一本の莖が伸び、莖が枯れると根が一箇の臼になる。また八角盤とも名けるは、その葉の形が似てゐるからだ』とあつて、この二說に據れば、これは今一般にいふ獨脚蓮のことであつて、又、山荷葉、獨荷草、旱荷葉、八角鏡とも名ける。南方には處處



〔重葉鬼臼〕

（一〇）龍門山ハ河南省洛陽縣南ノ伊闕山ヲ指スモノノ如シ。王屋山ハ石部太一餘粮ノ註ヲ見ヨ。

の深山の陰密の處にあるが、北方にはただ（一〇）龍門山、王屋山にあるだけだ。この草は、ただ一本の莖が上に伸び、莖は葉の中心から生え、中が空だ。一莖七葉で、葉は圓く、初生の小さい蓮の葉のやうで、表が青く裏が紫だ。その葉は、揉めば瓜や李の香がする。花は葉の眞下に開き、また花のないものもある。根は全く蒼朮、紫河車に似てゐる。丹爐家では、根を採つて三黃、砂、汞を制す。或は『この草は、葉の八角のものが更に靈妙だ』といひ、或は『その根は紫河車と一樣なもので、ただ白色のものが河車、赤色のものが鬼臼だ』といふが、恐らくそれも違ふ。しかし、庚辛玉册には『蚤休は陽草、旱荷は陰草』としてやはり區別をつけ、陶弘景は、馬目毒公と鬼臼とを二種別の物としてあるが、これは正に一物にして二種あることに氣付かなかつたのだ。又、唐の獨孤滔の丹房鏡源には『朮律草には二種類あつて、根はいづれも南星に似たもので、莖は赤くして直上に伸び、莖の端に葉が生える。一種は葉がすべて七瓣で、一種は葉が數層になる。葉は蓖麻に似たもので、表は青く裏が紫で細毛があり、葉の下に莖に附いて一箇の花を開く。花の形狀は鈴、鐸を倒に垂れたやうで、色は青白、蕊は黃で中が空だ。黃色の子を結ぶ。風が吹いても

動かず、風無くして自ら搖ぐ。砂、汞を制し得るものだ』とある。按ずるに、これは鬼臼の中の二種類であつて、その形狀の說明が甚だ明かだ。

根(一) 氣味 【辛し、溫にして毒あり】別錄に曰く、微溫なり。弘景曰く、甘し、溫にして毒あり。權曰く、苦し。之才曰く、垣衣を畏る。

主治 【(二)蠱毒、鬼疰、精物を殺し、惡氣不祥を辟け、邪を逐ひ、百毒を解す】(本經) 【大毒を殺し、欬嗽の喉結、風邪で煩惑し、失魄し、妄りに怪しきものを見るを療じ、目中の膚翳を去る。湯には入れない】(別錄) 【尸疰、殗殜、勞疾、傳尸瘦疾に主效がある】(甄權) 【死胎を下し、邪瘧、癰疽、蛇毒、射工の毒を治す】(時珍)

發明 頌曰く、古方では、五戶鬼疰、百毒惡氣を治するに多くこれを用ゐた。又曰く、現に福州地方では、三月に璚田草の根、葉を採り、焙じ乾して搗いて末にし、蜜で丸にして服して風疾を治す。

附方 新三。【胎兒死亡】胞が破れて生れぬには、この方を用ゐて屢〻奏效した。每年萬を以て數ふるほどの人命を救つてゐる。鬼臼を、多少に拘はらず黃色のものを毛を去つて細末にし、篩羅にかけずにただ粉のやうになる程度に擣り、一錢づ

(一)木村(康)曰ク、Podophyllum peltatum L. ノ根ハ生薬ニ所謂ポドフイルム根ニシテ、北米ニ於テ往古ヨリ藥用ニ供セラレシモノ、藥用ニサルル樹脂ポドフイリンヲ含有ス。ポドフイルム根及ポドフイルム脂(ポドフイリン)ハ瀉下藥トシテ專ラ米國ニ於テ應用サル。(生藥學一二一)

(二)本經、蠱ヲ蟲ニ作ル。

つを無灰酒一盞と共に八分に煎じて一口に服す。立ろに出產すること神の如きものだ。これを一字神散と名ける。(婦人良方) 【射工の毒】寒熱して瘡を發するには、鬼臼葉一把を苦酒に漬けて搗汁を取り、一日二回、一升を服す。(千金方) 【黑黃急病】黑黃とは、顏面が黑く、身體が土の色のやうになり、食慾に異狀なくして脈の沈するものであつて、若し靑脈が口に入るならば死亡する。口中の(三)黑脈、耳會、玉泉、章門、心兪(しんゆ)に烙し、生鬼臼の搗汁一小盞を服するがよし。乾いたものは末にして水で服す。(三十六黃方)

(一)射干 (本經下品)

和名 ひあふぎ
學名 Belamcanda chinensis, Lem.
科名 あやめ科(鳶尾科)

釋名

烏扇(本經) **烏翣**(別錄) **烏吹**(別錄) **烏蒲**(本經) **鳳翼**(拾遺) **鬼扇**(土宿) **扁竹**(綱目) **仙人掌**(土宿) **紫金牛**(土宿) **野萱花**(綱目) **草薑**(別錄) **黃遠**(吳普) 弘景曰く、射干は、方書には多く射を夜(ヤ)と發音してある。

頌曰く、射干は、その形狀が莖、梗がまばらで長く、さながら射る矢の長竿(ちやうかん)のやうだ。名稱は此から起つたのである。然るに、陶氏は夜の發音を疑問としてゐる

(三)黑脈未詳。耳會ハ耳ノ附根。玉泉未詳。章門ハ前脇肋骨ノ下端。心兪ハ背部五六推骨ノ左右ニアル穴。

(一)牧野云フ、射干ハ我日本ニモ野生ガアル。又往往觀賞ノ爲メ人家ニ栽エラレテ居ル。其黑キ種子ヲうばたまト稱スル。

が、蓋し古は字の音を多くは通じて發音したもので、漢時代の官名僕射は射に關する事務を主つたものだが、やはり音を夜と發音した。格別意義のあるわけではない。

時珍曰く、その葉は叢生して横に一面に鋪き、鳥の翅や扇などの形のやうだ。故に烏扇、烏翣、鳳翼、鬼扇、仙人掌などの諸名がある。俗に扁竹と呼ぶは、その葉が扁生で根が竹のやうだといふ形容だ。根、葉はまた蠻薑のやうでもあるところから草薑といふ。○翣の音は所申の切、扇（セン）と發音する。

集解 別錄に曰く、射干は(二)南陽の山谷、田野に生ずる。三月三日に根を採つて陰乾する。

弘景曰く、これは烏翣のことで、根は黄色だ。庭や築山などに多く種ゑてある。世間ではその葉を鳶尾だといふが、鳶頭といふ草が別にある。よく似てるといふだけだ。恐らく烏翣とは違ふ。又、別に射干といふものがある。よく似たものだが、花が白く莖が長く、射手が箭をつがへて立つた狀態に似たものだ。故に阮公の詩に『射干層城に臨む』といふ句がある。これは藥には入れない。

(二)南陽ハ山草類朮ノ註ヲ見ヨ。

○恭曰く、鳶尾は、葉はすべて射干に似てゐるが、花が紫碧色で、高い莖は抽き出ない。根は高良薑に似て肉は白い。これを鳶頭と名ける。

○○保昇曰く、射干は、高さ二三尺、花は黄色、實は黑色、根は鬚が多く、皮が黄黑で肉が黄赤だ。所在いづれにもある。二月、八月に根を採り、皮を去つて日光で乾す。

○○藏器曰く、射干、鳶尾の二物はよく似てゐるので、一般には多くは區別せぬが、射干は世間で花草として種ゑる鳳翼と名けるものだ。葉は鳥の翅のやうで、秋、赤點のある紅色の花を著ける。鳶尾はこれも世間で種ゑるもので、苗の高さは射干よりも低く、形狀が鳶の尾のやうで、夏、紫碧色の花を著けるものがそれだ。

○○大明曰く、射干の根は潤ふたもので、形狀は高良薑に似てゐる。大、小があり、赤黄色で淡く、硬い。五、六、七、八月に採收する。

○頌曰く、今は方方にあつて、人家で種ゑてゐる。春、苗が生え、高さは一二尺、葉は大いに蠻薑に類して狹く長く、横に疎らに張つて翅羽の形狀のやうだ。故に鳥翣と名ける。葉の中から抽き出る莖が萱草の莖に似て强硬だ。六月花を開く。その

花は黄紅色で瓣の上に細文がある。秋、房になつた實を結ぶ。その中の子は黒色だ。一說に、射干は多く山崖の間に生ずる。その莖は細小ではあるが木に類したものだ。故に荀子に『西方に木あり、名けて射干といふ。莖の長さ四寸、高山の上に生ず』とあるがそれだともいふ。陶弘景所說の花の白いものといふは、やはり射干の類である。



〔射干・鳶尾〕

震亨曰く、根を射干といひ、葉を烏翣といふ。紫花のものが正しい。紅花のものは違ふ。

機曰く、按ずるに、諸家の註に據れば、花の白いもの、花の黄なるもの、花の紫なるもの、花の紅いものなどあつて、射干なるものは一種ではないが、丹溪は獨り紫花のものを採用した。必ず曾て實驗上效果を認めたものであらう。

時珍曰く、射干、卽ち今の扁竹である。現に一般に栽培するものは多くは紫花のもので、紫蝴蝶と呼んでゐる。その花は三四月に開き、瓣が六出で萱花ほどの大い

さだ。大いさ拇指ほどの房を結び、頗る泡桐子に似てゐる。

その房は一箇が四ッに仕切られ、一仕切りに十餘箇の子がある。子は大いさ胡椒ほどで、色が紫で極めて硬く、咬んでも破れない。七月に始めて枯れる。陶弘景は、射干、鳶尾を同一種だといひ、蘇恭、陳藏器は、花の紫碧色のものが鳶尾、花の紅のものが射干だといひ、韓保昇は、花の黄色のものが射干だといひ、蘇頌は、花の紅、黄のものが射干であつて、白花のものもやはりその類だといひ、朱震亨は、花の紫のものが射干であつて、花の紅なるものは違ふといひ、各〻自說を主張するのでいづれに信據すべきかが問題だが、謹んで按ずるに、張揖の廣雅には『鳶尾は射干なり』とあり、易通卦驗には『冬至に射干生ず』とあり、土宿眞君の本草には『射干、卽ち扁竹である。葉は扁に生えて手の掌を側てたやうな形だ。莖もやはりその通りで青綠色だ。花の紫なる一種と、花の黄なる一種と、花の碧色なる一種とあつて、碧花のものは多く江南、湖廣、川、浙の平陸の地に生ずる。八月に取つた汁は、雄黄を煮、雌黄を伏し、丹砂を制し、能く火を拒む』とある。これに據れば、鳶尾、射干は、ただ花の色が不同なだけで、本來は一類のものだ。恰も牡丹、芍藥、菊花

の類は色がさまざま異つても、いづれも同一種屬であるやうなものである。大抵藥に入れての功力は相遠からぬものだ。

藏器曰く、射干なる名稱のものに三種ある。佛敎經典に射干、貂(三)狨とあるそのものは青黄狗に似た惡獸で、人を食ひ、能く木に攀ぢるものだ。阮公の射干層域に臨むといふ射干は樹木であつて、殊に高大なるものもある。本草にいふ射干は草であつて、現に一般に栽培しつつあるものだ。

根

修治 斅曰く、凡そこの根を採つたならば、先づ米泔水に一夜浸して漉出し、然る後に篁竹葉を用ゐて正午から午後十二時まで煮て、日光で乾して用ゐる。

氣味 【苦し、平にして毒あり】別錄に曰く、微溫なり。久しく服すれば人をして虛せしめる。保昇曰く、微寒なり。權曰く、小毒あり。元素曰く、苦し、陽中の陰である。時珍曰く、寒なり。多く服すれば人をして瀉せしめる。

主治 【欬逆上氣、喉痺咽痛で消息し得ざるものの結氣を散ずる。腹中の邪逆、食、飲の大熱】(本經)【老血が心、脾の間に在つて欬唾し、言語の際に口氣の臭きものを療じ、胸中の熱氣を散ず】(別錄)【苦酒に磨つて毒腫に塗る】(弘景)【疰氣を

(三) 大觀ニ狨ヲ猱ニ作ル。

治し、瘀血を消し、婦人の月經閉止を通ず】（甄權）【痰を消し、癥結で胸膈が滿し、腹脹し、氣喘し、痃癖するを破り、胃を開き、食物を落付け、肝を鎭め、目を明にする】（大明）【肺氣、喉痺を治するに佳しとす】（宗奭）【胃中の癰瘡を去る】（元素）【積痰、疝毒を利し、結核を消す】（震亨）【實火を降し、大腸を利し、瘧母を治す】（時珍）

發明　震亨曰く、射干は金に屬し、木と火とを有する。太陰、厥陰の積痰を行り、結核を自消せしむること甚だ捷なものだ。また便毒を治す。これは足の厥陰の濕氣であつて、疲勞に因つて發るものだ。射干三寸を取り、生薑と共に煎じて食前に服す。二三回便通があつて甚だ效がある。

時珍曰く、射干は能く火を降すものだ。故に古方では喉痺咽痛を治する要藥としてあつて、孫眞人の千金方には、喉痺を治する烏翣膏があり、張仲景の金匱玉函方には、欬して上氣し、喉中に水雞のやうな聲あるを治する射干麻黃湯がある。又、瘧母を治する鼈甲煎丸にも、やはり烏扇を焼いたものを用ゐてある。いづれもこの物の(四)厥陽の相火を降す點を取るのであつて、火が降れば血が散じ、腫が消して痰

(四)金陵本、厥陽ニ

作ル、然レドモ陽ハ陰ノ寫誤ナルコト必セリ。

(五)大腑ハ胃腑ヲ指ス。

結は自から解し、癥瘕は自から除けるわけだ。

附方　晋二、新八。【咽喉の腫痛】射干花の根、山豆根を陰乾し、末にして吹く、神の如き效がある。(袖珍方)　【傷寒の咽閉】腫痛するには、生射干、猪脂各四兩を合煎して焦がし、滓を去つて棗ほどづつを噙つて效を擧げる。(龐安常傷寒論)　【喉痺不通】漿水も入らぬには、外臺祕要では、射干一片を含んでその汁を嚥むがよし。〇醫方大成では、扁竹の新根を擂つて汁を嚥む。(五)大腑が衝動を發して解するものだ。或は醋で研つて汁を噙ひ、涎を引き出すもまた妙である。〇便民方では、紫蝴蝶根一錢、黄芩、生甘草、桔梗各五分を末にし、水で調へて頓服する。立ろに癒える。これを奪命散と名ける。【二便不通】諸藥の效なきには、紫花の扁竹根——水邊に生えたものが佳し——を研つて汁一盞を服す。直ちに通ずる。(普濟)　【水蠱の腹大】動搖すれば水聲が聽え、皮膚の黒さには、鬼扇根の搗汁一盃を服す。水が直ちに下る。(肘後方)　【陰疝で腫れて刺痛するもの】發つたときは刺すやうに腫痛するものだ。生射干の搗汁を與へて服ませ、通じをつける。また丸にして服するもよし。(肘後方)【乳癰腫の初期】扁竹根の殭蠶のやうな形のものを萱草根と共に末にし、蜜で調へて傅

ける。神效がある。(永類方)【射工の中毒】瘡を生じたるには、烏翣、升麻各二兩、水三升を二升に煎じて溫服し、滓を瘡上に傅ける。(姚僧垣集驗方)

(一)鳶尾 (本經下品)

和名　いちはつ
學名　Iris tectorum, Maxim.
科名　あやめ科(鳶尾科)

釋名　烏園(別錄)　根を　**鳶頭**　と名ける。時珍曰く、いづれもその形狀に對して命名したもので、烏園は烏鳶と書くが正しい。

集解　別錄に曰く、烏(二)鳶は(三)九疑の山谷に生ずる。五月に採收する。弘景曰く、方家ではこれは射干の苗だといふが、主たる治療上の效力に異るところがあるのだから、これは別種の植物であるやうに思ふ。方に『鳶頭を用う』とあるは、その根を用ゐるといふことらしい。療禮が似てゐるので、本草には取別けて揭載しなかつたのだ。

恭曰く、この草は所在にあつて、一般民家でも栽培する。葉は射干に似て濶く短く、長い莖は抽き出ない。花は紫碧色だ。根は高良薑に似て、皮が黃で肉が白く、嚼めば咽喉を刺戟する。射干とは全く別物だ。射干は、花が紅く、莖が抽き出て長

(一)牧野云フ、此種我邦ニハ野生ハナイ多分元ト支那カラ渡セシモノナラント思フ。普通人家ニ剪賞用トシテ栽培セラレテ居ル、又往往藁葺屋ノ脊ニ栽エラレルヲ見ル。種名ノ tectorum (屋根ノ義)ハ之レカラ出タモノデアル。

木村(康)曰ク、洋方ニテ用ウル生藥いりす根ハ、むらさきいりす(Iris germanica)しろはないりす(Iris florentina)しぼりいりす(Iris pallida)等ノ根莖ナリ。(生藥學九五)

(二)鳶、大觀ニ園ニ作ル。

(三)九疑、山名。マタ九嶷ニ作ル。水經注ニ『九疑山。羅巖九擧。各導一溪。岫壑負阻。異嶺同勢。遊者疑焉。故曰九疑』トアリ。今ノ湖南省寧遠縣ノ南六十支里ニ在リ。

(四)木村(康)曰ク、いちはつ根莖ハ少量ノ脂肪油ノ他配糖體テクトリヂン約〇・五%ヲ含有ス。テクトリヂンハ加水分解ニヨリ一分子ノ葡萄糖ヽテクトリゲニンヲ生ズ。

く、根は黄にして臼がある。

保昇曰く、草を鳶尾と名ける。根を鳶頭と名け、また鳶根ともいふ。葉は射干に似て地に布いて生え、根は黒く、高良薑に似て節が大きく、數箇相連つてゐる。九月、十月に根を採つて日光で乾す。

時珍曰く、これは射干の苗のことだ。別の一種ではないのであつて、肥えた土地のものは莖が長くて根が粗く、瘠せた土地のものは莖が短くて根が痩せてゐるのだ。その花には自から數色ある。それで學者達がいづれも强ひて區別を試みたのだ。陳延之の小品方に『東海鳶頭といふは由跋のことだ』とあるが、やはり訛だ。東海にこの物が產するからかく呼ぶに過ぎない。

(四)【氣味】【苦し、平にして毒あり】恭曰く、小毒あり。【主治】【蠱毒、邪氣、鬼疰、諸毒。癥瘕、積聚を破り、水を去り、三蟲を下す】(本經)【鬼魅を殺し、頭眩を療ず】(別錄)

【附方】舊一、新一。【飛尸遊蠱】病邪が喉中に附著して呼吸が絶えんとするには、鳶尾根を皮を削り去つて喉中に納れ、患部を摩擦して血を出さすが佳し。(陳藏器

本草拾遺）〔鬼魅の邪氣〕四物鳶頭散——東海鳶頭、黄牙卽ち金牙、莨菪子、防葵を末にし、酒で方寸匕を服す。患者にその病源となつた鬼魅を見せるには、防葵一分を增加し、その鬼魅を確かに認めしむるには、また一分を增加する。立ろに效驗のあるものだが、多く服ませてはならぬ。（陳延之小品方）

(二)玉簪（綱目）

和名 たまのかんざし
學名 Hosta plantaginea, Aschers.
科名 ゆり科（百合科）

〔釋名〕**白鶴仙** 時珍曰く、いづれも花を形容した命名だ。

〔集解〕時珍曰く、玉簪は處處の人家で草花として栽培する。二月苗が生えて叢になり、高さ一尺ばかり、莖は柔かで白菘のやうだ。葉の大いさは掌ほどで、圓くて尖があり、葉の表に車前の葉のやうな青白色の紋があつて頗る嬌瑩なものだ。六七月に莖が抽出て莖上に細葉があり、その中に十數朶の花がある。花は長さ二三寸で、本が小さく末が大きく、まだ開かぬうちはさながら白玉搔頭簪のやうな形で、また羊肚磨菇のやうな姿でもある。開いて微かに綻びると、四出の瓣の中から黄蕊を吐出し、頗る香しい。子は結ばない。その根は連つて生じ、鬼臼、射干、生薑な

柴田文一郎—藥誌、昭、二(五四三)二八〇。朝比奈泰彥、柴田文一郎、小川善次—藥誌、昭、三(五六一)一〇八七。

(二)牧野云フ、本草綱目啓蒙ニ此玉簪ヲたうぎぼうしトスレドモ中ラヌ。コレハたまのかんざしデナケレバナラヌノデアル。我邦デハ之レヲ花草トシテ庭園ニ栽エテ居ルガ野生ハナイ、往時支那カラ渡シタモノデアル。



〔玉簪花〕

どのやうで鬚毛があり、舊莖が枯死すると根に一臼が生じ、新根が生ずると舊根が腐ちる。やはり紫花のものもあつて、それは葉が微し狹い。いづれも鬼臼、射干の屬のものだ。

根【氣味】【甘く辛し、寒にして毒あり】【主治】【搗汁を服すれば、一切の毒を解し、骨硬を下す。癰腫に塗る】（時珍）

【附方】新五。【乳癰の初期】内消花、卽ち玉簪花の根を取り、酒で擂つて服し、渣を傅ける。（海上方）【婦人の避妊】白鶴仙根、白鳳仙子各一錢半、紫葳二錢半、辰砂三錢を搗いて末にし、蜜で梧子大の丸にし、產後三十日以內に酒半盞で服す。牙齒に著けてはならぬ。よく牙齒を損ずるものだ。（摘玄方）【斑蝥の毒を解す】玉簪根を水に擂つて服す。直ちに解す。（趙眞人濟急方）【魚骨哽を下す】玉簪花根、山裏紅果根を共に搗いた自然汁を、竹筒で咽中に灌ぎ込む。その魚骨は自から下る。牙齒に

著けてはならぬ（臞仙乾坤生意）【骨を刮り、牙を取る】玉簪根の乾いたもの一錢、白砒三分、白硇七分、蓬砂二分、威靈仙三分、草烏頭一分半を末にし、少量を疼く部分に點ける。自から落ちる。（余居士選奇方）

葉　［氣味］根に同じ。［主治］【蛇虺の螫傷には、搗汁を酒に和して服し、渣を傅けて中心に孔を殘して氣を洩す】（時珍）

(一)鳳仙（綱目）

和名　ほうせんくわ
學名　Impatiens Balsamina, L.
科名　ほうせんくわ科（鳳仙花科）

［釋名］**急性子**（救荒）　**旱珍珠**（綱目）　**金鳳花**（綱目）　**小桃紅**（救荒）　**夾竹桃**（救荒）　**海蒳**　蒳の音は納（ナフ）である。　**染指甲草**（救荒）　**菊婢**　時珍曰く、その花が頭、翅、尾、足共に具はつて羽敲きしたやうに見え、鳳のやうな形狀だから名けたものだ。婦人はその花、及び葉を採つて指甲を包んで染める。またその實の形狀が小桃のやうで、老いると裂けはじける。それで指甲、急性、小桃などの諸名がある。宋の光宗皇帝の后李氏は諱を鳳といつたので、宮中ではこの花を好女兒花と呼んだ。張宛丘はこれを菊婢と呼び、韋(二)居は羽客と呼んだ。

（一）牧野云フ、ほうせんくわハ元來印度、馬來、支那ノ原產デアルガ、今ハ世界ニ弘ク擴ガツテ花草トナツテ居ル。

（二）居ハ君ノ誤。

集解 時珍曰く、鳳仙は人家で多く栽培し、極めて生え易い草である。二月種を蒔いて五月に植ゑ易へるがよし。苗は高さ二三尺、莖には紅、白の二色あり、太さは指ほどで、中が空で脆い。葉は長くして尖り、桃や柳の葉に似て鋸齒がある。椏の間に、或は黄、或は白、或は紅、或は紫、或は碧、或は雜色などの花を開き、また自からその色が變化する。形狀は飛鳥のやうだ。初夏から秋の終までに咲き盡き、その間新陳代謝して咲きつづける。結實は纍纍として大いさ櫻桃ほどあり、形は微し長く、色は毛桃のやうで、生では青く、熟すれば黄になり、少しでも觸れば自から裂けて、皮が拳のやうに卷き上る。苞中に蘿蔔子に似て小さい褐色の子がある。一般にその肥えた莖を採つて(三)汋浥し、それを萵筍の代用にする。(四)嫩い花は一夜酒に浸せばこれも食物になる。但しこの草は虫蠹の生ぜぬもので、蜂蝶も近づかない。恐らくこれも毒なしとは考へられぬものだ。



〔鳳仙花〕

子(五) 氣味 【微し苦し、溫にして小毒あり】 主治 【難產、積塊、噎膈。

(三) 汋浥ノ義詳ナラズ、醃藏ノコトカ。
(四) 金陵本ニ嫩葉漾浸一宿ニ作ル。
(五) 木村(康)曰ク、成分ハ糖分。文獻ハ藥誌、四、三

四(二三六)一〇三五、D. H. 410; I. M. P. 211. St. 215; F. H. (I) 100; Wil. (2) 86.

骨哽を下し、骨に透り、竅を通ずる】(時珍)

【發明】　時珍曰く、鳳仙子は性が急速だ。故に能く骨に透つて堅さを軟かにする。料理人が魚肉の硬いものを烹る場合、この子數粒をそれに投ずれば軟かに煮爛れるがその驗證だ。骨に透る位だから、よく齒を損ずる。その點は玉簪根と同樣だ。凡そこれを服する場合には齒に著けてはならない。多く用ゐればやはり咽を刺戟する。

【附方】　新五。【難産の場合に分娩を促す】鳳仙子二錢を研末して水で服す。牙に近けてはならぬ。外部には、蓖麻子を年齡の數だけ搗いて足の心に塗る。(集簡方)【噎して食物の落付かぬもの】鳳仙花子を酒に三晝夜浸して晒し乾して末にし、酒で綠豆大の丸にし、八粒づつを溫酒で服す。多く用ゐてはならぬ。即ち急性子のことである。(摘玄方)【咽中の骨哽】死せんとするには、白鳳仙子を水に研り、大きく一口に呷ふほどを竹筒で灌ぎ込む。咽に入ればその物が直ちに軟くなる。牙に觸れてはならぬ。或は末にして吹く。(普濟方)【牙齒を抜く】金鳳花子を研末して砒少量を入れ、疼く牙の根に點けて抜き取る。(摘玄方)【小兒の痞積】急性子、水紅花子、大

黄各一兩をいづれも生で研末し、各味五錢づつを取つて皮消一兩を拌勻し、白鵓鴿一羽——或は白鴨にてもよし——を毛、屎を去つて腹を剖き、水を付けぬやうにして布で拭ひ淨めた中へ裝入して絲で括り、沙鍋に水三碗を入れた中に入れて幾重にも紙で封じ、小火で煮乾してその鴿を取り出し、度度翻して黄色になるまで焙じ、それを冷まして早朝に食ふ。その日の日沒頃には疾が軟かになり、三日經てば大便に下血して病が去る。百日の間冷物を忌む。(孫天仁集效方)

花 〔氣味〕【甘くして滑す、溫にして毒なし】〔主治〕【蛇傷には、酒に擂つて服すれば直ちに解す。又、腰、脇が忍び難く引痛するには、研つて餅にして晒し乾し、末にして空心に酒で三錢づつを服す。血を活し、積を消す】(時珍)

〔附方〕新一。【風濕で臥床するもの】起き得ぬには、金鳳花、栢子仁、朴消、木瓜の煎湯で毎日二三回洗浴し、獨活寄生湯を內服する。(吳旻扶壽精方)

根 葉 〔氣味〕【苦く甘く辛し、小毒あり】〔主治〕【雞、魚の骨哽、誤つて銅、鐵を吞みたるとき、杖刑を受けた打撲で腫痛するもの。血を散じ、經を通じ、堅きを軟かにし、骨に透る】(時珍)

【附方】　新三。【咽喉に物の哽へたもの】金鳳花の根を嚼み爛らして嚥ひ嚥む。骨ならば自ら下る。就中雞骨の場合に效がある。これを嚥んだ時は直ちに温水で口を漱ぎ、齒を損ぜぬやうにせねばならぬ。また誤つて銅、鐵を呑みたるをも治す。（危氏得效方）【打杖の腫痛】鳳仙花の葉を泥のやうに搗いて腫れ破れた患部に塗り、乾けばまた塗る。一夜にして血が散じて癒える。冬季には採收して乾したものを研末し、水で和して塗る。（葉廷器通變要法）【馬の諸病】白鳳仙花を根、葉のまま熬膏し、馬の羅病した場合に、その馬の眼の四角に塗抹する。汗が出て癒える。（衞生易簡方）

（一）坐拏草（宋圖經）

和名　なし
學名　未詳
科名　未詳

【集解】　頌曰く、（二）江西、及び滁州に生ずる。六月紫色の花を開いて實を結ぶ。その苗を採つて藥に入れる。甚だ得易いものだつたが、後世では一般にこれが有效なので、今では頗る貴重視される。時珍曰く、按ずるに、一統志に『吉安、永豐縣に產す』とある。

【氣味】　【辛し、熱にして毒あり】　【主治】　【風痺。筋骨を壯にし、兼ねて打

（一）牧野云フ、坐拏草ハ不明ノ植物デアル。之レヲほうせんくわ科（鳳仙科）ノつりふねさう（Impatiens Textori, Miq.）ニ充ツルハ謂レガナイ。

（二）江西ハ今ノ江西省ノ地ヲ指ス。滁州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。吉安、永豐ノ地名今尙江西省內ニ存ス。

撲傷損を治す』(蘇頌)

〔發明〕 頌曰く、神醫普救方の治風藥中に已に使用された事實がある。

時珍曰く、危氏得效方の麻藥煮酒の方中にこれを用ゐてある。聖濟錄には、膈上の虛熱、咽喉噎塞、小便赤濇、精神困憊の多睡を治する藥に坐拏丸といふのがあつて、それは坐拏草、大黃、赤芍藥、木香、升麻、麥門冬、黃芪、木通、酸棗仁、薏苡仁、枳殼等分を末にして蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを麥門冬湯で服するのである。



〔坐拏草〕

〔附錄〕 (三)押不蘆 時珍曰く、按ずるに、周密の癸辛雜志に『(四)漠北、回回地方に押不蘆といふ草があつて、その地では、その草少量を酒に磨つて飮ませる。すると直ちに全身が痲痺して死亡し、兇器で斬られても知覺がなくなる。しかし、三日經過してから別に少量の藥を投ずると、また直ちに活きるといふ』とある。御藥院中にもやはりこれを貯藏してあつて、貪官汚吏にして罪の甚しい者に服ませる百日丹に皆

(三)牧野云フ、押不蘆ハ不明ノ品デアル。
(四)漠北ハ今ノ外蒙古及ビソノ以北ノ地。回回ハ石部青琅玕ノ註ヲ見ヨ。

これを用ゐてある。昔、華佗は能く腸を刳り、胃を滌つたといふが、これ等の藥を用ゐたものではあるまいか。

(一)曼陀羅花（綱目）

和名　てうせんあさがほ
學名　Datura alba, Nees.
科名　なす科（茄科）

釋名　**風茄兒**（綱目）　**山茄子**　時珍曰く、法華經に『佛陀が說法された時、天が曼陀羅花を雨らせた』とある。また道家では、北斗に陀羅星使者といふがあつて、手に此の花を持つてゐるといふ。それで後世の者が花の名としたものである。曼陀羅なる梵語は雜色の意味だ。茄と呼ぶは葉の狀態の形容だ。姚伯聲の花品には惡客と呼んである。

集解　時珍曰く、曼陀羅は北方の地に生じ、人家でやはり栽培してゐる。春生えて夏成長し、一本の莖が上に伸びて高さ四五尺になる。傍には蔓延しない。莖は綠色、葉は碧色で、その葉は茄の葉のやうだ。八月白色の花を開く。その花はすべて六瓣で、形狀は牽牛花のやうで大きく、花が攢つて花冠が中へ折込み、その褶葉が竝んでそれを外から包むもので、朝開いて夜合する。結實は圓くして(二)丁拐があ

(一)牧野云フ、此種ハ印度邊ノ原產デアルガ、今臺灣ニ野生ノ狀態トナツテ居ル。我邦ヘハ德川時代ニ渡ツタモノデアルガ今日デハ餘リ內地デハ見ナイ。花ハ純白色で形チガ大キイ。果實ハ開クテ不齊ニ開裂シ、其果面ノ刺ハ低ク種子ハ白イ。今日內地ニ能ク見ルモノハ學名D. Tatula, L.和名やうしゆてうせんあさがほト云フモノデアル。今ノ人ハ之レチてうせんあさがほト誤稱シテ居ルガ、之レハ混同シテハ不可デアル。此品ハ其花ガ小サクテ淡紫色デ其果實ハ卵形

り、その中に小さい子がある。八月花を採り、九月實を採る。

花子 (三) [氣味] 【辛し、温にして毒あり】 [主治] 【諸風、及び寒濕脚氣には、煎じた湯で洗ふ。また驚癇、及び脫肛にも主效がある。いづれも麻藥に入れる】(時珍)



〔曼陀羅花〕

[發明] 時珍曰く、この花は、笑はせようとするには、これで釀した酒を飲ませると笑はせる。舞はせようとするには、これで釀した酒を飲ませると舞はせると言ひ傳へてあるが、(四)嘗て予の實驗に依れば、半醉の程度に飲ませて置いて、他の者に或は笑はせ、或は舞はせると、醉つた者がそれに導かれて笑ひ且つ舞ふ。確かに效力が認められた。八月に此の花を採り、七月に火麻子の花を採り、陰乾して等分を末にし、熱酒で三錢を調へて服ませると、少頃して昏醉狀態となる。瘡の切開や灸火を施す場合、豫めこれを服ませて著手すれば苦痛を知覺しないものだ。

チナシ、熟スレバ四裂シ黑キ種子ヲ出シ其果面ノ刺ハ鋭尖デ強イ。之レト同形デ白花ヲ開クモノヲしろばなやうしゆてうせんあさがほト稱スル。學名ハ D. Stramonium. L. デ今日デハ我邦デモ野生ノ狀態トナツテ居ル處ガアル。

(二) 丁拐ハ突起物ヲ指ス。

(三) 木村(康)曰ク、種子ニ數種ノアルカロイドヲ含有ス。其主要ナル者ハスコポラミン、ヒヨスチアミン、アトロピンニシテ、其他脂肪油二〇乃至三〇%ヲ含有ス。其脂肪酸ハ主トシテ油酸及ビアルフアリノール酸ナリ。

種子ハブローム水素酸スコポラミン(局方)ノ製造原料トス、其他多量ノ脂肪油ヲ副産物トシテ得ラル。長田捷二—藥誌、大、一三(五〇四)八九。同、二四(一一二)五〇九。大、一(三六七)九二一、七(四三五)三四九。H. Dieterle: Arch. Pharm. 1926(264) 140; W. P. 690.

附方　新三。【顔面に生じた瘡】曼陀羅花を晒し乾して研末し、少量を貼る。(衛生易簡方)【小兒の慢驚】曼陀羅花を七朶、その重さ一字、天麻二錢半、全蠍を炒つて十箇、天南星を炮き、丹砂、乳香と各二錢半を末にし、半錢づつを薄荷湯で調へて服す。(御藥院方)【大腸脱肛】曼陀羅子を(五)連殼のまま一對、橡斗十六箇を共に剉み、水で煎じて三五沸し、朴消少量を入れて洗ふ。(儒門事親)

(一)羊躑躅(本經下品)

和名　たうれんげつつじ(新稱)
學名　Rhododendron molle G. Don.
科名　しやくなげ科(石南科)

釋名　**黃躑躅**(綱目)　**黃杜鵑**(蒙筌)　**羊不食草**(拾遺)　**鬧羊花**(綱目)　**驚羊花**(綱目)　**老虎花**(綱目)　**玉枝**(別錄)　弘景曰く、羊がその葉を食へば(二)躑躅して死ぬところから名けたものだ。鬧とあるは惱と書くべきで、惱亂の意味である。

集解　別錄に曰く、羊躑躅は(三)太行山の川谷、及び淮南の山に生ずる。三月花を採つて陰乾する。弘景曰く、近道の諸山にいづれもある。花は黃色で鹿葱に似てゐる。眼に近づけてはならない。

(四)金陵本、嘗ヲ常ニ作ル、然レドモ嘗ノ誤ナラン。

(五)連殼、本書ニ蓮殼ニ作ル。

(一)牧野云フ、羊躑躅ハ我邦ノれんげつつじノ中ノきれんげつつじニ酷似シタ品デアルガ、固ヨリ別種デ我邦ニハ産セヌ。其レ故之レヲ我邦ノきれんげつつじニ充テテハ不可デアル。

(二)躑躅、トドマリテ足ニテ地ヲツツコト。又行キツモドリツスルコト。

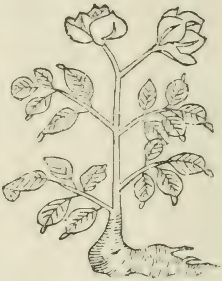
(三)太行山ハ石部鹵石類石硫黄ノ註ヲ見ヨ。

(四)大觀ニ旋ノ次ニ蕾ノ字アリ。

恭曰く、花は一向に鹿葱には似てゐない。正に(四)旋花に似て色の黄なるものだ。

保昇曰く、小さい樹になる。高さ二尺ばかり、葉は桃葉に、花は黄色で瓜花に似てゐる。三月、四月に花を採つて日光で乾す。

頌曰く、所在にあつて、春苗が生える。苗は鹿葱に、葉は紅花に似て、莖の高さは三四尺のものだ。夏花を開き、その花は凌霄花、山石榴などに似て正黄色だ。羊がこれを食へば死ぬ。今は嶺南、蜀道の山谷に到る處に生えてゐて、一帶に深紅色に見え、さながら錦繡のやうだ。或はこの種類は藥には入れないともいふ。



〔羊躑躅—鬧羊花—〕

時珍曰く、韓保昇の說に桃葉に似たものとあるが最も的確だ。花は五出、蕊、瓣は皆黄色で、氣、味いづれも惡い。蘇頌の所謂る深紅色のものとは山石榴のことで、紅躑躅と名くるものだ。これは毒はない。此にいふ羊躑躅とは別類の植物だ。張揖の廣雅に『躑躅、一名決光』とあるは誤で、決光とは決明をいふのである。按ずる

に、唐の李紳の文集に『(五)駱谷に山枇杷といふが多く、毒があつてよく人を殺す。その花は明るいあでやかなもので、杜鵑花によく似たものだ。樵夫などがよくその植物を識つてゐる』とあつて、その說は羊躑躅のことらしいが判然しない。要するにやはりその類のものに相違なからう。

花 (六)【氣味】【辛し、溫にして大毒あり】權曰く、諸種の石、及び麪を惡む。湯(七)使には入れない。丹砂、硇砂、雌黃を伏し、梔子を畏る。【主治】【賊風が皮膚の中に在つて淫淫として痛むもの、溫瘧、惡毒、諸痺】(本經)【邪氣、鬼疰、蠱毒】(別錄)

【發明】頌曰く、古代の大方に多く躑躅を用ゐてあつて、胡洽の時行を治する赤散、及び五嗽を治する四滿丸の類の如き、幷に風を治する諸酒の方にいづれもこれを雜へて用ゐ、また百病風濕等を治する魯王酒中にもやはり躑躅花を用ゐてある。今の醫方では捋脚湯中に多くこれを用ゐる。南方地方に蠱毒下血を治する躑躅花散といふがあつて、甚だ效力の勝れたものだといふ。

時珍曰く、この物には大毒がある。曾てある人が、その根を酒に入れて飲んで遂に死亡した。和劑局方の中風癱瘓を治する伏虎丹中にもこれを用ゐてあるが、多く

(五)駱谷ハ今ノ陝西省盩厔縣ノ西南ニ在リ。

(六)木村(康)曰ク、成分ハ未ダ研究セラレザルモ、歐洲產同屬植物中有毒成分トシテ、アンドロメドトキシンヲ含有スルモノ多數アリ。本種ノ有毒成分モ亦同物質ナランカ、劇毒アル故注意ヲ要ス。

(七)大觀ニ使ヲ服ニ作ル。

（八）牧野云フ、山躑躅ハ山地ニ野生セル種種ノつつじ類ヲ汎稱シタモノデ、必ズシモ一種ノモノニ限定シタモノデナイ事

服してはならないものだ。

【附方】新四。【風痰の注痛】躑躅花、天南星をいづれも生の時に共に搗いて餅にし、四五遍蒸して稀い葛布の嚢に盛り、必要に應じてそれを焙じて末にし、蒸餅で梧子大の丸にし、三丸づつを溫酒で服す。腰脚の骨痛には空心に服し、手臂の痛むには食後に服するが大いに良し（續傳信方）【痛風の走注】黃躑躅根一把、糯米一盞、黑豆半盞、酒、水各一盌を徐徐に服す。大いに吐し、大いに泄し、一服で直ちに效力が發生する。（醫學集成）【風濕の痺痛】手、足、身體の牧攝が意の如くならず、肢節が疼痛し、言語が蹇澁するには、躑躅花に酒を拌ぜて一炊き蒸し、それを久しく晒し乾して末にし、五分づつを、牛乳一合、酒二合で調へて服す。（聖惠方）【風蟲の牙痛】躑躅一錢、草烏頭二錢半を末にし、化した臘で豆大の丸にし、一丸を綿で包んで咬み、涎を追ふ。（海上仙方）

【附錄】（八）**山躑躅** 時珍曰く、處處の山谷にある。高さは四五尺、低さは一二尺。春苗が生え、葉は淺綠色で、枝が少く、花が多く、一本の枝に數箇の蕚が著き、二月に始めて花を開く。その花は羊躑躅のやうで蔕は石榴花のやうだ。紅のもの、紫

のものがあり、瓣の五出のもの、千葉のものがある。小兒はこの花を食ふが、味酸くして毒がない。一名紅躑躅、一名山石榴、一名映山紅、一名杜鵑花といふ。その黄色のものは卽ち有毒の羊躑躅だ。

（九）**羊不喫草**（拾遺）藏器曰く、蜀川の山谷に生ずる。葉は細く長い。諸種の草の中で羊が喫はぬものである。味は苦く辛し、溫にして毒なし。一切の風、血の補益、諸病を攻むるに主效がある。煮て用ゐ、また酒に浸しても服す。時珍曰く、この草は羊躑躅に似て毒がないといふのだから、蓋し別にかかる草があるのだらう。

（一）芫　花（本經下品）

和名　ちやうじざくら
學名　Daphne Genkwa, Sieb. et Zucc.
科名　ぢんちやうげ科（瑞香科）

校正　木部より此に移し入る。

釋名　**杜芫**（別錄）**赤芫**（吳普）**去水**（本經）**毒魚**（別錄）**頭痛花**（綱目）**兒草**（吳普）**敗華**（吳普）根を**黃大戟**と名ける。（吳普）**蜀桑**（別錄）時珍曰く、芫の字は或は杬と書く、意味は詳でない。去水とはその功力を言ひ表したもの、毒

ハ其行文デ能ク解カル。支那ノ品ト我邦ノ品ト必ズシモ同種デナイカラ、我邦山生ノつつじ類ヲ以テ早急ニ支那ノ品ヲ呼ブ事ハ出來ヌ。支那品ノ中ニハ Rh. indicum, Sweet. ナドモアルデアラウト思フ。

（九）牧野云フ、羊不喫草ハ何ノ草カ不明デアル。

（一）牧野云フ、芫花ニハちやうじざくら、ふぢもどき、さつまふぢ、げんじさうノ和名ガアツテ、我邦デハ觀賞ノ爲メ栽エテ居ルガ、固ヨリ野生ハナク、往時支那カラ渡シタモノデアル。

魚とはその性を言ひ表したもの、大戟とはその似てゐる點を言つたものだ。俗間では、その臭氣の惡いところから、頭痛草と呼んでゐる。山海經に『(二)首山、その草芫多し』とあるはこの草だ。

［集解］別錄に曰く、芫花は(三)淮源の川谷に生ずる。三月三日に花を採つて陰乾する。普曰く、芫根は(四)邯鄲に生ずる。二月葉が生えて青色だが、その色が厚く加はると黑くなる。花には紫、赤、白色のものがある。三月(五)實が落ち盡きると葉が生える。三月花を採り、五月葉を採り。八月、九月に根を採つて陰乾する。



〔芫花〕

保昇曰く、近道處處にある。苗は高さ二三尺、葉は白前、及び柳葉に、根は皮が黃で桑根に似てゐる。正月、二月に發く紫碧色の花を、まだ葉の生えぬうちに採收して日光で乾す。葉が生えては花が落ちて用ゐるに堪へなくなる。

頌曰く、處によるとあるもので、舊根、舊枝が存續する。莖は紫で長さ一二尺、

(二) 首山、山海經、中山經中次五經ニ『東三百里。曰首山。其陰多穀柞、草多荒芫』トアリ。畢沅ノ考證ニハ疑ラクハ水經注ニ『黃帝採首山之銅。鑄鼎于荊山之下。荊山在馮翊、首山在蒲坂』トアルソノ山、即チ今ノ山西省蒲州ノ首山ヲ指スナラントイフ。或ハ今ノ河南襄城縣ノ南ニ在リトモイフ。

(三) 淮源ハ淮河ノ源ノ地、即チ今ノ河南省桐柏山ノ附近ヲイフナルベシ。

(四) 邯鄲ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。

(五) 本草蒙筌ニ、實ハ當サニ花ニ作ルベシトアリ。

根は土に深さ三五寸ほど入り、白色で楡の根に似てゐる。春苗が生え、葉は小さくして尖り、楊柳の枝葉に似てゐる。二月紫色の花を開き、頗る紫荊に似て穗になる。また藤花にも似て細い。現に(六)絳州に產するものは花が黄だ。これを黄芫花といふ。

時珍曰く、顧野王の玉篇に『杬木は(七)豫章に產する。煎じた汁で果や卵を貯藏すれば腐敗せぬ』とある。洪邁の容齋隨筆には『今は(八)饒州の處處にある。莖、幹は純然たる木ではない。奸佞な賤人は、爭鬪した場合、その葉を取つて皮膚に挼み擦り、負傷したやうに赤腫させて相手の者を誣ひ陷れる。鹽を和して卵に擦ると、その外部が赭色のやうに染まる』とある。

修治　弘景曰く、これを用ゐるには微し熬るべきものだ。眼に近けてはならぬ。

時珍曰く、芫花は數年間貯藏した陳いものが良し。使用の際、好き醋で煮て十數沸し、醋を去つて一夜水に浸し、晒し乾して用うれば毒が(九)滅する。或は醋で炒つて用ゐても效力はそれに次ぐものだ。

(六)絳州ハ石部鹵石類玄精石ノ註ヲ見ヨ。
(七)豫章ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。
(八)饒州ハ土部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。
(九)本草彙言ニハ滅ヲ減ニ作ル。

(一〇)木村(康)曰ク、せいようおにしばり(D. Mezereum L.)ハメゼレイン酸ノ無水物ヨリナル樹脂ト、ダフニント云フ結晶性配糖體ヲ含有ス。せいようおにしばりノ樹皮ハ白瑞香皮トイヒ、刺撃性發泡劑トシテ其越幾斯或ハ製劑ヲリウマチス等ニ外用ス。

(一一)本經、蟲ヲ蠱ニ作ル。

(一〇)【氣味】根も同じ。「辛し、溫にして小毒あり」別錄に曰く、苦し、微溫なり。普曰く、神農、黃帝、雷公は苦し、毒ありといひ、扁鵲、岐伯は苦しといひ、李當之は大毒あり、多く服すれば人をして洩せしめるといふ。之才曰く、決明が使となる。甘草と反す。

【主治】【欬逆上氣で喉が鳴喘し、咽が腫れ、呼吸の短きもの。(一一)蟲毒、鬼瘧、疝瘕、癰腫。蟲、魚を殺す】(本經)【胸中の痰水で好んで唾するもの、水腫で五水が五臟、皮膚に在るもの、及び腰痛を消し、寒毒、肉毒を下す。根は疥瘡を治す。魚を毒するに使用する】(別錄)【心腹脹滿を治し、水氣、寒痰、涕唾の膠の如くなるを去り、血脈を通利し、惡瘡、風痺濕、一切の毒風で四肢攣急し、歩行不能なるを治す】(甄權)【欬嗽、瘴瘧を療ず】(大明)【水飲痰澼の脇下痛を治す】(時珍)

【發明】時珍曰く、張仲景は、傷寒の太陽の證で表が解せす、心下に水氣があり、乾嘔し、發熱して欬し、或は喘し、或は利するを治するに小靑龍湯を主とし、表が已に解し、ともすれば頭痛し、發汗し、惡寒し、心下に水氣があり、乾嘔し、痛が兩脇に引き、或は喘し、或は欬する場合には十棗湯を主とした。蓋し小靑龍

は、未發散の表邪を治して、水氣を毛竅から出さしめるものであつて、乃ち內經に所謂『鬼門を開く』の法である。十棗湯は、裏邪を驅逐し、水氣を大、小便から洩らさしめるものであつて、乃ち內經に所謂『府を潔淨し、(一二)陳莝を去る』の法である。そもそも飮なる病には五種ある。いづれも水漿を內に啜り、濕氣を外に受けるが原因をなすもので、それが鬱蓄して留飮となり、(一三)脾に流入しては支飮となり、喘欬し、寒熱し、吐沫し、背寒するの症狀を起さしめる。(一四)肺に流入しては懸飮となり、欬唾を起し、痛を(一五)缺盆、兩脚に及ばしめる。心下に流入しては(一六)伏飮となり、胸滿し、嘔吐し、寒熱し、眩運せしめる。腸、胃に流入しては痰飮となり、腸鳴し、吐水し、胸脇支滿し、或は泄瀉を起し、忽ち肥え、忽ち瘦せしめる。經絡に流入しては溢飮となり、沈重、注痛し、或は水氣胕腫を起さしめるものである。芫花、大戟、甘遂は、その性水を逐ひ、濕を洩し、能く直ちに水飮の貯溜し停滯せる部分に到達するものだから、ただ徐徐に用ゐて效を取るべきものである。甚だ力が捷かなものだから、一定量の劑を過してはならない。過量に用ゐれば人體の眞元を洩するものだ。陳言の三因方には、十棗湯に用ゐる藥を末にし、棗肉で和して丸

(一二)莝ハ字書ニ斫藁トアリ、陳莝ハ古キ汚物ヲ云フナラン。
(一三)本草綱玄ニ脾ヲ肺ニ作ル。
(一四)本草發揮ニ肺ヲ脾ニ作ル。
(一五)缺盆ハ鎖骨ノ上邊ニアル穴。
(一六)伏飮ハ留飮デ腰ガ疼痛スルモノ。

にし、水氣の喘急、浮腫の證を治すとあるが、これは善く應用の妙を得たものだ。楊士瀛の直指方には『癖を破るに芫花を用ゐたときは、水を行つて後に胃の力を養ふがよし』とある。好古は『水は肺、腎、脾三經の主る所のもので、五臟、六腑、十二經それぞれの領域があり、上にしては頭、中にしては四肢、下にしては腰脚、外部では皮毛、中間では肌肉、内部では筋骨であつて、それが脈に現はれては尺、寸の相異があり、浮、沈の區別がある。輕輕に瀉してはならない。病が何の經、何の臟に在るかを正確に認めた上で、然る後に始めて用うべきものである。若し誤つてこれを投ずれば深大な害を生ずる』といつてある。芫花と甘草とは相反するものだが、胡洽居士の痰癖、飲癖を治する方には、甘遂、大戟、芫花、大黄、甘草を共に用ゐてある。蓋し患者をして、大いに吐して濕を泄さしめるが目的であつて、相反に因つて相激する關係の應用である。

【正誤】愼微曰く、三國志に『魏の初平年間、青牛先生といふがあつて常に芫花を服し、年齡百餘歲に達し相變らず五六十歲位の人のやうであつた』とある。時珍曰く、芫花なるものは下品の毒物である。久しく服するに堪ふべき道理はな

（一七）一虎口ハ一握ナ云フ。
（一八）大觀ニハ裹ノ處ニ、纂就芫花根ノ五字アリ。

い。この話柄は仙術家などの無稽の妄言だ。信ずるに足らない。

【附方】舊五、新十九。【卒かに起つた欬嗽】芫花一升、水三升の煮汁で棗十四箇を煮てその汁を煮乾し、日毎に五箇づつを食へば必ず癒える。（肘後方）【痰のある卒嗽】芫花一兩を炒り、水一升で煮て四沸して滓を去り、白糖半斤を入れ、毎服棗ほどの量を服す。酸、鹹のものを食てはならぬ。（張文仲備急方）【喘嗽失音】暴に寒冷に傷んで喘嗽し、失音したるには、芫花を根を連ねて（一七）一虎口を切つて暴乾し、患者自身にそれを（一八）裹んで舂かせ、飛揚する灰を患者の七孔中に入らせる。眼から冷いものが出て、口、鼻すべて辣くなるものだ。芫花の根全部が飛び盡くるを待つて止める。病はそれで癒える。（古今錄驗）【乾嘔脇痛】傷寒で、ともすると頭痛し、心下痞滿し、痛が兩脇に引き、乾嘔し、呼吸短く、汗が出て惡寒せぬは、表は解しても裏がまだ調和せぬのである。十棗湯を主とする。芫花を熬り、甘遂、大戟と各等分を散にし、大棗十箇、水一升半を八合に煮取つて滓を去つた中に、體力の強い患者は一錢を、弱い患者は半錢を入れて早朝に服す。下利して病は除けるものだ。若し除けぬときは翌朝更に服す。（仲景傷寒論）【水腫支飲】及び澼飲には、十棗湯に大黃、甘

（一九）大觀ニ厥ナ冷ニ作ル。

草を加へた五物各一兩、大棗十箇を共に煮て法則に從つて服す。ある方では、芒消一兩を加へる。（醫治百病方）【天行煩亂】凝雪湯——天行毒病で七八日間積熱し、胸中煩亂して死せんとするを治す。芫花一斤、水三升を一升半に煮取り、古布をそれに漬けて胸上に薄る。兩三回以内でよし、薄つて熱するときは取除き、四肢を温めて（一九）厥逆を起さぬやうの手當を講ずる。（千金方）【久瘧の結癖】腹、脇に在つて堅く痛むには、芫花を炒つて二兩、硃砂五錢を末にし、蜜で梧子大の丸にし、十丸づつを棗湯で服す。（直指）【水蠱の脹滿】芫花、枳殼等分を用ゐ、先づ醋で芫花を煮て爛れたとき枳殼を入れて煮爛し、搗いて梧子大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。（普濟方）【酒疸で尿の黄なるもの】發黄し、心が懊痛し、足脛が滿するには、芫花、椒目等分を燒いて末にし、一日二回、水で半錢を服す。（肘後）【背腿間痛】ある一點が忍び難く痛むには、芫花根末を米醋で調へて傅ける。藥がその部分に留まらぬときは帛で縛る。婦人産後に起るこの種の痛に就中宜し。（袖珍）【諸般の氣痛】芫花を醋で煮て半兩、玄胡索を炒つて一兩半を末にし、毎服一錢を、男子の元臟の痛むには葱酒で服し、瘧疾には烏梅湯で服し、婦人の血氣痛には當歸酒で服し、諸氣痛には香附湯

で服し、小腸の氣痛には茴香湯で服す。(仁存)【鬼胎、癥瘕】月經不通なるには、芫花根三兩を剉んで黃色に炒つて末にし、一錢づつを桃仁の煎湯で調へて服す。惡物を利下して癒える。(聖惠方)【分娩を催し、胎を去る】芫花根を皮を剝いで綿に裹み、麝香を黏けて陰部に三寸まで套入する。直に下る。(攝生妙用方)【產後の惡物】下らぬには、芫花、當歸等分を炒つて末にし、一錢を調へて服す。(保命集)【心痛で蟲あるもの】芫花一兩を醋で炒り、雄黃一錢と末にし、一字づつを溫醋湯で服す。(乾坤生意)【忍び難き牙痛】諸藥の效なきには、芫花末を擦つて熱せしめる。病が鎮まれば溫水で漱ぐ。(永類方)【白禿頭瘡】芫花末を猪脂に和して傅ける。(集效方)【癰腫の初期】芫花末を膠で和して塗る。(千金)【癰癤の已に潰れたるもの】芫花根皮を磨り、撚にして挿入する。瘡口が生合せず、膿を盡し易くする。(集簡方)【痔瘡乳核】芫花一握を洗淨して木臼で搗き爛らし、水少量を入れて汁を石器中に絞取り、熳火で煎じて膏にし、絲をその膏の中に通し、その絲で微痛する程度に痔を縛つて置き、痔が乾き落るを待つて紙撚に膏を蘸けて竅の內部に納れる。根を去つて永く病を除く。ある方では、ただ搗汁に絲を一夜浸して用ゐる。水を使用してはならぬ。(經驗)【瘰癧

の初期】氣壯なる患者には、芫根を水に擂つて一盞を服す。大いに吐、利して平復する。黄州の陳太用の所傳である。（瀕湖集簡方）【便毒の初期】芫根を水に擂つて服し、渣を傅ける。通じがついて消く。黄州の熊珍の所傳である。（瀕湖集簡方）【贅瘤の焦法】甘草の煎膏を筆で瘤の四圍に三回つけてから、芫花、大戟、甘遂等分を末にし醋で調へて別の筆でその中央部につける。甘草と近けてはならぬ。それで翌日は縮小するものだ。また甘草膏を以て小暈を畫く事三回して、前記の如く此の藥をつければ自然に焦け縮む。（危氏得效方）【一切の菌毒】蛇、虫の毒氣が熏蒸して菌毒となりたるには、芫花を生で研つて新汲水で一錢を服し、通じのつくを度とする。（危氏得效方）

（二）蕘花 蕘の音は饒（ゼウ）である。 （本經下品）

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】時珍曰く、蕘は饒（ゆたか）である。その花が繁饒なるをいふ。

【集解】別錄に曰く、蕘花は（三）咸陽の川谷、及び河南の（三）中牟に生ずる。六月

（一）牧野云フ、先輩ちんちやうげ科（瑞香科）ノWikstroemia屬ナルきこがんぴ竝ニこがんぴヲ此處ノ蕘花ニ充テ居レドモ、私ハ之レニ從フ根據

ヲ見出スコトガ出來ヌノデ今姑ク之レニ從ヒ兼ネル。ソシテ其本植物ハ何ンデアルカ私ニハ今之レヲ取リ極メル丈ケノ知識ガナイ。ヘンリー氏ハ之レヲこがんぴ卽チ W. Gampi, Maxim ニ充テ居レドモ頗ル怪シイモノデアル。コレハ多分日本人ノ從來ノ說ヲ取リ入レタモノデハナイカト想ハルル。

(二) 咸陽ハ芳草類積雪草ノ註ヲ見ヨ。

(三) 中牟ハ石部附錄諸石紫石華ノ註ヲ見ヨ。

(四) 河上トハ黃河上流地方、卽チ今ノ陝西地方ヲイフカ。

(五) 雍州ハ石部金牙石ノ註ヲ見ヨ。

(六) 京洛ハ河南省ノ北部開封、洛陽ノ一

花を採つて陰乾する。弘景曰く、中牟のものが時によると(四)河上から來ることがある。形狀は芫花に似て極めて細い白色のものだ。

恭曰く、苗は胡荽に似て莖に刺がなく、花は細くして黃色だ。四月、五月に採收する。芫花とは全然似てゐない。

保昇曰く、所在にあるが、(五)雍州の產を好しとする。岡原上に生え、高さ二尺ばかりのものだ。

宗奭曰く、今は(六)京洛地方に甚だ多い。

時珍曰く、按ずるに、蘇頌の圖經に『(七)絳州に產する芫花は黃色だ。これを黃芫花といふ』とあり、その圖を見ると、小株で花が簇生してゐる。恐らくこの蕘花のことだらう。生の時は黃色だが乾けば白くなる。故に陶氏は『細く白し』といつたのだ。或は、蕘花のないときは桃花を以て代用するといふが、それは利する效力を取るのである。

【氣味】【苦し、寒にして毒あり】別錄に曰く、辛し、微寒にして毒あり。

【主治】【傷寒、溫瘧。十二種の水を下し、積聚の大堅癥瘕を破り、(八)胸中に留癖す

帶チイフ。

（七）絳州ハ石部鹵石類玄精石ノ註ヲ見ヨ。

（八）金陵本ニ胸ヲ腸ニ作ル。大觀ニハ腸胃ニ作ル。

（一）牧野云フ、醉魚草ハ集解ノ文ヲ味ハヘバ、何カふぢうつ

る飮食物、寒熱邪氣を蕩滌し、水道を利す】（本經）【痰飮、欬嗽を療ず】（別錄）【欬逆上氣、喉中腫滿、疰氣、蠱毒、痃癖、氣塊を治す】（甄權）



〔蕘花〕—黃芫花—

【發明】宗奭曰く、張仲景傷寒論に、蕘花を以て利を治するは、その水を行る點を取る。水が去れば利は止むとある。かやうな意味で、實際使用上には確實なる斟酌を要し、使用に過不及があつてはならない。適應する病證を確認して始めて用ふべきものである。

好古曰く、仲景の小靑龍湯の說明に『若し微し利するならば、麻黃を去つて蕘花を加へる。雞子ほどの量を赤色に熬つて用ゐる』とある。蓋し水を利するのだ。

時珍曰く、蕘花なるものは、やはり芫花の類のものだ。氣味、主治も大略相近い。

（一）醉魚草（綱目）

和名　なし

學名　Buddleia sp.

科名　まちん科（馬錢科）

ぎ屬(Buddleia)ノ一種デアル事ハ疑ハナイガ、今茲ニ其種名ガ判然セヌ。或ハB. Lindleyana, Fortune. たうふぢうつぎノヤウナ品ヲ謂ツタノデハナイカトモ思フ。先輩之レヲ我邦ノふぢうつぎ(B. japonica, Hemsl.)ニ充テシハ中ラズト雖ドモ遠カラズデアツタ。

(二)熊耳山、即チ熊耳獲輿山ナリ。陝西省境ニ近ク河南省盧氏縣ノ南ニ在リ。

(三)齁ハゼンソクノ

釋名　鬧魚花(綱目)　魚尾草(綱目)　樚木

集解　時珍曰く、醉魚草は南方の處處にある。多く塹岸の附近にあつて小株になつて生えるもので、高さは三四尺、根の形狀は枸杞のやう、莖は黃荊に似て微な稜があり、外部に薄い黃皮があり、枝は繁衍し易く、葉は水楊に似て節に對して生え、冬を經て凋まない。七八月に花を開く。その花は紅紫色で穗になり、さながら芫花と一様だ。細かい子を結ぶ。漁夫はその花、及び葉を採つて魚を毒するが、魚類は圉圉として死んで了ふ。それで醉魚兒草と呼ぶ。池沼の附近には種ゑられぬものだ。この花は、色彩、形狀、氣味いづれも芫花のやうで、魚を毒する點もやはり同様だが、ただ開花期が同じくないだけの相異である。按ずるに、中山經に『(二)熊耳山、草あり、その狀蘇の如くにして赤華なり。名けて葶薴といふ。以て魚を毒すべし』とあるが、それはこの草の類かも知れぬ。



〔醉魚草〕

花 葉　氣味　【辛く苦し、溫にして小毒あり】　主治　【痰飲で(三)齁をな

し、寒に遇へば發るには、花を取つて研末し、米粉に和して(四)粿(くわ)にし、炙熟して食へば效がある。又、誤つて石斑魚子を食つて中毒し、吐いて止まぬものを治し、また諸魚の骨鯁には、搗汁を冷水少量に和して嚥めば吐して止む。骨が溶けるのである。久瘧から起つた癖には、花を鯽魚(しよくぎよ)の腹中に塡充して濕紙で裹み、煨熟して空心に食ひ、花を海粉に和して搗いて貼れば消する」(時珍)

(一)莽草（本經下品）

和名　なし
學名　未詳
科名　未詳

【校正】木部より此に移し入る。

【釋名】**䓾草** 䓾の音は罔(マウ)である。**芒草**(山海經)　**鼠莽**　弘景曰く、莽はもと䓾の字を書いた。俗に訛つて呼んだのである。時珍曰く、この物は有毒で、食へば迷罔(めいまう)を起す。故に名けたものだ。山間の住民は鼠を毒殺するに用ゐ、鼠莽(そまう)と呼ぶ。

【正誤】別錄に曰く、一名は葞、一名は春草。

如ク鼻ガ鳴ル病。
(四)粿ハ米食ヲ云フ、團子ノ如キモノカ。

(一)牧野云フ、先輩之レヲもくれん科(木蘭科)ノしきみ(Illicium religiosum, Sieb. et Zucc.)ニ充テ居レドモ、中ツテ居ナク又科屬モ判然セヌ。
白井曰ク、莽草ヲしきみニ充ツルノ説ハ中ツテ居ラヌデアラウ。併シ此説ハ本草和名ヤ和名抄ニ出テ居ルデ古説アツテ、唐土傳來ノ説カモ知レヌト思フ。其葉ニ

禹錫曰く、按ずるに、爾雅に『葞は春草なり』とあつて、孫炎の注には『藥草なり、俗に呼んで莽草(まうさう)となす』といひ、郭璞の注には『一名芒草(ばうさう)』といひ、見るところが異つてゐる。

時珍曰く、葞は尾(ビ)と發音する。白薇のことだ。薇と葞とは字の發音が近いのである。別錄には、白薇の條下に『一名春草』とあつて、此にまたこれを莽草としてあるが、蓋し孫炎の誤注を踏襲(たふしふ)したものだ。今これを正して置く。

集解 別錄に曰く、莽草は(二)上谷の山谷、及び宛句(ゑんこう)に生ずる。五月葉を採つて陰乾する。弘景曰く、今は東方地方の處處にいづれもある。葉が靑くして辛烈なものが良し。(三)又、搗いて陳粟米粉に和して水に納れると、魚がそれを呑んで死ぬ。その浮出たものを人間が取つて食つても害にならぬ。

頌曰く、今は(四)南中の州郡、及び蜀川にいづれもある。木は石南(しやくなん)のやうで葉が稀で花實がない。五月、七月に葉を採つて陰乾する。一説に『藤生で、木石の間に繞(めぐ)りつくものだ』といふが、旣に草といふ以上、藤生が正しい。

宗奭曰く、莽草は、諸學者は皆これを草といふが、本草には木部に置き、現に世

臭氣アルコトヤ魚ヲ毒スルニ用ウルコトヤ北醫治效用ノ一致スルコトハ考察ヲ要スル事デアル。
木村(康)曰ク、しきみノ果實ハ有毒ニシテ、支那產大茴香ニ代用ス可カラズ、サフロールヲ含ム、揮發油約一%ト有毒成分シキミンヲ有ス。
Eykman: Fresenius' Zeit. für Analit. Chem. 1882 (21) 152; 1888 (27) 128; P. J. 1880 (Ⅲ, 11) 1046; 1885 (Ⅲ. 16) 623; W. P. 214; C. N. J. 1922 (36) 303; J. A. M. A. 1919 (74) 1651; D. H. 213; C. r. A. S. 1908 (145) 183; P. J. S. 1916 (11. B.); Ch. Phys. J. 1927 (1) Nos. 1 and 2.

(二)上谷ハ山草類白鮮ノ註ヲ見ヨ。
(三)大觀ニ又ヲ人ニ作ル。
(四)南中ハ福建以南兩廣地方ヲ指ス。
(五)孿生ハ雙生、卽チ葉ガ二ツニ裂ケテ居ルコトヲ云フナラン。
(六)三輔ハ山草類知母ノ註ヲ見ヨ。

間で用ゐてゐるものも皆木であつて、葉は石南の葉のやうだ。枝梗は乾けば謅（ちぢ）む。採めば臭氣が椒のやうだ。

斅曰く、すべて葉を用ゐる。尖、及び(五)孿生のものを用ゐてはならない。


〔莽草〕

時珍曰く、范子計然に『莽草は(六)三輔（さんぽ）に產する、青色のものが善し』とある。

葉 修治　斅曰く、凡そこれを使用するには、葉を取つて細かに剉み、生甘草、水蓼二味と共に盛つて生稀絹の袋に入れ、甑の中で一日蒸して蓑（さき）の二味を取去り、煞乾（さつかん）して用ゐる。

氣味　【辛し、溫にして毒あり】普曰く、神農は辛しといひ、雷公、桐君は苦し、毒ありといふ。時珍曰く、莽草は、雌黃、雄黃を制するもので、有毒だ。誤つて食へば人體を害（そこな）ふ。ただ紫河車を水に磨つて服し、また黑豆の煮汁を服すれば解し得る。豆汁をこの草の根に澆（そそ）げば爛れるものだ。性が相制するのである。

主治　【風頭、癰腫、乳癰、疝瘕。結氣、疥瘙を除き、蟲、魚を殺す】（本經）

【喉痺不通、乳難を療ず。頭風の癢きには、これで沐するがよし。眼に入れてはならぬ】(別錄)【風疽疝氣、腫墜凝血を治し、瘰癧を治し、濕風を除く。湯に入れては服せぬ。頭瘡白禿に主效があり、蟲を殺す。白斂、赤小豆と共に末にし、雞子白で糊のやうに調へて毒腫を搨し、乾けば更に易へる】(甄權)【皮膚の麻痺を治す。濃く煎じた湯で風蟲牙痛を淋ぐ】(大明)

發明　頌曰く、古方の風毒(七)痺厥を治する諸酒にいづれも莽草を用ゐてある。現に醫家が、葉の煎湯を熱含して少頃して吐き、牙齒の風蟲、及び喉痺を治療するが、甚だ有效だ。

宗奭曰く、濃煎湯で皮膚の麻痺を淋渫する。周禮に『翦氏は(八)蠹物を除くことを掌る。莽草を以て熏ずれば死す』とある。

時珍曰く、古方に、小兒の傷寒を治する莽草湯といふがある。又、瑣碎錄に『思村の王氏の子は、生れて七日にして兩腎が縮入した。二人の醫師が診て「寒氣を受けて起つたものだ」といひ、硫黃、茱萸、大蒜を研つてその腹部に塗り、莽草、蛇床子を烟に燒いて下部を熏ずると、それで癒えた』とある。

(七) 大觀ニ痺ヲ痓ニ作ル。

(八) 大觀ニ蠹ニ作ル。

【附方】舊四、新五。【賊風の腫痺】風が五臟に入つたために恍惚たるには、莽草膏を主とするがよし。莽草一斤、烏頭、附子、躑躅各二兩を切り、醋を和した水一升に一夜漬け、猪脂一斤で煎じて三囘火にかけ三囘休め、滓を絞り去り、火に向つて手でそれを三百囘患部に摩擦する。手に應じて瘥える。耳、鼻の疾ならば綿に裹んで塞ぎ、疥癬、雜瘡にはいづれも摩するがよし。(肘後) 【小兒の風癇】掣瘲し戴眼し、極端なるは一日數十囘發作する。又、大人の賊風を治す。莽草、雷丸各雞子黃一箇ほどの量を、溶した猪脂一斤で煎じて七沸して滓を去り、一日三四囘、患部へ摩擦する。目、及び陰部に近づけてはならぬ。(外臺祕要) 【頭風の久痛】莽草の煎湯を熱で沐する。目に入れてはならぬ。(聖惠方) 【風蟲牙痛】肘後方では、莽草の煎湯を熱くして漱ぎ、冷えれば吐出す。○あるひは山椒皮を加へる。○あるひは獨活を加へる。○あるひは郁李仁を加へる。○あるひは芫花を加へる。○あるひは川椒、細辛各等分を加へ、湯に煎じて熱して漱ぎ、冷れば吐出す。○聖惠では、莽草半兩、皂角三梃を皮と子を去り、漢椒七粒と末にして棗肉で芥子大の丸にし、一丸づつで孔中を塞ぎ、涎を吐いて效を取る。【瘰癧結核】菵草一兩を末にし、雞子白で調へて帛

上に塗り、それを貼つて一日に二回易へる。效があれば止める。（聖惠方）【癰疽のまだ潰れぬもの】方は上に同じ。痛を感ずれば良し。（九）【乳腫の消せぬもの】莽草、小豆等分を末にし、苦酒で和して傅ける。（衞生易簡方）【狗咬で起つた昏悶】椒を浸した水で莽草末を調へて傅ける。（便民圖纂）

（一）茵芋（本經下品）

和名　なし
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】莞草（別錄）卑共（別錄）時珍曰く、茵芋はもと因預と書いた。意義は詳かでない。莞草とあるは蕭莞の名稱と同一だ。

【集解】別錄に曰く、茵蕷は太山の川谷に生ずる。三月三日に葉を採つて陰乾する。弘景曰く、好きものは（二）彭城に產する。今は近道にもあつて、莖、葉の形狀は莽草に似て細く軟い。細莖を連ねて採るものだ。方に用ゐることは甚だ稀だが、ただ風を療ずる酒に合はせる。

大明曰く、（三）海鹽から出る。形狀は石南樹に似て生の葉は厚い。五、六、七月に採取する。

（九）大觀ニ肘後方ノ三字アリ。

（一）牧野云フ、茵芋ハ集解ノ文ニヨレバ草デアル、植物名實圖考ノ圖ハ何カたうだいぐさ屬即チEuphorbiaノ一種デハナイカト思ハルルガ、サレバ何ノ草カソレハ分ラヌ。ザヤイルス氏ニ據レバ茵芋ハヘンルウダ科（芸香科）ノSkimmia Fortunei, Mast.トナッテ居ルガ、コレハ多分固ト我邦ノ學者ガみやましきみヲ茵芋ニ充テ來リシ說ヲ採リ入レタモノデ、正確ナ見デハナイト思

頌曰く、今は雍州、(四)絳州、華州、杭州にもある。春苗が生え、高さ三四尺、莖は赤く、葉は石榴に似て短く厚い。また石南葉に似てゐる。四月細い白色の花を開き、五月實を結ぶ。三月、四月、七月に莖、葉を採つて日光で乾かす。



〔頭　因〕

莖葉 (五) 【氣味】 【苦し、溫にして毒あり】別錄に曰く、微溫にして毒あり。權曰く、苦く辛し、小毒あり。

【主治】 【五臟の邪氣。心腹寒熱で羸瘦し、瘧のやうに定時に發作するもの。諸關節の風濕痺痛】(本經) 【久しき風濕の四肢に走つて脚弱のものを療ず】(別錄) 【男子、婦人の軟脚、毒風の拘急攣痛を治す】(甄權) 【一切の冷風、筋骨怯弱、(六)羸顫。藥に入れるには炙いて用ゐる】(大明)

【發明】 時珍曰く、千金、外臺の諸古方には、風癇を治する茵蕷丸といふがあり、風痺を治する茵蕷酒といふがあり、婦人產後の中風を治する茵蕷膏といふがあつて、風濕に對する諸方に多く用ゐられてある。茵蕷、石南、莽草は、いづれも古

フ。
(二) 彭城ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。
(三) 海鹽ハ芳草類牡丹ノ註ヲ見ヨ。
(四) 絳、大觀ニ滁ニ作ル。絳州ハ石部鹵石類玄精石ノ註、滁州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。
(五) 木村(康)曰ク、みやましきみハ有毒ナリ、葉ニスキミアニン及ビスキミンヲ含ム。W. P. 301; A. E. P. P. 1904(52) 83; 藥誌、明、一七(三三)四三五(三四)四七八、一九(五五)三七五、大、一一(四八二)二八五、京都醫學雜誌、明、三七(一)三五。
(六) 羸ハヤセルコト。

人は風を治する妙品としたものだ。然るに近世では、それ等に關する知識が稀になつた。醫學界の疎漏、缺點である。

附方　舊一、新二。【茵蕷酒】賊風で手足が枯痺し、拘攣するを治す。茵蕷、附子、天雄、烏頭、秦艽、女萎、防風、防已、石南葉、躑躅花、細辛、桂心各一兩の十二味を切つて絹袋に盛り、淸酒一斗の中に、冬は七日、夏は三日、春、秋は五日漬けて藥となる。一日(七)二回、一合づつを服し、微し痺を感ずるを度とする。記載は胡洽居士の百病方にある。(圖經本草)【茵芋丸】風氣、積滯で脚氣となり、發すれば痛むを治す。茵芋葉を炒り、薏苡仁と各半兩、郁李仁一兩、牽牛子三兩を研末して半兩、右を末にして煉蜜で梧子大ほどの丸にし、二十丸づつを五更に薑棗湯で服して通じをつける。なほ通ぜぬときは再服して速かに通じをつける。(本事方)【產後の中風】茵芋五兩、木防已半斤を苦酒九升に一夜漬け、猪脂四斤で三回煎じ三回休めて膏にし、熱して十回づつ摩擦する。(千金方)

(一)石龍芮（本經中品）

和名　たがらし
學名　Ranunculus sceleratus, L.
科名　うまのあしがた科（毛茛科）

(七) 大觀ニ三ニ作ル。

(一) 牧野云フ、世界ニ弘ク分布セル越年草デ、我邦デモ普通

ニ野外ノ田中ナゾデ見ラレル。

(三)苦菫、爾雅郭注ニハ『今菫葵也。葉似柳。子如米、汋食之滑』トアリ。本草言以下ハ疏ノ文ナリ。

校正　菜部の水菫を併せ入る。

釋名　**地椹**（本經）　**天豆**（別錄）　**石能**（別錄）　**魯果能**（別錄）　**水菫**（呉普）　**苦菫**（爾雅）　**菫葵**（郭璞）　**胡椒菜**（救荒）　**彭根**（別錄）

菫は謹（キン）または芹（キン）と發音する。弘景曰く、石上に生ずる。葉が芮芮として短小だからかく名けたのである。恭曰く、實が桑椹のやうだから地椹と名けたのだ。禹錫曰く、爾雅に『齧は(三)苦菫なり』とあり、郭璞注に『卽ち苦菫のことだ。本草には、味甘しと言ふが、此では苦しといふ。甘草を大苦なりといつたやうに古人の語には倒がある』とある。

時珍曰く、芮芮とは細い有樣の形容だ。その椹の子が細芮だから地椹と名けたので、それ以下いづれも子に對する名稱だ。水菫以下はいづれも苗に對する名稱だ。苗は蔬にして食へば味が辛くて滑する。故に椒、葵なる名稱がある。唐本草には、菜部に水菫の條を重出してあるが、此には呉普本草に依つて一條に合併した。

集解　別錄に曰く、石龍芮は太山の川澤の石邊に生ずる。五月五日に子を採り、二月、八月に皮を採つて陰乾する。

弘景曰く、今の近道の產は、子の形が粗く、蛇牀子に似て扁く、眞物の良品では

ない。これは(三)菑菜の子だといふことだ。(四)東山の石上に生ずるものは、葉が芮芮として短く小さく、子は形狀が葶藶のやうで、黃色で味は少し辛い。これこそ眞物である。

○恭曰く、現に用ゐてゐるものは、俗に水菫と名けるものだ。苗は附子に似て、實は桑椹のやう、下濕の地に生え、五月熟する。葉、子いづれも味が辛い。山南に產するものは粒が大きく、葵子ほどある。關中、河北に產するものは細く、葶藶ほどのもので、氣力は山南のものよりも劣る。陶氏は細いものが眞物だといつてゐるが、妥當な說とはいへない。○又曰く、菫菜は野生のもので、一般に栽培するものではない。葉は蕺花に似て色は紫だ。

○○藏器曰く、爾雅に『芨は菫草なり』とあり、注に『烏頭の苗だ』とある。蘇恭は天雄に註して、やはり『石龍芮は葉は菫草に似てゐるから水菫と名ける』といつてある。これ等の說に據れば、菫草とは烏頭の苗のことであつて、水菫といふものが必ず石龍芮である。更に別の草をいふのではない。

○頌曰く、今はただ兗州に產する。一叢に數莖生え、莖は青紫色で莖每に三葉あり、

(三) 菑、大觀ニ蓄ニ作ル。
(四) 東山ハ芳草類藁本ノ註ヲ見ヨ。

(五) 大觀ニ草ヲ經ニ作ル。

(六) 本書ニ子ヲ末ニ作ル。

(七) 大觀ニ不字ノ上ニ陰ノ字アリ。

(八) 漢ハ魏ノ誤。

(九) 華ハ金陵本ノ字書不正ナレドモ葉ニ近シ。

葉は短小で刻缺が多い。子は葶藶ほどの黃色のものだ。蘇恭のいふものは水菫であつて石龍芮ではない。兗州から上納するものが正確に本(五)草、及び陶氏の說に合致する。石龍芮として確なものだ。

宗奭曰く、石龍芮には兩種ある。水中に生ずるものは葉が光つて子が圓く、陸地に生ずるものは葉に毛があつて(六)子が銳い。



〔石龍芮 一胡椒菜一〕

藥用には水中に生えたものに限る。陸地に生ずるものは、また天灸ともいひ、(七)不足の陰莖冷、失精を補するものだ。

時珍曰く、蘇恭のいふ水菫が卽ち石龍芮である。蘇頌が非なりとして指摘したのは、指摘した方の誤りだ。按ずるに(八)漢の吳普の本草に『石龍芮、一名水菫』とあつて、その關係は甚だ明瞭である。唐本草の菜部に、水菫として揭げたのは、その苗をいつたもの、本經の石龍芮はその子をいつたものである。寇宗奭の、陸地に生ずるといふそのものは毛(九)華のことだ。これは大毒がある。食はれない。水菫は卽ち俗にいふ胡椒菜のことだ。處處にあるもの

で、水に近い下濕の地に多く生え、高さは一尺ばかり、根は薺のやう、二月苗が生えて叢生し、莖は圓くて枝が分れ、一本の枝に三枚の葉があり、葉は青くして滑かに光り、三尖があつて細な切込みがある。江淮地方では、三四月に苗を採り、ゆでてから晒し蒸して黑色にし、それを蔬にする。四五月に細い黄色の花を開いて小さい實を結ぶ、その實は豆ほどの大いさで、形狀は初生の桑椹のやうで青綠色だ。挼り散らして見ると、その子は葶藶子ほどの甚だ細いものだ。これが卽ち石龍芮である。半ば老いた時に採收するがよし。范子計然には『石龍芮は三輔に出る。色の黄なるものが善し』とある。

子　根皮も同じ。

氣味　【苦し、平にして毒なし】普曰く、神農は苦し、平なりといひ、岐伯は酸しといひ、扁鵲は大寒なりといひ、雷公は鹹し、毒なしといふ。之才曰く、大戟が使となる。(一〇)茱萸、蛇蛻皮を畏る。

主治　【風寒濕痺、心腹邪氣。關節を利し、煩滿を止める。久しく服すれば、身體を輕くし、目を明にし、老衰せぬ】(本經)【腎、胃の氣を平にし、陰氣不足の失精、陰莖冷を補し、皮膚を光澤にし、子を儲けしめる】(別錄)【諸風を逐ひ、心の熱

(一〇)大觀ニ茱ノ上ニ吳ノ字アリ。

燥を除く】(大明)

發明 時珍曰く、石龍芮は平、補の藥である。古方に多く用ゐてあつて、功力は枸杞、覆盆子と同埒のものだ。然るに何故か一般には用ゐることを知らない。

(一一)**水菫**(一二)

氣味 【甘し、寒にして毒なし】時珍曰く、微し辛く澁し。

主治 【擣汁で(一三)馬毒瘡を洗ひ、幷に(一四)服す。また蛇、螫の毒、及び癰腫に塗る】(唐本)【久しく食すれば、心下の煩熱を除き、寒熱鼠瘻、瘰癧生瘡、結核聚氣に主效があり、瘀血を下し、霍亂を止る。又、生で搗いた汁半升を服すれば、能く鬼毒を殺して吐出す】(孟詵)

發明 詵曰く、菫葉は霍亂を(一五)止める功力が香葇と同じ。香葇、卽ち香薷である。

附方 舊二、新一。【結核氣】菫菜を日光で乾して末にし、油で煎じて膏にし、一日三五回摩れば瘥える。(孟詵食療)【蛇咬の傷瘡】生菫の杵汁を塗る。(萬畢術)【血疝の初期】胡椒菜の葉を挼み、患部につけて揉む。(集簡方)

(一一)大觀ニ水字ナシ、水菫以下氣味主治發明附方二條菜部菫ノ條ト相重ル、疑ラクハ是誤ツテ此ニ入ルモノナリ。
(一二)木村(康)曰ク、たがらしハ有毒プロトアネモニンヲ含ム。W. P. 205; U. S. D. 1578; I. M. P. S; 朝比奈泰彥 Acta Phytoch. 1922(No. 1)1. 朝比奈泰彥、藤田穆 藥學雜誌、大、一〇(四〇七)三三一、Arch. Ph. 1892 (230) 182.
(一三)馬毒瘡ハ馬毒ガ瘡腫ニ浸入シタルモノ。
(一四)大觀ニ服之ノ下ニ、菫菜也ノ三字アリ。
(一五)大觀ニ止ヲ主ニ作ル。

(一)毛　茛　(拾　遺)　茛の音は艮(ゴン)である。

和名　きつねのぼたん
學名　Ranunculus japonicus, Langsd.
科名　うまのあしがた科（毛茛科）

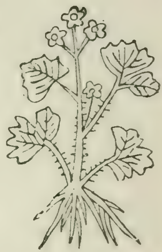
釋名　**毛建草**(拾遺)　**水茛**(綱目)　**毛菫**　菫は芹(キン)と發音する。**天灸**(衍義)　**自灸**(綱目)　**猴蒜**　時珍曰く、茛とは草烏頭(さうづ)の苗のことで、この草は、形狀といひ、毒といひ、いづれもそれに似てゐるところから名けたのだ。肘後方にはこれを水茛(すゐごん)といつてある。また毛建といふはやはり茛の字の發音の訛である。俗に毛菫といふは、水菫に似て毛があるからだ。山間の住民は、瘧を截(き)るにこの葉を採んで寸口に貼る。すると一夜にして泡になり、火で燎(や)いたやうになる。それで天灸、自灸などと呼ぶのである。

集解　藏器曰く、陶氏の鉤吻(こうふん)の注に『或は毛茛のことだといふ』とあり、蘇恭は『毛茛とは毛の有る石龍芮(せきりうぜい)のことだ。毒はあつても鉤吻とは何の關係もない』といひ、葛洪の百一方には『菜類の中に水茛(二)といふがある。葉は圓くて光り、水邊に生えるもので、毒がある。蟹が多く食ふものだ。人が誤つてそれを食つた蟹を食へば、狂亂して中風のやうな容體になり、或は吐血することもあるが、甘草汁を

(一)牧野云フ、毛茛ヲ先輩ハうまのあしがたニ充テ來ツタケレドモ、其集解ノ文ヲ玩讀セバ之レヲきつねのぼたんニ充ツルヲ至當トスル。

(二)本書ニ茛下ニ茗ノ字アリ。

用ゐれば解す』とある。又曰く、毛建草は江東地方の田野、澤畔に生ずる。葉は芥のやうで大きく、上に毛があり、花は黄色、子は蒺藜のやうだ。



〔毛　茛〕
—毛のある石龍芮—
—即ち毛芹—

時珍曰く、毛建、毛茛といふは今の毛菫のことだ。下濕の場所に多く、春苗が生え、高さは一尺餘、一本の枝に三枚の葉があり、葉は三尖で細かな切れ込みがある。石龍芮の莖、葉と一様だが、ただ細毛があるだけの相異である。四五月に小さい黄色の花を開き、花は五出の甚だ光つて艶やかなものだ。結實は綻びんとする青桑椹のやうな狀態で尖峭があり、石龍芮の子とは同じくない。世間でこれを鵞不食草といつてゐるが、大なる誤だ。方士は汁を取つて砂を煮、硫を伏す。沈存中の筆談に所謂『石龍芮に兩種ある。水に生ずるものは葉が光つて末が圓く、陸に生ずるものは葉に毛があつて末が銳い』とある、その葉に毛あるものが此にいふものだ。よく注意して見るがよい。

附錄　（三）海蘿　陰命　藏器曰く、陶氏は、鉤吻の注に『海蘿は海中に生ずる。

色赤く、形狀は石龍芮のやうで、大毒がある』といつてある。又曰く、陰命は海中に生ずる、色赤く、木に著いて懸る。その子は大毒あるものだ。今ではそれに關して的確な智識を有するものがない。

葉及び子　(四)【氣味】【辛し、溫にして毒あり】【主治】【惡瘡、癰腫(ようしゆ)の疼痛してまだ潰(やぶ)れぬには、葉を搗いて傅ける。瘡中に入れてはならぬ。入れば肉を爛らす。又、瘧の患者には、一握を微碎し、男は左、女は右の臂上に縛付ける。瘧となるから肉に近けてはならぬ。(五)薑に和し搗いて腹に塗れば冷氣を破る】(藏器)

(一)牛扁　(本經下品)

和名　なし
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】扁特(唐本)　扁毒(唐本)

【集解】別錄に曰く、牛扁(ぎうへん)は(二)桂陽(けいやう)の川谷に生ずる。弘景曰く、今一般には一向識られてゐない。

恭曰く、この藥は(三)菫草、石龍芮などの植物に似たもので、根は秦艽(じんぎやう)のやうで細

モ陰命モ共ニ未詳ノ品デアル。

(四)木村(康)曰ク、成分ハたがらしヲ見ヨ。

(五)大觀ニ子ノ一字、薑ニ和スノ上ニアリ。

(一)牧野云フ、先輩曾テ此牛扁ヲげんのしようこニ充テ、又れいじんさうニ充テシコトアレド信憑スルニ足ルノ所見ニアラズ。今其圖ヲ見テモタダ根生葉ノ略畫デ其眞ヲ突キ止メ難イ、故ニ何ノ草カ充分ニ判然セヌ、集解

ノ文モ簡ニ失シテ其形狀ヲ模索シ難イ。
(二)桂陽ハ漢ノ郡名、今ノ湖南省ノ南部、及ビ廣東省ノ西北部ヲ包ネ、今ノ湖南省郴縣ニ治ス。
(三)大觀ニ葦草ヲ三葦ニ作ル。
(四)大觀ニ下ノ下ニ濕ノ字アリ。
(五)潞州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。
(六)牧野云フ、虱建草ハ何ノ草ダカ分明デナイ。

い。平澤の(四)下地に生ずる。田舍の農民などは牛扁と名けて牛虱の治療に使用し、甚だ效がある。太常では名稱を扁特と呼び、或は扁毒と呼ぶ。

保昇曰く、今は寧州に出る。葉は石龍芮、附子などに似たものだ。二月、八月に根を採つて日光で乾す。


〔牛扁〕—潞州—

頌曰く、今(五)潞州で便特と呼ぶ一種は、六月花があつて八月實を結ぶ。その根、苗を採つて搗いて末にし、油で調へて蟣虱を殺すに用ゐる。主たる療效が大體似たものだから、疑ふらくは扁特であらうと思ふ。字音の響が近いので訛つたものらしい。

氣味 【苦し、微寒にして毒なし】

主治 【身體、皮膚の瘡の熱氣には、湯にして浴するがよし。牛虱、小蟲を殺す。又、牛の病を療ず】(本經)

附錄 (六)虱建草(拾遺) 藏器曰く、苦し、毒なし。蟣虱に主效がある。採んで汁を頭に淋げば虱が盡く死ぬ。誤つて虱を呑んで發つた病には、搗汁一小合を服す。また諸種の虫瘡にも主效がある。山麓の濕地に生ずるもので、發いた葉は山丹

に似て、微赤色で高さは一二尺のものだ。又、(七)水竹葉といふがある。水中に生ずるもので、葉は竹葉のやうで短く小さく、生で食へる。また蟣虱を去る。

(一)蕁麻　蕁の音は燖(ジン)である。　（宋圖經）

和名　いらくさ
學名　Urtica Thunbergiana, Sieb. et Zucc.
科名　いらくさ科（蕁麻科）

釋名　毛藙　時珍曰く、蕁の字は本來は藙と書く。杜子美の詩に蘿草を除くの詩といふがある。この草だ。

集解　頌曰く、蕁麻は(二)江寧府の山野中に生ずる。


〔蕁麻〕

時珍曰く、(三)川、黔の諸處に甚だ多い。莖に刺があり、高さ二三尺、葉は花桑に似て或は青、或は紫のもので、背の紫色のものを藥に入れる。上に畏るべき毛芒があつて、人に觸れると蜂、蠆に螫されたやうになるが、人尿で濯へば解す。花はあるが實らず、冬を凌いで凋まない。採ん

(七)牧野云フ、水竹葉ヲ從來いぼくさニ充テテ居レドモ覺束ナイ、其文章極簡單デ形狀能ク分ラス。

(一)牧野云フ、蕁麻ヲいらくさニ充テテハ置ケドモ支那ニハ尙同屬ノ別ノ種ガアルノデ、或ハ其類品モ亦處ニヨリ爾カ稱スルカモ知レヌト思フ。

(二)江寧府ハ山草類白鮮ノ註ヲ見ヨ。

(三)川ハ今ノ四川省地方。黔ハ山草類黃連ノ施黔ノ註參照。

(四)木村(康)曰ク、歐洲產(U. dioica L.)ハ歐洲ノ民間ニ糖尿病ニ效アリトシテ用キ、血糖少ノ作用アルコト發明セラレタル物質ヲウルチントト命名セリ。A. V. Ma-

で水中に投入すれば、能く魚を毒する。

(四)**氣味**　【辛く苦し、寒にして大毒あり。人をして吐、利して止ざらしめる】

主治　【蛇毒。搗いて塗る】(蘇頌)　【風疹の初期。これを點ければ一夜で皆なくなる】(時珍)

(二)格注草　(唐本草)

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

集解　恭曰く、齊、魯の山澤の間に出る。葉は蕨に似て、根は紫色で紫草の根のやうだ。一株に二十ばかりある。二月、八月に根を採り、五月、六月に苗を採り、日光で乾して用ゐる。



〔格注草〕
—齊南—

氣味　【辛く苦し、溫にして大毒あり】

主治　【蠱疰、諸毒の疼痛等】(唐本)

---

rx und E. Adler: Arch. f. exp. Path. u. Pharmk. 1926 (112) 24; 藥誌、六、1五 五三三)六一六。

(二) 牧野云フ、本草綱目啓蒙ニ之レヲしだ(うらじろ)ニ充ルヲ否定シ、詳ナラズトスルハ宜シ。本品ハ何ノ草カ判ラナイノデアル。

海芋（一）（綱目）

和名　くはずいも
學名　Alocasia macrorhiza, Schott.
科名　てんなんしやう科（天南星科）

釋名　**觀音蓮**（綱目）　**羞天草**（玉冊）　**天荷**（綱目）　**隔河仙**　說明は下文を見よ。

集解　時珍曰く、海芋は蜀中に生ずるものだが、今はやはり處處にある。春苗が生え、高さは四五尺、葉は大きく、芋の葉のやうで幹があり、夏、秋の間に莖が出て花を開く。花は碧色で一瓣の蓮花のやう、花の中に穗になつた長い蘂があり、觀音像が後光の輪の中に在る有樣のやうなところから、俗に觀音蓮と呼ぶ。方士はこれを隔河仙と名け、物を金に變じ得るものだといふ。根は親芋に似て、大なるは一升入りの盌ほどあり、長さは六七寸ある。蓋し野芋の類のものだ。庚辛玉冊には『羞天草は陰草であつて（二）江、廣の深谷、澗邊に生ずる。葉は極めて大きく、雨傘の代用になる。葉は背面が紫色、花は蓮花のやうで、根、葉皆大毒があり、粉霜、硃砂を煅くに用ゐる。小なるをば野芋と名ける』とあり、宋祁の海芋贊には『木幹芋葉。（三）擁腫盤戾。農經弗載。可以治癘』とある。

（一）牧野云フ、海芋ヲ本草綱目啓蒙ニみづばせう（Lysichiton kamtschatense, Schott.）ニ充テアルノハ非デアル。集解ノ文ヲ讀メバ其レガ直チニ其物デナク、ソシテ之レヲくはずいもニ充ツルヲ正當トスル事ガ分ル。飯沼慾齋ノ草木圖說ニ海芋ヲおらんだかいうノ一名ばんかいう（慾齋ハ此品ヲくはずいもト誤唱シテ居ル）ノ品トシテ居ルノハ誤リデアル。此レハZantedeschia aethiopica, Spreng. ノ學名ヲ有スル全ク別ノ植物デアル。
（二）江廣ハ江西、廣東兩省地方ヲ指ス。
（三）擁腫ハタカビクガアルコト。盤戾ハイロイロニマガルコ

氣味 【辛し、大毒あり】 主治 【瘧瘴、毒腫、風癩。硇砂を伏す】(時珍)

附錄 (四)透山根 時珍曰く、按ずるに、岣嶁神書に『透山根は蜀中の山谷に生ずる。草は蘼蕪に類するもので、鐵に點ければ金となし得る。昔、ある者が、採藥に行つて誤つてこの草を剪つた。するとその刀が忽ち黄色になり、軟になつて金になつた』とある。又、庚辛玉冊には『透山根は(五)武都に出る。汁を取つて鐵に點ければ立ろに黄金となる。大毒あるもので、人が誤つてこれを食へば溶けて紫色の水となる。又、(六)金英草といふがある。やはり蜀中に生じ、形狀は馬齒莧のやうで色が紅い。鐵に搨り付ければ金になる。これも大毒あるもので、口に入れば人を殺し、須臾にして紫の水にして了ふ』とある。又、何遠の春渚紀聞には『吏部劉均父が官を罷めて成都への歸途、一篋の水銀を携帶して(七)峽を通過したが、篋が漏るのを發見したので、渡しの附近で急に草叢をち切つてその漏り口を塞いで



〔海芋〕
―觀音蓮―

ト。
(四)牧野云フ、透山根ハ何ノ草ダカ分ラヌ。
(五)武都ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(六)牧野云フ、金英草ハ何ノ草デアルカ分ラヌ。
(七)峽トハ揚子江ヲ溯ツテ四川省ニ入ル險隘ノ地ヲ指ス。

置いた。ところが、久しく經つて篋を開けて見ると、中の水銀は盡く黄金に成つてゐた。また宋朝の初め頃、ある軍人が(八)澤州に駐屯中、澤中で馬に飼ふ草を刈つて歸ると、鎌が悉く金になつた。その草で釜の下を焚くと釜までが黄金になつた。又、臨安の僧法堅の話であるが、ある旅客が(九)於潛の山を通つた時、山中で、腹を脹らした一匹の蛇が、ある草を囓んで腹に磨り、見る間に脹の消いたのを見て必ず脹を消くものに相違ないと考へたので、その草を取つて篋中に納れて置いた。その夜旅館に宿ると、隣室に呻吟の聲がする。訊いて見ると腹脹の病だといふので、早速件の藥を釜で煎じ、それを一盃病人に服ませてやつた。少頃すると呻吟は更に聞えなくなつたので、藥の效驗で平安になつたものと思つてゐた。ところが夜明て往つて視ると、病人は血肉倶に水に化して、骸骨ばかりが床の上に横はつてゐた。煎じた釜を視ると、これも全體が金に成つてゐたといふ』と書いてある。何氏の記載から觀ると、これは透山根、(一〇)及び金英草などの種類のものだ。かやうな毒草があることも心得て置くべきことだから、備さに記載して置く。

(八) 澤州ハ石部不灰木ノ註ヲ見ヨ。

(九) 於潛ハ臨安ノ西ニアリ。今ノ浙江省杭州府於潛縣ソノ地ナリ。

(一〇) 及ノ字、本草彙言ニ從フ。

(一)牧野云フ、鉤吻ハ本草綱目啓蒙ニアル如クつたうるしニ充テテ適當ト思フ。又支那デハゆり科(百合科)ノなるこゆり屬(Polygonatum)ノ或ル種ヲ滇鉤吻ト云フトテ其二種ノ圖ガ植物名實圖考卷ノ二十四ニ出テ居ル。又其書ニ鉤吻トシテ圖スル品ハたうわた科ノきじよらん樣ノ別ノ植物デアルガ、果シテ何ノ種屬ニ屬スルモノカ判明セヌ。

(二)治ハ漢ノ會稽郡中ノ一縣。今ノ福建省閩縣ノ東北ニ在リ。

(三)廣ハ廣東、廣西兩省地方ヲ指ス。

(四)滇ハ雲南省地方ヲ指ス。

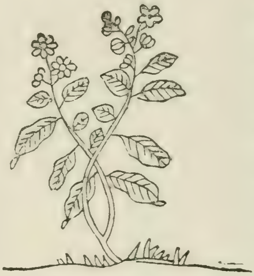
(五)岳州ハ隰草類連

(一)鉤吻（本經下品）

和名　つたうるし
學名　Rhus Toxicodendron, L. var. radicans, Miq.
科名　うるし科（漆樹科）

釋名　**野葛**（本經）　**毒根**（吳普）　**胡蔓草**（圖經）　**斷腸草**（綱目）　**黃藤**（綱目）　**火把花**

弘景曰く、この草は口に入れば人の喉吻を鉤するといふ意味だ。或は、吻は挽の字を書くが正しいので、人の腸を牽挽して命を絶つの意味だともいふ。



〔鉤吻〕
—斷腸草—

時珍曰く、この草に野葛なる名はあるが、葛根の野生のものを意味するのではない。或は治葛とも書く。王充の論衡に『(二)治とは地名であつて、その地は東南方に在る』とある。その說が甚だ穩當だ。(三)廣地方ではこれを胡蔓草といひ、斷腸草ともいふ。人畜の腹に入れば、腸上に粘して半日にして黑爛する。それでまた爛腸草と名ける。(四)滇地方ではこれを火把花といふ。花が紅で性が火のやうに熱なることを表はしたものだ。(五)岳州では黃藤といふ。

【集解】別錄に曰く、鈎吻は(六)傅高の山谷、及び(七)會稽の東野に生ずる。折けば青烟の出るものを固活と名ける。二月、八月に採收する。

○普曰く、秦では鈎吻、一名(八)除辛といふ。(九)南越の山、及び(一〇)寒石山、或は(一一)益州に生ずる。葉は葛のやう、莖は赤く、太さ箭ほどあつて(一二)方である。根は黄色だ。正月に採收する。

○恭曰く、野葛は(一三)桂州以南の村落や人家の附近にいづれもある。彼の地ではこの草の全體を鈎吻と呼び、また苗を鈎吻、根を野葛ともいふ。蔓生のもので、葉は柿のやう、根は、採つたばかりには皮が白く骨が黄である。宿根は地骨に似てゐるが、嫩い根は漢防已のやうだ。皮節の斷てるものが良く、さながら白花藤に類似し、明瞭な區別の六ケ敷いもので、頗る惑はされる。新なるうちは折つても塵氣がないが、一年以上經過して後になれば骨の細孔中から塵が起つ。現に枸杞の根を折つても塵の起つは同樣なのだから、本草に、折れば青烟の起つものを固括と名ける、良きものだといふ説明は徹底を缺く。人は誤つてその葉を食へば死亡するが、羊はその苗を食へば大いに肥える。物にはかやうに相伏するものだ。博物志に『鈎

翹ノ註ヲ見ヨ。
(六)傅高山、山海經南山經ニ僕勾之山アリ『其上多金玉。其下多草木。無鳥獸、無水』トイフ。音ヤヤ近シ、疑ハコノ山ヲイフカ。所在未考。
(七)會稽ノ東野、卽チ今ノ浙江省ノ東部ヲ指スナルベシ。
(八)大觀ニ除辛ヲ毒根ニ作ル。
(九)南越ハ今ノ廣東、廣西地方ヲ指ス。
(一〇)寒石山、未詳。
(一一)益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(一二)大觀ニ而方ノ二字ナシ。
(一三)桂州ハ梁ニ置キ、隋ニ廢シ、唐ニ復ス。今ノ廣西省桂林縣ノ地ナリ。

(一四)邕州ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。
(一五)容州ハ唐ニ置ク。今ノ廣西省梧州府ノ容縣ソノ地ナリ。

吻は蔓生で、葉が鳧葵に似たものだ』とあるは正確だ。

時珍曰く、嵇含の南方草木狀に『野葛は蔓生のものだ。葉は羅勒のやうで、光りがあつて厚い。一名胡蔓草といふ。その地では生蔬の中にこれを雑へて人を害毒する。半日で死亡するものだ』とある。段成式の酉陽雜俎には『胡蔓草は(一四)邕州、(一五)容州の地方に生ずる。叢生のもので、花は扁たくして巵子のやうだが、稍大きくして朶にはならない。色は黃白だ。葉はやや黒い』とある。又按ずるに、嶺南衞生方には『胡蔓草は、葉は茶のやう、花は黃色で小さい。一葉を口に入れば百竅から血が潰出し、その人は復び蘇生しない』とある。予も又、南方人に就いて尋ねたところに據ると、『鉤吻、即ち胡蔓草である。今一般に斷腸草といふがそれだ。蔓生のもので、葉は圓くて光る。春、夏に於ける嫩苗は毒が甚しく、秋、冬季に於ける枯老したものは毒がやや緩である。五六月花を開き、櫸、柳の花に似て數十朶が穗をなす。嶺南に生ずるものは花が黃だが、滇南に生ずるものは花が紅い。火把花と呼んでゐる』といふ。これ等の數說は、すべて吳普、蘇恭の說と合致する。陶弘景等は異なる考察、說明を下してゐるが、いづれも次項に於いて是正する。

【正誤】

弘景曰く、五符經には、やはり『鉤吻、是れ野葛』とある。事實に就いて考察するに、これは二種異るものを言つてゐるらしい。野葛なるものは根の狀態が牡丹のやうで、その草の生える處にさへやはり毒があり、飛鳥もそこには集らぬといふ。現に一般に膏に合せて服用し、何等の障害を認めない。鉤吻は、それとは別種の一植物で、葉は黃精に似て、莖は紫で、中心から抽き出て黃色の花を開き、初生のうちは極めて黃精に似たものだ。そのために一般人は多く取り違ひて、遂に死、生の反對の結果を招くのである。或は、鉤吻とは毛茛のことだといふやうな錯誤も交つてゐるが、それは異る物で、果して如何なるものか詳でない。

斅曰く、凡そ黃精を使用する場合に鉤吻を用ゐてはならぬ。眞に黃精と似たものだが、ただ鉤吻には葉に二箇の毛鉤子がある。黃精は葉が竹葉に似たものだ。又曰く、凡そ鉤吻を使用する場合に地精を用ゐてはならぬ。莖、苗は同樣だが、鉤吻は人體外部の惡毒瘡を治し、地精は人を殺すものだ。

恭曰く、鉤吻は蔓生のもので、葉は柿のやうである。陶氏が『飛鳥も集らぬ』といふは謬妄だ。黃精は、眞直ぐに伸びて葉は柳、及び龍膽草に似たものだ。一向に

似てゐない。毛茛とは毛のある石龍芮のことだ。鉤吻と何の關係もない。

○頌曰く、江南地方の説では、黄精は莖、苗はやや鉤吻に類するが、鉤吻は葉の頭が極めて大きくして根が細いだけだといふことで、蘇恭の所説と異ふ。恐らく產地の南北に由つて異ふのであらう。

○○禹錫曰く、陶氏の説の『鉤吻は黄精に似た』といふものが眞の鉤吻だ。蘇氏の説の『柿の葉に似た』といふものは別種の一植物である。又、苗を鉤吻と名け、根を野葛と名けるといふも妥當な見解でない。

○○時珍曰く、神農本草の『鉤吻、一名野葛』の一句に、已に十分明瞭にされてある。草木狀に『又、胡蔓草と名く』とあつて、藤生なることも顯だ。吳普、蘇恭の所説が正に本草の明文に合致する。陶氏は、藤生のものを野葛とし、又、小草を指して鉤吻とし、また更に毛茛のことかと疑問をも擧げたが、それは雷斅の説を基本として考へたからで、多くの學者はために定見を失ひ、蔓生、小草兩者相去ること遠いことを辨別せぬやうになつたのだ。けれども、陶氏雷氏の所説のものも、やはり一種の有毒物に相違ない。ただそれを鉤吻なりと指定すべきものではないといふだけ

である。昔、天姥が黃帝に對へた言葉に『黃精は壽を益し、鉤吻は人を殺す』とあるが、これは、この二草を善、惡の對比として言つたものだ。陶氏はそれを正解しなかつたために、これを相似たるものと疑つて、遂にかやうな說を生み出したのである。なほこれに關する說明は黃精の條に記載してある。

氣味　【辛し、溫にして大いに毒あり】普曰く、神農は辛しといひ、雷公は毒あり、人を殺すといふ。時珍曰く、その性は大熱である。本草には、毒藥に關する說明をただ有二大毒一としてあるが、獨りこの物にだけ文法を變へて大有レ毒とした。これで見ても、その毒の通常ならざることが判るのである。之才曰く、半夏が使となる。黃芩を惡む。

主治　【金瘡、乳痓、中惡風、欬逆上氣、水腫。鬼疰、蠱毒を殺す】(本經)【癥積を破り、脚、膝の痺痛、四肢の拘攣、惡瘡、疥蟲を除き、鳥獸を殺す。汁に搗いて膏中に入れる。湯、飲には入れぬ】(別錄)【喉痺、咽塞で聲音の變じたるに主效がある】(吳普)

發明　藏器曰く、鉤吻は葉を食つて冷水を飲めば即死する。冷水がその毒を

(一六)二廣トハ廣東、廣西ノ地ヲイフ。

誘發するのだ。彼の地では、人を毒殺してその屍を樹上に懸け、その屍の汁が地上に滴つて生える菌子を採つて菌藥と名ける。これは野葛の毒よりも烈しいといふ。蕹菜の搗汁は野葛の毒を解するものだ。その汁を野葛の苗に滴せば直ちに萎え枯れる。南方の地方民は蕹菜を食つて後に野葛を食ふが、これは二物相伏するために、自から苦惱を生ぜぬのである。魏の武帝は野葛を一尺まで食つたといふが、豫めこの菜を食つたのだ。

時珍曰く、按ずるに、李石の續博物志に『胡蔓草は(一六)二廣に產する。廣人は、負債の督促を受けて窮すると、往往この草を食つて自殺し、それで債權者を罪に誣える。急流の水を呑めば死亡することも急速だが、緩流の水を呑めば死亡することもやや緩慢だ。或は、毒蛇を殺してこの草で覆ひ、水を澆いで置くと菌が生える。それも人を害する毒藥だ』とある。葛洪の肘後方には『凡そ野葛に中毒したもので口を開かぬには、大竹筒の節を拔き、その一端を兩脇、及び臍中に當て、冷水をその筒中に灌ぎ込み、數々水を易へる。須臾にして口が開いて藥を入れ得るものだ。毒を解するには、ただ甘草汁、人屎汁を多く飲むか、白鴨、或は白鵝の頭を斬つてそ

の血を口に瀝し込むか、或は羊血を灌ぎ込めばよし』とある。嶺南衛生方には『親鷄が抱いてまだ雛にならぬ雞卵を卽時に取つて研り爛らし、麻油に和して灌ぎ込めば毒物を吐出して蘇生する。やや遲れると死亡する』とある。

本草綱目草部第十七卷下　終

本草綱目草部

第十八卷　上

(一)骨路支、此書諸藤ノ末尾ニアリ。

(二)別錄ハ開寶ノ誤。

(三)別錄ハ本經ノ誤。

(四)根ヲ脫ス。

(五)鬼ハ思ノ誤。

本草綱目草部目錄　第十八卷　上

草の七　蔓草類七十三種　附十九種

菟絲子 本經 雞火蘭を附す。　五味子 本經　蓬虆 本經

覆盆子 別錄　懸鉤子 拾遺　蛇莓 別錄　使君子 開寶

木鼈子 開寶　番木鼈 綱目　馬兜鈴 開寶 即ち土靑木香。

榼藤子 開寶 合子草を附す。　預知子 開寶　牽牛子 別錄

旋花 本經 太乙金鎖、即ち鼓子花。　紫葳 本經 即ち凌霄花。(一)骨路支を附す。

營實牆蘼 本經　月季花 綱目　栝樓 本經 即ち天花粉。

王瓜 本經 即ち土瓜。　葛 本經 鐵葛を附す。　黃環 本經 即ち鼓戰子。

天門冬 本經　百部 別錄 白并を附す。　何首烏 (二)別錄

萆薢 (三)別錄　菝葜 別錄　土茯苓 綱目　白斂 本經

女萎 李當之　赭魁 本經　鵞抱 圖經　伏雞子(四) 拾遺 仰盆、人肝藤を附す。

千金藤 開寶 陳(五)鬼岌を附す、　九仙子 綱目

山豆根 開寶　黃藥子 開寶　解毒子 唐本 即ち苦藥子。奴會子、藥實根を附す。

白藥子 唐本 陳甘白藥、會州白藥、衛洞根、突厥白を附す。 威靈仙 開寶

茜(六)根 本經 血藤を附す。 剪草 日華 防已 本經

通草 本經 通脫木 法象 天壽根を附す。 釣藤 別錄 倒挂藤を附す。

黃藤 綱目 白(七)菟藿 本經 白花藤 唐本 白英 本經 即ち鬼目、排風子。

蘿摩 唐本 赤地利 唐本 紫葛 唐本

烏蘞莓 唐本 即ち五葉藤。 葎草 唐本 羊桃 本經

絡石 本經 木蓮 拾遺 地錦を附す。 扶芳藤 拾遺

常春藤 拾遺 千歲蘽 別錄 忍冬 別錄 即ち金銀花。

甘藤 嘉祐 (八)甜藤、(九)甘露(一〇)を附す。 含水藤 海藥 天仙藤 圖經

紫金藤 圖經 南藤 開寶 烈節を附す。 清風藤 圖經

百稜藤 圖經 省藤 拾遺 紫藤 開寶 落鴈木 (一一)唐本 折傷木、風延(一二)母、每始王木を附す。

千里及 拾遺 即ち千里光。 藤黃 (一三)拾遺

右附方 舊一百三十七 新三百二十八。

附錄諸藤 二十九種

(六)根ハ草ノ誤

(七)菟ハ兎ノ誤。

(八)甜ハ甘ノ誤。

(九)甘ハ甜ノ誤。

(一〇)露下、藤ヲ脫ス。

(一一)唐本ハ海藥ノ誤。

(一二)母ハ莓ノ誤。

(一三)拾遺ハ海藥ノ誤。

草の七　蔓草類七十三種　附十九種

(一)菟絲子（本經上品）

和名　まめだふし
學名　Cuscuta chinensis, Lam.
科名　ひるがほ科（旋花科）


〔兎　絲　子〕

釋名　**菟縷**（別錄）　**菟蘽**（別錄）　**菟蘆**（本經）　**菟丘**（廣雅）　**赤**(二)**網**（別錄）　**玉女**（爾雅）　**唐蒙**　爾雅）　**火燄草**（綱目）　**野狐絲**（綱目）　**金綫草**　禹錫曰く、按ずるに、呂氏春秋に『或は菟絲には根がないともいふが、その根は地に屬かぬけれども茯苓がそれだ』とある。抱朴子には『菟絲なる草は下に、茯苓の根がある。この菟がなければ絲は上に生じ得ぬものだ。しかし實際は絲と菟と接續してゐるわけでもないが、茯菟を抽き取ると兎絲が枯死して了ふ』とあり、又『菟

(一)牧野曰フ、我邦ノ學者從來之レヲねなしかづら (C. japonica, Chois.)ニ充テ居レドモ、其正品ハまめだふしトセネバナラヌ。然シ集解ノ別錄ニ曰クノ條下ニ在ル菟蘽ハ蓋シねなしかづらナラン。ねなしかづらハ植物名實圖考、卷ノ十九ニハ金燈藤、一名毛芽藤ノ名ガアル。本草綱目啓蒙ニ「一種海邊ニ生ズルモノハ莖細ク子小ナリ、今藥舖ニ賣モノ多クハコレナリ」トアルモノハはまねなしかづら (C. maritima, Makino.) デアツテはまごう(蔓荊)ニ寄

絲の初生の根は、兎が拳を(三)握つたやうな形のものだ。故に(四)割いてその血で丹を和して服すれば立ろに能く變化する』とある。これで見ると、菟絲なる名稱はこれ等に因んだものだ。

○弘景曰く、舊い言傳へに『下に茯苓あれば上に菟絲あり』といふが、必ずしもさういふわけでもない。

○頌曰く、抱朴子の說のやうなものは現在では見たことがない。別にさやうな一類のものがあるのかも知れぬ。孫炎の爾雅の釋に『唐とか、蒙とか、女蘿とか、兎絲とかいふは一物に對する四種の名稱だ』とあるが、本草では唐蒙とつづけて一の名稱としてある。詩には『蔦と女蘿と』とあり、毛萇は『女蘿とは菟絲のことだ』といつてあるが、本草には兎絲に女蘿なる名稱はなく、ただ松蘿、一名女蘿とあるだけだ。これは二物いづれも寄生であつて、同一名稱を呼ばれるのだが、本草には脫漏したのかも知れぬ。

○震亨曰く、兎絲は決して茯苓と類を共にするものでなく、女蘿は松に附いて生えるものだ。何等の關係もない。いづれも訛りを言傳へたものである。

生スルモノデアル。木村(康)曰ク、本邦市場品ハ從來イハルル如クねなしかづらニ起因スルモノノ如キモ、上海品ハ寧ロまめたふしニ似タリ。

(二)綱ハ網ノ誤。

(三)握、大觀ニ掘ニ作ル。

(四)此一節何物ヲ割キ、何物ニ變化スルモノカ解シ難シ。

時珍曰く、毛詩注に『女蘿、卽ち兎絲』とあり、吳普の本草には『兎絲、一名松蘿』とあり、陸佃は『木に在るが女蘿、草に在るが兎絲だ』といつてあるが、この二物は全然別物だ。いづれも爾雅を根據として詩を注釋したために誤つて一物とし、それ故にかやうな誤謬となつたのである。張揖の廣雅に『兎丘は兎絲なり、女蘿は松蘿なり』とあり、陸機の詩疏に『兎絲は草上に蔓り、黃赤色で金のやうだ。松蘿は松上に蔓り、枝が生え、正靑色で雜蔓がない』とあるはいづれも正確を得て居る。詳細は木部松蘿の條を見よ。又、兎絲と茯苓とに關する說明は茯苓の條を見よ。

集解 別錄に曰く、兎絲子は朝鮮の川澤、田野に生ずる。草木の上に蔓延するものだ。九月に實を採つて暴乾する。色の黃にして細かなものを赤網といひ、色が淺くて大なるものを菟藟といふ。功用はいづれも同じ。

弘景曰く、田野村落に甚だ多く、皆藍、紵麻、蒿などの上に浮生してゐる。その實をば、仙經でも一般醫方でも、いづれも補藥とし、酒に一夜浸して用ゐることになつてゐる。丸にするがよく、煮てはよくない。

大明曰く、苗、莖は黃色の(五)絲に似たもので、根も株もない。多く畑の草に附著

(一)大觀ニ絲ヲ麁線ニ作ル。

し、纏ひ枯らして了ふ。或は一(六)葉を生じて花を開き子を結ぶといふが、その狀態は明瞭でない。子は細かな黍米粒ほどのものだ。八月、九月以前に採る。

頌曰く、今は近道にもあるが、(七)菟句のものが勝れてゐる。夏苗を生じ、初めは細絲のやうで地面に生え廣がる。それ自らの力では上に起き得ないもので、他の草の梗があればそれに纏ひからまつて生長し、根の方が漸次に地から絶え離れて空中に浮んで了ふ。或は根が無くて氣を假りて生えるものだといふが、如何にもさうらしいものである。

時珍曰く、按ずるに、寧獻王の庚辛玉冊には『火燄草、卽ち兎絲子は陽草である。荒れた田園や人跡の絶えた古い道などに多く生え、その子が地に入つて生えるので、初生には根があるが、成長して他の植物の上へ蔓延すると根が自から斷えて了ふ。葉が無くて花があり、その花は白色に微紅を帶び、香氣が人を襲ふ。結實は(八)粃豆のやうで細かく、色は黃である。梗の上に生じたものが就中佳い。(九)懷・孟の林中には特にこれが多く、藥用として更に良いものだ』とある。

子　[修　治]　斅曰く、凡そこれを使用する場合に天碧草の子を用ゐてはなら

(六) 葉、大觀ニ叢ニ作ル。
(七) 菟句ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。
(八) 粃豆ハシヒナマメ。
(九) 懷州ハ隰草類牛膝ノ註、孟州ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。

ぬ。眞によく似てゐるが、ただそれは味が酸く澁く、また粘るものだ。兎絲は、採收したならば殼を去り、二日間苦酒に浸して漉出し、黄精の自然汁に相對して一夜浸し、翌朝微火で乾くまで煎じ、臼に入れて燒熱した鐵杵で一(一〇)會に三千餘杵搗いて粉にして用ゐる。

時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、溫水で沙泥を淘り去り、酒に一夜浸して曝乾して搗く。なほよく搗き盡きぬときは再び浸して曝して搗く。須臾にして悉く細かくなるものだ。また別の法では、四五日間酒に浸し、四五回蒸し曝して研り、餅にして焙じ乾し、再び研末する。或は、曝乾して乾いた時に紙捻條を數枚入れ、それと共に搗けば卽刻に粉になる。造作ないものだともいふ。

(一一)**氣味** 【辛く甘し、平にして毒なし】之才曰く、酒を得れば功果が良し。薯蕷、松脂が使となる。雚菌を惡む。

(一二)**主治** 【絕傷を續ぎ、不足を補し、氣力を益し、人體を肥健にする】(本經)

【肌を養ひ、陰を强くし、筋骨を堅くし、莖中が寒して精の自から出るもの、排尿後に餘瀝のあるもの、口が苦くして躁渴するもの、寒血で積となつたものに主效が

(一〇)會、大觀ニ去ニ作ル。

(一一)木村(康)曰ク、(成分)ねなしかづらノ種子中ニ樹脂樣配糖體ヲ含有ス。(文獻)佐野一九一一―京藥誌、六、六(二八)三八。

(一二)木村(康)曰ク、民間ニテハねなしか

ある。久しく服すれば、目を明かにし、身體を輕くし、天年を延べる】(別錄)【男子婦人の虛冷を治し、精を添へ、髓を益し、腰疼、膝冷、消渴(一三)熱中を去る。久しく服すれば、面䵟を去り、顏色を悅澤にする】(甄權)【五勞、七傷を補し、鬼交、泄精、尿血を治し、心(一四)痺を潤ほす】(大明)【肝臟の風虛を補す】(好古)

【發明】 斅曰く、兎絲子は中和を稟けて正陽の氣が凝つたもので、一莖が樹に從り枝に感じて成り、中春の上陽に從つて結實するものだ。故に特に人の衞氣を補し、人の筋脈を助けるのである。

頌曰く、抱朴子の仙方單服法に『實一斗を取り、酒一斗に浸して暴乾し、再び浸して又暴し、酒が盡きるまで繰返してから搗き篩ひ、一日二回、二錢づつを酒で服す。この藥は腰膝を治し、風を去り、兼て能く目を明にし、久しく服すれば、人體を光澤にし、老を變じて少くし、十日以上試みれば、飲食物が雪に湯を沃いだやうに消化する』とある。

【附方】 舊六、新五。【消渴の止まぬもの】兎絲子の煎汁を任意に飲み、病の止むを度とする。(事林廣記)【陽氣の虛損】簡便方では、兎絲子、熟地黃等分を末にし、

づら蔓ノ搾汁ヲ額ニ塗レバ、面䵟ヲ去ルト云フ。
(一三)熱中ハ心熱シ恐懼スルヲ云フ。
(一四)痺、恐クハ脾ノ誤。

酒糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを、氣虛には人參湯で服し、氣逆には沈香湯で服す。經驗方では、菟絲子を十日間酒に浸して水で淘り、杜仲を焙じ研つて蜜で炙いて一兩を、薯蕷末を酒で煮た糊で梧子大の丸にし、空心に五十丸づつを酒で服す。

【白濁遺精】茯菟丸――煩悶思慮の過度で心、腎が虛損し、眞陽が固からず、やがて遺瀝があるやうになつて尿が白濁し、睡眠中夢で頻りに泄するものを治す。菟絲子五兩、白茯苓三兩、石蓮肉二兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、三五十丸づつを空心に鹽湯で服す。(和劑局方)【小便淋瀝】菟絲子の煮汁を飲む。(范汪方)【小便赤濁】心、腎の不足で精が減少し、血が燥し、口が乾き、煩熱し、頭運し、怔忡するには、菟絲子、麥門冬等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、七十丸づつを鹽湯で服す。【腰、膝の疼痛】或は頑痲して無力なるには、菟絲子を洗つて一兩、牛膝一兩を共に銀器に入れて酒に浸し、酒を藥の上一寸五分高くなるやうにし、かくて暴して末にし、その浸した酒で煮た糊で梧子大の丸にし、空心に酒で二三十丸づつを服す。(經驗(一五)方)【肝を傷めて視力を失へるもの】菟絲子三兩を酒に三日間浸し、暴乾して末にし、雞子白で和して梧子大の丸にし、空心に溫酒で三十丸を服す。(聖惠方)【卒

(一五)大觀ニ方ノ上ニ後字アリ。

かの身體、面部の腫れ】脈の洪、大なるには、兎絲子一升を酒五升に二三日漬け、一日三回、その酒を一升づつ飲む。なほ消(ひ)かぬときは再び造つて用ゐる。(肘後方)【婦人の横産】兎絲子末二錢を酒で服す。一には車前子等分を加へる。(聖惠方)【(一六)眉鍊(びれん)癬瘡(せんさう)】兎絲子を炒つて研り、油で調へて傅ける。(山居四要)【(一七)轂道の赤痛】兎絲子を黄黑に熬(い)つて末にし、雞子白で和して塗る。(肘後方)【痔で蟲が咬むやうに覺ゆるもの】方は上に同じ。

苗　［氣　味］【甘し、平にして毒なし】玉冊に曰く、汁は(一八)三黄、硫、汞(こう)を伏し、草砂を結す。［主　治］【研つて汁を顔面に塗れば面䵟(めんかん)を去る】(本經)【揉み碎き、湯に煎じて小兒を浴すれば熱(一九)肺を瘥ず】(弘景)

［附　方］　舊二、新一。【面(二〇)瘡、粉刺】兎絲子の苗の絞汁を塗る。三回以上の必要なし。(肘後方)【小兒の頭瘡】兎絲の苗を煮た湯で頻りに洗ふ。(子母祕錄)【目中の赤痛】野狐(やこ)(二一)漿草の搗汁を點ける。(聖惠方)

［附　錄］　(二二)**難火蘭**、拾遺)藏器曰く、味酸し、溫にして毒なし。冷氣風痺に主效があり、胃を開き、食物を落付け、腹脹を去る。久しく服すれば目を明にする。

(一六)眉鍊ハ眉叢中ニ瘡ヲ生ズルヲ云フ。
(一七)轂道ハ後陰ヲ云フ。
(一八)三黄ハ雄黄、雌黄、黄丹。硫ハ硫黄、草砂ハ草汞ヲ云フ。
(一九)肺、大觀ニ痱ニ作ル。
(二〇)瘡、大觀ニ上ニ作ル。
(二一)漿ハ絲ノ誤。
(二二)牧野曰フ、難火蘭ハ未詳ノ品デアル。

(二三)巴中、胡國に生ずるもので、形狀は兎絲子に似てゐるが微し長い。

(一)五味子（本經上品）

和名 てうせんごみし
學名 Schizandra chinensis, Baill.
科名 もくれん科（木蘭科）

釋名 䓑藸（爾雅）音は知除（チヂヨ）である。玄及（別錄）會及 恭曰く、五味は、皮、肉は甘く酸く、核中は辛く苦く、全體に鹹味がある。それで五味が具はるのだ。本經にはただ味酸しとしてあるが、味の木に屬するものを以て五行の首としたものであらう。



〔五味子〕

集解 別錄に曰く、五味子は(二)齊山の山谷、及び代郡に生ずる。八月實を採つて陰乾する。弘景曰く、今は第一位のものは(三)高麗の產で、肉が多くして酸く甜い。次は(四)青州、冀州の產で、味が酸過ぎる。その核はいづれも豬腎に似たものだ。

(二三)巴中ハ石部丹砂ノ巴郡ノ註參照。大觀ニ中ヲ西ニ作ル。

(一)牧野曰フ、集解ニ時珍ハ「五味今南北ノ分チアリ」ト言フ。其北產ハてうせんごみしヲ指スモノト思フガ、其南產ハ其品今能ク分ラヌ。蘭山ハ此南產ノモノヲ南五味子ト唱ヘ、さねかづら一名びなんかづら（Kadsura japonica, Dun.）ニ充テテ居レドモ、是レハ恐ラク中ツテハ居マイ。此びなんかづらハ多分植物名實圖考卷ノ十九ニアル紫金皮ナルモノガ其レデアラウト考ヘル。同書ノ內風消モ亦酷似ノ品デアルガ此二品ニハ同書ノ文デハ其レガ五味子ノ南品デアルト云フヤ

また建平にあるものは、肉が少く、核の形が似てをらず、味が苦い、けれどもやはり良いものだ。この藥は膏潤が多いものだから、烈日に暴してから搗き篩ふがよし。

恭曰く、樹木の上に蔓生する。その葉は杏に似て大きく、子は房になつて落葵(らくき)のやう、大いさは蘡子(あうし)ほどのものだ。(五)蒲州、及び藍田の山中に產し、現に河中府から每歲貢納する。

保昇曰く、蔓生のもので、莖は赤色、花は黃白、子は生では靑く、熟すれば紫だ。色にもやはり五色が具つてゐる。味は甘いものが佳し。

頌曰く、現に(六)河東、陝西(せんせい)の州郡に就中多く、(七)杭、越地方にもある。春初に苗が生え、赤い蔓(つる)が高い樹木に懸け延びて長さ六七尺になり、葉は尖圓で杏葉に似てゐる。三四月に黃白色で蓮花の狀態に似た花を開き、七月實が成る。莖の端に叢生して豌豆(ゑんどう)ほどの大いさのものだ。生では靑く、熟すれば紅紫になる。(八)「藥に入れるには生で曝し、子を去らずに用ゐる」。現に數種類あるが、大抵相近いものだ。雷斅は『小顆で皮が皺(しわ)み、泡(つ)けたものは白い(九)撲が鹽霜のやうに一重ある。その味に酸、鹹、苦、辛、甘の五味完全に具つたものが眞物だ』といつてある。

ウナ記事ハナイ。
木村(康)曰ク、從來てうせんごみしニ北五味子、さねかづらニ南五味子ノ漢名ヲ充テ來レリ、市場ニ行ハルル五味子ハ、てうせんごみしヲ普通トス。
藤田直市—Arch. d. Pharmazie, 1929(7) 532.

(二) 齊山ハ石部雲母ノ註、代郡ハ石部代赭石ノ註ヲ見ヨ。

(三) 高麗ハ土部墨ノ註、金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四) 靑州、冀州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(五) 蒲州ハ北周ニ置ク、卽チ宋、元ノ河中府ノ地ナリ。藍田ハ石部玉類玉ノ註、河中府ハ石部石中黃子ノ註ヲ見ヨ。

(六) 河東ハ今ノ山西

省地方、陝西ハ今ノ陝西省地方。石部丹砂ノ註參照。(七)杭越ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。(八)大觀ニハ此一條ナシ。(九)大觀ニ揆ヲ色ニ作ル。

時珍曰く、五味は、現在のものには南、北の區別があつて、南方の產は色が紅く、北方の產は色が黑い。滋補藥に入れるには必ず北方產のものを用ゐるが良し。根を取つて種ゑることも可能で、その年の中に旺になる。また二月に子を種ゑれば翌年になつて旺になる。棚を作つて延び得るやうにするがよし。

修治 斅曰く、凡そこれを使用するには、銅刀で兩片に劈き、蜜に浸して午前十時から午後四時まで蒸し、更に漿に一夜浸して焙じ乾して用ゐる。時珍曰く、補藥に入れるには熟して用ゐ、嗽藥に入れるには生で用ゐる。

氣味 【酸し、溫にして毒なし】好古曰く、味は酸く微し苦し。味が厚く、氣が輕く、陰中の微陽であつて、手の太陰の血分、足の少陰の氣分に入る。時珍曰く、酸、鹹は肝に入つて腎を補し、辛、苦は心に入つて肺を補し、甘は中宮に入つて脾、胃を益す。之才曰く、蓯蓉が使となる。萎蕤を惡み、烏頭に勝つ。

主治 【氣を益し、欬逆上氣、勞傷羸瘦に不足を補し、陰を強くし、男子の精を益す】(本經)【五臟を養ひ、熱を除き、陰中の肌を生ずる】(別錄)【中を治し、氣を下し、嘔逆を止め、虛勞を補し、人體を悅澤ならしめる】(甄權)【目を明にし、水臟

を暖め、筋骨を壯にし、風を治し、食物を消化する。反胃(ほんゐ)、霍亂轉筋、痃癖、奔豚、冷氣、水腫、心、腹の氣脹を消し、渇を止め、煩熱を除き、酒毒を解す】(大明)【津(しん)を生じ、渇を止め、瀉痢を治し、元氣不足を補し、耗散(かつさん)の氣、瞳子の散大を收める】(李杲)【喘欬(ぜつがい)、噪嗽(さつそう)を治し、水を壯にし、陽を鎭める】(好古)

【發明】成無已曰く、肺は收斂(しうれん)を欲する。急に酸を食つて以てこれを收め、酸を以て補ふ。芍藥、五味の酸は、以て逆氣を收めて肺を平安にするものだ。

○杲曰く、肺氣を收め、氣の不足を補するは升の作用であつて、酸は逆氣を收めるものだ。肺寒氣逆の場合にはこれと乾薑(かんきやう)とを共に用ゐて治效を擧げるがよし。又、五味子は肺氣を收めるものであつて、火熱に對する必用の藥だ。故に嗽を治するにはこれを君とする。ただ外邪のあるものには慌(あわ)て用ゐてはならぬ。その邪氣を閉ぢる恐があるからだ。必ず先づ發散して後にこれを用ゐるが良し。痰あるには半夏(はんげ)を佐とし、喘するには阿膠(あけう)を佐とする。ただ分兩にやや不同があるだけだ。

○宗奭曰く、現に(一〇)華州(一一)以西(一二)秦までの間に多く産する。色紅く熟したそのときに地方民が採つて蒸爛し、研つて汁を濾し、熬つて稀膏にし、酸、甘の程度を

(一〇)華州ハ石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。
(一一)大觀ニ以ヲ之ニ作ル。
(一二)大觀ニ秦下ニ州字アリ、秦州ハ石部水銀ノ註ヲ見ヨ。

量つて蜜を入れて煉りまぜ、冷るを待つて器に取收め、肺の虛寒の患者は湯にして時時に飮む。菓子にして遠方へも贈れる。本經に、その性溫なりとあるが、現にこれを食へば虛熱を惹起することが多く、小兒の場合には更に甚しい。藥性論には、熱氣を除くものだといひ、日華子は、水臟を暖め、煩熱を除くものだといつてある。かやうな次第で、後世の學者の疑惑を惹くのだが、現に實驗上肺の虛寒を治するものなる以上熱を除くといふ說には全然同意し兼ねる。

震亨曰く、五味は肺氣を收斂するに大いに效能があるのだから、當然補腎の功果があるわけで、肺氣を收めるは熱を除くといふ事實を物語り、腎を補するは水臟を暖めるといふ事實になるのではあるまいか。かやうな次第だから、火熱の嗽には必用の藥である。寇氏が所謂、これを食へば多く虛熱を惹起するといふは、收、補する作用が急激なために起る現象だ。疑惑を惹くべきいはれはない。又、夕刻に嗽するは火氣が肺中に浮入するのであつて、涼藥を用ゐてはならぬ。それは五味子、倍子を用ゐて收斂して降すべきものである。

思邈曰く、五六月には五味子湯を常に服して肺金の氣を益するがよい。上に在つ

ては源を滋くし、下に在つては腎を補するものだ。その服湯の法は、五味子一大合を木臼で細かに搗き、甆瓶中に百沸湯をたぎらした中にそれを投じ、少量の蜜を入れ、封じて火の邊りに置けば良久して湯になる。それを任意に飲むのである。

○○元素曰く、孫眞人の千金月令に『五月には五味を常に服して五臟の氣を補し、盛夏と夏末に、體力が衰へて氣力が發動せぬ場合には黃芪、(一三)麥門冬を與へ、少量の生黃蘗を加へて湯に煎じて服ませる。その患者をして精神頓に加はり、兩足の筋力を涌出せしめる』とある。蓋し五味子の酸は人參の力を輔けて能く丙火を瀉し、同時に庚金を輔して耗散の氣を收斂するものである。

○○好古曰く、張仲景の八味丸はこれを用ゐて腎を補するのだが、やはり種子の形や氣味に就てその效用を述べ、それを治病の上に現はしたものだ。

○機曰く、五味を喘嗽の治療に使用するには、產地の南、北に依つて區別する必要がある。津を生じ、渇を止め、肺を潤ほし、腎を補す。つまり勞嗽の場合には北地の產を用ゐるがよい。風寒が肺に在るものには南地の產を用ゐるがよい。

○○愼微曰く、抱朴子に『五味は五行の精であつて、その子には五味がある。淮南公

(一三)湯液本草ニ此處ニ人參ノ二字アリ。

羨門子は十六年間これを服して顔色玉女の如く、水に入つて霑はず、火に入つて灼けなかつた』とある。

［附方］新十一。【久嗽肺脹】五味二兩、粟殼を白餳で炒つて半兩を末にし、白餳で彈子大の丸にし、一丸づつを水で煎じて服す。(衞生家寶方)【久欬の止まぬもの】丹溪方では、五味子五錢、甘草一錢半、五倍子、風化硝各二錢を末にし、乾して噙む。○攝生方では、五味子一兩、眞茶四錢を晒し研つて末にし、甘草五錢を煎じた膏で綠豆大の丸にし、三十丸づつを沸湯で服す。數日で癒える。【痰嗽、並に喘】五味子、白礬等分を末にし、三錢づつを生猪肺を炙熟して蘸け、細かに嚼んで白湯で飲下す。漢陽の庫兵黃六は、この病であらゆる藥も效驗がなかつたが、岳陽で遇つた一道人にこの方を傳授され、兩服すると病が遂に發らなくなつた。(普濟方)【陽事不起】新五味子一斤を末にし、一日三回、酒で方寸匕を服す。猪、魚、蒜、醋を忌む。一劑を盡く服すれば、百日以上に亙つて十女を御し得る效力がある。四時繼續して服用すれば功驗顯著なるものだ。(千金方)【腎虛遺精】北五味子一斤を洗淨して水に浸し、揉んで核を去り、再び水でその核を洗つて餘味を取り盡し、砂鍋に入れ

布で濾し、好き冬蜜二斤を入れ、炭火で緩に熬つて膏にし、瓶に取り收めて五日間火毒を出し、茶匙で一二匙づつを空心に百滾湯で服す。(劉公石保壽堂方)【腎虛白濁】及び兩脇、竝に背脊の穿痛するには、五味子一兩を赤く炒つて末にし、醋糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを醋湯で服す。(經驗良方)【五更の腎泄】凡そ五更頃になると一二回溏泄し、年を經て止まぬものを腎泄といふ。蓋し陰盛なる爲の現象である。脾は濕を惡むもので、濕すれば濡して困する。困すれば水の處置が完全でなくなり、水性は下流するから腎水が不足するのである。五味子を用ゐて腎水を强くし、五臟を養ひ、吳茱萸で脾の濕を除けば、それで泄は自から止むものだ。五味を梗を去つて二兩、茱萸を七回湯に泡けて五錢を共に香しく炒つて末にし、毎朝陳米飲で二錢を服す。(許叔微本事方)【婦人の陰冷】五味子四兩を末にし、口中の唾液で和して兎屎大の丸にし、數々陰中に納れて效を取る。(近效方)【爛弦風眼】五味子、蔓荊子の煎湯で頻りに洗ふ。(談野翁種子方)【赤遊風丹】漸次に腫大するには、五味子を焙じて研り、熱酒で一錢を服す。自消して神效がある。(保幼大全)

（一）牧野曰フ、本草綱目啓蒙ニハ紹興本草ノ圖(成州蓬蘽)ナドニ基ヅキ、之レヲくさいちごニ充テテアレドモ今採ラヌ。ソシテ是レハ下ノ如クスルヲ是ナリト思フ。又之レヲくまいちごトスル說モアルガ、しまばらいちごトスル方ガヨイト斷ズル。

（二）荊山ハ毒草類鬼臼ノ註參照。

（三）宛句ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。

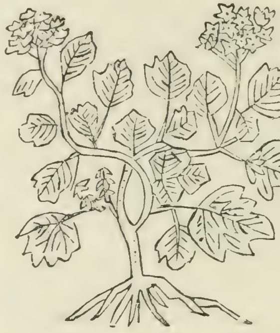
（一）蓬蘽

蘽の音は累(ルヰ)である。（本經上品）

和名　しまばらいちご
學名　Rubus Lambertianus, Ser.
科名　いばら科(薔薇科)

【釋名】　**覆盆**（別錄）　**陵蘽**（別錄）　**陰蘽**（別錄）　**寒苺**（會編）　**割田藨**　藨の音は苞(ハウ)である。

時珍曰く、蓬蘽(ほうるゐ)と覆盆とは同類のものだ。故に別錄に一名覆盆といつてある。ここにいふ種類のものは、丘陵の間に生じ、藤葉が蓬蓬累累と繁りはびこつて、覆盆と異るところから蓬蘽といふのである。陵蘽の蘽は藤であつて、その實は八月になつて熟する。地方人はそれを割田藨(かつでんはう)と呼んでゐる。



〔蓬　蘽〕

【集解】　別錄に曰く、蓬蘽は（二）荊山の平澤、及び（三）宛句に生ずる。

弘景曰く、蓬蘽とは根の名稱である。方家では用ゐない。昌容が服して顏容が少(わか)

くなつたといふそのものだ。覆盆とは實の名稱である。李當之は『これは一般に食ふ苺の子のことで、その津汁(しんじふ)を美味とする。その核は微細なものだ』といつてあるが、今藥用にする覆盆は少し異ふ。孰(いづ)れが正しいのか判然しない。

恭曰く、覆盆、蓬虆は一物の異名である。本來は實を謂ふのであつて根のことではない。李氏の『苺の子だ』といふが實際に近い。けれども產地に因つて差異があり、肥えた土地の產は子が大きくて甘く、瘠せた土地の產は子が細くて酸い。かやうに子に酸味があるのであつて、根に酸味があるのではない。陶氏は根を酸しとし、子を甘しとして果部に列記し、二條に重複記載したが、甚だしい出鱈目(でたらめ)だ。

志曰く、蓬虆とは覆盆の苗、莖のこと、覆盆とは蓬虆の子のことである。按ずるに、切韻に『苺の音は茂(ボ)であつて、その子は覆盆である。虆は藤である』とある。して見れば蓬虆は明かに藤蔓のものだ。陶氏は、蓬虆とは根のことだといひ、蘇氏は、子のことで、一物の異名だといつたが、いづれも事實でない。

頌曰く、蓬虆は覆盆の苗であつて、處處にあるが(四)秦、吳に就中(なかんづく)多い。苗は短いもので一尺以上にはならぬ。莖、葉みな刺があつて、花は白く、子は赤黃で大いさ

(四) 秦ハ今ノ陝西地方、吳ハ今ノ江蘇地方。

(五)徽ハ今ノ安徽省地方。

彈丸の半分ほどのものだ。下に柿の蔕のやうな蔕があつてその子を承けてゐる。小兒が多く食ふもので、五月實を採る。その苗、葉には一定の採收時期がない。江南地方ではこれを莓といひ、その地に生ずるものはやや晩く、三月に始めて苗が生え、八九月に花が開き、十月に實る。功用の點では同一だ。

士良曰く、現に藥物採收家の説を聽いて見るに、蓬虆は蠶莓子に似たもので、色紅くして大きく、その味は酸く甘い、葉は野薔薇に似て刺があるといひ、覆盆子は小さく、その苗もそれぞれ別なものだといふ。本草諸家はその實際の智識がないところから、いづれも蓬虆を覆盆子の根と主張してゐる。

大明曰く、莓子が蓬虆子で、樹莓が覆盆子だ。

宗奭曰く、蓬虆は覆盆とは違ふ。これは別の一種のもので、枯れ朽ちても枝梗が落ち散らないものだ。これは今は一般に用ゐられない。

藏器曰く、このものの種類に三種あるが、四月に熟し、覆盆のやうな狀態で味の甘美なもののみが正しくそのものだ。その他のものは藥用として役に立たぬ。

機曰く、蓬虆は(五)徽地方では寒莓といふ。塹に沿ひ、叢になつて蔓生し、莖は小

さく、葉は密で刺が多く、その實は四五十顆が一朶になり、一朶の大いさは盞の容量ほどのものだ。霜が降りてから始めて紅くなる。蘇頌の圖經に、これを覆盆の說明に記してあるが、誤だ。江南の覆盆もやはり四五月に熟する。やや晩いなどいふわけが何處にあらう。覆盆は、莖が粗く葉が疎で、結實が大きくて疎らに散つてゐる寒莓のやうに莖が細く葉が密で、結實が小さくして朶になるやうなものではない。一は夏熟し、一は秋熟する。何として同物といはれやう。

時珍曰く、このものの種類に凡そ五種ある。予は嘗て親しく採蒐し、一一爾雅に擧げてあるものと比較研究を試みた結果、始めて正確な事實を認め得たが、從來諸學者の說はいづれも信憑すべきものがない。

一種は、藤蔓が繁衍して莖に倒の刺があり、節毎に葉が生え、葉は大きくして掌のやうな形狀で、小葵の葉に類似し、表面は青く、裏面は白く、厚くして毛がある。六七月小さい白色の花を開き、蒂に就いた實を結ぶ。その實は三四十顆が一簇となり、生では青黃色だが、熟すれば紫黯色となり、微し黑毛があり、その形狀は熟した椹のやうで扁たい。冬季にも苗、葉が凋まぬ。俗に割田藨といふも

のだ。本草に謂ふ蓬虆そのものである。

一種は、蓬虆よりも蔓は小さいが、やはり鉤刺があり、一本の枝に五枚の葉があつて、その葉は小さく、表、裏共に青くして光があり。薄くして毛がない。白色の花を開き、四五月に實が成る。子はやはり蓬虆よりも小さく、成る數もまばらだ。生では青黄色、熟すれば黒赤色になる。冬季に苗が凋む。俗にいふ插田藨、本草にいふ覆盆子で、爾雅に茥は缺盆なりとあるそのものである。

この二種類は共に藥用に供する。

一種は、蔓は蓬虆よりも小さく、一本の枝に三枚の葉があつて、その葉は表面が青く、裏面は淡白色で微し毛がある。小さい白色の花を開き、四月に實り、色は熟すれば櫻桃のやうに紅いものだ。俗にいふ耨田藨であつて、爾雅にいふ藨そのものだ。故に郭璞の註に『藨は苺なり』といつたのである。子は覆盆に似て大きく、色は赤く、酢く甜くして食し得るものだ。

この種類は藥には用ゐない。

一種は、樹になつて生ずるもので、その樹の高さは四五尺、葉は櫻桃の葉に似

てゐるが、狹く長い。四月に小さい白色の花を開き、結實は覆盆子と一樣である
が、ただ色の紅い點が異つてゐる。俗にこれも藨といふ。爾雅にいふ山莓であつ
て、陳藏器の本草に所謂る懸鈎子とあるものだ。これは本條に詳記してある。
一種は、地に就いて蔓を生じ、長さ數寸になり、黃色の花を開き、結實は覆盆
のやうで鮮紅色だ。食はれぬものである。本草に所謂る蛇苺といふものだ。記載
は本條にある。

かやうに分類して考察すれば、蓬虆と覆盆と、それぞれの實際が確定されて來
るのであつて、李當之、陳士良、陳藏器、寇宗奭、汪機五氏の說は事實に近いけれ
ども、說明が不完全だ。陶弘景は、蓬虆を根といひ、覆盆を子といひ、馬志、蘇頌
は、蓬虆を苗、覆盆を子といひ、蘇恭は、同一物だといひ、大明は、樹生のものを
覆盆といつた。いづれも臆說であつて信據すべきものがない。

【氣味】【酸し、平にして毒なし】別錄に曰く、鹹し。士良曰く、甘く酸し、
微熱なり。【主治】【五臟を安んじ、精氣を益し、陰を長じ、人體を堅固にし、志
を强くし、力を倍し、子を儲けしめる。久しく服すれば身體を輕くし、老衰せぬ】

（本經）【突然の劇しき中風で、身熱し、大驚するを療ず】（別錄）【顏色を益し、髮を長くし、寒濕に耐へる】（恭）

【發明】覆盆子の條を見よ。

【附方】新一。【髮を長して落ちざらしめる】蓬蘽子を搾つて油を取り、日每に塗る。（聖惠方）

苗葉 覆盆に同じ。

（一）覆盆子（別錄上品）

和名 ふくぼんし
學名 Rubus coreanus, Miq.
科名 いばら科（薔薇科）

【校正】果部より此に移し入る。

【釋名】**葎**（爾雅）音は奎（ケイ）である。**缺盆**（爾雅）**西國草**（圖經）**畢楞伽**（圖經）**大麥莓** 苺の音は母（モ）である。**插田藨** 藨の音は苞（ハウ）である。**烏藨子**（綱目）

當之曰く、子が覆盆の形に似てゐるからかく名けたのだ。宗奭曰く、腎臟を益し、小便を縮める。これを服すれば尿器を用ゐる必要がなく、裏返にして置いてもよい。

（一）牧野曰フ、覆盆子ヲとつくりいちごト稱スルハ他ト混雜スルノ恐レアルヲ以テ、今之レヲ音讀シテふくぼんしト爲シタ。是レハ支那產デ我邦ニハ野生ハナイ。集解ニアル蒔田藨ハ多分我くさいちご(R. Thunbergii, Sieb. et Zucc.)デハナイカト想像スル、蘭山ハ之レヲなはし

かやうな事由からこの名稱が起つたのだ。時珍曰く、五月子が熟するとその色が烏赤色になる。それで俗に烏藨、大麥苺、插田藨と名け、また栽秧藨ともいふ。甄權の本草に、一名馬瘻、一名陸荊とあるが、一向意義を成さぬ名稱だ。

集解　別錄に曰く、五月に採收する。

藏器曰く、佛說に『蘇密那花で燈を點ずる』とあるは確かにこの花をいつたのだ。この花には三種あるが、四月に熟し、形狀が覆盆のやうで味の甘美なものが正しいそのものだ。その他のものは藥用として役に立たぬ。今一般に茅苺を取つて覆盆として用ゐてゐるが、誤だ。

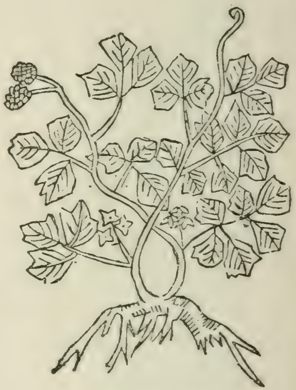
宗奭曰く、處處にあるが、(一)秦州、(二)永興、華州に就中多く、條が長くして四五月に紅く熟する。山間の住民はその時期に採收して市中へ賣りに出るが、その味は酸く甘く、外見は荔枝のやうで、大いさは櫻桃ほどあり、軟く紅くして美しいものだ。採收に時期が遲れると枝から蛆が出て、それを食へば多く熟するものだ。採收には五六分通り熟した時がよく、それを烈日で曝乾するのである。今世間では、その汁を取つて煎じて菓子に作つてゐるが、採收の際に水が著くと煎じて用ゐられな

ろいちごニ充テ居レドモ中ラヌ。なはしろいちごハ植物名實圖考ニハ紅梅消ト稱シテ居ル、同書ニ在ル潑盤、一名托盤ハ蓋シくさいちごデアラウト思フ。くさいちごノ葉ハ後ニハ五小葉ノモノトナレドモ、花時ノモノハ多クハ三小葉デアル。木村(康)曰ク、普通覆盆子ニハとつくりいちごノ果實ヲ充ツレドモ、現在上海市中ノモノハ全ク異リ比較的大ナル聚合果ヨリ成リ、比較的小ナル果托上ニ密生シテ長サ一・五糎程ノ全體倒蛋形ヲナスモノニシテ Rubus 屬ニ相違ナキモ、とつくりいちご、かぢいちご等ノ種類ニ非ズ。

(二)秦州ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。
(三)永興ハ宋ノ縣名。今ハ湖南省衡陽道ニ屬ス。華州ハ石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。

くなる。

時珍曰く、蓬蘽子は八九月に熟する。故に割田藨といひ、覆盆は四五月熟する。故に插田藨といふ。正に別錄に『五月に採る』とある說と合致する。この二種の藨は、いづれも熟すると烏赤色になる。故に能く腎を補ふ。四五月熟して色の紅いものは薅田藨だ。藥用には入れない。陳氏が茅莓を覆盆に當てるといふそのものは、蓋しこれを指したのだ。



[覆盆子]

正誤 詵曰く、覆盆は江東で懸鉤子と呼ぶものだ。大小、形狀、氣味、功力が同じい。北方の地には懸鉤といふが無く、南方の地には覆盆といふがない。これはその土地の關係上、生育時期に前後の差があるだけで、兩種別のものではない。

時珍曰く、南方の土地にも覆盆は極めて多い。懸鉤といふは樹生のもの、覆盆といふは藤生のもので、子の形狀は同じだが、覆盆は色が烏赤、懸鉤は色が紅赤であ

つて、功用もやはり同じくない。ここに誤を正して置く。

(四)「修治」　斅曰く、覆盆子は五月採つて烈日で曝乾する。さうせねば爛れ易い。雷曰く、凡そこれを使用するには、東流水で黄葉、幷に皮蔕を淘り去つて子を取り、酒を拌ぜて一夜間蒸し、東流水で二回淘り、また晒し乾してから用ゐる。時珍曰く、これを採取したならば、搗いて薄餅にして晒し乾し、密封して貯藏し、使用する時に酒を拌ぜて蒸すが尤も妙である。

「氣味」【甘し、平にして毒なし】權曰く、甘く辛し、微熱なり。

「主治」【氣を益し、身體を輕くし、白髪にならなくする】(別錄)【虚を補し、絕を續ぎ、陰を強くし、陽を健にし、肌膚を悅澤にし、五臟を安和し、中を溫め、力を益し、勞損、風虛を療じ、肝を補し、目を明にする。いづれも擣き篩ひ、每早朝水で三錢を服すべきものである】(馬志)【男子の腎精虛竭の陰痿を堅長ならしめる。婦人がこれを食へば妊娠する】(權)【これを食へば顏色を好くし、搾汁を塗れば髪が白くならぬ】(藏器)【腎臟を益し、小便を縮める。汁を取つて少量の蜜と共に煎じ、稀膏にして點服すれば肺氣虛寒を治す】(宗奭)

(四)木村(康)曰ク、日本藥局方ノ覆盆子舍利別ハとつくりいちご、又ハかぢいちごノ新鮮ナル果實ヲ用ヰテ製スルモノナリ。本劑ハ美色佳味ノ舍利別トシテ、種種ノ合劑殊ニリモナーデニ附加セラルルモノトス。(第四改日局方)

(五)青盲ハ綠內障ノコト。和名アキメクラ又アチソコヒ。(六)天行目暗ハハヤリメ。

【發明】覆盆と蓬蘽とは功用が大抵相近い。別物ではあるがその實は一類の二種であつて、一は早く熟し、一は晩く熟する。兩者はいづれをも兼ね用ゐて差支ない。その補益の功は桑椹と同樣だ。樹苺の場合はこれと混同して採用されぬ。

【附方】新一。【陽事不起】覆盆子を酒に浸し、焙じ研つて末にし、毎早朝酒で三錢を服す。(集簡方)

葉【氣味】【微し酸く鹹し、平にして毒なし】【主治】【採んで汁を絞り取り、目中に滴らせば膚赤を去り、絲筋のやうな蟲を出す】(藏器)【目を明にし、涙を止め、濕氣を收める】(時珍)

【發明】頌曰く、按ずるに、崔元亮の海上集驗方に『目暗で視力を失ひ、絶えず冷涙が出るもの、及び(五)青盲、(六)天行目暗等の疾を治す。西國草、一名畢楞伽、一名覆盆子を取つて日光で曝し乾し、極めて細かに搗いて薄綿で裹み、男兒を產んだ母の乳汁に、人が八九里(邦里一里半弱)歩行するほどの間浸し、それを日中に點けて仰臥する。三四日を過ぎずして少年の如き視力が囘復する。酒、麪、油物を禁ず』とある。

○○時珍曰く、按ずるに、洪邁の夷堅志に『(七)潭州の趙太尉の母は二十年の間(八)爛弦疳眼を病んだが、ある老媼が「これは中に蟲があるのだから取り除いて進ぜよう」といつて、山に入つてある草の蔓、葉を取つて咀嚼し、その汁を筒中に入れて持ち還り、病人の眼に黑い紗を被せてその上から下弦に滴すと、しばらくしてその紗の上に蟲が現はれて來た。それから數日にして下弦が乾き、更に前記の如くして上弦に滴らすと、また數十の蟲が出て全く癒えた。その後この方で他の患者に治療を加へたが、多くは效驗があつた。その草といふは覆盆子の葉であつた。蓋し治眼の妙藥だ』とある。

附方　新二。【牙疼に眼に點ける】覆盆子の嫩葉の搗汁を目に點ける。大抵三四回で涙と共に蟲が出て塊に成る。新葉がなければ乾いたものの濃煎汁を用ゐるもよし、覆盆子、卽ち大麥莓である。(摘玄方)【潰爛した瞼瘡】覆盆の葉を末にし、癒るまで、一日一回づつ瘡を酸漿水で洗つた後へ摻る。(直指方)

根　主治　【痘後の目瞖には、根を取つて搗き、それを澄まして粉を取つて日光で乾し、蜜で和して少量を瞖丁の上に點ける。一日二三回試れば自から散ずる。

(七)潭州ハ蟲部化生類沙蝨ノ註ヲ見ヨ。
(八)爛弦疳眼ハクサレメ、又タダレメ。

百日以内のものならばこれで治癒するが、久しく時を經過したものは治療し難い。(時珍)活幼口議にある。

(一)懸鉤子(拾遺)

和名 びろうどいちご
學名 Rubus corchorifolius, L. F.
科名 いばら科(薔薇科)

校正 果部より此に移し入る。

釋名 沿鉤子(日用) 葥(爾雅) 音は箭(セン)である。山莓(爾雅) 木莓(郭璞) 樹莓(日華) 藏器曰く、莖上に懸鉤(けんこう)のやうな刺があるところから名けたものだ。



[懸鉤子]

集解 藏器曰く、(二)江淮(かうわい)地方の林や澤などに生える。莖上に刺があり、その子は苺子のやうに酸くして美味である。世人はよくこれを食ふ。

(一)牧野曰フ、從來之レヲきいちご一名さがりいちご(R. palmatus, Thunb.)ニ充テテ居タガ、然シ下ノ如クびろうどいちごトスル方ガ正シイト思フカラサウ決定シタ、此レハ我邦ニモ野生ガアル。

(二)江淮ハ水部雨水ノ註ヲ見ヨ。

(三)白井曰ク、時珍說ノ懸鉤子ハ葉ニ毛ガ無ク、莖ハ白色デ倒刺アルト云フヲ見レバばろうどいちごニ充テ難シト思ハル。びろうどいちごハ葉ニ毛アリ、刺ハ曲ラズシテ正直ナリシトカト記憶ス。

(四)大觀ニ莖ニ作ル。

機曰く、樹苺は、枝梗が柔軟で刺があり、頗る金櫻に類したものだ。四五月に覆盆子のやうな實を結ぶ。これは、採て見ると蔕が實を摑むやうになつてゐて中が實し、味が酸い。覆盆は、蔕が脫けて中が虛ろになり味が甘い。これが相異點である。

時珍曰く、(三)懸鉤は樹生のもので、高さ四五尺になり、その莖は白色で倒な刺がある。その葉は細齒があつて色が靑く、毛がなく、背面は淡靑色だ。頗る櫻桃の葉に似て狹く長い。また地棠花の葉にも似てゐる。四月に小さい白色の花を開き、結實は色が紅い。現に一般に通じてやはり藨子と呼ぶ。爾雅に『葥は山苺なり』とあり、郭璞の注に『今の木苺である。實は藨苺に似て大きく、食へるものだ』とある。孟詵と大明とが、これを覆盆といつたのは誤だ。

【氣味】【酸し、平にして毒なし】

【主治】【酒を醒まし、渇を止め、痰を除き、酒毒を去る】(藏器)　【搗汁を服すれば、射工、沙虱の毒を解す】(時珍)

(四)**葉**　【主治】【燒き研つて水で服すれば、喉中の塞りたるに主效がある】(藏器)

根皮　【氣味】【苦し、平にして毒なし】　【主治】【胎兒が死亡して下らぬも

の。血を破る。婦人の赤帶下、久患の赤白痢、膿血、腹痛、蟲毒を殺す。突然の劇しき下血、いづれも濃く煮た汁を飲む】(藏器)

【附方】 新二。【血崩の止まぬもの】木莓根四兩を酒一盌で七分に煎じ、空心に溫服する。(臞仙乾坤生意) 【崩中痢下】婦人の崩中、及び晝夜數十回下痢して死せんとするものを治す。左の方を用ゐて腹に入れば復活する。懸鉤根、薔薇根、柿根、菝葜各一斛を釜に剉み入れ、藥の上四五寸まで水に漬け、それを三分の二に煮詰め、その汁を丸にし得るまでに煎じて梧子大の丸にし、一日三回、十丸づつを溫酒で服す。(千金翼)

蛇莓(一) (別錄下品)

和名 へびいちご
學名 Duchesnea indica, Focke.
科名 いばら科(薔薇科)

【釋名】 蛇藨の音は苞(ハウ)である。地莓(會編) 蠶莓 機曰く、地に接近して生ずるものだから地莓といふ。瑞曰く、蠶が老いる頃地上に紅く熟するもので、その中の空なるものを蠶莓といひ、中が實して極めて紅いものを蛇殘莓といふ。蛇

(一)牧野曰フ、田野ノ間ニ多キ普通ノ雜艸デアルガ、一種山地又ハ山足地ナドニやぶへびいちご(D. major, Makino.)ト稱スルモノガアル、多分支那ニモ之レガ在リハセヌカト思ハルルノハ救荒本草ニ圖セル雞冠果、一名

野楊梅ハ多分其レデアラウト想像セラルルカラデアル。

の毒が移つてゐはせぬかと疑はれるので、一般に食はない。

集解 弘景曰く、蛇苺は畑や野に多くある。子は赤色で、極めて苺の子に似てゐるが食へない。また藥にもせぬものだ。

保昇曰く、所在にあるもので、下濕の地に生える。莖の先に三枚の葉があり、花は黃で子は赤く、さながら覆盆子そのままで、根が敗醬に似てゐる。四月、五月に子を採り、二月、八月に根を採る。

宗奭曰く、田野、道旁、處處にある。地に附いて生え、葉は覆盆子のやうで、ただ光潔で小さく、微かな皺紋がある。花は黃色で、蒺藜の花ほどだがやや大きい。春末、夏初に茘枝のやうな色の紅い子を結ぶ。

機曰く、蛇苺は莖の長さ一尺にたらず、莖の端にただ一顆の小さい光潔な實を結ぶ。誤つて食へば脹するものだ。覆盆は苗が長く太く、結實が數顆あり、微し黑毛があつてこれとは異ふ。

時珍曰く、この植物は地に就いて細い蔓を引き、節節に根が生え、枝每に三枚の葉があり、葉には齒刻がある。四五月に五出の小さい黃花を開き、鮮紅色の實を結



〔蛇　苺〕

ぶ。その實の形状は覆盆に似たものだが、表面と蔕(たい)とが同じくなく、その根は甚だ細い。本草に汁を用ゐるとあるは、その莖、葉と根とを共に取るのであらう。仇遠の稗史には、訛(あやま)つて『蛇繆草(じやほくさう)』と書き『五葉七葉のものがある』といひ、又『俗に、これを食へば能く人を殺すといふ』とあるが、さやうなこともない。ただ冷涎(れいぜん)を發するだけのことだ。

汁 〔氣味〕(二)【甘く酸し、大寒にして毒あり】〔主治〕【胸腹大熱の止まぬもの】(別錄)【傷寒の大熱、及び溪毒、射工の毒に甚だ良し】(弘景)【月經を通じ、瘡腫を熁(けふ)し、蛇傷に傅ける】(大明)【孩兒(がいじ)の口禁に主效がある。汁を灌(そそ)ぐ】(孟詵)【湯火傷に傅ければ痛が止まる】(時珍)

〔附方〕 舊二、新一。【口中の瘡】天行熱で甚しきものには、蛇苺の自然汁半升を少しづつ嚥む。(傷寒類要)(三)【傷寒で下部に䘌瘡(あくさう)を生じたもの】蛇苺汁(四)二合づつを一日三回服し、同時に烏梅を漬けた水を濃くして崖蜜を入れて飲む。(肘後方)【水の

(二)木村(康)曰ク、へびいちごノ果實ハ有毒ニハアラザレドモ、多少ノ甘味ト共ニ一種ノ苦味ヲ伴ヒ食ノニ適セズ。

(三)此項大觀ニ毒攻手足腫痛トアリ。

(四)大觀ニ二升三ニ作リ、三服ヲ二服ニ作ル。

毒に中つた病」蛇苺の根を末に搗いて服し、また下部に導くには、汁一二升を飲むもよし。夏季水に入らうとする場合、豫め少量の末を中流に投ずれば更に障りがない。また射工を辟けるには、家屋の中に器に入れて貯へる。身體を水浴するにも少量をその水に投ずるがよし。（肘後）

(一)使君子（宋開寶）

和名　しくんし
學名　Quisqualis indica, L. var. villosa, Clarke.
科名　しくんし科（使君子科）

【釋名】 **留求子**　志曰く、俗間の言傳ひに、(二)潘州の郭使君が小兒の病を治療するに多くこの物を獨用したので、後世の醫家がそれに因つて使君子と呼ぶようになつたのだといふ。時珍曰く、按ずるに、嵇含の南方草木狀にこれを留求子といひ、『嬰孺の疾を療ず』とある。これで見ると魏、晉時代から已に用ゐられたもので、ただ名稱が異ふだけである。

【集解】 志曰く、(三)交、廣等の州に生ずる。形は巵子のやうで、稜瓣が深くて兩端が尖り、訶梨勒に似て輕いものだ。

(一)牧野曰フ、使君子ニハ二品ガアル、卽チ一ハ其種ノ基本品デ印度邊ニ産スル之レヲいんどしくんしト稱スル。一ハ其一變種デ卽チ支那産ノ使君子デアル、此モノハ其葉ニ細毛ガ多イ。

(二)潘州ハ今ノ廣東省茂名縣ノ地ナリ。

(三)交、廣ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

頌曰く、現に嶺南の州郡にいづれもある。山野の中、及び水の岸に生え、莖は手の指ほどの太さの藤になり、葉は二本の指の頭ほど、長さは二寸、三月花が著き、初は淡紅色で久して深紅色になり、五瓣である。七八月に子を結ぶ。その子は太さ拇指ほど、長さ一寸ばかり、巵子によく似て五稜があり、殼は青黑色で內に白色の仁がある。七月に採收する。



〔使君子〕

宗奭曰く、その仁の味は椰子のやうだ。醫家は殼をも兼用する。

時珍曰く、もとは海南地方交趾から出たもので、今は閩の(四)紹武、蜀の(五)眉州でいづれも栽培してゐるが、やはり生じ易く、その藤は葛のやうに樹に搦まつて上に伸び、葉は青くして(六)五加の葉のやうだ。五月花を開く。この花は一簇に葩が二十ほどあり、色紅く、輕盈で海棠のやうだ。實は長さ一寸ばかりで五瓣合して稜があり、初には半ば黃色だが老いると紫黑色になる。その中の仁は長くして榧仁のやう、色と味とは栗のやうだ。久しく置けば油

(四)紹武、一ニ邵武ニ作ル。今ノ福建省邵武縣ノ地ナリ。閩ハ福建地方。
(五)眉州ハ山草類狗脊ノ註ヲ見ヨ。蜀ハ今ノ四川省。
(六)五加ハウコギ。

が黒くなつて用ゐられない。

(七)**氣味**【甘し、溫にして毒なし】(開寶)**主治**【小兒の五疳、小便白濁。蟲を殺し、瀉痢を療ず】(開寶)【脾、胃を健にし、虛熱を除き、小兒のあらゆる病、瘡癬を治す】(時珍)

發明　時珍曰く、凡そ蟲を殺す藥は多くは苦く辛いものだが、使君子、榧子は甘くて蟲を殺す點が異つてゐる。凡そ大人、小兒の蟲ある病には、ただ毎月上旬、早朝空腹の時に使君子仁數箇を食ひ、或は殼の煎湯で嚥下せば、翌日蟲がみな死んで出るものだ。或は、七箇を生、七箇を煨いて食ふも良しといふ。熱い茶を飲むことを忌む、これを犯せば瀉する。この物は、味は甘く、氣は溫であつて、よく蟲を殺すと同時に脾、胃を益するものだ。故にその結果はよく虛熱を斂めて瀉痢を止める。小兒の諸病の要藥だ。俗醫は、蟲を全部殺し盡せば食物が消化しないなどといふが、愚劣千萬なことである。樹木に蠹があり、建築物に蟻があり、國家に不逞の賊があつて果して福か禍か。養生を専門とする道術家は先づ三尸を去るのであるが、それ等の點からも類推されるわけであらう。

(七)木村(康)曰ク、仁ハ脂肪油ヲ含有シ主トシテパルミチン酸及油酸ノグリセリードヨリ成ル、尚少量ノ結晶性物質ヲ含有スルガ如シ。
於多智―藥誌、大六、(四二〇)一三五。
猪子森明―藥、誌、明、四二(三三一)一〇四四。
(藥理)水性越幾斯ヲ二十日鼠ノ皮下ニ注射スルニ、注射後數分ニシテ疲勞狀ヲ呈シテ靜止シ、漸次呼吸不規則且緩漫トナリ、一―二時間後全身ニ輕度ノ痙攣來リ、呼吸停止ス、心臟ノミハ呼吸停止後數分搏動ヲ保持ス。最小致死量ハ二十日

(八)**附方** 新六。

【小兒の脾疳】使君子、蘆會等分を末にし、米飲で一錢づつを服す。(儒門事親)【小兒の痞塊】腹大し、肌瘦し、顏色黄に、次第に疳疾となりたるには、使君子仁三錢、木鼈子仁五錢を末にし、水で龍眼大の丸にし、一丸づつを雞子一箇の頂點を破つた中へ入れ、飯の上に置いて蒸し熟し、空心に食ふ。(楊起簡便單方)【小兒の蛔痛】口から涎沫を流すには、使君子仁を末にし、一錢を米飲で調へて(九)五更時刻に服す。(全幼心鑑)【小兒の虚腫】頭部、面部、陰嚢が皆浮腫するには、使君子一兩を皮を去り、蜜五錢を盡きるまでつけて炙き、それを末にして一錢づつを食後に米湯で服す。(簡便方)【頭瘡、面瘡】使君子仁を香油少量に浸したもの三五個を、就寢時に細に嚼んで香油で飲下す。久して自ら癒える。(普濟方)【蟲牙の疼痛】使君子の煎湯で頻に漱ぐ。(集簡方)

(一)木鼈子(宋開寶)

和名 もくべつし
學名 Momordica cochinchinensis, Spreng.
科名 うり科(葫蘆科)

校正 木部より此に移し入る。

鼠ノ體重一瓦ニツキ越幾斯約〇、〇二瓦ナリ。

鶴田静麿―長醫誌大、一三(一)四八二。

(八)木村(康)曰ク、蛔蟲驅除藥ニ配合ス。

(九)五更ハ四時カラ六時マデノ間。

(一)牧野曰フ、もくべつしハ普通ニ栽培セラレテ居ルつるれいし即チ苦瓜ト同屬デアッテ支那、安南、印度、馬來、フイリッ

ツピン島ニ產スル。蔓木デ葉ハ五裂シ、果實ハ卵圓形デ滿面ニ棘刺ヲ生ズル。果中ニ大ナル種子ガアツテ、是レガ即チ木鼈子デアル。

(二)朗州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。

(三)湖廣ハ蟲部化生類金蠶ノ註、杭越ハ石部雲母ノ註、全州ハ芳草類薫草ノ註、岳州ハ隰草類連翹ノ註ヲ見ヨ。

(四)大觀ニ花ニ作ル。

(五)山藥ハヤマノイモ。

(六)栝樓ハキカラスウリノ一種。

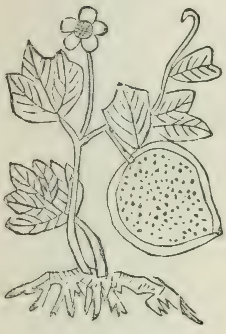
木鼈

釋名 志曰く、その核が鼈や蟹の形狀に似てゐるところから名けたものだ。

集解 志曰く、(二)朗州、及び南方の地に產する。七八月に實を採る。

頌曰く、今は(三)湖廣の諸州、及び杭・越、全、岳州にいづれもある。春苗が生え、藤になつて葉を生じ、五(四)椏があり、(五)山藥のやうな形狀で、色靑くして表面は光る。四月に黃色の花を著け、六月實を結ぶ。その實は(六)栝樓に似て極めて大きく、生では靑く、熟すれば紅黃色となり、肉上に軟い刺があり、一箇の實每に三四十箇の核があつて、その形狀は扁くて鼈のやうだ。八九月に採收する。嶺南地方では、嫩い實、及び苗、葉を取つて茹にし蒸して食ふ。

宗奭曰く、木鼈子は、蔓は年每に一回枯れるが、根は枯死せずして春漸漸に苗が生え、葉は蒲萄のやうだ。その子は一方の端の尖つたものが雄であつて、凡そこれを種



〔木 鼈 子〕

植するには、雌雄を合せて麻で縛り付けて植ゑ、苗が生えてからその雄を取り放すと實を結ぶものだ。

時珍曰く、木鼈は、核の形が扁くごろごろして碁石ほどの大いさのものだ。その仁は青綠色である。藥には油を取去つて入れる。

仁 (七)氣味 【甘し、溫にして毒なし】時珍曰く、苦く微し甘し、小毒あり。

主治 【折傷を治し、結腫惡瘡を消し、肌を生じ、腰痛を止め、粉刺、䵟黯、婦人の乳癰、肛門腫痛を除く】(開寶)【醋で摩れば腫毒を消す】(大明)【疳積痞塊を治し、大腸を利す。瀉痢、痔瘤、瘰癧】(時珍)

發明 機曰く、按ずるに、劉績の霏雪錄に『木鼈子は有毒で食はれぬものだ。昔、(八)薊門のある者は二人の子持であつたが、その子等が食事を放恣にしたために痞になつたとき、その父がある方を聞傳い、木鼈で豬肉を煮て食はせたところ、幼い方の子はその夜の內に、上の方の子は翌日に死亡した。友人馬文誠の方書にも此の方が載せてあつたが、かやうな次第だから此を記錄して大方のために警戒する。

時珍曰く、南方では、その苗、及び嫩實を取つて食ふが何の恙もない。それを見

(七) 木村(康)曰ク、木鼈子ハ約一四%ノ脂肪油ト、二種ノサポニン體竝ニ一種ノ複糖體ヲ含有ス。攝陽主人—藥誌、一六(一三)五〇六。中尾万三—藥誌六、八(四五三)八九七。

(八) 薊門ハ隰草類大薊ノ註ヲ見ヨ。

ると、それほどのものでもないやうに思はれるが、或ものは、豬肉と調和せぬからだといひ、或は他の忌むものを犯したためだともいふ。全然木鼈の罪とばかりはいへない。

附方　舊一、新十九。【酒疸脾黃】木鼈子を醋に磨つて一二盞を服す。利すれば效がある。（劉長春濟急方）【脚氣腫痛】木鼈子仁を一箇毎に二つにし、麩で炒つて切り碎き、再び油が盡き去るまで炒つて二兩に厚桂半兩を入れて末にし、熱酒で二錢を服す。醉つて汗が出れば癒える。夢に祕授した方である。（永類方）【濕瘡脚腫】歩行困難なるには、木鼈子四兩を皮を去つて甘遂半兩と末にし、豬腰子一個を膜を去つて切片した中にその末四錢を入れ、濕紙で包んで煨熟し、空心に米飲で飲下す。服して後、兩脚を伸べる。大に歩行が便利となる。ただ二三日白粥を食ふが妙である。（楊拱醫方摘要）【陰疝偏墜】痛み甚しきには、木鼈子一箇を醋に磨り、黃蘗、芙蓉末を調へて傅ける。直ちに止まる。（壽域神方）【久瘧の母あるもの】木鼈子、穿山甲を炮いて等分を末にし、三錢づつを空心に溫酒で服す。（醫方摘要）【腹中の痞塊】木鼈子仁五兩を獖豬腰子二斤を批開した中に入れ、串に刺して煨熟し、それを搗き爛

(九)鹹齁、未詳。喘息ノ類ナリ。
(一〇)糕ハ米粉ヲ蒸シテ作ル團子。

した中へ黄連三兩を末にして入れ、蒸餅で和して綠豆大の丸にし、三十丸づつを白湯で服す。(醫方集成)【小兒の疳疾】木鼈子仁、使君子仁等分を搗いて泥にし、米飲で芥子大の丸にし、一二日間、五分づつを米飲で服す。(孫天仁集效方)【疳病の目矇】物を見得ざるには、木鼈子仁二錢、胡黄連一錢を末にし、米糊で龍眼大の丸にして雞子の中に入れ、蒸熟して雞子と共に食ふが妙である。(同上)【倒睫拳毛】風が脾の經に入りたるが原因で風痒を發し、絶えず目を擦り、久くして赤爛となり、拳毛が内部へ入るものには、木鼈子仁を搗き爛らし、帛で包んで條にし、左眼には右鼻を塞ぎ、右眼には左鼻を塞ぐ。毛は自ら上下に分れる。續いて蟬蛻の藥を服するが妙である。(孫天仁集效方)【肺虚の久嗽】木鼈子、款冬花各一兩を末にし、三錢づつを火で焚いて煙を吸ひ、良久して涎を吐き、茶で喉を潤ほす。かく五六回して後補肺藥を服す。ある方では、木鼈子一箇、雄黄一錢を用ゐる。(聖濟錄)【小兒の(九)鹹齁】大なる木鼈子三四箇を水に磨つて飲み、雪(一〇)糕を食つて壓し下し、痰を吐出する。重病のものも三服で效がある。(摘玄方)【水瀉の止まぬもの】木鼈仁五箇、母丁香五箇、麝香一分を研末し、米湯で調へて膏にし、それを臍中に納れて外から膏藥を貼つて

抑へる。（吳旻扶壽精方）【痢疾の禁口】木鼈仁六箇を泥に研つて二分し、麪の燒餅一箇を二つに切つた半分に一孔を穿けて藥を入れ、熱に乘じて患者の臍上へ置き、二時間置いてまた半分の燒餅で換へる。痢が止まつて食思が生ずるものだ。（鄧眞人經驗方）【腸風瀉血】木鼈子を桑柴で燒いて性を存し、冷えてから末にし、一錢づつを煨葱白酒で空心に服す。これを烏金散と名ける。（普濟方）【肛門の痔痛】孫用和秘寶方では、木鼈仁三箇を砂盆で泥のやうに擂り、百沸湯一盌を入れて熱に乘じて先づ患部を熏じ、後に洗ふ。一日三回づつ試み、少量を塗る。○瀕湖集簡方では、木鼈仁の潤を帶びたるもの雌雄各五箇を乳細して七丸にし、盌で覆ふて濕らせて置き――乾してはならぬ――一丸づつを唾で溶化して痔の上に貼れば痛が去る。一夜に一丸づつ用ゐれば自から消する。江夏の鐵佛寺の蔡和尙がこの病を患つて忍び難く苦んだとき、ある人に此の方を傳受して癒えた。數人の治療にこれを實驗して皆效果があつた。【年を經た瘰癧】木鼈仁二箇を油を去つて研り、雞子白で和して瓶に入れ、飯中に置いて蒸熟し、食後に食ふ。毎日一服すれば半月で效がある。【小兒の（二）丹瘤】木鼈子仁を泥のやうに研り、醋で調へて一日三五回傅ければ效がある。（外科精義）【突

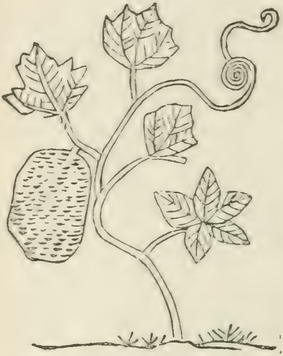
（二）瘂疹ノ類、赤斑塊ヲナシ、其肉腫結硬ナルモノヲ云フ。

然耳の熱腫するもの』木鼈子仁一兩、赤小豆、大黄各半兩を末にし、少量づつを生油で調へて塗る。（聖惠方）【(一二)風牙腫痛】木鼈子仁を醋で磨つて搽る（普濟方）

(一)番木鼈（綱目）

和名　まちん
和名　Strychnos Nux-vomica, L.
科名　まちん科（馬錢科）

【釋名】馬錢子（綱目）苦實把豆（綱目）火失刻把都　時珍曰く、形狀が馬の連錢の紋型に似てゐるから馬錢と名けるのだ。



〔番木鼈〕

【集解】時珍曰く、番木鼈は(二)回回國に生ずるものだが、今は西方の土地、(三)邛州の諸處にいづれもある。蔓生のもので、夏黄色の花を開き、七八月實を結ぶ、その實は栝樓のやうで、生では青く熟すれば赤くなる、やはり木鼈のやうで、その核は木鼈より小さく、色が白い。彼の地

(一二)風牙ハ齒神經痛ノコト。

(一)牧野曰フ、まちんハ馬錢ノ字音カラ出タ名デ、馬錢ハ番木鼈ノ一名デアルコト下ニ見ルが如クデアル。まちんハ中等大ノ常綠喬木デ、圓形ヲ成セル有柄葉ハ枝ニ對生スル。花ハ小形デ綠白色ヲ呈シ、下ハ筒ヲナシ上ハ五裂シ花喉ニ五雄蘂ガアル。果實ハ大ナル球形ノ漿果デ、熟スレバ橙黄色ヲ呈シ、果中ニ數個ノ種子ガアル。扁圓形ヲナシ凡ソ七分許ノ徑ガアツテ胚乳が多イ。此種子ヲ Nux Vomica（此名ハ早ク既ニ十六世紀頃ニ藥店

方では、これは百二十種の病を治するもので、それぞれの病證に對してそれぞれの效力を導く湯があるといふ。或は豆腐で加工して用ゐるが良しといひ、或は犬を毒殺し得るものだともいふ。

仁　(四)氣味【苦く、寒にして毒なし】主治【傷寒熱病、咽喉痺痛、痞(ひ)塊(くわい)を消す。いづれもこれを含んで汁を嚥(の)み、或は水に磨つて噙(ふく)み嚥む】（時珍）

附方　新四。【喉痺で痛むもの】番木鼈、青木香(しやうもくかう)、山豆根(さんづこん)等分を末にして吹く。（楊拱醫方摘要）【(五)纏喉風腫】番木鼈仁一箇、木香三分を共に水に磨り、それで熊膽三分、膽礬五分を調へ、雞の羽毛で患部を掃ひ效を取る。（唐瑤經驗方）【(六)癍瘡(はんさう)の目に入りたるもの】苦實把豆兒(くじつはづる)、即ち馬錢子半箇、輕粉、水花銀硃、各五分、片腦、麝香、枯礬少量を末にし、左目に入つたものには右耳に吹き入れ、右目に入つたものには左耳に吹き入れる。一日二回。（田日華飛鴻集）【病のために胎を下さんとするもの】苦實把豆兒を研つて膏にし、陰部に三四寸納れる。（集簡方）

デ其者ノ生藥ノ名トシテ用キテ居タモノトノ事デアル）ト稱シ、藥用ニ供スルガ極メテ有毒デアル。本植物ハ印度、ビルマ、安南、爪哇邊ニ生ズル。

(二)回回ハ石部玉類青琅玕ノ註ヲ見ヨ。

(三)邛州ハ梁ニ置ク今ノ四川省邛崍縣ノ地ナリ。

(四)木村(康)曰ク、成分ハストリキニーネ及ビブルチンノ二種ノアルカロイド約四%ヲ含ム。應用ハ或ル神經系統ヲ興奮スルノ目的ヲ以テ藥用ニ供ス。ソノ製品ハ丁幾、越幾斯等ニシテ、又ストリキニーネ、及ソノ鹽類特ニ硝酸ストリキニーネヲ製スルニ用ウ。生藥學、三六三。

(五)纏喉風腫ハ咽喉粘膜炎。

(六)癍瘡ハ痘瘡ノ一名。

(一)牧野曰フ、馬兜鈴ハ我邦ニモ產スルうまのすゞくさデ、此草ハ莖葉ニ一種ノ强烈ナ臭氣ガアルノデ、じやかうさうノ名モアル。馬兜鈴ハ其果實ノ狀カラ來タ漢名デアル。今日支那デハ其根ヲ靑木香ト稱シ、蛇ニ咬マレタ時ノ解毒劑トシテ賞用セラルル生藥トナツテ居ル。

木村(康)曰ク、馬兜鈴ハ大連品、上海品共ニひろはうまのすずくさ(A. contorta, Bunge)ノ果實ヲ用ヰルヲ見ル。土靑木香(靑木香)ハ則チ根ヲ稱スルモノニシテ、支那品ハひろはうまのすずくさニ起因スベク、我邦ニ於テハうまのすずくさヲ充

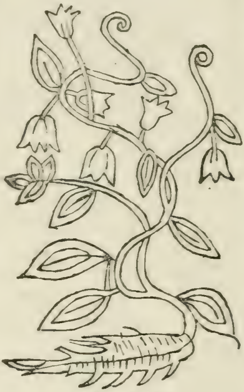
(一)馬兜鈴（宋開寶）

和名　うまのすゞくさ
學名　Aristolochia debilis, Sieb. et Zucc.
科名　うまのすゞくさ科（馬兜鈴科）

校正　唐本草の獨行根を併せ入る。

釋名　**都淋藤**（肘後）　**獨行根**（唐本）　**土靑木香**（唐本）　**雲南根**（綱目）　**三百兩銀藥**

宗奭曰く、蔓生のもので、木に附いて上に伸び、葉が落ちてからもその實がなほ垂れ、その形狀が馬の首に附ける鈴のやうなものだからこの名稱が起つたのだ。時珍曰く、その根は人を吐、利せしめるもので、微かに香氣があるところから、獨行、木香の名稱がある。嶺南地方ではこれで蠱を治療し、その名稱に隱語を用ゐて三百兩銀藥といふ。肘後方に、都淋と書いたのは蓋し誤傳である。



〔馬兜鈴〕
—獨行根—

ツレドモ、尙うまのすずくさ其他一二近緣ノモノニヨルモノアルガ如シ。上海自然科學硏究所彙報第一卷第二號（一九二九）三七。
(二) 山南ハ隰草類漏盧ノ註ヲ見ヨ。
(三) 蘿藦ハカガイモ。
(四) 關中ハ山草類淫羊藿ノ註、河東、河北ハ石部丹砂ノ註、江淮ハ水部雨水ノ註、夔ハ山草類黃連ノ註、浙ハ山草類朮ノ註ヲ見ヨ。

【集解】志曰く、獨行根は古い堤や城壁の旁に生え、所在の平澤叢林中にいづれもある。(二)山南地方では土靑木香・一名兜鈴根といふ。蔓生で、葉は(三)蘿藦に似て圓く且つ澀く、花の色は靑白だ。子の大いさは桃李ほどで長く、十月以後に枯れると頭が四系に開いて嚢のやうになり、その中の實は薄く扁くして楡莢に似てゐる。根は扁くして長さ一尺ばかり、葛根の臭氣があり、また漢防已にも似てゐる。二月、八月に根を採る。

頌曰く、馬兜鈴は今は(四)關中、河東、河北、江淮、夔、浙の州郡にいづれもある。春苗が生えて蔓になり、樹を繞つて生長する。葉は山蕷の葉のやうで、厚く大きくして背面が白い。六月黃紫色の頗る枸杞の花に似た花を開き、七月實を結ぶ。その實は大棗ほどで、形狀は鈴に似て四五瓣になつてゐる。根は雲南根と名けるもので、木香に微し似てゐる。太さは小指ほどで赤黃色だ。七八月實を採つて暴乾する。

實【修治】斅曰く、凡そ實を採つたならば、葉と蔓とを去り、生絹袋に盛つて屋根の東隅の角に懸け、乾いてから劈開して革膜を去り、淨い子を取つて焙じて用ゐる。

(五) 木村(康)曰ク、馬兜鈴ハ鎮咳、祛痰ノ效アリ、用量四瓦。土青木香ハ蟲毒及ビ蛇毒ノ解毒藥ニ煎劑又ハ酒ニ浸出シテ飲用ス、用量四—一〇瓦。(邦産藥用植物)

(五)**氣味** 【苦し、寒にして毒なし】 權曰く、平なり。時珍曰く、微し苦く辛し。杲曰く、味厚く、氣薄く、陰中の微陽であつて、手の太陰の經に入る。**主治** 【肺熱欬嗽、痰結喘促、血痔瘻瘡】(開寶) 【肺氣が上急して坐して呼吸し得ず、欬逆が引續いて止まぬもの】(甄權) 【肺氣を淸し、肺を補し、肺中の濕熱を去る】(元素)

發明 時珍曰く、馬兜鈴は、體は輕虛で、熟すれば上に懸つて四面に開き、肺の形象がある。故に能く肺に入るのだ。氣は寒で味は苦く微し辛い。寒は能く肺熱を淸し、苦、辛は能く肺氣を降すものだ。錢乙が補肺阿膠散にこれを用ゐたのは、肺を補するが直接の目的ではなく、熱を淸し氣を降すことを目的としたのである。邪が去れば肺が平安になる道理であつて、その中に用ゐてある阿膠、糯米は確かに肺を補ふ藥である。湯劑中にこれを用ゐれば多くは吐くものだ。故に崔氏の方では、これを用ゐて蠱を吐かせる。この物が肺を補し得るものでないことはその點からも推すことが出來る。

附方 舊三、新二。【水腫腹大】 喘急するには、馬兜鈴の煎湯を日毎に服す。(千金方) 【肺氣喘急】 馬兜鈴二兩を殼、及び膜を去り、酥半兩と盌內に入れてよく拌ぜ、

慢火で炒乾し、甘草を炙いて一兩を末にし、一錢づつを水一盞で六分に煎じ、溫にして呷ひ、或は嚥む。(簡要濟衆)【一切の心痛】大人、小兒、男子、婦人に拘らず、大馬兜鈴一箇を燈火の上で燒いて性を存し、末にして溫酒で服す。立ろに效がある。(摘玄方)【蛇、蠱の解毒】飲食中にその毒があつて、ために咽中に何物かあるやうに覺え、嚥んでも下らず、吐いても出ず、心下が熱悶するには、兜鈴一兩を水で煎じて服す。直ちに吐出する。(崔行功纂要方)【痔瘻腫痛】馬兜鈴を瓶の中で燒き、その烟で患部を熏ずるが良し。(日華本草)

獨行根　氣味　【辛く苦し、冷にして毒あり】大明曰く、毒なし。志曰く、毒あり。多く服してはならぬ。吐利して止まぬものだ。主治　【鬼疰積聚、諸毒熱腫。蛇毒には、水で磨つて泥にし、一日三四回封ずれば立ろに瘥える。水で一二兩を煮て汁を取つて服すれば蠱毒を吐く。又、搗いて末にし、水で調へて丁腫に塗れば大いに效がある】(唐本)【血氣を治す】(大明)【大腸を利し、頭風瘙痒、禿瘡を治す】(時珍)　記載は精義にある。

附方　舊一、新四。【五種の蠱毒】肘後方に『席辯刺史の言に、嶺南地方の土民

は、多く食物中に毒を混ぜて人をして漸次に食事不能にし、胸、背が漸次に脹り、先づ寒氣がして瘴に似た症狀を起さしめる。その際には、都淋藤十兩を水一斗、酒二升で三升に煮取つて三回に分服する。毒は尿に隨つて排出する。十日間毒物を食ふことを愼む。もしなほ瘥えぬときは更に服す。その地方ではこれを三百兩銀藥と呼ぶ』とある。○又、支大醫は『兜鈴根一兩を末にし、水で煎じて頓服すれば蠱を吐出するものだ。なほ吐き盡きぬときは再服する。或は末にして水で調へて服するも效驗がある』といつた。【草蠱の中毒】この術は(六)西良の西、及び嶺南地方で用ゐられるもので、その毒に中り、咽に入つて死せんとするには、兜鈴苗一兩を末にし、溫水で一錢を調へて服す。蠱を消し化して排出し、神效がある。(聖惠方)【腸風漏血】馬兜鈴藤、穀精草、荊三稜、川烏頭を炒り、この三味各等分を水で煎じ、先づ熏じてから洗ふ。(普濟方)【丁腫の復發】馬兜鈴根を搗き爛し、蜘蛛網で裹んで傅ける。少時して根が出る。(肘後方)【惡蛇傷】青木香半兩を湯に煎じて飮む。(袖珍方)

(六)西良、未詳。

(一)榼藤子（宋開寶）

和名　もだま
學名　Entada scandens, Benth.
科名　まめ科（荳科）

校正　木部より此に移し入る。

釋名　**象豆**（開寶）　**榼子**（日華）　**合子**（拾遺）　時珍曰く、その子が榼（かふ）の形をなしてゐるところから名けたものだ。

集解　藏器曰く、按ずるに、廣州記に『榼藤子は廣南の山林の間に生ずる。藤になつて樹に著き、(二)通草藤のやうだ。その實は三年經過して始めて熟する。角（さや）は弓袋のやう、子は雞卵ほどで、その外部は紫黑色だ。その殼を丹藥を貯藏するに用ゐると、年を經ても腐敗變質しない。その殼中の仁を藥に入れるには、炙いて用ゐる』とある。

時珍曰く、子は紫黑色で微し光り、



〔榼藤子〕

(一)牧野曰フ、もだまハ藻玉ノ意デ、此豆ガ潮ニ流サレ海藻間ニ停滯セシモノヲ偶マ漁網デ揚ゲ、海藻ニ生ル實ト想像シ藻玉ト稱シタモノデアル。藤本デ巨大ナ莢ヲ結ビ、其豆ハ圓扁デ栗色ヲ呈シテ居ル。質堅ク往往緒メナドニスル。本植物ハ太平洋諸島、亞細亞、亞弗利加ヨリ西印度ニマデモ分布シテ居ルモノデアル。白井曰ク、臺灣ニハ普通ノもだまノ外ニ尙三種ノ異品ヲ產ス。E. phaseolides, Merr. E. Koshunensis, Hayata et Kanehira, E. formosana, Kanehira. 是ナリ

(二)通草ハアケビ。

(三)本書ニ口ヲ之日一ノ三字ニ作ル。

大いさは一二寸で圓く褊い。世間では、多く中の肉を剔り去つて藥瓢に作つて腰に垂れる。

仁 氣味 【澁く甘し、平にして毒なし】 主治 【五痔、蠱毒、飛尸、喉痺には、仁を粉にし、微し熬つて水で一二匕を服す。また大豆に和して顔を澡へば鼾䵴を去る】(藏器) 【小兒の脫肛、血痢、瀉血を治す。いづれも灰に燒いて服す。或は一箇を瓤を割いて熬り研り、空腹に熱酒で二錢を服す。三服以內で必ず效がある】(開寶) 【諸種の藥毒を解す】(時珍) 記載は草木狀にある。

附方 舊三、新一。 【喉痺腫痛】 榼藤子を燒いて研り、酒で一錢を服す。(聖惠方)

【五痔下血】 榼藤子を燒いて性を存し、米飲で二錢を服すれば功がある。(寇氏衍義)

【腸風下血】 華佗中藏經には『榼藤子二箇、蛀の付かぬ皂莢子四十九箇を燒いて性を存して末にし、二錢づつを溫酒で服し、少頃して再び酒一盞を飲み、(三)口つづけにこの藥を服す。極めて效がある』とある。○聖惠方では、榼藤子三箇、厚く重いものを濕紙で七重に包んで煨熟し、殼を去り肉を取つて末にし、一錢づつを食前に黄芪湯で服す。一日一回。

【附録】 (四)**合子草**（拾遺）　藏器曰く、子、及び葉、小毒あり。蠱毒、及び(五)蛇咬に主效がある。搗いて瘡上に傅ける。岸傍に蔓生するもので、葉は尖り、花は白く、子は中が兩片になつてゐて合子のやうだ。

(一)預知子（宋開寶）

和名無し
學名未詳
科名未詳

【釋名】 **聖知子**（日華）　**聖先子**（日華）　**盍合子**（日華）　**仙沼子**（日華）　志曰く、子二箇を取つて衣服の領に著けて置くと、蠱毒に遇つたとき聲が(二)聞え、それで預め蠱毒のあることが知れると言傳へてある。それでこの諸名があるのだ。時珍曰く、仙沼とあるは仙棗の訛かと思はれる。

【集解】 志曰く、預知子は皮殼があつて、その實は皂莢の子のやうだ。

頌曰く、舊本には產地の州郡を記載してないが、今は(三)淮、蜀、黔、(四)壁の諸州にいづれもある。蔓になつて生え、大木の上に懸り、葉は綠で三角があり、表面は色が深く、裏面は淺い。七月、八月に房になつた實がなり、生は青く、熟すれば深

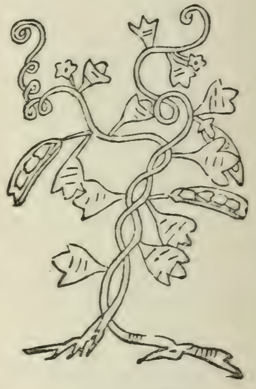
(四) 牧野曰フ、合子草ハウリ科（葫蘆科）ノごきづる卽チ Actinostemma lobatum, Maxim. var. racemosum, Makino. デアル、一年生ノ蔓艸デ河岸井ニ水傍ニ生ズル。

(五) 大觀ニ蛇ヲ蝅ニ作ル。

(一) 牧野曰フ、預知子ハ何ノ植物ダカ判ラヌ、又其科モまめ科（荳科）ナルカ否ヤ全ク不明デアル。白井曰ク、森枳園ノ牽牛子攷ニ據レバ預知子、一名仙沼子ハ本草和名ニ之多都岐ノ和名ヲ記スルモノデ、本邦古代ノ醫家ハ產難ヲ辟除スル藥トシテ姙婦ノ帶中ニ褁ミ帶バシメタモノデ、玉海、玉藥、園大曆等ニ其紀事ガアリ、

其植物ハ今日ノごきづるデ、是ガ蘇敬以前ニ支那デ牽牛子ト稱シタ植物デアルトノ説デアル。
(二)本草彙言ニハ開下ノ其字ヲ嘖嘖ノ二字ニ作ル。
(三)淮ハ安徽地方、蜀ハ四川地方。黔ハ山草類黃連ノ註ヲ見ヨ。
(四)壁州ハ今ノ四川省壁山縣ノ地ナリ。

紅色となる。一房毎に五七箇の子があり、皀莢子のやうで、斑褐色で飛蛾(ひが)のやうな光潤がある。現に蜀地方では極めて貴重品視され、得難いものとされてゐる。採收に一定の時期はない。根は冬季に採つて陰乾するものだが、その功力は子よりも勝れてゐる。山間の住民はこれを聖無憂(せいむう)と呼ぶ。



〔預知子〕

子仁　【氣味】【苦し、寒にして毒なし】大明曰く、温である。仁の二箇並んであるものは帶びるのによし。【主治】【蟲を殺し、蠱を療じ、諸毒を治す。皮を去つて研つて服するが有效だ】(開寶)【一切の風を治し、五勞、七傷を補す、その功力は述べ盡せぬ。痃癖(げんへき)氣塊を治し、宿食を消化し、煩悶を止め、小便を利し、分娩を催ほし、中惡、失音、髮の脫落、天行温疾。一切の蛇、蟲、蠶の咬傷に塗る。一切の病を治するに、毎日二七粒を吞む。三十粒に過ぎずして永く瘥える】(大明)

【附方】新三。

【預知子丸】心氣不足で精神が恍惚となり、言語錯亂し、忪悸(しようき)

し、煩鬱し、憂鬱にして物を思ひつめ、喜び、怒り、多く恐怖を感じ、睡眠少く、夜間恠しき夢多く、寤めては魔に襲はれたやうに驚き、或は發狂し、眩暈し、意志、判斷を失ふものを治するにこれを服するがよし。預知子を皮を去り、白茯苓、枸杞子、石菖蒲、伏神、柏子仁、人參、地骨皮、遠志、山藥、黃精を蒸熟し、朱砂を水飛し、等分を末にして煉蜜で芡子大の丸にし、一丸づつを嚼んで人參湯で飲下す。（和劑局方）【卒かの耳の聾閉】八九月に石榴を取つて一部を切り開き、切り取つた部分をば蓋にするために取つて置き、中に米醋を入れてそれでよく蓋をして麪で裹み、煻火で煨熟して取り出し、少量の仙沼子、（五）黑李子末を入れ、その水を取つて耳中に滴らす。腦痛を覺えるが驚くことはない。かく一夜隔ててまた一回點ける。（聖惠方）

【蟲のある癘風】眉落ち、聲變るには、預知子膏——預知子、雄黃各二兩を末にし、それを乳香三兩を水一斗と銀鍋で煮て五升に煮取つた中に入れ、熬つて膏にして瓶に貯へ、一匙づつを溫酒で調へて服す。尾のやうな蟲が大便と共に排出する。（聖惠方）

根　【氣味】【苦し、冷にして毒なし】【主治】【蠱毒を解すには、石臼で搗き篩ひ、三錢づつを溫水で服す。立ろに已む】（蘇頌）

（五）黑李、詳ナラズ、恐クハ皂李ヲ指スナラン。

（一）牽牛子（別錄下品）

和名　あさがほ
學名　Pharbitis Nil, Choisy.
科名　ひるがほ科（旋花科）

釋名　黑丑（綱目）　草金鈴（炮炙論）　盆甑草（綱目）　狗耳草（救荒）　弘景曰く、この藥は農民間に用ゐ始めたもので、藥の謝禮に牛を牽いて往つたといふところから、かやうな名稱が起つたのだ。

時珍曰く、近頃世間では、その名稱に隱語を用ゐて黑丑といひ、白いものを白丑といふ。蓋し丑の字を牛の字に當てたのだ。金鈴とは子の形の形容、盆甑、狗耳は葉の形の形容である。段成式の酉陽雜俎に『盆甑草は、蔓は薯蕷のやうで、結實してから斷つて見ると形狀が盆甑のやうだ』とあるはこの物だ。



〔牽牛子〕

集解　弘景曰く、牽牛は藤になつて生え、花の形は藊豆のやうで黃色だ。子

（一）牧野曰フ、牽牛子ハ始メ藥用ノ爲メニ我邦ニ入リシモノト思フ、其後一面ニハ其レガ觀賞用ノ植物トナツタモノデ、逐ニ園藝界デ重要ナ位置ヲ占メタ草花ト化シテシマツタ。

(二)大觀ニ梂上蕾字アリ。

は小房とあり、實は黑色で形が(二)梂子の核のやうである。

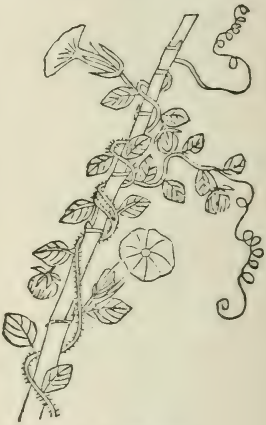
恭曰く、この花は旋花に似て碧色だ。黃色ではない。また藊豆にも似てゐない。

頌曰く、處處にある。二月種を蒔いて三月苗が生え、藤蔓になつて籬や墻に絡まり付き、高さは二三丈になるもある。葉は靑くして三尖角があり、七月花を開く。花は微紅色に碧色を帶び、鼓子花に似て大きく、八月實を結ぶ。實の外部は白皮に裹まれた毬になり、毬毎に内部に四五筒の子があり、子の大いさは蕎麥ほどで三稜があり、黑色と白色の二種類ある。九月後に採收する。

宗奭曰く、花朶は鼓子花のやうだが但し碧色だ。日出時に開き、日が西に廻ると萎れる。その核は木猴梨子のやうで色が黑い、子が蕎麥に似てゐるといふは誤である。

時珍曰く、牽牛には黑、白の二種あつて、黑いものは處處に野生して就中多くある。その蔓には白毛があつて、切れば白汁が出る。葉は三尖があつて楓の葉のやうだ。花は瓣にならず、旋花のやうで大きい。その實は蒂に裹まれてゐて、生は靑く、枯れると白い。核は棠梂子の核と同樣だが、色が深黑なだけである。白い種類は一般に多く栽培するもので、その蔓は微紅色で毛がなく、柔い刺があり、切れば濃汁

が出る。葉は圓くして斜尖があり、いづれも山藥の莖、葉のやうなものだ。㈢白牽牛の花は黒牽牛の花よりも小さく、淺碧色に紅色を帶びてゐる。實は蒂が長くて一寸ばかりあり、生では青く、枯れると白く、その核は白色でやや粗い。世間では、やはり嫩實を採つて蜜で煎じ、菓子に作つて食ひ、天茄と呼ぶ。蒂が茄に似てゐるからだ。


〔白　牽　牛〕

子　【修治】　斅曰く、凡そ子を採取したならば、晒し乾して水で淘り去り、再び晒して酒を拌ぜ、午前十時から午後二時まで蒸して晒し乾して取収め、使用する時に臨んで舂いて黒皮を去つて用ゐる。時珍曰く、今は多くはただ碾つて㈣頭末を取る、皮麩をば去つて用ゐない。また半生半熟で用ゐることもある。

㈤【氣味】　【苦し、寒にして毒あり】權曰く、甘し、小毒あり。詵曰く、多く

㈢時珍謂フ所ノ白牽牛ハ、天茄子卽和名ハリアサガホニ當ル。

㈣頭末ハ種子ノ粗キ粉末ノ意カ。

㈤木村(康)曰ク、(成分)ファルビチン(樹脂配糖體)ヲ含有ス、其他脂肪油ヲモ含ム。
朝比奈泰彦、寺田正一—藥誌大、八、(四五二)八二一。
朝比奈泰彦、清水寅次—藥誌、大一、一(四七九)一。

朝比奈泰彥、中西莊吉—藥誌、大、十四(五二〇)五一五。平野一貫—東醫紀要(明、二二(一冊二號)二〇一。松木和夫—工化、明、二(三〇)二〇五。N. Komor-Arch. Pharm 1896(234) 450

(六)木村(康)曰ク、あさがほノ種子ハ峻下劑トシテ有效ナレドモ、ソノ瀉下作用著シキヲ以テ注意ヲ要ス。用量ハ一—三瓦ヲ粉末トシテ內用シ、局方ヤラッパ根ニ代用スルヲ得ベシ。又牽牛子ヲ細碎シ酒精ニテ溫浸シ、浸液ヨリ酒精ヲ溜去シ、殘渣ヲ水洗シタル後水浴上ニテ乾燥セシメテ製シタル物質ハヤラッパ脂ノ代

食へばやや冷える。杲曰く、辛熱が雄烈であつて、人の元氣を泄する。大明曰く、味は蘞である。青木香、乾薑と配合するが良し。

(六)【主治】【氣を下し、脚滿水腫を療じ、風毒を除き、小便を利す】(別錄)【痃癖氣塊を治し、大小便を利し、虛腫を除き、胎を落す】(甄權)【腰痛を取り、冷膿を下し、蠱毒藥、竝に一切の氣の壅滯を瀉す】(大明)【山茱萸を和して服すれば水病を去る】(好古)【氣分の濕熱、三焦の壅結を除く】(李杲)【痰を逐ひ、飲を消し、大腸の氣祕、風祕を通じ、蟲を殺し、命門に達する】(時珍)

【發明】宗奭曰く、牽牛丸を服すれば大腸の風祕壅結を治するが、久しく服してはならぬ。やはり脾、腎の氣を行るからだ。

好古曰く、牽牛は、氣藥で導けば氣に入り、大黃で導けば血に入り、大腸を利し、水積を下す。白色のものは、氣分の濕熱が上攻して喘滿するを瀉し、血中の氣を破る。

震亨曰く、牽牛は火に屬して善く走るものだが、黑なる色は水に屬し、白なる色は金に屬するものであつて、病形と證と倶に實して脹滿せず、大便の祕せぬもので

用トナスベク、一回用量ハ〇・五—〇・七瓦トス。尚英國局方ニ Kaladana (Pharbitis seeds) トシテ記スルモノハあさがほノ乾燥セル種子ニシテ、複方カラダナ散 (pulvis Kaladana Composita) カラダナ脂 (Kaladana resina) カラダナ丁幾 (Tinctura Kaladana) 等ノ製劑アリ。

複方カラダナ散「カラダナ三、重酒石酸加里六、生姜一」ノ割合ニテ各ノ粉末ヲ混ジテ製シ、一日量〇・六五—四、〇瓦ヲ服用ス。

生藥學、藥局方、猪子吉人、東京醫事新報、明、二四(六八一)五七一(六八二)六一八。

ない限りは、輕輕しく用ゐてはならぬ。その驅逐の作用から虛を惹起するものだ。先哲は深く戒めてゐる。

○杲曰く、牽牛は神農の藥ではないのであつて、名醫續注に『味苦し、寒にして能く濕氣を除き、小便を利し、下注脚氣を治す』とあるが、この說は氣味、主治俱に誤つてゐる。何となれば、凡そ牽牛を用ゐて、少量の場合には大便を動し、多量の場合には水のやうに泄下す。これは氣を瀉する藥なのだ。その味は辛辣であつて、久しく嚼めばそれが猛烈峻劇である。苦、寒などいふ事實は何處にあらうぞ。

一體濕なるものは水を基礎とする特殊の現象をいふのである。肺が先づ濕を受けた場合とすれば、濕氣のために機能が十分に發揮されず、そのために大小便不通の結果を見ることがある。その場合にはこれを用ゐることがよいのである。蓋し牽牛なるものは南方熱火の化を感じて生ずるものであつて、火は能く金を平にして肺を泄す。濕が去れば氣が順調に平均に體中を流れる。所謂る五臟に邪があれば更に相平ぐの事實である。然るに、當今では濕あると濕なきとを問はず、ただ食物のために傷めたもので熱證でもありさへすれば、やはり剋化の藥なる牽牛を用ゐてゐるので

あるが、それは誤ではあるまいか。況や牽牛は、ただ氣中の濕熱を泄し得るだけのものであつて、血中の濕熱を除くわけには行かぬものだ。濕を下から下焦に受けるものは主として血である。血中の濕には、苦、寒の味を用ふべきを、反つて辛藥で泄しては人の元氣を傷ることになる。且つ牽牛の辛烈は、他の辛藥に比較して氣を泄らす程度の就中甚しいものだ。その人體を傷めること必然といはねばならぬ。

經に『辛は氣を泄す。辛は氣を走す。辛は肺を泄す。氣病には多く辛を食つてはならぬ』とある。況や飮食物の節制を缺き、又は過勞、過慮から傷碍を來したものは、胃の氣が行らずして心火がそれに乘じ、腸、胃がその火の邪を受けるものであつて、熱中と名ける。脾、胃の主たるものは血なのだから、これは當然血中の火を泄すべきであつて、黃芩の苦寒を用ゐて火を泄し、當歸身の辛溫を用ゐて血を和し、生地黃の苦寒を以て血を涼し血を益し、紅花の辛溫少量を加へて血絡を泄し、桃仁の辛溫を用ゐて燥を除き腸を潤ほすべきものであつて、それには特效のもののみを專ら偏し用ゐてはならない。必ず中を補し、氣を益し、陰火を泄する藥の中に加へて用ゐるやうにせねばならぬのである。何となれば、上焦の元氣が已に自から虛弱になつ

てゐるものに、反つて牽牛の大辛熱を用ゐたならば、これは氣味倶に陽の藥であつて、水を泄し、元氣を泄し、小便を利することに由つて、その津液を竭さしめる結果となるからである。その容體を重虚といふ。重ければ必ず死亡する。輕い場合でもその人の天年を禍する。故に張文懿は『牽牛は人の元氣を脱するものだから、耽り嗜んで用ゐてはならない。現に世間には酒食のために痞を病んで、多く牽牛の丸、散藥を服して一時の快を取るものを見受けるが、その藥を一旦用ゐた後にはまた痞が起つて來る。その時また服すればまた效があり、效があつて後はまた痞する。かやうにして久しきに亙つて服用しつつある間には身體の元氣が脱して行くのであるが、その本人は一向にその過の悔ゆべきことに氣が付かない』といつてある。張仲景の七種の濕熱、小便不利を治するものには、一藥として危險なる牽牛を犯し用ゐたものがない。牽牛がよく濕を泄し、小便を利する位のことを仲景が知らなかつた筈はなからうけれども、それは濕なる病の根本は下焦に在り、血分中の氣病であつて、辛辣の藥を用ゐて上焦、太陰の氣を泄らしてはならぬものだからであつた。血病に對して氣を瀉すれば、氣、血を倶に損ぜしむる結果となるがためである。經に『盛なるを盛

ならしめてはならぬ。虛するを虛せしめてはならぬ。人の長き命を絕つてはならぬ」とあるはこの意味をいつたものだ。この藥を用ゐるには大いに愼重を要する。白牽牛も同樣だ。

時珍曰く、牽牛は、宋以後に北方人間で常にその快速なる一時の效力を好んで用ゐられ、劉守眞、張子和などが輩出するに及んで、下劑として通用することを倡道するやうになつたのだ。李明之(杲)はそれに攻擊を加へるつもりで右の說を著し、大いにその蒙を啓くに力めたわけであるが。しかし、東漢の時代にはこの藥はまだ本草の中に編入されてなかつたのだ。だから仲景も事實知らなかつたのであつて、もし知つてゐたとしたならば、必ず適當な用法を硏究してゐたらうと考へられる。ただ放棄して置いたらうとは思はれない。況や藥には仲景がまだ用ゐなかつたものも多かつたことで、これを根據として論ずるは、蓋し脫線の傾がある。

牽牛なるものは、水氣が肺に在つて喘滿し、腫脹し、下焦が鬱遏して腰、背が脹重するもの、及び大腸の風祕、氣祕を治するに卓然たる殊功のあるものだ。しかし、ただ病が血分に在るものや、脾、胃が虛弱して痞滿するものには一時の快效だけを

取つてはならぬのであつて、また常服すれば暗暗裡に元氣を傷ふものである。

某皇族夫人は、年齡やがて七十に近く、平生腸結病に苦しみ、便通は十日に一回位、その苦痛分娩よりも甚しく、養血潤燥の藥を服すれば膈に泥んで不快を覺え、硝、黄の通利藥を服すれば意識を失つたやうになり、かくて三十餘年の長きに亙つて苦まれたのであつたが、時珍がその容體を診るに、體格は肥えて脂肪に富んでゐるが、多く憂鬱で、一日に一盌ほどの酸痰を吐けば寬やかにはなるが、また多くは火病を起すといふ次第であつた。かやうな症狀は、つまり三焦の氣が壅滯して升るけれども降らない。それで津液がみな化して痰飲となり、下つて腸腑を滋すことが不能なのだ。血燥のやうなものではないのであつて、潤劑では留滯し、硝、黄などでは血分に入るが氣を通ずる力はなく、いづれも痰阻となるだけであつて、その效果は舉らない。そこで、牽牛末と皂莢膏とで丸にして進めたところ、直ぐに通利が付き、爾來腸結だけを覺えたが、その場合は一服すれば順調になり、食慾にも妨なく、且つ精神元氣もまた爽になつたのであつた。

蓋し牽牛なるものは、能く氣分に走つて三焦を通ずるもので、氣が順になれば痰

を逐ひ、飲を消し、上下が通快になるのである。

外甥の柳喬は、元來酒色のための病が多く、下部が極端に腫痛して二便が通ぜず、坐るも臥すもならず、七晝夜の間、泣哭し呻吟して苦んだが、醫師が通利藥を用ゐて見ても效がなく、予の許へ使で治療を賴んで來た。予はその容體を觀察して、それは濕熱の邪が精道に在つて隧路を壅脹するので、病は二陰の間に在る。それで前には小便を阻み、後には大便を阻むのであつて、病は大腸、膀胱に在るのではないと考へた。そこで楝實、茴香、穿山甲の諸藥に牽牛を倍加し、水で煎じて服ませて見た。すると、一服で病が減じ、三服にして平癒した。

牽牛が能く右腎命門に達して精隧に走るといふことは世間では知らない。ただ東垣李明之だけがそれを知つてゐた。故に明之の下焦陽虛を治する天眞丹には、牽牛を鹽水で黑く炒つたものを入れ、沈香、杜仲、破故紙、官桂の諸藥を佐として入れてある。これは深く補と瀉とを同時に應用することに妙を得たもので、方は醫學發明に記載してある。又、東垣が脾濕の甚しきために全身が浮腫し、喘して臥し得ず、腹が鼓の如くなると治する海金沙散にも、やはり牽牛を君藥としてある。して見れ

(七)大觀ニ爽ニ作ル。
(八)大觀ニ熟ニ作ル。
(九)大觀、酥上ニ塗ノ字アリ。

ば、東垣自身にも決して牽牛をば棄てて用ゐぬといふのではなかつたのだ。ただこれを應用するの適法に最も愼重を期しただけのことである。

附方 舊八、新三十。【搜風、通滯】風氣が攻むるために臟腑の積滯するには、牽牛子を一夜間童尿に浸し、長流水上で半日洗つて生絹袋に盛り、風の當る場所に掛けて乾し、毎日三十粒づつを鹽湯で服す。極めて能く風を(七)搜し、また虛腫を消す。久しく服すれば身體を淸瘦にする(斗門方)【三焦の壅塞】胸膈が不快で頭目が昏眩し、涕唾、痰涎を出し、精神の爽ならぬには、利膈丸——牽牛子四兩半を半生半(八)炒にし、蛀のつかぬ皂莢を(九)酥で炙いて二兩を末にし、生薑の自然汁で煮た糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを荊芥湯で服す。(王袞博濟方)【一切の積氣】宿食の不消化である。黑牽牛の頭末四兩を、蘿蔔を剜つて中に入れ、蓋を合せて紙で封じ、蒸熟して取り出し、白荳蔲末一錢を入れて搗いて梧子大の丸にし、一二十丸づつを白湯で服す。これを順氣丸と名ける。(普濟方)【男子、婦人の五積】五種の積氣の聚成したものである。黑牽牛一斤を生で搗いて末八兩を取り——その餘の滓は棄てる——その末を新瓦で香しく炒り、再び搗いて四兩を取り、煉密で梧子大の丸に

し、甚だ重病のものは、三十五丸を陳橘皮、生薑の煎湯で就寢時に服す。半夜に至つてなほ反應を感ぜぬときは再び三十丸を服す。それで積聚の物が下る。普通氣を行るだけならば十丸づつを服す。甚だ妙である。(博濟方)【胸膈の食積】牽牛子末一兩、巴豆霜三箇を研末し、水で梧子大の丸にし、その所傷に隨ひ湯で二三十丸づつを食後に服す。(儒門事親)【(一〇)氣築奔衝】忍び難きには、牛郎丸——黑牽牛半兩を炒り、檳榔二錢半と末にし、一錢づつを紫蘇湯で服す。(普濟方)【蟲を逐ひ、積を取る】方は上に同じ。酒で服すればまた水腫を消す。【腎氣で痛むもの】黑、白牽牛等分を炒つて末にし、三錢づつを茴香百粒、川椒五十粒に摻り、切劈いた豬腰子中に詰めて合はせ、紙で包んで煨熟し、空心に食つて酒で飮下す。惡物を取出すに效がある。(楊仁齋直指方)【傷寒の(一一)結胸】心腹が硬痛するもの、牽牛の頭末一錢を白糖を溶かした湯で調へて服す。(鄭氏家傳方)【大便不通】簡要方では、牽牛子を半生半熟にして末にし、二錢づつを薑湯で服す。なほ通ぜぬときは茶で再服する。○ある方では、大黃等分を加へる。○ある方では、生檳榔等分を加へる。【大腸風祕】結し澁るには、牽牛を微し炒つて搗いた(一二)頭末一兩、桃仁を皮尖を去り麩と共に炒つて

(一〇)氣築ハ衝逆ノコト、子宮痙攣ノ類。

(一一)結胸ハ胃弱。

(一二)大觀ニ中粉ニ作ル。

半兩を末にし、熟蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを湯で服す。(寇氏衍義)【水蠱脹滿】白牽牛、黑牽牛各頭末二錢、大麥麪四兩を和して燒餅にし、就寢時に焙き熟して食ひ、茶で飲下す。氣を降すが效驗である。(河間宣明方)【諸水飲病】張子和は『病水の人は、長川が氾濫するやうで、盃や杓では取りきれないから、神禹が水を決したやうな法を取る必要がある。それでこの方を禹攻散と名ける。黑牽牛の頭末四兩、茴香一兩を炒つて末にし、一二錢づつを生薑の自然汁で調へて服す。氣を轉下するものだ』といつた。(儒門事親)【陰水、陽水】黑牽牛の頭末三兩、大黃末三兩、陳米飯の鍋糕一兩を末にし、糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを薑湯で服す。利せんとするには百丸を服す。(醫方捷徑)【水腫尿濇】牽牛末方寸匕を服す。小便の利するを度とする。(千金方)【濕氣中滿】足脛が微腫し、小便が利せず、呼吸が急で欬嗽するには、黑牽牛末一兩、厚朴を制して半兩を末にし、二錢づつを薑湯で服す。或はその時に臨んで水で丸にし、三十丸を棗湯で服す。(普濟方)【水氣浮腫】氣促し、坐臥し得ざるには、牽牛子二兩を微し炒り、搗いて末にして黑牛の尿に一夜浸し、翌早朝葱白一握を入れて煎じ、十餘沸して空心に二回に分服する。水は小便と共に排

（二二）此條意義解シ難シ。

出する。（聖惠方）【脚濕腫滿】方は海金沙の條を見よ。【風毒脚氣】捫して見て指を沒するものには、牽牛子を搗いて末にし、蜜で小豆大の丸にし、五丸づつを生薑湯で服す。小便の通じがあればそれで止める。（二三）また之を吞むもよし。その子は黑色で宛も棣の小核のやうなものを用ゐる。（肘後方）【小兒の腫病】大小便の利せぬには、黑牽牛、白牽牛各二兩を炒つて頭末を取り、井華水で和して綠豆大の丸にし、二十丸づつを蘿蔔子煎湯で服す。（聖濟總錄）【小兒の腹脹】水氣で流腫し、膀胱が實熱して小便が赤濇するには、牽牛を生で研つて一錢を青皮湯で空心に服す。一には木香を加へ、半減して丸にして服す。（鄭氏小兒方）【疳氣の浮腫】常に服すれば自ら消く。黑牽牛、白牽牛各半生半炒にして末を取り、陳皮、青皮等分と末にして糊で綠豆大の丸にし、三歳の小兒は二十丸を米湯で服す。（鄭氏小兒方）【疳氣の耳聾】疳氣が腎を攻めて耳が聾し、陰腫するには、牽牛末一錢を、豬腰子半箇を膜を去つて薄く切つたものの中に摻り、少量の鹽を加へて濕紙で包んで煨き、空心に食ふ。（鄭氏方）【小兒の雀目】牽牛子末一錢を、羊肝一片と麪で角子二箇に作り、炙き熟して食ひ、米飲で飮下す。（普濟方）【風熱赤眼】白牽牛末を葱白を煮て研つたもので綠豆大の丸に

し、五丸づつを葱湯で服し、服してから一時間ほど睡る。(衛生家寶方)【顏面の風刺】黑牽牛を三晝夜酒に浸して末にし、先づ薑汁で顏を擦つてからそれを塗る。(摘玄方)【顏面の粉刺】米粉のやうな癗子の生じたるには、黑牽牛末を同量に面脂藥中に入れて日每に洗ふ。(聖惠方)【顏面の雀斑】黑牽牛末を雞子淸で調へて夜傅け、朝洗ふ。(摘玄方)【馬脾風病】小兒が急驚し、肺脹し、喘滿し、胸高く、氣急し、脇が縮み、鼻が張り、悶亂し、欬嗽し、煩渇し、痰が潮して聲の嗄れるものを俗に馬脾風と名ける。急に治療せねば旦夕に死亡する。白牽牛を半生半炒にし、黑牽牛を半生半炒にし、大黃を煨き、檳榔と各末一錢を取り、五分づつを蜜湯で調へて服す。痰の盛なるには輕粉一字を加へる。これを牛黃奪命散と名ける。(全幼心鑑)【小兒の夜啼】黑牽牛末一錢を水で調へて臍の上に傅ければ止まる】(生生編)【妊婦の臨月に胎を滑にする】牽牛子一兩、赤土少量を研末し、胎が轉痛するを覺えた時、白楡皮の煎湯で一錢を服す。(王袞博濟方)【小便血淋】牽牛子二兩を半生半炒にして末にし、二錢づつを薑湯で服し、良久して熱い茶を服す。(經驗良方)【腸風瀉血】牽牛五兩、牙皂三兩を三日間水に浸して皂を去り、牽牛を酒一升で煮乾して焙じて研末し、蜜で梧

子大の丸にし、一日二回、七丸づつを空心に酒で服す。黄なる物を下出するが差間(さしつかへ)ない。病が減じて後は日毎に五丸づつを米飲で服す。（本事方）【蟲のある痔漏】黑、白牽牛各一兩を炒つて末にし、豬肉四兩を切り碎いて炒り熟し、その末を蘸(つ)けて食盡し、白米飯三匙を食つて壓し下す。白虫を取り下して效がある。○またある方では、白牽牛の頭末四兩、沒藥(もつやく)一錢を細末にし、藥を服せんとするに先ち、毎日夜間飲物を攝(と)らずして翌朝空心にし、豬肉四兩を炙いて切片し、その末を蘸けて細かに嚼んで食ふ。膿血を取り下して效がある。その人の體質等を量(はか)つて加減して用ゐる。三日間酒色、油膩(ゆに)を忌む。（儒門事親）【漏瘖水溢】これは腎虚である。牽牛末二錢半を切り開いた豬腎中に入れ、竹葉で包んで煨熟し、空心に食つて溫酒で飲下す。腎を借りて腎に入れる方法で、一縱一橫、雙方に功力を利用するのである。惡水がそれで泄すればまた淋瀝もなくなる。（直指方）【一切の癰疽(ようそ)】發背、無名腫毒、年少で氣壯なる患者には、黑、白牽牛各一合を布で包んで搗(つ)き碎き、好き醋一盌で八分に熬つて一夜露(さ)らし、翌日の五更時刻に溫服する。大便からその膿血を排出すること妙である。これを濟世散と名ける。（張三丰仙方）【濕熱頭痛】黑牽牛七粒、砂仁一粒を

研末して井華水で調へ、仰(あをい)で鼻中にその汁を灌(そそ)ぎ込む。涎が出て癒える。（聖濟錄）
【氣滯の腰痛】牽牛を多少に拘らず新瓦を赤く燒いた上へ載せ、搔き動かさぬやうにして、自然に一半は生、一半は熟せしめてその末一兩を取り、硫黄二錢半を入れて共によく研りまぜ、三分してその一分毎に白麪三匙と水で和し、捍(お)し開いて碁石ほどに切り、五更の初刻に水一盞で煮熟し、その湯のまま温服すれば痛が已む。なほやまぬときは隔日に再び試みる。予は嘗てこの病があつたが、發る毎に一服すると痛が止まつた。（許學士本事方）

旋花(一)　（本經上品）

和名　ひろはひろがほ
學名　Calystegia Sepium, R. Br.
科名　ひるがほ科（旋花科）

釋名　旋葍（蘇恭）　筋根（本經）　續筋根（圖經）　鼓子花（圖經）　㹠腸草（圖經）　美草（別錄）　天劍草（綱目）　纏枝牡丹　○恭曰く、旋花とは平澤に生える旋葍(せんふく)のことだ。その根が筋に似てゐるところから一名筋根(きんこん)といふ。○炳曰く、旋葍は葍旋と書くべきで、音は福鏇（フクセン）である。根を藥に入れる。別に旋覆、音は璇伏（セン

（一）牧野曰フ、集解ノ文ヲ玩味スルト旋花ヲこひろがほ(C. hederacea, Wall.)トシタイヤウナ氣ガスルガ、今植物名實圖考巻ノ二十二ノ圖ニ從ウテ姑ク之レヲひろはひろがほト定メテ置ク、卽チ歐洲邊ノ産ト同一ノ品デアル。近時此者我ガ内

フク)といふ草があつて、花を藥に入れる。今これを旋葍と呼ぶは誤だ。頌曰く、別錄に『その根は筋を續ぐに主效がある』とある。それで南方の地で續筋根と呼ぶのだ。一名狆腸草といふは、その形の形容である。宗奭曰く、世俗にこれを鼓子花といふ。その意味は、その花の形が似てゐるといふのだ。時珍曰く、その花は瓣にならず、軍隊で吹く鼓子のやうだ。それで旋花、鼓子などと呼んだのだ。千葉の一種は色が粉紅牡丹に似てゐるので、俗に纏枝牡丹と呼ぶ。

集解　別錄に曰く、旋花は(二)豫州の平澤に生ずる。五月採つて陰乾する。

保昇曰く、これは旋葍の花であつて、所在の川澤にいづれもある蔓生のものだ。葉は薯蕷に似て狹く長く、花は紅く、根には毛節がない。蒸し煮れば食料になり、味が甘美だ。筋根と名け、二月、八月に根を採つて日光で乾す。

宗奭曰く、今は(三)河北、汴西、關、陝の野や畑に甚だ多く、非常に鋤き絶やし難いもので、取り除いてもまた生え、四五月花を開く。その根を寸斷し、土に置いて十日も水をかけて置けば苗が生える。韓保昇の說が正確だ。

時珍曰く、旋花は野や畑や岡や溝や處嫌はず生え、節から節と蔓延するもので、

地ニモ入リ來テ、意外ナ處デ之レニ出會フ事ガアル。釋名中ニ在ル纏枝牡丹ハ此Calystegia屬ノ或ル種ノ八重咲品デアル「ベーレー」氏ノ園藝大辭典ニハ之レト同ジト思フ品ヲ我がひるがほ即チC. Japonica, Choisy.ノ一品トシテアルガ、吾人ハ我日本デ未ダ此ノ如キ八重咲品ヲ見タコトガナイ、今此品ガ亞米利加ヘ入ツテ居ルガ、多分之レハ支那カラ渡シタモノデハナイカト想像スル。

(二)豫州ハ水部非泉水ノ註ヲ見ヨ。

(三)河北、汴西ハ石部丹砂ノ註、關陝ハ山草類秦艽ノ註ヲ見ヨ。

(四)波菜ハ本名菠薐。

(五)黔南、卽チ黔州以南ノ地。山草類黃連ノ施黔ノ註參照。

葉は(四)波菜の葉のやうで小さく、秋になつて白牽牛のやうな花を開く。花は粉紅色だ。千葉のものもある。根の色は白く、太さ筯ほどのものだ。子は結ばない。

頌曰く、(五)黔南、施州に出る旋花と呼ぶ一種は、莖が粗く、葉が大きく、花はなく、蔓にならぬ。恐らくは別種の草であらう。



〔旋　花〕
—鼓子花—

正誤　別錄に曰く、花を一名金沸といふ。

弘景曰く、旋花は、東方の地では山薑と呼び、南方の地では美草と呼ぶ。根は杜若に似て、また高良薑にも似てゐる。腹中の冷痛に、これを煮て服すれば甚だ效がある。丸、散にして服すれば、辟穀を實行するに飢を止める。近頃ある人が江南から還つて來て、これを服する術で一般人に斷穀を勸めてゐるが、いづれも五十日間までは飢ゑも瘦せもせぬ。けれども、ただ意志が弱く、嗜慾が深いものでは久しく繼續して服用を實行し得ない。その葉は薑花に似て色赤く、味は辛い。形狀は荳蔻のやうだ。ここに旋花とあるは卽ちその花のことで、現に山東に甚だ多い。又、旋

覆花に註して、別に旋藟根といふものがあつて、河南に產して北國へ移出される。また形の芎藭（きうきう）に似たものもあるが、これはただ旋藟膏を合劑するときに用ゐるだけで、他に藥としての用途はない。

○恭曰く、旋花といふは旋藟の花のことである。陶氏の說のものは山薑のことだ。山薑は味が辛く、全然この旋花の類のものではない。又、旋覆花を金沸と名けるところから、遂にこの花の別名としてあるが、いづれも誤だ。○又曰く、北國から來るものは根が芎藭に似てゐて、高良薑とは全く彷彿（はうふつ）たるところがない。これもみな誤だ。

(六)氣味　【花は甘く、根は辛し、溫にして毒なし】○○時珍曰く、花、根、莖、葉いづれも甘く、滑かで微し苦し。能く雄黃を制す。

主治　【(七)面皯（うんかん）で色の黑きものを媚好にし、氣を益す。根は腹中の寒熱邪氣に主效がある】（本經）【小便を利す。久しく服すれば饑ゑず、身體を輕くする。(八)筋骨を續ぎ、金瘡を合す】（別錄）【擣汁（つきじる）を服すれば丹毒熱に主效がある】（藏器）【勞損を補し、精氣を益す】（時珍）

發明　○○時珍曰く、凡そ藤蔓のたぐひは人體に於ける筋の形象に當るので、そ

(六)木村(康)曰ク、【成分】ひるがほノ全草風乾物中ニハ水ニ可溶性物質三〇・七%葡萄糖一七・五%灰分四・三%ヲ含有ス、又サポニンヲモ含有スルモノノ如シ。木村(康)曰ク、全草ノ煎劑ハ家兎ノ血糖

ノ食餌性竝ニアドレナリン過血糖ニ對シ明カニ抑制作用ヲ示ス。
桑田智、播磨光作—藥誌、昭、二(五四八)八八一。
(七)大觀ニ面上ニ去字アリ。
(八)括弧中ニアル本經ノ二字此處ニ移スベシ。
(九)大觀ニ救急方ニ作ル。

れで多く筋病を治するのである。旋花根は細くして筋ほどのもので、食へるものだ。故に別錄に『久しく服すれば飢ゑぬ』といつたのである。時珍が京師から還るとき、北方へ往く車夫がみなこの草を載せてゐるので、訊いて見ると『夕方歸宅してから湯に煎じて飲むので、それは損傷を補ふためだ』といつた。これで見ると、氣を益し、筋を續ぐの說は甚だ根據がある。

附方　舊一、新一。

【筋を切斷された場合】　旋蕧根の搗汁を瘡中に瀝し、また滓を傅ける。一日三回易へて半月すれば斷れた筋が續がる。この方は蘇景中が奴隷に施して有效だつた療法から出たものだ。(王燾外臺秘要)

【精を祕し、髓を益す】　太乙金鎖丹——五色龍骨五兩、覆盆子五兩、蓮花蘂のまだ開かぬ花から採つて陰乾したもの四兩、五月五日に採つた鼓子花三兩、雞頭子仁一百顆、これをいづれも末にし、金櫻子二百箇を毛を去つて木臼で搗爛して水七升で煎じ、濃汁一升を取つて滓を去つた中へ入れてその末藥を和し、二千杵搗いて梧子大の丸にし、三十丸づつを空心に溫鹽酒で服す。百日まで繼續服用すれば永く泄さなくなる。泄さうとするには冷水で車前末半合を調へて服す。葵菜を忌む。(薩謙齋瑞竹堂方)

(一)紫葳 （本經中品）

和名　のうぜんかづら
學名　Campsis chinensis, Voss
科名　のうぜんかづら科（紫葳科）

校正 木部より此に移し入る。

釋名 **凌霄**（蘇恭） **陵苕**（本經） **陵時**（郭璞） **女葳**（甄權） **茇華**（本經） **武威**（呉普） **瞿陵**（呉普） **鬼目**（呉氏） 時珍曰く、俗に赤い艶かなるを紫葳といふ。葳とはこの花が赤く艶かだから名けたものだ。木に附著して上に伸び、高さ數丈になるところから陵霄といふ。

正誤 弘景曰く、これは瞿麥の根であつて、方に用ゐることは至つて少い。博物志に『郝晦が(二)太行山の北を通つたとき、紫葳の華を得た』とあつて、奇異の事柄としたものらしいが、現に瞿麥は處處にあるものだ。太行山にあると取わけていふには及ばぬことだ。

恭曰く、紫葳、瞿麥はいづれも本經記載の藥であつて、その體、性も既に異へば、產地も兩者別である。爾雅に『苕、一名陵苕』とあり、郭璞の注に『一名陵時、又、

(一)牧野曰ク、支那ノ原產デ往時我ガ日本ヘ渡ツタ藤本デ、大ナルモノハ其幹ニ三寸ノ直徑ガアル、氣根ヲ出シテ高ク他ノ樹木ニ攀援シ、大ナル橙黃色ノ花ヲ多數ニ開ク、葉ハ對生シ羽狀ヲナシテ居ル。

(二)太行山ハ石部鹵石類石硫黃ノ註ヲ見ヨ。

(三)西海ハ漢王莽ノ時ノ郡名、今ノ青海省ノ東部、及ビ甘粛省ノ舊蘭州、西寧二府ノ地ヲ管轄シ、龍夷ニ治ス。

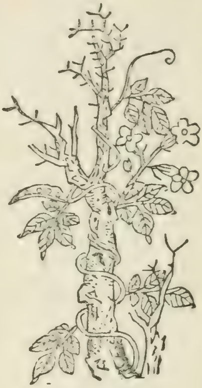
陵霄と名く』とあるが眞のものだ。

頌曰く、孔穎達の詩の疏にも『苕、一名陵時』とある。しかし本草には現に陵時なる名稱がなく、ただ鼠尾草にその名稱がある。これは傳へられた系統が異つてゐるのではあるまいか、それとも陶氏、蘇氏の誤か。

時珍曰く、按ずるに、呉氏本草に『紫葳、一名瞿陵』とある。それを陶弘景が誤つて瞿麥と書いたまでのことだ。鼠尾には陵翹とあるだけで陵時とはない。蘇頌もやはり誤つてゐる。いづれもここに正して置く。

集解

別錄に曰く、紫葳は(三)西海の川谷、及び山の陽に生ずる。



〔紫葳〕
—凌霄花—

恭曰く、これは凌霄花であつて、莖、葉を連ねて用ゐるものだ。詩には『苕の華あり、芸としてそれ黄なり』とあり、爾雅には『陵苕は、黄華は蔈といひ、白華は茇といふ』とあつて、山中にはやはり白花のものがある。

○頌曰く、今は處處いづれにもある。山中に多く生え、人家の庭や畑にも栽培するものがある。初めは蔓になつて生え、大木に依つて伸び、久しくしてその木の頂端まで延びる。花は黄赤色で、夏期中盛んなものだ。現に醫家では、多く花を採つて婦人科の藥に入れて用ゐる。

○○時珍曰く、凌霄は、野生のものは纔(わづか)に數尺のものだが、木があるとそれに附いて上に伸び、高さ數丈までも延びて、久しく年を經たものは藤の太さ杯ほどになる。春初に枝が生え、一本の枝に數枚の葉があり、その葉は尖(とが)つて長く、齒があり、色は青い。夏から秋にかけて花を開く。その花は一本の枝に十數朶(すうだ)著いて、大いさ牽牛ほどで頭に五瓣を開き、赭黄色(しやくわうしよく)で細點があり、秋深くなるとその色が更に赤くなり、八月に豆の莢(さや)のやうな長さ三寸ばかりの莢を結ぶ。その子は輕薄で楡仁(ゆにん)、馬兜鈴仁(ばれいにん)のやうだ。根は長くしてやはり兜鈴根のやうな形である。秋後に採つて陰乾する。

花　根も同じ。［氣味］【酸し、微寒にして毒なし】○普曰く、神農、雷公、岐伯は辛しといひ、扁鵲は苦く鹹しといひ、黄帝は甘し、毒なしといふ。○權曰く、鹵(ろ)

(四)大觀ニ璧ニ作ル。
(五)中藏經ノ誤。

鹹を畏る。時珍曰く、花は腦を傷めるから鼻に近づけて香を聞いてはならぬ。花の露が目に入れば昏矇する。

主治 【婦人出産の餘病、崩中、癥瘕、血閉、寒熱羸瘦。胎を養ふ】(本經) 【産後奔血が定らずして淋瀝するもの。熱風、風癇。大小便不利、腸中の結實に主效がある】(甄權) 【酒皶、熱毒風、刺風、婦人の血膈遊風、崩中帶下】(大明)

莖葉 **氣味** 【苦し、平にして毒なし】 **主治** 【痿(四)躄。氣を益す】(別錄) 【熱風の身痒、遊風、風瘮、瘀血、帶下。花、及び根も同功である】(大明) 【喉痺熱痛を治し、血を涼し、肌を生ず】(時珍)

發明 時珍曰く、凌霄の花、及び根は、甘、酸にして寒である。莖、葉は苦を帶びてゐる。手、足の厥陰の經の藥であつて、血分に行つてよく血中の伏火を去るものだ。故に産乳、崩漏の諸疾、及び血熱で風を生ずる證に主效がある。

附方 舊二、新十一。【婦人の血崩】凌霄花を末にし、二錢づつを酒で服し、後に四物湯を服す。(五)(丹溪纂要) 【排便後の下血】凌霄花を酒に浸して頻りに飲む。(普濟方) 【消渇飲水】凌霄花一兩を搗碎き、水一盞半で一盞に煎じて二回に分服する。

(聖濟錄)【嬰兒の乳に著かぬもの】百日以內の小兒で、故なくして口が青く、乳を飲まぬには、凌霄花、大藍葉、芒硝、大黃等分を末にし、羊髓で和して梧子大の丸にし、一丸づつを研つて乳で送下する。それで乳を飲むやうになる。熱あるには服ますがよいが、寒するには服ましてはならぬ。昔ある人が、退官後に(六)湖湘地方を遊歷して、この方の藥を調合して甚だ多く危急のものを救つたことがある。(普濟方)【慢性、急性の風癇】凌霄の花、或は根、葉を末にし、三錢づつを溫酒で服し、服し畢つてから手を休めず髮を梳り、口に冷水を噙んで溫かになれば吐き出し、再び噙んで再び梳り、二十口まで繰返して止める。かく四十九日間繼續すれば病が根絕する。一切忌むものなし。(方賢奇效方)【全身の風痒】凌霄花を末にし、酒で一錢を服す。(醫學正傳)【大風癘疾】潔古家珍では、凌霄花五錢、地龍を焙じ、殭蠶を炒り、全蠍を炒り、各七箇を末にし、二錢づつを溫酒で服す。豫め藥湯で浴してからこれを服するのである。臭汗を出して效がある。○儒門事親では、蟬蛻と五品各九箇を一服にする。【鼻上の酒皶】王璆百一選方では、凌霄花、山梔子等分を末にし、一日二回、茶で二錢づつを服す。數日にして根を除く。臨川の曾子仁がこれを用ゐて效があつ

(六)湖湘ハ湖南省ノ中部。

た。○楊氏家藏方では、凌霄花半兩、硫黄一兩、胡桃四箇、膩粉一錢を研つて膏にし、生絹で包んで揉みつける。【走皮趨瘡】頬の全面から頭部まで蔓延し、濕爛して兩耳まで蔓延し、痒く、水を出し、發歇不定なるもので、田舍ではこれを悲羊瘡といふ。凌霄の花、幷に葉を湯に煎じて日毎に洗ふ。(楊仁齋直指方)【婦人の陰瘡】紫葳を末にし、鯉魚の腦、或は膽で調へて搽る。(摘玄方)【卒かの耳の聾閉】凌霄花を杵き、自然汁を取つて滴らす。(斗門方)【婦人の月經不潮】凌霄花を末にし、二錢づつを食前に溫酒で服す。(徐氏胎產方)

(一)營實　墻蘼

蘼の音は眉(ビ)である。(本經上品)

和名　のいばら
學名　Rosa multiflora, Thunb.
科名　いばら科(薔薇科)

【釋名】　薔薇(別錄)　山棘(別錄)　牛棘(本經)　牛勒(別錄)　刺花(綱目)　時珍曰く、この草は、蔓が柔かで靡かに墻に依り添ふて生える。故に墻蘼と名けたのだ。その莖は棘刺が多くて人を勒へつけ、牛が喜んで食ふ。それで山棘、牛勒などの諸名がある。その子は簇つて生える狀態が營星さながらだ。故に營實といふ。

(一)森立之神農本草經ニ薔薇ニ作ル。牧野曰フ、此ニ營實トいフノハのいばらノ實ノ名デアル。又墻蘼ト云フノハ其莖葉ナドノ植物體ヲ指シタ名デアル。原野到ル處ニ多キ品デ、殊ニ水ニ近キ場處ニ普通デアル。木村(康)曰ク、支那

【集解】別錄に曰く、營實は(二)零陵の川谷、及び蜀郡に生ずる。八月、九月に採つて陰乾する。

弘景曰く、營實、卽ち薔薇(しやうび)の子だ。白花のものを良しとする。莖、葉は煮て飲になる。根も煮て酒を釀(かも)し得る。

保昇曰く、所在にある。蔓生で莖の間に刺が多く、その花には百葉のもの、八出のもの、六出のもの、色の赤いもの、或は白いものがある。その子は杜棠子(とだうし)のやうだ。

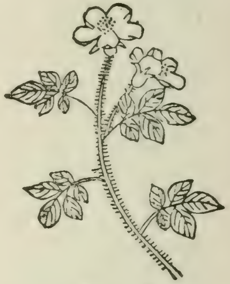
時珍曰く、薔薇は林や谷間などに野生するもので、春期に抽き出る嫩(どん)(三)蕻(こう)を小兒が皮の刺を掐(す)り去つて食ふ。成長すれば叢に成り、蔓に似て莖が硬く刺が多い。葉は小さく尖つて薄く、細齒がある。五月花を開き、その花は四出で心は黄色だ。白色のものと粉紅のものとの二種あつて、簇(むらが)つた子を結ぶ。その子は生は靑く、熟すれば紅い。その核には白毛があつて金櫻子の核のやうだ。八月にこれを採る。根の採收には一定の時期はない。人家で栽培して愛玩するものは、莖が粗(あら)くて葉が大きく、數丈に延長し、花も厚く大きく、色には白、黃、紅、紫の數種ある。花の最も

市場品ヲ見ルニのいばら、てりはのいばら等トハ異リタル形狀ノモノ存ス、恐クハ異種近緣ノ種子ヲ採集シタルモノナルベシ。つるのいばら(R. spinosissima, L. var. mandshurica, Y. abe.) やまはまなす(R. dawrica, Fall.)〔南滿洲藥用植物瞥見記—滿鐵衞生研究所報告、昭、四、二月〕ノ如キハ大形ノモノノ起原ノ一トシテ考フ可キカ。

(二) 零陵ハ山草類山慈姑ノ註、蜀郡ハ石部玉類靑琅玕ノ註ヲ見ヨ。

(三) 字彙ニ云、吳俗草木萌曰蕻音洪。

大なるものをば佛見笑と名け、小なるものをば木香と名ける。いづれも艶な香氣があつて人に喜ばれるが、藥に入れては用ゐない。(四)南番にある薔薇露といふはこの花の露だといふことだが、香氣の馥郁たることは格別なものだ。



〔營實〕
——野薔薇——

營實　(五)［氣味］【酸し、溫にして毒なし】

別錄に曰く、微寒なり。［主治］【癰疽、惡瘡、結肉、跌筋、敗瘡、熱氣陰蝕の瘳えざるもの。關節を利す】(本經)【久しく服すれば身體を輕くし、氣を益す】(別錄)【上焦に熱があつてよく瞑するを治す】(時珍)

［附方］新一。【眼熱で昏暗するもの】營實、枸杞子、地膚子各二兩を末にし、三錢づつを溫酒で服す。(聖惠方)

根　［氣味］【苦く濇し、冷にして毒なし】［主治］【洩痢腹痛、五臟の客熱を止め、邪逆の氣を除き、疽癩、諸惡瘡、金瘡傷、杖傷に肉を生じ肌を回復する】(別錄)【熱毒風を治し、邪氣を除き、赤白痢、腸風瀉血を止め、結血を通じ、牙齒

(四)南番ハ十部烏爹泥ノ註ヲ見ヨ。

(五)木村(康)曰ク、のいばらノ果實ハ加水分解ニヨリテ、ケンプエロールヲ生成スルムルチフロリン及ビ多少疑問トセラルレドモ、舍利別狀ニ分離シタル有效成分ヨリ加水分解ニヨッテクエルセチンヲ得ラレタリト。又近時歐洲産ノR. canina, L. ノ果實ノ紅色素ハ、トマトーノ色素リコピント同一ナルコト判明セラレタ。のいばらノ果實ノ色素モ或ハ然ラ

痛、小兒の疳蟲、肚痛、癰疽、疥癬を治す】(大明)【頭瘡白禿】(甄權)【風熱、濕熱を除き、小便を縮め、消渇を止める】(時珍)

【發明】時珍曰く、營實、薔薇根は、能く陽明の經に入り、風熱、濕熱を除き、肌を生じ、蟲を殺す。故に癰疽、瘡癬の古方に常て用ゐられた。洩痢、消渇、遺尿、よく瞑するものはやはりみな陽明の病である。

【附方】舊七、新五。【消渇で尿多きもの】薔薇根一把を水で煎じて日毎に服す。(千金方)【小便にしまりなきもの】薔薇根の煮汁を飮み、或は末にして酒で服す。野生の白花のものが更に良し。(聖惠方)【年少者の尿床】薔薇根五錢を酒で煎じて夜間に飮む。(外臺祕要)【小兒の疳痢】頻數なるには、生の薔薇根を洗つて切り、濃く煎じた汁を癒えるまで飮む。(千金方)【口咽の痛痒】語聲の出でざるものには、薔薇根皮、射干一兩、甘草を炙つて半兩を用ゐ、二錢づつを水で煎じて服す。(普濟方)【口舌の糜爛】薔薇根を風に當てぬやうにして土を打ち落し、濃き煮汁を溫めて含み、冷えれば吐く。冬は根皮を用ゐ、夏は枝葉を用ゐる。長期の口瘡で、蔓延して胸中に瘡を生じ、三年已上瘥えぬものにもみな效がある。(千金方)【小兒の月蝕】薔薇根

ンカト。鶴田靜居—實驗消化器病學、大、一五(一)五六三。安藤秀三—京醫、大、一(九)九一。近藤平三郎、岩本薫、口羽與三郎—藥誌、昭、四(五六五)二三二。(藥效)のいばらノ果實ハ峻下劑トシ又利尿藥トシテ用ウ。用量五瓦ヲ乳鉢内ニテ磨碎シ煎劑トシテ服ス。(邦產藥用植物)

四兩、地楡二錢を末にし、先づ鹽湯で洗つてから傅ける。（全幼心鑑）【癤腫癰毒】潰爛して疼痛するには、薔薇皮を幾度も炙いて熨す。（千金方）【筋骨の毒痛】楊梅瘡のために輕粉の毒藥を服して發つたものには、野薔薇根の白皮三斤を洗ひ、水、酒十斤で一炷香の間煮て、癒えるまで毎日任意に飲む。（）鄧筆峯雜興方では、刺薔薇根三錢、五加皮、木瓜、當歸、茯苓各二錢を酒二盞で一盞に煎じ、一日一回服す。【金瘡の腫痛】薔薇根を灰に燒き、一日三回、方寸匕づつを白湯で服す。（抱朴子）【箭の肉に入りたるもの】膿嚢の出でざるには（六）「薔薇根の末を摻り、鼠撲を服し」十日間繼續すれば皮を穿つて出るものだ。（外臺祕要）【骨哽の出ざるもの】薔薇根末方寸匕を一日三回水で服す。（同上）

葉 主治 【下疳瘡には、焙じ研り、瘡を洗つて傅ける。黄花のものが更に良し】（攝生方）

（一）月季花（綱目）

和名 ちやうしゆん、かうしんばら
學名 Rosa chinensis, Jacq.
科名 いばら科（薔薇科）

（六）「」ノ處大觀ニ堅摻及鼠僕ノ五字ニ作ル。

（一）牧野曰フ、往時支那カラ渡來シタモノデ、渡來薔薇中ノ最善品ト思フ。從テ

今ハ日本到ル處ニ之レニ逢著スル。一重咲ノモノモアルガ多少八重咲的ニナツテ居ルモノガ多イ。花色ハ通常赤紅色デ年ヲ通ジテ時時ニ花ヲ出ス殊徴ガアル、月月紅ノ名頗ル宜シ。

【釋名】月月紅（次項を見よ）勝春　瘦客　鬭雪紅

【集解】時珍曰く、處處の人家で多く栽培し、庭などに揷し植ゑてある。やはり薔薇の類だ。莖は靑く、蔓は長く、刺は硬く、葉は薔薇よりも小さく、花の色は深紅、千葉で瓣が厚い。月月に開き、子は結ばない。



〔月季花〕

【氣味】【甘し、溫にして毒なし】

【主治】【血を活し、腫を消す。毒に傅ける】（時珍）

【附方】新一。【瘰癧のまだ破れぬもの】月季花頭二錢、沈香五錢、芫花を炒つて三錢を細かに剉み、大鯽魚の腹中に入れて魚腸で固く封じ、酒、水各一盞で煮熟して食へば癒える。それに用ゐる魚は、糞水中に置いて遊死したものを用ゐるが效がある。これは家傳の方であつて、人を救つた經驗が多い。（談埜翁試驗方）

(二)栝樓（本經中品）

和名　しなからすうり（新稱）
學名　Trichosanthes Kirilowii, Maxim.
科名　うり科（葫蘆科）

校正　圖經の天花粉を併せ入る。

釋名　**果贏**　贏の音は裸（ラ）である。**瓜蔞**（綱目）　**天瓜**（別錄）　**黃瓜**（別錄）　**地樓**（本經）　**澤姑**（別錄）　根を　**白藥**　と名ける。（圖經）　**天花粉**（圖經）　**瑞雪**



〔栝樓・天花粉〕

時珍曰く、贏は蓏（ら）と同じ。許愼は『木上のものを果といひ、地下のもの蓏といふ』といつてある。この物は蔓生で木に附著する。故に雙方に兼ねた名稱が出來たのだ。詩に『果贏之實、亦(三)施于宇』とあるはこの物であつて、栝樓とは果贏（くわら）二字の發音の轉化である。また菰甊（くわつろう）とも書き、後世ではまた轉化して瓜蔞（くわろう）とし、愈〻轉化して愈〻その眞を失つた。古代には瓜の音と姑の音とが同じだつたところから澤姑といふ名稱があ

(一)牧野曰フ、本邦ニテ從來此品ヲきからすうり(T. japonica, Regel.)ニ充テ來リシガ、今「プレットシュナイデル」氏ニ從フテ之レヲ下ノ植物トスル。此しなからすうりハ他ノ樹木ナドニ攀援シテ茂リ頗ル美觀ヲ呈シ、其葉ハ五裂シ其花ハ瓣端美ニ剪裁セラレテ且ツ香氣ガアル、秋ニ人拳大ノ橙色ノ圓實ヲ結ビ長梗ヲ以テ枝ヨリ懸垂シ、雅趣ガアリ、其狀ヤヤ我がもみぢばからすうりノ態ガアル。植物名實圖考卷ノ二十二ニハ右ノ品ノ外ニ我がきからすうりト同ジト見ユル圖ノ者ヲモ栝樓トシテアルガ、然シ之レガ果シテきからすうりカ否

カハ今遽カニ斷言ハ出來ナイガ、其形狀ハ誠ニ能ク似テ居ル。然シT. japonica, Regel.（きからすうり）ガ支那ニ產スルト云フ記錄ハマダナイヤウデアル。

(二)宇ニ個フト讀ム、屋根ニ蔓延スル意味。

(三)齊ハ水部阿井泉ノ註ヲ見ヨ。

(四)木村(康)曰ク、日本ニ於テハきからすうりヲ栝樓ニ充ツレドモ、支那品ハ栝樓根、栝樓皮、栝樓子共ニきからすうりノモノニ非ズ、或ハT. Kirilowii, Maxim.ノ類ナランカ未ダ確定スルニ至ラズ。

(五)弘農ハ石部白靑ノ註ヲ見ヨ。

(六)陝州ハ石部石鍾乳ノ註ヲ見ヨ。

る。(三)齊地方で天瓜と呼ぶはそのものの形の形容だ。雷斅の炮炙論に、圓いものを栝とし、長いものを樓としたのは牽强の説明だ。ただ雌と雄とを分つたことはよろしい。その根は、粉にすると潔白で雪のやうだ。それで天花粉といふ。蘇頌は、圖經に天花粉を重複して掲載したが、謬だ。本書にはその條を削除する。

〔集解〕別錄に曰く、栝樓は(五)弘農の川谷、及び山の陰地に生ずる。根の深く土に入つたものが良し。鹵地に生じたものは毒がある。二月、八月根を採つて曝乾する。三十日間乾せば十分である。

弘景曰く、近道に產する。藤生で、形狀は土瓜のやうで葉に叉があり、六七尺土に入つてゐるもので、太さ二三圍あるものだ。服食の法にもやはり用ゐる。實は摩膏に入れて用ゐる。

恭曰く、(六)陝州に產するものが白く實してゐて最も佳し。

頌曰く、所在にある。三四月に苗が生えて藤蔓を引き、葉は甜瓜の葉のやうで窄く、叉があり、細毛があり、七月(七)壺蘆の花に似て淺黃色の花を開き、結實はその花の下にあつて、大いさ拳ほどのものだ。生では青いが、九月になつて熟すれば赤

黄色になる。その形は正圓のものもあり、鋭つて長いものもあるが、功用はいづれも同じ。根も白藥と名けて用ゐる。皮が黄で肉が白いものだ。

時珍曰く、その根は下に直く生え、年久しきものは長さ數尺になる。秋後に掘つたものは結實して粉があるが、夏季に掘つたものには筋があつて粉がなく、用ゐるに堪へない。その實は圓く長く、青い時は瓜のやうだが、黄になつた時は熟柿のやうだ。山家の小兒はやはりこれを食ふ。内部に扁い子があり、大いさ絲瓜の子ほどのもので、殼の色は褐、仁の色は綠、脂が多くて青臭い。炒り乾し搗き爛して水で熬り取つた油は燈火用になる。

實 修治 斅曰く、凡そこれを使用するに、皮、子、莖、根、それぞれ效果の別なものだ。栝といふものは、圓く黄色で皮が厚く、蔕が小さい。樓といふものは、形が長く、皮が赤く、蔕が粗い。陰人は樓を服し、陽人は栝を服する。いづれも殼皮、革膜、及び油を去つて用ゐる。根も用ゐるが、それは太さ二三圍のものを取つて皮を去り、搗爛らして水で澄まして粉を取つて用ゐる。時珍曰く、栝樓は、古方では全部そのままを用ゐたのだが、後世では子と瓤とをそれぞれ分けて用ゐる。

(七)壺盧ハユフカホ。

(八)氣味【苦し、寒にして毒なし】時珍曰く、味は甘い、苦くない。主治【胸痺、顏面を悦澤にする】(別錄)【肺燥を潤ほし、火を降し、欬嗽を治し、痰結を滌ひ、咽喉を利し、消渇を止め、大腸を利し、癰腫、瘡毒を消す】(時珍)【子を炒つて用うれば虚勞口乾を補し、心肺を潤ほし、吐血、腸風瀉血、赤白痢、手、顏の皺むを治す】(大明)

發明　震亨曰く、栝樓の實は胸痺を治す。それは、その味が甘く性が潤ふものだからであつて、甘は能く肺を補し、潤は能く氣を降すものだ。胸中に痰のあるは、肺が火の壓迫を受けるために降下の働を發し得なくなるのであるが、それに對して甘緩、潤下の助けを得れば痰は自ら降るわけである。これは治嗽の要藥として適當なものだ。且つまた能く胸膈中の垢膩、鬱熱を洗滌するもので、消渇を治する神藥である。

時珍曰く、張仲景は、胸痺で心、背にまで痛が及び、欬唾し喘息するもの、及び結胸滿痛を治するに、いづれも栝樓實を用ゐてある。それは、その物が甘、寒であつて胃の氣を犯さず、能く上焦の火を降して痰氣を下降せしめる力を應用したもの

(八)木村(康)曰ク、きからすうりノ根ハ多量ノ澱粉ヲ含有シ種子ハ脂肪油ヲ含有ス。

津田弘喜—九藥、昭、二(一)七六。きからすうりノ根ノ澱粉ヨリ天花粉ヲツクル、

だ。成無已はこの意味を理解してゐなかつたところから『苦、寒が熱を瀉するのだ』といつてゐる。蓋し無已はその味を自から嘗めて見たことがなかつたと見える。それで本來苦くないことを知らないから、ただ記述の文字にのみ隨つてこじつけ解釋をしたものだ。

附方　舊十二、新八。　【痰欬の止まぬもの】瓜蔞仁一兩、文蛤七分を末にし、薑汁を澄まして濃く淀んだもので彈子大の丸にして噙む。(摘玄方)　【痰なき乾欬】熟瓜蔞を搗き爛して汁を絞り、蜜等分を入れ、白礬一錢を加へて熬膏し、頻りに含んでその汁を嚥む。(楊起簡便方)　【欬嗽の痰あるもの】熟瓜蔞十箇、明礬二兩を搗き和し、餅にして陰乾し、研末して糊で梧子大の丸にし、五七十丸を薑湯で服す。(醫方摘要)　【痰喘氣急】菰𧄍二個、明礬を棗一箇ほどを燒いて性を存して研末し、熟蘿蔔に蘸けて食ふ。その藥全部を用ゐ盡せば病がなくなる。(普濟方)　【熱欬の止まぬもの】濃き茶湯一鍾、蜜一鍾、大なる熟瓜蔞一箇を皮を去り、その瓤を茶蜜湯に入れて子を洗ひ去り、盌に盛つて飯の上で蒸し、飯が熟したとき取出し、それを時時に三四匙づつ撮つて嚥む。(摘玄方)　【肺熱痰欬】胸膈の塞滿するには、瓜蔞仁、半夏を湯に七回

泡けて焙じ研り、各一兩を薑汁で作つた麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを食後に薑湯で服す。（嚴用和濟生方）【肺痿で欬血の止まぬもの】栝樓五十箇を瓤のまま丸焙りにし、烏梅肉五十箇を焙り、杏仁二十一箇を皮尖を去り、末にして一捻づつを豬肺一片を薄く切つた中に摻り入れ、一日二回、炙熟し冷して嚼んで嚥む。（聖濟錄）【酒痰の欬嗽】この方を用ゐて肺を救ふ。瓜蔞仁、青黛等分を研末し、薑汁、蜜で芡子大の丸にし、一丸づつを噙む。（丹溪心法）【飲酒の發熱】前記の方を研つて膏にし、數匙づつ日毎に食ふ。ある男子は二十歳でこの病に罹り、これを服して癒えた。（摘玄方）【飲酒の痰澼】兩脇が脹滿して時に嘔吐することもあり、腹中に水聲のやうな音の聞えるには、栝樓實を殼を去つて焙じて一兩、神麴を炒つて半兩を末にし、二錢づつを葱白湯で服す。（聖惠方）【小兒の痰喘】欬嗽し、膈熱し、久しく瘥えぬには、瓜蔞實一箇を子を去つて末にし、寒食麪で和して餅にし、黄に炙つて再び研末し、一日三回、一錢づつを溫水で溶して服す。效があつたならば止める。（劉河間宣明方）【婦人の夜熱】痰嗽し、月經不順で身體が瘦せるには、瓜蔞仁一兩、青黛、香附を童尿に浸し晒して一兩五錢を末にし、蜜で調へて噙み溶かす。（丹溪心法）【胸痺痰

嗽】胸から背に徹つて痛み、心腹が痞滿し、呼吸が通らぬほどのもの、及び痰嗽を治す。大瓜蔞を瓤を去つて子を取り、炒熟して殼共に研末し、麪糊で梧子大の丸にし、一日二回、米飲で(九)二三十丸づつを服す。(杜壬方)【胸中の痺痛】痛が背に引き、喘息し、欬唾し、呼吸短く、寸脈が沈遲し、關上が緊數となりたるには、大栝樓實一箇を切り、薤白半(一〇)斤と白酒七斤で二升に煮取り、二回に分服する。半夏四兩を加へるが更に善し。(仲景金匱方)【淸痰、利膈】欬嗽を治す。肥大の栝樓を(一一)洗つて子を取つて切り焙じ、半夏四十九箇を湯で十回洗つて搥き焙じ、等分を末にし、栝樓を洗つた水、幷に瓤と共に熬膏したもので和して梧子大の丸にし、(一二)三五十丸づつを薑湯で服するが良し。(楊文蔚方)【中風喎斜】瓜蔞の絞汁を大麥麪に和して餅にし、炙き(一三)熱して熨す。喎斜が痊れば止める。度を過してはならぬ。(聖惠方)【熱病の頭痛】發熱の進退するには、大栝樓一箇から瓤を取つて細かに剉み、甆盌に入れて熱湯一盞を沃ぎ、蓋ふて良久して滓を去つて服す。(聖惠方)【時疾發黃】狂悶し、煩熱し、意識を失ふものには、大瓜蔞實の黃なるもの一箇を新汲水九合に浸し、淘つて汁を取り、蜜半合、朴消八分を入れて合攪し、(一四)消盡せしめて全部を二回に分服す

(九)大觀ニ十五丸ニ作ル。
(一〇)大觀ニ升ニ作ル。
(一一)大觀ニ洗字子字ノ下ニアリ。
(一二)大觀ニ二十丸ニ作ル。
(一三)大觀ニ熱ニ作ル
(一四)令消ノ二字、大觀ニ據リ補フ。

れば瘥える。（蘇頌圖經本草）【小兒の黃疸】眼が黃になるは脾熱である。靑瓜蔞を焙じ研り、一錢づつを水半盞で七分に煎じ、就寢時に服す。五更頃黃色の物を瀉下して立ろによし。逐黃散と名ける。（普濟方）【酒黃疸疾】方は上に同じ。【小便不通】腹脹するには、瓜蔞を焙じ研つて二錢づつを熱酒で服し、通じのあるまで頻りに服す。紹興の劉駐は『魏明州がこの病のとき、御醫がこの方を治療に用ゐて效果を擧げた』といつた。（聖惠方）【消渴煩亂】黃栝樓一箇を酒一盞で洗つて皮、子を去り、瓤を煎じて膏にし、白礬末一兩を入れて梧子大の丸にし、十丸づつを米飮で服す。（聖惠方）【燥渴し腸祕するもの】九月、十月に熟した蓏藪實の瓤を取つて乾葛粉を拌ぜ、銀、石器に入れて慢火で炒熟し、末にして食後と就寢時とに二錢づつを沸湯に點て服す。（寇宗奭衍義）【吐血の止まぬもの】栝樓を泥固して煆いて性を存して研り、一日二回、三錢づつを糯米飮で服す。（聖惠錄）【腸風下血】栝樓一箇を灰に燒き、赤小豆半兩と末にし、空心に一錢づつを酒で服す。（普濟方）【五色久痢】大なる熟瓜蔞一箇を煆いて性を存し、火毒を出して末にし、それを一服として溫酒で服す。胡大卿の一人の僕が半年間痢を患つたとき、杭州のある道人からこの方を傳受して癒えた。（本事方）

【大腸脱肛】生栝樓の搗汁を溫服し、豬肉汁で手を洗つて揉み暖めれば自ら入る。（葛洪肘後方）【小兒の脱肛】唇白く、齒が焦げ、久しきに亙れば兩頰が光り、眉が赤く、唇が焦げ、苦んで啼哭する。黄瓜蔞一箇の中へ白礬五錢を入れて固濟し、煆いて性を存して末にし、糊で梧子大の丸にし、二十丸づつを米飮で服す。（摘玄方）【牙齒の疼痛】瓜蔞皮、露蜂房を灰に燒いて牙に擦り、烏桕根、荊柴根、葱根の煎湯で漱ぐ。（危氏得效方）【咽喉腫痛】語聲の出ぬには、經進方では、栝樓皮、白殭蠶を炒り、甘草を炒り、各二錢半を末にし、三錢半づつを薑湯で服す。或は綿で半錢を裹んで一日二回含み嚥む。これを發聲散と名ける。（御藥院方）【齒を堅くし、髮を黑くする】大栝樓一箇を頂を切開し、靑鹽二兩、杏仁を皮尖を去つて三七粒を入れ、囊に切取つた頂を合せて蚯蚓泥に鹽を和したもので固濟し、炭火で煆いて性を存して研末し、毎日三回、熱くなるまで牙に揩る。百日で效驗がある。白鬚があるには、それを拔き去つてからこの藥を用ゐれば黑い毛が生える。この藥の口齒を治する功力に至つては盡く述べ難い。（普濟方）【顏色の黑きを白くする】栝樓瓤三兩、杏仁一兩、豬脏一頭分を共に膏のやうに研つて毎夜塗る。顏色が光潤になり、冬季にも皺

まぬ（聖濟錄）【胞衣の下らぬもの】栝樓實一箇を子を取つて細研し、酒、童尿各半盞で七分に煎じて溫服する。實が無いときは根を用ゐてもよし。（陳良甫婦人良方）【乳の出ぬもの】瓜蔞子を淘り洗ひ、竝べ乾して香しく炒り、瓦上に(一五)翕して白色にし、(一六)酒で一錢匕を服して兒と共に顏を合せて寢る。(一七)「一夜にして流出」する。（姚僧坦集驗方）【乳癰の初期】大熟栝樓一箇をよく搗き、白酒一斗に入れて四升に煮取り、滓を去つて一升を一日三回に溫服する。（子母祕錄）【諸癰の發背】初期で微し赤きには、栝樓を搗いて末にし、井華水で方寸匕を服す。（梅師方）【便毒の初期】黃瓜蔞一箇、黃連五錢を水で煎じ、續けざまに服すれば效がある。（李仲南永類方）【風瘡、疥癩】生栝樓一二箇を打碎き、一晝夜酒に浸して熱飮する。（臞仙乾坤祕韞）【熱遊丹腫】栝樓子仁末二大兩を釅醋で調へて塗る。（楊氏產乳集驗方）【楊梅瘡痘】指先ほどの小さきものが遍身に現れたるには、先づ敗毒散を服してからこの藥を用ゐる。皮膚の風熱を解し、十服を過ぎずして癒える。栝樓皮を末にし、一日三回、三錢づつを燒酒で服す。（集簡方）

根　修治　**天花粉**　周憲王曰く、秋、冬に根を採つて皮を去り、一寸ほどに

(一五)大觀ニ搐ニ作ル
(一六)大觀ニ酒字上ニ爲末ノ二字アリ。
(一七)大觀ニ「」ヲ少時ニ作ル。

切つて水に浸し、日毎にその水を換へて四五日で取出し、搗いて泥にして絹布で濾し、その汁を澄まして粉を取り、晒し乾して用ゐる。

【氣味】【苦し、寒にして毒なし】時珍曰く、甘く微し苦く酸し、微寒なり。之才曰く、枸杞が使となる。乾薑を惡み、牛膝、乾漆を畏れ、烏頭と反す。

【主治】【消渴身熱、煩滿大熱。虛を補し、中を安じ、絕傷を續ぐ】(本經)【腸、胃中の痼熱、八疸で身體、面部が黃色になり、唇乾き、口燥き、呼吸の短きを除き、小便を止め、月經を利通す】(別錄)【熱狂時疾を治し、小腸を通じ、腫毒、乳癰、發背、痔瘻、瘡癤を消し、膿を排し、肌を生じ、肉を長じ、撲損の瘀血を消す】(大明)

【發明】恭曰く、根で作つた粉は潔白で美しく、これを食へば虛熱の人によし。杲曰く、栝樓根は純陰のもので、煩渴を解し、津液を行らす。心中の枯涸するには、これ以外によく除くものはない。辛、酸のものと共に用ゐれば腫氣を導く。成無已曰く、津液が不足すれば渴となる。栝樓根は、味が苦く、微寒でありて、枯燥を潤し、津液を通じ行らすものだ。故に渴に對して適當の藥なのである。時珍曰く、栝樓根は、味甘く、微し苦く、酸し。莖、葉は味が酸し。酸の能く津

を生ずるは、感召の理である。故に能く渇を止め枯を潤ほすのである。微苦で火を降し、甘で胃を傷めぬやうになつてゐる。既往の學者は、ただその味が苦、寒だとだけいつてあるが、如何にも深い研究をしてゐなかつたやうである。

【附方】 舊十二、新十二。【消渇飲水】千金方の作粉法では、大栝樓根を皮を去つて一寸程に切り、水に五日浸して毎日水を換へ、取出して搗き研り、濾過し澄してその粉を晒し乾し、一日三回、方寸匕づつを水に溶して服す。また粥、及び乳酪に入れて食ふもよし。○肘後方では、栝樓根を薄く切り、炙いて五兩を水五升で四升に煮取り、隨意に飲む。○外臺祕要では、生栝樓根三十斤を、水一碩で一斗半に煮取つて滓を去り、牛脂五合で水分がなくなるまで煎じ、一日三回、食前にその藥を鷄子一箇ほど煖酒で服す。最も妙である。○聖惠方では、栝樓根、黄連三兩を末にし、蜜で梧子大の丸にし、一日二回、三十丸づつを服す。○又、玉壺丸――栝樓根、人參等分を末にし、蜜で梧子大の丸にし、三十丸づつを麥門冬湯で服す。【傷寒煩渇】飲物を欲しがるには、栝樓根三兩を水五升で一升に煮取り、二回に分服する。豫め好き銀二兩を淡竹瀝一(一八)斗と水二升で煮た汁を冷して飲み、それからこの藥を服

(一八)大觀ニ升ニ作ル。

す。(外臺祕要)【(一九)百合病渇】栝樓根と熬つた牡蠣等分を散にし、飲で方寸匕を服す。(永類方)【黒疸と稱する危險な病】瓜蔞根一斤の搗汁六合を頓服する。それで黄水が小便と共に排出する。もし排出せぬときは再服する。(楊起簡便方)【小兒の發黄】皮膚、筋肉、顏、目までみな黄なるには、生栝樓根の搗汁二合を取つて蜜二大匙とむらなく和し、一日一回暖服する。(廣利方)【小兒の熱病】壯熱し、頭痛するには、栝樓根末半錢を乳汁で調へて服す。(聖惠方)【虛熱欬嗽】天花粉一兩、人參三錢を末にし、一錢づつを米飲で服す。(集簡方)【偏疝の極痛】劫かせば立ろに佳し。綿袋で包んで陰囊を暖め、天花粉五錢を醇酒一盌で午前六時から同十二時まで浸し、微し煎じ滾らせて一夜露し、翌早朝低い椅子に坐つて手で膝を按摩しながら飲下す。直に癒える。なほ定らぬときは再び一服する。(本草蒙筌)【小兒の囊腫】天花粉一兩、炙甘草一錢半を水で煎じ、酒を入れて服す。(全幼心鑑)【卒かに耳の烘烘と鳴るもの】栝樓根を尖に削り、臘豬脂で煎じて三沸し、それで三日間耳を塞げば癒える。(肘後方)【幾も經過せぬ耳聾】栝樓根三斤を細かに切り、水で煮てその汁を普通釀すやうに酒に釀し、それを久しく服するが甚だ良し。(肘後方)【產後の(二〇)吹乳】硬く腫れて疼

(一九)大病虛勞ノ後臟府平カナラズ、變ジテ百合病ヲナス。食慾減退行步ノ困難眠臥ヲ好ムモノ百合ヲ主藥トシテ之ヲ治ス、故ニ此名アリ。

(二〇)吹乳ハ乳房炎及乳房膿腫ヲ指ス。

痛するものは、輕ければ妬乳、重ければ乳癰となる。栝樓根末一兩、乳香一錢を末にし、溫酒で二錢づつを服す。(李仲南永類方)【乳汁の出ぬもの】栝樓根を燒いて性を存して研末し、飲で方寸匕を服す。或は五錢を酒、水で煎じて服す。(楊氏産乳)【癰腫の初期】孟詵の食療では、栝樓根を苦酒で熬り燥して搗き篩ひ、苦酒で和して紙に塗つて貼る。○楊文蔚の方では、栝樓根、赤小豆等分を末にし、醋で調へて塗る。【(二二)天泡濕瘡】天花粉、滑石等分を末にし、水で調へて搽る。(普濟方)【楊梅天泡】天花粉、川芎藭各四兩、槐花一兩を末にし、米糊で梧子大の丸にし、七八十丸づつを空心に淡薑湯で服す。(簡便方)【折傷の腫痛】栝樓根を搗いて塗り、重布で患部を裹む。熱が除き、痛が同時に止まる。(葛洪肘後方)【箭鏃の出ぬもの】栝樓根を搗いて傅け、日毎に三回易へれば自から出る。(崔元亮海上方)【針や刺の肉に入りたるもの】方は上に同じ。【痘後の目障】天花粉、蛇蛻を洗ひ、等分を末にして羊子肝を批開した中に入れ、米泔汁で煮熟して切つて食ふ。予の次女がこの病の時、これを服して十日餘で癒えた。(周密齊東野語)

莖葉　[氣味]【酸し、寒にして毒なし】　[主治]【中熱、傷暑】(別錄)

(二二)天泡ハ楊梅瘡。

(一)王瓜（本經中品）

和名　おほすずめうり
學名　Thladiantha dubia, Bunge.
科名　うり科（葫蘆科）


〔王瓜〕

釋名　**土瓜**（本經）　**鉤甊**（郭璞）　**老鴉瓜**（圖經）　**馬瓟瓜**　瓟の音は雹（ハク）である。**赤雹子**（衍義）　**野甜瓜**（綱目）　**師姑草**（土宿）　**公公鬚**　頌曰く、月令に『四月、王瓜生ず』とあるはこのものだ。(二)均州、房州地方ではこれを老鴉瓜と呼び、また菟瓜ともいふ。按ずるに、爾雅に『黄、菟瓜』とあり、郭璞の注に『土瓜に似てゐる』といつたが、郭璞自身にまた土瓜を『蔠姑、又、鉤甊と名ける』といつてゐるところを見ると、菟瓜といふは別の一種のものだ。又、(三)茢菲もやはり『土瓜』といつてあるが、これも別の一種のもので、この土瓜のことではない。異類同名のものが甚だ多いから、區別に注意を要する。

(一)牧野日フ、王瓜ハ元來下ノ學名ノ品デアツタ、然ルニ我邦ノ學者ハ從來カラ之レヲからすうり（Trichosanthes cucumeroides, Maxim.）ニ充テ來ツタノハ誤リデアツタ、王瓜ノ屬ノモノハ一モ我邦ニハ產セヌ。王瓜ハきうりノヤウナ花形ヲシタ黄花ヲ開クモノデアル。
(二)均州ハ石部長石ノ註、房州ハ金部錫ノ註ヲ見ヨ。
(三)爾雅ニハ菲芴ニ作ル。

時珍曰く、土瓜は、その根に土臭い臭氣があり、その實が瓜に似てゐる。或は、根の味が瓜のやうだから土瓜と名けたともいふが、王の字を用ゐたわけが判らない。この瓜は雹子に似て、熟すれば色が赤くなり、鴉が喜んで食ふ。それで俗に赤雹、老鴉瓜などといふ。一枚の葉の下に一本の鬚があるところから、俚人は公公鬚と呼ぶ。これは地黃の苗を婆婆奶と呼ぶと夫婦一對のやうなものだ。

集解　別錄に曰く、(四)魯地の平澤、田野、及び人家の垣根の間に生ずる。三月根を採つて陰乾する。

弘景曰く、現に土瓜は屋敷の邊りの籬などに生え、子は熟すると赤くなり、大いさは彈丸ほどになる。その根は單行の小方に入れるだけで、大方の藥には入れない。鄭玄は、月令の『四月、王瓜生ずる』とあるに注して『これは菝葜だ』といつたが、甚しい謬だ。

恭曰く、四月苗が生えて蔓が延び、葉は栝樓の葉に似て、(五)但だ叉缺がなく、毛刺がある。五月黃色の花を開き、花の下に彈丸ほどの子を結び、その子は生は青く、熟すれば赤くなる。根は葛に似て細く、糝が多い。これを土瓜根といふ。北方の地

(四)魯ハ今ノ山東省ノ南半。

(五)大觀ニ但ヲ圓ニ作ル。

のものは、子が棗ほどの大いさで纍纍と連り、皮が黄で肉が白く、苗と子とはよく似てゐるが、根の形狀が同じくない。黄疸、破血の治療には南方のものが大いに勝れてゐる。

宗奭曰く、王瓜は、殼が徑一寸、長二寸ばかりあつて、上部は微し圓く、下部は尖つて長く、七八月に熟して紅赤色になり、殼中の子は螳螂の頭のやうなものだ。今は一般にこれを赤雹子と呼ぶ。その根が卽ち土瓜根であつて、細根の上にまた淡黄色の根が三五本相連つて生え、大指ほどの太さのものだ。根と子と兩ら藥に用ゐる。

時珍曰く、王瓜は三月に苗が生え、その蔓には鬚が多く、嫩いうちは茹へる。その葉は圓く、馬蹄のやうな形で尖があり、青面は青く、背面は淡く、粗澀で光らない。六七月に五出で黄色の小さい花が簇つて開き、纍纍たる子を結ぶ。その子には熟すると紅色のものと黄色のものとの二種がある。皮はやはり粗澀なものだ。根は葛根には似ないが、ただ栝樓根の小さいもののやうだ。澄し取つた粉は甚だ膩かで白い。この根は二三尺深さに掘つて取れば正しいものが取れる。江西地方では、肥

えた土地に栽培して根を取り、蔬にして食ふが、味は山藥のやうだ。

根　［氣味］　【苦し、寒にして毒なし】　權曰く、平なり。藏器曰く、小毒あり、能く人を吐かす。これから取つて汁は雄、汞を制す。　［主治］　【消渇の內痺、瘀血、月經閉止、寒熱酸疼。氣を益し、聾を癒す】(本經)　【諸種の邪氣、熱結、鼠瘻を療じ、癰腫、留血を散ず。婦人の帶下、(六)不通。乳汁を下し、小便の頻數にして禁ぜざるものを止め、四肢骨節中の水を逐ひ、馬骨で刺した瘡を治す】(別錄)　【天行熱疾、酒黃病で壯熱し心の煩悶するもの。膿を排し、撲損を治し、瘀血を消し、癥癖を破り、胎を落す】(大明)　【蠱毒、小兒の(七)閃癖、痞滿、痰瘧に主效がある。いづれも根、及び葉の搗汁を取つて少しづつ服す。吐、下するものである】(藏器)　【大小便を利し、顏面の黑きもの、面瘡を治す】(時珍)

［附方］　舊五、新七。　【小兒の發黃】　土瓜根の生の搗汁三合を與へて服ます。三回以上必要なし。(蘇頌圖經)　【黃疸の黑く變じたもの】　醫師も容易に治療し兼ねるものである。土瓜根汁一小升を早朝に溫服する。正午頃に小便から黃水が出るものだ。なほ出ぬときは再服する。(八)　【泔の如き尿の出るもの】　腎虛である。王瓜散――王

(六) 不通ハ大小便ノ不通。

(七) 閃癖ハ急ニ腹部ニ停滯スル病。

(八) 大觀ニ(肘後方)ヲ引ク。

瓜根一兩、白石脂二兩、兎絲子を酒に浸して二兩、桂心一兩、牡蠣粉(ぼれいふん)一兩を末にし、二錢づつを大麥粥飲(だいばくじゆくいん)で服す。(衛生寶鑑)【小便不通】土瓜根の搗汁に少量の水を入れて解き、筒で尿道に吹き入る。(肘後方)【大便不通】上記の方を肛門內に吹き入る。二便不通には尿道と肛門とに吹き入れば通じる。(肘後方)【乳汁不下】土瓜根を末にし、一日二回、酒で一錢づつを服す。(楊氏產乳方)【月經の通じ惡しきもの】帶下し、少腹が滿し、或は經が一月に二回あるには、土瓜根散が主效がある。土瓜根、芍藥、桂枝、䗪蟲(しやちう)各三兩を末にし、一日三回、酒で方寸匕づつを服す。(仲景金匱方)【婦人の陰㿗(いんたい)】方は上に同じ。【一切の漏疾】土瓜根を搗いて傅け、燥けば易へる。(千金方)【諸蠱の中毒】長さ三寸、(九)指ほどの太さの土瓜根を切り、酒半升に三晝夜浸して服す。吐、下するものである。(外臺祕要)【顏面の(一〇)痱瘖(ひはい)】土瓜根を末に搗いて漿水でよく和し、夜に入つてから別の漿で顏を洗つてその藥を塗り、またそれを洗ひ落す。百日間試むれば光彩人を射るやうになり、夫婦でさへ判らぬほどになる。これは嘗て實驗を經たものである。(肘後方)【耳聾の灸法】濕ふた土瓜根を半寸ほど削り取り、それで耳の內部を塞いでから、艾(がい)で七壯灸する。十日目毎に一回試み、癒えれば止

(九)大觀ニ指上母字アリ。

(一〇)大觀ニ瘖ヲ瘰ニ作ル、痱瘰ハイボイボ。

める。(聖濟錄)

子 [氣味] 【酸く苦し、平にして毒なし】 [主治] 【生で用ゐれば心、肺を潤ほし、黄病を治す。炒つて用ゐれば肺痿吐血、腸風瀉血、赤白痢を治す】(大明) 【蠱毒に主效がある】(甄權) 【反胃吐食】(時珍)

[附方] 新八。 【消渇飲水】雹瓜を皮を去り、毎食後に二三兩を嚼む。五七回で瘥える。(聖惠方) 【傳尸勞瘵】赤雹兒、俗に王瓜と呼ぶものを焙じて末にし、一錢づつを酒で服す。(十藥神書) 【反胃吐食】馬雹兒を燈火の上で燒いて性を存し、一錢に好き棗肉平胃散末二錢を入れて酒で服す。食物が落付く。馬雹兒とは野甜瓜のことで、北方諸地に多くある。(丹溪纂要) 【痰熱頭風】懸栝樓一個、赤雹兒七個を焙じ、大力子、卽ち牛蒡子を焙じて四兩と末にし、毎食後、茶、或は酒で三錢づつを服す。風を動ずるもの、熱を發するものを食ふことを忌む。【筋骨の痛攣】馬雹兒子を炒つて口を開かせて末にし、一日二回、酒で一錢を服す。(集簡方) 【赤目で痛み澁るもの】忍び難きには、籬に實つた瓜瓤の、大いさ彈丸ほどで小さく圓く刺のあるものを九月、十月に採つて日光で乾し、槐花を炒り、赤芍藥と等分を末にし、就寢時に

(一)牧野曰フ、くずハ支那、朝鮮、日本ガ其原產地デアル。本品ハ元來草本ニアラズシテ一ノ藤本デアル、其蔓ノ大ナルモノハ直徑凡ソ三寸ニ出入スルモノガアル。

(二)汶山ハ漢ノ郡名、石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。

(三)南康ハ晉ノ郡名、宋ニ廢ス。今ノ江西省贛縣西南ニ故城アリ。

二錢づつを溫酒で服す。(衞生家寶方)【瘀血で痛むもの】赤雹兒を燒いて性を存して研末し、空心に二錢を無灰酒で服す。(集簡方)【大腸下血】王瓜一兩を燒いて性を存し、地黃二兩、黃連半兩と末にし、蜜で梧子大の丸にし、米飮で三十丸を服す。(指南方)

(一)葛(本經中品)

和名 くず
學名 Pueraria triloba, Makino.
科名 まめ科(荳科)

校正 開寶の葛粉を併せ入る。

釋名 **雞齊**(本經) **鹿藿**(別錄) **黃斤**(別錄) 時珍曰く、葛の字は曷の字に艸冠を付けたもので、同じ發音だ。鹿が食ふ九種の草の內の一種だから鹿藿といふ。黃斤の意味は判らない。

集解 別錄に曰く、葛根は(二)汶山の山谷に生ずる。五月根を採つて曝乾する。弘景曰く、卽ち今の葛根のことで、世間でいづれも蒸して食ふそのものだ。これは土中に深く入つた大なるものほどよし、それを破り裂いて日光で乾して用ゐるのである。(三)南康、(四)廬陵地方のものは立派なもので、肉が多くて筋が少く、味が甘

美だが、ただ藥としては思はしくない。

恭曰く、葛は毒を除くといふことにはなつてゐるが、その根の土中五六寸位のところは葛脰と名けるもので、これを服すれば人を吐かせる。微毒があるからだ。脰とは頸のことである。本經に、葛穀とあるはその實のことだ。

頌曰く、今は處處にあるが、江、浙地方が多いやうだ。春苗が生えて藤を引き、その蔓は長さ一二丈になつて紫色である。葉は頗る楸葉に似てゐるが、小さくして色が青い。七月花を著け、粉紫色で豌豆の花に似てゐる。實は結ばない。根の形は、太さ手の臂ほどあつて紫黑色だ。五月五日の午時に根を採つて曝乾する。土中に深く入つたものほど佳し。今は一般に多く粉にして食ふ。

宗奭曰く、(五)澧州、鼎州地方では、冬季に生葛を取つて搗き爛らし、それを水中に入れて粉を揉み出し、澄ましして澱んだものをつくね固めて置く。それを沸湯中に入れると、良久して色が膠のやうになり、その體が甚だねばり強いもので、それに蜜を拌ぜて食ふ。つくね固める際に、生薑少量を入れて搗き込むと尤も妙だ。又、それを切つて茶の中に入れて客に出すが、甘い味だけれども人體に格別の益はない。

(四)盧陵ハ隰草類青黛ノ註ヲ見ヨ。

(五)澧州ハ石部石鐘乳ノ註、鼎州ハ同部太一餘粮ノ註ヲ見ヨ。

又、生葛根を煮熟して菓子に作つて賣つてゐる。(六)吉州、南安地方でもやはり同樣だ。

時珍曰く、葛には野生のものと栽培するものとあつて、その長く延びた蔓をば、取つて絲に紡いで所謂葛布を織る材料にする。根は、外部は紫で内部は白く、長いものは七八尺ある。葉は、三尖があつて楓の葉のやうだが、長くして表面は青く背面は淡い。花は相綴つて纍纍たる穗になり、紅紫色だ。その莢は小黃豆の莢のやうで、やはり毛があり、その子は綠色で扁たく、鹽梅子のやうだ。核を生で嚼めば腥い。八九月に採る。本經の所謂葛穀とはこれをいつたのだ。唐の蘇恭はまた『葛穀とは實のことだ』といひ、宋の蘇頌は『葛の花には實を結ばない』といつたが、誤だ。その花は晒し乾し、または煠ても食へる。



〔葛根〕

葛根 (七)【氣味】 【甘く(八)辛し、平にして毒なし】 別錄に曰く、生根汁は大寒なり。好古曰く、氣は平、味は甘であつて、升であり陽であり、陽明の經の行經に

(六)大觀ニ吉上虔字アリ。吉州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。南安ハ山草類獨活ノ註ヲ見ヨ。

(七)木村(康)曰ク、くずノ根ニハ澱粉ヲ含ミ、葉ニハアデニ

ン、アスパラギン、グルタミン酸、酪酸、及黄色結晶性物質ヲ含ム。
佐々木林治郎—農化誌、昭、二(三)一一八三。
(八)大觀ニ辛字ナシ。

的效ある藥である。

主治　【消渇で身體が大熱し、嘔吐するもの、諸痺、陰氣を起し、諸毒を解す】(本經)【傷寒、中風の頭痛を療じ、肌を解し、表を發し、汗を出し、腠理を開き、金瘡を療じ、脇風痛を止める】(別錄)【天行病の上氣嘔逆を治し、胃を開き、食物を落付け、酒毒を解す】(甄權)【胸膈煩熱、發狂を治し、血痢を止め、小腸を通じ、膿を排し、血を破る。蛇蟲の嚙傷に傅け、毒箭の傷を罯す】(大明)【野葛、巴豆、その他あらゆる藥毒を殺す】(之才)【生のものは胎を墮し、蒸して食へば酒毒を消す。これを食へば穀食を斷つても飢ゑぬ。粉にして用ゐる方が妙である】(藏器)【粉にして用ゐれば、渴を止め、大小便を利し、酒を解し、煩熱を去り、丹石を壓する。小兒の熱瘡に傅ける。搗汁を飲めば、小兒の熱痞を治す】(開寶)【狂犬、惡犬の咬傷には、搗汁を飲み、また末にして傅ける】(蘇恭)【鬱火を散ずる】(時珍)

發明　弘景曰く、生葛の搗汁を飲めば温病の發熱を解す。五月五日の午時に取つた根を屑にしたものは、金瘡を療じて血を斷つ要藥である。また瘧、及び瘡を療するにも至つて良いものである。

頌曰く、張仲景が傷寒を治するに用ゐたものに葛根湯といふがある。それは大熱に主效があつて、肌を解し、腠理を發する點を用ゐたものだ。

元素曰く、陽を升らせ、津を生ずるものであつて、脾虚で渇するにはこの藥以外にその症狀を除くものがない。けれども胃氣を傷る恐があるから多く用ゐてはならぬ。張仲景が太陽、陽明の合病を治する桂枝湯の內には麻黃、葛根を加へてあり、又、葛根黃芩黃連解肌湯にもこれを用ゐてあるが、これは太陽から陽明に入る路を斷つためであつて、この物が太陽の藥だから用ゐたといふのではない。頭顱が破れるやうに痛むは陽明の中風だから葛根、葱白湯を用ふべきで、これは陽明の仙藥なのだ。太陽に初めて病があり、まだ陽明に入らずして頭痛するものの場合は、すぐに升麻、葛根を服してこれを發してはならぬ。これは反て邪氣を引いて陽明に入れることになるので、あたかも兇賊を引き込んで一家を破滅するやうなものである。

震亨曰く、凡そ瘢痘の已に紅點の現れたものには、葛根升麻湯を用ゐてはならぬ。恐らく、表虛して反て瘢爛を增すものだ。

杲曰く、乾葛はその氣が輕浮であつて、胃の氣を鼓舞し、上行して津液を生ずる。又、肌熱を解し、脾胃虛弱の泄瀉を治する聖藥である。

徐用誠曰く、葛根は氣、味ともに薄く、輕くして上行し、浮にして微降し、陽中の陰である。その應用に四種あつて、渴を止めるが一、酒を解するが二、表の邪を發散するが三、瘡疹の出で難きものを發するが四である。

時珍曰く、本草の十劑の說に『輕は實を去るもので、麻黃、葛根の屬だ』とあるが、蓋し麻黃なるものは太陽の經の藥で兼て肺の經に入る。肺は皮毛を主るものだ。葛根なるものは陽明の經の藥で兼て脾の經に入る。脾は肌肉を主るものだ。結果から見て、この二味の藥はいづれも輕揚であり、發散するのだが、その主として入るところの對象は遙かに異つてゐる。

附方　舊十五、新八。

【數種の傷寒】凡庸の醫師には判別がつかぬ。現に一藥を取つて天行時氣のすべてを兼ね療じてゐるが、初期に頭痛し內熱を覺え、脈の洪なるには、葛根四兩、水二升に豉一升を入れ、半升に煮取つて服す。生薑汁を加へるが尤も佳し。（傷寒類要）【時氣頭痛】壯熱するには、生葛根を洗淨して搗いた汁一

大盞、豉一合を六分に煎じ、滓を去つて分服する。汗が出て瘥える。なほ發汗せぬときは再服する。心熱があるときは巵子仁十箇を加へる。(聖惠方)【傷寒頭痛】發病二三日で發熱するには、葛根五兩、香豉一升を童尿(九)八升で二升に煎じ取つて三回に分服し、葱粥を食つて汗を取る。(梅師方)【妊娠熱病】葛根汁二升を三回に分服する。(傷寒類要)【熱病の豫防】急に黄を發する賊風には、葛粉二升、生地黄一升、香豉半升を散にし、一日三回、毎食後に米飲で方寸匕づつを服す。既に病となつたものは五服する。(龐安常傷寒論)【瘴疾の豫防】生葛の搗汁一小盞を服して熱毒氣を去る。(聖惠方)【煩燥熱渴】葛粉四兩を用ゐ、先づ粟米半升を一夜水に浸して漉出したものとよく拌ぜ、煮熟して糜飲に和して食ふ。(食醫心鏡)【小兒の熱渴】久しく止まぬには、葛根半兩を水で煎じて服す。(聖惠方)【乾嘔の息まぬもの】葛根の搗汁一升を服すれば瘥える。(肘後方)【小兒の嘔吐】壯熱するは食癇である。葛粉二錢を水二合でむらなく調へ、錫(一〇)鑼へ傾け入れてそれを重湯でたぎり熟し、糜飲で和して食ふ。(昝殷食醫心鏡)【心熱吐血】止まぬには、生葛の搗汁半升を頓服する。立ろに瘥える。(廣利方)【衄血】止まぬには、生葛の搗汁を服す。三服で止まる。(聖惠方)【熱毒下血】熱い

(九)大觀ニ六ニ作ル。

(一〇)鑼、金陵本亦鑼ニ作ル、然レドモ鑼ハ樂器ノ名、鑵ノ誤ナルコト必セリ。

食物が原因のものには、生葛根二斤の搗汁一升に藕(一一)一升を入れ、和して服す。(梅師方)【筋を傷めた出血】葛根の搗汁を飲む。乾いたものは煎じて服す。同時に熬屑を傅ける。(外臺祕要)【臂腰の疼痛】生葛根を嚼んで汁を嚥み、效果を擧げればそれで止める。(肘後方)【金創の中風】痓強して死せんとするには、生葛根四大兩、水三升を一升に煮取り、滓を去つて分服する。口噤するには灌ぎ込む。乾いたものをば搗いて末にし、(一二)三指撮を調へて用ゐる。そしてこの物、及び竹瀝を多く服して效を取る。(一三)(貞元廣利方)【藥の服み過ぎ】苦悶するには、生葛汁を飲む。乾いたものは煎じて汁を服す。(肘後方)【酒醉の醒めぬとき】生葛汁二升を飲めば癒える。(千金方)【(一四)諸藥の中毒】狂亂し、煩悶し、吐、下し、死せんとするには、葛根の煮汁を服す。(肘後方)【鴆の中毒を解す】氣息絶えんとするには、葛粉三合を水三盞で調へて服す。口噤するには灌ぎ込む。(聖惠方)【虎、又は人に咬れた傷瘡】生葛を煮た濃汁で洗ひ、同時に末に搗いて方寸匕づつを一晝夜に五六回服す。(梅師方)

葛穀　[氣　味]【甘し、平にして毒なし】[主　治]【下痢——十歲已上のもの】(本經)【酒毒を解す】(時珍)

(一一)大觀ニ藕下ニ汁字アリ。
(一二)三指撮ハ一撮ニ同ジ。
(一三)大觀ニ肘後方ニ作ル。
(一四)大觀ニ諸藥ヲ諸菜ニ作ル。

（一五）癤子ハ細カイ癤腫。

（一六）風緩ハ中風、偏風ハ半身不隨。

（一七）山南ハ隰草類漏盧ノ註ヲ見ヨ。

（一八）峽中ハ四川省揚子江ノ[illegible]陸三峽附近ヲイフ。

葛花 ［氣味］ 穀に同じ。 ［主治］ 【酒を消す】（別錄） 弘景曰く、小豆花の乾末と共に末にして酒で服す。酒を飲んでも醉はぬ。【腸風下血】（時珍）

葉 ［主治］ 【金瘡の血止めに挼んで傅ける】（別錄）

蔓 ［主治］ 【卒かの喉痺には、燒き研つて方寸匕を水で服す】（蘇恭） 【癰腫を消す】（時珍）

［附方］ 新三。 【婦人の吹乳】葛蔓を灰に燒き、二錢を酒で服す。三服で效がある。（衞生易簡方） 【（一五）癤子の初期】葛蔓を灰に燒き、水で調へて傅ければ消く。（千金方） 【小兒の口噤】麻豆ほどのものが小兒の咽中に出て、ために沫を吐き、乳も呑めず、物も食へぬには、葛蔓を灰に燒き、一字を乳汁で和して黏ければ瘥える。（聖惠方）

［附錄］ **鐵葛**（拾遺） 藏器曰く、根——味甘し、溫にして毒なし。一切の風血氣の羸弱に主效があり、人の性を健にする。久しく服すれば（一六）風緩、偏風を治す。（一七）山南、（一八）峽中に生ずる。葉は枸杞に似て、根は葛のやうで色が黒い。

(一)黃　環（本經下品）

和名無し
學名未詳
科名まめ科（荳科）

狼跋子（別錄下品）

黃環の實の名である。

【釋名】凌泉（本經）　大就（本經）　就葛（唐本）　生芻（吳普）　根韭（吳普）　實を狼跋子と名ける。（別錄）　度穀（唐本）　時珍曰く、この物は葉が黃色で圓いから黃環と呼ぶので、蘿藦を白環と呼ぶと同じ意味だ。やはりこの物も葛の類なるところから就葛なる名がある。跋とは狼の足を稱する言葉で、この草の莢がその足に似てゐるといふところから狼跋子と呼んだのだ。

【集解】別錄に曰く、黃環は(二)蜀郡の山谷に生ずる。三月根を採つて陰乾する。

普曰く、蜀の黃環は一名生芻といふ。二月苗が生え、正赤色で高さ二尺ほどになり、葉は正圓で大きく、日を經ると葉に黃白色の汁が出る。五月圓い實を結ぶ。三月根を採る。その根は黃色で、縱の理があつて車輻のやうに解する。

弘景曰く、防已に以て、やはり車輻のやうに理が解ける。蜀都賦に『青珠黃環』と

(一)牧野曰フ、黃環ハ植物名實圖考卷二十二ニ其圖ガアレドモ、然シ其レガ何ト云フ學名ノモノカ判然セヌ。藤本デ葉ハふぢノヤウデアルガ七小葉ノ奇數羽狀デアル、花ハ可ナリ大キクテ短カイ花穗ヲナシテ居リ、莢モ亦可ナリ大形デアル、先ヅ通形ハふぢニ似テ居ル品デアル。本書ノ氣味ニハ根ニ毒ガアルトアル。

(二)蜀郡ハ石部玉類青琅玕ノ註ヲ見ヨ。

(三)交、廣ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四)巴西ハ水部甘露蜜ノ註ヲ見ヨ。

あるはこの物だ。或は『これは大戟の花だ』ともいふが、それは誤に相違ない。藥に用ゐることは甚だ稀なもので、藥種商でも識るものが尠い。○又曰く、狼跋子は(三)交、廣に産する。形の扁たいものだ。これを修治して雜木で搗き、それを水中に投ずれば魚類が大小となくみな水面に浮き出て死ぬ。



〔黄環〕
—狼跋子—

○恭曰く、黄環はただ襄陽だけに甚だ多く、他の地にはあるにはあつてもやはり稀だ。(四)巴西地方ではこれを就葛といひ、現にこれも庭や畑に栽培してゐる。藤になつて生えるもので、太いものは莖の徑六七寸あり、根はやはり葛の類だ。陶氏が『防已に似てゐる』といふそのものはこれに近い。葛根と取り誤つてこれを食ふと吐、利して止まぬが、その場合は土漿を飲むと解す。それが眞の黄環だ。現に太常で貯藏されるもので、劍南から納入するものは雞屎葛根といふもので、黄環ではない。これは花が紫色のもので、その子を狼跋子と名ける。皂莢のやうな角の生るものだ。交州、廣州から太常へ納入するも

のが正に黄環の子に相違ない。開花、結實の時期は葛と同じ。

時珍曰く、呉普の所説に甚だ詳だ。而るに唐、宋の本草になぜそれを收錄しなかつたであらう。范子汁然には『黄環は(五)魏郡に產する。黄色のものが善し』とある。

黄環　根である。［氣味］【苦し、平にして毒あり】普曰く、神農、黄帝は毒ありといひ、桐君、扁鵲は苦しといふ。權曰く、大寒にして小毒あり。之才曰く、鳶尾が使となる。茯苓、防已、乾薑を惡む。

［主治］【蠱毒、(六)鬼疰、鬼魅の邪氣が臟中にあるもの。欬逆寒熱を除く】(本經)【上氣で急するもの、及びあらゆる邪を治す】(甄權)【痰嗽を治し、水腫を消し、小便を利す】(時珍)

［附方］　新一。【水腫】黄環の根を晒し乾し、五錢づつを水で煎じて服す。小便が利して奏效する。(儒門事親)

狼跋子　［氣味］【苦し、寒にして小毒あり】［主治］【惡瘡、(七)蝸疥。蟲魚を殺す】(別錄)【苦酒で磨つて塗れば瘡疥に效がある】(弘景)

(五)魏郡、即チ古ノ魏國ノ地。山草類紫草ノ註參照。

(六)鬼疰ハ卒然ニ心腹刺痛シ、或ハ悶絶スル病。

(七)蝸疥詳ナラズ。蝸瘡一名蝸瘡ハ膿窠瘡ノ一種ニシテ痒痛折裂スルモノ。

(一)天門冬（本經上品）

和名 くさすぎかづら
學名 Asparagus lucidus, Lindl.
科名 ゆり科（百合科）

釋名　**虋冬**　虋の音は門（モン）である。**顚勒**（本經）　**顚棘**（爾雅）　**天棘**（綱目）
萬歲藤　禹錫曰く、按ずるに、爾雅に『蘠蘼虋冬』とあり、注に『門冬、一名滿冬』とある。抱朴子には『一名を顚棘といひ、或は地門冬といひ、或は筵門冬といふ。(二)東岳に在ては淫羊(三)藿と名け、中岳に在ては天門冬と名け、西岳に在ては(四)菅松と名け、北岳に在ては無不愈と名け、南岳に在ては百部と名け、(五)京陸の山阜に在ては顚勒と名け、(六)越地方では浣草と名ける。處處にあつて名稱は異ふけれどもその實は同一物だ。別に百部草といふ草があるが、この草は根が百本ほどであつて、右と同一の草のやう



〔天門冬〕

(一)牧野曰フ、くさすぎかづらハ通常海ニ近キ地ニ生ジ、支那、朝鮮、日本ノ原産デアル。我邦デハ其紡錘狀ノ多肉根ヲ採テ砂糖漬トナシ、天門冬ノ砂糖漬ト稱スル。然シ今日ハ餘リ之レヲ製セヌヤウデアル。又たちてんもんどうモ天門冬ノ一品デアル。
(二)東岳ハ山東省ノ泰山、中岳ハ河南省ノ嵩山、西岳ハ陝西省ノ華山、北岳ハ河北省ノ恆山、南岳ハ湖南省ノ衡山ヲイフ。
(三)大觀ニ食ニ作ル。
(四)本書ニ菅ニ作ル。
(五)京陸トハ洛陽附近ノ高地ヲ指スカ。
(六)越トハ今ノ廣東、廣西地方ノ古稱。

ではあるが、苗が少し異ふ。その苗は菝葜に似たもので、功力は欬を治するだけのことだ。服食には用ゐるに足らぬ。その區別を混同してはならない』とある。

時珍曰く、草の茂る狀態を虋といふ。俗に門と書く、この草は虋が茂るもので、功力が麥門冬と同じだ。故に天門冬といふのである。或は天棘ともいふ。爾雅に『髦顚棘』とある。それは、この草は細い葉が髦のやうで細棘があるに因んだもので、顚と天とはその音が相近い。按ずるに、救荒本草には俗に萬歲藤、又は婆羅樹と名ける。その根の形狀と、肺を治する功力とが頗る百部と同じところから百部とも名ける』とある。蘠蘼とは營實の苗のことだが、爾雅に、それを門冬としてある。蓋し古代の書籍だから、記錄がたまたま紛入し錯雜したのだ。

(七)【集解】別錄に曰く、天門冬は(八)奉高の山谷に生ずる。二月、三月、七月、八月に根を採つて曝乾する。

弘景曰く、奉高とは泰山の麓の縣名である。今は處處にあるが、高地に生えて根の太い味の甘いものが好し。桐君の藥錄に『蔓生で葉に刺があり、五月白色の花を開き、十月黑色の實を結ぶ。根は數十本生える』とある。張華の博物志には『天門

(七) 木村(康)曰ク、現今市場ニ出ヅルモノハくさすぎかづらニ因ル。
(八) 奉高ハ毒草類狼毒ノ註ヲ見ヨ。

(九)縑トハ黄色ノ重絹ヲイフ。
(一〇)絨ハ毛織物、紵ハ麻布。

冬は莖の間に逆刺がある。若い葉の滑かなものをば絺體と呼び、一名顚棘といふ。根を採んで湯に入れ、それで(九)縑を浣ふと(一〇)絨・紵の類を浣つたやうに純白色になるものだ。現に越地方ではこれを浣草と呼び、灰を用ゐるに勝るといつてゐる。しかしこれは相似てゐるといふだけで、門冬そのものではない』とある。按ずるに、この説は桐君の説と混亂する。現に一般に採收するはいづれも刺のあるもので、もと顚勒と名くるものだ、やはりほぼ似たもので、これで衣類を浣へば清淨になる。これ以外に別に門冬なるものはない。恐らくは門冬なるものはその中の一種のものをいふのか、或はこの浣草そのものが門冬そのものなのであらうと思はれる。又、百部根といふがあつて、これも相類するものだが、ただ苗だけに相異がある。

○恭曰く、この草には二種あつて、一種は苗に刺があつて濇り、一種は刺がなくて滑かだ。いづれも門冬である。俗に、顚棘、浣草といふのは、それぞれ形狀に由つて諸けたもので、數種の名稱は付せられてあるものの、結局一物の二種類なのだ。垢れを浣へば二種共に淨らかになる。門冬を浣草とも呼び、浣草を門冬ともいふのである――諸の字の音は命(メイ)であつて、名づけ呼ぶである。

○頌曰く、處處にあるものだ。春生えて藤になり、蔓の太さ釵股ほど、高さ一丈餘にもなる。葉は茴香のやうで極めて尖つて細いが、疎で滑で逆刺がある。また澀つても刺のないものもあつて、それは葉は絲杉のやうで細くして散つてゐる。いづれも天門冬と名けるものだ。夏細い白色の花を著け、また黄色のもの、また紫色のものもあつて、秋黑色の子を結ぶ。その子は根の枝の旁に著くものだ。三伏の後に花が無くて自然に結子する。その根は白色、或は黄紫色で、太さは手の指ほどで圓く實し、長さは二三寸だ。太いものが勝れてゐる。一株に十本、二十本生えてゐる根を同時に撮み取る。頗る百部の根と似たものだ。(二一)洛中に產するものは葉が大きく、幹が粗く、甚だ類似してゐない。嶺南のものには花がない。その他は別に異ふところがない。

○○禹錫曰く、抱朴子に『高地に生じ、根短く、味甜く、氣香しいものを上等品とする。水の近傍の低地に生え、葉が細い蘊に似て微し黄に、根が長く、味に苦が多く、氣の臭いものはこれに次ぐ。これを服食すれば、氣を下さしめる效力はあるが、それも鈍いものだ。山中生活に入つたときは、これを蒸し煮て食へば穀食を斷ち得る。

(二一)洛中ハ洛陽附近一帶。

(二二)大觀ニ酒ヲ波ニ作ル。

或は散にし、また汁を取つて(二二)酒に作つて服するが、散で服する方が佳いやうだ』といつてある。

○時珍曰く、苗が生えたとき、やはり沃地に移して栽培するがよし。子を蒔いても栽培されるが、生育が晩れる。

根 修治 ○弘景曰く、門冬を採取したならば、蒸して皮を剝ぎ去る。これを食へば甚だ甘美で飢を止めるものだ。曝乾してもやはり脂潤があつて搗き難いから、必ず日中の陽光に曝し、或は火で烘つて搗くがよし。今は一般に苗を棘刺と呼び、煮て飲に作つて用ゐ、健康によいといふことだが、しかしそれは事實眞の棘刺そのものではない。

○頌曰く、二、三、七、八月に根を採り、蒸して皮を剝去り、四つに破いて心を去り、曝乾して用ゐる。

○斅曰く、これを採取したならば、皮と心を去り、柳木甑を用ゐ、柳木柴を焚いて一伏時の間蒸し、萬遍なく酒を注いで更に火を添へて蒸し、地上二尺の高さに棚を吊り、その上に攤げて曝乾して用ゐる。

【氣　味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し、大寒なり、好古曰く、氣は寒、味は微し苦くして辛い。氣は薄く味は厚く、陽中の陰であつて、手の太陰、足の少陰の經の氣分に入る藥である。之才曰く、垣衣、地黃、貝母が使となる。曾青を畏る。損之曰く、天門冬を服したときは鯉魚を食ふことを禁ずる。誤つて食つて中毒した場合には、萍汁で解す。搗汁は雄黃、硇砂を制す。

【主　治】【諸種の劇しい風濕で偏痺するもの。骨髓を强くし、三蟲を殺し、伏尸を去る。久しく服すれば身體を輕くし、氣力を益し、天年を延べ、飢ゑない】(本經)【肺の氣を保定し、寒熱を去り、肌膚を養ひ、小便を利す。冷にして能く補す】(別錄)【肺氣欬逆、喘息促急。肺萎で癰を生じたるものには、膿を吐き熱を除く。腎氣を通じ、消渴を止め、熱中風を去り、濕疥を治するには久しく服するがよし。煮て食へば肌體を滑澤にし、色を白く淨かにし、身體上の一切の惡氣、不潔の疾を除く】(甄權)【心を鎭め、五臟を潤ほし、五勞、七傷で吐血するものを補し、嗽を治し、痰を消す。風熱の煩悶を去る】(大明)【心病で嗌が乾き、心が痛み、渴して飲物を欲しがり、痿蹷して臥すことを好み、足下が熱して痛むものに主效がある】(好古)【燥を潤

ほし、陰を滋くし、金を清し、火を降す】(時珍)【陽事不起にはこれを常に服するがよし】(思邈)

【發明】 權曰く、天門冬は冷にして能く補す。(一三)五虚で熱するには、これを加へ地黄を和して使とするがよし。これを服すれば老衰を防ぎ、頭髪を白くならしめぬ。

宗奭曰く、肺(一四)熱を治する功果は多大なものだが、その味が苦く、泄に專らにして收に專らでない。故に寒多きには服用を禁ずる。

元素曰く、苦は以て滯血を泄し、甘は以て元氣を助け、また血の妄行するを治す、これが天門冬の特功だ。肺氣を保定し、血熱が肺を侵して上氣喘促するを治するには、人參、黄芪を加へ、これを主として用ゐるがよし。神效を擧げる。

嘉謨曰く、天門冬、麥門冬は、いづれも手の太陰に入つて煩を袪り、渇を解し、欬を止め、痰を消するものであつて、麥門冬は、同時に手の少陰に行り、心を清し、火を降し、肺に對して邪が犯さぬやうにするものだ。故に欬を止めるに立ろに效がある。天門冬は、更にまた足の少陰に入り、腎を滋し、元を助け、その母の氣を全

(一三)大觀ニ五ヲ體ニ作ル。

(一四)大觀ニ熱ヲ氣ニ作ル。

うするものだ。故に痰を淸する殊功を擧げる。蓋し腎は津液を主るもので、その津が燥けば凝つて痰となるのであるが、潤劑を得れば化ける。所謂る痰の本を治するわけだ。

好古曰く、手の太陰、足の少陰の經の營、衞が枯涸するには、濕劑を用ゐて潤ほすべきものであつて、(一五)天門冬、人參、五味、枸杞子は同樣に脈を生かすの劑である。これは上焦に於いて、特に寸口に對して作用を顯はす關係である。

趙繼宗曰く、(一六)五藥は生脈の劑には相違ないが、しかし、生地黃、貝母は天門冬の使となるもの、地黃、車前は麥門冬の使となるもの、茯苓は人參の使となるものであつて、君藥を缺くか、若しくは使藥を缺いては、それは獨行であつて功果がないものだ。この故に張三丰が胡濙尙書に與へた長生不老の方には、天門冬三斤、地黃一斤を用ゐてある。これならば君藥もあり、使藥もあるわけだ。

禹錫曰く、抱朴子に『山中生活に入つたときは、天門冬を蒸し煮て食ふがよし。それで十分穀食を斷ち得るものだ。若し努めてこれを服食する意志があるならば、或は散にして酒で服するなり、或は搗汁を液膏にするなりして服するがよし。百日

(一五)湯液本草ニ天ヲ二ニ作ル。

(一六)五藥、詳ナラズ。地黃、貝母、天門冬、車前、茯苓ヲ指スカ。

間繼續すれば、體力の壯健になること朮や黄精に倍する神速力がある。二百日繼續すれば、筋、髓を強くし、顏色を移ろはしめぬ。煉つた松脂と共に蜜で丸にして服するが就中善し。杜紫微はこれを服して八十人の妾を御し、百四十歳の長壽を保ち、一日の間に三百里（邦里五十里）を歩行した』とある。

愼微曰く、列仙傳に『赤松子は、天門冬を食つて一旦落ちた齒が再び生え更り、細い髮がまた生えた』とあり『太原の甘始は、天門冬を服してこの世に在ること三百餘年であつた』ともある。聖化經には『天門冬、茯苓等分を末にして日毎に方寸匕を服すれば、寒を畏れなくなり、大寒の時に單衣でゐても汗が出る』とある。

時珍曰く、天門冬は、金を清し、火を降し、水の上源を益するものだから、能く下に腎の氣を通ずるのである。滋補の方に入れるには、諸種の藥にこれを合せて用うるが有效だ。しかし、脾、胃の虛寒の人が久しきに亙つてこれのみを單獨に服餌しては、必ず腸滑を病み、反つて痼疾を發するものだ。この物は性寒にして潤ほひ、能く大腸を利するものだからである。

附方　舊三、新十四。【服食法】孫眞人の枕中記に『八九月天門冬の根を採り、

(一七)絕傷ハ絕陽ノ誤ナラン。
(一八)偏枯ハ半身不隨。
(一九)風濕ハ僂痲質斯。不仁ハ痲痺。

曝乾して末にし、一日三回、方寸匕づつを服す。山中に在ると俗間に在るとを問はず、久しく服すれば、中を補し、氣を益し、虛勞、(一七)絕傷、老年の衰損、(一八)偏枯不隨、(一九)風濕不仁、冷痺、惡瘡、癰疽、癩疾、鼻柱の敗爛を治す。これを服すれば、皮膚がむけ更り、蟲が體外に出る。酒に釀して服すれば、癥病の積聚、風痰の顚狂、三蟲の伏尸を去り、濕痺を除き、身を輕くし、氣を益し、飢ゑなくなり、百日間服すれば若返らせ、老衰を防ぐ。酒に釀せば熟する初めは微し酸いが、久しくしてそれが停まり、香美なること他の諸酒は到底及ばない。鯉魚を忌む』とある。○臞仙の神隱書には『乾天門冬十斤、杏仁一斤を搗いて末にし、蜜に漬けて方寸匕づつを服す。これを仙人粮と名ける』とある。【辟穀して飢ゑぬ】天門冬二斤、熟地黃一斤を末にし、煉蜜で彈子大の丸にし、一日三回、三丸づつを溫酒で化して服す。山中生活、遠路の步行、穀食を辟けるに良し。服して十日に達すれば身體が輕くなり、目が明かになる。二十日に達すればあらゆる疾病が癒え、顏色が花のやうになる。三十日に達すれば髮の白いものが黑く更り、齒の落ちたものが再び生える。五十日に達すれば奔馬に追ひ付き、百日まで繼續して服すれば天年を延べる。○また

ある法では、天門冬の搗汁を微火で煎じたもの五斗、白蜜一斗、胡麻を炒つて末にしたもの二升を合煎し、丸にし得るまでになつたとき火を止め、大豆の黄末を投じて和し、徑三寸、厚半寸の餅にし、一日三回、一回にその餅一箇づつを服す。百日以上繼續すれば益がある。〇またある法では、天門冬末一升、松脂末一升、（二〇）蠟蜜一升を和して煎じ、梧子大の丸にし、毎日朝、晝、夕の三回に三十丸づつを服す。【天門冬酒】五臟を補し、六腑を調へ、人をして無病ならしめる。天門冬三十斤を心を去つて搗き碎き、水二石で一石に煮取り、糯米一斗、細麴十斤を普通の方法のやうにして炊いたものとで酒に釀し、その酒が熟してから、一日三盃づつ飲む。

【天門冬膏】積聚、風痰を去り、肺を補し、欬嗽失血を療じ、五臟を潤ほし、三蟲伏尸を殺し、瘟疫を除き、身を輕くし、氣を益し、飢ゑざらしめる。天門冬を流水に漬けてふやかして皮、心を去り、搗き爛らして汁を取り、砂鍋に入れて炭の文武火で煮る。甚しく沸ぎらせてはならぬ。一回の量は十斤を用ゐ、それを三斤までに熬つて蜜四兩を入れ、水に滴らしても散らぬまでに熬り、瓶に盛つて七日間土中に埋めて火毒を去り、毎日朝、夕の二回に一匙づつを白湯で調へて服す。もし大便

（二〇）蠟ハ蜂ノ誤。

が動ずるときは酒で服す。(醫方摘要) 【肺痿欬嗽】涎沫(ぜんまつ)を吐き、胸の內が溫溫として咽が燥いても渴せぬには、生天門冬の搗汁一斗、酒一斗、飴一升、紫菀(しをん)四合を銅器で丸にし得るまでに煎じ、一日三回、杏仁ほどの大いさの丸一丸づつを服す。(肘後方) 【陰虛火動】痰があつて、燥劑を用ゐるわけにも行かぬには、天門冬一斤を水に浸し、洗つて心を去り、その肉十二兩を石臼で搗き爛らし、五味子を水で洗つて核を去り、その肉四兩と火に當てずに晒し乾して共に搗き、梧子大の丸にし、一日三回、二十丸づつを茶で服す。(簡便方) 【陰を滋(しげ)くし、血を養ふ】下元を溫補する。三才丸——天門冬を心を去り、生地黃と各二兩を用ゐる。先づこの二味を柳甑箄(りうそうひ)に入れて酒をそそぎ、九回蒸し九回晒し、乾いてから秤(はか)るのである。それに人參一兩の末、蒸した棗肉を搗き和して梧子大の丸にし、一日三回、食前に三十丸づつを溫酒で服す。(潔古活法機要) 【虛勞で身體の痛むもの】天門冬末を一日三回、酒で方寸匕づつを服す。(千金方) 【肺勞の風熱】渴を止め、熱を去る。天門冬を皮と心を去つて煮て食ふ。或は曝乾して末にし、蜜で丸にして服するが尤も佳(よ)し。また洗面用にするもよし。(孟詵食療) 【婦人の骨蒸】煩熱し、寢汗を出し、口が乾き、引飮し、

氣喘するには、天門冬十兩、麥門冬八兩をいづれも心を去つて末にし、生地黄三斤から汁を取つて熬膏したものと和して梧子大の丸にし、毎服五十丸を逍遙散から甘草を去つたものの煎湯で服す。(活法機要) 【風顚の發作】發作すれば吐き、耳が蟬の鳴くやうに鳴り、脇に引いて牽痛するには、天門冬を心と皮を去つて曝し、搗いて末にし、一日三回、酒で方寸匕づつを服す。久しく服するがよし。(外臺祕要) 【小腸の偏墜】天門冬三錢、烏藥五錢を水で煎じて服す。(吳球活人心統) 【顏の黑きを白くする】天門冬を曝乾し、蜜と共に搗いて丸にし、それで日毎に洗面する。(聖濟總錄) 【連年の口瘡】癒えぬには、天門冬、麥門冬をいづれも心を去り、玄參と等分を末にして煉蜜で彈子大の丸にし、一丸づつを噙む。これは僧居寮の所傳の方である。(齊德之外科精義) 【諸種の癰腫】新たに掘つた天門冬三五兩を洗淨して沙盆で細に擂り、好酒で濾してその汁を頓服する。なほ效なきときは再服すれば必ず癒える。これは祖傳經驗の方である。(虞搏醫學正傳)

(一)百部（別錄中品）

和名　びやくぶ
學名　Stemona japonica, Miq.
科名　びやくぶ科（百部科）

【釋名】婆婦草（日華）野天門冬（綱目）　時珍曰く、この草は根の多いもので、百數十の根が一隊の部伍のやうになつてゐるやうに見えるからかく名けたのだ。

【集解】弘景曰く、處處の山野にある。根は數十本が相連つて、天門冬に似て苦く強く、苗が天門冬と異ふだけだ。博物志に『(二)九眞にある一種の草は、百部に似てただ長く太いだけのもので、火の上に懸けて乾かし、それを夜間取つて短く四五寸に切り、含んで汁を嚥めば劇しい嗽に甚だ良效がある。嗽藥と呼んでゐる』とあるが、これは百部そのもののことらしい。土地が肥潤なためにさやうに長大なものが生えるのだ。

藏器曰く、天門冬は、根が十餘本で圓く短く、實し潤ふてゐて味が甘い。百部は、多いものは五六十本あつて長く尖り、內部が虛ろで味が苦い點が異つてゐて、苗も蔓もやはり別だ。今一般に門冬を百部に當ててゐるが、その理由が判らない。

(一)牧野曰フ、我邦ノ本草學者ハ從來其莖ノ直立スル一種即チ S. sessilifolia, Miq. ヲびやくぶト呼ビ、蔓本ナル百部ノ本品ヲつるびやくぶト稱シ、直立莖ノモノヲ正品視シ蔓莖ノモノヲ副品扱ヒニシ輕重ヲ倒ニシテ居タノデ、私ハ之レヲ正ニ反ヘシテ百部ヲびやくぶト云ヒ、直立セル種ヲたちびやくぶト名ケタ。此たちびやくぶハ此本草綱目ニハ載ツテ居ナイ品デアル。右ノ兩種トモ支那ノ原產デ我邦ヘハ往時同國ヨリ渡シタモノデアル。びやくぶニ japonica ノ種名ガアレドモ日本ニハ產セヌ。

(二)九眞ハ蟲部卵生類與鐘ノ註ヲ見ヨ。

（三）江ハ江西、湖ハ湖南、淮ハ安徽、陝ハ陝西、齊ハ山東ノ西部、魯ハ山東ノ南部ヲイフ。

（四）白井曰ク、時珍百部ヲ知ラズ、鄭樵ノ説ヲ非難スルハ却テ非ナリ。

頌曰く、今は（三）江、湖、淮、陝、齊、魯の州郡にいづれもある。春苗が生えて藤蔓になり、葉は大きくして尖つて長く、頗る竹葉に似たもので、表面は青く光る。根は一株に十五六本纏まつて生え、黄白色だ。二三八月に採つて曝乾して用ゐる。



〔百部〕

時珍曰く、（四）百部にはやはり茴香のやうな細葉のものもある。その莖は色青くして肥え、嫩いうちにはやはり煮て食へる。その根は、長いものは一尺に近く、新たなうちはやはり肥え實してゐるが、ただ乾けば虚し痩せて脂潤が無くなるだけだ。生の間に擘開し、心を去つて曝すのである。鄭樵の通志に『葉は薯蕷のやうだ』とあるは謬だ。

根　修治　斅曰く、凡そこれを採取したならば、竹刀で劈いて心、皮、花を去り、數十條にして簷下に懸けて風で乾す。それを酒に一夜浸して漉出し、焙じ乾して剉んで用ゐる。或は、一株に八十三條あるものを地仙苗と稱へる。これを修治

して服餌すれば千歳まで長壽を保つといふことだ。

(五)【氣味】【甘し、微温にして毒なし】權曰く、甘し、毒なし。大明曰く、苦し、毒なし。恭曰く、微寒にして小毒あり。時珍曰く、苦く微し甘し、毒なし。

(六)【主治】【欬嗽上氣には、火で炙き、酒に漬けて飲む】(別錄)【肺熱を治し、肺を潤ほす】(甄權)【傳尸骨蒸勞を治し、疳を治し、蚘蟲、寸白、蟯蟲を殺す。また一切の樹木の蛀蟲は、これを燼けば死ぬ。虱、及び蠅、蠓を殺す】(大明)弘景曰く、湯にして牛を洗へば大いに虱を去る。【火で炙り、酒に浸して空腹に飲めば、疥癬を治し、蟲、蠶の咬毒を去る】(藏器)

【發明】 時珍曰く、百部もやはり天門冬の類のものだ。故にいづれも肺の病を治し、蟲を殺すのだが、ただ百部は、氣が温で寒せず、寒嗽によし。天門冬は、性が寒で熱せず、熱嗽によし。これだけが相異點だ。

【附方】 舊五、新五。【俄かの劇しき欬嗽】張文仲の方では、百部根を酒に漬け、一日(七)三回、一升づつを溫服する。葛洪の方では、百部、生薑を各〻搗いた汁等分を煎じて二合を服す。○續十全方では、百部藤根を搗いた自然汁と蜜等分を沸湯で

(五) 木村(康)曰ク、百部ノ根ニハステモニン、ホドリンヲ含有ス。
鈴木衡平—化誌、明、四四、(三二)六二九。藥誌、明、四四、(三五二)。長井長義、古屋恒次郎—藥誌、明、二八、(一六二)六八六。
古屋恒次郎—藥誌大、一、(三六八)九八七。

(六) 木村(康)曰ク、本植物中ノアルカロイドハ呼吸中樞ノ興奮性ヲ減退セシメ、心臟ニハ著シキ作用ナシ。
猪子言人—東醫、明、二二、(二)一一七〇。

民間ニテハ百部根ノ

煎汁ヲ人體及家畜ノ皮膚寄生蟲驅除ニ用ユ。(邦產藥用植物)
白井曰ク、我邦ノ園藝家ハ從來果樹ノ鐵炮蟲ヲ殺スニ之ヲ利用セリ。
(七)大觀ニ再服ニ作ル。
(八)耳門ハ耳孔ノコトナリ。

煎膏し、噙み嚥む。○普濟方では、卒かの欬の止まぬを治す。百部根を火の上に懸けて炙き乾し、發病の都度人に知られぬやうに含んで汁を嚥む。【小兒の寒嗽】百部丸——百部を炒り、麻黃を節を去り、各七錢半を末にし、杏仁を皮尖を去つて炒り、水で三五沸煮て泥に研り、熟蜜を入れた中にその末を入れ、和して皂子大の丸にし、二三丸づつを溫水で服す。(錢乙小兒方)【三十年の嗽】百部根二十斤を搗き、汁を取つて飴のやうに煎じ、一日三回、方寸匕づつを服す——深師の方では、蜜二斤を加へ、外臺祕要では、飴一斤を加へる——(千金方)【全身の黃腫】掘つたばかりの新鮮な百條根を洗ひ搗いて臍の上に罨し、更に糯米飯半升に水、酒半合を拌ぜて軟かに揉み、それで罨した藥の上を蓋ひ、帛で包んで押へる。一兩日の後、口中が酒臭く感ずるやうになれば、水が尿に從つて排出し、腫は自から消するものだ。百條根は、一名天門冬、一名百奶といひ、形狀は葱頭のやうなもので、苗、葉は柔かで細く、一株の根に百餘本の細根があるものだ。(楊氏經驗方)【誤つて銅錢を呑みたるとき】百部根四兩を酒一升に一夜漬け、一日二回、一升づつを溫服する。(外臺祕要)【蟲類が耳に入りたるとき】百部を炒つて研り、生油で一字を調へて(八)耳門上に置く。

（聖濟錄）【衣類を熏じて虱を去る】百部、秦艽を末にし、竹籠に入れて烟に燒き、それで熏ずれば自ら落ちる。また煮た湯で衣類を洗ふもよし。（經驗方）

［附錄］ **白并** 別錄に曰く、味苦し、毒なし。肺欬上氣に主效があり、五臟に行つてあらゆる病を起らざらしめる。一名王富、一名箭簳といひ、山や岡に生ずる。葉は小竹のやうで、根は黄色で皮が白い。三月、四月に根を採つて曝乾する。時珍曰く、この草は、氣味、主治倶に百部に近い。故に此に附錄する。

(一)何首烏（宗開寶）

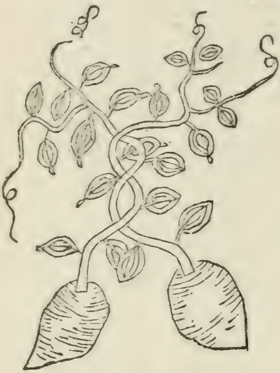
和名　つるどくだみ
學名　Polygonum multiflorum, Thunb.
科名　たて科（蓼科）

［釋名］ **交藤**（本傳） **夜合**（本傳） **地精**（本傳） **陳知白**（開寶） **馬肝石**（綱目） **桃柳藤**（日華） **九眞藤**（綱目） **赤葛**（斗門） **瘡帚**（綱目） **紅內消** 大明曰く、この藥は本草には名の記載がない。昔、何首烏なるものが、藤の夜交るを見て採つて服食し、それで功果があつたといふところから、その發見採取者の名に因んでこの草の名稱としたものだ。

(一)牧野曰フ、支那ノ原産デ、我邦ニハ自生ハ無ケレドモ往時支那カラ渡シテ栽エタモノガ今日諸處ニ野生ノ狀態ヲ呈シテ殘ツテ居リ、夫レガ能ク城ノ場處、或ハ人家近クノ處ニ繁茂シテ居ル。

○○時珍曰く、漢の武帝の時代に馬肝石といふものがあつて、それが能く人の髮を黑からしめる功があつたと傳へられる。それで後世のものがこの草の隱名としてやはり馬肝石と稱したのだ。赤いものは能く腫毒を消するので、外科では『瘡帚』『紅内消』と呼んでゐる。斗門方に『この根を取る場合、若し九數を獲れば、それを服して神仙となる。故に九眞藤と名ける』とある。

(二)**集解** 頌曰く、何首烏はもと(三)順州南河縣で發見されたものだが、今は諸處に產する處があつて、嶺外、江南の諸州のいづれにもあるが、西洛の嵩山、及び河南の(四)栢城縣のものが勝れてゐる。春苗が生え、竹や木、墻壁などに蔓延する。莖は紫色で葉と葉と相對し、薯蕷の葉のやうでもあるが光澤がない。夏、秋の頃、葛勒花のやうな黃白色の花を開いて子を結ぶ。子には稜があり、蕎麥に似てゐるが雜小で纔に粟粒ほどのものだ。



〔何首烏〕

(二)木村(康)曰ク、此物ノ生藥學的研究ハ高木重周ー藥誌、大、一〇、(四七二)四八七ニ出ヅ。

(三)順州ハ唐ニ置キ南河縣ニ治ス。南河縣ハ今ノ廣西省鬱林州陸川縣ノ西ニ在リ。

(四)栢城縣、未詳。

秋、冬期間に根を採るのだが、大なるものは拳ほどあつて、各〻五稜瓣があり、小甜瓜に似てゐる。赤、白の二種あつて、赤いものが雄、白いものが雌である。あるひは、春期に根を採り、秋期に花を採り、九蒸九曝して服するものだといふ。

この藥草は本來の名は交藤といふのだが、何首烏なる者が服したといふ話柄に因み、その人名をこの草の名に命けたのであつて、唐の元和七年に、僧文象なるものが、茅山の老道士に遇つてその話柄を聞き傳へ、またそれを聞いた李翺が何首烏傳と題する一篇の文を著作してある。ここに全文を掲げる。

何首烏は順州南河縣の人である。祖父は名を能嗣、父の名を延秀といつた。能嗣は本の名を田兒といひ、生來生殖機關が弱小でその機能を缺き、年五十八になるまで妻も子もなく、早くから道敎の方術に心を寄せて、師に就いて山中の修道生活に入つてゐた。あるとき山酒の醉心地よく、草枕で橫はつてゐたが、ふと目の前にある二株の藤を見ると、互に三尺餘隔つて生えてゐるのだが、蔓と蔓とが抱き合つて良久してまた離れ、離れてはまた抱き絡まる。田兒は如何にも不思議で堪らなかつたので、翌朝起つときにその根を掘り、持ち歸つて同輩に訊ねて見た。

しかし一人もその草の如何なるものなるかを知るものはなかつた。その後ある老修道士が來たとき、田兒がまたその草を取出して訊ねて見ると、老道士は『其許は世嗣の子といふものが出來ぬといふことだが、この藤はそれに不思議な功力のあるものだ。恐らく神仙の藥であらう。なぜそれを服まぬのか』といふ話であつた。そこで田兒は早速それを末にし、空心に酒で一錢匕づつを服み試みた。ところが七日經つと、何となく性的な衝動を感じ始め、數箇月經つと、生來不能であつたものが頗る强健になつたらしい。それ以來、頗る有望に感じたので、怠なくそれを常服し、更に服量を二錢匕に增加して一箇年を經過した。すると在來の諸疾病は悉く全癒し、白髮は黑くなり、容貌は若くなり、十年間に數人の男子を儲けた。そこで名をも能嗣と改めたといふ次第であつた。又、その子の延秀にも與へて服ませたので、これも百六十歲の長壽を保つた。その延秀が生んだ子が卽ち首烏であつて、首烏もこれを服んで數人の子を儲け、齡百三十歲にして頭髮がまだ黑かつた。首烏と同鄉で親交の李安期といふものも、竊にこの藥を服する方を得て、やはり長命を保つたといふことである。かやうな珍しい事實を聞いたか

ら、茲に書き陳ねて世に傳へるわけである。

何首烏は、味甘し、性溫にして毒なし。茯苓が使となる。五痔、腰膝の病、冷氣心痛、積年の勞瘦、痰癖、風虛、(五)敗劣を治し、筋力を長じ、精髓を益し、氣を壯にし、容色の移ろひを駐め、髮の白きを黑くし、天年を延べ、婦人の惡血、痿黃、產後の諸疾、赤白帶下、毒氣の腹に入つて久痢して止まぬもの等に對する功力は盡く述べ難い。この草は、一には野苗と名け、二には交藤と名け、三には夜合と名け、四には地精と名け、五には何首烏と名ける。もとは(六)處州、江南の諸地方に產したものだ。いづれも禾蒿のやうな苗で、葉は光澤があり、形は桃柳のやうで(七)背は偏だ。みな單生で相對せぬ。雌、雄の別があつて、雄は苗の色が黃白、雌は黃赤だ。その根は雌と雄が三尺ばかりの間隔に生え、夜になると苗蔓が交接する。或は隱化して見えなくなるともいふ。春末、夏中、秋初の三期に晴朗の日を擇んで雌と雄とを共に採り、潤ふてゐる間に布帛で泥を拭ひ去る。(八)生のうちに皮を損じてはならぬ。それを烈日で曝乾し、器に入れ密封して貯藏し、每月更に曝す。服用する時には、皮を去つて末にし、酒で服するが最も良し。疾病

(五)敗劣ハ神經衰弱ノコトカ。

(六)處州ハ土部白瓷器ノ註ヲ見ヨ。

(七)金陵本、亦背偏ニ作ル、然レドモ意通セズ、恐クハ淡ノ誤。

(八)大觀ニ生ヲ土ニ作ル、卽チ泥土ヲ拭ヒ去ルト讀ムベシ。

に罹つたときは、茯苓湯を服して使とする。凡そ服用するには、偶數の日——二、四、六、八の日に服し、服し訖つて衣類を厚く被て汗を出し、導引の法を行ふが尤も良し。猪の肉と血、羊の血、無鱗魚を忌む。この物が藥に觸れると藥力を喪失する。その根は、形が大きく、拳ほどのものが珠を連ねたやうになり、鳥獸や山岳などに似た形狀のものが珍貴なものとされてゐる。根を掘り取り、皮を去つて生で喫へば味が甜い。普通の食糧を食はずにもゐられる。讚に曰く、

神効助道　著在仙書　雌雄相交　夜合晝疏　服之去穀　日居月諸　返老還少
變安病軀　有緣者遇　最斎自如。

明州の刺史李遠はまたこれに附錄して、左の如くいつてゐる。

何首烏は、南河縣、及び(九)嶺南の恩州、韶州、潮州、賀州、廣州、(一〇)潘州、(一一)四會縣に産するものを上級品とし、(一二)邕州、桂州、康州、春州、高州、(一三)勒州、循州、(一四)眞縣の産を次位とする。眞に仙草であつて、五十年を經たものは拳の大いさほどあり、山奴と稱へる。これを一个年服すれば、髮、髭が青黑色になる。一百年を經たものは盌の大いさほどあり、山哥と稱へる。これを一个年服す

(九)嶺南ハ廣東、廣西地方。恩州ハ隰草類火炭母草ノ註、韶州ハ金部新鍋ノ註、潮州ハ介部龜鼈類秦龜ノ註、賀州ハ鱗部蛇類蚺蛇ノ註、廣州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。(一〇)潘州ハ今ノ廣東

れば、顔色が紅くして悦澤になる。一百五十年を經たものは盆の大いさほどあり、山伯と稱へる。これを一个年服すれば、落ちた歯が再び生え更はる。二百年を經たものは(一五)斗栲栳の大いさほどあり、山翁と稱へる。これを一个年服すれば、容貌が童子のやうになり、その歩行力は奔馬に追ひ付ける。三百年を經たものは三斗栲栳の大いさほどあり、山精と稱へる。これは純陽の體であつて、これを久しく服すれば地仙となる。

時珍曰く、凡そ諸處の名山、深山に產するものならば、形體も大きく、質も佳良である。

根　修治　志曰く、春、夏、秋の三期にその根を採り、雌、雄竝に用ゐる。採つて濕のあるうちに布で土を拭ひ去つて曝乾し、使用する時には、苦竹刀で切つて一夜米泔に浸して曝乾し、木の臼、杵で擣いて用ゐる。鐵器を忌む。

愼微曰く、方に用ゐるには、新たに採つたものを、皮を去つて銅刀で薄く切片し、甑に入れて瓷鍋で蒸し、蒸しながら少しづつ熱水を上から淋らし、滿ち溢れぬやうに注意して、やがて(一六)蒸氣が出なくなつた時を見計らつて取り出し、曝乾して用

省茂名縣ノ地ナリ。

(一一)四會縣ハ今ナホソノ名ヲ稱シ、粵海道ニ屬ス。

(一二)邕州ハ金部自然銅ノ註、桂州ハ毒草類鉤吻ノ註、康州ハ石部石炭ノ註、春州ハ石部丹砂ノ註、高州ハ芳草類高良薑ノ註ヲ見ヨ。

(一三)勒州ハ勤州ノ訛、今ノ廣東省富林縣ノ地ナリ。循州ハ介部龜鼈類秦龜ノ註ヲ見ヨ。

(一四)興縣トハ今ノ廣東省ノ平興縣ノ脫訛カ、明ニ興縣アルモ、ソハ今ノ山西省太原府ニ屬ス。此ニ宋ノ蘇頌ノ指ス理ナシ。且ツ地域甚ダ遠キニ過グ。

(一五)斗栲栳、詳ナラズ、一斗桝ノコトカ。

(一六)大觀ニ氣息ヲ氣味ニ作ル。

ゐる。

時珍曰く、最近の修治法は、赤、白各一斤の何首烏を用ゐ、竹刀で粗皮を刮り去り、米泔に一夜浸して切片し、それに對して黑豆三斗を用ゐ、九分して一回に三升三合三勺づつを水で泡過し、その泡けた豆を砂鍋中に先づ一層鋪き、その上に首烏を一層鋪き、同樣幾層かに全部を鋪き盡し、蒸して豆が熟したとき取り出して豆を去り、何首烏を取つて晒し乾し、再び豆と蒸す。かくて九回蒸し九回晒してから用ゐる。

【氣味】(一七)【苦く濇し、微溫にして毒なし】時珍曰く、茯苓が使となる。諸血、無鱗魚、蘿蔔、蒜、葱、鐵器を忌む。地黃と同樣に能く硃砂を伏す。

【主治】(一八)【瘰癧。癰腫を消し、頭部、面部の風瘡を療じ、五痔を治し、心痛を止め、血氣を益し、髭(一九)髮を黑くし、顏色を悅澤にする。久しく服すれば、筋骨を長じ、精髓を益し、天年を延べ、老衰せぬ。また婦人の產後、及び帶下の諸疾を治す】(開寶)【久しく服すれば生殖作用を有效ならしめ、腹臟の一切の舊き疾、冷氣腸風を治す】(大明)【肝風を瀉す】(好古)

【發明】時珍曰く、何首烏は足の厥陰、少陰の藥であつて、白いものは氣分に

(一七)木村(康)曰ク、四川省產根ノ一般分析ノ結果ハ總窒素一・一%澱粉四五・二%粗脂肪三・一%鑛物質四・五%レチチン三・七%オキシメチールアントラヒノン化合物一・七%水ニ可溶性物質總量二六・四%ナリ。

衣笠豐、丘濃街次郎—藥誌、大、二(四八〇)一四四。

(一八)强壯藥トナシ用

ウル一方、一日用量十—二十瓦チ煎劑トナシ用ウレバ緩下ノ效アリト。
(一九)大觀ニ鬢ニ作ル。
(二〇)懷州ハ隰草類牛膝ノ註チ見ヨ。

入り、赤いものは血分に入る。腎は閉藏を主り、肝は疏泄を主るもので、この物は氣が溫であり、味苦く澁るものだから、その苦は腎を補し、溫は肝を補し、能く精氣を收斂する。その結果が、能く血を養つて肝を益し、精を固めて腎を益し、筋骨を健にし、髭髮を黑くすることとなるのであつて、滋補の良藥として寒せず、燥せず、その功力は地黃、天門冬諸藥の上に在る。氣、血が非常によく和を得るものであつて見れば、風虛、癰腫、瘰癧の諸疾に對する效果は言はずして明かだ。

この藥は、服餌した來歷は久しいのであるが、實際には服用者が存外寡かつた。嘉靖の初年、邵應節眞人が七寶美髥丹の方を世宗肅皇帝に上り、帝がそれを服餌して效果を擧げ、引續き多くの皇嗣を儲けられてから、何首烏の方は全國に盛行されるやうになつたのだ。

宋の時、(二〇)懷州の知事李治が、同一官等で同じ州に奉職してゐた一武官に、年齡七十餘でありながら、非常に壯健輕快で、顏色の如きは渥丹のやうな澤があり、またなかなか健啖な男があつたので、不思議に思つてその健康術を問ふて見ると、何首烏丸を服んでゐるといふことだつた。そこでその方の傳授を受けて後、その藥を

修治して置いたが、適〻盛暑の季節に、ある病に罹つて半身だけ汗がなく、それが二箇年ばかり續いたので、竊かに憂慮に堪へなかつたが、その丸を造つて服して見ると、一年餘にして汗が全身から出るやうになつたといふ。この藥は誠に血を活し、風を治するの功があつて、大いに補益するものである。その方は、赤、白何首烏各半斤を用ゐ、米泔に三夜浸して竹刀で皮を刮り去り、切り焙じて石臼で末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、毎に空心にして溫酒で五十丸を服す。また末にして服するもよし。

附方　舊四、新十二。【七寶美髯丹】鬚髮を黑くし、筋骨を壯にし、精氣を固くし、生殖を完全にし、天年を延べる。赤、白何首烏各一斤を用ゐ、米泔水に三四日浸し、瓷のかけらで皮を刮り去り、二升の黑豆を使用して、先づ砂鍋に木甑を載せてその中に豆、及び首烏を幾層にも重ね鋪き、蓋をして蒸す。豆が熟したならば、その時取出して豆を去つて暴乾し、また別な黑豆に換へて再び蒸す。かくして九回繰返して暴乾して末にし、また別に赤、白茯苓各一斤を皮を去つて研末し、水で淘つて筋、膜、及び浮くものを棄て去り、沈むものを取つて塊に捻り堅め、人乳十盌を

よく浸み透らせて晒乾して研末し、牛膝八兩を苗を去つて一日間酒に浸し、何首烏を七回目に蒸す時に共に甑に入れて九回目まで蒸して晒乾し、また更に當歸八兩を酒に浸して晒し、枸杞子八兩を酒に浸して晒し、兎絲子八兩を酒に浸して芽を生じたとき研り爛らし、補骨脂四兩を黑脂麻で香しく炒り——いづれも鐵器を忌む——かくて何首烏以下の諸藥を石臼で末にし、煉蜜で和して彈子大の丸一百五十丸を作り、一日の量を三丸とし、毎日早朝には溫酒で服し、正午には薑湯で服し、就寢時には鹽湯で服し、百五十丸を作つて餘つた部分をばいづれも梧子大の丸にし、毎日空心に一百丸を酒で服す。久しく服すれば極めて顯著な效驗がある。忌むものは前記の通りである。（積善堂方）【服食滋補】和劑局方では、何首烏丸——專ら筋骨を壯にし、精髓を長じ、血氣を補し、久しく服すれば、鬚髮を黑くし、陽道を堅くし、人をして子多からしめ、身體を輕くし、天年を延べ、（二）月計足らず、歲計餘あらしめる。何首烏三斤を銅刀で切片し、乾いたものは米泔水で浸して軟にして切り、牛膝を苗を去つて一斤を切り、淘淨した黑豆一斗を用ゐて木甑に豆を一層鋪いて藥を一層しき、幾重にも鋪き盡して瓦鍋で蒸し、豆が熟したとき取出して豆を去つて藥を曝乾し、

（二）意義解シ難シ、久服シテ益アルコトチ云フモノカ。

また豆を換へてまた蒸すこと三回繰返して末にし、蒸した棗肉で和して梧子大の丸にし、三五十丸づつを空心に溫酒で服す。忌むものは前記の通り。〇鄭巖山中丞方では、ただ赤、白何首烏各半斤を用ゐ、粗皮を去つて陰乾し、石臼で杵いて末にし、毎朝無灰酒で二錢を服す。〇積善堂方では、赤、白何首烏各半を用ゐ、極めて大なるものを八月に採り、竹刀で皮を削り去つて切片し、米泔水で一夜浸して晒し乾し、男の子を持つ壯年の母の乳汁を三回拌ぜて三回晒し、乾いたときを見て木臼で舂いて末にし、密雲棗肉で和して杵き、梧子大の丸にして二十丸づつを服し、十日目毎に十丸づつ增加して百丸までに達して止める。服するには、空心に溫酒、又は鹽湯の隨意のものを用ゐる。ある方では人乳を用ゐない。〇筆峯雜興方では、何首烏を雌雄各半斤を用ゐ、四分に分けてその一分をば當歸汁に浸し、一分をば生地黃汁に浸し、一分をば旱蓮汁に浸し、一分をば人乳に浸し、いづれも三日浸して取出して曝乾し、瓦で焙じて石臼で末にし、蒸した棗肉で和して梧子大の丸にし、四十丸づつを空心に百沸湯で服す。禁忌は前記の通り。【骨軟風疾】腰、膝が疼いて歩行し得ず、全身が瘙痒するには、何首烏の大きくして花紋のあるものを用ゐ、牛膝と各

一斤を好き酒一升に七晝夜浸して曝乾し、木臼で杵いて末にし（二二）棗肉で和して梧子大の丸にし、三五十丸づつを空心に酒で服す。（經驗方）【筋を寛め、損傷を治す】何首烏十斤、生黑豆半斤を共に煎じ熟し、皂莢一斤を燒いて性を存し、牽牛十兩を炒つて頭末を取り、薄荷十兩、木香、牛膝各五兩、川烏頭を炮いて二兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、三十丸づつを茶湯で服す。（永類方）【皮裏の痛むもの】痛む箇所のいづれなるを問はず、何首烏末を薑汁で調へて膏にして塗り、帛で裹んで押へ、鞋底を火で炙つて熨す。（經驗方）【自汗の止まぬもの】何首烏末を唾液で調へて臍中を封ずる。（集簡方）【腸風臟毒】下血して止まぬには、何首烏二兩を末にし、食前に米飲で二錢を服す。（聖惠方）【小兒の龜背】龜尿で（二三）紅內消を調へて背上の骨節に點ける。久しき間には自から平安になる。【破傷出血】何首烏末を傅ければ止まる。神效あるものだ。（筆峯雜興方）【瘰癧結核】或は破れ、或は破れず、下つて胸の前まで達するものをも治癒する。九眞藤を用ゐる。一名赤葛、卽ち何首烏である。その葉は杏のやうなもので、根は雞卵ほどあり、また癧子のやうなものだ。その根を取つて洗淨して日毎に嚼み、または葉を取つて搗いて塗る。數服で止まる。この

（二二）大觀ニ棗肉ヲ蜜ニ作ル。

（二三）紅內消ハ何首烏ノ別名。

（二四）建昌ハ介部蚌蛤類蚌ノ註ヲ見ヨ。

（二五）風瘡ハカザホロシ。

薬は、久しく服すれば天年を延べ、白髪を黒くする神效のあるものだ。（斗門方）【癰疽毒瘡】紅内消を多少に拘らず瓶中に入れて文武火で熬煎し、熟した時を見計らつて好き無灰酒を等分に入れ、再び煎じて數沸して時時に飲む。その滓をば焙じ研つて末にし、酒で煮た糊で梧子大の丸にし、空心に三十丸を溫酒で服す。疾はそれで退くものだ。これは常服するがよいもので、紅内消、即ち何首烏である。（二四）建昌の產が良し。（陳白明外科精要）【大風癘疾】何首烏の大きくして花文のあるもの一斤を、米泔で七日間浸して九回蒸し九回晒し、胡麻四兩を九回蒸し九回晒して末にし、一日二回、酒で二錢づつを服す。（聖惠方）【滿身の疥癬】治し難いものだ。何首烏、艾葉等分を水で煎じた濃湯で洗浴する。甚だ能く痛を解し、肌肉を生ずるものである。（王袞博濟方）

莖葉　【主治】　【（二五）風瘡、疥癬の痒さには、湯に煎じて洗浴する。甚だ有效だ】（時珍）

本草綱目草部第十八卷上　終

本草綱目草部

第十八巻　下

草の七　蔓草類

(一)萆薢（別錄中品）

和名　無し
學名　Smilax sp. et Dioscorea sp.
科名　ゆり科(百合科)及やまのいも科(薯蕷科)

【釋名】　**赤節**（別錄）　**百枝**（吳普）　**竹木**（炮炙論）　**白菝葜**　時珍曰く、萆薢（ひかい）なる名稱の意義は判らない。日華本草に『一般に白菝葜（はくばつくわつ）と呼んでゐる』とあるはその狀貌の形容だ。赤節、百枝といふは狗脊（せき）と同名だ。

【集解】　別錄に曰く、萆薢は(二)眞定の山谷に生ずる。二月、八月根を採つて曝乾する。

弘景曰く、現に處處にある。根は菝葜に似て少し異ふ。その根は太くして角節が甚だ多くなく、色が少し淺い。



〔萆　　薢〕

(一)別錄、當ニ本經ニ作ルベシ。牧野曰フ、萆薢ヲ小野蘭山ハ江戸どころデアルト言ツテ居ル此江戸どころハ今日謂フひめどころ即チDioscorea tenuipes, Franch. et Sav. デアルガ此蘭山ノ説ハ敢テ信ズルニ足ラヌモノデアル。植物名實圖考、巻ノ二十二ニ萆薢トシテ出テ居ル品ハ其二ツトモSmilax 屬ノ一種デ頗ル我九州産ノさつまさんきらい。(S. stenopetala A. Grey.ニ似タモノデアル。今集解ノ諸家ノ文ヲ按ズルニ此中ニ Dioscorea 屬ノモノト

○恭曰く、この草には二種あつて、莖に刺あるものは根が白く實し、刺なきものは虛して軟かだ。軟かなものが勝れてゐる。蔓生で葉が薯蕷に似たものだ。

○頌曰く、今は(三)河峽、汴東、荊蜀の諸郡にいづれもある。蔓になつて生え、苗、葉共に靑い。葉は三叉になつて山薯にも綠豆の葉に似てゐる。花には黃、紅、白色の數種があつて、また花無くして白い子を結ぶものもある。根は黃白色で節が多く、三指ほどの太さのものだ。春、秋の二期に根を採つて曝乾する。現に(四)成德軍に產するものは、根はやはり山薯のやうで體が硬く、苗は蔓を引き、葉は蕎麥に似て、子に三稜がある。季節と月とに拘はらずその根を採つて利刀で切片し、曝乾して用ゐる。

○時珍曰く、萆薢は蔓生の草で、葉は菝葜に似て盌ほどの大いさがあり、根は長く硬く、大なるものは商陸ほどあつて堅い。今一般にみな土茯苓を萆薢としてゐるが、それは誤りだ。莖も葉も根も苗もみな同じくない。吳普の本草に、また萆薢を狗脊としたのも誤だ。狗脊の條に詳說してある。宋史には『(五)懷慶、萆薢を以て貢に充てる』とある。

Smilax 屬ノモノト兩方ガアル事ガ看取セラルルガ然シ其種名ニ至テハ何ンテアルカ能ク判然セス。

(二)眞定ハ隰草類紫菀ノ註ヲ見ヨ。

(三)河峽ノ峽ハ陝ノ誤、山西、陝西地方。汴東ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。荊蜀ハ湖北四川地方。

(四)成德軍、未詳。或ハ成德軍カ。

(五)懷慶ハ隰草類地黃ノ註ヲ見ヨ。

(六) 骨節風詳ナラズ關節リウマチノコトナルカ。
(七) 周痺ハ全身痲痺ノコトカ。

根 **氣味** 【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し。之才曰く、薏苡が使となる。葵根、大黃、柴胡、前胡を畏る。**主治** 【腰、脊の痛强、(六)骨節風、寒濕(七)周痺、惡瘡の瘳えぬもの、熱氣】(本經)【恚怒に因つて中を傷めたもの、陰痿、失溺、老人の五緩、關節の老血】(別錄)【冷風𤸷痺、腰脚の癱緩不遂、手足の驚掣、男子の臀腰痛、久冷で腎間に膀胱の宿水あるもの】(甄權)【頭旋、癇疾。水臟を補し、筋骨を堅くし、精を益し、目を明かにする。中風失音】(大明)【肝虛を補す】(好古)【白濁で莖中の痛むもの、痔瘻、壞瘡を治す】(時珍)

發明 時珍曰く、萆薢は足の陽明、厥陰の經の藥である。厥陰は筋を主つて風に屬し、陽明は肉を主つて濕に屬するものであつて、萆薢の功力は風濕を去るに特長があるから、その結果は、能く緩弱、𤸷痺、遺尿、白濁、惡瘡など、風濕に屬する諸病を治するのである。萆薢、菝葜、土茯苓の三物は形體は同じくないが、しかし疾病に對する主たる治功は甚だ遠くない。これは一類の植物の數種類に分れてゐるものではあるまいかとも思はれる。雷斅炮炙論の序に『囊皺み、漩多きには、夜間竹木を煎じて用ゐる』とある。竹木とは萆薢のことだ。漩が多くして白濁する

は、いづれも濕氣下流の現象であつて、萆薢は能く陽明の濕を除いて下焦を固くするものだから、それで能く濁を去つて淸を分つのである。楊倓の家藏方に、眞元不足、下焦虛寒で小便が頻數となり、白濁して膏の如きを治する藥にある萆薢分淸飮は、正にこの關係を利用したものである。又、楊子建の萬金護命方には『凡そ小便頻數で度數かぞへ難く、排尿時に莖の內部が忍び難く痛むもの、この疾は、必らず當初に(八)大腑が祕熱して通ぜず、水液がただ小腸へ寄つて往く、隨つて大腑はいよいよ乾竭を加へ、甚しければ全身が熱して心躁し、涼水を欲しがるやうになる。その場合は重證だ。この疾病は酒色の過度に原因するもので、それが積つて熱毒、腐敗物、瘀血の類が生じ、虛するに隨つて水が小腸に入るのである。故に排尿時に痛を感ずるのだ。酒を飮まぬ者だとすれば、平常辛熱のもの、葷、膩の物を過食するか、又は淫慾の過度が原因に相違ない。かくこの病の小便頻數にして痛むは淋疾の證で澀つて病むとは異ふものである。萆薢一兩を水に浸し、少時して鹽半兩と共に炒り、鹽を去つて萆薢のみを末にし、二錢づつを水一盞で八分に煎じて滓と共に服し、水道を轉じて大腸に入らしめ、そこで葱湯で頻りに穀道を洗つてその湯氣を通らせ

(九)大腑ハ大腸ノコトナラン。

るがよし。小便の頻數と痛とが自然に減ずるものだ』とある。

附方　舊二、新三。【腰脚の痺軟】行歩にも不安を覺えるものである。萆薢二十四分、杜仲八分を搗き篩ひ、毎早朝溫酒で三錢匕を服す。牛肉を禁ずる。（唐德宗貞元廣利方）【小便頻數】川萆薢一斤を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、七十丸づつを鹽酒で服す。（集玄方）【白濁頻數】漩面が油のやうになり、澄んで膏のやうなものが沈むは眞元の不足、下焦の虛寒である。萆薢分淸飮——萆薢、石菖蒲、益智仁、烏藥等分を用ゐ、毎服四錢を水一盞に鹽一捻を入れて七分に煎じ、一日一回、食前に溫服し、效果があれば止める。【腸風痔漏】如聖散——萆薢、貫衆を土を去つて等分を末にし、空心に三錢づつを溫酒で服す。（孫尙藥傳家祕寶方）【頭痛で發汗するもの】萆薢、旋覆花、虎頭骨を酥で炙いて等分を散にし、發せんとするとき、溫酒で二錢を服し、寢具を暖に臥して汗を取る。立ろに瘥える。（聖濟錄）

（一）菝葜

上は蒲八の切（バツ）下は棄八の切（クヮツ）と發音する。（別錄中品）

和名　さるとりいばら
學名　Smilax China, L.
科名　ゆり科（百合科）

（一）牧野曰フ、今、時珍ノ說ク所ニ從ヒテ之レヲさるとりいばらトスル、植物名實圖考卷ノ二十二ニ出

【釋名】　菝蓏　蓏は葜に同じ。　金剛根（日華）　鐵菱角（綱目）　王瓜草（日華）

時珍曰く、菝蓏は㧞結といふに同じく、㧞結とは短いといふ意味だ。この草は莖、蔓が強く堅くして短小だから菝蓏と呼んだのであつて、(二)江浙地方では菝葜といひ、根をばまた金剛根ともいふ。(三)楚地方では鐵菱角といふ。いづれもその堅くして尖刺あるを形容した名稱だ。鄭樵の通志には『葉が頗る王瓜に近いところから王瓜草と名ける』とある。

【集解】　別錄に曰く、山野に生ずる。二月、八月に根を採つて曝乾する。

弘景曰く、この草に三種あつて、大略、根、苗いづれも相類してゐるが、菝葜は莖が紫で短く、(四)刺が多くして萆薢よりやや小さく、色が深い。世間ではこれで飲を作る。

恭曰く、陶氏のいふ三種とは狗脊、菝葜、萆薢だが、相類すといふは誤だ。萆薢は刺があるもので、葉はほぼ相類するが根は相類せぬ。萆薢は細く長くして色が白く、菝葜は根が塊に結して黄赤色だ。狗脊などとは尚更似寄つたところがない。

頌曰く、今は近(五)道、及び江浙の州郡に多くある。苗、莖は蔓になり、長さ二三

テ居ル菝葜ノ圖ハ我がさるまめニ似タモノデアル、邦人此さるとりばらチ山歸來ト呼ベドモ固ヨリ誤デアル、人ニヨリ之レチ和ノ山歸來ト稱スルコトガアル。

(二)江浙ハ江蘇、浙江地方。

(三)楚ハ石部石炭ノ註チ見ヨ。

(四)大觀ニ刺上ニ細字アリ。

(五)大觀ニ道チ京ニ作ル。

尺で刺があり、葉は冬青、烏藥の葉のやうでやや大きく、秋黄色の花を開いて大いさ櫻桃(あうたう)ほどの黒い子を結ぶ。根は塊になつてゐるもので、地方では金剛根と呼んでゐる。



〔菝　葜〕

時珍曰く、菝葜は山野中に甚だ多く、莖は蔓に似て堅く強く、(六)植生で刺があり、葉は圓く大きく、馬蹄のやうな形狀で光澤があり、柿の葉に似てゐるが冬青には似てゐない。秋黄色の花を開いて紅い子を結ぶ。根は甚だ硬く、刺のやうな硬鬚がある。その葉を煎じて作つた飲は酸く濇(しぶ)いものだ。田舍ではその根、葉を採つて染料に用ゐ、鐵菱角と呼ぶ。呉普本草に、菝葜を狗脊としてあるは誤だ。詳細は狗脊の條に述べてある。

根　氣味　【甘く、(六)酸し、平温にして毒なし】　主治　【腰背の寒痛、風痺。血氣を益し、小便利を止める】(別錄)　【時疾瘟瘴(をんしやう)を治す】(大明)　【肝の經の風虛を補

(六)植生ハ蔓生ニ對スル特生ヲ意味スルモノナラン。

(六)大觀ニ酸字ナシ。

す】(好古)【消渇、血崩、下痢を治す】(時珍)

【發明】 時珍曰く、菝葜は、足の厥陰、小陰の藥であつて、氣は溫、味は酸、性は濇收で萆薢と彷彿たるものだ。孫眞人の元旦に飮んで邪を辟ける屠蘇酒中にやはり用ゐてある。

頌曰く、根を浸した赤い汁を取つて粉を煮て食へば瘴を辟ける。

【附方】 新五。【小便滑數】金剛骨を末にし、就寢時に三錢づつを溫酒で服す。(儒門事親方)【沙石淋疾】重きものも病根を取り去る。菝葜二兩を末にし、米飮で二錢づつを服し、後に(七)地椒の煎湯で腰、腹を浴す。須臾にして通ずる。(聖濟錄)【消渇の止まぬもの】菝葜、卽ち菝葜を㕮咀して半兩、水三盞、烏梅一個を一盞に煎じて溫服する。(普濟方)【赤白下痢】金剛根、(八)蠟茶等分を末にし、白梅肉を搗いて芡子大の丸にし、毎服五七丸――小兒は三丸――を、白痢には甘草湯で服し、赤痢には烏梅湯で服す。(衛生易簡方)【(九)風毒脚弱】田舍の貧家では、痺滿し上氣するものにこれを用ゐるが、なかなか良效を擧げてゐる。菝葜を洗ひ剉んで一斛、水三斛を九斗に煮取り、麴を漬け滓を去つて一斛の漬飮を取り、普通の釀造法のやうにして酒

(七) 地椒ハ水楊梅ノ一名。

(八) 蠟茶ハ餅團トセルモノ磚茶トモ云フ。

(九) 風毒ハ寒膿腫。

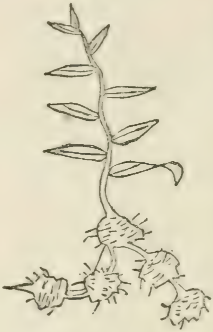
に作り、日毎に任意に飲む。（肘後方）

（一）土茯苓（綱目）

和名　さんきらい
學名　Smilax glabra, Roxb.
科名　ゆり科（百合科）

校正　拾遺の禹餘粮を併せ入る。

釋名　**土萆薢**（綱目）　**刺猪苓**（圖經）　**山猪糞**（綱目）　**草禹餘粮**（拾遺）　**仙遺粮**（綱目）　**冷飯團**（綱目）　**硬飯**（綱目）　**山地栗**（綱目）　時珍曰く、按ずるに、陶弘景は石部の禹餘粮の注に『南方の地の平澤に一種の禹餘粮といふがある。藤生で、葉は菝葜のやう、根は塊になつて節があり、菝葜に似て色が赤く、味が薯蕷のやうなものだ。やはり禹餘粮といつてゐる。昔、禹が山岳を跋渉した際、これを採つて食粮にし、餘りを棄てて行つたのがこれだと言ひ傳へる。それでこの名稱があるのだ』といつてある。



〔土茯苓〕

（一）牧野曰フ、土茯苓ハ眞ノ山歸來デアル、此山歸來ノ名ハ和方書ニ出テ居リ、是レハ山奇粮ノ字音カラ來タモノダト云フコトデアル、此種ハ印度、南支那丼ニ我ガ臺灣ニモ産シ、其葉ハ長橢圓形ヲナシタモノデアル、人ニヨツテハ Heterosmilax japonica, Kunth. 即チからすきばさんきらいヲ土茯苓トスレドモ非デアル。

陶氏のこの說を觀ると、當今の土茯苓のことだ。故に今尙ほこの物に仙遺糧、冷飯團などの名稱があるので、やはり傳說の意味が遺つてゐる。陳藏器本草の草禹餘糧、蘇頌圖經の猪苓の條下に記した刺猪苓はいづれもこの物である。此にはみな倂入した。茯苓、猪苓、山地栗などいふはいづれもその狀貌の形容である。俗にまた過岡龍と呼ぶが、埒もない妄稱だ。

(二)【集解】藏器曰く、草禹餘糧は海岸に近い山谷に生ずる。根は盞ほどあつて幾箇か連り、半ば地表へ現はれ、皮は茯苓のやうで、肉は赤く、味は澀い。その土地ではこれを採取して穀食の代用にし、それで飢ゑない。

頌曰く、(三)施州に產する一種の刺猪苓なるものは、蔓生で、春、夏に根を採り、皮を刮つて焙じ乾す。彼の地ではこれを瘡毒に傅けるが、甚だ效がある。

時珍曰く、土茯苓は楚、蜀の山の竹藪の中に甚だ多い。蔓生のもので、蕁のやうで莖に細點があり、葉は對生せず、形は頗る大竹葉に類して質が厚く滑かに、瑞香葉のやうで長さ五六寸ある。その根の形狀は菝葜のやうで圓く、太さは雞、鴨の卵ほどあつて連り合つて生え、遠きは一尺ほど、近きは數寸の間隔に著いてゐる。肉

(二)木村(康)曰ク、支那品ヲ見ルニ質粗糙ニシテ甚シク硬カラズ、さるとりいばらニハ非ズ。

(三)施州ハ山草類部管草ノ註ヲ見ヨ。

は軟かなもので、生で食へる。赤、白の二種あつて、藥用には白いものが良し。按ずるに、(三)中山經に『鼓鐙の山、草あり、名けて榮草といふ。その葉は柳の如く、その本は雞卵の如し。これを食へば風を已む』とあるは恐らくこの物であらう。昔は一般にこれを用ゐることを知らなかつた。近頃(五)正德年間に楊梅瘡が盛に流行した際、大抵は輕粉の藥を用ゐて治療するが、それでは毒が筋骨に留り、潰爛して身を終ることになる。そこで一般にこの土茯苓を用ゐるやうになり、遂に要藥となつたのだが、多くの醫師はこの藥草の實際に就いて根據ある研究を遂げないので、往往萆薢、及び菝葜をこの物だと思つてゐる。けれどもその根、苗は遙かに異ふものだから、よく事實を調べ確むるがよし。但しその功用はやはり頗る相近いものではある。蓋しこれも萆薢、菝葜の類の植物だ。

根　氣味　【甘く淡し、平にして毒なし】時珍曰く、茶茗を忌む。主治【これを食へば營養が穀物の食に相當し、飢ゑない。中を調へ、洩を止め、步行を健にし、睡らなくなる】(藏器)【脾、胃を健にし、筋骨を强くし、風濕を去り、關節を利し、泄瀉を止め、拘攣、骨痛、惡瘡、癰腫を治し、汞粉、銀、朱の毒を解す】(時珍)

(四)鼓鐙之山、畢氏、郝氏共ニ今ノ山西省垣曲縣ノ鼓鍾山ナリトイフ。又、郝氏ハ榮草ヲ以テ本經ノ䕡茹、陶註ニ葉似大戟トアリ、又、蜀本註ニ根如蘿蔔トアルニ合ス。コノ物ナラントイフ。

(五)正德ハ明ノ武宗ノ年號元年ハ西曆一五〇六年ニ當ル。

【發明】　機曰く、近世淫蕩の風が盛になつてから楊梅毒瘡を病むものが多く、藥としては輕粉を用ゐるが、癒えてもまた發り、久しきに亙れば肢體が拘攣し、變じて癰、漏となり、そのまま幾年かを經過すれば竟には癈疾となる。これにはただ土草薢三兩を剉み、或は皂莢、牽牛各一錢を加へ、水六盌で三盌に煎じて三回に分服すれば、數劑に過ぎずして多くは痊える。蓋しこの疾病は、當初に毒氣が陽明を干して發るもので、それに輕粉の燥烈な藥を加へれば、久くして水が衰へ、肝に相火を挾んで脾土を凌ぐこととなる。土はもと濕に屬して肌肉を主るものだから、ために濕熱が肌腠に鬱蓄する。故に發して癰疽となり、甚きは拘攣するのであつて、內經に所謂『濕氣は人の皮、肉、筋、骨を害ふ』とはこれである。土草薢は甘く淡くして平であり、能く脾の濕を去るものだ。濕が去れば營、衞が順調に行り、筋、脈が柔くなり、肌、肉が實する。それで拘攣、癰漏が癒えるのである。この病の初期にはこの藥を服しても效が顯はれないが、それは火が盛で濕がまだ鬱せぬからである。この藥は濕を去るが特長であつて、熱を去る力はないものだ。病が久しきに亙れば熱が衰へ、氣が消耗して濕鬱が多くなる。それで效が顯れるのである。

○○
時珍曰く、楊梅瘡は古方には記載されてない。病そのものもなかつたのだ。近世に至つてこの病は嶺表に發生し、それが四方に傳染波及したものである。蓋し嶺表は土地が卑く炎く、山川、林野から起る毒邪の氣があつて人間に熏蒸するところである。それに多く辛熱の物を飲食し、男女の生活が淫猥であつて、濕熱の邪が自然に深く蓄積され、それが發して毒瘡となり、遂に各人の間に互に傳染し、南から北に侵入して、やがて全世界まで波及することになつたのだ。

かやうな次第で、この病はいづれも淫邪が久しきに及んで發するもので、その種類には數種あるが、治療の方法に至つては一途であつて、その病證は多くは厥陰、陽明の二經に屬し、それに他の經を兼ねるものである。病は先づ第一著に邪の在るところに發出するのであつて、少陰、太陰の經を兼ねた場合には咽喉に發し、太陽、少陽の經を兼ねた場合には頭、耳に發するの類だ。それは相火は厥陰に寄り、肌肉は陽明に屬する關係に因るのである。醫師がこれに對して輕粉、銀朱の劫劑を用ゐると五七日にして癒える。蓋し水銀の性は走つて守らない。その水銀を鹽、礬で升發させて作つたものが輕粉だ。銀朱の性は燥烈で善く痰涎を逐ふものだ。涎なるも

のは脾の液であつて、この物が胃に入れば氣が陽明に歸するものだ。故に、涎がそれ等の金石藥で劫(おびやか)されると、火に隨つて上升し、喉頰、齒縫から出るのであつて、それ故に瘡は乾き痿(な)えて癒えるのである。しかし、もし劑を過すか、または用法を誤つたならば、毒氣は經絡、筋骨の間に竄入して體外に出し去ることが不可能になり、且つ痰涎が既に去つて血液が消耗涸渇し、筋はその養ひとなるものを失ひ、營、衞が十分、且つ完全でなくなつてゐるのだから、隨つて變調を起して筋骨の攣痛となり、發しては癰毒、疳漏となり、久しくして蟲を生じ、癬となり、手足は皴(しわ)み裂け、遂に癈疾となるのである。土茯苓なるものは、氣は平、味は甘くして淡(あは)く、陽明の本藥であつて、能く脾胃を健にし、風濕を去るものだ。脾、胃が健全なれば營、衞が十分、且つ完全になり、風濕が去れば筋骨が利する。故に右の諸證が多くは癒るわけである。かかる事實はまことに古人の未だ言はざる妙機を得たものだ。

現に醫家は搜風解毒湯といふもので楊梅瘡を治療する。これは少しも輕粉を犯し用ゐずして、病の深きも一箇月餘、淺きは半箇月で癒える。輕粉の藥を服して筋骨が攣痛し、癱瘓(なんくわん)し、歩行不能のものも、これを服すればやはり效がある。その方は、

土茯苓一兩、薏苡仁、金銀花、防風、木瓜、木通、白鮮皮各五分、皂莢子四分を用ゐ、氣虛には人參七分を加へ、血虛には當歸七分を加へ、水二大盌で煎じて飲にし、一日に三服する。ただ茶を飲むこと、及び牛、羊、雞、鵞、魚の肉、燒酒、法麪、過度の房事を忌む。蓋し祕方である。

附方　新六。

【梅楊毒瘡】鄧筆峯雜興方では、冷飯團四兩、皂角子七個を水で煎じて茶に代へて飲む。病の淺きは二七日、深きは四七日で效が顯はれる。○ある方では、冷飯團一兩、五加皮、皂角子、苦參各三錢、金銀花一錢を好酒で煎じ、日每に一服する。【小兒の楊梅瘡】瘡が口中に生じ、延いて全身に及ぶものには、土萆薢末を乳汁で調へて服す。一箇月餘で自ら癒える。（外科發揮）【骨攣癰漏】薛己の外科發揮に『輕粉を服して脾、胃、氣、血を傷め、ために筋骨が疼痛し、久しくして潰爛して癰となり、連年、累月、終身の廢疾となりたるには、土萆薢一兩を用ゐ、熱あるには芩、連を加へ、氣虛には四君子湯を加へ、血虛には四物湯を加へ、水で煎じて茶に代へて服す。一箇月餘にして平安になる』とある。○朱氏集驗方では、過山龍四兩——卽ち硬飯——に四物湯一兩、皂角子七箇、川椒四十九粒、燈心根七

本を加へ、水で煎じて日毎に飲む。【瘰癧の潰爛】冷飯團を切片し、或は末にし、水で煎じて服す。或は粥の中に入れて食ふ。多く食ふほど妙である。江西産の色の白いものが良し。鐵器、發物を忌む。（陸氏積德堂方）

⑴白斂（本經下品）

和名　びやくれん、かがみぐさ
學名　Ampelopsis japonica, Makino.
科名　ぶだう科（葡萄科）

【釋名】白草（本經）　白根（別錄）　⑵兎核（別錄）　貓兒卵（綱目）　崑崙（別錄）

宗奭曰く、白斂は服餌の方に用ゐることは稀だ。ただ斂瘡の方に多く用ゐるところから白斂と名けたのだ。時珍曰く、兎核、貓兒卵はいづれも形容である。崑崙とはその皮の黑いことをいつたのだ。

【集解】別錄に曰く、白斂は⑶衡山の山谷に生ずる。二月、八月に根を採つて曝乾する。

弘景曰く、近道の處處にある。藤になつて生え、根は白芷のやうだ。片に裂き竹で穿つて日光で乾す。

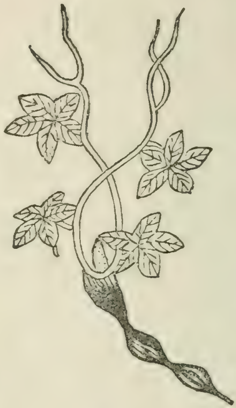
⑴牧野曰フ、本種ハ支那ノ原産藤本デ我邦ニ偶ニ栽培セラレテ居ルモノハ往時同國ヨリ渡シタモノデアル、通常 Vitis serjanaefolia, Maxim. 或ハ Ampelopsis serjanaefolia, Bunge. ノ學名ニテ呼バレテ居ルガ然シ其最舊ノ學名ハ Paullinia japonica, Thunb. デアツタ。

⑵大觀ニ菟ニ作ル。

⑶衡山ハ郡、縣名。今ノ湖南省衡陽縣ニ治ス。

(四)江淮ハ水部雨水ノ註、荊襄ハ山草類貫衆ノ註、懐州ハ隰草類牛膝ノ註、孟州ハ石部石膏ノ註、商州ハ石部丹砂ノ註、齊州ハ石部滑石ノ註ヲ見ヨ。

恭曰く、根は天門冬(てんもんどう)に似て一株に十本ばかりの根があり、皮は赤黒色で肉が白く、芍薬の根のやうなもので、白芷のやうではない。蔓生で枝の端に五枚の葉がある。所在にあるものだ。



〔白　斂〕

頌曰く、今は(四)江淮、及び荊、襄、懐、孟、商、齊の諸州いづれもある。二月苗が生え、多くは林の中にあつて蔓になり、莖は赤く、葉は小桑のやうだ。五月花を開き、七月實を結ぶ。根は雞、鴨の卵ほどで長く、三五箇一株に著き、皮は黒く肉が白い。赤斂なる一種があつて、花、實、功用みな同一だが、それはただ表裏共に赤いだけの差がある。

根

氣味 【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し、微寒なり。權曰く、毒あり。之才曰く、代赭(たいしや)が使となる。烏頭と反す。

主治 【癰腫、疽瘡に結氣を散じ、痛を止め、熱を除く。目中の赤きもの、小兒の驚癇、溫瘧、婦人の陰中腫痛、

赤白帶下】(本經)【火毒を殺す】(別錄)【發背、瘰癧、顏面の疱瘡、腸風、痔漏、血痢、刀箭瘡、撲損に肌を生じ、痛を止める】(大明)【狠毒の毒を解す】(時珍)

【發明】弘景曰く、生で根を搗いて癰腫に傅けるが有效だ。頌曰く、現に醫家では、風、及び金瘡を治する面藥の方に多く用ゐ、往往白及と配合して用ゐる。

【附方】舊三、新十。【發背の初期】水で白斂末を調へて塗る。(肘後方)【丁瘡の初期】方は上に同じ。(聖惠方)【一切の癰腫】權曰く、白斂、赤小豆、菵草を末にし、雞子白で調へて塗る。○陶隱居方では、白斂二分、藜蘆一分を末にし、酒で和して一日三回貼る。【顏面、鼻の酒皶】白斂、白石脂、杏仁各半兩を末にし、雞子淸で調へて塗り、朝洗ふ。(御藥院方)【顏面の粉刺】白斂二分、杏仁半分、雞屎白一分を末にして蜜で和し、水を醮けて顏を拭く。(肘後方)【耳の凍瘡】白斂、黃蘗等分を末にし、生油で調へて搽る。(談埜翁方)【湯火傷の灼爛】白斂末を傅ける。(外臺方)【物の咽につかへたるとき】白斂、白芷等分を末にし、水で二錢を服す。(聖惠方)【鐵、刺等の咽につかへたるとき】及び、竹木など硬い物が咽につかへたるには、白斂、半夏を泡けて等分を末にし、一日二回、酒で半錢づつ服す。(聖惠方)【刺の肉中にあるもの】

方は上に同じ。【胎の下りぬもの】白斂、生半夏等分を末にし、水を滴して梧子大の丸にし、五十丸づつを楡皮湯で服す。(保命集)【風痺の筋急】腫痛し、屈轉して一定の處なく易るものには、白斂二分、熟附子一分を末にし、一日二回、酒で半刀圭づつを服す。身中を熱が行るやうに感ずるは反應である。十日にしてその效力が現はれる。猪肉、冷水を忌む。(千金方)【諸猪の斂らぬもの】白斂、赤斂、黄蘗各三錢を炒つて研り、輕粉一錢を用ゐ、葱白漿水で洗淨してから傅ける。(瑞竹堂方)

(一)女萎（李當之本草）

和名 無し
學名 未詳
科名 未詳



〔女 萎〕

【集解】恭曰く、女萎は葉が白斂に似て蔓生し、花は白く、子は細かく、荆襄地方では女萎と呼び、また蔓楚ともいふ。苗を用ゐるもので、根は用ゐない。萎蕤とは全然別だ。現に太常で、白頭翁と謬り呼ん

(一) 牧野曰フ、私ハ女萎ヲぼたんづる(Clematis apiifolia, DC.)ニ充ツル何ノ根據モ見出シ得ナイ故ニ蘭山等ノ説ニ左袒スルコトハ出來ナイ。

でゐるはこの物だ。

時珍曰く、諸家は女萎に對する解説を誤つて葳蕤に對して加へてゐる。その正誤は葳蕤の條に掲げてある。

【修治】斅曰く、凡そこれを採取したならば、陰乾して頭と白蕊とを去り、槐(くわい)砧(ちん)の上で剉み、豆淋酒を拌ぜて午前十時から午後二時まで蒸し、取り出して(二)曬乾(さいかん)する。

【氣味】【辛し、溫にして毒なし】【主治】【下痢を止め、食物を消化する】(當之)【風寒でぞくぞくするもの、霍亂、洩痢、腸鳴、(三)遊氣の上下常なきもの、驚癇寒熱、あらゆる病の出汗】(唐本)

【附方】新三。【久痢脱肛】女萎を切つて一升を焼き、患部を熏ずる。(楊氏産乳方)

【(四)蠶下(あくげ)の止まぬもの】女萎、雲實各一兩、川頭二兩、桂心五錢を末にし、蜜で梧子大の丸にし、一日三回、水で五丸づつを服す。(肘後方)【身體の癧瘍】(五)斑駁するには、女萎膏——(六)魯國の女萎、白芷各一分、附子(ぶし)一箇、雞舌香、木香各二分を末にし、臘猪脂七合で和して煎じ、麝香一錢を入れ、瘍を浮石で磨り破つて日毎にそ

(二)曬・一本ニ晒ニ作ル。

(三)遊氣ハ疼痛ノ移動ヲ云フモノカ。

(四)蠶下ハ女子ノ帶下ノコトナラン。

(五)斑駁ハナマヅ。

(六)魯國、石部石膏ノ魯ノ蒙山ノ註參照。

の藥を塗擦する。（古今錄驗）

(一)赭魁（本經下品）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

釋名　時珍曰く、根が魁のやうで、赭のやうな汁があるところから名けたものである。魁とは酒器の名稱だ。

集解　別錄に曰く、山谷中に生ずる。二月に採る。

弘景曰く、形狀は小芋のやうで、肉は白く皮が黃だ。近道にもある。

恭曰く、赭魁は、大なるは斗ほどあり、小なるは升ほどのものだ。草や木の上に蔓生し、葉は杜衡に似てゐる。陶氏のいふ物は土卵のことだ。土卵は藥にはならぬ。(二)梁漢地方で蒸して食ひ、黃獨と呼ぶもので、これは赭魁ではない。



〔赭魁〕

(一) 牧野曰フ、本品ハ蓋シ或ハ Dioscorea 即チところ屬ノ一種デモアラウ乎、其根塊ノ赭赤汁ヲ以テ皮ヲ染メルトアルヲ見レバ彼ノくうろう即チ D. rhipogonoides, Oliv. ニ類セシモノカモ知レヌ、此くうろうニハ薯莨又ハ薯榔ノ名ガアル。

(二) 梁漢ハ石部特生礜石梁州ノ註參照。

保昇曰く、苗は蔓になつて生え延び、葉は蘿藦に似たもので、根は菝葜のやうで皮が紫黒色、肉は黄赤色だ。大なるものは圓い塊で升ほどあり、小なるものは拳ほどのものだ。所在にある。

時珍曰く、赭魁は(三)閩地方では青色染料の甌中に入れて置く。色を染上り易くするためだといふ。沈括の筆談に『本草の所謂赭魁なるものは、いづれの說も明確でない。現に南方の地に極めて多く、皮膚は黒く、肌は赤く、何首烏に似たもので、切り破れば中に檳榔のやうに赤理があり、赭のやうな赤い汁がある。彼の地ではこれで靴を作る皮を染める。閩地方ではこれを餘粮と謂ふ。本草石部の禹餘粮の條に陶氏が引いて說明したのはこの物だ』とある。謹で按ずるに、沈氏のこの赭魁の說明は甚だ明確だが、しかし、これを禹餘粮だと考へただけは誤だ。禹餘粮といふは今の土茯苓のことで、食ひ得るから粮なる名稱を得たのである。赭魁は食へるものでない。粮といふ名のあるべきわけがあらうか。土卵、卽ち土芋である。菜部に揭げてある。

根　【氣味】【甘し、平にして毒なし】恭曰く、小毒あり。【主治】【心腹の

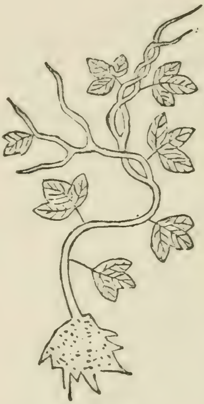
(三)閩ハ今ノ福建省地方。

積聚。三蟲を除く】（本經）

（一）鵝抱（宋圖經）

和名無し
學名未詳
科名未詳

集解 ○頌曰く、（二）宜州の山林（三）下に生ずる。石に附いて生え、蔓になり、大豆に似たもので、根の形は萊菔に似て、大なるは三升入の器ほど、小なるは拳ほどのものだ。二月、八月に根を採り、切片し陰乾して用ゐる。



〔鵞抱〕——宜州——

氣味 【苦し、寒にして毒なし】

主治 【風熱上壅、咽喉腫痛。また蠻夷の用ゐる毒箭の毒を解するには、末に搗いて酒で服するが有效である。また（四）風熱の結毒を治するもので、酒に摩つて塗れば立ろに癒える】（蘇頌）

（一）牧野曰フ、本書井ニ植物名實圖考卷ノ二十ニ粗圖ガアルガ、何所屬ノ植物デアルカ捕捉スルコトガ出來ヌ。
（二）宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
（三）下、大觀ニ中ニ作ル。
（四）風毒ハ膿腫ノ汎稱。

(一)伏雞子根（拾遺）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳



〔伏雞子〕
——天台——

【釋名】 **承露仙**

【集解】 藏器曰く、(二)四明、天台山に生ずる。蔓になつて延び、葉は圓く薄くして錢に似てゐる。根は鳥の形に似たものが良し。

【氣味】 【苦し、寒にして毒なし】

【主治】 【あらゆる藥の毒を解す。諸熱の煩悶、急黃、天行黃疸、瘧瘴、中惡、寒熱頭痛、疽瘡、馬黃牛(三)瘡には水で磨つて服す。(四)新なるものが就中佳し。また癰腫に傅ければ陳家白藥と同功力である】（藏器）

(五)【附錄】 **仰盆**（拾遺）　藏器曰く、味辛し、溫にして小毒あり。水に磨つて少量を服すれば、蠱の飛尸喉痺を治す。また磨つて皮膚の惡腫にも傅ける。(六)東陽の

(一)牧野曰フ、本書并ニ植物名實圖考卷ノ二十ニ圖アレドモ粗笨デ用ヲ辨ゼヌ。

(二)四明ハ隰草類艾ノ註、天台ハ芳草類芎藭ノ註ヲ見ヨ。

(三)瘡ヲ大觀ニ疫病ニ作ル。

(四)大觀ニ新ヲ生ニ作ル。

(五)牧野曰フ、附錄ノ仰盆并ニ人肝藤共ニ不明ノ植物デアル。

(六)東陽ハ隰草類石龍芻ノ註ヲ見ヨ。

山谷に生ずる。苗は承露仙に似て根が圓く、盃を仰いだやうな形狀で、大いさは雞卵ほどのものだ。

人肝藤（拾遺）　藏器曰く、主として諸藥毒、遊風の手脚軟痺を解す。いづれも生で研つて服し、塗る。嶺南の山石の間に生ずる。蔓を引いて生え、葉に三椏（さんあ）があり、花は紫色だ。伏雞子と同じく承露仙と呼ばれてゐるが、伏雞子は葉の圓いものだ。

時珍曰く、根三兩を摩つた汁、或は煎じた濃汁を服すれば、いづれも蠱毒を解す。

（一）千金藤（宋開寶）

學名無し
學名未詳
科名未詳

【校正】　木部より此に移し入る。

【集解】　藏器曰く、千金藤といふものに數種あつて、南方と北方とでは名と實物の狀態とが同じくない。しかし、概して主たる治療上の效果は相似たものだ。いづれも藤に近い植物である。北地に生ずるものは、根の太さ指ほど、色は漆に似てゐる。南地に生ずるものは黃赤色で細辛のやうだ。（二）舒州、廬州地方にある一種の

（一）牧野曰フ、千金藤ハ未詳ノ植物デアル。

（二）舒州ハ山草類萎蕤ノ註、廬州ハ芳草類白芷ノ註ヲ見ヨ。

藤は木蓼に似てゐる。又、烏虎藤といふ樹に絡まつて生え、冬も青いものがある。これも千金藤と呼ばれてゐる。江西の林中に生えるある草は、葉の生えた頭端に鶴膝に似た瘿子があり、葉は柳のやうなもので、これも千金藤といつてゐる。又、荷葉に似て大いさがただ錢ほどの一種もあり、やはり千金藤といひ、また古藤とも呼んでゐる。痢、及び小兒の大腹に主效のあるものだ。千金といふは貴重なものの意味を表した名稱だ。いづれも一種類のものが形狀を異にして名を同うするといふわけはあるまい。然らば正確に名稱と實物とを指摘し得るかといふにそれも困難だ。又、嶺南にある陳思岌といふ植物にも千金藤なる名稱がある。

氣味　（缺）　**主治**　【一切の血毒、諸氣、霍亂、中惡、天行虛勞、瘧瘴、痰嗽不利、癰腫大毒、藥石の發動、癲癇、悉く主效がある】（藏器）

附錄　（三）陳思岌（拾遺）　藏器曰く、嶺南の山野に出る。蔓生で小豆のやうだ。根、及び葉は辛く香しい。一名石黃香、一名千金藤といふ。根は味辛く、平にして毒なし。諸藥の毒、熱毒、丹毒、癰腫、天行壯熱、喉痺、蠱毒を解す。いづれも磨つて汁を服す。また磨つて瘡腫に塗る。

（三）牧野曰フ、陳思岌ハ不明ノ植物デアル。

珣曰く、味苦し、平なり。酒に浸して服すれば、風を治し、補益し、身體を輕くする。

(一)九仙子（綱目）

和名無し
學名未詳
科名未詳

釋名 仙女嬌

集解 時珍曰く、九仙子は(二)均州の(三)太和山に出る。一本に根が九箇連つて生え、大なるは雞子ほど、小なるは半夏ほどで、色は白い。二月苗が生え、蔓は高さ六七尺になり、莖は細くして光り、葉は烏桕の葉のやうで短く、扁にして圓くない。葉の椏毎に子枝が生えて、或は一本、或は二本ふらふらと垂れてゐる。六七月に碎小な青黃色の花を開



〔九仙子〕
—武當—

(一)牧野曰フ、本書並ニ植物名實圖考卷ノ二十ニ圖アレドモ粗デ判明セズ。
(二)均州ハ石部長石ノ註ヲ見ヨ。
(三)太和山ハ隰草類千年艾ノ註ヲ見ヨ。

き、隨つて實を結ぶ。子は碎小で簇つて著き、穀精草の子のやうな狀態だ。九月に根を採る。

【氣味】【苦し、涼にして毒なし】【主治】【咽痛、喉痺。血を散ずる。新汲水、或は醋で磨り、その汁を含んで嚥むが甚だ良し】（時珍）

(一)山豆根（宋開寶）

和名　未詳
學名　Euchresta sp.?
科名　まめ科？（荳科？）

【釋名】解毒（綱目）黃結（綱目）中藥　頌曰く、蔓が大豆のやうだからかく名けたのだ。

【集解】頌曰く、山豆根は(二)劍南、及び宜州、(三)果州の山谷に生じ、今は廣西にもあり、(四)忠州、萬州のものを佳しとする。苗蔓は豆のやうで葉が青く、冬を經て凋まない。八月根を採る。廣南のものは、小槐のやうで高さ一尺餘あり、石鼠がその根を食ふ。それで嶺南地方ではその鼠を捕り、腸、胃を取つて曝乾し、それを毒を解し熱を攻むるに用ゐて效を取る。

(一)牧野曰フ、從來此山豆根ヲまめ科(荳科)ノみやまとべら卽チ Euchresta japonica, Benth. ニ充テ來ツタガ果シテ其レガ中ツテ居ルカ充分之レヲ裁判スベキ證ガナイ、タダ集解ノ文ガ彷彿ト之レニ似タ處ガアルト云フニ過ギナイ。若シ是レガ此屬ノモノデアルト斷言ガ出來得ベケレバ、或ハ本品ハみやまとべらニ似タ別ノ植物デアラウト思フ。何トナレバ

我みやまとべらハ支那ニハ産セヌカラデアル。植物名實圖考、卷ノ十ニ出テ居ル山豆根ハ我がたちばな（Ardisia屬）ニ酷似セルモノデ、是レハ本書ノ山豆根トハ同名ノ別ノモノト思フ。

木村（康）曰ク、現在ノ支那藥劑品ヲ見ルニみやまとべらニハ非ズ Ardisia ニモ非ズ、而シテきまめトモ異レルガ如シ、則チ未ダ原植物ヲ審ニセズ。

上海自然科學研究所彙報、一卷二號（一九二九）五一。

（二）劍南ハ芳草類牡丹ノ註、宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。

（三）果州ハ今ノ四川省嘉陵道南充縣ノ地ナリ。

氣味 【甘し、寒にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、沈括の筆談に『山豆根は、味が極めて苦い。本草に味甘しとあるは大なる誤だ』とある。

主治 【諸藥毒を解し、痛を止め、瘡腫毒、發熱、欬嗽を消し、人、及び馬の急黃を治し、小蟲を殺す】（開寶）【これを含んで汁を嚥めば、咽喉腫毒を解するに極めて妙である】（蘇頌）【研末して湯で五分を服すれば、腹脹喘滿を治す。酒で三錢を服すれば、婦人の血氣腹脹を治し、又、寸白諸蟲を下す。丸にして服すれば、下痢を止める。磨つて汁を服すれば、卒かに發つた熱厥の心腹痛、五種の痔痛を止める。研つた汁を諸熱腫、禿瘡、蛇、狗、蜘蛛の傷に塗る】（時珍）



〔山豆根〕

附方 舊十、新三。【蠱の中毒を解す】密かに山豆根を取り、水に研り和して少量を服す。なほ定らぬときは再服する。已に聲の出なくなつたものも癒える。【五種の急黃】山豆根末二錢を水で服す。もし蠱の氣を帶びるものならば酒で服す。【霍

亂吐利】山豆根末三錢を橘皮湯で服す。【赤白下痢】山豆根末を蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを空腹に白湯で服す。三服で自ら止まる。(以上いづれも備急方)【水蠱の腹大】腹中に聲があり、皮膚の色の黑さには、山豆根末二錢を酒で服す。(聖惠方)【俄の腹痛】山豆根を水で研つて半盞を服す。口に入れば直ちに鎭まる。【頭風の熱痛】山豆根末を油で調へて兩太陽に塗る。【頭の白屑】山豆根末を油に浸して日每に塗る。【牙齦の腫痛】山豆根一片を痛む齒の邊に含む。(以上いづれも備急方)【喉中の發癰】山豆根を醋で磨つて噙む。涎を追つて癒える。病勢重くして言語不能なるには、頻りに雞の羽で掃いて喉中に入れる。涎を引き出せば言語を發し得るやうになる。(永類方)【(七)麩豆諸瘡】煩熱甚しきには、水で研つた山豆根汁少量を服す。(經驗方)【疥癬蟲瘡】山豆根末を臘猪脂で調へて塗る。(備急方)【(六)喉風の急證】牙關緊閉し、固形物も流動物も通らぬには、山豆根、白藥等分を水で煎じ、噙んで嚥下す。二三口で癒える。(楊淸叟外科)

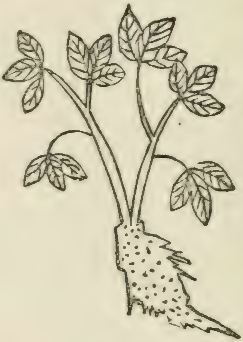
(一)忠州ハ山草類釵子股ノ註、萬州ハ石部水銀ノ註ヲ見ヨ。
(七)麩瘡ハ麻疹、豆瘡ハハウサウ。
(六)喉風ハ咽喉加多兒。

(一)黄藥子（宋開寶）

和名　いたどり
學名　Polygonum Reynoutria, Makino.
科名　たで科（蓼科）

校正　木部より此に移し入る。

釋名　**木藥子**（綱目）　**大苦**（綱目）　**赤藥**（圖經）　**紅藥子**　時珍曰く、按ずるに、沈括の筆談に『本草の甘草の注に、郭璞注爾雅の「蘦、大苦とあるは甘草のことだ。蔓生で、葉は(二)薄荷に似て色が青黄、莖は赤くて節があり、節に枝が對ひ合つて生える」とあるを引用してあるが、これは黄藥のことで、その味が極めて苦いから大苦といふ。甘草ではない』といつてある。



〔黄藥子〕

集解　頌曰く、黄藥はもと嶺南に産したものだ。今は(三)夔、陝の州郡、及び明、越、秦、隴の山中にもあつて、(四)忠州、(五)萬州のものを勝れたものとしてあ

(一) 牧野曰フ、本書濕草類ノ虎杖ト同物ト考フ、畢竟、名ヲ異ニシテ重出スルモノト思フ、又之レヲうまのあしがた科（毛莨科）ノClematis（せんにんさう屬）ノ一種デ類ルせんにんさう（C. paniculata, Thunb.）ニ似タ藤本ニ充ツル人モアル。木村（康一）曰ク、黄藥子ハいたどり、せんにんさう一種、にがかしう等ニ充ツル説アリ、現在ノ上海品ニヨリテ見ルニ最モにがかしうノ根塊ニ近シ。

(二) 郭注爾雅「蘦。大苦」ノ注ニハ『葉似荷』トアリ。

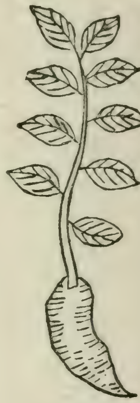
(三) 夔陝ハ四川省ノ東部、及ビ陝西省南部ノ地ヲ指ス。明州

る。藤生で、高さ三四尺になり、根、及び莖は小桑に似たものだ。十月に根を採る。秦州に出るものは紅藥子といひ、(六)施州のものは赤藥といふ。葉は蕎麥に似て枝梗が赤く、七月白い花を開く。その根は濕ふた間は紅赤で、曝乾すると黃になる。本經に藥實根なるものの記載があつて『蜀郡の山谷に生ずる』とあり、蘇恭は『卽ち藥子であつて、核仁を用ゐるものだ』といつた。これは黃藥の實をいふらしく思はれるが、ただ『葉が杏に似て花が紅白、子の肉の味が酸い』とある點が同じくない。

時珍曰く、黃藥子は、今は處處の民家で栽培する。莖は高さ二三尺、柔で節があり、藤に似てゐるが實は藤ではない。葉は大いさ拳ほど、長さ三寸ばかり、一向桑には似てゐない。根は長いものは一尺ばかり、太いものは圍り二三寸、外が褐、內が黃色で、また黃赤色のものもあり、肉の色は頗る羊蹄根に似たものだ。一般にはみなその根を擣いて染藍の甕の中へ入れて置く、それは染色を變へ易くするためだといふ。唐の蘇恭は『藥實根、卽ち藥子だ』といひ、宋の蘇頌は、そこで『黃藥の實だ』ときめてゐるが、しかし今の黃藥は、冬枯れて春生え、碎けた花を開いて實は

ハ石部鹵石類食鹽ノ注、越州ハ石部蛇黃ノ註、秦隴ハ山草類胡黃連ノ註ヲ見ヨ。(四)忠州ハ今ノ四川省ノ忠縣ノ地ナリ。(五)萬州ハ今ノ四川省萬縣ノ地ナリ。(六)施州ハ山草類都管草ノ註ヲ見ヨ。

無い。故に蘇恭の所謂藥子とは、やはり必らず黃藥を指したものといふわけには行くまい。して見れば、蘇頌の斷定もやはり信憑するわけに行かない。



〔赤藥子〕

根 氣味 【苦し、平にして毒なし】 大明曰く、涼なり。馬の心、肺の熱疾を治す。 主治 【諸惡腫、瘡瘻、喉痺、蛇、犬の咬毒には、水に研つて服し、または含み、または塗る】（開寶） 【血を涼し、火を降し、癭を消し、毒を解す】（時珍）

發明 頌曰く、孫思邈の千金月令方に『忽に生じた癭疾で一二年になるを療ずるものとして、萬州の黃藥子半斤を用ゐる――緊つて重いものを上とする。輕く虛したものは萬州以外の地に產したもので、力が緩慢だから倍加して用ゐねばならぬ――無灰酒一斗を取つて藥を其中に投じ、瓶の口を固濟して糠火で(七)一復時の間燒き、酒の冷えるを待つて瓶の口を開け、時時に一盃づつ飲んで酒氣の絕えぬやうにする。三五日經過してから、常に鏡に顏を映し見て癭が消えたならば飲むことを停止する。そのまま飲み續けると頸を細くするものだ』とある。劉禹錫の傳信方には

(七) 一復時ハ一伏時ニ同ジ、卽チ二十四時間。

その效果を記載して『(八)邕州の從事張岩から傳聞したものだ。岩は他人が治療して有效だつた有様を目撃し、また自らも實驗して神效を擧げたといふ。その方はいづれも同樣であるが、ただ少し異ふ點は、この方では燒酒を用ゐることと、香が外に出て瓶の外側に津が出る程度で火を止め、一夜を過ごさぬこと、火を猛烈にしてはならぬといふことだけだ』とある。

附方　舊三、新三。【項下の癭氣】黃藥子一斤を洗ひ剉んで酒一斗に浸し、毎日朝、夕一盞づつを常服する。一切の毒物を忌み、怒ることを愼む。そこで癭の大いさを毎日絲で計つて見ると、その效果の漸次に現はれる有樣がよく判る。(斗門方)【吐血の止まぬもの】藥子一兩を水で煎じて服す。(聖惠方)【咯血、吐血】百一選方では、蒲黃、黃藥子等分を末にし、掌に載せて舐める。○(九)王袞の博濟方では、黃藥子、漢防已各一兩を末にし、一日二回、食後に一錢づつを小麥湯で調へて服す。【鼻衄の止まぬもの】黃藥子を末にし、二錢づつを煎淡膠湯で服し、良久して新水で麪一匙頭を調へて服す。兵部手集方では、ただ新汲水で磨つた汁一盌を頓服する。(簡要濟衆方)【產後の血運】惡物が心に冲して四肢が氷冷し、脣が青く、腹が脹り、昏迷

(八)邕州ハ金部自然銅ノ註ヲ見ヨ。

(九)大觀ニハ經驗方ニ作ル。

(一)牧野曰フ、姑ク植物名實圖考ニ從フテ之レヲ下ノ植物ニ充テ置ク。

(二)大觀ニハ山西ニ作ル。川西ハ四川省西部ノ稱ナリ。

(三)戎州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(四)開州ハ隰草類車前草ノ註ヲ見ヨ。

するには、紅藥子一兩、頭紅花一錢、水二盞、婦人の油釵二本を共に一盞に煎じて服す。大小便共に利して血は自から下る。(禹講師經驗方) 【天泡水瘡】黃藥子末を搽る。(集簡方)

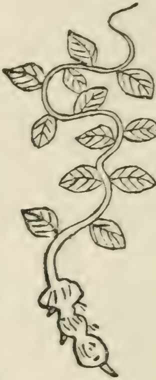
(一)解毒子(唐本草)

和名 はすのはかづら
學名 Stephania japonica, Miers.
科名 つづらふぢ科(防已科)

釋名 **地不容**(唐本) **苦藥子**(圖經)

集解 恭曰く、地不容は(二)川西の山谷に生ずる。採收に一定の時期はない。地方人は解毒子と呼んでゐる。

頌曰く、(三)戎州に產する。蔓生で葉は青く、杏葉に似て甚だ厚く硬く、冬を凌いで凋まず、花も實もない。



〔解毒子〕
—苦藥—

根は黃白色、外皮は微し粗く褐色で、纍纍として連り、藥實のやうで圓く大きい。採收に一定の時期はない。又、(四)開州、(三)興元府に出る苦藥子は、大體黃藥と似寄

つたもので、春根を採つて曝乾する。また馬の藥にも入れて用ゐる。

時珍曰く、四川志に『苦藥子は(六)忠州に產し、性は寒にして一切の毒を解す。川蜀の諸處いづれにもある。卽ち解毒子なり』とある。或は『(七)邛州の苦藥子、卽ち黃藥子であつて、方言の呼び方が異ふのだ』といふが、さうあるべき道理もある。

根　氣味　【苦し、大寒にして毒なし】　主治　【蠱毒を解し、煩熱を止め、瘴癘を辟け、喉閉、及び痰毒を利す】(唐本)【五臟の邪氣を治し、肺を淸し、熱を壓す】(蘇頌)【痰を消し、火を降し、咽喉を利し、目赤を退ける】(時珍)

附方　新二。【咽喉腫痛】水も漿も通らぬには、苦藥、山豆根、甘草、消石各一分、射干、柑皮、升麻各半兩を末にし、蜜で丸にして噙む。(聖惠方)【眉稜骨痛】熱毒が眼を攻め、頭痛、眉痛し、壯熱して止まぬには、解毒子、木香、川大黃各三分を末にし、漿で調へて膏にし、攤して貼り、乾けば易へる。(普濟方)

附錄　(八)**奴會子**(海藥)　珣曰く、味辛し、平にして毒なし。(九)小兒の無辜、冷疳、虛渴、脫肛、(一〇)骨立瘦、脾、胃を損じて食物の消化せぬものに主效がある。劉五娘方では、これを煎じて服す。西國の諸蠻夷地方に生ずる。大小共に苦藥子のや

(五)興元府ハ石部特生礜石梁州ノ註參照。

(六)忠州ハ黃藥子ノ註ヲ見ヨ。

(七)邛州ハ番木鼈ノ註ヲ見ヨ。

(八)牧野曰フ、奴會子并ニ藥實根ハ共ニ未詳ノ植物デアル。

(九)無辜疳ハ腦ノ項邊核アリ轉動軟ニシテ疼マズ中ニ蟲アリ米粉ノ如キモノヲ云フ。

(一〇)骨立瘦ハ骨ト皮ト殘リ肉ガ減ジルコト。

うなものだ。

藥實根（本經）經に曰く、味辛し、溫にして毒なし。邪氣の諸痺、疼酸を治し、絶傷を續ぎ、骨髓を補す。一名連木といふ。

別錄に曰く、(一一)蜀郡の山谷に生ずる。採收に一定の時期はない。

恭曰く、これは藥子のことで、當今盛んに用ゐてゐるものだ。外國名は那疏といふ。(一二)通州、(一三)渝州に出る。その子は味辛く、平にして毒なし。破血に主效があり、痢を止め、腫を消し、蠱、疰、蛇の毒を除く。樹になつて生え、葉は杏花に似て紅白色だ。子の肉は味が酸い。ただその仁のみを用ゐるものだが、本經の記載には誤つて根の字とした。

時珍曰く、この藥子は黃藥、苦藥子に似てはゐるが、やや同じからぬところがある。右の二藥子は子を結ばないが、この物は樹の子であつて、葛洪の肘後方に『婆羅門では那疎樹子と呼び、中國人は藥子と呼ぶ。皮を去つて中の仁を取り、細研して服すれば諸病を治す』とある。

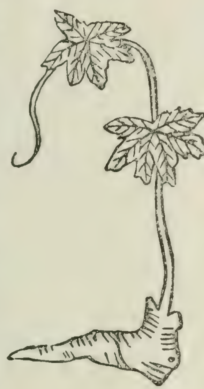
(一一)蜀郡ハ今ノ四川省ノ地ナリ。
(一二)通州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。
(一三)渝州ハ芳草類牡丹ノ註ヲ見ヨ。

(一)白藥子（唐本草）

和名　しなからすうり(?)
學名　Trichosanthes Kirilowii, Maxim, (?)
科名　うり科（葫蘆科）

【集解】恭曰く、白藥子は(二)原州に産する。三月苗が生え、葉は苦苣に似たもので、四月赤い莖が抽き出て長く壺盧の蔓のやうになり、六月白色の花を開き、八月子を結ぶ。子はまた(三)瓜蔞とも名ける。九月葉が落ち枝が折れてから根を採り、洗ひ切つて日光で乾す。根の皮は黄色だ。これを白藥子と名ける。

頌曰く、今は(四)夔州、施州、台州、江西、嶺南にもある。江西に出るものは、葉が烏桕に似てゐる。子は綠豆のやうで(五)六月になると變じて赤色になる。馬の熱を治する方にこれを用ゐる。



〔白藥子〕

根【氣味】【辛し、溫にして毒なし】權曰く、苦し、冷なり。【主治】【金瘡に肌を生ず】(唐本)【腫毒、喉(六)痺を消し、痰を消し、嗽を止め、渴、竝に吐血を

(一)牧野曰フ、本品ハ上ニ在ル栝樓(T. Kirilowii, Maxim. しなからすうり)ト同物デハナイカト思フ。木村(康)曰ク、今日行ハルルモノハ形質上ヨリ Trichosanthes 屬ノモノノ根ナルベキ事ヲ認メ得ベキモ、其種名ニ至リテハ後日ノ攷究ヲ期ス。「上海自然科學研究所彙報一卷二號(一九二九)六七」

(二)原州ハ山草類列當ノ註ヲ見ヨ。

(三)大觀ニ苽ニ作ル。

(四)夔州ハ今ノ四川省夔州一帶ノ地。施州ハ山草類都管草ノ註、台州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

(五)大觀ニ八ニ作ル。

(六)大觀ニ閉ニ作ル。

（七）疞痛ハハゲシクイタムコト。

（八）黔ハ山草類黃連ノ施黔ノ註参照。

治す】（大明）【喉中の熱塞不通、咽中の常に痛腫するものを治す】（甄權）【野葛、生金、巴豆の藥毒を解す。刀斧の傷、折傷に、乾して末にして傅れば能く血痛を止める】（馬志）【血を散じ、火を降し、痰を消し、毒を解す】（時珍）

附方 舊四、新八。【天行熱病】白藥を末にし、漿水一盞で二錢を冷調して服す。仰臥して少頃すると、心悶し、或は腹鳴し、（七）疞痛して吐利するものである。吐利が數回でなほ止まぬときは冷粥一盌を食へば止む。（聖濟錄）【心痛に熱を解す】白藥根、野猪尾二味を粗皮を洗ひ去つて焙乾し、等分を搗き篩ひ、酒で一錢を服す。甚だ效がある。（八）黔地方でこれを用ゐてゐる。（蘇頌圖經）【風熱上壅】咽喉の利せぬには、白藥三兩、黑牽牛半兩を共に香しく炒り、牽牛の一半を去つて末にし、防風末三兩とよく和し、一錢づつ茶で服す。（聖惠方）【喉中の熱塞】腫痛するもの、血を散じ、痰を消す。白藥、朴消等分を末にし、一日四五回吹き入る（直指方）【咽喉腫痛】白藥末一兩、龍腦一分を蜜で和して芡子大の丸にし、一丸づつを含んで嚥む。（聖惠方）【吐血の止まぬもの】白藥を燒いて性を存し、糯米飲で三錢を服す。（聖惠方）【衄血の止まぬもの】紅棗、白藥を各、燒いて性を存し、等分を末にして糯米飲で服

し、或は湯に煎じて鼻を洗ひ、數度に少量づつ藥を滲み入らす。（經驗良方）【胎熱不安】鐵罩散——白藥子一兩、白芷半兩を末にし、毎服二錢を紫蘇湯で服す。心の煩熱するには砂糖少量を入れる。（聖惠方）【一切の疳眼】赤爛して瞖を生ずるには、白藥子一兩、甘草半兩を末にし、猪肝一頭分を批開してその末五錢を摻り、煮熟して食ふ。（直指方）【小兒の疳瀉】吐利するものだ。方は上に同じ。【諸骨の哽咽】白藥を米醋で煎じて少しづつ嚥む。上にあるときは吐出し、下にあるときは下出する。（普濟方）【癰腫の散ぜぬもの】生白藥根を搗いて貼り、乾けば易へる。生のもののないときは、研末して水で和して貼る。（圖經）

附錄

（九）**陳家白藥**（拾遺）　藏器曰く、味苦し、寒にして毒なし。主として諸藥の毒を解すには、水で研つて服す。腹に入れば毒と相攻めて必ず吐出する。なほ盡きぬときは更に服す。また心胸の煩熱、天行瘟瘴を去る。（一〇）蒼梧の陳家から出たといふので陳家なる名稱があるのだ。（一一）明山にもある。蔓、及び根はいづれも土瓜に似て、葉は錢ほどのものだ。根は防已に似て緊つて小さいものが良し。産地ではやはり採つて食ふ。婆羅門白藥、及び赤藥と功用がいづれも相似たものだ。

（九）牧野曰ク、陳家白藥、甘家白藥、會州白藥、衡洞根井ニ突厥白ハ共ニ未詳ノ植物デアル。
（一〇）蒼梧ハ鱗部蛇類蚺蛇ノ註ヲ見ヨ。
（一一）明山、未詳。

時珍曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄に『陳家白藥は善く毒を解すもので、諸藥いづれもこれに及ぶものなく、命を救はれるものが甚だ多い。(一二)封州、康州では栽培するものもあり、(一三)廣府では毎年その土地の貢納物としてある』とある。按ずるに、この藥は劉恂の當時は貢納物になつてゐたものらしいが、今は一向にない。或は有るにしても、古代と現代とで名稱が變つてゐるのかも知れぬ。

甘家白藥(拾遺)　藏器曰く、味苦し、大寒にして小毒あり。諸種の藥毒を解し、水で研つて服すれば吐出する。なほ盡きぬときは更に服して吐く。陳家白藥の功用と似たものだ。この二物は性が冷であつて、霍亂下利の患者には相反する。(一四)龔州以南に産し、日蔭の地に生え、葉は車前に似て根は半夏のやうだ。その汁を飲むと蜜のやうなところから世人がかかる名を呼んだのだ。嶺南地方には毒物も多いが、同時にまた解毒の物も多い。これは天然の配劑ともいふべきであらう。

會州白藥(拾遺)　藏器曰く、金瘡に主效があり、膚を生じ、血を止める。碎いて末にして傅ける。(一五)會州に産し、葉は白斂のやうだ。

衝洞根(拾遺)　藏器曰く、味苦し、平にして毒なし。熱毒、蛇、犬、蟲、癰瘡等

(一二)封州ハ今ノ廣東省封川縣ノ地ナリ。康州ハ石部石炭ノ註ヲ見ヨ。

(一三)廣府ハ廣州府ヲイフカ。廣州府卽チ今ノ廣東。

(一四)龔州ハ今ノ廣西省平南縣ノ地ナリ。

(一五)會州ハ古ノ西羌ノ地ナリ。唐ニ州ヲ置ク、今ノ甘肅省靖遠、會寧二縣ヲ統ベ

の毒に主效がある。嶺南の(二六)恩州に產し、根を取つて陰乾する。功用は陳家白藥と同樣だが、苗、蔓は似てゐない。

○珣曰く、苗、蔓は土瓜やうで、根もやはり似てゐる。味辛し、溫である。(二七)一切の毒氣、及び蛇傷に主效がある。根を取つて水に磨つて服す。諸毒を悉くみな吐出するものだ。

突厥白(宋開寶)　○藏器曰く、味苦し、金瘡に主效があり、(二八)血を生じ、血を止め、腰を補し、筋を續ぐ。(二九)突厥國に產するもので、色白くして灰のやうだ。そこで石灰と諸藥とで合成したものだともいふ。

○志曰く、今用ゐるものは(三〇)潞州から出る。その根は黃白色だ。形狀は茯苓に似てゐるが、虛して軟かい。苗は高さ三四尺、春、夏に薄荷のやうな葉があり、花は牽牛のやうで、紫で上に白稜がある。二月、八月に根を採つて曝乾する。

(一)威靈仙(宋開寶)

和名　せんにんさう一種
學名　Clematis sp.
科名　うまのあしがた科(毛茛科)

會寧ニ治ス。
(二六)恩州ハ陽草類火炭母草ノ註ヲ見ヨ。
(二七)一切ノ二字大觀ニ據ル。
(二八)大觀ニ血ヲ肉ニ作ル。
(二九)突厥國トハ蒙古地方ヲ指ス。
(三〇)潞州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。
(一)牧野曰フ、學者ガ威靈仙ニ充ツル支那ノ植物ニ Clematis (せんにんさう屬)ノ

數種ガアツテ何レガ其正品デアルカ能ク分明セヌ。卽チ其充テアル品種ハC. Armandi, Franch., C. chinensis, Retz., C. recta, L. デアル。然シ此C. rectaノTypeハ支那ニハナイヤウダカラ是レハ其變種カ或ハ別種ノモノカト思フ。蘭山ハ威靈仙ヲ草木ト藤木ニ別チ藤木ノモノヲてつせんトシテ居ルガ其レハ秘傳花鏡ニ鐵線蓮（草木ガ鐵線ニ似タルユエニ名ク）ヲ威靈仙トシテアルノミナラズ、本書ニモ鐵脚威靈仙（根ガ乾ケバ深黑ニナルユエ名ヅ、トミテアルノニ旁ゲタナウ攝メタモノト思フガ此レモ一說デアル。其草木ノモノヲごまのはぐ

釋名 時珍曰く、威とはその性の猛なることを意味し、靈仙とはその功力の神速なる意味をいつたものだ。

集解 志曰く、(二)商州(三)上洛の山、及び(四)華山、幷に平澤に出る。水聲を聞かぬものがよし。多くの草に先つて生えるもので、莖は四角で數枚の草が相對して生える。冬の月の丙、丁、戊、己の日に根を採つて用ゐる。

恭曰く、九月末から十二月までの間に根を採つて陰乾する。その他の月に採つたものでは用ゐるに堪へない。

頌曰く、今は陝西(せんせい)、及び河東、河北、(五)汴東(べんとう)、江湖の州郡にも(六)有ることがある。初生には(七)蔓になり、莖は釵股(さこ)のやうなもので、七月の內に六出の花が咲く。色は淺紫色、或は碧白色だ。穗になつて蔚臺子(ふだいし)に似て居り、また菊花頭に似たものもある。實の色は靑く、根は稠密で鬚が多く、穀類のやうに每年朽敗するものだ、九月に根を採る。



〔威靈仙〕

さ科(玄參科)ノくがいさう(Veronica virginica, L. var. sibirica, Miq.)トシテ居ルガ是レハ贅事デ蘇頌ノ說ク植物ハ蘭山ノ言フ如ク此くがいさうデハナクテ、全ク何カ別ノ植物デアルカラ蘭山ノ說ハ成立セヌ。
木村(康)曰ク、威靈仙ニ鐵脚威靈仙ト草本威靈仙ノ二種アリ、前者ニてつせん類ヲ後者ニくがいさうノ類ヲ充ツ。市場ニ出ヅルモノハてつせんノ形質ヲ有ス。(藤田直市博士)
(二)商州、即チ今ノ陝西省商縣ニ治ス。
(三)上洛ハ漢ノ縣名元ニ廢ス。今ノ陝西省商縣ノ地ナリ。
(四)華山ハ水部玉井水太華山ノ註參照。

時珍曰く、その根は每年傍へ延び增えて年深きほど茂り、一株の根に數百條の鬚が叢つて、長さは二尺ほどになり、初は黃黑色だが、乾けば深黑色になる。俗に鐵脚威靈仙などと呼ぶはそのためだ。別に數種あつて、根鬚は一樣だが、ただ色の黃なるものや白いものはいづれも用ゐられない。

根　【氣味】【苦し、溫にして毒なし】元素曰く、味甘し、純陽であつて太陽の經に入る。杲曰く、升に可く降に可く、陰中の陽である。時珍曰く、味は微し辛く鹹い、苦くはない。茗麪湯を忌む。

【主治】【諸風。五臟を宣通し、腹內の冷滯、心膈の痰水、久積癥瘕、痃癖氣塊、膀胱の宿膿、惡水、腰膝の冷疼を去り、折傷を療ず。久しく服すれば、溫疫、瘧を患はぬ】(開寶)【新、舊の積滯を排し、胸中の痰唾を消し、皮膚、大腸の風邪を散ず】(李杲)

【發明】頌曰く、唐の貞元年間、嵩陽子周君巢が作つた威靈仙傳にかくいつてある。

威靈仙は、諸種の風を去り、十二經脈を通じ、朝服すれば暮に效があり、五臟

（五）汴東ハ石部丹砂ノ誹ヲ見ヨ。（六）原文ニ皆トアルヲ大觀ニ據リ或ニ改ム。（七）作蔓ノ二字大觀ニ比黎草最先ノ四字ニ作ル。

を疏宣する。冷膿、宿水から變じた病で、微利して瀉せぬ人は、これを服すれば四肢が輕健になり、手足が微煖になり、いづれも清涼を得る。曾て商州のある人が手足不遂を病み、行歩不能となること數十年に及び、良醫が術を殫しても少しも治效が現はれなかつたので、方法全く盡き、家人はその病人を路傍に坐らせて、往來の人人の中から救療者を求めるといふ方法を取つた。すると、たまたま一人の新羅の僧が通りかかり『この病はただ一種の藥品で治癒するが、ただこの土地にその藥があるかどうかが問題だ』といひ、家人の懇望に因つて、自ら山に入つて搜した結果、やがてその藥を採つて來た。その藥といふは乃ち威靈仙だつた。その後、道士鄧思齊がその話を聞き傳へ、更に余にそれを物語つたので、此にその事實を傳へて置く。

この藥は、男子、婦人の中風で言語不能のもの、手足不遂のもの、口眼喎斜して言語のもつれるもの、筋骨節の風、遶臍風、胎風、頭風、暗風、心風、風狂、大風、皮膚の風痒、白癜風、熱毒風瘡、頭旋、目眩、手足の頑痺、腰膝の疼痛で

久しく立ち得ぬもの、嘗て損墜のために臂腰の痛むもの、腎臟の風壅、傷寒瘴氣、惛塞壯熱、頭痛流涕、黃疸、黑疸、頭面の浮腫、腹內宿滯、心頭痰水、膀胱宿膿、口中涎水、冷熱氣壅、肚腹の脹滿、好んで茶滓を喫して心痛するもの、注氣、膈氣、冷氣が脾、肺を攻め侵すもの、諸氣痰熱で欬嗽し、氣急し、坐臥不安なるもの、氣衝で眼の赤きもの、耳を攻めて化膿したるもの、陰汗、盜汗を治す。大小腸の祕結はこれを服すれば立ろに通ずる。氣痢、痔疾、瘰癧、疥癬、婦人の月經不潮が長時日に亙つて經を動じたために氣血が衝心するもの、產後の祕(八)塞、孩兒の無辜、いづれもみな治癒する。その方法は、根を採つて一箇月餘陰乾して擣いて末にし、一錢匕を溫酒で調へて空腹にして服す。その患者の體質が藥力を殺す場合には六錢まで增加してよし。二囘通じがあつたならばその量を減じ、病が癒えたならば服用を停止する。この藥は性甚だ善なるもので、諸藥と少しも牴觸せぬが、ただ茶、及び麪湯を忌む。甘草、巵子をそれに代へて飲むがよし。又、この物一味を洗ひ焙じて末にし、好き酒に和して微溫にし、それを竹筒に入れ、緊塞して九囘蒸し九囘曝し、末が乾くときは酒を添へる。それを酒して白蜜で和

(八)大觀ニ塞ヲ澀ニ作ル。

して梧子大の丸にし、二十丸乃至三十丸づつを溫酒で服す。
右の詳細は崔元亮の海上集驗方に記述されてある。

○恭曰く、腰腎、脚膝の積聚、腸內諸冷病の積年瘥えぬにはこれを服す。立ろに奏效せぬものなし。

○宗奭曰く、性の速かなものだ。多く服すれば五臟の眞氣を疏通し過ぎる。

○震亨曰く、威靈仙は木に屬し、痛風を治するの要藥であつて、病の上、下にあるには、いづれもこれを服すれば尤も效がある。その性好く走り、また横にも擴がり行る。故に崔元亮は『諸種の風を去り、十二經脈に通じ、朝服すれば暮に效がある』といつたのだ。凡そこの物は、採つたときに流水のやうな聲の聞えるもので、それに因つてもその性の好く走るものだといふことが判る。用ゐるには、水聲の聞えぬものを擇び用ゐるがよし。

○時珍曰く、威靈仙は、氣は溫、味は微し辛く鹹し。辛は氣を泄し、鹹は水を泄するものだ。故に風濕痰飮の病で氣の壯なるには、これを服すれば捷かな效果がある。しかし、その性は大體に於て、疏し利するものだから、久しく服すれば眞氣を損ず

る恐がある。氣弱のものはやはり服せぬがよし。

附方　舊四、新十六。【脚氣の腹に入りたるもの】脹悶し、喘急するには、威靈仙末二錢づつを酒で服し、痛が一分減ずれば藥も一分を減ずる。(簡便方)【腰脚の諸痛】千金方では、威靈仙末一錢づつを、逐日空心に溫酒で服し、微し利するを程度とする。○經驗方では、威靈仙一斤を洗ひ乾し、好き酒に七日間浸して末にし、麪糊で梧子大の丸にし、先に藥を浸した酒で二十丸づつを服す。【腎臟の風壅】腰膝沈重なるには、威靈仙末を蜜で梧子大の丸にし、溫酒で八十丸を服す。翌朝靑膿膠のやうな惡物を微利する。それは卽ち風毒の積滯したものだ。もしなほ利せぬときは一百丸を(九)再服して取り下し、その後に一个月間粥を食つて補す。同時に溫補藥を常服する。孫兆の方では、これを放杖丸と名けてある。(集驗)【筋骨の毒痛】楊梅瘡患者が輕粉の毒藥を服したために毒痛を發し、年久しく癒えぬには、威靈仙三斤、水、酒十瓶を封じて一炷香の間煮沸し、火毒を出してから、癒えるまで逐日これを飲む。(集簡方)【破傷風病】威靈仙半兩、獨頭蒜一個、香油一錢を共に搗き爛らし、熱酒を注いで服す。汗が出て癒える。(衞生易簡方)【手足の麻痺】時に疼痛を發す

(九) 大觀ニ上夜ノ字アリ。

るもの、或は打撲傷損で忍び難く痛むもの、或は癱瘓する等の病證には、威靈仙を炒つて五兩、生川烏頭、五靈脂各四兩を末にし、醋糊で梧子大の丸にし、七丸づつを鹽湯で服す。茶を忌む。（普濟方）【男子、婦人の氣痛】急性、慢性に拘らず、威靈仙五兩、生韭根二錢半、烏藥五分、好き酒一盞、雞子一箇を灰火で一夜煨いて五更に雞子の殼が軟になるを程度とし、渣を去つて溫服し、乾いた物を食つて壓し、氣塊のある方を下にして睡る。渣は再煎して翌日服す。氣塊に刺痛を覺ゆるが效驗である。（摘玄方）【噎塞膈氣】威靈仙一把を醋、蜜各半盌で五分に煎じて服す。宿痰を吐出して癒える。（唐瑤經驗方）【停痰宿飮】喘欬し、嘔逆し、食物が全く入らぬには、威靈仙を焙じ、半夏を薑汁に浸して焙じて末にし、皂角水で熬膏して綠豆大の丸にし、七丸乃至十丸づつを薑湯で服す。一日三回。一个月繼續すれば效驗がある。茶、麪を忌む。【腹中の痞積】威靈仙、楮桃兒各一兩を末にし、三錢づつを溫酒で服す。これを化鐵丸と名ける。（普濟）【大腸の冷積】威靈仙末を蜜で梧子大の丸にし、十丸から二十丸まで、一更時に生薑湯で服す。（經驗良方）【腸風瀉血】久しきには、威靈仙、雞冠花各二兩を米醋二升で煮乾し、炒つて末にし、鷄子白で和して小

餅にし、炙き乾して再び研り、一日二回、陳米飲で二錢づつを服す。(聖濟)【痔瘡腫痛】威靈仙三兩、水一斗を湯に煎じ、先づ熏じて後洗ふ。冷えれば再び溫める。(外科精義)【諸骨の哽咽】威靈仙一兩二錢、砂仁一兩、沙糖一盞、水二鍾を一鍾に煎じて溫服する。○乾坤生意では、威靈仙を米醋に二日間浸し、晒し研つて末にし、醋糊で梧子大の丸にし、二三丸づつを茶半分湯半分で服す。吐かんとするときは、銅靑末半匙に油一二點を入れて茶で服し、探り吐かす。○聖濟錄では、雞、鵞の骨哽を治す。赤莖の威靈仙五錢を井華水で煎じて服す。それで骨が綿のやうに軟くなるを呑み下す。甚だ效がある。【飛絲の纏陰】切れんとするほど腫痛するには、威靈仙の搗汁に浸して洗ふ。この病の一患者に實驗して有效であつた。(李樓怪證方)【痘瘡の黑陷】鐵脚威靈仙を炒り研つて一錢、腦子一分を溫水で調へて服す。瘡痂を取下して效がある。百祥丸と同じ意味だ。(儒門事親)

(一)茜草　(本經上品)

和名　あかね
學名　Rubia cordifolia, L.
科名　あかね科(茜草科)

(一)牧野曰フ、普通山野ニ多キ宿根蔓草デ其根ヲ染料トナスモノデアルガ、今日

デハ極メテ稀レニ之レヲ使用スルニ過ギナイ、故ニ世間デ其染布ヲ見受ケル事ハ殆ンドナイ。木村(康)曰ク、從來茜草ニハあかねヲ充テ來レルモ、現在ノ上海市場品ニヨリ見ルニ全ク異レルモノニシテ、たで科ニ屬スル植物ノ如キ形態ヲ有スル木質ノ根ナリ、未ダ原植物ヲ識ルニ至ラズ。

(二) 齊ハ山東省西部ノ地、徐ハ江蘇省北部ノ地ヲ指ス。

〔校正〕 有名未用、別錄の苗根を併せ入る。

〔釋名〕 **蒨** 音は茜(セン)である。**茅蒐** 蒐の音は搜(ソウ)である、**茹藘** 音は如閭(ジョロ)である。**地血**(別錄) **染緋草**(蜀本) **血見愁**(土宿) **風車草**(土宿) **過山龍**(補遺) **牛蔓** 時珍曰く、按ずるに、陸佃は『許氏の說文に「蒐は人血から化して生えたものだ。それで草鬼と書いて蒐といふ」とある。陶隱居の本草には「東方には有るけれども少れだ。西方のやうに多くはない」とある。また西草と書いて茜といふもこの意味だ』といつてある。陸機は『(二)齊地方では茜と呼び、徐地方では牛蔓と呼ぶ』といひ、又『草の盛なる狀態を蒨といひ、牽き別かれたるを茹といひ、連なり覆ふものを藘といふ』といつてある。して見ると、蒨、茹藘なる名稱はその意味を取つたものだ。人血から化したといふ說は恐らく俗傳であらう。土宿眞君の本草には『四補草の根が茜草だ』一名西天王草、一名四岳近陽草、一名鐵塔草、風車兒草といふ』とある。



〔茜草〕

藏器曰く、有名未用の苗根、卽ち茜根である。茜、苗の二字は形が似てゐるので、傳寫の際に誤つたに相違ない。併記すべきものだ。

【集解】 別錄に曰く、茜根は(三)喬山の山谷に生ずる。二月、三月に根を採つて曝乾する。又曰く、苗根は山陰の谷中に生ずる。草木の上に蔓延し、莖に刺があり、實は椒のやうである。

弘景曰く、この物は現に絳(紅絹をいふ)を染る茜草だ。東方の地にはあるけれども少れだ。西方のやうに多くはない。詩に『茹藘阪に在り』といふはこの草である。

保昇曰く、染緋草は、葉は棗葉に似て頭が尖り、下が濶く、莖、葉ともに濇る。四五枚の葉が相對して節の間に生え、草木の上に蔓延する。根は紫赤色だ。所在いづれにもある。八月採收する。

頌曰く、現に耕作者はやはり畦を作つて種を蒔いて栽培する。故に史記に『千畝の卮茜、其の人千戶侯と等し』とあつて、それは利益の多いことをいつたのである。

時珍曰く、茜草は十二月に苗が生え、數尺に蔓延し、莖は四角で、中が空で筋があり、外に細刺があり、數寸に一節あつて節每に五枚の葉があり、葉は烏藥の葉の

(三) 喬山、未詳。

やうで糙澀し、表面は青く、背面は綠である。七八月に花を開いて實を結ぶ。實は小椒ほどの大いさで、中に細子がある。

根 【修治】 斆曰く、凡そこれを使用するには、銅刀を用ゐて槐砧上で剉み、日光で乾す。鉛、鐵氣に觸れてはならぬ。これと誤つて赤柳草を用ゐてはならぬ。根は眞に相似てゐるが、ただその草は味が酸く澁る。誤つて服すれば內障眼に罹るものだが、早速甘草水を服すれば(四)止る。卽ち毒氣が散ずるのだ。

(五)【氣味】 【苦し、寒にして毒なし】權曰く、甘し。大明曰く、酸し。藥に入れるには炒つて用ゐる。震亨曰く、熱なり。元素曰く、微し酸く鹹し、溫なり。陰中の陰である。別錄に曰く、苗根は鹹し、平にして毒なし。之才曰く、鼠姑汁を畏れ、雄黃を制す。

【主治】 【寒濕風痺、黃疸。中を補す】(本經) 【血內崩、下血、膀胱不足、踒跌、蠱毒を止める。久しく服すれば精氣を益し、身體を輕くする。絳を染める染料になる】又【苗根は、痺、及び(六)熱中、傷跌折に主效がある】(別錄) 【(七)六極、心、肺を傷め、吐血し、瀉血するを治す】(甄權) 【鼻洪、尿血、產後の血運、月經不止、帶下、

(四)大觀ニ解ニ作ル。

(五)木村(康)曰ク、あかねハプルプリンヲ含有ス。近藤平三郎—藥誌、明、二二(二〇八)五二七。

(六)熱中ハ心熱シ恐懼スルヲ云フ。

(七)六極ハ筋、脈、

撲損游血、泄精、痔瘻、瘡癤を止め、膿を排す。酒で煎じて服す】(大明)【經脈を通じ、骨節の風痛を治し、血を活し、血を行らす】(時珍)

發明　藏器曰く、茜草で蠱毒を治するには煮汁を服す。周禮に『庶氏は蠱毒を除くことを掌り、嘉草を以て之を攻む』とあるが、嘉草とは蘘荷と茜とをいふのである。蠱毒を治するに最上のものだ。

震亨曰く、世間一般に、痛風を治するに草藥を用ゐて速效を取り、(八)石絲を君とし、過山龍等を佐とするが、いづれも性熱にして燥し、陰を養ふ能はずして却つて濕を燥するものだ。病の淺いものの場合には、濕痰が燥を得て開き、游血が熱を得て行るために、一時效果は現れるが、病の深くして血の少いものの場合には、劫せば劫すほど虚して病はいよいよ深くなるものだ。

時珍曰く、茜根は色の赤いもので、氣は溫、味は微し酸くして鹹を帶びてゐる。色の赤は營に入り、氣の溫は滯を行り、味の酸は肝に入り、鹹は血に走るものだ。故に手足の厥陰の血分の藥であつて、血を行らし、血を活すを特長とする。俗方に、婦人の經水不通を治するにこれを用ゐ、一兩を酒で煎じて服するが、一日にして通

皮、肉、骨、髓ノ六部ノ陰、陽度ヲ失シ、虛實ノ極ニ達スル病狀ヲ云フ。

(八)格致餘論、藥性纂要ヲ按ズルニ、石絲ハ菟絲ノ誤。

じ、甚だ效がある。名醫別錄に『この草を久しく服すれば、精氣を益し、身體を輕くする』とある。日華子は『この草は精を泄す』といひ、甚だ合致しないが、恐らく信據するに足らぬやうだ。

附方 茜三、新八。【吐血して鎭まらぬもの】茜根一兩を搗いて末にし、二錢づつを水で煎じて冷服する。また水で二錢を和して服するもよし。(周應簡要濟衆方)【吐血躁渴】また毒を解す。茜根、雄黑豆を皮を去り、甘草を炙き、等分を末にして井水で彈子大の丸にし、一丸づつを溫水で化して服す。(聖濟錄)【鼻血の止まぬもの】茜根、艾葉各一兩、烏梅肉二錢半を末にし、煉蜜で梧子大の丸にし、五十丸づつを烏梅湯で服す。(本事方)【五十歲以後の月經】五十歲後の婦人にして月經が止らぬときは敗血となる傾向がある。茜根、一名過山薑一兩、阿膠、側柏葉を炙き、黃芩各五錢、生地黃一兩、小兒の胎髮(九)一枚の燒灰、以上を六帖に分け、一帖毎に水一盞半で七分に煎じ、髮灰を入れて服す。(唐瑤經驗方)【月經閉止】方は發明の項を見よ。【心痺、心煩】內熱するには、茜根の煮汁を服す。(傷寒類要)【蠱の中毒を解す】(一〇)猪肝のやうな血を吐下するには、茜草根、蘘荷葉各三(一一)分、水四升を二升に煮

(九)一枚ハ一塊ヲ云フカ。
(一〇)大觀ニ猪ヲ爛ニ作ル。
(一一)本書ニ分ヲ兩ニ作ル。

て服すれば癒える。自から蠱主の姓名を呼ぶものだ。(一二)(陳延之小品方)【髭髪を黒くする】茜草一斤、生地黄三斤から取つた汁を用ゐ、先づ水五大盌で茜を煎じて汁を絞り、滓を更に三回煎じて汁を取り、地黄汁と共に微火で膏のやうに煎じて瓶に盛り、毎日空心に溫酒で半匙を服す。一箇月で髭髪が漆のやうになる。蘿蔔、五辛を忌む。(聖濟錄)【(一三)螻蛄漏瘡】茜根の燒灰、千年の石灰等分を末にし、油で調へて傅ける。(儒門事親)【脫肛の收まらぬもの】茜根、石榴皮各一握、酒一盞を七分に煎じて溫服する。(聖惠方)【瘡疹の豫防】時行瘡疹の發せんとするとき、これを服すれば羅病せぬ。茜根の煎汁に少量の酒を入れて飲む。(奇效良方)

【附錄】 **血藤**(宋圖經)　頌曰く、(一四)信州に生ずる。葉は婆(一五)蘭の葉のやう、根は大拇指の太さほどあり、その色は黃である。彼の地では五月に採り、血を攻め、氣塊を治療するに用ゐる。

時珍曰く、按ずるに、虞摶は『血藤は過山龍である。理も相近い』といつてある。果して的確か否かは判らぬが、姑くここに附錄する。

(一二)大觀ニ傷寒類要ニ作ル。

(一三)螻蛄漏ハ九漏ノ一ニシテ頸上ニ發スル瘡腫ナリ。

(一四)信州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(一五)金陵本、蘭ニ作ル。

(一)牧野曰フ、剪草ハ未詳ノ一草デ時珍モ亦其品ヲ的知シテ居ナイコトガ下ノ集解ニ見エテ居ル。

(二)潤州ハ山草類薺苨ノ註ヲ見ヨ。

(三)婺州ハ同前胡ノ註ヲ見ヨ。台州ハ石部鹵石類礬石ノ註ヲ見ヨ。

(一)剪草（日華）

和名無し
學名未詳
科名未詳

【集解】藏器曰く、剪草は山澤の間に生ずる。葉は茗のやうで細い。江東で用ゐてゐる。

頌曰く、(二)潤州に生ずる。二月、三月に採り、曝乾して用ゐる。

時珍曰く、按ずるに、許叔微の本事方に『剪草は、形狀は茜草のやうでもあり、また細辛のやうでもある。(三)婺、台二州のいづれにもあるが、婺州の方を用うるがよい』といつてある。この說明は誠に詳だが、現在ではこの草に就て廣く詢ねて見ても一向識つてゐるものがない。或はこれは茜草のことだといふものもあるが、それも的確な根據はない。

根【氣味】【苦し、涼にして毒なし】頌曰く、平なり。【主治】【諸惡瘡、疥癬、風瘙、瘻蝕で蟲あるもの。酒に浸して服す】(大明)【一切の失血に主效がある】(時珍)

【發明】元素曰く、上部の血には、剪草、牡丹皮、天門冬、麥門冬を用ゐるがよし

時珍曰く、許學士の本事方に『剪草は、勞瘵、吐血で肺を損じたるもの、及び血の妄行を治す。その藥を名けて神傳膏といふ。その法は、一斤づつを用ゐ、洗淨し晒して末にし、生蜜二斤を入れて和し、膏にして器に盛る。鐵器に觸れてはならぬ。一日一回、九回蒸し九回曝して止める。患者がこれを服するには、五更に起きて東方に向ひて坐り、無言のまま匙で藥を抄つて四匙を服し、良久して稀い粟米飲で上から壓する。藥は冷服に限る。飲も太だ熱してはならぬ。吐くこともあり、痞えることもあるが差間はない。久病の肺損咯血はただ一服で癒える。普通の嗽血、妄行ならば毎服一匙でよし。ある貴婦人が瘵を患つたとき、この方を得て九日かかつて藥が出來上つた。ところがそれを服まうとする前夜、夢にある人が現はれて、明日は猥りに藥を服んではならぬと嚴しく戒めた。また翌日その藥を服まうとすると、突然屋根から土が墜ちてその藥の中へ落ち、服むことが出來なくなつた。そこで更に再び合劑して、まさに服まうとすると、今度は敷物を引いて容器を覆して了ひ、ま

た飲むことが出來なかつた。また更に合劑に取懸つたのであつたが、まだ合劑を畢らぬうちに、遂に夫人は死亡した。この藥にはかやうな奇異なることがある。少し位の血の妄行ならば只一服で癒える』といつてある。この藥はかやうに絶妙な靈藥だが、世間にその貴物に關する知識の傳はらぬのは誠に惜いことだ。

附方　新二。【風蟲牙痛】剪草、細辛、藁本等分を水で煎じ、熱して漱ぐ。少頃して自から止む。(中藏經)【風瘡瘙痒】滑肌散——風の邪が肌中に客し、全身が瘙痒して瘡疥となつたもの、及び脾、肺の攻衝で瘡となり、乾いたり濕つたり、久しきに亙つて癒えぬものを治す。剪草七兩——火氣に當てぬやうにする——輕粉一錢を末にして摻る。乾いたものは麻油で調へて摻る。(和劑局方)

(一)防已(本經中品)

和名　未詳
學名　未詳
科名　未詳

釋名　解離(本經)石解　時珍曰く、按ずるに、東垣李杲は『防已は因險勇壯なる人物のやうなもので、災を幸とし、禍を樂み、危險な謀叛の首謀者ともなる

(一)牧野日フ、今日私ニハ防已ガ何ト云フ植物ダカ能ク解ラヌ。從來ノ學者ハ集解中ニ在ル木防已ヲあをつづらふぢ(Cocculus trilobus, DC.)ニ充テ、漢防已

が、また巧みに善用すれば、敵を防ぐにも有力な働をなす。名稱も或はその意味を取つたのだらう』といつてある。解といひ、離といふは、紋を作して解裂する狀態に因んだものだ。

集解　別錄に曰く、防已は(二)漢中の川谷に生ずる。二月、八月に根を採つて陰乾する。

當之曰く、その莖は葛のやうで蔓延し、その根は外が白、内が黄、桔梗のやうで内に黑い紋があり、車輻のやうに解するものが良し。

弘景曰く、現に(三)宜都、建平に產する。大きくして青白色の虛して軟いものが好し。黑(四)點があつて木のやうに強いものは佳くない。服食の法にもこれを用ゐる。

頌曰く、今は(五)黔中にもある。漢中に產するものだけは、破れば文が車輻のやうに解け、黃色で實して香しく、莖梗が甚だ嫩かく、苗葉は少し牽牛に類してゐて、その莖を折つて一方から吹けば先に吹き貫けて(六)木通のやうだ。他の地方に出るものは青白くして虛軟である。又、腥氣があり、皮が皺み、上に丁足子があるものをば木防已と名ける。蘇恭は『木防已は用うるに堪へぬ』といつたが、張仲景の傷寒

(和名ニかんばういト言稱スルモノトハ別デアル)ヲおほつづらふぢ(Sinomenium acutum, Makino.)ニ充テテ居ルガ、其レガ果シテ中ツテ居ルカ否カ私ニハ斷言ガ出來ナイ。本草綱目啓蒙ニハつづらふぢヲあをつづらふぢノ一名トシテアルガ、是レハおほつづらふぢノ普通名デアラネバナラヌノデアル。

木村(康)曰ク、現今支那市場ニ防已又ハ漢防已ト稱スルモノハ防已科植物ノおほつづらふぢニ近キモノニ起因スルモノナランモ未ダ原植物ヲ詳ニスルヲ得ズ、本邦ニ於テハ防已ニおほつづらふぢ莖及根ヲ充テ用ウレドモ、

支那品ト混亂スルヲ以テ該種ニヨルモノハ特ニ和防已又日本産防已ト稱ス。又あをつづらふぢノ莖及根ヲ用ウルモノヲ木防已トス。生藥學的研究ノ文獻ハ藤田直市—藥誌、六、一五(五三五)七二五(五三七)九七〇。

(二)漢中ハ石部特生礜石梁州ノ註參照。

(三)宜都ハ山草類巴戟天ノ註ヲ見ヨ。建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(四)大觀ニ黯ニ作ル。

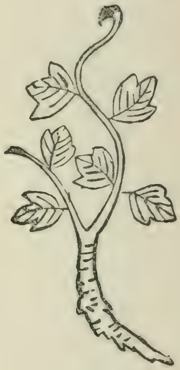
(五)黯中ハ金部銀ノ註ヲ見ヨ。

(六)木通ハあけびづる。

(七)木村(康)曰ク、おほつづらふぢノ成分。根及莖ハシノメニン、ヂシノメニン、ヂベルヂント云

を治する增減防已湯、及び防已地黄湯、五物防已湯、黄芪六物等の湯があり、孫思邈の遺尿、小便の澀るを治するものにもやはり三物木防已湯といふがある。

藏器曰く、陶氏が漢、木の二防已といつたのは、根と苗との稱呼だ。



〔防已〕

修治　斅曰く、凡そこれを使用する場合に、木條なるものを用ゐてはならぬ。木條は色が黄で腥く、皮が皺み、上に丁足子のあるもので、用ゐるに堪へない。必ず心に花文のある黄色のものを用ゐねばならぬ。細かに剉んで車前草根と相對して半日間蒸し、晒し乾して用ゐる。

時珍曰く、今は一般に、多くは皮を去つて剉み、酒で洗つて晒し乾して用ゐる。

(七)**氣味**　【辛し、平にして毒なし】 別錄に曰く、苦し、溫なり。普曰く、神農は辛しといひ、黄帝、岐伯、桐君は苦し、毒なしといひ、李當之は大寒なりといふ。權曰く、苦し、小毒あり。元素曰く、大いに苦く辛し、寒なり。陰であり泄で

フ三種ノアルカロイドヲ含有ス、後藤氏ハ他ニ新ナル二種ノアルカロイドヲ分離セリト、高折氏ハ果實中ニパラシノメニン（落合氏ニヨレバザベルザンソノモノナリト）及メタシノメニント云フ二種ノアルカロイドノ存在ヲ記載ス。

（藥理）シノメニンノ藥理的作用ハシノメニンノ多量ヲ動物ニ注射スルトキハ反射機能亢進シ劇シキ痙攣ヲ發作シ遂ニ中樞性麻痺ニ陷リ死ス、ザベルザンモ亦稍其作用前者ニ類シ、主ナル全身中毒症状ハ呼吸障碍及ビ反射機能ノ興奮ニアリ。高折氏ノパラシノメニンハ其作用、シノメニンニ一致シ、只ヨリ

ある。之才曰く、殷孽が使となる。雄黃の毒を殺し、細辛を惡み、萆薢、女菀、鹵鹹を畏れ、消石を伏す。

主治　【風寒溫瘧、熱氣諸癇。邪を除き、大小便を利す】（本經）【水腫、風腫を療じ、膀胱の熱、傷寒の熱、邪氣、中風の手脚の攣急を去り、腠理を通じ、九竅を利し、洩を止め、癰腫、惡結、（八）諸瘑、疥癬、蟲瘡を散ず】（別錄）【濕風で口、顏が喎斜し、手足の拘痛するものを治し、留痰、肺氣喘嗽を散ず】（甄權）【中、下の濕熱腫を治し、脚氣を洩し、十二經に行る】（元素）【木防已は、主として男子の肢節の中風、毒風で言語不能のものを治し、結氣の擁腫、溫瘧、風水腫を散じ、膀胱の（九）熱を（一〇）去る】（甄權）

發明　弘景曰く、防已といふものは風、水を療する要藥である。

藏器曰く、風を治するには木防已を用ゐ、水を治するには漢防已を用ゐる。

元素曰く、下焦の濕で腫れまたは痛むを去り、また膀胱の火邪を泄するには、必ず漢防已、草龍膽を君とし、黃蘗、知母、甘草を佐として用ゐるもので、防已なるものは太陽の本經の藥である。

強力ナルノ異アルノミナリト。成分及藥理ノ文獻。
近藤平三郎、落合英二、中島道一―藥誌、大、一二(四九七)五一一。近藤、落合―藥誌、大、一三(五〇三)八。石割仁郎―中外醫事新報、九五五號九一一號。後藤格次―化誌、大、一二(四四)七九五。農化、大、一五(二)八九。石割―中外醫事新報、九九一號。小管賢―京醫、大、一二(二〇卷一二號)。近藤、落合―藥誌、昭、二(五四九)九二三。後藤格二、鈴木英雄―農化、昭、三(四)三八。太田賢一郎―慶醫、大、一二(三號七―一〇號)大、一三(二一―一二號)。高折茂―東醫、大、一三(二一卷一號)。近藤平、

○杲曰く、本草の十劑に『通は滯を去るもので、通草、防已の屬である』といつてある。そもそも防已なるものは、大苦であり、寒であつて、能く血中の濕熱を瀉し、その滯塞を通じ、また能く大便を瀉し、陰を補し、陽を瀉す。秋、冬を助けて春、夏を瀉するの藥である。これを人物に譬へて見れば、凶險にして勇壯な者である。災を幸とし、禍を樂み、能く首謀者となつて不逞の謀叛を起すけれども、これを巧みに善用すれば、また能く凶に敵し險を突くの功名を擧げるやうなもので、これは瞑眩の藥である。故に聖人はかやうな性質のものをば存して廢てなかつたのだ。大體その臭氣を嗅げば不快なもので、咽を入れば人の身心を煩亂させ、飲食を減少させるものであるが、しかし、十二經に濕熱があり、壅塞して通ぜぬ場合、及び下注脚氣、膀胱の積熱を除いてその基本を庇護せんとする場合には、この藥以外のものでは役に立たぬ。眞に行經の仙藥であつて、他には之れに代るべきものがない。けれども患者が飲食、勞倦で陰虛し、內熱を生じ、元氣が缺け、穀食も通らなくなつたものの場合には、防已を用ゐては便を泄するから更に重ねてその血を亡ふこととなる。これはその藥を用うべからざる病の一例である。もし患者が甚しく渴して引

飲するならば、それは熱が上焦、肺の經の氣分に在るもので、その場合は滲泄すべきものであつて、防已は下焦の血分の藥だから、これは用ふべからざる例の二である。外部から風寒の邪に傷み、それが肺の經の氣分に傳はつて濕熱し、小便が黄赤色となつて不通になるものの場合は、それは上焦の氣の病だから血藥の使用を禁ずる。これは用ふべからざる例の三である。概して上焦の濕熱の患者にはいづれも用ゐてはならない。下焦の濕熱が十二經に流入し、ために二陰不通となつたものの場合には、よくそれを確めて然る後にこれを用ふべきものである。

【附方】　舊三、新九。【皮水胕腫】按じて見て指を沒するほどになり、惡風せず、水氣が皮膚中に在つて四肢が(一)聶聶として動ずるものには、防已茯苓湯が主たる藥である。防已、黄芪、桂枝各三兩、茯苓六兩、甘草二兩を用ゐ、毎服一兩を水一升で半升に煎じ、一日二回に服す。(張仲景方)【(二)風水惡風】汗が出て身が重く、脈の浮するには、防已黄芪湯が主たる藥である。防已一兩、黄芪二兩二錢半、白朮七錢半、炙甘草半兩を剉んで散にし、毎服五錢を生薑四片、棗一箇、水一盞半で八分に煎じて溫服し、良久して再服する。腹痛には芍藥を加へる。(仲景方)【風濕の相搏つ

落合－藥誌、大、一五、(五三八)一〇〇八。昭、一、(五三九)七一。昭、四(五四九)九一三。昭、四(五六七)四二五。落合英二－藥誌、昭、四(五六八)五五六。あをつづらふぢノ成分及藥理。

あをつづらふぢノ根及莖ニハ結晶性アルカロイドトリロビン及ホモトリロビンヲ含有ス。窪美氏ニヨレバトリロビンハ單一ナル物質ニアラズシテトリロビンA及Bニ分ツベキモノナリトセリ。

トリロビンハ溫血動物ノ呼吸中樞及心臟ヲ痲痺セシム。トリロビンニハ利尿作用ナシ、溫刺ニヨリ發熱セシメタル家兎ニハ解熱作用ヲナス。

(文獻)近藤(平)、中

もの】關節が沈痛し、微腫し、惡風する。方は上に同じ。【小便淋濇(りんしよく)】三物木防已湯——木防已、防風、葵子各二兩を㕮咀し、水五升で二升半に煮取り、三回に分服する。(千金方)【膈間の(一三)支飲】患者が喘滿し、心下が痞堅し、顏色が黧黒(れいこく)となり、その脈が沈、緊し、發病後數十日に亙り、醫師が吐下の方法を用ゐても癒えぬには、木防已湯が主たる藥であつて、これを用ゐて虛するものは癒えるが、實するものは三日後にまたこの藥を與へ、なほ癒えぬときは、石膏を去つて茯苓、芒消を加へたものを主として用ゐる。方は、木防已三兩、人參四兩、桂枝三兩、石膏を雞子大ほどのもの十二箇、水六升を二升に煮取つて分服する。(張仲景方)【傷寒喘急】防已、人參等分を末にし、桑白湯で二錢を服す。老人と小兒とに拘らぬ。【肺痿喘嗽】漢防已末二錢、漿一琖を七分に煎じ、少しづつ呷(す)ふ。(儒門事親)【肺寒の喀血】痰多きには、漢防已、葶藶(ていれき)等分を末にし、糯米飲で一錢づつを服す。(古今錄驗)【鼻衄の止まぬもの】生防已末二錢を新汲水で服し、同時に少量を噏(す)ふ。(聖惠方)【霍亂吐利】防已、白芷等分を末にし、新汲水で二錢を服す。(聖惠方)【劇しき瞳睛の痛】防已を三回酒に浸して末にし、一服に二錢を溫酒で服す。(摘玄方)【雄黄の毒を解す】防已

里辰雄—藥誌、大、一三(五一一)六九一。落合英二—藥誌、昭、四(五六七)四二五。中里辰雄—藥誌、大、一五(五三二)四六二。鶴田靜麿—日本藥物、大、一五(三)三八〇。江塚市一—京醫誌、大、八(一六)一二〇九。

(八)瘍ハ膿竄瘡ノ劇シキモノニシテ痛痒ヲ發ス。

(九)大觀ニ熱字ナシ。

(一〇)大觀ニ治ニ作ル。

(一一)聶聶ハ相合フ貌。

(一二)風水ハ水腫ノ一種、惡風ハ惡寒ノカルキモノ。

(一三)支飲ハ溜飲ノ一種。

の煎汁を服す。

實　[主治]　【脫肛には、焙じ研り、煎じて飲にし、茶に代へて飲む】（肘後）

(一)通草（本經中品）

和名　たうむべ（新稱）(?)
學名　Stauntonia chinensis, DC.?
科名　あけび科（通草科）

[釋名]　**木通**（士良）　**附支**（本經）　**丁翁**（吳普）　**萬年藤**（甄權）　子を**燕覆**と名ける。時珍曰く、極めて細い孔があつてみな通つてゐるところから通草と名けたもので、卽ち今の木通である。現に通草と呼んでゐるものは古の通脫木のことだ。宋本草に一物として混淆して註したために名稱、事實が紛亂した。本書では區別して記載する。

[集解]　別錄に曰く、通草は(二)石城の山谷、及び山の陽に生ずる。正月、二月に枝を採つて陰乾する。

弘景曰く、今は近道に產する。樹に絡まり、藤になつて生える。汁は白く、莖に細孔があつて兩邊にみな通つてゐる。一端から吹けば先の端に吹き出るものが良し。

(一)牧野曰フ、通草卽チ木通ハ集解ノ文デハ確カニあけび科ノ一品デ、多分下ニ記シタたうむべ卽チS. chinensis, DC.デハナイカト思フ。但シあけび（Akebia quinata, D.cne.）ニモ合致スル樣ノ點モアレドモ、其莖ノ徑三寸ト云フニ嫌ガアル。植物名實圖考、卷ノ三十一ニアル野木瓜ハ蓋シあけびデアラウ。從來此野木瓜チむべ一名ときはあけびニ充テテ居レドモ其レハ中ツテ居ナイ。今日デハ通草ニハ僞物ガアツテうまのあしがた科ノせ

或は、これは葍藤の莖だともいふ。

〇恭曰く、この物は、太いものは徑三寸もあり、節毎に二三本の枝があつて、枝の端に五枚の葉がある。子は長さ三四寸あつて、核は黑く、瓤は白く、食へば甘美なもので、南方諸地ではこれを燕覆子、或は烏覆子と呼んでゐる。七八月になつて採る。

〇〇藏器曰く、江東地方では畜葍子と呼び、江西地方では拏子と呼ぶ。筭袋のやうなもので、瓤が黃で子は黑い。食ふには皮を棄てる。蘇氏のいふ白色のものは猴葍といふものだ。



〔通草・卽ち木通〕

〇頌曰く、今は(三)澤潞、漢中、江淮、湖南の州郡にもある。藤生で、蔓の太さ指ほどあり、莖幹の太いものは徑三寸ほどある。一本の枝に五枚の葉があり、頗る石韋に類し、また芍藥の(四)二葉相對するに似てゐる。夏、秋紫色の花を開き、また白花のものもある。結實は小さい木瓜のやうなもので、食へば美味だ。卽ち陳士良の本

んにんさう屬(Clematis)ノ或ル種ナドガ通草ノ名デ使用セラレテ居ル樣デアル。木村(康)曰ク、木通ノ生藥學的研究文獻ハ藤田直市－藥誌、大、一五(五三七)九七。

(二) 石城山ハ今ノ四川省宜賓縣ノ西南ニ在リ。

(三) 澤、潞ハ州名、今ノ山西省東南部ノ地ナリ。

(四) 金陵本三葉ニ作ル。

草に所謂桴棪子である。その枝を今一般に木通と謂ふ。俗間で通草と呼ぶは通脱木のことだ。古方に用ゐた通草はいづれも今の木通で、通脱木は用ゐたことが稀だ。或は、木通を葡萄の苗だといふものもあるが、誤だ。按ずるに、張氏の燕吳行紀に『(五)揚州甘泉の東院の兩廊前に通草がある。その形は椿のやうで、葉は細く、子は垂れ、枝の有樣は苦楝のやうだ』と記載してあるが、今說明したいづれのものとも同じくない。或は別にさやうな一種のものがあるのかも知れぬ。

時珍曰く、(六)現に木通には紫色、白色の二種あつて、紫のものは皮が厚く、味が辛く、白いものは皮が薄く、味は淡い。本經には『味辛し』とあり、別錄には『味甘し』といつてある。この二種は共に能く通利するものだ。

(七)**氣味**　【辛し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し、權曰く、微寒なり。普曰く、神農、黃帝は辛しといひ、雷公は苦しといふ。杲曰く、味甘くして淡し、氣は平である。味薄くして降る。陽中の陰である。

主治　【脾、胃の寒熱を除き、九竅、血脈、關節を通利し、人をして忘れざらしめ、惡蟲を去る】(本經)【脾疸で常に眠らんとし、心が煩噦して音聲を出すものを

(五) 揚州ハ今ノ江蘇省江都縣ソノ舊治ナリ。

(六) 白井曰ク、あけびハ花紫色、むべハ花白色、時珍此二種ノ區別ヲ說クニ似タリ。

(七) 木村(康)曰ク、あけびノ種子ニハ脂肪油約十八%ヲ含ム。木部ニハ結晶性配糖體アケビンヲ含有ス。木部ノ水製エキスハ八・二%ノ灰分ヲ含有ス、其中ニハカリユム鹽多シ。

瘀じ、耳聾を治し、癰腫、諸結の消せぬもの、及び金瘡、惡瘡、鼠瘻、踒折、齆鼻、息肉を散じ、胎を墮し、三蟲を去る】(別錄)【五淋を治し、小便を利し、關格を開き、人の多睡を治し、水腫浮大に主效がある】(甄權)【諸經脈の寒熱、不通の氣を利す】(詵)【風熱で小便頻數にして急疼し、小腹の虛滿するを理す。湯に煎じて用ゐるがよし、また葱と飮にして用ゐるも有效だ】(士良)【心を安んじ、煩を除き、渴を止め、熱を退け、耳目を明にし、鼻塞を治し、小腸を通じ、水を下し、積聚血塊を破り、膿を排し、瘡癤を治し、痛を止め、分娩を催し、胞を下し、婦人の血閉、月經不順、天行時疾、頭痛、目眩、羸劣、(九)乳結に主效があり、また乳を出す】(大明)【大小便を利し、人をして心を寬にして氣を下さしめる】(藏器)【諸瘻瘡、喉痺、咽痛に主效がある。濃く煎じて含み嚥む】(珣)【經を通じ、竅を利し、小腸の火を導く】(杲)

【發明】杲曰く、本草の十劑に『通は滯を去るもので、通草、防已の屬だ』とある。一體、防已は大苦、寒で能く血中の濕熱の滯を瀉し、また大便を通ずるもの、通草は甘、淡で能く西方、秋氣を助け、下降して小便を利し、專ら氣滯を瀉すものだ。肺が熱邪を受けて津液氣化の原が絕し、ために寒水が流通を斷ち、膀胱に濕熱

(九)乳結ハ乳結核ノ略、乳ノ中ニグリグリヲ生ズル病。

を受け、癃閉し、約縮し、小便不通なるは、この藥で治療するがよし。その病證が、胸中煩熱し、口燥き、舌乾き、大渇し引飲し、小便が淋瀝し或は閉塞して通ぜず、脛(一〇)痠し、脚熱するには、いづれも通草を主として用ふべきもので、凡そ氣味がこれと同じきもの、茯苓、澤瀉、燈草、猪苓、琥珀、瞿麥、車前子の類は、いづれも濕を滲し、小便を利してその滯氣を泄するものだ。

○又曰く、木通は、下行し、小腸の火を泄し、小便を利する功力が琥珀と同じ。他藥の比すべきものがない。

○○時珍曰く、木通は手の厥陰、心の包絡、手足の太陽、小腸、膀胱の藥である。故に能く心を通じ、肺を淸くし、頭痛を治し、九竅を利し、下は能く濕熱を泄し、小便を利し、大腸を通じ、全身の拘痛を治するのだ。本經、及び別錄には、いづれも小便を利し、淋を治するの功力に言及しなかつたが、甄權、日華などの諸氏が始めてそれを發揚した。この藥は能く(一一)丙丁の火を泄す。そこで肺が邪を受けず、能く水道を通ずる。かくて水源が淸くなるから津液は自から化し、諸經の濕と熱とはみな小便から泄し去るのである。古方の導赤散にこれを用ゐたのも、やはり南を瀉し、

(一〇)痠ハ字書ニ痛ム時酸軟ヲ覺ユルモノヲ云フトアリ。

(一一)丙丁ハ心臟ヲ指ス。

北を補し、西を扶け、東を抑へる關係に基いたものだ。楊仁齋の直指方に、全身、胸、腹に隱熱があつて疼痛し、拘急し、足が冷えるは、いづれも伏熱で血を傷めたためである。血は心に屬するものだから、それには木通を用ゐる。心竅が通ずれば經絡が流れ行るのだ』といつてある。

〔附方〕 舊二、新一。【心熱で尿の赤きもの】顏面が赤く、唇が乾き、牙を咬み、口が渇くには、導赤散――木通、生地黄、炙甘草等分を用ゐ、水竹葉七片を入れて水で煎じて服す。（錢氏方）【婦人の血氣】木通を濃く煎じて三五盞を飲めば通じる。（孟詵本草）【金瘡、踒折】通草の煮汁で酒を釀して日毎に飲む。【鼠瘻の消せぬもの】方は上に同じ。

根 〔主治〕【項下の癭瘤】（甄權）

子 〔氣味〕【甘し、寒にして毒なし】詵曰く、平なり。南方の地では多く食ふ。北方の地ではこの物の功力を知らぬ。〔主治〕【腸、胃の力を厚くし、食物を十分攝らしめ、三焦の惡氣を下し、五臟の斷絕の氣を續ぎ、言語の發聲の氣を十分ならしめ、十二經脈を通ずる。核と共に食ふ】（孟詵）【三焦の客熱、胃口の熱で胃が

閉ぢ、食物の落付かぬを除く」(士良)【渇を止め、小便を利す】(時珍)

通脫木(一)(法象)

和名　つうだつぼく、かみやつて
學名　Tetrapanax papyriferum, C. Koch.
科名　うこぎ科(五加科)

【釋名】通草(綱目)　活莌　莌の音は奪(ダツ)である。離南　○頌曰く、爾雅に『離南は活莌なり』とあるは即ち通脫である。山海經には『寇脫、又倚商と名く』とある。

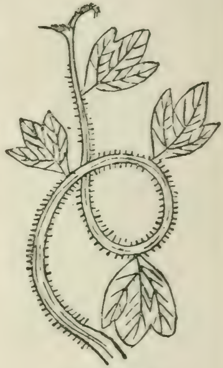
○杲曰く、陰竅が濇つて利せぬもの、水腫で閉して行らぬものは、これを用うれば立ろに通ずる。その功力に因んで通草なる名稱があるのであつて、木通と同功だ。

○嘉謨曰く、白瓤が中に藏まつてあるもので、木から(二)脫してそれを採るから通脫と名けたのだ。

【集解】○藏器曰く、通脫木は山の側面に生ずる。葉は蓖麻に似たもので、莖が空で心の中に白瓤があり、輕く白く愛すべきものである。婦人はそれを取つて物を飾る。俗に通草と名ける。

(一)牧野曰フ、是レ臺灣ニ產スルつうだつぼくデアル、其莖中ノ髓卽チ白瓤ヲ採テ用ウル、始メHooker氏ニヨツテAralia papyrifera ト名ケラレタガ今ハ下ノ學名ガ用ヰラレテ居ル、西洋デハ俗ニRice-paper Plant ト稱スル。

(二)脫シテ拔キ取ルコト。



〔通脫木〕
——今の通草——

頌曰く、郭璞は『江南に生ずる。高さ一丈ほどあつて、葉は大きくして荷に似て肥え、莖中に正白色の瓤がある』といつた。現に畑や庭にこれも種を蒔いて栽培し、或は蜜で煎じて菓子にして食ふ。味の甘美なものだ。

時珍曰く、山中に蔓生するもので、莖の太いものは圍り數寸ある。

氣味 【甘く淡し、寒にして毒なし】 杲曰く、甘し、平なり。降であつて、陽中の陰である。

主治 【陰竅を利し、五淋を治し、水腫、癃閉を除き、肺を瀉す】(李杲) 【諸毒蟲の傷痛を解す】(蘇頌) 【目を明にし、熱を退け、乳を下し、分娩を催ほす】(汪機)

發明 杲曰く、通草の肺を瀉し、小便を利するは、甘、平で陰血を緩にするがためだ。燈草と同功である。生で用ゐるがよし。

時珍曰く、通草は、色白く、氣は寒、味は淡であつて、その物の體が輕い。故に

太陰、肺の經に入り、熱を引き下降して小便を利し、陽明、胃の經に入り、氣を通じ上達して乳汁を下す。その氣の寒なるは降であり、その味の淡なるは升である。

【附方】　新一。【頭風痛を洗ふ】新しき通草を瓦の上で燒いて性を存して研末し、二錢を熱酒で服す。牙關(がくわん)の緊閉(きんへい)するには、口を押し開けて灌(そそ)ぎ込む。(王璆百一選方)



〔天壽根〕
——天台——

花上の粉　【主治】【諸蟲瘻、惡瘡、痔疾にこれを納(い)れる】(藏器)【瘰癧(るゐれき)、及び胸中の伏氣が胃、咽を攻むるを療ず】(蘇頌)

【附錄】　**天壽根**(圖經)　頌曰く、(三)台州に產し、毎年政府へ貢納する。その性は涼であつて、胸膈の煩熱を治す。地方民は常用して效を擧げてゐる。

(一)釣藤　(別錄下品)

和名　たうかぎかづら(新稱)
學名　Uncaria sinensis, (Oliv.).
(=Nauclea sinensis, Oliv.)
科名　あかね科(茜草科)

(三)台州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

(一)牧野曰フ、從來我邦ノ學者ハ此釣藤ヲ我邦產ノかぎかづら (U. rhynchoph-

yl'a, Miq.)ニ充テテ居タガ是レハ下ノ學名ノ品トセネバナラヌ、ソシテ此レハ我日本ニハ産シナイ、然シ兩者ハ頗ル能ク似タモノデアル。
(二) 建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(三) 梁州、秦中、興元府ハ石部特生礜石梁州ノ註參照。

校正 木部より此に移し入る。

釋名 弘景曰く、(二)建平に産する。また弔藤とも書く。小兒の治療に用ゐるもので、他の方には入れない。

時珍曰く、その刺が曲つて釣鈎(つりばり)のやうだから名けたものだ。或は弔とも書くが、それは簡單で書き易いからである。

集解 恭曰く、釣藤(てうとう)は(三)梁州に産する。葉は細長く、莖の間に刺があつて釣鈎のやうだ。

頌曰く、現に秦中、興元府にある。三月採收する。

宗奭曰く、湖南、湖北、江南、江西の山中にいづれもある。藤の長さ八九尺から一二丈のものもあり、太さは拇指ほどのもので、その中が空である。狡猾な者はそれを酒甕(しゆをう)の中に入れて酒を盗み取るが、一方から吸へば涓涓(けんけん)として斷えず傳はつて來る。



〔釣　藤〕

時珍曰く、形狀は葡萄の藤のやうで鉤があり、紫色である。古方には多く皮を用ゐてあるが、後世では多く鉤を用ゐる。その力の銳い點を用ゐるわけだ。

（四）【氣味】【甘し、微寒にして毒なし】保昇曰く、苦し。權曰く、甘し、平なり。時珍曰く、初は微し甘く、後には微し苦し、平なり。

【主治】【小兒の寒熱、十二驚癇】（別錄）【小兒の驚啼、瘈瘲、熱壅、客忤、（五）胎風】（權）【大人の頭旋、目眩、肝風を平にし、心熱を除く。小兒の內釣腹痛、發斑疹】（時珍）

（六）【發明】時珍曰く、釣藤は手足の厥陰の藥であつて、足の厥陰は風を主り、手の厥陰は火を主る。驚癇、眩運はいづれも肝風相火の病だ。釣藤は心包を肝木に通ずるもので、風が靜まり火が息むから、それで右の諸證が自ら除くのである。或人の說に、數寸を小麥の中に入れ、蒸熟して馬に食はせると肥え易いといふ。

【附方】新三。【小兒の驚熱】釣藤一兩、消石半兩、甘草を炙いて一分を散にし、一日三回、半錢づつを溫水で服す。これを延齡散と名ける。（聖濟錄）【卒かの癇疾】釣藤、甘草を炙いて各二錢、水五合を二合に煎じ、每服棗ほどの量を晝五回、

（四）木村（康）曰ク、かぎかづらノ葉及鉤ハリンコフイリンナル結晶性アルカロイドヲ含有ス。

（五）胎風ハ懷胎ノトキ母ガ風邪ニ感ジテ兒ニウツルヲ云フ。

（六）木村（康）曰ク、リンコフイリンハ動物試驗ニ於テ少量ハ呼吸中樞ヲ興奮セシメ血壓ハ下降セシム。ヂギタリス樣作用ヲ呈スルコトアリ、運動麻痺ヲモ來ス。成分及藥理ノ文獻ハ近藤平三郎、福田鐵雄、富田眞雄—藥誌、昭、三（五五四）三二一。赤松宗二、國香

夜三回服す。(聖惠方)【不快なる斑疹】釣藤の鈎刺、紫草茸等分を末にし、一字、或は半錢づつを溫酒で服す。(錢氏方)

附錄　(七)倒掛藤(拾遺)　藏器曰く、味苦し、毒なし。一切の老血、及び產後の諸疾、結痛、血が上つて死せんとするものに主效がある。煮汁を服す。深山に生ずるもので、懸鈎のやうな逆刺があつて逆に樹上に掛る。葉は尖つて長い。

(一)黃　藤(綱　目)

和名無し
學名未詳
科名未詳

集解　時珍曰く、黃藤は嶺南に生ずる。形狀は防已のやうだ。その地の住民はこの藤を常服する。飲食を縱(ほしいまま)にしてその中に毒があつても、この汁を服するために自然に毒が發しない。席辨刺史の話に、甚だ有效なものだといつてある。

氣味　【甘く苦し、平にして毒なし】主治　【飲食物の中毒で小便を利するには、煮汁を頻に服すれば解す】(時珍)

哲三郎：長醫誌、昭、三(六)三三三。

(七)牧野曰フ、倒掛藤ハ本條ニ似タ品デアルガ未詳ノモノデアル。

(一)牧野曰フ、黃藤ハ所屬不明ノ未詳ノ品種デアル。

(一)白兎藿（本經(二)上品）

和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

釋名　白葛(三)（普）

集解　別錄に曰く、交州の山谷に生ずる。

弘景曰く、この藥は解毒藥として他に匹敵するものがない。しかし世間では一向に用ゐず、今では此の物の形を知る人が無い。



〔白兎藿〕
——交州——

恭曰く、(四)荊襄の山谷に(五)今ある。蔓生のものだ。(六)山南地方ではこれを白葛といふ。苗は蘿藦に似て葉が圓く厚く、莖に白毛があつて他の草類と異ふ。この藿を用ゐれば毒を療ずるに有效だ。(七)交、廣地方にはまた毒を解するものに白花藤といふがあるが、これもそれは根を用ゐるもので苗を用ゐるもので

(一) 牧野曰フ、白兎藿ハ所屬不明ノ未詳植物デアル。
(二) 大觀ニ中ニ作ル。
(三) 普ハ本經ノ誤。
(四) 荊襄ハ山草類貫衆ノ註ヲ見ヨ。
(五) 大觀ニ今ヲ大ニ作ル。
(六) 山南ハ毒草類藜蘆ノ註ヲ見ヨ。
(七) 交廣ハ兩廣及ビ交州ノ地ヲ指ス。

ない。

保昇曰く、蔓生で、葉は圓くして蓴のやうだ。現に襄州北部、(八)汝州南部の岡地にある。五月、六月に苗を採つて日光で乾す。

氣味 【苦し、平にして毒なし】 主治 【蛇、虺、蜂、蠆、狂犬、菜、肉、蠱毒、(九)鬼疰、(一〇)風疰、口に入れてならぬ諸種の大毒、いづれもこれで消除する。又、血を去る。末にして痛處に著けるがよし。立ろに毒を(一一)消する。腹に入つたものは、煮汁を飲めば直ちに解す】(一二)(本經) 【風邪で熱の極端なるには、煮汁を飲む。搗いて末にし、諸種の毒に傅けるが妙である】(李珣)

(一)白花藤（唐本草）

和名 ていかかづら
學名 Trachelospermum jasminoides, Lem.
科名 けふちくたう科(夾竹桃科)

集解 恭曰く、嶺南、交州、廣州の平澤に生ずる。苗は野葛に、葉は女貞に似て、莖、葉倶に毛がなく、花は白い。根は葛に似て骨柔く、皮は厚く、肉が白い。大いに毒を療ずるものだ。根を用ゐて苗は用ゐない。

(八)汝州ハ隋ニ置ク今ノ河南省臨汝縣ソノ舊治ナリ。
(九)鬼疰以上ハ經ノ文ナリ。
(一〇)九種注病ノ一ナリ、病狀多端今一一注スル能ハズ病源候論ニ詳ナリ。
(一一)大觀ニ消ニ作ル。
(一二)本經ハ別錄ノ誤。

(一)牧野曰フ、今植物名實圖考、卷ノ二十一ニ說ク所ニヨツテ白花藤チていかかづらト定メル。ていかかづらハ古名チまさきのかづらト稱シタモノデ、今日此名ガ八丈島ニ遺リ傳ハツテ居ルト白井博士

ノ說デアル。

(二)大觀ニ廿ノ下ニ香字アリ。

保昇曰く、蔓生であつて、花は白く、葉に細毛がある。根は牡丹に似て骨柔く、皮は白くして厚い。冬を凌いで凋まぬ。



〔白花藤〕
――交州――

斅曰く、凡そこれを使用する場合に、菜花藤なるものを用ゐてはならぬ。眞によく似てゐるが、菜花藤は味が酸く澁い。白花藤は味が(二)甘い。これを採取したならば根を去り、細剉して陰乾して用ゐる。

氣味 【苦し、寒にして毒なし】 主治 【諸藥、菜、肉の中毒を解す。酒に漬けて用ゐれば虛勞の風熱に主效がある】(唐本)

發明 時珍曰く、蘇氏は根を用ゐるといひ、雷氏は苗を用ゐるといふ。結局いづれも用ゐ得るわけである。按ずるに、葛洪の肘後方に『席辨刺史は久しく嶺南にゐた人だが、その人の話に、その地方の住民共は、一般に飲食物に毒が入つてゐた場合、それがために多くは自覺せずして漸次に食物を攝れなくなり、或は心中が

漸次に脹れ、當初には寒して瘴の如き容體になることがあるが、すると彼等は急に白銀を一夜口に含む。その白銀の變色するを見て、その毒の何物かが判明するのだ。銀が青くなれば藍藥、銀が黃赤になれば菌藥を用ゐたものと判る。菌の字の音は混(コン)である。草の名稱だ。その場合は、ただ白花藤四兩――(三)嶲州産を上級品とする。野葛に接近して生えたものは用ゐられぬ――を洗つて切り、乾藍實四兩と共に水七升で半分に煮取り、空腹に頓服する。少し悶するが心配はない。毒は直ちに解するといふことだ』とある。

(一)白英（本經上品）

和名　ひよどりじやうご
學名　Solanum lyratum, Thunb.
科名　なす科(茄科)

校正　別錄の鬼目を併せ入る。

釋名　**穀菜**(二)(別錄)　**白草**(別錄)　**白幕**(拾遺)　**排風**(同上)　子を**鬼目**と名ける。

時珍曰く、白英とはその花の色をいつたものだ。穀菜はその葉の文の形容、排風はその功用を意味し、鬼目はその子の形容である。別錄有名未用に鬼目を重出

(三)嶲州ハ隋ニ置ク、今ノ四川省西昌縣ソノ舊治ナリ。

(一)牧野曰フ、從來我邦ノ學者ハ白英ヲまるばのほろしニ充テテ居タガ是レハ誤リデアツタ、即チ其レハ下ノ如クひよどりじやうごトセネバナラヌ。又從來ひよどりじやうごヲ蜀羊泉トセシモ誤デ、是レハ其條下デ既ニ辯ジテ置イタ通リデア

ル。
(二)本經ノ誤。
(三)益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(四)大觀ニ癖ニ作ル。

してあるが、苗と子と同一でないとはいへ、實際は同一草だ。故に此に併記した。

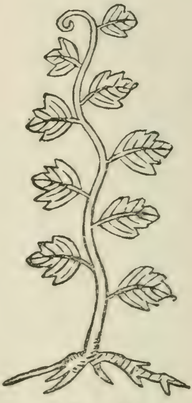
集解　別錄に曰く、白英は(三)益州の山谷に生ずる。春、葉を採り、夏、莖を採り、秋、花を採り、冬、根を採る。又曰く、鬼目、一名來甘。實は赤くして五味のやうなものだ。十月採收する。

弘景曰く、鬼目は一般人が白草子と呼ぶそのものだ。又曰く、白英は、方藥には一向に用ゐない。此に(四)斛菜花といふがある。水中に生じ、蒸して食へるものだが、それではない。この類に白草といふがあつて、葉を羹にする。甚だ勞を療するものだ。根や花は用ゐない。益州には苦菜といふがあつて、その土地の住民は專らこれを食ふが、體力を充實し、健康無病になるといふことだ。或はこの草のことをいふのではないかと思ふ。

恭曰く、白英とは鬼目草のことだ。蔓生で、葉は王瓜に似て少し長く、五椏があり、實は圓く、龍葵子のやうで、生は青く、熟すれば紫黑色になる。東部地方ではこれを白草といふ。陶氏の說明では白草を識つてはゐたらしいが、更に確めやうとはしなかつたやうだ。

藏器曰く、白英とは鬼目菜のことだ。蔓生で、三月に長く延びる。爾雅に『苻』と名け、郭璞は『葛に似て葉に毛があり、子は赤色で耳璫珠のやうだ』といつてある。子が黒いといふは誤だ。江東では、夏期にその莖、葉を取つて粥に煮て食ふ。極めて熱毒を解するものだ。

時珍曰く、これは俗に排風子と呼ぶもののことだ。正月苗が生え、色白く、食へるものだ。秋小さい白色の花を開き、子は龍葵子のやうで、



〔白英〕
——排風子——

熟すれば紫赤色になる。呉志に『孫皓の時、鬼目菜といふものがあつて棗樹に絡つて延びた。長さ一丈餘、葉の廣さ四寸、厚さ三分あつた。世人はこれを見て不思議がつた』とある。即ちこの草のことだ。また羊蹄草を一名鬼目といふ。嶺南にはまた水果といふものがあつて、これも鬼目と呼ばれてゐる。葉は楮に似て、子の大いさ鴨子ほどあり、七八月に熟して黄色になる。味は酸くして食へるものだ。これ等はいづれも此にいふ物と名稱は同一だが實物は異ふ。

根苗 [氣味] 【甘し、寒にして毒なし】

[主治] 【寒熱、(十)八疸、消渴。中を補し、氣を益す。久しく服すれば、身體を輕くし、天年を延べる】(本經) 【葉で作った羹、飲は甚だ勞を療ずる】(弘景) 【煩熱、風瘮(ふうしん)、丹毒、瘴瘧、寒熱、小兒の結熱。煮汁を飲む】(藏器)

鬼目 子である。[氣味] 【酸し、平にして毒なし】 [主治] 【目を明にする】(別錄)

[附方] 新一。【目赤、頭旋(づせん)】眼に幻花を見、顔面が腫れるは風熱の上攻である。排風子を焙じ、甘草を炙き、菊花を焙じて各一兩を末にし、二錢づつを就寢時に溫水で服す。(聖濟錄)

(一)蘿藦 (唐本草)

和名 ががいも
學名 Metaplexis japonica, Makino.
科名 ががいも科(蘿藦科)

[校正] 拾遺の斫合子を併せ入る。

[釋名] 雚 音は貫(クワン)である。 芄蘭(詩疏) 白環藤(拾遺) 實を 雀瓢

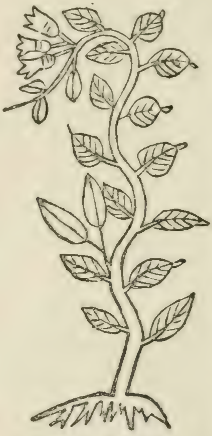
(十) 外臺秘要ニ八疸ノ目アリ、胃疸、心疸、腎疸、脾疸、肺疸、舌疸、肉疸、髓疸。

(一) 牧野曰フ、蘿藦ハ從來カラががいもニ充テ來ッタノハ正シイ說デアル、各地ノ方言多ク中ニごがみナドノ名ガアル。

と名ける。（陸機）　**斫合子**（拾遺）　**羊婆奶**（綱目）　**婆婆鍼線包**　藏器曰く、漢の高祖がこの草の子を兵士の金瘡に傅けたといふ。その傳說から斫合子と名けたのだ。

時珍曰く、白環の環は芄の字の訛だ。その實は、嫩い時は漿があり、裂けたときは瓢のやうだ。故に雀瓢、羊婆奶などの名稱がある。その中の子は一箇に長さ二寸ばかりの白絲のやうな線がある。それで俗に婆婆鍼線包、又は婆婆鍼袋兒などと呼ぶ。

集解　弘景曰く、蘿藦は藤になつて生え、摘めば白乳汁が出る。民家で多く種ゑてあるもので、葉は厚くて大きく、生でも食へ、また蒸し煮ても食へる。諺に『千里外の旅では蘿藦と枸杞を食ふな』といふ。それは枸杞葉と同じく精氣を補益し、陰道を强盛にするからいつたものだ。



〔蘿藦・斫合子〕
——婆婆鍼袋——

恭曰く、按ずるに、陸機の詩の疏に『蘿藦、一名芄蘭。幽州ではこれを雀瓢とい

ふ』とあるが、しかし、雀瓢とは女青の別名だ。蘿藦の葉は女青に似てゐるから、やはり雀瓢と名けたのであつて、女青は葉が蘿藦に似て二枚の葉が相對し、その子が瓢の形に似て大いさ棗ほどのものだから雀瓢と名けるのだ。根は白薇に似て、莖、葉は共に臭い。平澤に生ずる。別錄に『葉は嫩いときは蘿藦に似て正しく圓く、莖は太く、實は黒い』とある。

藏器曰く、蘿藦は東部地方では白環と呼ぶ。竹垣などに藤生するもので、折れば白汁が出る。一名雀瓢といふ。女青といふその物は結局白環とは別物だが、この二物はよく似てゐるので區別が付きかねる。又曰く、斫合子は藤になつて生え、竹垣などに蔓延し、秋、霜が降りる頃まであつて、(三)合子が柳絮のやうになる。一名雞腸、一名薫桑といふ。

時珍曰く、斫合子、卽ち蘿藦の子である。三月苗が生え、竹垣などに蔓延し、極めて繁殖し易く、根は白く軟く、葉は長くして後が太く前が尖り、根も、莖も、葉も、いづれも斷つて見ると構汁のやうな白乳が出る。六七月に小さく長い鈴の形のやうな紫白色の花を開き、結實は長さ二三寸、太さ馬兜鈴ほどあつて一方の端が尖

(三)大觀ニ合字ナシ之ヲ佳トス。

(三)指彄ハ手ブクロノ事和名ゆがけ、がいもノ葉脚ノ心臓狀チナスヲゆがけニ比興セルナリ。

り、殼は青く軟く、中に毛のやうな絲と橤とがあつて、降霜後に枯れて裂けると子が飛ぶ。その子は輕薄でやはり兜鈴の子のやうだ。商人はその絨を取り、綿に代へて座蒲團を作るが、甚だ輕く暖なものだ。詩に『芄蘭の支、童子觿を佩ぶ』とある。これは結を解く角錐のことで、この物の實が尖つてゐて、枝の間に垂れた有樣がその角錐に似てゐるといふことだ。韘は涉(セフ)と發音する。これは弓を張る(三)指彄のことで、この物の葉が後に彎曲してゐて、それに似てゐるといふことだ。この詩はその物の有樣に想を寄せた比興の詩體である。また一種の草があつて、莖、葉、花、いづれも蘿藦に似てゐるが、たゞ氣が臭く、根が紫色、結子は圓くして豆ほどの大いさで、生では青く、熟すれば赤い。その點が異ふ。これが蘇恭の所謂『女青は蘿藦に似てゐる』といひ、陳藏器の所謂『二物相似たり』といふその物だ。蘇恭の『根は白微に似て、子は瓢の形に似てゐる』といふは誤だ。陳氏の說に從ふべきである。これは藤生の女青であつて、蛇衘根の女青とは同名異物だ。互に比較して見るがよい。

子 葉も同じ。|氣味|【甘く辛し、溫にして毒なし】時珍曰く、甘く微し辛し。

【主治】【虛勞。精氣を補益し、陰道を强くする。葉を煮て食ふ。功力は子と同じ】(唐本)【子を擣いて金瘡に傅ければ膚を生じ、血を止める。葉を擣いて腫毒に傅ける】(藏器)【汁を取つて丹毒赤腫、及び蛇、蟲の毒に傅ければ直ちに消する。蜘蛛の咬傷で、頻りに治療しても癒えぬには、擣いて二三回封ずる。絲毒が爛れ化して膿となる】(時珍)

【附方】新二。【補益虛損】極めて房勞に益あり。蘿藦四兩、枸杞根皮、五味子、柏子仁、酸棗仁、乾地黃各三兩を末にし、一日三回、方寸匕づつを酒で服す。(千金方)【損傷血出】痛み忍び難きには、籬上の婆婆鍼袋兒を取つて水に擂つて服し、渣で瘡口を罨す。立ろに效がある。(袖珍)

(一)赤地利(唐本草)

和名　しやくちりそば(新稱)
學名　Fagopyrum cymosum, Meisn.
科名　たで科(蓼科)

【校正】拾遺の五毒草を併せ入る。

【釋名】赤薜荔(綱目)　五毒草(拾遺)　五蕺(拾遺)　蛇罔(拾遺)　山蕎麥(圖

(一)牧野曰フ、植物名實圖考、卷ノ二十二ニ圖ガアル。そば(蕎麥)屬ノ一種デ我邦ニハ無ク、支那ニハ廣ク分布スル草デアル。從來我邦ノ學者之レヲつるそば或

ハいしみがはニ充テシモ、一モ中ツテ居ナイ。

（二）華山ハ水部玉井水太華山ノ註參照。

（三）大觀ニ黒ニ作ル。

經）時珍曰く、いづれも意義が明でない。

【集解】恭曰く、所在の山谷にある。蔓生で、葉は蘿藦に似て、根は皮が赤黒く、肉が黄赤だ。二月、八月に根を採つて日光で乾す。

頌曰く、所在いづれにもあるが、今はただ（二）華山のものを上とする。春、夏苗が生え、蔓になつて草木の上に絡まり、莖は赤く、葉は青く、蕎麥の葉に似てゐる。七月白色の花を開き、やはり蕎麥のやうで、子は青い。根は菝葜のやうで、皮は（三）紫赤、肉は黄赤だ。八月根を採り、晒乾して取收める。



〔赤地利〕
――五毒草――

藏器曰く、五毒草は江東の平地に生ずる。花、葉はいづれも蕎麥のやうで、根は緊つて硬く、狗脊に似てゐる。また蛇茵ともいふが、同名異物だ。

時珍曰く、五毒草、卽ち赤地利である。今は一條に併記した。

根【修治】斅曰く、凡そこれを採取したならば、細かに剉み、藍の葉、竝に

根と共に生絹袋に入れて一伏時の間蒸し、藍を去つて晒して用ゐる。

【氣味】【苦し、平にして毒なし】藏器曰く、酸し、平なり。丹砂を伏す。

【主治】【赤白、冷熱の諸痢。血を斷ち、血を破る。赤白帶下。肌肉を生ず】(唐本)

【癰疽、惡瘡、毒腫、赤白遊疹、蟲、蠶、蛇、犬の咬傷に主效があり、いづれも醋で摩つて傅ける。莖、葉も擣いて傅ける。毒の腹に入る虞あるには煮汁を飲む】(藏器)

【發明】時珍曰く、唐の張文仲備急方の靑、赤、黃、白等の痢を治する鹿茸丸の方中に用ゐてあるに見ると、その功力の涼血、解毒の特長が推知される。

【附方】舊二。【小兒の熱瘡】身體、顏面の火で燒くやうに覺えるには、赤地利末をまぶす。【火(四)瘡の瘢を消す】赤地利末を油で調へて塗る。(聖惠)

(一)紫葛(唐本草)

和名　無し
學名　Ampelopsis ? sp.
科名　ぶだう科(葡萄科)

【集解】恭曰く、山谷の中に生じ、苗は葡萄に似て長さ一丈ばかり、根は紫色で太いものは徑二三寸ある。

(四)大觀ニ火下ニ燒字アリ。

(一)牧野曰フ、植物名實圖考、卷ノ二十二ニ圖說ガアルガ、我邦ニハ無キ品稱デアル。從來我邦ノ學者之レヲがねぶ、一名かもえび、一名えびづるニ充テ居レド

モ中ツテ居ナイ。又無論やまぶだうデモナイ。

(二) 雍州ハ隰草類菊ノ註ヲ見ヨ。

(三) 江寧府ハ山草類白鮮ノ註、台州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。

保昇曰く、所在いづれにもあり、現に(二)雍州に產する。葉は蘡薁に似て、根は皮も肉も紫色だ。三八月に根皮を採つて日光で乾す。

大明曰く、紫葛に二種ある。今此にいふ紫葛は藤生のものだ。



〔紫葛〕

頌曰く、今はただ(三)江寧府、及び台州だけに生ずる。春生えて冬枯れ、葡萄に似て、紫色だ。

根皮 〔氣味〕【甘く苦し、寒にして毒なし】大明曰く、苦くして滑し、冷である。燒灰は消石を制す。〔主治〕【癰腫惡瘡には、末に擣いて醋で和して封ずる】(恭)【癱緩、攣急、并に熱毒風に主效があり、小腸を通ずる】(大明)【肌を生じ、血を散ず】(時珍)

〔附方〕 舊二。【產後の煩渴】血氣が上沖するものだ。紫葛三兩、水二升を一升に煎じ、滓を去つて呷ふ。【金瘡、傷損】肌を生じ、血を破る。紫葛二兩を順流

水三盞で一盞半に煎じ、三回に分服する。酒で煎じるも妙である。（いづれも經（同）效方）

烏斂苺（唐本草）[一]

和名　やぶがらし
學名　Cissus japonica, Willd.
科名　ぶだう科（葡萄科）

［釋名］　五葉苺（弘景）　蘢草（同）　拔（爾雅）　龍葛（同）　赤葛（綱目）　五爪龍（同）　赤潑藤　時珍曰く、五枚の葉が白斂のやうだから烏斂といふので、俗に五爪龍と呼ぶ。江東では龍尾と呼び、また虎葛ともいふ。龍といひ、葛といふは、いづれも蔓の形狀からいつたもの、赤潑の潑と赤葛の葛と拔とは音が近いところから訛つたのだ。

［集解］　弘景曰く、五葉苺は、垣根や立て掛けてある物などに藤になつて生える。根を擣いて癰癤に傅ければ效がある。
恭曰く、平澤に蔓生し、葉は白斂に似てゐる。四月、五月に採る。
保昇曰く、莖の端に五葉があり、青白色の花を開く。所在にあるもので、夏期に採り、苗を用ゐる。

（一）牧野曰フ、一ニびんぼふかづらト稱スルモノデ、諸處ニ多キ宿根生蔓草デアル。其地下莖ヲ民間藥トスル。
（二）大觀ニ驗ニ作ル。

時珍曰く、掘り返した場所などに甚だ多い。その膝は柔で稜があり、一本の枝に一本の鬚があつて、すべて五葉が著き、葉は長くて光り、まばらな齒があり、表面は青く背面は淡い、七八月に青白色で簇つた苞を結び、花は黃色の四出で大いさ粟ほどのものだ。結實は龍葵子ほどの大いさで、生は青く熟すれば紫になり、內に細子がある。根は色白く、太いものは指ほど、長さは一二尺で、擣けば涎滑が多く出る。傅滋の醫學集成に『卽ち紫葛』といひ、楊起の簡便方に『卽ち老鴉眼睛草』といひ、斗門方に『卽ち何首烏』といつたのはいづれも誤だ。



〔烏蘞母〕
——五葉藤——

【氣味】【酸く苦し、寒にして毒なし】

【主治】【癰癤、瘡腫、虫咬。根を擣いて傅ける】(弘景)【風毒熱腫、遊丹。擣いて傅け、また汁を飲む】(恭)【血を涼し、毒を解し、小便を利す。酒に擂つて服すれ

ば癧腫を消するに神效がある】(時珍)

附方　新五。【小便尿血】五葉藤を陰乾して末にし、二錢づつを白湯で服す。(衛生易簡方)【喉痺腫痛】五爪龍草、車前草、馬蘭、菊各一握の擣汁を徐に嚥む。祖傳の方である。(醫學正傳)【項下の熱腫】俗に蝦蟇瘟と名ける。五葉藤を擣いて傅ける。(丹溪纂要)【一切の腫毒】發背、乳癰、便毒惡瘡の初期には、いづれも五葉藤、或はその根一握、生薑一塊を擣き爛らし、好き酒一盌を入れて汁を絞り、熱服して汗を取り、滓を傅ける。直ちに散る。また大蒜を薑の代りに用ゐてもよし。(壽域神方)【跌撲損傷】五爪龍の擣汁に童尿熱酒を和して服し、汗を取る。(簡便方)

(一)葎草(唐本草)

和名　かなむぐら
學名　Humulus japonicus, Sieb. et Zucc.
科名　くは科(桑科)

釋名　勒草(別錄)　葛勒蔓(蜀圖經)　來莓草(別本)　時珍曰く、この草は莖に細刺があつて、よく人の皮膚に著いて引き止めるから勒草と名けたのだ。それを訛つて葎草といひ、又訛つて來莓といつたもので、いづれも地方音である。別錄に

(一)牧野曰フ、彼ノ麥酒(ビール)ヘ苦味ト芳香トヲ與フル「ホップ」ト同屬ノ一種デアルガ、此レハ無用ノ一雜草ニ過ギナイ。一年生本デ盛ンニ繁茂スルモノデアル。

勒草とあるはこの草だ、故に此に併記した。

【集解】恭曰く、葎草は古い村落の道傍などに生える。葉は蓖麻(ひま)に似て小さく且つ薄く、蔓生で細刺がある。また葛葎蔓とも名ける。古方にはやはり時に用ゐてある。

保昇曰く、野原などに多くある。葉は大麻に似て、花は黄白色、子は大麻子のやうだ。俗に葛勒蔓と名ける。夏莖、葉を採り、曝乾して用ゐる。



〔葎草〕
—勒草—

別錄に曰く、勒草は山谷に生ずる。栝樓(くわつろう)のやうなものだ。

時珍曰く、二月苗が生え、莖に細刺があり、葉は節に對して生え、一枚の葉に五尖があり、微し蓖麻に似て細齒があり、八九月細かい紫色の簇(むらが)つた花を開き、結子の形狀は黃麻子のやうだ。

〔氣　味〕【甘く苦し、寒にして毒なし】

〔主　治〕【勒草は、瘀血に主效があり、精を止め、氣を益盛にする】(別錄)【葎草は、五淋に主效があり、小便を利し、水痢を止め、瘧を除く。虛熱で渇するには、煮汁、或は生の擣汁を服す】(恭)【生汁一合を服すれば、傷寒の汗後の虛熱を治す】(宗奭)【膏淋、久痢、疥癩を療ず】(頌)【三焦を潤ほし、五穀を消化し、五臟を益し、(二)九蟲を除き、溫疫を辟ける。蛇蠍の咬傷に傅ける】(時珍)

〔附　方〕　舊三、新六。【小便石淋】葛葎の根を掘出して挽き斷ち、盃をその穴の中に入れて承けて汁を取り、一升を服す。石が出るものだ。なほ出ぬときは再服する。(范汪方)【小便膏淋】生の葎草の擣汁二升、酢二合を和して頓服する。尿に白汁を下すものだ。(三)【尿血淋瀝】同上。【產婦の汗血】衣服が赤色に汚れるもの。方は上に同じ。【久痢から發つた疳】葛勒蔓末を管で肛門の中に吹入れる。數回に過ぎずして神效がある。【新、久の瘧疾】葛葎草一握——一名勒蔓——の兩端を取去り——秋、冬は乾いたものを用ゐる——恒山の末と等分を淡漿水二大盞に浸し、星、月の出た晴れた夜に一夜露し、五更に一盞に煎じて二回に分服する。痰を吐いて癒え

(二)九蟲ハ伏、蚘、白、肉、肺、胃、赤、弱、蟯ノ九種。

(三)大觀ニ此ニ獨行方ヲ引ク。

る。【全身の癩瘡】葎草一擔、水二石を一石に煮取つて全身を漬ける。三回に過ぎずして癒える。(いづれも韋宙獨行方)【(四)烏癩風瘡】葛葎草三秤を切つて洗ひ、益母草一秤を切り、水二石五斗で一石五斗に煮取り、滓を去つて瓮中に入れ、その中に入つて二時間浸り浴し、出てから密室中に坐り、またその暖湯で二時間浴し、出てから暖に臥して汗を取る。風に當つてはならぬ。かくて翌日もまた浴する。浴する時、忍び難く瘙痒を感じても決して搔いてはならぬ。少頃して瘙痒は鎮まるものだ。その後は癒えるまで三日隔てて一回づつ試みる。(聖濟錄)

(一)羊桃 (本經下品)

和名無し
學名未詳
科名未詳

【釋名】鬼桃(本經) 羊腸(本經) 萇楚(爾雅) 銚芅 音は姚弋(テウエキ)である。或は御弋と書く。細子 いづれも意義明瞭でない。

【集解】別錄に曰く、羊桃は山林、川谷、及び田野に生ずる。二月に採つて陰乾する。弘景曰く、山野に多くある。(三)如何にもよく家桃に似たものだ。また山桃

(四) 烏癩ハクロカッタイ、病名彙解ニソノ病狀ヲ說クコト詳ナリ。

(一) 牧野曰フ、羊桃ニ同名アツテ、かたばみ科ノ五斂子(Averrhoa Carambola L.)さるなし科ノ獮猴桃(Actinidia chinensis, Pl.)モ一ニ羊桃ト稱スルが、固ヨリ本條ノ羊桃トハ別デアル。植物名實圖考、卷ノ二十二ニ圖セル羊桃ノ三圖

でもない。花は甚だ赤く、子は小さく細くして苦く、食ふわけに行かぬ。詩に『隰に萇楚あり』とあるはこの物だ。方藥には一向用ゐない。

保昇曰く、平澤の中に生ずるもので、處處にある。苗は長くて弱く、樹になつては立てない。花と葉は桃に似てゐるが、子實は細かで棗の核ほどのものだ。今世人は細子と呼んでゐる。その根は牡丹に似たものだ。郭璞は『羊桃は、葉は桃に似て花は白色、子は小麥のやうでもあり、また桃の形に似てゐる』といつた。陸機の詩の疏には『葉は長くして狹く、花は紫赤色、その枝、莖は弱いもので、一尺餘あり、草の上に蔓を引く』とある。今世間ではこれで(三)汲灌を作るが、重くてよく沈むけれども楊柳のやうなわけに行かぬ。近頃は下根を取つて刀で切り、その皮を熱灰に入れて脫き取り、それで筆管を韜む。



〔羊　桃〕

時珍曰く、羊桃は莖の太さ指ほどあり、樹に似て弱く、蔓のやうになり、春長く

中、其二ハまめ科ノ品デ、是レ亦木條トハ關係ノナイ植物デアラウト思フ。又其一種ハ所屬不明ナ植物デアル。

(二)大觀ニ原文ノ勝似ヲ甚似ニ作ル。

(三)汲灌ハ釣瓶ナラン。

(四)大觀ニ鹽豉ニ作ル。

嫩條が延びて柔軟である。葉の大いさは掌ほどで、上は綠色下は白色で毛があり、形狀は苧麻に似て圓い。その枝條を水に浸すと涎滑がある。

莖　根　【氣　味】【苦し、寒にして毒あり】藏器曰く、甘し、毒なし。【主　治】【熛熱で身體が暴に赤色になるもの、小兒の熱、風水、積聚惡瘍を除く】(本經)【五臟、五水の大腹を去り、小便を利し、氣を益す。浴湯にするがよし】(別錄)【煮汁で風痒、及び諸瘡腫を洗へば極めて效がある】(恭)【根を酒に浸して服すれば風熱、羸弱、老衰を治す】(藏器)

【附　方】舊一、新三。【傷寒の變䘌】四支煩疼して物を食へず、多く睡るには、羊桃十斤を擣き熟して熱湯三斗に浸し、正午にその湯の中に入つて一炊時ほど坐る。三回に過ぎずして癒える。(千金)【傷寒の毒攻】手足の腫痛するには、桃羊の煮汁に少量の(四)鹽を入れて漬ける。(肘後)【水氣鼓脹】大小便の澁るには、羊桃根、桑白皮、木通、大戟を炙り、各半斤を剉み、水一斗で五升に煮取り、その汁を熬つて稀餳のやうにし、空心に一匙づつを茶で服す。二便が通じてから粥を食つて補ふ。(聖惠方)【蜘蛛の咬毒】羊桃葉を擣いて傅ければ立ろに癒える。(備急方)

(一)絡石　（本經上品）

和名　くいいたび(幼本)
學名　Ficus stipulacea, Thunb. (Juvenile)
科名　くは科(桑科)

【釋名】　石鯪（本經）　吳普は鯪石と書いた。石龍藤（別錄）　懸石（同）　耐冬（恭）　雲花（普）　雲英（普）　雲丹（普）　石血（恭）　雲珠（別錄）　また略石、領石、明石、石嗟と名ける。

恭曰く、俗に耐冬と名ける。この草は石、木に包み絡つて生えるものだから絡石と名けたものである。山南地方ではこれを石血といひ、産後の血結を療ずるに大いに良しとしてある。

【集解】　別錄に曰く、絡石は太山の川谷、或は石山の陰、或は高山の巖石の上に生じ、或は世間人家の近くにも生ずる。五月に採收する。

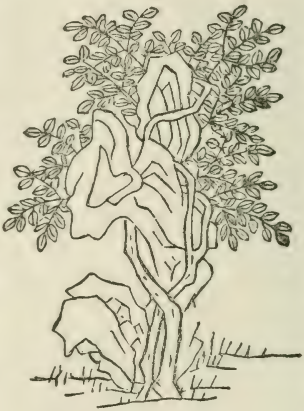
弘景曰く、この藥は如何なるものか判らない。方藥に用ゐるものもない。或はこれは石の類だといふものもあるが、既に世間人家の近くに生ずるとあるのだから、石斛(二)の如く石に關係する名稱で、石ではないのである。

(一)牧野曰フ、從來我邦ノ學者本品ヲけふちくたう科ノていかかづらニ充ツレドモ、其レハ誤デアツテ、ていかかづらハ上ノ白花藤デアラネバナラヌ。絡石ハ多分わせおほいたびノ幼木(小葉ヲ有スル)ノ場合ノ者デアラウト思フ。即チ植物名實圖考巻ノ二十二ニ其圖ガアル。我邦デモ通常此ノ如キ狀態ノ場合ヲ見ルコトガ多イ。

(二)大觀ニ斛下ニ等字アリ。

恭曰く、この草は陰濕の處に生え、冬、夏共に常に青く、實は黑くして圓く、その莖は蔓延して樹や石の上に絡まるものである。石の間に在るものは、葉が細く厚くして圓く短い。樹に絡まるものは、葉が大きくて薄い。人家でもこれを種ゑて屋敷の風致を飾る。

保昇曰く、所在にあるものだ。木、石の間に生え、冬を凌いで凋まず、葉は細橘葉に似てゐる。莖の節が著いた部分から根鬚が生えて石の傍側に包み絡まる。花は白く、子は黑い。七月莖、葉を採つて日光で乾す。



〔絡石〕

藏器曰く、石に在るものが良し。木に在るものは木の性に隨つて功があり、薜荔と相似てゐる。この外石血、地錦等十餘種の藤があるが、いづれもこの草の類のもので、大抵皆風血に主效があり、腰脚を暖め、白髮を黑く變じ、老衰を防ぐものである。蘇恭が『石血は絡石だ』といつたのは甚だ誤つてゐる。絡石は葉が圓く正青

色のもの、石血は葉が一端が尖つて赤色のものだ。

時珍曰く、絡石は石に貼り付いて生え、その蔓は折れば白汁が出る。その葉は指頭よりも小さく、厚く實し、木强だ。表面は青く背面は淡く、濇つて光らない。尖葉のものと圓葉のものとの二種あるが、功用は同じものだ。蓋し一種類のものである。蘇恭の所説は誤つてゐるのではなく、ただ詳説を缺いただけのことである。

莖　葉　【修　治】　雷曰く、凡そこれを採取したならば、粗布で揩つて毛(二)子を去り、熟甘草水で一伏時の間浸し、切つて晒して用ゐる。

【氣　味】　【苦し、溫にして毒なし】　別錄に曰く、微寒なり。普曰く、神農は、苦し、小溫なりといひ、雷公は、苦し、平にして毒なしといひ、扁鵲、桐君は、甘し、毒なしといふ。當之曰く、大寒なり。藥中の君である。採收に一定の時期はない。時珍曰く、味甘く微し酸し。苦くはない。之才曰く、杜仲、牡丹が使となる。鐵落を惡み、貝母、菖蒲を畏れ、(三)殷孽の毒を殺す。

【主　治】　【風熱、死肌、癰瘍で口乾き、舌焦するもの。癰腫が消せずして喉舌が腫閉し、水漿の下らぬもの】(本經)【大驚が腹に入りたるものに、邪氣を除き、腎を

(二)大觀ニ子チ了ニ作ル。

(三)殷孽ハ土殷孽。

養ふ。(四)腰髖痛に主效があり、筋骨を堅くし、關節を利す。久しく服すれば身を輕くし、目を明にし、潤澤にして顏色を好くし、老衰せず、天年を延べ、神明に通ずる」(別錄)【一切の風に主效があり、白髮を黑く變じ、老衰の傾向のものによし】(藏器)【蝮蛇の瘡毒で心悶するには、汁を服し、竝に洗ふ。刀斧の傷瘡にこれを傅ければ立ろに瘥える】(恭)

發明 時珍曰く、絡石は、性質が久しきに耐へ、氣味が平和なものであつて、神農はこれを上品に列し、李當之は稱して藥中の君といつた。その功力は筋骨、關節、風熱、癰腫に主效があり、白髮を黑く變じ、老衰に耐へる。當今の醫家にこの藥を知り且つ用ゐるもののないのは、あまりに手近なもの、安價なものであるために忽せにしてゐるのではあるまいか。これを服するには酒に浸して服するがよし。仁存堂方に『小便の白濁は心、腎に故障があるためで、或は酒色が原因となり、遂に甚しき病狀に至るを土淫といふ。蓋し虛熱があつて腎が不足する、つまり土邪が水を干すのである。史の記載に「夏には土が燥して水が濁り、冬には土が堅いから水が淸い」といふはこの關係と同一意味である。この場合、醫者は往往急劇に補の手當

(四)髖ハ髀上ノ骨、髀ハモモチ云フ。

を施すが、それではその疾が反(かへ)つて甚しくなる。その場合はただ博金散を服す。水火が順調に、源が潔(きよ)く、流が清くなる。その方は、絡石、人參、茯苓(ぶくりやう)各二兩、龍骨を煆いて一兩を末にし、一日二回、二錢づつを空心に米飲で服す』といつてある。

附方　舊二、新二。【小便白濁】方は前項にある。【喉痺腫塞】喘息して通ぜず、須臾にして絶息せんとするものに神驗の方である。絡石草一兩を水一升で一大盞に煎じ、少しづつ呷(す)ふ。少頃して通ずる。(外臺祕要)【癰疽の(五)焮痛】痛を止めるには、靈寶散——鬼繫腰、卽ち竹垣の陰の濕地、石岸の間に生えた絡石のことだ。生のものがよく、木に絡つたものは無用である。その藤は、柔かで細く、二枚の三角の形の葉が相對して生える。その莖、葉一兩を火に當てぬやうにして洗ひ晒し、皂莢刺(さうけふし)一兩を新瓦で黃色に炒り、甘草節半兩、大瓜蔞一箇の仁を取つて香しく炒り、乳香、沒藥(もつやく)各三錢、これを二錢づつ水一盞、酒半盞で一盞になるまで慢火で煎じて溫服する。(外科精要)

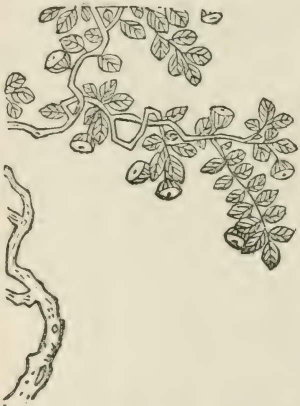
(五)焮ハ炙ナリトアリ、燒クガゴトクイタムコト。

(一)木蓮（拾遺）

和名　くひいたび（わせおほいたび）
學名　Ficus stipulacea, Thunb.
（=F. Hanceana, Maxim.）
科名　くは科（桑科）

釋名　**薜荔**（拾遺）　**木饅頭**（綱目）　**鬼饅頭**　時珍曰く、木蓮といひ饅頭といふはその實の形の形容である。薜荔は壁利（ヘキリ）と發音する。意味は明でない。山海經には、草荔と書いてある。

集解　藏器曰く、薜荔は樹木に緣まり絡まり、三五十年の古さもあつて、漸次に太くなり、枝葉が繁茂する。葉の長さは二三寸で厚く、石韋のやうなもので、蓮房に似た子がなり、打破れば白汁が出て、それが久しく經つと漆のやうになる。中に細子があつて、一年に一回熟する。子も藥に入れるものだ。採收



〔木蓮――薜荔〕

(一)牧野曰フ、おほいたびニ二種アツテ、一ハおほいたび(Ficus pumila, Thunb.)ト云ヒ、其壺果球形デ食フニ堪ヘザルモノ。一ハくひいたび、一名わせおほいたびト云ヒ、卽チ本條ノ木蓮デ其ノ壺果ハ倒卵形ヲ呈シ食用トナル。此兩者ノ葉ハ共ニ相酷似シテ容易ニ識別シ難キモノデアル。又兩者共幼本ノ葉ハ小形デ質稍薄イ。コンナ場合ヲ多分絡石ト謂ツタデハナイカト思フ。

に一定の時期はない。

頌曰く、薜荔と絡石とは極めてよく似たもので、莖、葉が粗大で藤のやうな形狀だが、木蓮は絡石より更に大きく、その實が蓮房のやうなものだ。

時珍曰く、木蓮は樹木や垣根などに延びて生え、四季共に凋まず、葉は厚くして堅く強く、絡石より大きい。花が無くて實が生り、その實の大いさは盃ほどあつて、微し(二)蓮蓬に似てゐるが稍長く、生の無花果のやうなものだ。六七月は實の內部が空で紅いが、八月後になると充滿し、細子があつて大いさは稗子ほどあり、一箇の子に一本の鬚があり、その味は微し濇い。その殼は虛して輕く、烏や鳥や兒童なども皆食ふ。

葉　【氣味】【酸し、平にして毒なし】

【主治】【背癰には、乾末を服すれば下利して癒える】(頌)【(三)風血に主效があり、腰脚を暖め、白髮を黑く變じ、老衰を防ぐ】(器)【血淋の痛濇を治するには、この藤の葉一握、甘草を炙いて一分を日每に煎じて服す】(時珍)

【發明】愼微曰く、圖經に『薜荔は背瘡を治す』とあるが、近頃(四)宜興縣のあ

(二) 蓮蓬殼ハ蓮房ノ一名。

(三) 風血、詳ナラズ。貧血又ハ產後ノ神經衰弱ノ類カ。

(四) 宜興縣、今ハ江蘇省蘇常道ニ屬ス。

（注）擧人ハ進士ニ同ジ。支那ニテ古ヘハ擧人ハ無試驗ニテ推擧セラレタル人ナレドモ、後世ハ試驗ノ上採用スルコトニナレリ。

る老（注）擧人が、年齢七十餘で發背を患ひ、村中に醫師も藥種商もなかつたので、急に薜荔の葉を取つて研り爛らし、その汁に蜜を和して數升を飲み、滓を傅け、その後他の藥を傅帖したので遂に癒えたのを實見した。その功は實に薜荔に在つたものだ。これで觀ると、圖經の說の妄言でなかつたことが判る。

藤汁 〔主治〕【白癜風、癧瘍風、惡瘡、疥癬に塗る】（大明）

木蓮 〔氣味〕【甘し、平にして濇る、毒なし】時珍曰く、嶺南地方では、これを食へば瘴を發すといふ。〔主治〕【陽道を壯する力が最も勝れてゐる】（頌）【精を固くし、腫を消し、毒を散じ、血を止め、乳を下し、久痢、腸痔、心痛、陰癩を治す】（時珍）

〔附方〕新八。

【驚悸遺精】木饅頭を炒り、白牽牛と等分を末にし、二錢づつを米飲で調へて服す。（乾坤祕韞）【陰癩囊腫】木蓮、即ち木饅頭を燒いて研り、酒で一錢を服す。○又ある方では、木饅頭子、小茴香等分を末にし、空心に二錢づつを酒で服して效を取る。（集簡）【酒痢、腸風】黑散子——風が臟に入り、或は食毒の積熱で大便に鮮血を下し、疼痛し、肛門の脫出するもの、或は久患の酒痢を治す。木饅

頭を燒いて性を存し、椶櫚皮を燒いて性を存し、烏梅を核を去り、粉草を炙いて等分を末にし、二錢づつを水一盞で煎じて服す。（惠民和劑局方）【腸風下血】大便が更に澁るには、木饅頭を燒き、枳殼を炒つて等分を末にし、二錢づつを槐花酒で服す。（楊倓家藏方）【大腸脫下】木饅頭を皮、子ともに切つて炒り、茯苓・猪苓と等分を末にし、毎服二錢を米飲で服す。また夢精をも治す。これを鎖陽丹と名ける。（普濟方）【一切の癰疽】初期には、發生部位の何れを問はず、木蓮四十九箇を用ゐ、毛を揩り去つて研細し、酒で解いて溫服する。功力は忍冬草と相上下するものである。（陳自明外科精要）【乳汁の出ぬもの】木蓮二個、猪前蹄一個を煮爛して食ひ、幷に汁を飲み盡す。一日で乳が出る。子を產まぬ婦人でもこれを食へば乳が出る。（集簡方）

附錄

（六）**地錦**（拾遺）藏器曰く、味甘し、溫にして毒なし。老血を破り、產後の血結、婦人の瘦損して飲食不能となり、腹中に塊のあるもの、尿が淋瀝して盡きぬもの、赤白帶下、天行心悶を治す。いづれも煎じて服し、また酒に浸して服す。淮南地方の林下に生ずるもので、葉は鴨の掌の如く、藤蔓は地に著き、節の處に根があり、また樹木や石に寄り絡まり、冬季にも枯れぬ。山間の住民は產後にこれを

（六）牧野曰フ、從來此地錦ヲ其葉ノ紅葉スルぶだう科ノつた(Parthenocissus tricuspidata, Pl.)ニ充テテ居レドモ中ラヌ。是レ或ハうこぎ科きづた Hedera rhombea Sieb. et Zucc.乎。

服用する。一名を地噤（ちきん）といふ。

時珍曰く、これとは別に地錦草といふがある。全然別物で、それは草部の六に掲げてある。

(一)扶芳藤（拾遺）

和名　つるまさき(?)
學名　Evonymus radicans, Sieb. (?)
科名　にしきぎ科(衞矛科)(?)

釋名　滂藤

集解　藏器曰く、(二)吳郡に生ずる。藤苗は小さい時は絡石のやうなもので、樹木に蔓延する。山間の住民は楓樹に絡つたものを取つて用ゐる。やはり桑上の寄生を取ると同じやうな意味だ。墓地に生えたものは採ることを忌む。隋朝の高僧稠（こう）禪師（ぜんじ）が、青飲を作つて煬帝（やうだい）に進獻し、渴を止めたといふはこの草である。

莖葉

(三)**氣味**　【苦し、小溫にして毒なし】**主治**　【一切の血、一切の氣、一切の冷。大いに風血腰脚に主效があり、あらゆる病を去る。久しく服すれば天年を延べ、白髮を黑く變じ、老衰せぬ。細かに剉（き）んで酒に浸して飲む】（藏器）

植物名實圖考卷ノ十九ニハきづたニ百脚蜈蚣ノ名ガアルガ、地錦ノ名ハ其處ニハ見エヌ。

(一)牧野曰フ、從來蘭山ノ如キ我邦ノ學者ガ充テシ如ク是レ蓋シつるまさきナラン乎。

(二)吳郡ハ土部卅錫ノ吳ノ註參照。

(三)木村(康)曰ク、強壯藥トシテ（唐杜仲）ニ代用スル和杜仲ハまさきノ樹皮ヲ用ウルモノナリ。藥用植物、城岡守八—藥誌、大、一五、(五三一)三八五。

(一)常春藤（拾遺）

和名　つた
學名　Parthenocissus tricuspidata, Pl.
科名　ぶだう科（葡萄科）

［釋名］ **土鼓藤**（拾遺）**龍鱗薜荔**（日華）藏器曰く、兒童がその藤を取つて地を打つと鼓の聲がする。故に土鼓と名けたのだ。李邕（りよう）が改めて常春藤といつたのである。

［集解］ 藏器曰く、林や藪の中に生えて蔓になり、草や木の上に絡まる。その葉は端が尖り、結子は正圓で、熟すれば珠のやうで碧色だ。

［氣味］ 【莖、葉は苦し、子は甘し、溫にして毒なし】

［主治］ 【風血の羸老（るゐらう）・腹内の諸冷で血閉し、腰脚の强ばるもの。白髪を黑く變ず。煮て服し、酒に浸して服す、いづれもよし】（藏器）【凡そ一切の癰疽、腫毒の初期には、莖、葉一握を取つて研り、その汁に酒を和して溫服する。惡物を利下し、その根本を去る】（時珍）　記載は外科精要にある。

［附方］ 新二。

【丁瘡の黑凹】 髪で(二)緪劄し、尖葉薜荔の搗汁に蜜を和して一

(一) 牧野曰フ、常春藤ハ集解ノ文ニ據レバのぶだうデハナイカトノ疑ガ生ゼヌデモナイ。從來我邦ノ學者ハ之レヲきづた（うこぎ科）ニ充テテ居タ。私ハ今姑ク植物名實圖考、卷ノ二十二ニ從フテ之レヲつた（ぶだう科）ト定メテ置ク。（多少ノ疑ヲ抱キツツ）

(二) 緪劄、緪 ノ文字

盞を服し、外部には葱、蜜を搗いて四圍に傅ける。（聖惠方）【衄血の止まぬもの】龍鱗薜荔を水に研つて飲む。（聖濟錄）

(一)千歲蘽（別錄上品）

和名　未詳
學名　無し
科名　ぶだう科（葡萄科）（？）

【校正】別錄有名未用の虆根を併せ入る。

【釋名】蘽蕪（別錄）　苣瓜（拾遺）　藏器曰く、この藤は冬だけ凋み、葉の大なるものは無遠慮に廣がる。故に千歲蘽といつたのだ。



〔千歲蘽〕

【集解】別錄に曰く、千歲蘽は太山の(二)山谷に生ずる。

弘景曰く、藤生で葡萄のやうなものだ。葉は(三)鬼桃に似て木の上に蔓延し、汁は白い。今では一般人も方藥にもす

字書ニ見當ラズ。音義不明。或ハ紐ハ纒ノ訛カ、纒ハ纏ト通ズ、クヽリツケルモノノ意味ナリ。

(一)牧野曰フ、千歲蘽ハ其本物ハ吾人ニハ分ラヌ。我邦デ昔用キシ甘葛煎ハ千歲蘽カラ採ツタモノトセラレテ居タガ、當時強テ此千歲蘽ニ充テタモノハ其レハつたデアツタ事嚢ニ白井博士ノ考證ガアツテ、始メテ其委曲ガ世ニ明ニナツタノハ誠ニ喜バシイ事デアル。

(二)大觀ニ山ヲ川ニ作ル。

(三)羊桃、一名鬼桃。前ニ見ユ。

べて用ゐることを識らぬが、仙經では數〻これを處し用ゐる。

藏器曰く、蔓は葛に似て葉の下が白く、その子は赤く、條の中に白汁がある。陸機の草木疏に『一名苣瓜といふ。連蔓して生え、蔓は白く、子は赤く、食へるが酢くて美味でない。(四)幽州地方ではこれを推藟といふ』とあり、毛詩に『葛藟』とあつて、その注に『葛に似たる草なり』とある。蘇恭が、これを『蘡薁だ』といつたのは甚しい妄言だ。

頌曰く、處處にある。藤生のもので、木の上に蔓延し、葉は葡萄のやうで小さい。四月その莖を摘むと味の甘い白汁が出る。五月に花を開き、七月に實を結び、八月に子を採る。子は青黑で微し赤い。冬だけ葉が凋む。春、夏の間に汁を取つて用ゐる。陶氏、陳氏の說が當を得てゐる。

宗奭曰く、唐の開元の末年、唐朝に仕へぬ先朝以來の隱民を探し調べたときのこと、隱民のうちに姜撫といふ年齡百歲に近いと稱する者があつた。朝廷でそれを集賢院に召出して種種問ひ訊ねると、撫は『常春藤といふを服すれば、白髮をもとの黑色に還し、長生することも至難でない。この藤は(五)太湖山、終南山に生えてゐ

(四)幽州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

(五)太湖山、太平御

覽ニ『建安記ニ曰ク太湖山ハ浦城縣ノ西南一百里ニ在リ、一名望湖山トイフ』トアリ。浦城縣ハ今ノ福建省建寧府ソノ舊治ナリ。終南山ハ山草類王孫ノ註ヲ見ヨ。

(三) 牢山ハ山東省靑島ノ北方ニ在リ。

る』といふことを物語つた。それを聽いた玄宗皇帝は、使を出して夥しくその藤を採收させ、特に老臣にも下賜し、又、各國に勅を發して各自にその藤を採るべきことを命じ、撫をば銀青光祿大夫に拔擢して冲和先生なる號を賜はつた。撫は又『終南山には旱藕（かんぐう）といふものもあつて、これを服餌すれば天年を延べる。形狀は葛粉に類するものだ』といふことを述べたので、帝はその物を取寄せて湯餅に作り、それを大臣に賜つた。その時、右驍騎將軍の甘守誠が『拜領した常春藤といふは千歲藥であつた。旱藕といふは牡蒙であつた。方家では久しく用ゐられない。撫がそれを付け込んで故ら（ことさら）名稱を易へ、いかにも神聖らしくしただけだ』と斷言した。また諸處の人民は朝命に依つてその藤を酒に漬けて飮んだが、そのために暴に（にはか）死亡するものも多かつたので、遂にその朝命をば取消された。かかる次第で、撫は心の內に深く慙ぢ（は）懼れ（おそ）、採藥のために(三)牢山へ往くといふ口實を設けて逃亡し、行方不明になつて了つたといふことである。茲にこの事蹟を記載して、一般人をして疑惑なからしむるための參考に資する。

時珍曰く、按ずるに、千歲藥にはもとより常春なる名稱はない。ただ陳藏器本草

の土鼓藤の條下に『李邕が常春藤と名けた。酒に浸して服すれば羸弱、老衰に效があり、白髮を黑く變ずる』といつてあるだけだ。して見ると、撫が當時用ゐたといふものは土鼓藤だ。その葉は千歲蘽と同じくない。或は名稱が同じかつたものであらう。

正誤　果部の蘡薁の條に記載してある。

氣味　【甘し、平にして毒なし】　**主治**　【五臟を補し、氣を益し、筋骨を續ぎ、肌肉を長じ、諸痺を去る。久しく服すれば身體を輕くし、飢ゑず、老衰を防ぎ、神明に通ずる】(別錄)

蘽根　**主治**　【筋を緩にして痛まなくする】(別錄)

(一)忍冬　(別錄上品)

和名　すひかづら
學名　Lonicera japonica, Thunb.
科名　すひかづら科(忍冬科)

釋名　**金銀藤**(綱目)　**鴛鴦藤**(綱目)　**鷺鷥藤**(綱目)　**老翁鬚**(綱目)　**左纏藤**(綱目)　**金釵股**(綱目)　**通靈草**(土宿)　**蜜桶藤**　弘景曰く、處處にある。藤生のも

(一)牧野曰フ、普通ニ山野ニ多キ藤本デ其蔓ハ右卷キトナツテ居ル。小兒ガ能ク其花蜜ヲ吸フ、故ニすひばなノ名モアル。

ので、冬を凌いで凋まぬところから忍冬と名けたのである。

時珍曰く、この草は、花に瓣が長く鬚を垂れ、黄白相半し、藤が左纏になつてゐるところから、金銀、鴛鴦以下の諸種の名稱がある。金釵股とはその功力の貴重なことを表したものだ。土宿眞君は『蜜桶藤は陰草である。それから取つた汁は能く硫を伏し、汞を制す。故に通靈する名稱がある』といつてある。

集解　別錄に曰く、忍冬は十二月に採つて陰乾する。

恭曰く、藤生で、草や木の上に覆ひ繞り、莖、苗は紫赤色で、舊い蔓には薄い皮膜があり、その嫩い蔓には毛がある。葉は胡豆に似てやはり上下に毛がある。花は白く、蘂が紫だ。現に世間では、或は絡石をこの物としてゐるが、誤りである。


〔忍冬・金銀花〕

時珍曰く、忍冬は處によつてあるものだ。樹に附いて蔓が延び、莖は紫色

で節に對ひ合つて葉が生え、その葉は薜荔に似て青く、濇毛がある。三四月に花を開き、その花の長さは一寸ばかりで、一箇の蒂に二箇の花が咲き、二蕊の一は大きく一は小さく、半邊のやうな狀態で蘂が長く、花の初め開いたときは蘂、蕊共に白色だが、二三日經てばその色が黄に變じ、それが新舊相交つて黄白相映ずるものだから金銀花と呼ぶのである。氣は甚だ芳しい。四月花を採つて陰乾する。藤、葉を時期に拘はらず採つて陰乾する。

(二)【氣味】【甘し、溫にして毒なし】權曰く、辛し。藏器曰く、小寒なり。溫といふは誤である。

(三)【主治】【寒熱身腫。久しく服すれば身體を輕くし、天年を長くし、壽命を益す】(別錄)【腹の脹滿を治し、能く氣を止め、(四)澼を下す】(甄權)【熱毒の血痢、水痢には濃く煎じて服す】(藏器)【(五)飛尸、遁尸、風尸、沈尸、尸疰、鬼擊、一切の風濕氣、及び諸腫毒、癰疽、疥癬、楊梅諸惡瘡を治し、熱を散じ、毒を解す】(時珍)

【發明】弘景曰く、忍冬の煮汁で釀した酒を飲めば虛を補し、風を療ずる。この物は天年を延べ、壽命を益すものだ。常に採つて服するがよし。仙經には用ゐる

(二)木村(康)曰ク、すひかづらノ葉ノ主成分ハタンニン質ナリ。一般分析ニヨレバ含窒素物ハ一八・七四%タンニン質八・〇六%灰分七・六六%乾燥物質ノ可溶成分四三%水分七・八%ナリ。

(三)木村(康)曰ク、忍冬ハ利尿ノ效アリ。民間藥トシテ支那ニ於テハ忍冬花ハ諸ノ腫毒ヲ下ストイヒ、浸劑トシテ或ハ

忍冬茶トシテ用ヰ(曾廣氏)又忍冬酒ヲ製ス、又忍冬煎ヲ腫瘍ノ洗滌料トス。

(四)瀉ハ痢病。

(五)五尸ハ皆鬼祟ノ氣身體ニ流注シ人ヲシテ寒熱淋瀝精神錯雜積年累月、漸ク頓滯ニ至リ以テ死ニ至ル、死後復傍人ニ易シ乃至門ヲ滅ス。五尸ノ解ハ下條附方五種ノ尸注ノ條ニ見ユ。

(六)紅内消ハ何首烏ノ一名。

ことが稀である。凡そ世間では得易い草は多くは用ゐようといふ考にならず、得難いものほど求めたがり、兎角遠いものを貴重なもの、近いものを賤しいものと考へたがる。凡夫(ぼんぷ)の淺間(あさま)しさといふものだ。

時珍曰く、忍冬は莖、葉、花の功用は皆同じである。往昔の時代には、この草を風を治し、脹を除き、痢を解し、尸を逐ふの要藥と稱揚してあるが、後世では一向その對症に用ゐることをば知らない。後世ではこの草を腫を消し、毒を散じ、瘡を治するの要藥と稱してゐるのだが、往昔の時代には一向それには言及しなかつた。これは、思ふに古代と現代とではすべての關係、條件に限なき變化があつて同じくないのだから、飽まで同一轍を以ては論じられない。按ずるに、陳自明の外科精要に『忍冬酒は、癰疽發背の初發に必ず服すべきもので、その效甚だ著しく、(六)紅内消に勝るものだ。内翰洪邁、内翰沈括の諸方に甚だ詳細に記載してあつて、瘍醫丹陽の僧、江西の僧鑒淸、金陵の王琪、王尉の子駿、海州の秀才李純臣等が癰疽發背を療ずるに實驗して奇效を認(みと)めたといふが如き、その記載の方は、いづれもこの物を用ゐたものだ。故に張相公は「甚だつまらぬ物の中に、異常なる效力があらうと

は、なかなか思ひ當らないことである」といつたが、正にこれ等の類のことだ』とある。

附方　舊一、新十七。

【忍冬酒】癰疽發背を治す。眉に發すると、頤に發すると、頭なると、項なると、背なると、腰なると、脇なると、乳なると、手足なると、何れの部位に發したるを問はず、いづれにも奇效がある。田舍の村落や偏僻な土地、場末の貧民窟、極めて貧しい者等で、藥の材料の得難い處に住むか、或は求むる資力のない場合には、ただ眞面目にこの藥を服するがよし。服してその疽が破れたならば、神異膏をそれに貼る。その效果は甚だ不可思議なものだ。忍冬の藤生のもの一把を取り、葉を沙盆に入れて研爛らし、生餅子と酒少量を入れて適當に薄く解き、疽の周圍に塗つて口の部分だけを殘して氣を洩す。藤の部分は五兩だけを木槌で搥き碎き――鐵に觸れてはならぬ――甘草節を生で一兩と共に沙瓶に入れ、水二盌で文武の慢火で一盌に煎じ取り、無灰酒の好きもの一大盌を入れて再び煎じ、十數沸して滓を去り、それを三服に分けて一晝夜間に飲み盡す。病勢の重いものは一日に二劑を服す。それで大小腸が通利すれば藥力がその病に透るのである。沈內翰は『も

し生のものがないときは乾いたものを用ゐるのだが、藥力はやはり生のもののやうには速效が擧らない』といつてある。（陳自明外科精要）【忍冬圓】消渴を治し、癒えて後癰疽を發するを豫防する。先づこれを服するがよし。忍冬草の根、莖、花、葉いづれを用ゐてもよし。多少に拘らず瓶に入れて好き無灰酒に浸し、糠火で一夜煨（や）いて取出して晒乾し、甘草少量を入れ、碾（す）つて細末にし、先に藥を浸した酒で作つた麪糊で梧子大の丸にし、毎服五十丸から漸次百丸までを湯、酒任意のもので服す。この藥は特に癰疽を治するばかりではなく、渴を止めるに非常によいものだ。（外科精要）【五痔諸瘻】方は上に同じ。【一切の腫毒】潰（つぶ）れたもの、まだ潰れぬもの、或は初起の發熱とを問はず、金銀花、俗にいふ甜藤（てんとう）の花を莖、葉と共に採り、その自然汁半盌を八分に煎じて服し、渣を外部に傅ける。腐敗の毒が内部に入つたものには、氣氣を散じ、血を和す。その功力は特に擢（ぬき）で勝れてゐる。（萬表積善堂方）【丁瘡、便毒】方は上に同じ。【喉痺、（七）乳蛾】方は上に同じ。【腫に敷いて毒を拔く】金銀藤の大なるものを燒いて性を存し、葉を焙じ乾し末にして各三錢、大黃を焙じ末にして四錢を用ゐ、凡そ腫毒の初發には、水、酒でそれを調へて周圍に搽り、中心の

（七）乳蛾ハ喉痺ノ口内一側ノミ腫ルルモノチ云フ。

部分を殘して氣を洩す。(楊誠經驗方)【癰疽の托裏せるもの】癰疽發背、腸癰、奶癰、無名腫毒の焮痛を治す。右の病で、實熱の狀態が傷寒のやうなるには、老人、幼兒、虛、實を問はずこれを服す。まだ十分癰とならぬものは內消し、已に成つたものは潰れる。忍冬葉、黃芪各五兩、當歸一兩、甘草八錢を細末にし、二錢づつを酒一盞半で一盞に煎じ、病の上、下に隨ひ、一日二回服し、渣を傅ける。(和劑局方)【惡瘡の癒えぬもの】左纏藤一把を搗き爛らし、雄黃五分、水二升を入れて瓦礶で煎じ、紙で七重に封じて一箇の孔を穿つて氣を出し、瘡をその孔に向けて薰ずる。六時間それを繼續すれば瘡から夥しく黃水を出す。その後は肌を生ずる藥を用ゐて效を取る。(選奇方)【輕粉毒の癰】方は上に同じ。【瘡が久しく漏となつたもの】忍冬草を酒に浸して日毎に常に飲む。(戴原禮要訣)【熱毒血痢】忍冬藤を濃く煎じて飲む。(聖惠方)【五種の尸注】飛尸といふは、皮膚を遊動して臟腑まで洞穿し、毎に刺痛を發し、變動常なきものである。遁尸といふは、骨に附き、肉に入り、血脈を攻め鑿ち、死體を見、哀哭の聲を聞く毎に發るものである。風尸といふは、手足の末端に不規則に躍るやうに絕間なく痛が傳はつて、一定の部位を判斷し得ず、發する毎に恍惚とし

て意識の明瞭を缺き、風雪に時に必ず發るものである。沈尸といふは、臟腑に纒結し、心脇に迫り及び、發する毎に絞り切るやうに痛み、寒冷に遇へば發るものである。尸注といふは、全身が沈重となり、精神が錯雜し、昏昏として廢人のやうになり、季節の變り目毎に劇烈に發るものである。いづれも身體內部の尸鬼が外部の邪と呼應し誘引して發する病である。忍冬の莖、葉を剉み、數斛を煮て濃汁を取り、更に濃く煎じ固め、一日二三回、毎服雞子大の量を溫酒で溶して服す。(肘後方)【鬼擊に遭ふて身體の靑色になりたるもの】痛むものである。金銀花一兩を水で煎じて飲む。(李樓怪病奇方)【脚氣の痛むもの】筋骨が引痛するには、鷺鷥藤、卽ち金銀花を末にし、二錢づつを熱酒で調へて服す。(衛生易簡方)【野菌の中毒】急に鴛鴦草を採つて食ふ。卽ち今の忍冬草である。(洪邁夷堅志)【口舌の瘡】梗の赤い蜜桶藤、(八)高脚地銅盤、(九)馬蹄香等分を酒を用ゐて擣き、その汁を雞の羽に蘸けて瘡の上に刷き、涎を取出せば癒える。(普濟方)【忍冬膏】諸般の腫痛、金刃傷瘡、惡瘡を治す。金銀藤四兩、吸鐵石三錢、香油一斤を熬り枯らして滓を去り、黃丹八兩を入れ、水に滴らしても散ぜぬまでに熬り、普通の膏藥のやうに攤して用ゐる。(乾坤秘韞)

(八) 高脚地銅盤詳ナラズ。

(九) 馬蹄香ハ杜衡ノ一名。

(一)甘藤（宋嘉祐）

和名無し
學名未詳
科名未詳

校正 木部より此に移し入る。

釋名 **甜藤**（嘉祐） **感藤** 時珍曰く、甘の字と感の字は音が近いから書いたものである。又、甜藤、甘露藤などいふがあり、いづれもこの類のものだから幷記する。忍冬も一名甜藤といふが、この草とは同じくない。

集解 藏器曰く、江南の山谷に生ずる。藤の太さは雞卵ほどのもので、形狀は木防已のやうだ。切つて一端を吹けば他の一端へ吹き貫ける。その汁は蜜のやうに甘美なものだ。

汁 **氣味**【甘し、平にして毒なし】 **主治**【中を調へ、氣を益し、血氣を通じ、諸熱を解し、渴を止める】（藏器）【煩悶を除き、五臟を利し、腎の釣氣を治す。その葉は研つて蛇蟲の咬傷に傅ける】（大明）【熱痢、及び膝腫を解す】（時珍）

附錄 (二)**甘露藤**（嘉祐） 藏器曰く、嶺南に生ずる。藤の蔓は箸ほどのもので、

(一)牧野曰フ、甘藤ハ如何ナル植物カ未詳デアル。

(二)牧野曰フ、甘露藤、幷ニ甜藤ハ共ニ

人がこれを服すれば肥えるところから一名を肥藤といふ。味甘し、溫にして毒なし。風、血、氣の諸病に主效があり、久しく服すれば、中を調へ、溫補し、人體を肥健ならしめ、顏色を好くする。

大明曰く、消渴を止め、五臟を潤し、腹の內部の諸冷を除く。

甜藤（拾遺）藏器曰く、江南の山林下に生ずる。蔓は葛のやうなもので、味甘し、寒にして毒なし。熱煩に主效があり、毒を解し、中氣を調へ、人體を肥健にする。搗汁で米粉を和し(三)糗にして食へば、甜美にして洩を止める。又剝馬の血毒が肉に入つたもの、及び狂犬、牛、馬の熱黃を治し、蛇咬瘡に傅ける。また葉が小さく、尖つて長く、氣が辛く臭いものがある。これは搗いて小兒の腹中(四)閃癖に傅ける。

(一)含水藤（海藥）

和名無し
學名未詳
科名未詳

【校正】木部より移して此に入れ、拾遺の大瓠藤を併せ入る。

【釋名】**大瓠藤**

(一)牧野曰ク、含水藤ハ未詳ノ植物デアル。さるなし科ノまたたび（Actinidia polygama, Miq.）ニ含水藤ノ名ガアルトノ事ナレドモ、本書ノ含水藤ハまたたび未詳ノ植物デアル。

(三)糗ハ乾糧ノコトホシイヒノ類。

(四)閃癖ハ痞滿。

デハナイ。
(二) 嶺南、嶺北ハ五嶺ノ南北、金部金ノ嶺南ノ註參照。
(三) 朱厓、儋耳ハ今ノ廣東省瓊州島ノ地ナリ。

【集解】珣曰く、按ずるに、劉欣期の交州記に『含水藤は(二)嶺南、及び嶺北の海邊の山谷に生ずる。形狀は葛のやう、葉は枸杞に似たものだ。多くは路傍に在るところから、行路者が水に乏しい處を通るとき此の藤を喫ふ。故にかやうな名で呼ばれるのだ』とある。

藏器曰く、安南、(三)朱厓、儋耳の水の無い地方では、いづれも大瓠藤を種ゑてその汁を取つて用ゐる。その藤の形狀は瓠のやうなもので、切斷すると水が出る。それを飮むと清美なものだ。

時珍曰く、顧微の廣州記に『水藤は、地を去る一丈で斷つとまた更に根が生え、地水がそれに依つて絕えない。山地を行くに口が渴するとき切つてその汁を飮む』とある。陳氏の所謂大瓠藤とは蓋しこのものである。

藤中の水　【氣味】【甘し、平にして毒なし】藏器曰く、寒なり。【主治】【煩渴、心躁を解す。瘴癘、丹石の發動にもこれを服するがよし】(李珣)【渴を止め、五臟を潤ほし、濕痺、天行時氣を去り、小便を利す。その葉を搗いて中の水を爛瘡、皮皸に傅ける】(藏器)【人體に損痛あるを治す。髮を沐すれば長くなる】(時珍)廣州記。

【附録】(四)鼠藤(拾遺)　珣曰く、顧微の廣州記に『鼠が好んでこの藤を食ふところから名けたもので、その鼠が咬んだ處を人が取つて藥にする』とある。

藏器曰く、南海の海濱の山谷に生じ、藤になつて樹に絡まるもので、莖、葉は滑かで潔く、枸杞に似たもので、花は白く、節があり心が虛だ。苗の端に毛がある。彼の地では甘蔗のやうにこれを食ふ。味甘し、温にして毒なし。男子の五勞、七傷、陰痿。陽道を益し、小便頻數で白濁するもの、腰脚の痛冷に主效があり、風氣を除き、筋骨を壯にし、衰老を補し、顏色を好くする。濃く煮て服し、微し汗を取るのである。また酒に浸しても服す。(五)性温であつて、やや悶えさすが苦しむほどではない。

(一)天仙藤(宋圖經)

和名無し
學名未詳
科名未詳

【集解】頌曰く。江淮、及び浙東の山中に生ずる。春苗蔓が生えて藤になり、葉は葛の葉に似て圓く小さく、白毛があり、四季共に凋まず、根には鬚がある。夏

(四)牧野曰フ、鼠藤ハ未詳ノ植物デアル。

(五)大觀ニ性ノ下ニ極字アリ。又温ノ下ニ服訖ノ二字アリ。

(一)牧野曰フ、天仙藤ハ未詳ノ植物デアル。

季に根と苗を採取する。南方地方で多くこれを用ゐる。

氣味　【苦し、溫にして毒なし】

主治　【(二)風勞を解し、麻黃と共に用ゐれば傷寒の汗を發し、大黃と共に用ゐれば胎氣を墮す】(蘇頌)【氣を流し、血を活し、心腹痛を治す】(時珍)



〔天仙藤〕

附方　新六。【疝氣の痛み】天仙藤一兩を好き酒一盌で半盌に煮取つて服す。神效がある。(孫天仁集效方)【痰(三)注臂痛】天仙藤、白朮、羌活(きやうくわつ)、白芷梢各三錢、片子薑黃六錢、(四)半夏を製して五錢、これを五錢づつ薑五片と水で煎じて服し、千金五套丸を間服する。(楊仁齋直指方)【妊娠水腫】始めは兩足から起つて漸次に喘悶するやうになり、水病のやうで趾から水を出すものを子氣といふ。これはその婦人に元來風氣があるか、或は衝任に(五)血風があるためで、單なる水病として妄(みだり)に湯藥を投じてはならぬ。主として天仙藤散を用ゐるがよし。天仙藤を洗つて微し炒り、香附子を炒り、陳皮、甘草、烏藥と等分を末にし、毎服三錢を、水一大盞、薑三片、木瓜

(二)風勞、千金方ニ出ヅ。

(三)注ハ邪風ガ人身ノ內部ニ留停シテ害ヲナスヲ云フ。

(四)半夏ヲ製スル法ハ、普通ハ薑汁ヲ用ウ。半夏ノ條ヲ見ヨ。

(五)血風ハ風邪ノ爲ニ血ガ上逆スル病。

三片、紫蘇葉三枚と七分に煎じ、一日三回、空心に服す。小便が利し、氣脈が通じ、腫は漸次に消く。しかし多量にこれを服してはならぬ。これは淮南の名醫陳景初の祕方であつて、李伯時の家から傳へたものである。(陳自明婦人良方)【産後の腹痛】兒枕痛といふものである。天仙藤五兩を炒り焦して末にし、炒つた生薑の汁と童尿を少しづつ和した酒で調へて服す。(經驗婦人方)【一切の血氣】腹痛するには、前記の方を温酒で調へて服す。【肺熱鼻瘡】桐油に黄連末を入れ、天仙藤で焼き熱した油を傅ける。(摘玄方)

(一)紫金藤(宋圖經)

和名無し
學名未詳
科名未詳

釋名 山甘草


〔紫金藤〕
――福州――

集解 頌曰く、福州の山中に生ずる。春初に叢生し、葉は青色で冬になると凋み落ちる。その藤は枯

(一)牧野曰フ、紫金藤ハ未詳ノ植物デアル。

條に似たものだ。皮を採つて晒し乾す。

【氣味】缺　【主治】【男子の腎氣】(蘇頌)【損傷の瘀血を消す。搗いて惡瘡、腫毒に傅ける】(時珍)

【附方】　新二。　【紫金藤丸】腎臟を補し、丹田を暖め、陽道を興し、小便を減じ、精髓を塡し、顏色の移らふを駐め、肌肉を潤ほし、元氣が虛して顏面が黎黑になり、口が乾き、舌が濇り、夢想し、虛驚し、耳鳴り、目に淚が出、腰、胯が沈重し、あらゆる節が酸疼し、項筋が緊急し、背胛が勞倦し、陰汗し、盜汗するもの、及び婦人の子宮久冷、月經不順で、或は多く或は少きもの、赤白帶下等を治す。いづれもこれを服するがよし。紫金藤、巴戟天を心を去つて三兩、吳茱萸、高良薑、肉桂、青鹽各二兩を末にし、酒糊で梧子大の丸にし、一日三回、二十丸づつを溫酒で服す。(和劑方)　【死胎の下らぬもの】紫金藤、葵根各七錢、土牛膝三兩、土當歸四錢、肉桂二錢、麝香三分を末にし、米糊で梧子大の丸にして硃砂を衣にかけ、五十丸づつを乳香湯で服す。極めて效驗がある。(葛靜觀方)

〔一〕南藤（宋開寶）

和名　なんとうごせう（新稱）
學名　Piper aurantiacum, Wall.
科名　こせう科（胡椒科）

【校正】木部より移して此に入れ、別錄有名未用の丁公寄、圖經の石南藤を併せ入る。

【釋名】石南藤（圖經）　丁公藤（開寶）　丁公寄（別錄）　丁父（別錄）　風藤（志）

志曰く、南の樹に依り纏ふて生えるから南藤と呼ぶ。藏器曰く、丁公寄とは丁公藤のことであつて、始め丁公なる人がこれを用ゐて效があつたといふところからこの名を呼ばれるやうになつたのである。



〔南藤〕

【集解】別錄に曰く、丁公寄は石間に生えて木の上に蔓延する。葉は細く、枝は大く、莖は赤く、莖は拇指の太さほど、色は〔二〕礦黃のやうで汁がある。七

〔一〕牧野曰フ、南藤ハ胡椒屬ノ植物デアル。同科ノふうとうかづら（Piper Futokadsura, Sieb.）ハ此南藤ノ一名ナル風藤カラ來タモノデアルガ、然シ固ヨリ其品デハナイ。植物名實圖考、卷ノ二十ニ南藤ノ寫生圖ガアルガ其所屬ハ胡椒屬ノモノノヤウデアル。Piper aurantiacum, Wall. ニ石南藤ノ名ガアルトノ事デアルカラ此學名ノモノガ蓋シ南藤デアルト思フ。

〔二〕礦黃ハ石黃、即チ雌黃。

月七日に採る。

頌曰く、南藤とは丁公藤のことである。(三)南山の山谷に生ずるもので、今は(四)泉州、榮州にもある。生えると南の木に依り掛り、莖は馬鞭(はべん)ほどで節があり、紫褐色だ。葉は杏葉のやうで尖つてゐる。採收に一定の時期はない。又曰く、(五)天台の石南藤は四季共に凋まない。土地の住民は葉を採つて腰痛の治療に用ゐる。

時珍曰く、今は江南、湖南の諸大山にある。藤は細く圓く、膩があつて紫綠色だ。一節に一枚の葉がある。葉は深綠色で杏葉に似てゐるが、微し短く厚い。その莖は樹に貼り付いた處に小さい紫の瘤疣(りうゆう)があり、中に小さい孔がある。四季共に凋まない。莖、葉共に臭くして極めて辣(から)いが、白花蛇はその葉を食ふ。

氣味　【辛し、溫にして毒なし】別錄に曰く、甘し。

主治　【金瘡の痛み。天年を延べる】(別錄)【風血に主效があり、衰老を補し、陽を起し、腰脚を強くし、痺を除き、白髮を黑く變じ、冷氣を逐ひ、風邪を排す。煮汁を服す。冬季には酒に浸して服す】(藏器)【煮汁を服すれば上氣欬嗽を治す】(時珍)

發明　志曰く、按ずるに、南史に『解叔謙は鴈門の人で、母の病氣の時、夜

(三)南山、卽チ修南山。山草類王孫ノ註參照。
(四)泉州ハ石部鹵石類食鹽ノ註、榮州ハ芳草類石香葇ノ註ヲ見ヨ。
(五)天台ハ芳草類芎藭ノ註ヲ見ヨ。

禱つてゐると、空中に「丁公藤を求めて治療すれば瘥える」といふ言葉が聞えた。そこで醫に訊ね、また本草を調べたが、丁公藤といふ藥はない。ところが各地を搜して(六)宜都の山中へ往つたとき、一老翁が木を伐るのを見てゐると、その老翁がある藤を指して「丁公藤といふはこのもので、風を療するものだ」といふ。叔謙はそれを聽き、泣いて拜してその藤を請ひ受けた。その時、その老翁が酒に漬ける方法まで敎へてくれたので、叔謙が感激して押し戴くと、件の老翁の姿は早くも見えなかつた。母はそれを服して病が癒えた』とある。

時珍曰く、近頃、俗間で諸風を治療するに南藤を用ゐるので、諸藥を和して熬膏し、南藤膏と稱して賣つてゐる。白花蛇が好んでその葉を食ふものだけに、諸風を治する力が速なもののやうである。

附錄 (七)烈節（宋圖經） 頌曰く、榮州に生ずる。多くは、林や竹藪の中にあるもので、春蔓が生え、苗、莖、葉共に丁公藤に似てゐるが纖細なもので、花、實がない。九月莖を採つて曝乾する。味辛し、溫にして毒なし。肢節の風冷で筋脈の急痛するものに主效がある。湯にして浴するが佳し。

(六)宜都ハ山草類巴戟天ノ註ヲ見ヨ。

(七)牧野曰フ、烈節ハ未詳ノ植物デアル。

時珍曰く、楊倓の家藏經驗方に烈節酒といふがあり、歴節風痛を治す。烈節、松節、牛膝、熟地黄、當歸各一兩を粗い末にして絹袋に入れ、無灰酒二百盞に三日間浸し、一盞づつに生酒一盞を入れて溫服する。從弟武東叔は年齢二十餘でこの痛を患ひ、忍び難く痛んだが、(九)涪城の馬東之がこの方で治療して平癒した。

(一)清風藤（宋圖經）

和名無し
學名未詳
科名未詳

【釋名】 **青藤**（綱目） **尋風藤**（綱目）

【集解】 頌曰く、台州の天台山中に生ずる。その苗は木上に蔓延して四季共に青い。土地の住民は莖を採つて用ゐる。

【氣味】 缺 【主治】 【風疾】（蘇頌） 【風濕歴節(二)流注、(三)鶴膝、麻痺、瘙痒、損傷、瘡腫を治するに、酒藥の中に入れて用ゐる】（時珍）

【附方】 新二。 【風濕痺痛】 青藤根三兩、防已一兩を㕮咀し、酒一瓶に入れて煮て飲む。（普濟方） 【一切の諸風】 青藤膏——二三月に採つた(四)太平荻港の邊に產する

(九) 涪城ハ今ノ四川省涪陵縣ノ地、涪州城ノ謂ナリ。

(一) 牧野曰フ、清風藤ハ植物名實圖考、巻ノ十九ニ其寫生圖ガアルガ、其所屬ハ未詳デアル。我邦ノ學者之レヲ以テあをかづら科ノあをかづら (Sabia japonica, Maxim.) ニ充テテ居レドモ、其レハ中ッテ居ナイカラ私ハ之レニ從ハヌ。

(二) 流注ハ寒膿腫。

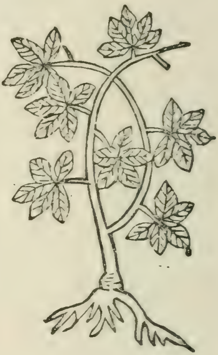
(三) 鶴膝ハ關節炎。

(四) 太平荻港、明ノ

太平府ハ即チ今ノ安徽省當塗縣ニ治ス。荻港ハモトソノ治下ニ屬ス。即チ今ノ繁昌縣ノ西五十支里ニ在リ。

(一)牧野曰フ、百稜藤ハ未詳ノ植物デアル。

青藤を、多少に拘らず釜に入れ、微火で七晝夜熬つて膏になつたとき甆器に取り收め、これを使用せんとするときは、豫め三五枚の櫛を用意して置き、患者の虛、實を量つて酒で一茶匙を服し、服し畢つてから患者の體上を掌で一拍ち拍つ。その後全身が痒くなり、手の付けやうがないほどになるから、その時急に先に用意した櫛で梳くのである。かくて痒を止めやうとする時は冷水一口を飲む。風病は解して全く癒えるものだ。その後は數日間風に當らぬが良し。(集簡方)



〔清風藤〕

(一)百稜藤(宋圖經)

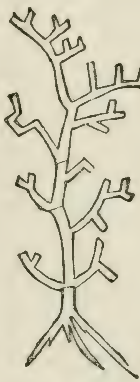
和名　無し
學名　未詳
科名　未詳

【釋名】 百靈藤(綱目)

【集解】 頌曰く、台州の山中に生ずる。春苗が生え、木の上に蔓延し、花、葉

がない。冬皮を採つて藥に入れる。その地の住民が用ゐてゐる。

【氣味】缺　【主治】【盜汗】(蘇頌)【一切の風痛、(二)風瘡を治す。五斤を剉み、水三斗で五升に煮取つた汁を熬膏し、一日三回、酒で一匙づつを服す】(時珍)



〔百稜藤〕
—天台—

【附方】新三。【頭風の腦痛】百靈藤十斤を水一石で三斗に煎じ、その汁に糯米三斗を入れて飯にし、冷えるを待つて神麯の炒末九兩を拌ぜ、共に甕に入れて普通の方法に依つて酒に醸し、三五日經つて更に糯米を炊き冷してそれに投じ、熟して澄清するを待つて一小盞づつ溫めて飲む。飲んで後全身發汗して效を擧げる。(聖惠方)【一切の(三)風痺】病の久、近に拘らず、百靈藤五斤を水三斗で一斗に煎じ、濾した汁を再び三升までに煎じ、牛膝、附子、仙靈脾、赤箭、何首烏、乳香、鹿角膠各二兩を末にして入れて共に煎じ、別に白蜜五合を入れて餳のやうに熬つて瓷瓶に取收め、一日二回、一匙づつを溫酒で服す。毒物と滑する物を忌む。(聖惠方)【大風瘡疾】百靈藤四兩を水一斗で三升に煮て

(二) 風瘡ハカザホロシ。

(三) 風痺トハ氣血凝滯、手足拘攣スルヲ云フ。

滓を去り、粳米四合を入れて粥に煮、密室中で浴してからそれを食ひ、寢具を被て横臥し汗を取る。發汗後皮膚が麩片のやうに浮き起るものである。隔日に一回、五六十日間繼續すれば、後には漸次に癒えて毛髮が生える。(聖惠方)

(一)省藤(拾遺)

和名 とう
學名 Calamus sp.
科名 しゆろ科(棕櫚科)

【校正】 木部より此に移し入る。

【釋名】 **赤藤**(綱目) **紅藤**(綱目)

【集解】 藏器曰く、南方の深山に生ずる。皮は赤く、太さ指ほどあつて、物を縛り得る。片片に自から解けるものである。

【氣味】 【苦し、平にして毒なし】 【主治】 【蚘蟲には煮汁を服し、齒痛には打碎いて含む。粥を煮て狗に食はすれば瘑を去る】(藏器) 【諸風を治し、五淋を通じ、蟲を殺す】(時珍)

【發明】 時珍曰く、赤藤は善く蟲を殺し、小便を利するものであつて、洪邁の

(一)牧野曰フ、省藤ハとう屬(Calamus)ノ何レノ種ヲ指シタルモノカ判然シナイカラ其種名ヲ指定スルコトガ出來ヌ。支那ニハ凡ソ五種ノとうヲ産スル。其中ノ一種 C. Margaritae Hance. ハ我臺灣ニモ産シ、我邦今日ノ學者ハ之レヲとうトナシテ居ルガ、本書ノモノト同品カ否カ全ク不明デアル。此臺灣品ニハ黄藤ノ名ガアルガ、本書ノ支那産品ニハ釋名ニアル如ク赤藤、紅藤ノ名ガアル。

夷堅志に『趙子仙は寸白蟲病に苦み、醫師に酒を禁じられたが、性來好きであつたところから、邵武の天王寺に寓居した時のある日、夜半に醉つて歸り、口が甚だしく渇するので、廡に在つた水甕に美しく月影がさしてゐるのを見て、續けざまに幾盃か飮んだ。するとその味は飴のやうに甘かつた。ところが翌曉になると坐席に溢れるほど夥しく蟲が出て、心腹が頓に寛やぎを感じ、幾年かの長い疾は遂にそれで全癒した。人人は甚だその奇異な事實に驚いて、その夜飮んだ水を調べて見ると、それは寺の下僕が草履を作るために紅藤の根を浸して置いた水であつた』といふことが書いてある。

附方　新一。【五淋の濇痛】赤藤——卽ち草鞋を作るものである——と白茯苓、苧麻根等分を末にし、一錢づつを百沸湯で服す。神驗がある。(究原方)

(一)紫藤（宋開寶）

和名　しなふぢ
學名　Wistaria sinensis, Sweet.
科名　まめ科

校正　木部より此に移し入る。

(一)牧野曰フ、紫藤ハしなふぢ(支那ふぢ)デアル。我日本ノふぢト能ク似テ居ルガ全ク別種ニ屬スル。ソシテ此しなふぢハ我邦ニハ産シナ

【集解】　藏器曰く、心から重重に皮があつて、その皮が樹に著いてゐるものである。四月に美しき紫色の花を開く。長安地方では(二)庭の飾にやはりこの藤を植ゑる。江東では招豆藤と呼ぶ。その子は角になり、角の中の仁を香しく熬つて酒に入れて置けばその酒は腐敗せぬ。腐敗した酒の中へ入れても元の正しい酒になる。その花を採み碎いて酒、醋の白く腐壞したものを拭ひ取る。

【氣味】　【甘し、微温にして小毒あり】　【主治】　【煎じて糖のやうにして服すれば(三)水瘖病を下す】（藏器）

(一)落鴈木（海藥）

和名無し
學名未詳
科名未詳

【校正】　木部より此に移し入る。

【釋名】　珣曰く、藤蘿の高さが一丈餘あつて、鴈が通る時皆これに引懸るといひ、或は鴈が啣んで(三)代州の鴈門まで運び、そこで生えたから右の名稱があるのだともいふ。

イ。我邦ノふぢチ従來ノ學者ガ紫藤ニ充テシハ精考チ缺イテ居ル。私ハ先キニ之レチしなふぢト定メテオイタ。此しなふぢハ餘リ我邦ヘハ來テ居ナイガ、西洋ヘハ早ク渡ツテ居ル。
(二)大觀ニ庭ノ下ニ池ノ字アリ。
(三)瘖ハ心病チ云フ。

(一)牧野曰フ、未詳ノ植物デアル。
(三)代州ハ石部石麪ノ註、鴈門ハ代赭石ノ註チ見ヨ。

【集解】○珣曰く、按ずるに、徐表の南州記に『落鴈木(らくがんぼく)は南海に生じ、山野の中に蔓生する。四(三)邊が刀で削つたやうなものである。代州、鴈門にもあり、蜀中、雅州にもある』とある。

○頌曰く、(四)雅州に出るものは、苗が蔓になつて大木に纒ひ著き、苗、葉の形狀、色澤は大體茶に似たもので、花、實はない。



〔落鴈木〕
—雅州—

彼の地では四月に苗を採つて藥用に入れる。

莖葉【氣味】【甘し、平、溫にして毒なし】【主治】【風痛、傷折、脚氣腫、腹滿虛脹には(五)枌木皮と共に煮た汁で洗ふ。立ろに效がある。又、婦人の陰瘡、浮(六)泡には、椿木皮と共に煮た汁で洗ふ】(李珣)【產後の血氣痛、幷に折傷內損の諸疾には、煮汁を服す】(蘇頌)

【附錄】(七)**折傷木**(唐本草)○恭曰く、(八)資州の山谷に生ずる。藤は樹木の上に絡(から)まり、葉は莽草(まうさう)の葉に似て光りがあつて厚い。八月、九月に莖を採つて日光で乾

(三)大觀ニ邊ヲ面ニ作ル。
(四)雅州ハ水部甘露ノ註ヲ見ヨ。
(五)枌木ハ楡ノ白キモノあきにれ歟。
(六)泡、大觀ニ疱ニ作ル。
(七)牧野曰フ、折傷木、無枝王木、風延莓共ニ未詳ノ植物デ

アル。
（八）資州、石部石硫黄ノ註ヲ見ヨ。
（九）血悶ハ産後ノ眩運。
（一〇）發强、詳ナラズ。搐搦ノコトカ。
（一一）三消ハ消脾、消中、消腎ナドヲイフ、素問ニ云、胃府虚、食一斗不能充飢、腎臓渇、飲百杯不能止渇、及房勞不稱心意、此爲三消。

す。味甘く鹹し、平にして毒なし。傷折、筋骨疼痛、血を散じ、血を補し、産後の(九)血悶に主效がある。痛を止めるには、酒、水各半で煮た濃汁を飲む。

毎始王木（唐本草） 恭曰く、資州に生ずる。藤は樹木の上に絡り、葉は蘿摩葉に似てゐる。二月、八月莖を採つて陰乾する。味苦し、平にして毒なし。筋骨の傷折跌蹎に主效があり、肌を生じ、血を破り、痛を止める。酒、水各半で煮た濃汁を飲む。

風延苺（拾遺） 藏器曰く、南海の山野の中に生ずるもので、他の地にはない。蔓は草、木の上に絡まり、葉の細いものである。蜀都賦に『風衍は衡皐に蔓延す』とあるはこの物だ。味苦し、寒にして毒なし。小兒の發熱、(一〇)發强、驚癇寒熱、熱淋に主效があり、小便を利し、煩を解し、目を明にする。いづれも煮て服す。

珣曰く、(一一)三消、五淋、痰を下し、小兒の赤白毒痢、蛇毒瘴、溪毒、一切の瘡腫に主效がある。いづれも煎じて服するがよし。

(一)千里及（拾遺）

和名　たいきんぎく
學名　Senecio scandens, Ham.
科名　きく（菊科）

〔校正〕圖經の千里光を併せ入る。

〔集解〕藏器曰く、千里及は路傍や垣根などに藤生する。葉は細くして厚い。宣、湖の地方にある。



〔千里及〕
——千里光——

頌曰く、(二)千里急は天台の山中に生ずる。春苗が生え、秋花を開く。彼の地の住民は花、葉を採つて服藥に入れる。又、(三)筠州に千里光といふがある。淺い山や路旁に生え、葉は菊に似て長く、背面に毛があり、枝、幹は圓くして青い。春苗が生え、秋黄色の花を開き、實は結ばない。莖、葉を採つて眼藥に入れ、黄花演と呼んでゐる。蓋し同一種類の物である。

〔氣味〕【苦し、平にして小毒あり】頌曰く、苦く甘し、寒にして毒なし。

(一)牧野曰フ、植物名實圖考、卷ノ二十ニ據テ之レヲたいきんぎく（堆金菊ノ意）ト定メタ。

(二)千里急ハ圖經本草、本經外草ノ中ニアリ。

(三)筠州ハ山草類仙茅ノ註ヲ見ヨ。

【主治】【天下疫氣、結黄、瘴瘧、蠱毒には、煮汁を服して吐下せしめる。また搗いて蛇、犬の咬傷に傅ける】(藏器)【甘草と共に煮た汁を飲めば熱を退け、目を明にする。他の多くの藥には入れない】(蘇頌)【小青と共に煎じて服すれば、赤痢腹痛を治す】(時珍)

【附方】新一。【爛弦風眼】千里光草を竹の皮で包み、煨熟して汁を捻り絞り、目の中に滴し入れる。(經驗良方)

(一)藤黄(海藥)

和名　しわう
學名　Garcinia Morella, Desv.
科名　おとぎりさう科(金絲桃科)

【校正】木部より比に移し入る。

【釋名】樹を海藤と名ける。珣曰く、按ずるに、郭義恭の廣志に『(二)岳、鄂等の諸州の山崖に出る樹に海藤と名くるがある。花の蘂が石の上に散り落ちるを彼地の者は採り收めて沙黄と呼んでゐる。樹から採つたものは輕妙なもので、それは臘黄と呼ぶ。今世間では訛つて銅黄といつてゐるが、銅と藤とは音の謬りだ。この

(一)牧野曰フ、藤黄ハ元來蔓生植物デハナクテ一ノ常綠小喬木デアル「シヤム」并ニ「カムボヂア」ノ原産デ、其葉ハ對生シ全邊デ厚ク綠色ヲ呈スル。花ニハ雌雄アリテ株ヲ異ニシテ開キ、雄花ハ小枝上ニ數個相集リ、雌花ハ多クハ獨在スル。果實ハ多肉ナ核果デ徑約ソ一寸五六分許、

物を採るには石涙を採ると異らぬもので、畫家や(三)丹竈家が時にこれを用ゐる。

時珍曰く、當今の畫家が用ゐる藤黄は、みな一旦煎煉を經て作つたもので、舐めると麻痺を覺える。按ずるに、周達觀の眞臘記に『この國に畫黄がある。それは樹の脂であつて、蕃民は刀で樹の枝を切り付け、そこから滴るものを翌年になつて取り收めるのだ』とある。郭氏の說とは少し異つてゐるやうだ。果して同一種のものか否かは判然せぬ。



〔藤黄〕

(四)氣味　【酸く澁し、毒あり】

主治　【蚛牙、蛀齒に點ければ落ちる】(李珣)

黄熟シ食後ノ果トシテ賞味セラルル。此樹ヲ傷ケテ採リタル「ゴム」ヲ固メタモノガ顏料ノしわうデ、所謂 Gamboge デアル。尚同屬中ノ他種ヨリモ之レガ採レルトノ事デアル。

(二)岳ハ岳州、隰草類連翹ノ註、鄂ハ鄂州、石部曾青ノ註ヲ見ヨ。

(三)丹竈家ハ錬丹家ノコト。

(四)木村(康)曰ク、藤黄(Gutti)ハ後印度殊ニシヤム、カンボヂア及ビメコン河ノ三角洲ニ產スル藤黄科ノ植物 (Garcinia Morella ヨリ採集スルゴム樹脂ナリ。英米等ノ局方ニ於テハ G. Hanburyi ヲ採用ス。(成分)Gutti ハ大約七〇%ノガムボジア酸、又藤黄黄色素、二五%ノゴム質、五%ノ水、一%ノ灰分ヲ含ム。(應用)瀉下藥トシテ用ウル事アリ、一日量〇・〇三―〇・一三瓦。工業上ニ於テハ黄色ノ假漆又黄色ノ顏料(ガンボージ)トシテ用ウ。(生藥學、英局方、米局方)

附錄諸藤 十九種

地龍藤（拾遺） 藏器曰く、(二)天目山に生ずる。樹に絡つて龍のやうに蟠るところから名けたものだ。(三)吳地方にもあるが少し異ふ。味苦し、毒なし。風血羸老、腹內・腰脚の諸冷で食事が順調ならず、肌膚の完全ならぬものに主效がある、酒に浸して服す。

龍手藤 藏器曰く、(四)安荔浦に出る。石上に陽に向つて生えるもので、葉が龍の手のやうなものだ。採收に一定の時期はない。味甘し、溫にして毒なし。偏風の口喎、手足の癱緩に主效があり、虛を補し、陽を益し、冷氣風痺を去る。醇酒に浸し、火に近づけて溫め、空心に服して微し汗を取る。

牛領藤 藏器曰く、嶺南の高山に生ずる。形が褊狹で牛領のやうなところから名としたものだ。陰乾する。味甘し、溫にして毒なし。腹內の冷、腰膝の痛み弱きもの、小便の白濁し頻數なるもの、陽道の乏しきものに主效がある。煮汁、或は酒に浸して服す。

(一)牧野曰フ、附錄ニアル諸藤木ハ皆未詳ノ植物ニ屬スル。
(二)天目山ハ浙江省臨安縣ノ西北五十支里ニ在リ。
(三)吳ハ土部廿鍋ノ註ヲ見ヨ。
(四)安荔浦、未詳。

（五）冬月ノ二字、本草彙言ニヨリ補入。

（六）金陵本、無爲天門ヲ犍爲牙門ニ作ル。無爲ハ縣名、今ハ安

牛嬭藤　藏器曰く、深山に生ずる。大きくして樹のやうなもので、牛が好んで食ふ。その中に粉がある。味甘し、溫にして毒なし。饑饉で食物缺乏の場合にこれを食へば飢ゑぬ。その根を食へば髮が落る。

鬼膊藤　藏器曰く、江南の林や澗の邊に生ずる。葉は梨の葉のやうで、子は樝子のやうだ。藤の味苦し、溫にして毒なし。酒に浸して服すれば風血を去る。葉と共に搗いて癰腫に傅ける。

斑珠藤　藏器曰く、山谷の中に生ずる。（五）冬月凋まないものだ。子は珠のやうで斑がある。冬期に取る。味甘し、溫にして毒なし。酒に浸して服すれば、風血、羸瘦、婦人の諸疾に主效がある。

息王藤　藏器曰く、嶺南の山谷に生ずる。冬期にも凋まない。味苦し、溫にして毒なし。產後の腹痛、血露の盡きぬものに主效がある。濃煮汁を服す。

萬一藤　藏器曰く、嶺南に生ずる。蔓は小豆のやうなものだ。一名を萬吉といふ。蛇咬に主效がある。杵いて末にし、水で和して傅ける。

曼遊藤　藏器曰く、（六）無爲の（七）天門山の山谷に生ずる。形狀は寄生が大樹に著い

たやうなもので、葉は柳のやうだ。春紫色の花を開く。蜀地方ではこれを沈藤といふ。味甘し、溫にして毒なし。久しく服すれば、長生し、天年を延べ、久嗽を去り、癬を治す。

百丈靑 藏器曰く、江南の林澤に生ずる。藤蔓は緊つて硬く、葉は薯蕷のやうで對ひ合つて生える。味(八)苦し、平にして毒なし。諸種の毒物、天行瘴瘧の疫毒を解す。いづれも煮汁を服し、また生で搗いた汁を服す。その根は人を下痢させる。

溫藤 藏器曰く、江南の山谷に生ずる。樹に著いて凋まない。莖、葉は味甘し、溫にして毒なし。酒に浸して服すれば風血、積冷に主效がある。

藍藤 藏器曰く、新羅國に生ずる。根は細辛のやうだ。味辛し、溫にして毒なし。冷氣欬嗽に主效がある。煮汁を服す。



〔施州瓜藤〕

瓜藤（宋圖經） 頌曰く、(九)施州に生ずる。四季共に葉があつて花がない。皮を採るのであるが、一定の時期はない。味甘し、涼にして毒なし。諸熱毒、惡瘡に主效がある。刺猪苓を洗つて粗皮を去り焙じ乾したものと共に等分を

徽省安慶道ニ屬ス。

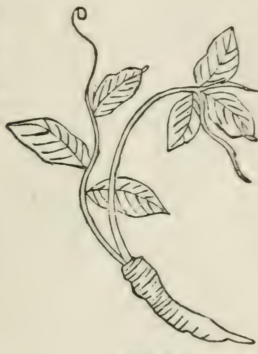
(七)天門山ハ安徽省天門縣ノ西ニ在リ。

(八)大觀ニ苦ノ下ニ寒字アリ。

(九)施州ハ山草類部管草ノ註ヲ見ヨ。

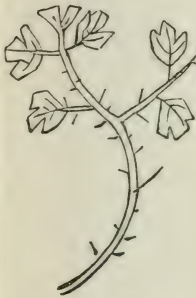
搗いて篩ひ、甘草水で調へて貼る。

金稜藤　頌曰く、施州に生ずる。四季共に葉があつて花がない。採收に一定の時期はない。味辛し、溫にして毒なし。筋骨の疼痛に主效がある。(一〇)續筋根、(一一)馬接脚と共に粗皮を洗ひ去つて焙じ乾し、等分を末にして酒で二錢を服す。忌むものはない。



〔金稜藤〕—施州—

含春藤　頌曰く、台州に生ずる。その苗は木に延び、冬も夏も常に青い。葉を採つて諸(一二)風を治するに效がある。



〔含春藤〕—天台—

獨用藤　頌曰く、施州に生ずる。四季共に葉があつて花がない。葉の上に倒刺がある。皮を採るのであるが、一定の時期はない。味苦く辛し、熱にして毒なし。心氣痛

(一〇)續筋根ハ旋花ノ一名。
(一一)馬接脚ハ馬節脚證類本草卷三十外艸類ヲ見ヨ。
(一二)彙言ニ風上ニ腫字アリ。

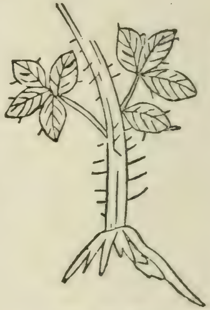
(一三)金陵本ニ祁ニ作ル。

(一四)百藥附方ニ百藥頭ナ百藥根ニ作ル。

(一五)大觀ニ二ナ一ニ作ル。

に主效がある。小赤頭藥を焙じて等分を研末し、酒で一錢を服す。

(一三)**祁婆藤** 頌曰く、天台の山中に生ずる。木の上に蔓延し、四季共にある。その地の者は葉を採つて諸風を治す。有效だ。



〔獨用藤〕
—施州—



〔耆婆藤〕
—天台—



〔野豬尾〕
—施州—

野豬尾 頌曰く、施州に生ずる。藤は大木に纏ひ著き、四季共に葉があつて花がない。味苦く澁(しぶ)し、涼にして毒なし。心氣痛に主效があり、熱毒を解す。(一四)百藥頭と等分を焙じ研つて末にし、(一五)二錢づつを酒で服す。

石合草　頌曰く、施州に生ずる。藤は木の上に纏ひ、四季共に葉があつて花がない。その地の住民は葉を採る。味甘し、涼にして毒なし。一切の惡瘡に主效があり、瘡口を斂める。焙じ研つて溫水で調へて貼る。



〔石合草〕
——施州——

骨路支（拾遺）　藏器曰く、味辛し、平にして毒なし。上氣浮腫、水氣嘔逆、婦人の崩中、餘血の癥瘕に主效があり、三蟲を殺す。（一六）崑崙國に生じ、苗は凌霄藤に似て根は青木香のやうだ。安南にもあつて、飛藤と呼んでゐる。〇この骨路支の條は、もと紫葳の後に附錄してあつたのだが、遺落したのを抄書して此に附したものである。

本草綱目草部第十八卷下　終

（一六）崑崙國トハ今ノ馬來半島ノ地ヲ指ス。

本草綱目草部

第十九卷

本草綱目草部目錄　第十九卷

草の八　水草類二十三種

澤瀉 本經 酸惡を附す。　蔛草 唐本　羊蹄 本經
酸模 日華 牛舌實、麢舌を附す。　龍舌草 綱目　菖蒲 本經
白昌 別錄　香蒲 蒲黃 本經　菰 別錄　苦草 綱目
水萍 本經　蘋 吳普　萍蓬草 拾遺 即ち水栗。
莕菜 唐本　蓴 別錄　水藻 綱目　海藻 本經
海蘊 拾遺　海帶 嘉祐　昆布 別錄　越王餘算 海藥
石帆 日華　水松 綱目

右附方　舊四十八、新七十一。

草の八　水草類二十三種

(一)澤瀉（本經上品）

和名　さじおもだか
學名　Alisma Plantago L.
科名　おもだか科（澤瀉科）

釋名　**水瀉**（本經）　**鵠瀉**（本經）　**及瀉**（別錄）　**藚**　音は兪（ユ）である。**芒芋**(二)（別錄）　**禹孫**　時珍曰く、水を去るを瀉といふ、澤水の瀉ぐが如しといふ意味である。禹は全國の水を整理、處置したといふところから、それに擬して禹孫といふ。その他の名稱は意味が明でない。



〔澤瀉〕

集解　別錄に曰く、澤瀉は汝南の池澤に生ずる。五月葉を採り、八月根を採り、九月實を採つ

(一)牧野曰フ、澤瀉ハ俗ニおもだかト訓ジテアレドモ、是レハ下ノ如クさじおもだかデアッテおもだかデハナイ。おもだかハ Sagittaria 屬ノモノデ、本屬トハ全ク別デアル。別ニへらおもだかガアル、是レハさじおもだかト同種中ノ一變種デアル。

(二)別錄當ニ本經ニ作ルベシ。

て陰乾する。

弘景曰く、(三)汝南郡は(四)豫州の管下である。今は近道にもあるが、用ゐるに堪へない。ただ(五)漢中、南鄭、青州、代州のものだけを用ゐる。形體が大きくて長く、尾の部分に必ず兩岐のあるものが好しとなつてゐる。この物は、朽ち、蠹が付き易いものだから、密封して貯へる必要がある。淺水の中に叢生するもので、葉は狹くして長い。

恭曰く、今は汝南では一向に採らない。ただ(六)涇州、華州のものが善しとなつてゐる。

頌曰く、今は山東、(七)河陝、江淮にもあるが、漢中のものが佳し。春苗が生え、多くは淺水の中に生える。葉は牛舌に似て獨莖で長い。秋期に白花を開き、叢になつて穀精草に似てゐる。秋の末に根を採つて暴乾する。

根　【修治】　斅曰く、多少に拘らず、細かに剉んで一夜酒に浸し、取出して暴乾し、必要に應じて用ゐる。

【氣味】　【甘し、寒にして毒なし】　別錄に曰く、鹹し。權曰く、苦し。元素曰

(三) 汝南ハ山草類王孫ノ註ヲ見ヨ。
(四) 豫州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。
(五) 漢中、南鄭ハ石部特生礜石ノ註、青州ハ石部雲母ノ註、代州ハ石部石麫ノ註ヲ見ヨ。
(六) 涇州ハ山草類黄芩ノ註、華州ハ石部花乳石ノ註ヲ見ヨ。
(七) 河陝ハ山西、陝西兩省地方。

く、甘し、平なり。沈んで降る、陰である。杲曰く、甘く鹹し、寒なり。降であり陰である。好古曰く、陰中の微陽である。足の太陽、少陰の經に入る。扁鵲曰く、多く服すれば眼病を發す。之才曰く、海蛤、文蛤を畏る。(八)

【主治】【風寒濕痺、乳難。五臟を養ひ、氣力を益し、肥健ならしめ、水を消す。久しく服すれば、耳目を聰明にし、饑ゑず、天年を延べ、身體を輕くし、顔面に光澤を生じ、能く水上を行き得る】(本經)【虛損を補す。五臟の痞滿。陰氣を起し、洩精を止め、消渴、淋瀝には膀胱、三焦の停水を逐ふ】(別錄)【腎虛で精の自ら出るものに主效があり、五淋を治し、水道を宣通する】(甄權)【頭旋、耳の虛鳴、筋骨の攣縮に主效があり、小腸を通じ、尿血を止める。難產に主效があつて、婦人の(九)血海を補し、生殖を完からしめる】(大明)【腎の經に入つて舊水を去り、新水を養ひ、小便を利し、腫脹を消し、滲洩し、渴を止める】(元素)【脬中の留垢、心下の水痞を去る】(李杲)【濕熱を滲し、痰飲を行り、嘔吐、瀉痢、疝痛、脚氣を止める】(時珍)

【發明】頌曰く、素問に『(一〇)酒風で身熱し汗の出るを治するに、澤瀉、朮を用ふ』とあり、深師方の支飮を治するにもやはり澤瀉、朮を用ゐてあつて、ただ煮法が少

(八)木村(康)曰ク、澤瀉ハ一日用量一〇—三〇瓦ヲ煎劑トナシ、利尿藥トシテ水腫ニ用ウ。(邦產藥用植物)

(九)血海ハ人體經穴ノ名、大腿內側ニアリ。又子宮任脈ノ起ル處ヲ指ス。

(一〇)酒後ニ風ニアタリ汗出テ止ザルヲ云フ。一名漏風。

し異るだけである。張仲景には、難病の心下に支飲があつて（一一）苦冒するを治するに澤瀉湯があり、傷寒を治するに大小澤瀉湯、五苓散などいふものがあつて、いづれも澤瀉を用ゐて停水を行利する最重要の藥としてある。

元素曰く、澤瀉は濕を除くの聖藥であつて、腎の經に入つて小便淋瀝を治し、陰間の汗を去る。しかしこの疾の無いものがこれを服すれば目盲になる。

宗奭曰く、澤瀉の功力の特長は水を行ることである。張仲景の（一二）水畜渇煩、小便不利で、或は吐し　或は瀉するに主とした五苓散の方に澤瀉を用ゐてあるに見ても、その水を行る特長が窺知される。本草に引用してある扁鵲の言に『多く服すれば眼病を發す』とあるのも、誠にこの物が水を行り去るがためである。凡そ澤瀉散を服する患者は小便の多い者に限るのであつて、小便が多い以上は腎氣がまた實するわけはないのである。今は一般に、洩精を止むるに多くはこれを用ゐようとするものがない。仲景の八味丸にこれを用ゐた目的も、桂、附等の藥力を腎の經に入らしむべく導くに過ぎぬので、外に意味はなかつたのだ。

好古曰く、本經に『久しく服すれば目を明にす』とあり、扁鵲は『多く服すれば

（一一）苦冒ノ冒ハ叉手冒心ノ意、ムナグルシキヲ云フ。

（一二）水畜ハ水ノ停滯スルコト。

目が昏する』といつてあるは何故であらうか。易老の議論に依ると『脬中の留垢を去るは、その味の鹹が能 伏水を瀉する關係に依る。伏水を瀉し、留垢が去るから目が明かになるのである。また小便を利すれば腎氣が虚するから目が昏するのだ』といふ。

○○王履曰く、王好古は寇宗奭の說を是なりと認めてゐるのであるが、余の確信するところに依れば、八味丸は地黃を君となし、他の諸藥を佐としてあつて、單に血を補ふだけではなく、同時に氣を補ふことになつてゐる。所謂『陽旺なれば能く陰血を生ずる』の事實である。地黃、山茱萸、茯苓、牡丹皮はいづれも腎の經の藥であり、附子、官桂なるものは右腎・命門の藥であつて、いづれも澤瀉の誘導を待つて始めて力がそれに達するといふわけではないのである。して見れば八味丸にこれを用ゐてあるのは、蓋し澤瀉が腎の邪を瀉し、五臟を養ひ、氣力を益し、陰氣を起し、虛損、五勞を補するの功を用ゐるが目的であつたのだ。澤瀉は能く腎を瀉するものに相違ないにしても、諸種の補藥が多く集つた中に在つては、さやうに瀉の力を發揮し得るわけのものではない。

時珍曰く、澤瀉は氣は平、味は甘にして淡である。淡は能く滲洩するものだ。氣、味共に薄きは水を利して洩下する所以であつて、脾、胃に濕熱があれば、頭が重くなり、目昏し、耳鳴るのであるが、それに對して、澤瀉はその濕を滲去するので、熱も隨つて去り、それで土氣がその本來の發揮の完全を得、淸氣が上行し、天の氣が明爽になるのである。故に澤瀉には、五臟を養ひ、氣力を益し、頭旋を治し、耳目を聰明にするの功があるのだ。けれども、若し久しく服するならば、降の發揮が甚だ度を過ぎて淸氣が升らず、眞陰の力が潛逃し消耗する。目昏を惹起せぬわけに行かぬではないか。仲景の地黃丸に茯苓、澤瀉を用ゐたのは、澤瀉の膀胱の邪氣を瀉する點を目的としたもので、誘導を目的としたものではない。古人は、補藥を用ゐる場合には必ず邪を瀉するものを兼用してある。邪が去れば補藥が十分に力を發揮する、つまり一面に於いて闢き、一面に於いて闔ふ、かくてこそ眞に理想的手段といふものである。後世ではこの機微な必然關係に注意を缺き、ただ補の一方にのみ專にするために、結局は原則通りに、久しく服して偏勝の害を招いてゐる。

正誤

弘景曰く、仙經の服食、斷穀に皆これを用ゐてある。また身體を輕く

して能く水上を步行するといつてある。

○頌曰く、仙方でもやはり單服する。澤瀉一物を擣き篩つて末を取り、水で調へて一日に六兩を分服し、百日繼續すれば身體が輕くなり、步行が健になるとある。

○○時珍曰く、神農の書には澤瀉を上品に列して、また『久しく服すれば、身體を輕くし、顏面に光澤を生じ、能く水上を步行し得る』といひ、典術には『澤瀉は、久しく服すれば人の身體を輕からしめ、一日に五百里を步行し、水上を走れる。一名澤芝といふ』とある。陶氏、蘇氏は、いづれもこれを事實と信じてゐるのであるが、余は根本的にこれを疑ふものである。澤瀉は水を行り、腎を瀉するものであつて、久しく服することは不可能なものだ。そこに神功あるべき道理はない。謬りであることは言ふまでもない。

【附方】 舊一、新五。【酒風で汗の出るもの】方は麋銜の條を見よ。【水濕腫脹】白朮、澤瀉各一兩を末にし、或は丸にし、三錢づつを茯苓湯で服す。(保命集)【冒暑霍亂】小便利せず、頭運し、引飲するには、三白散——澤瀉、白朮、白茯苓各三錢を、水一盞、薑五片、燈心十莖で八分に煎じて溫服する。【(一三)支飲苦冒】仲景の澤

(一三)支飲ハ溜飲ノ一種ニシテ氣息喘滿スルモノヲ云フ。

（二四）合字ハ大觀ニ據ル。
（二五）風瘡、詳ナラズ。腎臟失血、腎臟癤腫等ヲ指スカ。

瀉湯——澤瀉五兩、白朮二兩、水二升を一升に煮取り、二回に分服する。○深師方では、先づ水二升で二物を煮て一升を取り、又水一升で澤瀉を煮て五合を取り、この二汁を（二四）合して二回に分服する。病甚しくして眩せんとするものも、これを服すれば必ず瘥える。【（二五）腎臟風瘡】澤瀉、皂莢を水で煮爛して焙じ研り、煉蜜で梧子大の丸にし、空心に溫酒で十五丸から二十丸までを服す。（經驗方）【瘧後の怪症】口、鼻中の氣が旋り廻つて散らず、凝つて黑蓋色のやうになり、十日を過ぎるとその凝りが肩まで擴がり、肉と連つて金石よりも堅くなり、飲食不能になる病がある。これには、日毎に澤瀉の煎湯を三盞續けざまに服す。五日で癒える。（夏子益奇疾方）

葉　［氣味］【鹹し、平にして毒なし】［主治］【大風、乳汁の出ぬもの、難産。陰氣を強くする。久しく服すれば身體を輕くする】（別錄）【水臟を壯にし、血脈を通ずる】（大明）

實　［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【風痺、消渴。腎氣を益し、陰を強くし、不足を補し、邪溼を除く。久しく服すれば顏面に光澤を生じ、子を生まなくする】（別錄）

【發明】時珍曰く、別錄に『澤瀉の葉、及び實は陰氣を强くし、久しく服すれば子を生まなくする』といつてあるが、日華子は『澤瀉は催生し、婦人の血海を補し、子を持たせる』といつてあつて、同じからざるものがあるやうだ。陰を强くするといふからには、何故に子を生まなくするのであるか、能く催生するとあるものが、子を持たせるとは何故であるか。しかしこれは、澤瀉は補藥と共に用ゐれば能く下焦の濕熱、邪垢を驅逐するものであつて、邪氣が去れば陰が强くなり、海が淨くなる。その關係からは子を持たせると解釋するも無理はない。若しまた久しく服するならば、腎氣が大いに洩して血海が反つて寒する。その關係からは子を生まなくすると解釋することにも無理はない。結局文獻記載を讀むには一方のみ固執するわけに行かない。

【附錄】**酸惡**（別錄）有名未用に曰く、惡瘡に主效があり、白蟲を去る。水邊に生じ、形狀は澤瀉のやうだ。

(一)蔛草（唐本草）　和名　こなぎ
學名　Monochoria vaginalis, Presl.
科名　みづあふひ科(蔛草科)

【釋名】蔛菜（恭）　蔛榮

【集解】恭曰く、蔛菜(こくさい)は所在にあり、水邊に生ずるもので、葉(二)は澤瀉に似て小さく、花は青白色である。これも蒸して食へるもので、江南地方ではこれで魚を蒸して食ふが、甚だ美味である。五六月に莖(三)を採つて暴乾して用ゐる。


〔蔛草〕

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】

【主治】【暴熱、喘息、小兒の(四)丹腫】（恭）

(一)羊蹄（本經下品）　和名　ぎしぎし
學名　Rumex japonicus, Meisn.
科名　たで科(蓼科)

【釋名】蓄(二)（經）　禿菜（弘景）　敗毒菜（綱目）　牛舌菜（同）　羊蹄大黃（庚

(一)牧野曰ク、從來我邦ノ諸學者此蔛草ヲこなぎ(なぎ)ニ充テテ居ル。今集解ノ文ヲ見テモ餘リ簡單デ、果シテ然ルヤ否ヤ私ハ其判定ニ苦ムガ、今姑ク先輩ノ爲セシ所ニ從フテ置クバカリデアル。植物名實圖考、卷ノ十三ニ據レバこなぎハ鴨舌草デアル。
(二)大觀ニ葉下ニ圓ノ字アリ。
(三)大觀ニ莖下ニ葉字アリ。
(四)丹腫ハ丹毒ノコトナラン。

(一)牧野曰フ、羊蹄ヲ我邦所產ノぎしぎしニ充ツルコト多少釋然タラザル點アレドモ、大體ハ合致スル故先ヅ其レトシテ

辛玉冊）　鬼目（同）　東方宿（同）　連蟲陸（同）　水黄芹（俗）　子を金蕎麥と名ける。

弘景曰く、今一般に禿菜と呼ぶものであつて、禿は蓄の字音の訛である。

時珍曰く、羊蹄とは根を以て名けたもの、牛舌とは葉の形を以て名けたもの、禿菜とは禿瘡を治するから名けたものである。詩の小雅に『言に其の蓫を采る』とあり、陸機の注に「蓫は蓄の字であつて、今の羊蹄のことだ。幽州地方では蓫根といふ。長蘆菔に似て莖が赤い。これも瀹て茹にして食へる。滑かで美味なものだ』とある。鄭樵の通志に、蓫を指して爾雅の蕼、及び蕢だといつてあるは誤である。金蕎麥とは似てゐるところからの名である。



（羊　蹄）

【集解】　別錄に曰く、羊蹄は(三)陳留の川澤に生ずる。

保昇曰く、所在にあるもので、下濕の地に生える。春苗が生え、高いものは三四尺になり、葉は狹くして長く、頗る萵苣に似て色が深い。莖は節間が紫赤色である。

置ク。即チ集解、莖節ノ間紫赤ナリトアルハ我ぎしぎしトハ合致セヌ。若シ羊蹄ガながはぎしぎし即チR. crispus, L. ナレバ此紫赤ノ點ハ能ク一致スベケレドモ、支那ニ果シテ右ノR. crispus, ノL. Typo品（歐洲ニ在ルガ如キ）ガアルカ否カ（歸ク）今其レガ判然セヌ。故私、今遽ニ其種ニ定ムルコトヲ敢テ爲サヌ。歐洲ノ學者ハR. crispus. L. ヲ支那植物トシテ記シ居レドモ、其レニハR. japonicus, Meisn. ガ混ジテ居ルカラ果シテ其レガ何レデアルカ分明デナイ。然シ此問題ハ支那ニ入リテ實地ヲ見レバ直グ解決ガ付クト思

青白色の花を開いて穗になり、三稜の子を結び、夏のうちに枯れる。根は牛蒡に似て堅く實してゐる。

宗奭曰く、葉は菜の種類の菠稜のやうだが、ただ岐が無くて色がやや青白く、葉は厚く、花も子もやはり菠稜に似てゐる。その葉は鍮石を潔かに磨き得るものだ。

時珍曰く、㈣燒煉家ではそれを用ゐて鉛、汞を制する。

子を金蕎麥と名け、水邊、及び濕地に極めて多い。葉は長さ一尺ほどあり、牛の舌の形に似てゐる。菠稜には似てゐない。夏に入つて薹が起ち、花を開いて子を結ぶ。花と葉とは同一色のものだ。夏至に枯れて秋深くして生え、冬を凌いで枯死せぬ。根の長さは一尺近くあり、赤黃色で大黃、胡蘿蔔のやうな形である。

根　㈤

氣味　【苦し、寒にして毒なし】恭曰く、辛く苦し、小毒あり。時珍曰く、能く三黃、砒石、丹砂、水銀を制す。

主治　【頭禿、疥瘙。熱を除く。婦人の陰蝕】(本經)【浸淫する疽痔。蟲を殺す】(別錄)【蠱毒を療ず】(恭)【癬を治し、一切の蟲を殺す。醋で磨つて腫毒に貼る】(大明)【擣汁二三匙を水半盞に入れて煎じ、空服に溫服すれば產後の風祕を治する

フ。R. japonicus, Meisn. ト R. crispus, L. トハ元來ハ別種デ、決シテ同種ト見做スベキモノデハナイ。

㈡經、當ニ別錄ニ作ル可シ。

㈢陳留ハ縣名、秦ニ置ク。今ハ河南省開封道ニ屬ス。

㈣燒煉家、錬丹家ヲイフ。

㈤木村(康)曰ク、ぎしぎしハ根ニクリソファン酸及フラングラエモヂンヲ含有ス。村山義温—藥誌、大、二、(三七五)九三。板垣武熹・藥誌、大、一〇(四七〇)三二七。(藥用)ぎしぎしノ新

鮮ナル根ノ搾汁ヲ諸種ノ皮膚病ニ塗布シ、又大黄ニ代用シテ一日用量五瓦ヲ煎劑トシ緩下藥ニ用ウ。(邦藥植)

(六)大觀ニ茎ニ作ル。

に殊に效驗がある】(宗奭)

【發明】震亨曰く、羊蹄根は水に屬し、血分に走る。

頌曰く、新たに採つたものを醋で磨つて塗れば癬に速效がある。また煎じて丸にしても服するもので、多少に拘らず根を採つて擣き、絞汁一大升を白蜜半升と共に熬つて稠餳のやうにし、更に防風末六兩を入れて和しまぜて丸になるやうにし、それを梧子大の丸にし、一日二三回、栝樓、甘草を酒で煎じたもので三二十丸を服す。

【附方】舊六、新七。【大便の卒に結するもの】羊蹄根一兩、水一大盞を六分に煎じて溫服する。(聖惠方)【腸風下血】敗毒菜根を洗つて切り、皮付きの老薑と各半盞を共に炒り、赤くなつたところを無灰酒に淬し、少頃の間盌で蓋ひ、滓を去つて任意に飲む。(永類方)【喉痺の言語不能】羊蹄の獨(六)根のものを、風、日光、及び婦人、雞、犬に見せぬやうにして三年の古醋で研つて泥のやうにし、喉の外部を生布で拭つて赤くした上へ塗る。(千金方)【顏面の紫塊】錢ほどの大いさの紫塊があるもの、或は顏全面に紫塊あるものには、野大黄四兩の汁を取り、穿山甲十片を燒いて性を存し、川椒末五錢、生薑四兩から取つた汁と和して研り、生絹で包んで擦

る。乾いたときは醋を入れて潤濕し、初の通りに數回擦る。屢〻效驗を認めた。(陸氏積德堂方)　【(七)瀝瘍風駁】羊蹄草根を生鐵の上で好き醋に磨り下し、少しづつ徐に刮つて塗る。硫黃少量を入れるが更に妙である。日每に用ゐる。(聖惠)　【汗斑癜風】羊蹄根二兩、獨科掃帚頭一兩、枯礬五錢、輕粉一錢、生薑半兩を共に杵いて泥のやうにし、湯で澡浴してから手で患部を抓き、粗皮を起したところへ藥を布に包んで力を入れて擦る。然る後に寢具を暖にして汗を取れば癒える。これは鹽山の劉氏の方である。硫黃をこれに用ゐるが更に妙である。(藺氏經驗方)　【頭風白屑】羊蹄草根を杵き、羊膽汁と共に塗る。永く病を除く。(聖惠方)　【頭上の白禿】獨根の羊蹄を、婦人、雞、犬、風、日光に當らぬやうにして陳醋で泥のやうに研り、一日一回、禿を生布で擦つて赤くしたところへ傅ける。(肘後)　【久しく瘥えぬ癬】簡要濟衆方では、羊蹄根を杵いて汁を絞り、輕粉少量を入れ和して膏のやうにし、三五回塗れば癒える。○永類方では、癬の年を經たものを治するには、獨生の敗毒菜根、卽ち羊蹄根を擣いて三錢に川百藥煎二錢を入れ、白梅肉を井華水一盞で擂つて濾し澄し、早曉空心に服す。熱い物を食つてはならぬ。その滓は癬を抓き破つて擦りつける。三回

(十)瀝瘍ハアセナマヅ。

で癒える。○千金方では、細癬を治するに、羊蹄根五升を桑柴火で煮て四五沸し、汁を取つて洗ふ。同時に羊蹄汁で礬末を和して塗る。【漏瘤濕癬】浸濕して日每に廣くなり、忍び難く痒く、癒えても後にまた發つて黄水を出すものには、羊蹄根を擣いて大醋を和し、患部を洗淨した上に塗り、一時して冷水で洗ふ。一日一回。(千金翼)【疥瘡の蟲あるもの】羊蹄根を擣いて猪の脂を和し、鹽少許を入れて日每に塗る。(外臺秘要)

葉 氣味 【甘し、滑する。寒にして毒なし】 主治 【小兒の疳蟲、胡夷魚、鮭魚、(八)檀胡魚の毒を殺す。菜にして多く食へば大腑を滑する】(大明) 時珍曰く、胡夷、鮭魚といふはいづれも河豚の名である。檀胡といふは詳でない。【菜にして食へば痒を止める。多く食つてはならぬ。氣を下さしめるものである】(詵)【根共に蒸し爛らして一盌を食へば、腸痔瀉血を治するに甚だ效がある】(時珍)

附方 舊一。【(九)懸癰舌腫】咽に息肉を生じたるには、羊蹄草の煮汁を熱して含み、冷えれば吐き出す。(聖惠)

實 氣味 【苦く澁し、平にして毒なし】 主治 【赤白雜痢】(恭)【婦人の

(八)檀胡ハ四明海中ニ産ス、形杜夫ノ如シ、今明州海人檀胡ヲ取リ炙リ脯トシテ以テ四方ニ市グ。

(九)懸癰、ノドマメノハレルヤマヒ。

〔一〇〕血氣】時珍）

〔一〕酸模（日華）

和名　すいば
學名　Rumex acetosa, L.
科名　たで科（蓼科）

［釋名］　**山羊蹄**（綱目）　**山大黃**（拾遺）　**蕵蕪**（爾雅）　**酸母**（綱目）　**蓚**（同）　**當藥**　時珍曰く、蕵蕪とあるは酸模の發音の轉訛、酸模はまた酸母の轉訛であつて、いづれも味に因つて名けたものである。三葉酸母草と同名だ。掌禹錫が蕵蕪を蔓菁菜としたのは誤である。

［集解］　弘景曰く、極めて羊蹄に似て味の醋い一種の草があつて、それも酸模と呼ぶ。〔二〕これも疥を療ずるものである。

大明曰く、所在にあるもので、山岡の上に生ずる。形狀は羊蹄葉に似て小さく、黃色だ。莖、葉は共に細く、節の間に子を生じ、茺蔚子のやうである。

藏器曰く、これは山大黃で、一名當藥といふ。その葉は酸くして美味だ。世間ではこれも採つてその莖を食ふ。爾雅に『須は蕵蕪なり』とあり、郭璞の注に『羊蹄

〔一〇〕血氣、詳ナラズ。血逆ノコトカ。

〔一〕牧野曰フ、酸模ハすいば（すかんぽ）ニ中ルガ、植物名實圖考、卷ノ十八ニ酸模トシテ圖スル品ハ羊蹄ニ似タ別ノ種デ酸模デハナイ。

〔二〕大觀ニ根字アリ『根も亦疥を療ず』ト讀ムベシ。

に似て稍細く、味酸くして食へる。一名蓚(しう)といふ』とある。

時珍曰く、平地にもある。根、葉、花の形はいづれも羊蹄と同じだが、ただ葉が小さく、味が酸いだけの相異である。その根は赤黄色



〔酸模〕

だ。根、葉と連ねて取つた汁を煉つた霜は雄、汞を制し得る。

【氣味】【酸し、寒にして毒なし】時珍曰く、葉は酸し、根は微し苦し。

【主治】【暴熱腹脹には生で搗いた汁を服す、それで下利するものである。皮膚の小蟲を殺す】（藏器）【疥を治す】（弘景）【痢を療ずるには佳い】（保昇）【汗斑を去るには紫萍(しひやう)と共に擣いて擦る。數日でなくなる】（時珍）

【附方】新一。【瘭疽(へうそ)毒瘡】肉中に突然粟か豆ほどの黯子(あんし)が生じ、大きいものは梅、李ほどあり、或は赤く、或は黒く、或は青く、或は白く、その中に核があつて、その核に中心に達するほどの深い根があり、腫泡が紫黒になると能く筋骨を爛し、その毒が臟腑に入ると遂に死亡するものである。これは、その黯子の上に灸を百壯し、

酸模の葉でその四面を押へて成長を防ぎ、葵根汁を内服するがよし。その毒は自ら癒える。（千金方）

附録

（三）**牛舌實**（別錄）　有名未用に曰く、味鹹し、澀にして毒なし。身體を輕くし、氣を益すの主效がある。水中、澤の邊に生え、葉は大きく、長さ一尺ほどある。五月實を採る。一名彖首といふ。

藏器曰く、現に東方地方の住民は田水中と呼ぶ。葉が大きくして牛耳のやうなものをば牛耳菜といふ。

時珍曰く、現に世間では羊蹄を牛舌菜と呼んでゐるが、恐らく羊蹄といふのは根のこと、この物は實のことをいふのであらう。さもなくばこの物は羊蹄の水中に生ずるもののことである。

（四）**䕡舌**　別錄に曰く、味辛し、微溫にして毒なし。霍亂腹痛、吐逆心煩に主效がある。水中に生ずるもので、五月に採る。

弘景曰く、少しばかりの水の中に生ずる。今一般に五月五日に採つて乾し、霍亂を治するに用ゐて甚だ良し。

（三）牧野曰ク、蘭山ハ之レヲ羊蹄ノ實デアルト云ツテ居ル、果シテ然ルデアラウカ、私ハ詳カニシナイ。

（四）牧野曰フ、䕡舌ハ未詳ノ植物デアル。

（一）牧野曰フ、未詳ノ水草デ所屬判明セヌ。

（一）龍舌草（綱目）

和名無し
學名未詳
科名未詳

集解　時珍曰く、龍舌は南方諸地の池澤や湖沼中に生ずる。葉は大葉の菘菜、及び芣苡の形狀のやうなもので。根は水底に生じ、莖が水から抽き出て白色の花を開く。根は胡蘿蔔根に似て香しい。杵汁は能く鵞、鴨の卵を耎かにする。方家ではこれを丹砂を煮、白礬を煆き、三黄を制するに用ゐる。



〔龍舌草〕

氣味　【甘く鹹し、寒にして毒なし】主治　【癰疽、湯火灼傷に擣いて塗る】（時珍）

附方　新一。【乳癰腫毒】龍舌草、忍冬藤を研り爛らし、蜜に和して傅ける。（多能鄙事）

(一)菖蒲（本經上品）

和名　せきしやう
學名　Acorus gramineus, Soland.
科名　てんなんしやう科（天南星科）

【釋名】**昌陽**（別錄）**堯韭**（普）**水劍草**　時珍曰く、菖蒲なるものは、蒲類の草として昌盛なるものだから菖蒲と名けたのである。又、呂氏春秋に『冬至の後五十七日にして菖が始めて生える。菖は百草の眞先に生えるものだ。この時期から耕作を始める』とある。して見ると、菖蒲、昌陽はやはりこの意味を取つた名であらう。典術には『堯の時、天が庭に精を下した。それが韭になり、百陰の氣を感じて菖蒲になつた』とある。それで堯韭といつたのである。方士が水劍と隱語で呼ぶはその葉の形容である。

【集解】別錄に曰く、菖蒲は(二)上洛の池澤、及び蜀郡の(三)嚴道に生ずる。一寸の間に九節あるものが良し。根の露れたものは用ゐてはならぬ。五月、十二月に根を採つて陰乾する。

弘景曰く、上洛郡は梁州の管下、嚴道縣は蜀郡に在る。今では處處にあつて、石

(一)牧野曰フ、菖蒲ハ石菖蒲デ、即チ普通ニ呼ブせきしやうデアル。然ルニ邦人ハ菖蒲ヲ今日云フしやうぶ（白菖）ト誤マリ、即チしやうぶノ名モ其字面カラ出タヤウナ事トナツテ居ルノハ笑フベキ事デアル。

(二)上洛ハ蔓草類威靈仙ノ註ヲ見ヨ。

(三)嚴道ハ晉以前ハ今ノ四川省滎經縣ノ西、晉以後隋ニハ雅安縣西ノ地ナリ。

磧の上に生える。節の平均したのが好し。下濕の地に生えて根の太いものを昌陽と名ける。これは服食には堪へない。眞の菖蒲は葉に劔刃さながらの脊があり、四月、五月にやはり小さい理のある花が咲く。東部地方の溪澤にはまた溪蓀といふものがあつて、根の形や氣、色は極めて石上菖蒲に似てゐるが、さながら蒲のやうで脊がない。一般人は多くこれを石上菖蒲といつてゐるが、誤である。これはただ主として欬逆を治し、蚤、虱を驅除するだけのもので、服食には入れない。詩歌に多く詠じてある蘭蓀なるものは正にこれを謂ふのである。



〔石菖蒲〕

大明曰く、菖蒲は石澗に生えたものは堅く小さい。一寸に九節の最良品は(三)宜州に產する。二月、八月に採收する。

頌曰く、處處にあるものだが、(四)池州、戎州のものが佳し。春生えて葉は靑く、長さ一二尺ばかりあり、その葉の中心に脊があつて、その形は劍のやうだ。花、實はない。現に五月五日にこれを採收する。その根は盤屈して節があり、形狀は馬鞭

(三)宜州ハ石部丹砂ノ註ヲ見ヨ。
(四)池州ハ石部綠礬ノ註、戎州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

のやうだ。一本の大根の旁に三四本の根が生え、旁の根が尤も節が密で、一寸に十二節のものもある。これを採つた初めは虛軟だが、曝乾すると堅く實し、拆いて見ると中心は色が微し赤い。嚼めば辛く香しく、滓が少い。世間では多く乾燥した沙石土中に植ゑて臘月に移植するが、甚だ活き易いものだ。(五)黔、蜀地方の蕃民は、旅行に常にこれを携へて急病の心痛を治療する。蠻地の谷間に生えたものが就中佳し。一般人家に移植したものもやはり藥用にはなるが、ただ乾いた後の辛香と堅く實する具合が蠻人が持つて來るものに及ばない。以上はいづれも醫方に用ゐる石菖蒲である。又、水菖蒲といふ溪澗や水澤に生ずるものがあるが、藥に入れるには堪へない。現に藥店で賣つてゐるものは、多くは右の二種を雜ぜてあるので、なかなかそれの見判けがつかぬ。

○承曰く、今は(六)陽羨の山中に生える。水石の間に生えたものは、その葉が水に逆つて生え、根鬚が石に絡り、一向に少しの泥土もないやうになつてゐて、根、葉は極めて緊つて細く、一寸に九節どころではない。これは藥に入れて極めて佳いものだ。二浙地方の民家では、瓦器や石器に種ゑて朝夕水を易へる。すると茂るのであるが、

(五) 黔、蜀ノ黔ハ金部銀ノ黔中ノ註參照。蜀ハ四川省西半部ノ奥地ヲ指ス。

(六) 陽羨ハ介部龜類能龜ノ註ヲ見ヨ。

水が濁るか泥滓がたまると萎む。近來の方に多く用ゐる石菖蒲は必ずこの類の物である。池澤に生えるものは、肥大で節が疎で粗慢だ。恐らく藥に入れ得るものでない。ただ茶菓子などにするだけで、氣味は烈しくなく、和淡なものだ。

時珍曰く、菖蒲に凡そ五種ある。池澤に生え、葉は蒲のやうで根が肥え、高さ二三尺のものは泥菖蒲、白菖といふものである。溪澗に生え、蒲葉で根が痩せ、高さ二三尺のものは水菖蒲、溪蓀といふものである。水石の間に生え、葉に劍脊があり、根が痩せて節が密に、高さ一尺餘のものは石菖蒲である。一般人家で砂に栽ゑ、一个年後の春に剪つて洗ふと、剪れば剪るほど細くなり、高さ四五寸で葉が韭のやう、根が匙の柄ほどの粗いもの、これも石菖蒲であつて、その極端で、根の長さが二三分、葉の長さが一寸ばかりのものは錢蒲といふものである。服食し藥に入れるには二種の石菖蒲を用ゆべきものであつて、他の三種はいづれも用をなさぬ。この草は新、舊交代して四季共に青いものだ。羅浮山記に『山中の菖蒲は一寸に二十節だ』とある。抱朴子には『服食するには、一寸に九節で花の紫色のものが尤も善し』とある。蘇頌は、花、實が無いといつたが、現に菖蒲は二三月頃に莖が抽き出て、穗に

なつた細い黄色の花を開いてゐる。昔の人も、菖蒲は花を見ることを得難しといつてゐるのだから、花が無いわけではない。應劭の風俗通に『菖蒲を花の咲いたとき取つて食へば天年を長くする』とあるがそれである。

根　［修治］　斅曰く、凡そこれを使用する場合には、泥菖、夏菖の二種のものを用ゐてはならぬ。それは竹根鞭のやうな形で、黑く、氣が穢く、味が腥いものだ。ただ石上に生え、根の條が嫩く、黃色で硬く緊り、節が稠密で一寸に九節あるものならば眞物である。これを採取したならば、銅刀で黃黑色の硬節の皮一重を刮り去り、嫩桑の枝條と互にまぜて蒸熟して暴乾し、剉んで用ゐる。

時珍曰く、服食の方法としては上記の如くして制すべきものであるが、通常用ゐるには、ただ毛を去り、微し炒つて用ゐればよし。

(七)［氣味］　【辛し、溫にして毒なし】　權曰く、苦く辛し、平なり。之才曰く、秦皮、秦艽が使となる。地膽、麻黃を惡む。大明曰く、飴(八)餹、羊肉を忌む。鐵器に觸れてはならぬ。人をして吐逆させるものである。

［主治］　【風寒濕痺、欬逆上氣。心孔を開き、五臟を補し、九竅を通じ、耳目を

(七) 木村(康)曰ク、せきしやうノ根莖ニハ主成分アザローンナル精油ノ他パルミチン酸及一種ノフェノールヲ含有ス。木村雄四郎ー藥誌、大、一五、(五三一)三八〇。

(八) 大觀ニ飴ヲ糖ニ作ル。

(九)伏梁ハ胃痙攣。

明にし、音聲を出し、耳聾、癰瘡に主效があり、腸、胃を溫め、小便利を止める。久しく服すれば、身體を輕くし、物を忘れず、迷ひ惑はず、天年を延べ、心智を益し、志を高くし、老衰せぬ】（本經）【四肢の濕痺で屈伸し得ぬもの、小兒の溫瘧で身體の積熱の解せぬには、浴湯にするがよし】（別錄）【耳鳴、頭風、涙の流れるもの、鬼氣を治し、諸蟲を殺す。惡瘡、疥瘙】（甄權）【風を除き、氣を下し、男子の水臟、婦人の血海の冷敗で多く物を忘れるもの、煩悶を除き、心腹痛、霍亂轉筋、及び耳痛を止めるには、末にして炒り、熱に乘じて裹んで罨する。甚だ效驗がある】（大明）【心積(九)伏梁】（好古）【中惡、卒死、客忤、癲癇、下血、崩中を治し、胎漏を安かにし、癰腫を散ず。擣汁を服すれば、巴豆、大戟の毒を解す】（時珍）

【發明】頌曰く、古方には菖蒲を單服する法があり、蜀地方では、心腹の冷氣、搊痛を治するに、一二寸を取つて搥き碎き、吳茱萸と共に湯に煎じて飲む。また旅行の際携帶して、突然心痛を患つたとき一二寸を嚼み、熱湯、或は酒で送下するも效がある。

時珍曰く、明朝建國の初、太祖高皇帝が、周顚仙に『常に菖蒲を嚼んで水を飲む

のは何の理由であるか』と問はれたとき、『これを服すれば腹痛の疾に罹らない』といふことを答へたことがあつた。それは高皇帝御製の碑文中に記載されてある。

菖蒲は、氣が溫、味が辛であつて、手の少陰、足の厥陰の藥である。心氣不足の者にこれを用ゐるは『虛するときはその母を補ふ』の意味であつて『肝は急を苦むものだから、辛を以て補ふ』がそれである。道藏經の中に菖蒲傳一卷の書がある。その文章、論旨は粗雜鄙陋なものではあるが、玆にその要領を略載しよう。

菖蒲は水草の精英、神仙の靈藥である。これを服するの法は、小さく緊つて魚鱗に似たもの一斤を採り、水と米泔とで各一夜づつ浸し、皮を刮去つて切り、暴乾して擣き篩ひ、糯米粥と和しまぜて更に熟蜜を入れ、かきまぜて梧子大の丸にし、粗い葛布の袋に盛つて風の當る場所に置いて乾し、每朝、酒、飲いづれも任意のもので三十丸を服し、就寢時に更に三十丸を服す。かくて服すること一个月に達すれば食物がよく消化し、二个月に達すれば痰が排除され、更に服すること五年に達すれば、骨髓が充實し、顏色が悅澤になり、白髮が黑くなり、落ちた齒が生え更る。この藥の有する五德は五行に配するもので、葉は青く、花は赤く、節は

白く、心は黄に、根は黒い。能く一切の諸風、手足の頑痺、癱緩（たんくわん）不遂、五勞、七傷を治し、血を塡（み）て、脳を補し、骨髓を堅くし、精神を長じ、五臟を潤ほし、六腑を禆（たす）け、胃口を開き、血脈を和し、口齒を益し、耳目を明にし、皮膚を澤（つや）やかにし、寒熱を去り、（二〇）三尸、（二一）九蟲、天行の時疾、瘴疫、瘦病、瀉痢、痔漏、婦人の帶下、産後の血運を除く。いづれも酒で服す。河内の葉敬の母は中風でこれを服し、一年にしてあらゆる病が癒えた。寇天師はこれを服して悟道を得た。今に至るまでその廟前に菖蒲が生ゑる。鄭魚、曾原等はいづれもこれを服して得道したのである。

又、按ずるに、葛洪の抱朴子に『韓衆は、菖蒲を服すること十三年にして身體に毛が生ゑ、冬も袒（はだぬ）いで寒くなく、一日に萬言を記憶した。商丘子は妻を娶らず、ただ菖蒲の根のみを食したが、饑ゑることなく、老衰せず、その生涯を終つた時も處も判らない』とある。神仙傳には『咸陽の王典は菖蒲を食して長生を得、安期生は一寸九節の菖蒲を採つて服し、それで仙去した』とある。

又、按ずるに、臞仙の神隱書に『石菖蒲を一箇の盆に生け、机上に置いて夜間讀

（二〇）三尸ハ五尸ノ誤ナラン。飛尸、遁尸、沉尸、風尸、伏尸、是ナリ。皆鬼邪ノ氣ヲ挾ミ身體ニ流注シテ人ヲシテ寒熱淋瀝タラシメ、精神錯雜スル事積年累月、漸ク頓滯ニ至リ以テ死ニ至ル、死後傍人ニ易傳シ遂ニ滅門ニ至ル。

（二一）九蟲ハ伏、蛔、白、肉、肺、胃、赤、弱、蟯ノ九名。

書すれば、室内の烟が收まつて目を害ふ患がない。或は晴れた星の夜に露し、翌朝その葉尖の露水を取つて目を洗へば、大いに視力を明かにし、久しく繼續して試むれば、白晝に星を見得るやうになる。端午の日を期して酒で服するが尤も妙だ』とある。蘇東坡は『凡そ草は、石上に生えても、必ず微の土がその根に附いてゐるものだ。然るに石菖蒲だけは、泥土を濯ひ去つて淸水で盆の中に生けると、數十年に亙つても枯れない。節、葉が堅く瘦せ、根鬚が連なり絡まつて、蒼然として几案の邊を快くし、久しく玩んで更に面白い。その天年を延べて生涯を完うするの功は、無論昌陽などの比較になるべきものでない。寒を忍び、淡泊にして、泥土の力に依らずして生きてゐるに至つては、昌陽の如き到底彷彿するさへ思ひも寄らぬ』といつてある。

楊士瀛曰く、下痢禁口は脾虛には相違ないが、やはり熱氣が心胸を閉隔するために起る現象である。俗間では、木香を用ゐて溫に失し、山藥を用ゐて閉に失してゐるが、これはただ參苓白朮散に石菖蒲を加へ、粳米飲で調へて服し、或は參、苓、石蓮肉を用ゐ、少量の菖蒲を入れて服するがよし。胸中がよく開いて自然に食思が付く。

（一三）三十六風、詳ナラズ。宋史藝文志ニ楊太業三十六種風論一卷ヲ載ス。

のだ。

附方　舊九、新十八。【服食法】甲子の日に一寸九節の菖蒲を取り、百日間陰乾して末にし、一日三回、酒で方寸匕づつを服す。久しく服すれば、耳目が聰明になり、智を益し、物忘れをしなくなる。（千金方）【健忘に智を益す】七月七日に菖蒲を末にし、酒で方寸匕を服す。酒を飲んでも酔はなくなる。好事者が服して效驗を知られてゐる。久しく服すれば聰明になる。鐵器を忌む。（千金方）【（一三）三十六風】不治の者もこれを服すれば悉く效がある。菖蒲を薄く切つて日光で乾し、三斤を絹袋に盛り、玄水――卽ち淸酒――一斛の中に懸け浸して一百日の間密封し、菜綠色に見えるやうになつたとき、熟黍米一斗を入れて十四日間封し、それを取出して日毎に飲む。（夏禹神仙經）【癲癇風疾】雞、犬の聲を聞かぬ九節の菖蒲を、毛を去つて木臼で擣いて末にし、黑豶豬心一箇を批開して砂礶で煮た湯でその末を調へ、一日一回、三錢づつを服す。（醫學正傳）【尸厥魘死】尸厥の病とは、突然死亡してまだ脈が動き、耳目の中に微かに語聲のやうな音が聽え、股間の煖なるものをいふ。魘死の病とは、寢てそのまま寤めなくなつたものをいふ。これは火光で照してはならぬ。ただその

踵、及び足の拇（一四）趾の甲の際を痛く嚙み、その顔に唾すれば甦る。そこで菖蒲末を鼻中に吹入れ、桂末を舌の下へ納れ、并に菖蒲根汁を灌ぎ込む。（肘後方）【卒中客忤】菖蒲根の搗汁を含めば立ろに止まる。（肘後方）【一切の惡を除く】端午の日に菖蒲を切り、酒に漬けて飲む。或は雄黃少量を加へる。（洞天保生錄）【喉痺腫痛】菖蒲根を嚼み、その汁を、鐵秤錘を燒いて酒一盞に淬したもので飲む（聖濟總錄）【霍亂脹痛】生菖蒲を剉んで四兩を水で和して搗き、その汁を四回に分けて溫服する。（聖惠方）【諸積の鼓脹】食積、氣積、血積の類には、石菖蒲八兩を剉み、斑蝥四兩を翅と足を去つて共に黃色に炒り、斑蝥は去つて用ゐず、布袋に盛つて蝥の末を挼き去り、然る後に末にして醋糊で梧子大の丸にし、三五十丸づつを溫い白湯で服す。腫脹を治するに尤も妙である。或は香附末二錢を入れる。（奇效方）【肺損の吐血】九節菖蒲末、白麪等分を、一日一回、三錢づつ新汲水で服す。（聖濟錄）【一切の解毒】石菖蒲、白礬等分を末にし、新汲水で服す。（事林廣記）【赤白帶下】石菖蒲、破故紙等分を炒つて末にし、毎服二錢を更に菖蒲を浸した酒で調へて一日一回服す。（婦人良方）【胎動、半產】俄かに動じて不安なるもの、或は腰痛し、胎が轉じて心下を搶き、血の

（一四）趾、大觀ニ指ニ作ル、

（一五）露岐ハ入門ニ曰ク、露岐者此少而跨襠間腫痛也是便毒

止まらぬもの、或は日月がまた足らずして產せんとするもの、いづれも菖蒲根の搗汁一二升を服す。（千金）【產後の崩中】下血の止まぬには、菖蒲一兩半を酒二盞で一盞に煎じ、滓を去つて三回に分服する。食前に溫服するのである。（千金方）【卒かの耳の聾閉】菖蒲根一寸、巴豆一粒を心を去り、共に搗いて七丸にし、綿で一丸を裹んで耳を塞ぎ、一日一回換へる。ある方では巴豆を用ゐずに蓖麻仁を用ゐる。（肘後方）【病後の耳聾】生菖蒲の汁を滴らす。（聖惠方）【蚤、虱の耳に入つたとき】菖蒲末を炒り熱して袋に盛り、それに枕すれば癒える。（聖濟錄）【諸種の赤眼】瞳にかかり、雲のやうにかすむには、菖蒲を擂つた自然汁を文武火で熬つて膏にし、日每に點けるが效がある。（聖濟錄）【眼瞼挑鍼】獨生の菖蒲根を鹽と共に研つて傅ける。（壽域聖方）【飛絲の目に入つたとき】石菖蒲を搥き碎き、左眼のときは右鼻を塞ぎ、右眼のときは左鼻を塞ぐ。百發百中である。（危氏得效方）【頭瘡の瘥えぬもの】菖蒲末を油で調へ、日中三回、夜間二回傅ける。（法天生意）【癰疽發背】生菖蒲を搗いて貼る。瘡の乾いたものには末にして水で調へて塗る。（孫用和祕寶方）【（一五）露岐便毒】生菖蒲根を搗いて傅ける。（證治要訣）【熱毒濕瘡】宗奭曰く、ある人が全身に瘡を生じ、痛

也。

(一)牧野曰フ、我邦人ノ稱ヘルしやうぶハ誤テ菖蒲(せきしやう)ノ字面カラ出タモノデアレドモ、是レハ固ヨリ菖蒲其物デナク此白昌デアル。昔ハ之レヲあやめぐさト唱ヘタ。故

むけれども痒くなく、手足に就中(なかんづく)多く生じて甚しく衣服に粘著し、徹宵睡眠し得なかつたが、ある人から敎へられて、菖蒲三斗を日光で乾して末にし、それを寢臺に布(し)いて横臥し、その上から寢具をかけて寢た。すると、それで衣被にも粘(ねば)らず、また睡眠も十分に取れ、五七日ならずしてその瘡は失ふ如くに無くなつた。その後その方で人を治療するに、手に應じて神驗があつた。(本草衍義)【蟲のある風癬】菖蒲末五斤を酒に漬け、それを釜で蒸して味を出し、先づ一日間酒を絶ち、一升、或は半升づつを服す。(千金方)【陰汗濕痒】石菖蒲、蛇牀子(じやじやうし)等分を末にし、一日二三回搽る。(濟急仙方)

葉　[主　治]　【疥、大風瘡を洗ふ】(時珍)

(一)白　昌 (別錄有名未用)

和名　しやうぶ
學名　Acorus Calamus, L. var. angustatus, Bess.
科名　てんなんしやう科(天南星科)

[釋　名]　**水昌蒲**(別錄)　**水宿**(別錄)　**莖蒲**(別錄)　**昌陽**(拾遺)　**溪蓀**(拾遺)　**蘭孫**(弘景)　時珍曰く、これは今の池澤に生える昌蒲(しやうぶ)であつて、葉に劍脊がなく、

ニ古歌ニあやめぐさト出テ居ルノハ皆此植物デアル。今世間デあやめト呼ブモノハ昔ノはなあやめデ、是レハかきつばたナドノ屬スルあやめ科(鳶尾科)ノIris屬ノモノデ、全ク種屬ヲ異ニシタ花草デアル。

(二) 木村(康)曰ク、しやうぶノ根莖中ニハ約三%ノ精油ヲ含有ス。其成分ハメチールオイゲノール、セキステルペン、ヘプチル酸パルミチン酸、$(C_{10}H_{16})_4$ナル酸オイゲノール、クレゾール、アサクルアルデヒード、アザロンペラアザロン、カラメチン、カラメン等ナリ。

朝比奈泰彦—藥誌、

根が肥えて色白く、節が疎らだ。故にこれを白昌といふのである。古代には根を菹にし食ひ、これを昌本ともいひ、また昌歜ともいひ、周の文王が好んでこれを食つたといふ。この草の溪澗に生えたものを溪蓀といふ。

集解 別錄に曰く、白昌は十月に採收する。



〔白　菖〕

藏器曰く、これは今の溪蓀のことである。一名を昌陽といひ、水の畔に生えるもので、世間ではこれをも菖蒲と呼んでゐるが、石上の昌蒲とは全然別物で、これは根が太くて臭く、色は正白色だ。

頌曰く、水昌蒲は溪澗、水澤の中に甚だ多く生えるもので、水がなければ枯れる。葉は石昌に似てゐるが、ただ中心に脊がなく、その根は乾いた後は輕虚になり、滓の多いものだ。藥には役に立たぬ。

時珍曰く、この草に二種あつて、一種の、根が太く肥えて白く、節が疎らなものは白昌であつて、俗にこれを泥昌蒲といふ。一種の、根が痩せて赤く、節はやや密

なものは溪蓀であつて、俗にこれを水昌蒲といふ。葉にはいづれも劍脊がない。溪蓀は氣味が白昌に勝るやうだが、いづれも蟲を殺す位のもので、服食には役に立たない。

(二)[氣味]【甘し、毒なし】別錄に曰く、甘く辛し、溫なり。汁は雄黃、雌黃、砒石を制す。[主治]【諸蟲を(三)食す】(別錄)【風濕、欬逆に主效があり、蟲を去り、蚤、虱を斷つ】(弘景)【研末し、油で調へて疥瘙に塗る】(蘇頌)

(一)香蒲 (本經上品)

和名 がま
學名 Typha latifolia, L.
科名 がま科(香蒲科)

(二)蒲黃 (本經上品)

和名 がま花粉

[釋名] **甘蒲**(蘇恭) **醮石**(吳普) 花上の黃粉を**蒲黃**と名ける。恭曰く、香蒲とは甘蒲のことであつて、薦に作れるものである。春初に生える。白いうちに取つて菹にし、また蒸しても食へる。(三)山南地方ではこれを香蒲といひ、昌蒲をば臭蒲といつてゐる。蒲黃といふはこの蒲の花である。

明、三〇(二九五)九九三。朝比奈泰彦―今井榮三―藥誌、大、三、(三九三)一二五七。Thomsund Beckstroem; Ber, 35, (3187) 1902.

(三)食物本草ニ殺ニ作ル。

(一)牧野曰フ、がまノ外、同屬ノ我邦產ニハこがまトひめがまトガアツテ都テ三種デアル。此等ノ花粉ハ皆蒲黃トシテ用ウルニ堪フルモノデアル。

(二)木村(康)曰ク、蒲黃ハ恐ラクがま、ひめがま等 Typha 屬ノ植物ノ二三ノモノノ花粉ヲ用ウルナルベク、タダ未ダ原

植物ト比較ヲ經ザルヲ以テ、イヅレノ種ト斷定スルヲ得ザルノミ。
（三）山南ハ隰草類漏盧ノ註ヲ見ヨ。
（四）秦州ハ石部石膽ノ註ヲ見ヨ。

【集解】別錄に曰く、香蒲は南海の池澤に生ずる。蒲黃は河東の池澤に生ずる。四月に採る。

頌曰く、香蒲は蒲黃の苗である。處處にあるもので、（四）秦州のものを良しとする。



〔香蒲・蒲黃〕

春初に生え、嫩葉が水から出たときは紅白色で茸茸としたものだ。その中心の地に入つた白蒻の太さ匕柄ほどのものを取つて生で食へば甘く脆い。又、酢で浸せば筍を食ふやうで甚だ美味だ。周禮にはこれを蒲葅といつてある。今では一般にこれを食ふことが罕だ。夏になつてから叢る葉の中から梗が抽き出て、花がその梗を抱く。その形がさながら兵士の持つ棒、杵のやうなところから、俚俗に蒲槌といふ。また蒲蕚花ともいふ。蒲黃なるものは、卽ちその花の蕊の屑で、金粉のやうに細なものだ。開かんとするときに取るものであつて、商人は蜜をまぜて菓子にし、商品として賣つてゐる。

時珍曰く、蒲は水際に叢生するもので、莞に似て褊く、脊があつて柔い。二三月、

苗が生えたときにその嫩根を採り、瀹て鮓にして一夜置いて食ふ。また煠いても蒸しても食ひ、また晒し乾して粉に磨り、飲にしても喫し得る。詩に『其の蔌伊れ何ぞ、惟れ筍、及び蒲』とあるはこれである。八九月に葉を取り収めて席にし、また扇にもなる。軟く滑かで溫なものだ。

【正誤】弘景曰く、香蒲は方藥には一向に用ゐず、世間にも採るものがない。南海地方でもやはり識つてゐない。江南から菁茅、一名香茅を貢納し、それを宗廟の(五)縮酒にするといひ、或はこれは薰草だともいひ、又はこれは燕麥だともいふ。この蒲もやはりそれに類したものであらう。

恭曰く、陶氏が引合に出した菁茅といふは三脊茅のことであつて、香茅、燕麥、薰草は田夫野人でも識つてゐる。全然香蒲の類のものではない。

蒲蒻 一名 **蒲煩**(食物) **蒲兒根**(野菜譜) (六)【氣味】【甘し、平にして毒なし】時珍曰く、寒なり。【主治】【五臟、心下の邪氣、口中の爛臭。齒を堅くし、目を明にし、耳を聰くする。久しく服すれば身體を輕くし、老衰を防ぐ。】(本經)【熱燥を去り、小便を利す】(寗原)【生で啖へば消渴を止める】(汪穎)【中を補し、氣を益

(五)縮酒ハ白酒ヲ濾過シテ清酒ヲ搾ルコトヲ云フカ。

(六)木村(康)曰ク、ひめがまノ花粉ハ脂肪油約三〇%及イソラムネチンノ配糖體ヲ含有ス。Musao Fukuda, Bull. Chem. Soc. Jap-3,53 (1928)

し、血脈を和す】(正要)【擣汁を服すれば、妊婦の勞熱煩燥、胎動下血を治す】(時珍)記載は產乳にある。

［附方］　舊二。【妬乳、乳癰】蒲黃草根を擣いて封じ、幷に煎じて汁を飮み、また食ふ。(咎殷產寶)【熱毒下痢】蒲根二兩、粟米二合を水で煎じ、一日二回に服す。(聖濟總錄)

蒲黃(本經上品)

［修治］　斅曰く、凡そこれを使用する場合に、松黃、幷に黃蒿を用ゐてはならぬ。この二種の物は全く似てゐるが、ただこの二物は味が(七)跙し、また人を吐かせるものだ。眞の蒲黃を取り、三重の紙を隔てて焙じ、色を黃ならしめて用ゐる。それを半日蒸して更に再び焙じ乾して用ゐるが妙である。大明曰く、血を破るものだ。腫を消するには生で用ゐ、血を補し、血を止めるには炒つて用ゐねばならぬ。

［氣味］【甘し、平にして毒なし】［主治］【心腹、膀胱の寒熱。小便を利し、血を止め、瘀血を消す。久しく服すれば身體を輕くし、氣力を益し、天年を延べ、神仙となる】(本經)【痢血、鼻衄、吐血、尿血、瀉血を治し、(八)水道を利し、經絡を

(七) 跙音柤、惡貌。

(八) 水ヲ飮ント欲シテ水入レバ即チ吐シ、吐已ンデ復渇スルヲ水逆ト云フ。

(九)汴ハ石部丹砂ノ汴東、汴西ノ註參照。

通じ、婦人の崩中を止める】(甄權)【婦人の帶下、月經不順、血氣の心腹痛、姙婦の下血、墜胎、血運、血癥、兒枕、氣痛、顚撲、血悶、排膿、瘡癤、遊風、腫毒。乳汁を下し、洩精を止める】(大明)【血を涼し、血を活し、心腹の諸痛を止める】(時珍)

【發明】弘景曰く、蒲黃とは蒲蘳花に著いてゐる黃色の粉のことである。甚だよく血を療するもので、仙經にも用ゐてある。

宗奭曰く、(九)汴地方では、初め篩つて滓を去り、水で調へて膏にし、握つて塊にし、一般に食つてそれで心臟の虛熱を解す。小兒が特に好んで食ふものだ。その粉は、一个月を過ぎれば燥いて色も味もみな淡くなるから、蜜水で和すがよし。多く食つてはならぬ。多く食へば自利して極めて虛し易いものである、

時珍曰く、蒲黃は手足の厥陰の血分の藥である。故に能く血を治し、痛を治するのである。生では能く行らし、熟では能く止める。五靈脂と共に用ゐれば能く一切の心腹諸痛を治す。それに就いての詳細は禽部の寒號蟲の條に記述してある。按ずるに、許叔微の本事方に『ある紳士の妻が、舌が俄かに脹れて口が塞るやうになり、聲を出すことさへ不能になつたとき、ある老人に敎へられて蒲黃を頻りに摻つた。

するとその翌曉頃には癒えて了つた』とある。又、芝隱方に『宋の度宗皇帝が花を賞玩されやうとして、ある夜俄かに舌が腫れて口に滿ちた。そのとき侍醫蔡氏が、蒲黃、乾薑末等分を乾して搽ると癒えた』とある。この二說に據れば、蒲黃の血を涼し、血を活すものだといふことが立證されるわけである。蓋し舌なるものは心の外部に現はれた一機關であり、手の厥陰の相火は心の臣である。使藥として乾薑を用ゐたのは陰、陽共に濟ふわけである。

【附方】 舊十四、新十一。【口に滿つる舌脹】方は前項にある。【重舌で瘡を生じたるもの】蒲黃末を傅ける。三回に過ぎずして瘥える。(千金方)【肺熱の衄血】蒲黃、青黛各一錢を新汲水で服す。或は青黛を去つて油、髮灰等分を入れ、生地黃汁で調へて服す。(簡便單方)【吐血、唾血】蒲黃末二兩を溫酒、或は冷水で毎日三錢づつ服するが妙である。(簡要濟衆方)【老人、幼兒の吐血】蒲黃末半錢づつを生地黃汁で調へ、患者の年齡、體格を量つて加減して服す。或は髮灰等分を入れる。(聖濟總錄)【小便出血】方は上に同じ。【小便轉胞】蒲黃を布に包んで腰腎を裹み、頭を地に下げ、數回通じをつける。(肘後方)【金瘡の出血】悶絕するには、蒲黃半兩を熱酒で灌ぎ下す。

（二〇）兒枕痛ハアトハラノイタミ。

（危氏方）【瘀血の內漏】蒲黃末二兩を用ゐ、方寸匕づつ水で調へて服し、服し盡せば止む。（肘後方）【腸痔出血】蒲黃末方寸匕づつを一日三回水で服す。（肘後方）【小兒の嬭痔】蒲黃方寸匕づつを一日三回空心に溫酒で服す。（塞上方）【脫肛の收らぬもの】蒲黃を豬脂に和して傅ける。一日三五回で癒える。（子母祕錄）【胎動して產せんとするもの】日月がまだ足らぬには、蒲黃二錢を井華水で服す。（集一方）【產婦の分娩を催す】蒲黃、地龍を洗つて焙じ、陳橘皮等分を末にして各別に取收め、その時に臨み各〻炒つて一錢を新汲水で調へて服す。立ろに產する。これは嘗て余が直接使用して甚だ妙效を擧げた。（唐愼微方）【胞衣の下らぬもの】蒲黃二錢を井水で服す。（集驗方）【產後の下血】羸瘦して死に垂たるには、蒲黃二兩を水二升で八合に煎じて頓服する。（產寶方）【產後の血瘀】蒲黃三兩を水三升で一升に煎じて頓服する。（梅師方）【（二〇）兒枕血瘕】蒲黃三錢を米飲で服す。（產寶）【產後の煩悶】蒲黃方寸匕を東流水で服するが極めて良し。（產寶）【墜傷、撲損】瘀血が內部に在つて煩悶するには、蒲黃末三錢を空心に溫酒で服す。（塞上方）【關節の疼痛】蒲黃八兩、熟附子一兩を末にし、一日一回、一錢づつを涼水で服す。（肘後方）【陰下の濕痒】蒲黃末を三四回傅ければ瘥える。

(千金方)【聤耳で膿の出るもの】蒲黄末を摻る。(聖惠)【口耳の甚しき衄血】蒲黄、阿膠を炙いて各半兩を用ゐ、二錢づつを水一盞、生地黄汁一合で六分に煎じて溫服し、急に帛で兩乳を縛り付ければ止まる。(聖惠方)【耳中の出血】蒲黄を黑く炒り、研末じて摻り入れる。(簡便方)

滓 蒲黄中から篩ひ出した赤滓である。これを蒲萼と名ける。**主治** 【炒つて用うれば腸を澀らせ、瀉血、血痢を止めること妙である】(大明)

(一)菰 (別錄下品)

和名 まこも
學名 Zizania latifolia, Hance.
科名 禾本科

釋名 **茭草**(說文) **蔣草** 時珍曰く、按ずるに、許氏の說文に『菰はもと苽と書く、瓜に從ふ諧聲だ』とある。米のあるものを彫菰と謂ふ。それは穀部の菰米の條に記載してある。江南地方では菰を呼んで茭といふ。その根が交結してゐるからである。蔣といふ意味は明かでない。

集解 保昇曰く、菰は水中に根が生え、葉は蔗、荻のやうなもので、久しく

(一)牧野曰フ、菰ハまこもデ又こもトモ稱ヘタモノデアル。野外普通ノ水草デ、夏秋花穗ヲ抽テ雌雄花ヲ一穗上ニ開キ後チ實ヲ結ブ、卽チ菰米デアル。はながつみトハ此菰ノ花ヲ云フトノ事デアル。行菜梢ヲ Ustilago esculenta, Henn. ト稱スル。黑穗病菌ガ侵セバ肥厚シテ嫩キ時ハ食用トナル。本

文ニ菰首、菰手、菰菜、菰白、菰筍、茭筍ト云ノモノガ是レデアル。日ヲ經バ莖中ノ胞子成熟シテ黑クナル、之レヲまこもずみト稱スル。卽チ本文中ノ烏鬱デアル。

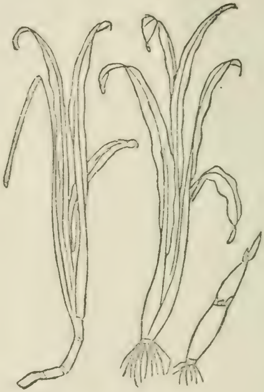
白井曰ク、菰、和名まこもトアレドモ、臺灣邊ノまこもハ內地產ヨリ葉ノ幅濶シ、ひろはまこもト稱シテ可ナラント考フ。內地ノモノハ菰首頗ル貧弱ナリ。

經たものは根が蟠つて厚い。夏季それに生える菌は食へるもので、菰菜と呼ぶ。三年經つたものは中心から藕のやうに白薹が生え、形狀は小兒の臂に似て白く軟く、中に黑脈があり、食へるものであつて、その名稱を菰首と呼ぶ。

藏器曰く、菰首の小さいものは、擘けば內部に墨のやうな黑灰のやうなものがある。烏鬱といつて世人はこれをも食ふ。晉の張翰が『吳中の蓴菰を思ふ』といつたのはこの物である。

頌曰く、菰根は江、湖地方の陂澤の中にいづれもある。水中に生え、葉は蒲、葦などのやうなもので、刈つて馬の秣にすれば甚だ肥える。春末に筍のやうな白茅が生える、それが菰菜である。またそれを茭白ともいふ。生のものも熟したものもみな食へる。甜美なものだ。その中心の小兒の臂のやうなものを菰手と名ける。菰首と書くは誤りだ。爾雅に『出隧は蘧蔬なり』とあり、註に「菰草中に生じ、形狀は土菌に似たもので、江東地方ではこれを食ふ。甜く滑かなものだ」とあるはこの物のことである。それで南方では今でも菌を菰といつてゐるが、やはりこの意味なのである。その根はやはり蘆根のやうで、冷であつて利する力が更に甚しい。二浙地

方の下地、澤地には菰草が最も多く、その根と根は結び合つて生え、久しく經つたものは(二)生えて水上に浮んでゐる。彼の地ではこれを菰葑といひ、その葉を刈り去つてから始めて耕作して物を蒔く、それでこれを一名葑田と呼んでゐる。その苗の莖にある硬いものをば菰蔣草といふ。秋になると實を結ぶ、卽ち彫胡米である。凶年には人民がそれを食糧にする。



〔菰・茭〕

○○宗奭曰く、菰は蒲の類のものだ。(三)河朔地方の邊僻な土地では、ただ馬を飼ひ薦を作るに用ゐるだけだ。八月に葦のやうな花を開き、青い子を結ぶ。粟を合せて粥にして食へば、大いに凶作の時の代用食になる。杜甫の所謂『波は菰米に漂ふて沈雲黑し』といつたのはこの物のことである。

菰筍 一名 **茭筍**(日用) **茭白**(圖經) **菰菜**(同) [氣味] 甘し、冷にして滑

(二) 井生トアルハ丼土ノ誤、土ヲ倂セテト讀ムベシ。

(三) 河朔トハ黃河以北ノ地ヲ指ス。

し毒なし】詵曰く、中を滑するものだ、多く食つてはならぬ。頌曰く、菰の種類は皆極めて冷なるものだから過食してはならぬ。甚だ人體を益せない。ただ金石を服する人だけに適する。

〔主治〕【五臟の邪氣を利す。酒皶、面赤、白癩、癧瘍、目赤、熱毒、風氣で卒かに心痛するもの。鹽醋で煮て食ふがよし】(孟詵)【煩熱を去り、渴を止め、目黃を除き、大小便を利し、熱痢を止める。鯽魚と雜ぜて羹にして食へば、胃口を開き、酒毒を解し、丹石の毒發を壓する】(藏器)

菰手　一名　**菰菜**(日用)　**茭白**(通志)　**茭粑**(俗名)　**蘧蔬**　音は毬篷(キウサウ)である。〔氣味〕【甘し、冷にして滑す、毒なし】大明曰く、微毒あり。詵曰く、性は滑して冷氣を發し、人をして下焦を寒し、陽道を傷めしめる。蜜を加へて食ふを禁ず、犯せば痼疾を發する。巴豆を服する人は食つてはならぬ。

〔主治〕【心胸中の浮熱、風氣。人の齒を滋くする】(孟詵)【煮て食へば、渴、及び小兒の水痢を止める】(藏器)

菰根　〔氣味〕【甘し、大寒にして毒なし】頌曰く、菰根はやはり蘆根のやう

なものだが、冷利の點は更に甚しい。【主治】【腸胃の痛熱、消渇。小便の利を止めるに、擣汁を飲む】(別錄)【灰に燒き、雞子白に和して火燒瘡に塗る】(藏器)

【附方】舊二。【小兒の風瘡】久しく癒えぬには、菰蔣節を燒き研つて傅ける。(子母祕錄)【毒蛇の嚙傷】菰蔣草根の燒灰を傅ける。(外臺祕要)

葉【主治】【五臟を利す】(大明)

菰米 穀部に掲げてある。

(一)苦草(綱目)

和名 せきしやうも
學名 Vallisneria spiralis, L.
科名 とちかがみ科(水鼈科)

【集解】時珍曰く、湖や澤の中に生え、長さ二三尺になり、形狀は茅、蒲の類のやうなものである。

【氣味】【主治】【婦人の白帶には煎湯を服す。又、乾茶を嗜好して已まぬために面黃となり、無力となつたものに主效があり、末にし、脂麻と炒り和して時に拘らず乾いたまま嚼む】(時珍)

(一)牧野曰フ、集解ノ文極メテ簡單デ果シテせきしやうもデアルカ否カハ能クハ判ラヌ、タダ此ニハ蘭山ニ從フテ姑ク其品ト爲シテ置クノミデアル。

(一)水萍（本經中品）

和名　あをうきくさ
學名　Lemna paucicostata, Hegelm.
和名　しはいうきくさ(新稱)
學名　Spirodela polyrhiza, Schleid.
科名　うきくさ科(浮萍科)

(二)
釋名

水花(本經) **水白**(別錄) **水鮮**(別錄)

別錄に曰く、水萍は(三)雷澤の池澤に生ずる。三月採つて暴乾する。

集解

弘景曰く、これは水中の大萍のことで、今の浮萍子のことではない。藥對に『五月白色の花がある』とあるのだから、今の溝渠に生えるものではないわけだ。楚王が江を渡るとき取つたといふはこの草の實だ。

藏器曰く、水萍に二種あつて、大なるをば蘋といひ、葉が圓く闊さ一寸ばかりある。小萍といふのは溝渠の中にあるものだ。本經にいふ水萍とはこの小なるものをいふらしい。

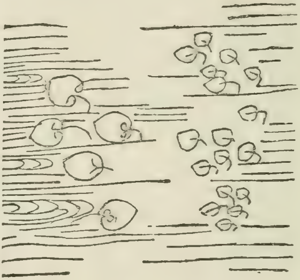
頌曰く、爾雅に『萍は蓱なり、その大なるものは蘋なり』とある。蘇恭は『三種あつて、大なるものは蘋といひ、中なるものは荇といひ、小なるものは即ち水上

(一)牧野曰フ、此ニ水萍ト云フノハ即チ浮萍デ、我邦デハうきくさト稱スル、即チ古名ノかがみぐさ、一名たれなし、一名なきものぐさデアル。二品アッテ一ヲ青萍ト云フ、即チあをうきくさデアル。一ヲ紫萍(一名紫背萍、紫背浮萍)ト云フ、即チしはいうきくさデアル。
木村(康)曰ク、上海品ハ牧野氏ノ所謂しはいうきくさノ類ナレドモ、久内清孝氏ノ横濱大德堂ニテ得タル浮萍ハ、本邦ニテハ臺灣ニ於テ池水沼澤ニ群生スルぼたんうきくさナリト。恐クハ萍蓬草ニ充ツルぼたんうきくさヲ浮萍トシテ鬻ギタル

モノナルベシ。
(二)釋名、大觀ニ據リ之ヲ補ス。
(三)雷澤ハ隰草類蓼ノ註ヲ見ヨ。

の浮萍だ』といつてあるが、今の醫家では大なるものをば用ゐない。浮萍だけを用ゐる。

時珍曰く、本草に用ゐる水萍といふは小浮萍のことで、大蘋のことではない。陶氏、蘇氏が共に大蘋を以て註してあるは誤だ。萍と蘋とは發音は近いけれども字脚が同じくなく、實物の形も遙に別なものだ。故に今はこれを訂正し、蘋の條にも互に記載した。



〔水萍〕

浮萍は、處處の池澤の流れぬ水の中に甚だ多く、春末に始めて生える。或は楊花が化したものだなどともいふ。一枚の葉から一宿經つと數枚の葉が生え、葉の下に微な鬚があつて、それが根である。一種のものは表裏面共に緑色だが、一種のものは裏面は青くして背面は血のやうに紫赤色だ。これが紫萍といふもので、藥に入れて良いものである。七月に採る。淮南萬畢術に『老血が化して紫萍となる』とあるが、

恐らくかやうな種類も自然にあるので、盡くが化したものといふではあるまい。小雅に『呦呦たる鹿鳴、野の苹を食ふ』とあるは蒿の屬をいつたのだ。陸佃がこれをこの苹としたのは誤である。

【修治】　時珍曰く、紫背浮萍は、七月に採つて揀り別け、淨く洗つて竹篩に攤して晒す。その下に一盆の水を置いて映せば乾き易い。

【氣味】【辛し、寒にして毒なし】別錄に曰く、酸し。【主治】【暴熱で身體の痒きもの。水氣を下し、酒に勝へ、鬚髮を長くし、消渇を止める。久しく服すれば身體を輕くする】（水經）【氣を下す。これで沐浴すれば毛髮を生ずる】（別錄）【熱毒、風熱、熱狂。腫毒を熁し、湯火傷、癮風を治す】（大明）【擣汁を服すれば水腫に主效があり、小便を利す。末にして酒で方寸匕を服すれば中毒を治す。膏にして面䵟に傅ける】（藏器）【風濕痲痺、脚氣、打撲傷損、目赤翳膜、口舌の瘡、吐血、衄血、癜風、丹毒に主效がある】（時珍）

【發明】　震亨曰く、浮萍は發汗劑として麻黃に勝る。
頌曰く、俗醫はこれで時行熱病を治療するが、やはり十分に發汗して甚だ有功で

ある。その方は、浮萍一兩——四月十五日に採つたもの——麻黄を根節を去り、桂心、附子を炮いて裂き、臍、皮を去つて各半兩、この四物を搗いて細に篩ひ、每服一錢を水一中盞と生薑半分で六分に煎じて滓と共に熱服する。汗が出て瘥る。又、惡疾癘瘡が全身に生じたるを治するに、濃煮汁に半日浴すると多く效がある。この方は甚だ古風にして奇なるものだ。

時珍曰く、浮萍はその性が輕浮であつて、肺の經に入り、皮膚に達する。それが能く邪汗を發する所以である。世の言傳に、趙宋の時、(一)東京で運河を掘る際に一基の石碑を掘出した。それには梵字や大篆で一首の詩が書いてあつて、何人も明に讀み得るものはなかつたが、眞人林靈素が逐字譯にそれを讀破した。それに依ると、その詩は中風を治する去風丹と名けるものの方で、

天生靈草無根幹　不在山間不在岸
始因飛絮逐東風　汎梗青青飄水面
神仙一味去沈痾(二)　采時須在七月半
選甚癱風與大風　些小微風都不算

(一)東京トハ汴京ヲ指ス。卽チ今ノ河南省開封ノ城ナリ。
(二)沈痾ハ深重ノ痾。

豆淋酒化服三丸　鐵(六)鏷頭上也出汗

といふのであつた。その法は、紫色の浮萍を晒し乾して細末にし、煉蜜で和して彈子大の丸にし、毎服一粒を豆淋酒で溶化して服するのであつて、左癱、右瘓、三十六種の風、偏正頭風、口眼喎斜、大風、癩風、一切の無名風、及び脚氣、竝に打撲傷折を治し、及び胎中の兒に傷があるとき、この藥百粒を服すればその傷いた胎兒が完全な人體となるといふのである。この方は後世に至つて紫萍一粒丹と名を易へた。

附方　舊七、新十八。

【(七)夾驚傷寒】紫背浮萍一錢、犀角屑半錢、釣藤鉤二十一箇を末にし、半錢づつを蜜水で調へて服し、續けざまに三服する。汗の出るを度とする。(聖濟錄)【消渇飲水】日に一石ほど飲むものには、浮萍の搗汁を服す。○又ある方では、乾浮萍、栝樓根等分を末にし、人乳汁で和して梧子大の丸にし、空腹に飲で二十丸を服す。三年の永いものも數日で癒える。(千金方)【小便不利】膀胱に水氣が流滯するには、浮萍を日光で乾して末にし、一日二回、飲で方寸匕づつを服す。(千金翼)【水氣洪腫】小便の利せぬには、浮萍を日光で乾して末にし、一日二回、方

(六)鏷ハ幞ノ誤。大觀ニ幞ニ作ル、幞頭ハ周武王制之、梁高祖始メテ紗ニ布漆シテ鐵ヲ施コシテ脚トナス。帽子ノ一種ナリ。

(七)夾驚トハ眩運ノコトナルベシ。

寸匕づつを白湯で服す。(聖惠方) 【霍亂心煩】 蘆根を炙いて一兩半、水萍を焙じ、人參、枇杷葉を炙いて各一兩を用ゐ、毎服五錢に薤白四寸を入れて酒で煎じて溫服する。(聖惠方) 【吐血の止まぬもの】 紫背浮萍を焙じて半兩、黄芪を炙いて二錢半を末にし、一錢づつを薑蜜水で調へて服す。(聖濟總錄) 【鼻衄の止まぬもの】 浮萍末を吹き入る。(聖惠方) 【水の中毒】 手足の指から漸次に膝、肘まで冷えるものである。浮萍を日光で乾して末にし、飲で方寸匕を服するが良し。(姚僧坦集驗方) 【大腸脱肛】 水聖散——紫浮萍を末にし、乾して貼る。(危氏得效方) 【身體の虚癢】 浮萍末一錢を、黄芩一錢と四物湯との煎湯で調へて服す。(丹溪纂要) 【風熱癮疹】 浮萍を蒸して焙じ乾し、牛蒡子を酒で煮て晒し乾して炒り、各一兩を末にし、一日二回、薄荷湯で一二錢づつを服す。(古今錄驗) 【風熱丹毒】 浮萍の搗汁を全體に塗る。(子母祕錄) 【汗斑癜風】 端午の日に紫背浮萍を採收して晒し乾し、四兩づつを水で煎じて浴し、幷に萍で擦る。或は漢防已二錢を入れるもよし。(袖珍方) 【少年の面皰】 外臺では、浮萍を用ゐ、日毎に揉んで盦し、幷に汁少量を飲む。○普濟方では、紫背萍四兩、防已一兩の濃煎汁で洗ひ、同時に萍を熱して斑點の上を擦る。一日三五回試みる。藥その

ものは如何にも些末なものではあるが、その功は甚だ大なるものだから蔑視してはならぬ。(普濟方)【粉滓面皯】溝渠に生える小萍を末にして日毎に傅ける。(聖惠方)【大風癘疾】浮萍草を三月に採り、三五回淘つて暗い穴倉へ五日間置き、飽まで日光に當てぬやうにして焙じて末にし、三錢づつを食前に温酒で服し、常に觀世音の聖號を唱へる。豬、魚、雞、蒜を忌む。○又ある方では、七月七日に紫背浮萍を取り、日光で乾して末にし、半升に好消風散五兩を入れ、五錢づつを水で煎じて頻りに飲み、同時に煎湯で洗浴する。(十便良方)【癍瘡の目に入りたるもの】浮萍を陰乾して末にし、生羊子肝半箇を水半盞で煮熟し、搗爛らしてその汁で末を調へて服す。甚しきものも一服に過ぎず、已に傷んだものも十服で效が現れる。(危氏得效方)【弩肉の眼睛にかかるもの】青萍少量を研り爛らし、片腦少量を入れて眼の上に貼るが效がある。(危氏得效方)【毒腫の初期】水中の萍子草を搗いて傅ける。(肘後方)【發背の初期】腫焮し、赤熱するには、浮萍を搗き、雞子清に和して貼る。(聖惠方)【楊梅瘡癬】水萍の煎汁に半日間浸して洗ふ。數日に一回試みる。(集簡方)【烟に燒いて蚊を去る】五月浮萍を取つて陰乾して用ゐる。(孫眞人方)

（一）牧野曰フ、てんじさうハ田字草カラ來タ名デ、其葉形ニ象ツタモノデアル。一ニたのじも（田ノ字藻）ト稱スル。此草普通ニ水中ニ生ズレドモ、水乾クトキハ陸草トナツテ繁茂スルコト集解ニ説ク所ノ如クデアル、故ニ蘭山モ言フ通リ靑蘋ト白蘋トハ元ト同品デ、甲ハ陸生ノ時、乙ハ水生ノ時ノ名デアル。

〔一〕蘋（呉普本草）

和名　てんじさう
學名　Marsilea quadrifolia, L.
科名　てんじさう科（蘋科）

釋名　**芣菜**（拾遺）　**四葉菜**（卮言）　**田字草**　時珍曰く、蘋の字はもと薲と書いたものだ。左傳に『蘋蘩、蘊藻の菜は、鬼神に薦むべく、王公に羞むべし』とあるから、薲の字には賓とする敬虔な態度を表はす意味がある、故に文字は賓の字に從つたのだ。この草は、四枚の葉が相集つて中央が十文字に折いてあるところから、俗に四葉菜、田字草、破銅錢などと呼ぶ。いづれも形容である。既往諸學者の本草では、いづれも蘋の事實を移して水萍に註した。蓋し蘋と萍との二字は發音が近いからであるが、韻書を按ずるに、蘋の字は十一眞の韻に在つて、蒲眞の切（ヒン）に發音し、萍の字は八庚の韻に在つて、蒲經の切（ヒヤウ）に發音し、切脚が同じくない。その物の實際もやはり異



〔蘋〕
—四葉菜圖—

るのである。本書は呉普本草に依據し、別に一條を設けて此に記載した。

【集解】普曰く、水萍、一名水廉。池澤の水上に生じ、葉は圓く小さく、一本の莖に一枚の葉があり、根は水底に入る。五月白色の花を開く。三月採取して日光で乾す。

弘景曰く、水中の大萍は五月白色の花を開く。溝渠に生えるものとは違ふ。楚王が江を渡つたとき取つたといふはこの物の實である。

恭曰く、萍に三種あつて、大なるをば蘋と名け、中なるをば荇と名け、葉はいづれもよく似て圓い。その小なるは水上の浮萍である。

藏器曰く、蘋は、葉が圓く濶くして一寸ばかりあり、葉の下に水沫のやうな一點がある。一名芣菜といふ。藥に入れて用ゐるものだ。小萍といふは溝渠の中に生えるものだ。

禹錫曰く、按ずるに、爾雅に『萍は蓱なり、その大なるものを蘋といふ』とあり、又、詩に『于に以て蘋を采る、澗の濱に』とあり。陸機は注して『その粗く大なるものを蘋といひ、小なるものを萍といふ。春末に始めて生えるもので、糝と共に蒸

して茹にして食へる。又、苦酒で漬けて酒のツマにする』といつた。けれども今の醫家にはこの蘋を用ゐるものがない。ただ小萍のみを用ゐてゐる。

時珍曰く、蘋とは四葉菜のことである。葉は水面に浮び、根は水底に連り、その莖は蓴、荇よりも細く、その葉の大いさは指の端ほどあり、表は青く裏は紫で細紋があり、頗る馬蹄決明の葉に似たもので、四枚の葉が合して中が十文字に折け、夏、秋に小さい白色の花を開くところから白蘋と稱する。その葉が集りむらがり、萍のやうなところから、爾雅に『大なるものは蘋』といつたのである。呂氏春秋に『菜の美なるものに崑崙の蘋あり』とあるがこの草のことである。韓詩外傳に『浮くものを藻といひ、沈むものを蘋といふ』とあり、臞仙は『白花のものは蘋、黄花のものは荇、卽ち金蓮である』といひ、蘇恭は『大なるは蘋、小なるは荇』だといひ、楊愼の卮言には『四葉菜は荇だ』といひ、陶弘景は『楚王が取つたものは蘋だ』といつた。これ等はいづれもその所説に一定の根據がない。蓋し深くその物の實體に就いて確實な調査を試みたことがなく、ただ机上の臆度だけに過ぎなかつたのだ。

余は、その實物の一一に就いて研究を試みた結果、頗るその眞相を摑み得た。

葉の徑一二寸、一箇所の缺があり、形が圓く、馬跡のやうなものは蓴である。蓴に似て、やや尖つて長いものは莕であつて、花にはいづれも黄、白の二色がある。

葉の徑四五寸、小さい荷葉のやうで、花が黄色、小角黍（せうかくしよ）のやうな實を結ぶものは萍蓬草である。楚王が取つた萍實といふはこの萍の實だ。

四枚の葉が合成して一葉となり、田の字のやうな形になつたものは蘋である。かやうに區別して見れば、自ら一目瞭然たるわけだ。

又、項氏は『白蘋は水中に生じ、青蘋は陸地に生ずる』といつたが、按ずるに、今の田字草といふものには水、陸の二種類あつて、陸生のものは多くは稻田や水溜りの場所に生え、その葉は四片が一に合して白蘋と一様だが、ただ莖が地に生えて高さ三四寸になる。これは食へないもので、方士が取つて硫を煆（や）き、炒を結し、汞を煮る場合に用ゐ、水田翁といつてゐるものである。項氏の所謂青蘋とは蓋しこの物をいつたのだ。或は青蘋は水草だといふものもあるが、それは誤である。

【氣味】〔甘し、寒にして滑す。毒なし〕【主治】〔暴熱に水氣を下し、小便

(一)牧野曰ク、萍蓬草ハ我邦學者ノ考定シタ樣ニ之レチかはほねニ充ツルハ正シイ事ト思フ。集解中ニ引クル北戸錄ノ睡蓮ハ從來ひつじぐさ卽チ子午蓮ニ充ツテ居ルガ、是レモ多分中ツテ居ル事ト思ハルル。

を利す】(呉普)【擣いて熱瘡に塗る。擣汁を飲めば蛇傷の腹内に入つたものを治す。曝乾して栝樓と等分を末にし、人乳で和して丸にして服すれば消渇を止める】(藏器)【これを食へば勞を已む】(山海經)

(一)萍蓬草(拾遺)

和名　かはほね
學名　Nuphar japonicum, DC.
科名　ひつじぐさ科(睡蓮科)

【釋名】**水栗**(綱目)　**水栗子**　時珍曰く、陳藏器の拾遺に載せた萍蓬草といふは今の水栗のことである。その子が栗のやう、蓬子のやうなもので、俗間ではこれを水栗包と呼んでゐる。又、水栗子とはその根の味をいふのだ。或は水笠とも書く。



〔萍蓬草〕
—求栗—

【集解】藏器曰く、萍蓬草は南方の池澤に生ずる。葉は大きくして荇のやうだ。花もやはり黄色だが、まだ開かぬ時の形狀は算袋のやうである。その根は藕のやうだ。凶作の年には穀類の代用にもなる。

時珍曰く、水粟は三月に水から出る。莖の太さは指ほどになり、葉は荇の葉に似て、太さは徑四五寸になり、初生の荷葉のやうである。六七月に黄色の花を開き、結實の形狀は角黍のやうで、長さ二寸ばかり、內部に細子があり、一包になつてゐて罌粟のやうだ。澤州では農民がこれを採り、洗ひ擦り皮を去つて蒸し曝し、舂期に米を取つて粥、飯にして食ふ。その根は大いさ栗ほどで、また雞頭子の根のやうでもある。凶年にはこれも食料とするが、藕のやうな香氣があり、味は栗子のやうだ。昔、楚王が江を渡つた時に取つた萍實は、大いさ斗の如く、赤きこと日の如く、これを食へば蜜のやうに甘かつたといふ。蓋しこの物の類である。水萍ではその實を取り得やう筈はない。萍蓬草は、三四月に莖、葉を採り、汁を取つて硫黄を煮るに能く火を拒ぐ。又、段公路の北戸錄にある睡蓮といふも、やはりこの草の類である。その葉は荇のやうで大きく、その花は葉に布いて數重になり、夏の日中に花を開き、夜は縮んで水に入り、それが翌日にはまた水上に出るものである。

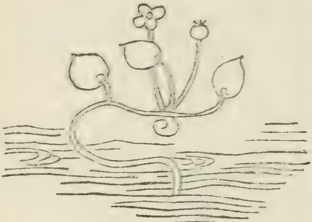
子　氣味　「甘く澀し、平にして毒なし」　主治　【脾を助け、腸を厚くし、人をして饑を覺えざらしめる】（時珍）

根 [氣味] 【甘し、寒にして毒なし】 [主治] 【煮て食へば虛を補し、氣力を益す。久しく食すれば饑ゑず、腸、胃を厚くする】(藏器)

(一)莕　菜（唐本草）

和名　あさざ
學名　Limnanthemum nymphoides, Hoff. et Link.
科名　りんだう科(龍膽科)

[釋名] **鳧葵**(唐本) **水葵**(馬融傳) **水鏡草**(土宿本草) **靨子菜**(野菜譜) **金蓮子** **接余** 時珍曰く、按ずるに、爾雅に『莕は接余なり、その葉を苻といふ』とある。して見ると、鳧葵は苻葵と書くべきもので、古文ではそれを通じ用ゐただけのことである。或人は鳧が好んで食ふから鳧葵と稱するのだといふが、それでも通じる。その性は滑するもので葵のやうであり、その葉が頗る莕に似てゐるから、葵といひ、莕といふのである。詩經には荇と書いてあり、俗に荇絲菜と呼ぶ。(二)池州地方ではこれを莕公鬚といひ、



一鳧葵一(莕)

(一)牧野曰フ、是レ詩經ノ荇菜デアル。集解ノ水鼈ヲとちかがみ(とちかがみ科)ニ充ツル從來ノ說ハ中ツテ居ルト思フ、是レ其葉ノ水面ニ泛ビ[illegible]ガアル事ガ其記文ト一致シテ居ルカラデアル。とちかがみノ學名ハ Hydrocharis Morsus-ranae, L. var. asiatica, Makino. デアル。植物名實圖考、卷ノ十七ニハ之レヲ馬尿花、一名水旋復、一名茶菜ト謂ツテ居ル。

(二)池州ハ[illegible]ノ注ヲ見ヨ。

(三)淮ハ安徽、江蘇地方。

(三)淮地方では匽子菜といひ、江東地方では金蓮子といふ。許氏の說文には、これを攣とした。攣の發音は戀(レン)である。楚辭には屏風といひ『紫莖の屏風、綠波を文にする』とあるはこの草である。

[集解] 恭曰く、鳧葵とは莕菜のことである。水中に生ずる。

頌曰く、處處の池澤にある。葉は蓴に似て莖は澀り、根は甚だ長く、花は黃色である。郭璞注爾雅には『水中に叢生するもので、葉は圓くして莖の端にあり、その長、短は水の深、淺に隨ふ。江東地方ではこれを食ふ』とある。陸機の詩の疏には『荇は、莖は白くして葉は紫赤色、正く圓くして徑一寸餘あり、水上に浮きて生え、根は水底に在る。大さは釵股ほどで、上部は青く、下部は白い。酒のツマに用ゐ得るもので、苦酒でその白莖を浸せば味が肥美なるものだ』とある。しかし今一般には食はない。醫方でも用ゐることは稀だ。

時珍曰く、莕と蓴とは一類の二種であつて、いづれも根は水底に連り、葉は水上に浮ぶ。その葉の馬蹄に似て圓いものは蓴、葉が蓴に似て微し尖つて長いものは莕である。夏期にいづれも黃色の花を開き、白花のものもある。結實の大いさは棠梨

ほどで、中に細子がある。按ずるに、獻寧王の庚辛玉冊に『鳧葵の黄花のものは莕菜、白花のものは白蘋、卽ち水鏡草である。一種泡子あるを水鼈と名ける。かく數種あるが、その功用は同一のものであつて、その莖、葉、根、花、いづれも硫を伏し、砂を煮、礬を制し得る』とある。これは花の色から蘋と莕を區別したもので、まだ穩當だとは云ひ難いやうである。詳細は蘋の條を見よ。

【正誤】 恭曰く、鳧葵は、南方地方では豬蓴と呼ぶ。食へるものである。有名未用の條に記載してある。

志曰く、鳧葵とは莕菜のことであつて、葉は蓴に似て極めて長い。江南地方では多くこれを食ふ。ここに豬蓴といふは誤りだ。現に春、夏に生え、細長くして肥滑なものを絲蓴といひ、冬までであつて粗く短いものを豬蓴といひ、また龜蓴と呼ぶ。鳧葵とは全然似てゐない。しかし有名未用の各類中に、鳧葵、豬蓴の名稱の載つてゐないのは、これは後世のものが刪り去つたものかも知れぬ。

時珍曰く、楊愼の卮言に、四葉菜を莕といつたのも誤だ。四葉菜とは蘋のことである。

氣味【甘し、冷にして毒なし】主治【消渇に熱を去り、小便を利す】(唐本)【擣汁を服すれば寒熱を療ずる】(開寶)【擣いて諸腫毒、(四)火丹遊腫に傅ける】(時珍)

附方 新四。【一切の癰疽】及び痔瘻には、莕絲菜、或は根、馬蹄草莖、或は子——即ち蓴である——各半碗を取り、苧麻根五寸を皮を去り、共に石器で搗爛らして毒の四圍に傅ける。春、夏、秋は一日に四五回換ひ、冬は二三回換へる。換へるとき薺水で洗ふが甚だ效がある(保生餘錄)【穀道に瘡を生じたるもの】荇葉を搗爛らし、綿で裹んで下部に納れる。一日三回。(范汪方)【毒蛇の螫傷】牙が肉中に入り、堪へ難く痛むには、患者に知らせずに、私かに荇葉でその上穽を覆ひ、物を以て二時間ほど包んで置く。折れた牙が自ら出る。(肘後方)【點眼して瞖を去る】莕絲菜根——葉が馬蹄のやうで黄花を開くものである——一錢半を搗爛らし、川練子十五箇、膽礬七分、石決明五錢、皂莢一兩、海螵蛸二錢を各末にし、菜根と共に水一鍾で二晝夜煎じて滓を去り、一日數回點眼する。七日で效が現はれる。(孫氏集驗方)

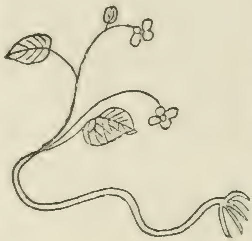
(四)火丹ハ丹毒ノ一名。

蓴(一)（別錄下品）

和名　じゆんさい
學名　Brasenia peltata, Pursh.
科名　ひつじぐさ科（睡蓮科）

釋名　**茆**　卯（ボウ）柳（リウ）の二音である。**水葵**（詩疏）　**露葵**（綱目）　**馬蹄草**

時珍曰く、蓴の字はもと蒓（じゆん）と書き、純に從ふのである。純とは絲に對する名であつて、それをこの草の名に用ゐたのは、その莖が似てゐるからである。齊民要術に『蒓は性が純であつて生じ易い。これを栽培するには水の淺深で適度を計るもので、水が深ければ莖が肥えて葉が少く、水が淺ければ莖が瘦せて葉が多くなる。その性は水を逐ひ、滑するものだから蒓菜と謂ふ』とある。また葵なる名稱の起原に對しては、顏之推の家訓に『蔡朗は父の諱（いみな）を蒓といつたので、蒓を呼びかへて露葵（ろき）といつたのだ。北方地方ではそれを知らずして綠葵をさういつてゐる』とある。詩に『薄采其れ茆』とあるは卽ち蒓の



〔蓴〕
―馬蹄草―

(一) 牧野曰フ、蓴卽チじゆんさいニハ尙 B. purpurea, Casp. 幷ニ B. Schreberi, Gmel. ノ學名ガアル。其粘滑物ニ纏ハレタル嫩莖嫩葉ヲ食用ニ供スル事ハ衆ノ能ク知ル所デアル。

ことである。或はその名を諱んで錦帶ともいふ。

［集解］保昇曰く、蓴は、葉は鳬葵に似て水の表面に浮ぶ。莖を採つて食へるものだ。花は黃白色、子は紫色で、三月から八月までは、莖が釵股ほどに細くして黃赤色だ。その長くなると短くなるとは水の深淺による。これを名けて絲蓴といふ。味は甜く、體は軟だ。九月から十月までには、漸次に粗く硬くなる。十一月には泥中に萮芽があつて、粗く短い。これを名けて瑰蓴といふ。味は苦く、體は澀る。世人はこの汁を取つて羹にするが、やはり雜菜に勝る。

時珍曰く、蓴は南方諸地の湖澤中に生え、吳越地方ではよくこれを食ふ。葉は荇菜のやうだがやや圓く、その形は馬蹄に似てゐる。莖は紫色、太さ筯ほどで、柔く滑かで羹になる。夏期に黃色の花を開き、結實は靑紫色で、大いさ棠梨ほどあり、中に細子がある。春、夏のまだ葉の出ぬ嫩莖を稚蓴といふ。稚とは小さいの意味だ。葉がやや長く舒びたものを絲蓴といふ。その莖が絲のやうだからだ。秋になつて老いたものをば葵蓴といひ、或は豬蓴ともいふ。それは豬の飼糧になるからだ。また瑰蓴、龜蓴などとも訛つていふ。その他に就ては鳬葵の條に記載してある。

【氣　味】【甘し、寒にして毒なし】藏器曰く、蓴は水草ではあるが、性は熱であつて、擁するものだ。

詵曰く、蓴は冷にして補するものではあるが、熱食し、または多食すれば、やはり氣を擁して下らざらしめ、甚だ胃、及び齒を損じ、顏色を惡くし、毛髮を損ずる。醋に和して食へば骨痿になる。

李廷飛曰く、多食すれば、性が滑であつて痔を發す。七月頃には蟲が付いてゐるもので、それを食へば霍亂になる。

【主　治】【消渴、熱痺】(別錄)【鯽魚と和して羹にして食へば、氣を下し、嘔を止める。多食すれば、丹石を壓し、大小腸の虛氣を補す。過多に食ふことは宜くない】(孟詵)【熱疸を治し、腸、胃を厚くし、下焦を安じ、水を逐ひ、あらゆる藥毒、並に蠱氣を解す】(大明)

【發　明】弘景曰く、蓴は性冷にして補し、氣を下す。鱧魚に雜ぜた羹を食つてもやはり水を逐ふ。しかし性滑であつて、服食家には多く用ゐられぬものだ。

恭曰く、蓴は、久しく食すれば大いに健康によく、鯽魚と合せて羹にして食へば、

主として胃弱で食物の落付かぬに至效があり、又、老人によく、上品の內に入るべきほどのものだ。故に張翰は『秋風に臨んで吳中の鱸蓴羹を思ふ』といつたのである。

藏器曰く、蓴は、體が滑かなもので、常食すれば氣を發し、關節を急せしめ、嗜眠せしめる。脚氣論中に、これを食へといつてあるが、これは誤も極めて深いものである。溫病後、脾弱で消化不能のものであつたならば多くは死亡する。予は湖附近に住んでゐたが、湖中には蓴と藕が多く、ある年、疫が甚しく流行し、食に饑ゑてその蓴を採つて食つた者は、病が癒えたものまでも死亡して了つた。ところが秋になると甚しい旱天が續き、世間に血痢を病むものが多く出たとき、湖中の水が竭れたので、此度は藕を掘つて食ひ、それで附近一帶だけが全く無事なるを得た。蓴と藕との功力の差はこれ等の事實に據つても明かに知り得られる。

附方　新三。【一切の癰疽】馬蹄草、卽ち蓴菜を、春、夏は莖を用ゐ、冬季は子の根の側に著いてあるものを取り、搗爛らして傅ける。まだ成らぬものはそれで消し、已に成つたものは毒が散ずる。(二)菜を用ゐてもよし。(保生餘錄)【頭上の惡瘡】黃泥で豆豉を包んで煨熟し、取出して末にし、蓴菜を以て油で調へて傅ける。

(二)菜ノ誤ナルベシ。

(保幼大全)【數種の疔瘡】馬蹄草――又、缺盆草と名ける――大青葉、臭紫草各等分を擂(す)り爛らし、酒一碗に浸して滓を去り、三回に溫服すれば立ろに癒える。(經驗良方)

(一)水藻（綱目）

聚藻　和名 きんぎよも(ほざきのふさも)
學名 Myriophyllum spicatum, L.
科名 ありのたふ科(蟻塔科)

馬藻　和名 えびも
學名 Potamogeton crispus, L.
科名 ひるむしろ科(眼子菜科)


[水藻・海藻]

【釋名】時珍曰く、藻とは文のある水草のことで、藻浴(さうよく)したやうに潔淨なものだから藻といふのである。

【集解】頌曰く、藻は水中に生えるもので、處處にある。周南の詩に『于(ここ)に以て藻を采(と)る、沼に沚(し)に、彼の行潦(かうれう)に』とあるはこの藻であつて、陸機の註に『藻は水底に生えるもので、二種ある。葉は雞蘇のやう、莖は筯(はし)くらゐ、長さ四五尺のものと、また一種の、葉は蓬蒿のやう莖は釵股ほど

(一)牧野曰フ、水藻ハ淡水中ニ生エル藻(も)ノ總稱デアル。集解ニ在ル兩種ハ下ノ如キモノデアル。然シ馬藻ハ或ハ同屬中ノ何カ別ノ種ノモノカモ知レヌガ、今姑クえびもト定メ置クガ是レハやなぎもデハナイ。

（二）荊揚ハ支那ノ南半部、卽チ淮水、漢水以南。古ノ荊州、揚州ノ地チイフ。

の聚藻といふものとである。この二種の藻はいづれも食し得る。熟し挼んで腥氣を去り、米麪糝で蒸して茹にすると、甚だ滑かく美味である。（二）荊揚地方では饑饉の際に穀物の代りに、これを食ふ』とある。

○○藏器曰く、馬藻は水中に生える。馬齒のやうに相連つたものだ。

○○時珍曰く、藻に二種あつて、水中に甚だ多い。水藻は葉の長さ二三寸、兩兩相對して生える。卽ち馬藻である。聚藻は葉が細くして絲のやう、また魚鰓などのやうなもので、節節に連つて生える。卽ち水蘊であつて、俗に鰓草、牛尾蘊などいふはこれである。爾雅に『莙は牛藻なり』とあり、郭璞の注に『細葉、蓬茸、絲の如くにして愛すべし、一節の長さは數寸、長いものは二三十節ある、卽ち蘊である』といつてある。この二種の藻は共に食し得るが、藥に入れるには馬藻が勝れてゐる。左傳に『蘋蘩薀藻の菜』とあるはこのもののことである。

【氣味】【甘し、大寒にして滑す、毒なし】【主治】【暴熱、熱痢を去る。渇を止めるには擣汁を服す。小兒の赤白遊瘮、火焱熱瘡には擣爛らして封ずる】（藏器）

【發明】○○思邈曰く、凡そ天下に極冷なること藻菜に過ぐるものはない。ただ熱

毒腫または丹毒の患者には、濠の中に生えた藻菜を取り、切り擣いて三分厚さに傅け、乾く毎に易へる。その效驗は他に比較すべきものがない。

（一）海　藻（本經中品）　海中に生ずる藻類の總名。

【釋名】 **薚** 音は單(セン)である。爾雅に出てゐる。別錄には藫(じん)と書いてある。

落首（本經） **海蘿**（爾雅註）

【集解】 別錄に曰く、海藻は東海の池澤に生ずる。七月七日に採つて暴乾する。

弘景曰く、海島の附近に生ずる。色黒く亂髮のやうで、その大小と葉とは大體に於て藻の葉に似てゐる。

藏器曰く、この物に二種ある。馬藻といふは淺い水の中に生え、短い馬尾のやうで細く、色が黒い。これを用ゐるには、浸して鹹(かん)味を去つて用ゐる。大葉藻といふは深い海の中に生えるもので、新羅國(しんらこく)の海に產する。葉は水藻のやうで大きい。海人が腰に繩を繋いで水中に入つて取るのであるが、五月以後には大魚が現れて、人に危害を加へるから採取が不可能になる。爾雅に、綸とあるは綸に似たもの、組と

（一）牧野曰フ、海藻ハ水藻ニ對シテノ名デ、即チ海中ニ生ズル藻類ノ總稱デアル。集解ニ馬尾藻ト大葉藻トノ二種ガアッテ、蘭山ノ本草綱目啓蒙ニハ馬尾藻ヲ古名なのりそノほんだはら(Sargassum enerve Ag.)トシ、大葉藻ヲひるむしろ科ノあまも即チあぢも(Zostera marina, L.)ニ充テアレドモ、集解ノ筆說デハ果シテ其レガ其通リデアルカ頗ル明瞭ヲ缺イテ居ルノデ、私ハ今遽カニ之レヲ肯定スル事ガ出來ヌ。要スルニ私ハ此馬尾藻モ大葉

あるは組に似たもので、東海にあるとあるは正にこの二藻のことだ。

頌曰く、これは海中に生える水藻のことで、今は(二)登、萊の諸州にある。陶隱居は、爾雅の綸、組とあるを昆布の說明に引用して、昆布は組に似てゐるといひ、青苔、紫菜は綸に似てゐるといつてあるが、陳藏器は、綸、組をこの二藻だといつた。しかし陶隱居の說の方が事實に近いやうである。

時珍曰く、海藻は近海の諸地で採取する。また海菜ともいふ。それに種種の名目を付けて諸方へ販賣するのだ。

【修治】斅曰く、凡そこれを使用する場合には、生烏豆、幷に紫背天葵と三物を共に蒸し、一伏時の間蒸して日光で乾して用ふべきものである。時珍曰く、近頃は一般に、ただ鹹味を洗淨し去り、焙じ乾して用ゐる。

【氣味】【苦く鹹し、寒にして毒なし】權曰く、鹹し、小毒あり。之才曰く、甘草と反する。時珍曰く、按ずるに、東垣李氏の瘰癧、馬刀を治する散腫潰堅湯に、海藻、甘草を兩ら用ゐてある。蓋しその理由は、堅積の病は平和の藥では速かに徹底するわけに行かぬ。必ず反奪してその功果を擧げしむべきものだからである。

藻モ尙未詳ノ品デアルト思フ。或ハ馬尾藻ハSargassum屬ノモノカモ知レヌガ、其レトシテモ其種名ハ容易ニ明ラメ難イモノデアル。

(二)登、萊ハ山東省ノ東北部。

（三）結氣散頸下硬核痛ノ八字、本經ニハ氣、頸下核、破散結氣ニ作ル。
（四）本經、雷字ナシ。
（五）大觀ニ急心下ヲ疾急ニ作ル。

主治　【癭瘤、（三）結氣。頸下の硬核痛、癰腫、癥瘕、堅氣で腹中の上下が（四）雷鳴するものを散じ、十二種の水腫を下す】（本經）【皮間積聚の暴癀、瘤氣結熱を療じ、小便を利す】（別錄）【百邪鬼魅を辟け、氣（五）急で心下の滿するもの、疝氣が下墜して疼痛し、卵腫するを治し、腹中に幽幽として聲の聞ゆるを去る】（甄權）【奔豚の氣、脚氣、水氣浮痛、宿食不消、五膈痰壅を治す】（李珣）

發明　元素曰く、海藻は、氣、味共に厚く、純陰にして沈である。癭瘤、馬刀、諸瘡の堅くして潰れぬものを治す。經に『鹹は能く堅を軟にす』とあつて、營氣が順調ならずして外部に浮腫となつて現はれたものは、それぞれ引經の藥に隨つて用ゐる。腫の消かぬといふことがない。

成無已曰く、鹹味は涌泄するものだ。故に海藻の鹹は水氣を泄するのである。

詵曰く、海藻は男子の陰を起し、男子の癀疾を消す。常に食するがよし。それで南方地方では多く食ふが、北方地方のものがそれに倣つて食へば、諸種の疾病がますます生ずる。一向によくない。

時珍曰く、海藻は、その鹹がよく潤下し、寒がよく熱を洩し、水を引く。故によ

く癭瘤、結核、陰𤸪(いんたい)の堅聚を消し、浮腫、脚氣、留飲、痰氣の濕熱を除き、邪氣を小便から排出せしめるのである。

【附方】 舊二、新三。

【海藻酒】癭氣を治す。海藻一斤を絹袋に盛つて清酒二升に浸し、春、夏は二日、秋、冬は三日浸し、一日三回、二合づつ服す。酒が盡きたときは再び作る。その滓は曝乾して末にし、一日三回、方寸匕づつを服す。二劑に過ぎずして瘥える。(范汪方)

【癭氣の初期】海藻一兩、黃連(わうれん)二兩を末にし、時時に舐(な)めて嚥む。豫(あらかじ)め一切の濃厚な味の食物を斷つ。(丹溪方)

【項下の瘰癧】梅、李などのやうな形狀のものには、前記の方の海藻酒を連(しき)りに服するがよし。それで消(ひ)く。(肘後方)

【蛇盤瘰癧】頭部から項部に相接し交るものには、海藻菜を蕎麪で炒り、白殭(びやくきやう)蠶(さん)を炒つて等分を末にし、白梅を湯に泡(つ)けて和して梧子大の丸にし、六十丸づつを米飲で服す。必ず毒氣を泄出する。(危氏得效方)

(一)海 蘊 (拾遺)

蘊は温、縕、醖(いづれもウン、又はヲンな平聲、上聲、去聲の三聲に發音する)の三音である

和名 未詳
學名 未詳
科名 藻類なれども科は未詳

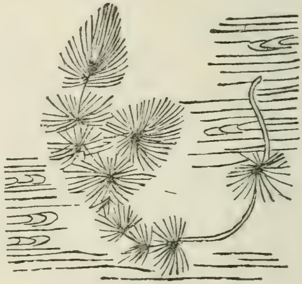
(一) 牧野曰フ、本草綱目啓蒙ニ之レヲもづく (Cladosiphon decipiens, Okam.=

Mesogloea decipiens, Suring.) トシテアレドモ、是レハヨイ加減ナ充テ方デ信據スルニ足ラヌ。要スルニ海蘊ハ未詳ノ海藻デアルト云フヨリ外、定メヤウノナイモノデアル。植物名實圖考、卷ノ十八ニ圖アレドモ判然セヌ。

（二）癊ハ病心ニアルヲ云フ。

（一）牧野曰ク、本草綱目啓蒙、卷ノ十五ニ此海帶ヲこんぶノ一種デアルほそめ、一名みづめ、一名みづわかめ、一名ほんめ（Laminaria religiosa, Miyabe.）ニ充ツ。植

【校正】草部より此に移し入る。



[水蘊・海蘊]
——鰓草——

【釋名】時珍曰く、縕とは亂絲のことであつて、その葉が似てゐるところから名けたものである。

【氣味】【鹹し、寒にして毒なし】

【主治】【癭瘤結氣の喉間にあるものに用ゐて水を下す】（藏器）【水(すゐ)（二）に癊(いん)主效がある】（蘇頌）

海帶（一）（宋嘉祐）

和名　こんぶ
學名　Laminaria spp.
科名　こんぶ科（昆布科）

【集解】禹錫曰く、海帶は東海の水中の石上に出る。海藻に似て粗く、柔く靱(つよ)くして長い。現に登州地方では、これを乾して器物を束ねるに用ゐてゐる。醫家で

物名實圖考、卷ノ十八ノ圖モ帶ノ如キこんぶノ樣ノ者ヲ示シテ居ルカラ啓蒙ノ說モ惡クハナイガ、然シ海帶ハ必ズシモ此一種ニ限ラズニこんぶノ總稱ト見ルノガ穩當デアラウ。支那デハ我邦ヨリ同國ヘ輸入スルこんぶヲ東洋海帶（トンヤンハイタイ）ト稱シテ居ル。

（一）牧野曰フ、昆布ハ今植物名實圖考、卷ノ十八ノ圖ヲモ參酌シテ姑ク之レヲわかめト定メ置ク。本草綱目啓蒙ニ據レバ朝鮮人ハわかめノコトヲ昆布ト書クト見エテ居ル。普通ニこんぶト稱スルハ原ト昆布ノ字面カラ來タ

は水を下すにこれを用ゐるが、海藻、昆布に勝るものである。

氣味【鹹し、寒にして毒なし】

主治【分娩を催す。婦人の病を治し、また風を療じ、水を下す】（嘉祐）【水病、癭瘤を治するその功力は海藻に同じ】（時珍）



〔海　帶〕

（一）昆　布（別錄中品）

和名　わかめ
學名　*Undaria pinnatifida*, Suring.
科名　こんぶ科（昆布科）

釋名　**綸布**　時珍曰く、按ずるに、呉普本草に『綸布、一名昆布』とあるは、爾雅に所謂『綸は綸に似たもので、東海にある』といふもの、卽ち昆布である。綸は關（クワン）と發音し、青絲の綬のことである。それを訛つて昆といつたのだ。陶弘景は、綸を『青苔、紫菜などだ』といひ、組を『昆布だ』といつてゐる。陳藏器は

モノナレドモ、昆布ハ今日吾人ノ謂フこんぶデハナイト考ヘル。此謂ユルこんぶハ前條ノ海帶デアル。

又、『綸と組とは二種類の藻だ』といつてゐる。まことにまちまちである。

集解　別錄曰く、昆布は東海に生ずる。

弘景曰く、今はただ高麗に出る。繩にし束ね括つて巻麻のやうにしたものである。黄黒色で柔く靭い。食し得る。爾雅に『綸は綸に似たり、組は組に似たり、東海にある』とあつて、今の青苔、紫菜などはいづれもその綸なるもののやうである。しかし昆布もやはり組に似てゐるから恐らく、それに相違あるまい。

藏器曰く、昆布は南海に生ずる。葉は手の大いさほどで、蓴、葦などに似て紫赤色だ。そのものの細葉のものが海藻である。



〔昆布〕

珣曰く、昆布なる草は流に順つて生えるもので、新羅に産するものは葉が細くて黄黒色だ。胡人はこれを緉つて索にし、それを陰乾して中國に舶來輸入する。

時珍曰く、昆布は、登、萊に生ずるものは搓つて繩索のやうにしたものだ、閩、

（二）箄ハ甑箄ナリ、甑底ヲ蔽フモノナリ。

（三）陰癀トハ鼠蹊脫腸、陰囊脫腸ノ類。

浙に出るものは葉が大きくして菜に似てゐる。蓋し海中に生ずる諸菜は、性、味が相近く、主たる治療上の效果も大體一樣であつて、やや同じからぬ點はあるにしても、やはり大なる差異はないものだ。

【修治】斅曰く、凡そ昆布を使用するには、昆布一斤每に甑（二）箄大小十箇を用ゐて、細剉して東流水で午前十時から午後十時まで煮る。それで鹹味が去つてから晒し焙じて用ゐるのである。

【氣味】【鹹し、寒にして滑する、毒なし】普曰く、酸く鹹し、寒にして毒なし。權曰く、溫にして小毒あり。【主治】【十二種の水腫、癭瘤、聚結氣、瘻瘡】（別錄）【積聚を破る】（思邈）【（三）陰癀腫を治するには含んで汁を嚥む】（藏器）【水道を利し、面腫を去り、惡瘡、鼠瘻を治す】（甄權）

【發明】杲曰く、鹹は能く堅を軟にする。故に癭の石のやうに堅きには、この物以外では除けない。海藻と同功である。

詵曰く、昆布は氣を下す。久く服すれば瘦せるものだ。故にその病のないものは食はぬがよし。海岸や島嶼の住民は好んで食ふが、それは他に好い菜がないために

（四）大觀ニ酢下ニ豉字アリ。
（五）大觀ニ津ニ作ル。
（六）大觀ニ（千金翼）ノ三字アリ。
（七）大觀ニ項ヲ頷ニ作ル。

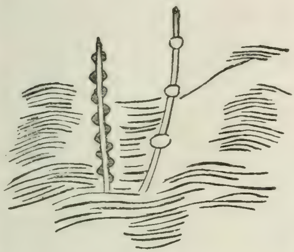
食ふのであつて、これを久しきに亙つて服食して、習性となつてゐるから病が發らぬのだ。ところが、その功力の點だけ北方の地方へ言ひ傳はつて、北方人がそれを食つて皆病に罹る。これは水、土の關係から體質がこの物に適せぬからだ。凡て海中の菜なるものは、いづれも人體を損ずるものだから多食してはならぬ。

附方 舊四。【昆布臛】膀胱の結氣を治するには、急に氣を下さねばならぬ。高麗の昆布一斤を白米泔に一夜浸して鹹味を洗ひ去り、水一斛で煮熟して細く擘き、葱白一握を寸斷して入れ、更に煮て極端に爛らし、そこで鹽、酢（四）、糝、薑、橘、椒末を投じて調和して食ふ。これと同時に粱米、粳米の飯を食ふがよし。極めて能く氣を下すもので、忌むものなし。海藻もやはりこの方法で作るがよし。（廣濟方）【癭氣結核】瘰癧と腫れて硬きには、昆布一兩を鹹を洗ひ去り、晒し乾して散にし、一錢づつを綿に裹んで好醋に浸し、それを含んで（五）汁を嚥む。味が盡きたときは再び易へる。（聖惠方）【項下の五癭】方は上に同じ。（六）【（七）項下の卒腫】その腫囊が漸次に大きくなつて癭にならうとするには、昆布、海藻等分を末にし、蜜で杏核大の丸にし、時時に含んで汁を嚥む。（外臺祕要）

(一)越王餘算（海藻）

和名　うみやなぎ（うみかんざし、をとめのもとゆひ）
學名　*Virgularia* sp.
科名　うみえら科（海鰓科）

釋名　集解　珣曰く、越王餘算は南海の水中に生ずる。竹算子のやうで、長さ一尺ばかりのものだ。劉敬叔の異苑に『昔、(二)晉安から越王が南海に渡つたとき、黑色の角と白色の骨で算籌を作り、餘つた部分を水中に棄てた。それがこの物となつて生じたもので、それゆゑに葉の白いのは骨に、黑いのは角に似てゐる。それからかやうな名稱が言ひ傳ひられたのだ。食つてもよし』と記載してある。


〔越王餘算〕

附錄　(三)**沙箸**　時珍曰く、按ずるに、劉恂の嶺表錄に沙箸といふものがある。これも餘算の類のやうなものだから此に附錄する。恂の記載に依ると『海岸の沙中に沙箸が生える。春時苗を吐き、その心は骨のやうに白くして且つ勁く、酒籌を作る材料

(一)牧野曰フ、越王餘算ハ腔腸動物ニ屬スル花蟲類ノ一種デうみえら科ノモノデアル。

(二)晉安ハ晉ノ郡名、隋ニ廢ス。今ノ福建省閩侯縣ニ治ス。

(三)牧野曰フ、是レ亦動物デ、前者越王餘算ニ似タモノデアル。

になる。凡そこれを採るには、足音のせぬやう輕く歩み寄つて拔き取らねばならぬ。さもないと、足音と聞けば遽(には)かに沙中へ縮入して採れなくなる』とある。

【氣味】【鹹し、溫にして毒なし】【主治】【水腫、浮氣、結聚、宿滯せる食物の不消化で腹中の虛鳴するもの。いづれも煮て服す】(李珣)

(一)石帆(日華)

和名 あかやぎ
學名 Vorrucella sp.
科名 あかやぎ科

【集解】弘景曰く、石帆の形狀は柏(はく)のやう、水松の形狀は松のやうである。

藏器曰く、石帆は海底に生じ、高さ一尺餘、根は漆のやうな色だ。稍上に至るに隨つて漸次に軟く、交羅紋(かうらもん)がある。

大明曰く、石帆は紫色で、梗の大なるものは筯(はし)ほどあり、風に當ると漸次に硬く、色が漆のやうになる。これを世間では珊瑚細工などに附けて裝飾にする。

頌曰く、左思の吳都賦に『草は則ち石帆、水松』とあり、劉淵林の註に『石帆は海嶼の石上に生ずる草類であつて、葉がなく、高さ一尺ばかり、その花は(二)離樓と

(一)牧野曰フ、石帆ノ本物ハ今遽ニ明ラメ難イガ、姑ラク下ノ者ヲ以テ之レニ充テ置ク。此レニ類セシモノ數種アツテ是等モ亦石帆ト呼ンデ可ナルガ如キモノト思フ。共ニ腔腸動物中ノ花蟲類ニ屬スルモノデ、形狀珊瑚ニ似タモノデアル。

(二)離樓トハ衆木交

して相貫連する。その花の枯死して水中に浮び出るのを、人が海邊で拾ひ取るが、生きてゐるものも稀に見るものだ』とある。

【氣味】【甜(あま)く鹹し、平にして毒なし】【主治】【石淋】（弘景）【煮汁を服すれば、婦人の血結、月閉に主效がある】（藏器）

（二）水松（綱目）

和名　みる
學名　Codium mucronatum, J. Ag.
科名　みる科（水松科）

【集解】弘景曰く、水松は形狀が松のやうなもので、採つて食へる。頌曰く、南海、及び交趾(かうち)に產する。海水中に生ずるものだ。

【氣味】【甘く鹹し、寒にして毒なし】【主治】【溪毒】（弘景）【水腫、催生】（藏器）

本草綱目草部卷十九　終

加スルヲ云フ。

（二）牧野曰フ、水松ハ或ル海產ノ動物ヲ云ツタモノトモ取レヌデモナイガ、此ニハ先輩ノ說ニ從フテみるト定メ置ク。白井曰ク、物理小識ニ、本草水松ハ水中ノ苔ナリ、閩ノ水松ハ乃チ水楊ノ類トアリ。通雅ニ、水松ハ水杉ナリ、閩廣海塘邊皆之ヲ生ズ。鳳尾杉ノ如シ。又松ノ如シ。其根浸水鬚ヲ生ズ、赤楊ノ如シトアリ。是 Glyptostrobus heterophyllus, Endl. ニシテ松柏科ニ屬ス。

本草綱目草部

第二十卷

本草綱目草部目錄第二十卷

草の九　石草類十九種

石斛 本經　骨碎補 開寶　石韋 本經　金星草 嘉祐

石長生 本經 江茂草を附す。　石莧 圖經 石垂を附す。

景天 本經　佛甲草 圖經　虎耳草 綱目　石胡荽 四聲

螺黶草 拾遺 即ち鏡面草。　酢漿草 唐本 酸草、三葉を附す。

地錦 嘉祐 即ち血見愁。○金瘡小草を附す。　離鬲草 拾遺　仙人草 拾遺

仙人掌草 圖經　崖椶 圖經 半天回、野蘭、雞翁藤を附す。　紫背金盤 圖經

白龍鬚 綱目

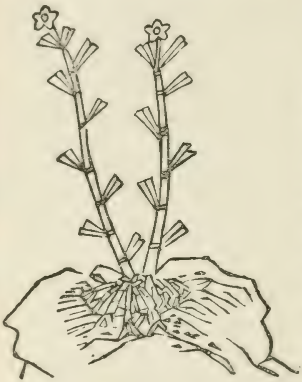
右附方舊十、新四十七。

草の九　石草類十九種

(一)石斛（本經上品）

和名　せつこく
學名　Dendrobium monile, Kränzl.
科名　らん科（蘭科）

釋名　**石(二)蓫**（別錄）　**金釵**（綱目）　**禁生**（本經）　**林蘭**（同）　**杜蘭**（別錄）　時珍曰く、石斛なる名稱の意味は詳でない。その莖の形狀が金釵の股のやうなところから、古代から金釵石斛なる名稱があつた。現に蜀地方では、これを栽培して金釵花と呼ぶ。盛弘之の荊州記には『(三)耒陽の龍石山に石斛が多い。精好で金釵のやうだ』とあるはこの草のことだ。林蘭、杜蘭といふは木部の木蘭と同一名



〔石斛〕
――金釵花――

(一)牧野云フ、せつこくハ漢名石斛ノ音デアル、古名ニハすくなひこのくすね或ハいはぐすりナドノ名ガアル。
木村(康)曰ク、本邦ニ於テハ石斛ニせきこくヲ充テ用ウ。支那市場品ヲ見ルニ節間數糎餘ニシテ全長一米ニ達スルモノアリ、せきこく類ナランモ未ダ其種ヲ決スルニ至ラズ、恐クハDendrobium ニ屬スルモノ二三種ニ亙リテ用ヰラルルモノナルベシ。
(二)大觀ニ遂ニ作ル。
(三)耒陽ハ漢ノ縣名、今ハ湖南省衡陽道ニ

稱であるが、これは恐らく誤だ。

集解　別錄に曰く、石斛は(四)六安の山谷の水邊の石上に生ずる。七月、八月に莖を採つて陰乾する。

弘景曰く、今用ゐる石斛は(五)始興の産である。石上に生えて細く實したもので、桑灰(六)を沃ぐと金のやう色になり、(七)蚱蜢髀のやうな形になるものが佳し。近道にもあるが、品質は(八)宣城のものに次ぐ。櫟の木に生ずるものは木斛と名け、莖が至つて虛して長く太く、色が淺い。丸、散藥には入れず、ただ酒に漬けて煮て用ゐるだけのものだ。俗方では虛を補し、脚膝を療ずるによくこれを用ゐる。

恭曰く、現に(九)荊襄、及び漢中、江左にある。また二種あつて、一種は大麥に似て纍纍として相連り、頭端に一枚の葉が生え、性は冷なるものだ。これを麥斛と名ける。一種は莖の太さ雀髀ほどで、葉は莖の頭に在る。これを雀髀斛と名ける。その他の斛は竹のやうで節間に葉が生える。乾石斛を作る方法は、酒で洗ひ、蒸し暴して造るので、灰湯をば用ゐない。或は生のものを酒に漬けた方が乾したものに勝るといふことだ。

屬ス。

(四)六安ハ隰草類葈耳ノ註ヲ見ヨ。

(五)始興ハ土部白堊ノ註ヲ見ヨ。

(六)大觀ニ灰下ニ湯字アリ。

(七)蚱蜢髀ハイナゴ屬ノ腹部ヲ指スガ如シ。

(八)宣城ハ山草類黃連ノ註ヲ見ヨ。

(九)荊襄ハ山草類貫衆ノ註、漢中ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。

頌曰く、今は(一〇)荊州、(一一)光州、壽州、廬州、江州、溫州、台州にもあるが、廣南のものを佳しとしてある。多く山谷中に在るもので、五月苗を生じ、莖は小竹に似て節節の間から小さい葉が生え、七月に花を開き、十月に實を結ぶ。その根は細く長くして黃色だ。石上に生ずるものだけを勝れたものとする。

宗奭曰く、石斛は細くして小草のやう、長さは三四寸、柔かで靭く、折つて見ると肉のやうで實してゐる。今一般には多く木斛を混じてあつて、やはり見判け難いが、しかし木斛は中が虛し、木のやうで長さ一尺ほどあり、深黃色で光澤のあるが特異點だ。

時珍曰く、石斛は石上に叢生するもので、その根は結ぼれて甚だ數多く、乾けば白く軟になる。莖と葉とは生では靑色だが乾けば黃色だ　紅色の花を開き、節から根鬚が生える。世間ではこれを折り取つて砂石の上に栽ゑ、または鉢などに入れて軒に掛けるが、頻りに水をかけて置くと幾年經ても枯れない。俗に千年潤などと呼ぶ。石斛は短くて中が實し、木斛は長くて中が虛だから甚だ見別け易い。處處にあるが蜀中のものが勝れてゐる。

(一〇)荊州ハ隰草類地膚ノ註、壽州ハ芳草類澤蘭ノ註、廬州ハ同白芷ノ註、江州ハ石部雲母ノ註、溫州、台州ハ石部鹵石類食鹽ノ註ヲ見ヨ。
(一一)光ヲ大觀ニ廣ニ作ル。光州ハ今ノ河南省潢川縣ノ地ナリ。

【修治】斅曰く、凡そこれを使用するには、根頭を去り、酒に一夜浸して暴乾し、酥を拌ぜて午前十時から午後六時まで蒸し、それを徐徐に焙じ乾して用ゐる。補藥に入れて效がある。

【氣味】【甘し、平にして毒なし】普曰く、神農は甘し、平なりといひ、扁鵲は酸しといひ、李當之は寒なりといふ。時珍曰く、甘く淡にして微し鹹し。之才曰く、陸英が使となる。凝水石、巴豆を惡み、雷丸、殭蠶を畏る。

【主治】【傷中。痺を除き、氣を下し、五臟の虛勞、羸瘦を補し、陰を強くし、精を益す。久しく服すれば腸、胃を厚くする】(本經)【內絕、不足を補し、胃氣を平にし、肌肉を長じ、皮膚の邪熱、(一二)疿氣、脚膝の疼冷、痺弱を逐ひ、志を定め、驚を除き、身體を輕くし、天年を延べる】(別錄)【氣を益し、熱を除き、男子の腰脚軟弱を治し、陽を健にし、皮肌の風痺、骨中の久冷を逐ひ、腎を補し、力を益す】(權)【筋骨を壯にし、水臟を煖め、智を(一三)益し、氣を淸くする】(一四)(日華)【發熱、自汗を治し、癰疽の膿の內塞を排す】(時珍)

【發明】斅曰く、石斛は涎を鎭め、男子の元氣を澀する。酒に浸し酥で蒸して

(一二)疿ハアセモノ類ナリ。
(一三)大觀ニ益下ニ平胃ノ二字アリ、智淸ノ字ナシ。
(一四)大觀ニ大明ニ作ル。

一鎰までを全部服すれば、永く骨痛を患はぬ。

宗奭曰く、石斛は胃中の虚熱を治するに有功である。

時珍曰く、石斛は、氣は平、味は甘、淡、微鹹であつて、陰中の陽であり、降である。それで足の太陰——脾、足の少陰——右腎の藥なのである。深師は『囊が濕ひ、精が少く、小便に餘瀝あるにはこれを加へるがよし。またある法では、二錢づつに生薑一片を入れて水で煎じ、茶に代へて飲む。甚だ肺を淸くし脾を補するものだ』といつてある。

附方 新二。

【睫毛の倒入】川石斛、川芎藭等分を末にし、一日二回、口中に水を含み、倒毛の左右に隨つてその方の鼻に嗜ふ。(袖珍方)【飛蟲の耳に入つたとき】石斛數本を、根を去つて筒のやうにし、その一邊を組み捻つて耳中へ入れ、四圍を蠟で封じ閉ぢて火で燒き、石解が盡きたとき止める。かくて右耳を熏ずれば蟲はたから出るものだ。なほ出ぬときは再び試みる。(聖濟)

(一)骨碎補（宋開寶）

和名　うんりようしだ
學名　Drynaria Fortunei, Smith.（Polypodium Fortunei, Kunze）
科名　うらぼし科（水龍骨科）

釋名　猴薑（拾遺）　胡孫薑（志）　石毛薑（日華）　石菴閭　藏器曰く、骨碎補の本來の名は猴薑だが、開元の天子玄宗皇帝が、傷折を治療して骨碎を補するの能あるところからこの名を命けたのだ。骨碎布とも書くが、訛である。江西地方で胡孫薑と呼ぶは形の形容だ。時珍く、菴閭が折傷、破血に主效があり、この物の功力に同じところから菴閭なる名稱がある。

集解　志曰く、骨碎補は江南に生ずる。根は樹や石の上に著き、毛があり、葉は菴閭のやうだ。

藏器曰く、嶺南、(二)虔州、吉州にもある。葉は石韋に似て一根である。餘葉が木に生える。

大明曰く、これは樹の上に寄生する草で、根は薑に似て細く長い。

頌曰く、今は淮浙、陝西、(三)夔路の州郡にいづれもある。木や石の上に生え、多

(一)牧野云フ、是レ雲龍しだ（最初ニ私ノ下シタ和名デ、岩壁ニ匍ケルガ如ク著生セシ狀ヲ見テ臺灣デ名ケタ）デアル、後ニ或ル人ハ之レヲはかまうらぼしト名ケタ。學名ハ下ノ如クデ、此品ハ支那ト我ガ臺灣トニ產スルガ我ガ內地ニハ見ナイ。長短兩形ノ葉ヲ有シ羽狀ニ分裂スル。集解ノ文ニ「短葉附之又抽大葉成枝」トアルハ、能ク其狀ヲ表ハシテ居ル。木村(康)曰ク、現在申姜トシテ漢藥市場ニ出ルモノハ、はかまうらぼしニ一致ス。

(二)虔州ハ石部代赭石ノ註、吉州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

(三)夔州路ハ山草類

黄連ノ荊蘷ノ註參照。

くは日陰の處にあつて根を引き條を出し、上に黄赤色の毛と短葉が附き、又、大葉が抽出て枝になる。葉は表面は青綠色で青黄の點があり、背面は青白色で赤紫の點があり、春生えた葉が冬になると乾いて黄色になる。花も實もない。根を採つて藥に入れる。

宗奭曰く、この物の苗は薑に似てゐない。また菴䕡にも似てゐない。枝毎に大葉があつて兩旁に小葉があり、又牙が兩兩相對し、葉は長くして尖瓣がある。



〔骨碎補〕
——胡孫薑——

時珍曰く、その根は扁く長く、ほぼ薑の形に似てゐる。その葉には椏缺があつて、頗る貫衆の葉に似てゐる。葉が菴䕡に似たといふは甚だしい謬だ。石韋のやうだといふも違ふ。

根 修治 斆曰く、凡そ採取したならば、銅刀で黄赤色の毛を刮り去り、細に切つて蜜と拌ぜて潤し、甑で一日間蒸して晒し乾して用ゐる。急に用ゐるには、

ただ焙じ乾すだけで蒸さずともよし。

【氣味】【苦し、溫にして毒なし】大明曰く、平なり。【主治】【血を破り、血を止め、傷折を補す】(開寶)【骨中の毒氣、風血疼痛、五勞、(四)六極、足手不收、上熱下冷に主效がある】(權)【(五)惡疾に用ゐて爛肉を蝕し、蟲を殺す】(大明)【研末して豬腎で夾み、煨いて空心に食へば、耳鳴、及び腎虛の久泄、牙疼を治す】(時珍)

【發明】頌曰く、骨碎補は婦人の血氣の藥に入れる。蜀地方では、筋骨を閃折した傷損を治するに、根を取つて擣き篩ひ、黃米を煮た粥と和して傷處を裹む。それで有效だ。

時珍曰く、骨碎補は足の少陰の藥である。故に能く骨に入り、牙、及び久泄痢を治するのである。曾て魏刺史の子息が久泄を患ひ、多くの醫療も效なくして危篤の重態に陷つたが、予が、この藥末を豬腎中に入れて煨熟し、それを與へて食はせると頓に住んだ。蓋し腎は大小便を主るものであり、久泄は腎虛の關係に由るものだ。故に專ら脾、胃のみを目標としてはならない。雷公炮炙論に『この方を用ゐて耳鳴を治す』とあるが、耳もやはり腎の竅である。按ずるに、戴原禮の證治要訣に『痢

(四)六極ハ筋極、骨極、血極、肉極、精極、氣極ノ六、極ハ腑虛ニ由テ羸虛ヲ致シ六ノ者皆虛ス、證狀病名彙解ニ詳ナリ。

(五)惡疾、大觀ニ惡瘡ニ作ル。

後の下虛は、攝生を善くせず、或は遠路を步行し、或は房勞し、或は外感からで兩足が痿軟し、或は痛み、或は痺し、遂に痼風となる。これには獨活寄生湯に虎骨四斤丸を加へ、同時に骨碎補三分の一と共に研つて汁を取り、酒で解いて服す。外用には杜牛膝、杉木節、萆薢、白芷、南星の煎湯で頻りに熏じ洗ふがよし』とある。これもやはり腎虛骨痿に對する治法の應用だ。

【附方】 舊二、新三。【虛氣が牙を攻むるもの】齒が痛んで出血し、或は痒痛するには、骨碎補二兩を銅刀で細に剉んで瓦鍋に入れ、慢火で黑く炒つて末にし、普通齒を磨くやうに齒に揩り、良久してそれを吐く、嚥下しても差閊なし。劉松石は『この法は靈苑方から出たもので、ただ牙痛を治するに止まらず、極めて能く骨を堅くし、牙を固くし、精髓を益し、骨中の毒氣を去る。疼痛して牙が動き、將に落ちんとするものには、數〻擦れば立ろに住み、再び動かなくなる。實驗の結果神效を認めた』といつてある。【風蟲牙痛】骨碎補、乳香等分を末にし、糊で丸にして孔中を塞ぐ。これを金針丸と名ける。(聖濟總錄)【耳鳴耳閉】骨碎補を削つて細條にし、火で炮いて熱に乘じて耳を塞ぐ。(蘇頌圖經)【病後の落髮】胡孫薑、野薔薇の嫩

枝の煎汁を刷く。【腸風失血】胡孫薑を燒いて性を存し、五錢を酒、或は米飲で服す。（仁存方）

石韋(一)（本經中品）

和名　ひとつば
學名　Cyclophorus lingua, Desv.
科名　うらぼし科（水龍骨科）

【釋名】石韉　韉の音は蔗（シヨ）である。石皮（別錄）　石蘭　弘景曰く、石上に蔓延して葉が生え、石の皮のやうに見える。故に石韋と名けたのである。時珍曰く、柔皮を韋といふ。韉もやはり皮のことだ。

【集解】別錄に曰く、石韋は(二)華陰の山谷の石上に生ずる。水聲や人聲の聞えぬ處に生えたものが良し。二月葉を採つて陰乾する。

弘景曰く、處處にある。(三)建平に產するものは、葉が長く大きくして厚い。

恭曰く、この物は石旁の陰になつた處に叢生するもので、一向蔓にはならぬ。古い瓦屋の上に生えるものをば瓦韋と名け、これも淋を治療するに好いものだ。

頌曰く、今は(四)晉州、絳州、滁州、海州、福州、江寧にいづれもある。石上に叢

(一)牧野云フ、石韋ハ先輩ノ定ムル通リひとつばニ充テルハヨイト思フ。タダ植物名實圖考巻ノ十六ノ石韋ノ圖ハひとつばニアラズシテ別ノ種（臺灣產ノおほひとつば卽チ Cyclophorus grandissimus, Hayata.ニ酷似スル）デアルカ、同巻ニ在ル飛刀劍ハひとつばデアル。松村任三氏ハ其著ナル改訂植物名彙ニ於テ、此飛刀劍チぬかぼしらん（宜シクぬかぼしくりはらんトスベキモノ）卽チ Polypodium superficiale, Bl.ニ充テアルハ非デアル。

木村(康)曰ク、石韋トイヘバ Cyclophorus 屬ノ植物ヨリ得ラルル生藥ノ總稱ナランモ、狹義ニハひとつばニ起因スルモノチ稱スベク、大石韋ト稱スルモノハおほひとつばニ、小石韋ト稱スルモノハこひとつばニ相當セリ。而シテひめひとつば或ハいにおもだかニ當ルモノモ用ヰラルルガ如シ、尙くりはらんヲ水石韋ニ充ツ。(上海自然科學研究彙報第一卷二號(一九・九)九一)
(三)華陰ハ石部白石英ノ註ヲ見ヨ。
(二)建平ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。
(四)晉州ハ石部鹵石鹸石ノ註、絳州ハ同く礬石ノ註、潞州ハ山草類人參ノ註、

生し、葉は柳のやうで背に毛があり、斑點があつて皮のやうだ。福州には別に石皮といふ一種がある。それは三月に花のあるもので、採つて浴湯にして用ゐれば風を治す。

時珍曰く、陰に面した崖(がけ)や險しく陷つた場所に多く生えるもので、その葉は、長いものは一尺に近く、濶(ひろ)さ一寸餘あり、皮のやうに柔く靭(つよ)く、背に黃毛がある。また金星のあるものもあつて、それは金星草と名ける、いづれも冬を凌いで凋(しぼ)まない。又、杏葉のやうな一種のものがある。やはり石上に生えるもので、その性は同じものだ。


〔石　　韋〕

修　治　別錄に曰く、凡そこれを用ゐるには、黃毛(五)を去る。これは人の肺を射て欬せしめ、療ずる方法がない。大明曰く、藥に入れるには、梗を去り、微し炙いて用うべきものである。ある法では、羊脂で炒り乾して用ゐる。

海州、福州ハ石部鹵石鹹食鹽ノ註、江寧ハ山草類白鮮ノ註ヲ見ヨ。

（五）大觀ニ毛下更ニ一毛字アリ、サレバ毛ハ人肺ヲ射テ云云ト讀ム可キデアル。

（一）牧野云フ、金星草ハ集解ノ文ニ據レバ多分下ニ採リタル羊齒デハナイカト思

【氣味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し。權曰く、微寒なり。之才曰く、滑石、杏仁、射干が使となる。菖蒲と配合するが良し、丹砂、礬石を制す。

【主治】【勞熱、邪氣、五種の癃閉不通、小便水道を利す】（本經）【煩を止め、氣を下し、膀胱滿を通じ、五勞を補し、五臟を安じ、惡風を去り、精氣を益す】（別錄）【淋瀝、遺溺を治す】（日華）【炒つて末にし、冷酒で調へて服すれば發背を治す】（頌）【崩漏、金瘡に主效があり、肺氣を淸する】（時珍）

【附方】新五。【小便淋痛】石韋、滑石等分を末にし、一刀圭づつを飮で服す。效果最も速だ。（聖濟）【小便轉脬】石韋を毛を去り、車前子と各二錢半を水二盞で一盞に煎じ、食前に服す。（指迷方）【崩中漏下】石韋を末にし、三錢づつを溫酒で服す。甚だ效がある。【便前に血あるもの】石皮を末にし、二錢を茄子枝の煎湯で服す。（普濟方）【氣熱欬嗽】石韋、檳榔等分を末にし、薑湯で二錢を服す。（聖濟錄）

（一）金星草（宋嘉祐）

和名　おほくりはらん？
學名　Polypodium normale, Don. ?
科名　うらぼし科（水龍骨科）

釋名 **金釧草**（圖經）　**鳳尾草**（綱目）　**七星草**　時珍曰く、即ち石韋の金星のあるもののことである。圖經には七星草を重複して記載したが、此には併記することにした。

集解 禹錫曰く、金星草は西南方の州郡に多くあるが、(二)戎州のものを上とする。陰になつた處の淸い石の上や、竹箐の中などの日光の當らぬ處によく生え、或は大木の下や陰になつた古い瓦屋の上にも生える。初生には深綠色で、葉の長さ一二尺ばかり、冬深くなると背面に黃色の星が出て、兩兩相對し、色は金のやうだ。それで金星なる名を呼ばれたのである。花も實もなく、冬を淩いで凋まぬ。その根は盤屈した竹根のやうで細く、折つて見ると猪馬騣のやうな筋がある。五月根共に採り、風に晒し乾して用ゐる。



〔金星草〕

頌曰く、七星草は(三)江州の山谷の石上に生ずる。葉は柳のやうで長く、長さ二三

フ。先輩之レヲみつでうらぼしノ分岐セザル葉ノモノニ充ツレドモ穏當デナイ。植物名實圖考卷ノ十六ニ圖セル金星草一ハ何カ別ノ一種デ、同ジク二ハ多分ほしだ(Dryopteris sophoroides, O. Kuntze.)ヲ指シタモノデアラウガ、然シ此等ハ本書ノ集解ニ解說シテアルモノトハ別ノ品デアル。木村(康)曰ク、上海品ノ金星草ハのきしのぶナリ。

(二)戎州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

(三)江州ハ石部雲母ノ註ヲ見ヨ。

尺、蔓になつて延びる。その葉は堅硬で背面に七星のやうな黄點がある。採收に一定の時期はない。

(四)【氣味】【苦し、寒にして毒なし】頌曰く、微し酸し。崔昉曰く、雄黃、砂、汞、礬石を制す。

【主治】【發背、癰瘡、結核。硫黃、丹石の毒を解す。根共に半斤を酒五升で銀器で煎じて服すれば、先に服した石藥は悉く下る。また末にして冷水で方寸匕を服するもよし。瘡腫に塗れば甚だ效がある。根を油に浸して頭に塗れば大いに毛髮を生ずる】(蘇頌)【髭髮を黑くする】(頌)【熱を解し、五淋を通じ、血を涼する】(時珍)

【發明】頌曰く、瘡毒ならば如何なるものでもこれを服するがよし。けれども性至て冷なるもので、服して後に下痢する。故に補治の方法を講ずるやうにすればそれで平復する。老年者には服ませられぬ。

宗奭曰く、丹石の毒が背に發したものや、一切の癰腫には、その根と葉と二錢半を酒一大盞で煎じて服す。黑い汁を取り下すものだ。ただそれまで服した石藥を下すばかりでなく、同時に毒が去つて瘡が癒える。酒を飲まぬ患者は、末にして新汲

(四) 木村(康)曰ク、みつでうらぼしハクマリンチ含有ス。鈴木衛平—藥誌、昭、三(五五七)七一二。

水で服す。知を以て度とする。

時珍曰く、この藥は一般に金石藥の中毒を治するものだが、憂鬱、氣血の凝滞で發毒したものには適當なものでない。

[附方] 舊一、新二。[五毒發背] 金星草を根共に淨洗して慢火で焙じ乾し、四兩づつに甘草一錢を入れ、擣いて末にし、四服に分け、一服を酒一升で煎じて二三沸し、更に溫酒二三升を和し、缾器に入れて密封貯藏し、時時に飲む。生、冷の物、油肥の物、毒物を忌む。(經驗方) [熱毒下血] 金星草、陳乾薑各三兩を末にし、一錢づつを新汲水で服す。(本事方) [脚膝の爛瘡] 金星草の背上の星を刮下して傅ければ乾く。(集簡方)

(一)石長生(本經下品)

和名 無し
學名 未詳
科名 うらぼし科(水龍骨科)

[釋名] 丹草(本經) 丹沙草 時珍曰く、四季を通じて凋まぬから長生といつたのだ。

(一)牧野云フ、先輩之レヲはこねぐさ(Adiantum monochlamys, Eat.)ニ充テ居レドモ中ラヌ、然シ何レノ種カ今其レハ能ク判ラヌ。植物名實圖考卷ノ十六

ニ圖セルモノ果シテ眞物カ否カ判斷ニ苦シム。
(二)咸陽ハ芳草類積雪草ノ註ヲ見ヨ。
(三)小野蘭山曰ク、葉、當ニ莖ニ作ルベシ。

【集解】別錄に曰く、石長生は(二)咸陽の山谷に生ずる。

弘景曰く、俗に時にこれを採るものがあるが、方藥には一向に用ゐない。近道にもある。これは細ぼそとした草で、葉と花は紫色である。南方の地で石巖の下に多く生える。(三)葉は蕨に似て細く、龍鬚のやうで、色は光漆のやうに黑く、高さ一尺餘、他の草とは雜生せぬ。



「石　長　生」
──原　尾　草──

恭曰く、苗の高さ一尺ばかり、五六月に莖、葉を採つて用ゐる。今の商人は齕筋草をこの物として賣つてゐる。葉は青葙に似て、莖は細く勁く紫色だ。現に太常で用ゐてゐるはこの物である。

時珍曰く、宋祁の益部方物記に『長生草は山陰の蕨地に生じ、莖は長く、葉は叢り散り、色は檜のやうで澤があり、冬を經て凋まぬ』とある。

【氣味】【鹹し、微寒にして毒あり】普曰く、神農は苦しといひ、雷公は辛し

といひ、桐君は甘しといふ。權曰く、酸し、小毒あり。

【主治】【寒熱、惡瘡。大熱に鬼氣、不祥を辟ける】(本經)【三蟲を下す】(別錄)【疥癬を治し、諸風を逐ひ、あらゆる邪魅を治す】(權)

【附錄】(四)紅茂草(圖經)頌曰く、味苦し、大涼にして毒なし。癰疽、瘡腫に主效がある。焙じ研つて末にし、冷水で調へて貼る。一名地沒藥、一名長生草といふ。施州に生じ、四季共に枝葉が繁るところから長生なる名稱を呼ばれる。春、根と葉を採る。

時珍曰く、按ずるに、庚辛玉冊に『(五)通泉草、一名長生草は、多くは古りたる道路や、丘壟、荒れ果てた土地に生ずる。葉は地丁に似て中心に一莖が抽出で、黃白色で雪のやうな、また麥飯を摘み取つたやうな花を開く、年を經て枯れず、根は地に入つて泉下に達するといふところから通泉と名ける。俗に禿瘡花と呼ぶ』とある。この草は長生なる名稱はあるが、石長生や紅茂草とやはり一類のものか否か判然せぬ。故にここに附記して置く。

(四)牧野云フ、紅茂草ハ如何ナル草カ詳ニシガタイ。

(五)牧野云フ、通泉草ヲ先輩ハごまのはぐさ科ノさぎごけ(Mazus stolonifer, Makino.)ニ充テ居レドモ中ラヌ、ソシテ何ノ草ダカ詳カデナイ。

(一)石莧（宋圖經）

和名無し
學名未詳
科名未詳

集解　頌曰く、(二)筠州に生ずる。多くは河岸の沙石上に著き、春、苗が生える。莖は青く、高さ一尺ほど、葉は水柳のやうで短い。八九月、土地の者がそれを採る。

氣味　【辛く苦し、小毒あり】

主治　【甘草と共に煎じて服すれば、(三)鉤吻に主效があり、また風涎を吐す】(頌)



〔石莧〕
——武當山——



〔石垂〕
——福州——

附錄　(四)石垂　頌曰く、福州の山中に生ずる。三月花を開き、四月に子を採る。生で擣いて末にし、丸にして服すれば蠱毒を治す。

(一)牧野云フ、石莧ハ未詳ノ草デアル。

(二)筠州ハ山草類仙茅ノ註ヲ見ヨ。

(三)鉤吻ハイビキノコト。

(四)牧野云フ、石垂ハ未詳ナル草本デアル。

（一）牧野云フ、先輩之レヲべんけいさう(S. alboroseum, Baker.)ニ充テ居レドモ、私ハ之レヲ下ノ種ニ充ツルヲ至當デアルト考ヘ其通リニシタ。卽チ植物名實圖考卷ノ十一ノ圖ガ之レヲ證シテ居ルノデアル。

景天（一）（本經上品）

和名　おほべんけいさう
學名　Sedum spectabile, Boreau.
科名　べんけいさう科（景天科）

釋名　**愼火**（本經）　**戒火**（同）　**救火**（別錄）　**據火**（同）　**護火**（綱目）　**辟火**（同）　**火母**（別錄）　弘景曰く、衆くの藥の名稱のうちで景天ほど麗しいものはない。世人はいづれも盆に盛り屋上に置いて栽養し、火を辟けるまじなひになるといつてゐる。それで愼火といふ。方に用ゐることは一向に稀だ。

集解　別錄に曰く、景天は太山の山谷に生ずる。四月四日、七月七日に採つて陰乾する。

頌曰く、今は南北いづれにもあり、人家で中庭に種ゑ、或は盆栽にして屋上などに置く。春苗が生え、葉は馬齒莧に似て大きく、層をなして上に伸び、莖は極めて脆弱で、夏季中に紅紫色の碎けた花を開き、秋後に枯死する。またこれも舊



〔景　天〕
——愼火草——

い根の殘るものだ。苗、葉、花、いづれも用ゐる。

宗奭曰く、極めて種ゑ易いもので、枝を折つて土中に置き、十日ほど水を澆いで置けばそれで生える。

時珍曰く、景天は世間で多く石山の上に栽培する。二月苗が生え、莖は脆く、微し赤黄色を帶び、高さ一二尺になり、折れば汁が出る。葉は淡綠色で光澤があり、柔かで厚く、形狀は長匙の頭に似て、また胡豆の葉に似てゐるが尖つてゐない。夏小さき白色の花を開き、結實は連翹のやうで小さく、中に黑色の粟粒ほどの子がある。その葉は味微し甘く苦く、煠熟して水で淘れば食へる。

【正誤】弘景曰く、廣州の城外にある一樹は、太さ三四圍あり、愼火樹と名ける。志曰く、嶺表の人はいづれもかやうな事實はないといふ。これは陶弘景の書を編錄した者が、勝手に謬言を書き込んだものだらう。陶氏のいつた言とは思はれない。

(二)【氣味】【苦し、平にして毒なし】別錄に曰く、酸し。大明曰く、寒にして小毒あり。硃砂を煆くに用ゐ得る。

【主治】【大熱、火瘡、身熱煩、邪惡の氣】(本經)【諸蠱毒、痂(三)疕、寒熱、風

(二)木村(康)曰ク、民間ニテハ新鮮ナルべんけいさう葉ヲ火ニテ焙リ、葉裏ノ表皮ヲ剝キ去リ諸瘡ニ貼布シ、又毒蛇咬傷

ニ貼用ス。(三)疕、正字通ニ音彼、瘡也。說文、瘍瘠也、頭瘡也トアリ。(四)遊風ハ腫脹ヲ云フ、大觀本草ニ北人腫ヲ呼ンデ之ヲ名ケテ遊ト曰フトアリ。

痺、諸種の不足】(別錄)【金瘡を療じ、血を止める。水で煎じて小兒を浴すれば、煩熱、驚氣を去る】(弘景)【風疹惡痒、小兒の丹毒、及び發熱】(藏)【熱狂、赤眼、頭痛、寒熱、(四)遊風、婦人の帶下】(日華)

花　主治　【婦人の漏下赤白。身を輕くし、目を明にする】(本經)

附方　舊五、新二。【驚風の煩熱】愼火草を水で煎じて浴す。(普濟方)【小兒の中風】汗が出て風に中り、一日にして頭、項、腰が熱し、二日にして手足が屈らなくなつたものには、愼火草の乾いたもの半兩、麻黃、丹參、白朮二錢半を末にし、半錢づつを漿水で調へて服す。三四歲の小兒は一錢を服す。(聖濟錄)【嬰兒の風疹】皮膚に在つて發生せぬもの、及び瘡毒には、愼火の苗、葉五大兩に鹽三大兩を和して共に研り、一日二回、その絞つた汁を熱した手で塗擦する。(圖經)【熱毒丹瘡】千金では、愼火草の擣汁で一晝夜に十回乃至二十回拭く。ある方では、苦酒を入れて泥のやうに擣いて塗る。○楊氏產乳では、烟火丹毒が兩股、兩脇から起つて赤く火のやうになつたものを治す。景天草、眞珠末一兩を泥のやうに擣いて塗り、乾けば易へる。【漆瘡の痒きもの】愼火草を挼んで塗る。(外臺)【眼の花瞖】澀つて痛み、開

き難きには、景天の擣汁を一日三五回點ける。（聖惠）【産後の陰脫】愼火草一斤を陰乾し、酒五升で煮た汁一升を四回に分服する。（子母祕錄）

佛甲草[一]（宋圖經）

和名　たかのつめ、なのまんねんぐさ
學名　Sedum lineare, Thunb.
科名　べんけいさう科（景天科）

【集解】頌曰く、佛甲草は筠州に生ずる。多くは石に附き、陽に向つて生えるもので、馬齒莧に似て細く小さく、且つ長く、黄色の花を開くが實は結ばない。四季を通じてある。


佛甲草

時珍曰く、二月苗が生えて叢になり、高さ四五寸、莖は脆く、葉は細く、柔かで澤があり、馬齒莧のやうに尖長だが小さい。夏黄色の花を開き、霜を經れば枯れる。世間では多く庭の石山や瓦の墻の上などに栽ゑ、佛指甲と呼んでゐる。救荒本草に『高さ一二尺で葉の甚だ大なるものだ』とあるが、それは景天であつてこの草ではない。

（一）牧野云フ、佛甲草ハ集解ニ據レバたかのつめ一名いちぎりす一名なのまんねんぐさデアル。支那デハ一ニ佛指草ト云フト文中ニ見エテ居ル。我邦ニ産スルこまのつめ一名めのまんれんぐさ（Sedum japonicum, Sieb.）ハ集解ニハ見エテ居ナイ。

氣味 【甘し、寒にして微毒あり】 主治 【湯火灼瘡(しやくさう)に研つて貼る】(頌)

(一)虎耳草（綱目）

和名 ゆきのした
學名 Saxifraga sarmentosa, L. f.
科名 ゆきのした科（虎耳草科）

釋名 石荷葉 下文に記す。

集解 時珍曰く、虎耳は陰濕の處に生え、世人はこれもやはり石山の上に栽ゑる。莖の高さ五六寸、細毛があり、一本の莖に一枚の葉があつて、その形は荷葉を蓋(ふ)せたやうだ。それで世間では石荷葉と呼ぶ。葉の大いさは錢ほど、形狀は生えたばかりの小葵葉(せうきえふ)、及び虎の耳の形に似てゐる。夏小さい淡紅色の花を開く。



〔虎耳草〕
—石荷—

(二)氣味 【微し苦く辛し、寒にし

(一)牧野曰フ、是レ我邦ニモ普通ニ見ラルルゆきのしたデアル。集解ニ「夏開小花淡紅色」トアルハ、元來ハ白色ナレドモ紅點アツテ紅色ニ感ズルノデサウ書イタモノデアラウ。

(二)木村(康)曰ク、民間ニテハ新鮮葉ヲ

て小毒あり】獨孤滔曰く、汁は砂子を煮得る。

【主治】【瘟疫には、酒に擂つて服す。生で用うれば人を吐利させる。煮熟したものを用うれば吐利を止める。又、聤耳を治するには、擣汁を滴らす。痔瘡の腫痛には、陰乾したものを桶の中で烟に燒いて熏ずる】（時珍）

（二）石胡荽（四聲本草）

和名　ときんさう
學名　Centipeda minima, O. Kuntze.
科名　きく科（菊科）

【校正】菜部より此に移し入る。

【釋名】天胡荽（綱目）野園荽（同）鵞不食草（食性）雞腸草　下文に詳記する。

【集解】時珍曰く、石胡荽は石の割目、及び陰濕の處に生える小草で、高さは二三寸、冬季に苗が生え、莖は細く、葉は小さく、形狀は宛ら嫩い胡荽のやうだ。その氣は辛く熏ずるので食へない。鵞さへも食はぬといふのである。夏細かい黄色の花を開いて細子を結ぶ。極めて繁衍し易いので、田舍へ行くと庭一面に衍らして

火ニテ焙リ諸痛凍傷ニ貼布ス、又漆ノカブレニハ鹽ニテ葉ヲモミテ貼附ス。

（一）牧野云フ、先輩之レヲ繖形科ノちどめぐさ(Hydrocotyle sibthorpioides, Lam.)ニ充テ居レドモ其集解ノ文ニ據レバ其者ニハ中ラヌ。今植物名實圖考卷ノ十六ニ從フテ之レヲときんさうト定メタ。

ゐるところもある。按ずるに、孫思邈の千金方に『水に近き處や渠の中、濕地などに生える一種の小草で、形狀の胡荽に類した草を天胡荽と名ける。また雞腸草とも名ける』とあるはこの草のことだ。繁縷を雞腸といふと名稱は同一だが物は異ふ。



〔石胡荽〕
——鵞不食草——

氣味 【辛し、寒にして毒なし】時珍曰く、辛し、溫なり。汁は砒石、雄黃を制す。

主治 【鼻氣を通じ、九竅を利し、風痰を吐す】(炳)【目瞖を去る。按んで鼻中を塞げば瞖膜が自から落ちる】(藏器)【痔病を療す】(詵)【毒を解し、目を明にし、眼の赤腫、雲瞖、耳聾、頭痛、腦酸を散じ、痰瘧で齁䶎し、鼻が窒つて通ぜぬを治す。鼻を塞げば瘜が自ら落ちる。又、瘡腫を散す】(時珍)

發明 時珍曰く、鵞不食草は、氣が溫であつて升り、味が辛であつて散ずる。

陽である。能く天に通ずるものだ。頭と肺とはいづれも天に屬するものだから、能く上は頭、腦に達して頂痛、目病を治し、鼻氣を通じて瘜肉を落し、內は肺の經に達して齁齁、痎瘧を治し、瘡腫を散ずるのである。その瞖を除く功力は就中著しい神妙なものだ。世人は陳藏器の本草を目して、ただ徒らに廣い範圍を漁つて鄙俚なものまで說明したものの如くにいつてゐるが、この藥の類の如き、その著しい功力を認めて發表した點は、大いに眞摯な努力といはねばならぬ。徒に博いだけといつて了ふべきではない。按ずるに、倪惟德の原機啓微集に『目瞖を治するには碧雲散を鼻に嗃ふ。卽ち鵞不食草を解毒の君とし、靑黛を去熱の佐とし、川芎の辛を留を破り邪を除くの使として用ゐるのであつて、これは升透の藥である。大體に於いて鍋の蓋を開いて置くやうな具合の方法であつて、常に邪毒をして閉ぢ籠らせぬやうに路を開けて置く方法だ。故に力は小さいが銳い。この藥は、常に嗃つてその力を聚積するがよし。凡そ目中の諸病にはいづれもこの藥を用ゐて差間ない。生で挼んだものはまた別種の神效がある』といつてある。王璽の集要の詩には『赤眼の餘瞖忽ちに生ずるには、草中の鵞不食と名くるものを、鼻內に塞いで頻頻と換ふれば、

（三）眵ハ目汁ノ凝ルヲ云フ。

三日の間にして舊の明に復す』とある。

附方　新七。【寒痰の齁喘】野園荽の研汁に酒を和して服すれば住む。（集簡方）【鼻に㗜ふて瞖を去る】碧雲散――目赤の腫脹、羞明、昏暗、隱澀、疼痛、（三）眵泪、風痒、鼻塞、頭痛、腦酸、外瞖、拔睛の諸病を治す。鵞不食草を晒し乾して二錢、青黛、川芎各一錢を細末にし、一口水を噙んで置いてこの藥米粒ほどづつを鼻內へ㗜ひ入れ、泪の出るを度とする。ある方では、青黛を去る。（倪氏啓微集）【目に貼つて瞖を取る】鵞不食草の擣汁を熬膏して一兩、爐甘石を三回繰返して火で煆き童尿に淬して三錢、上等の瓷器末一錢半、熊膽二錢、硇砂少量を極細末にし、和して膏にし、それを瞖上に貼つて一夜にして取り下し、黃連、黃蘗の煎湯で洗淨する。物を看てもしなほ瞖があるときは再び貼る。（孫天仁集效方）【耳を塞いで瞖を治す】發明の項に詳記してある。【牙疼に鼻に㗜ふ】鵞不食草を綿に裹み、懐に入れて乾して末にし、水を一口含んで置いて疼の左右に隨つてその方の鼻に㗜ふ。また挼んで塞ぐもよし。（聖濟）【一切の腫毒】野園荽一把、穿山甲を燒いて性を存して七分、當歸尾三錢を擂り爛らし、酒一盌に入れて汁を絞つて服し、渣を傅ける。（集簡方）【溼毒臁

瘡】敷瓦の合せ目に生えた野園荽を夏季に採取して晒して貯藏し、それを末にして五錢づつに汞粉五分を入れ、桐油で調へて隔紙膏にし、瘡の周圍を縫定して茶で洗淨し、その上にこの膏藥を傅けて縛る。黄水が出て五六日で癒える。これは吳竹卿の方である。(簡便方)【脾寒瘧疾】石胡荽一把の杵汁半盌に酒半盌を入れ、和して服す。甚だ效がある。(集簡方)【痔瘡の腫痛】石胡荽を擣いて貼る。(同上)

(一)螺靨草（拾遺）

和名　まめづた
學名　Drymoglossum microphyllum, O. Chr.
科名　うらぼし科（水龍骨科）

【釋名】**鏡面草**　時珍曰く、いづれも形の形容である。

【集解】藏器曰く、石上に蔓生し、葉の形狀は螺靨に似て微し(二)赤色を帶び、鏡のやうな光があり、背面に少し毛のある小草である。

【氣味】【辛し】【主治】【癰腫、風疹、脚氣腫には、擣き爛らして傅ける。また湯に煮て腫れた處を洗ふ】(藏器)【小便出血、吐血、衄血、齲齒の痛を治す】(時珍)

【發明】時珍曰く、按ずるに、陳日華の經驗方に『年二十六のとき不圖病が起

(一)牧野云フ、集解ノ文頗ル簡單ナレドモまめづたノ形狀ト能ク一致ス、故ニ先翟ノ定ムル所ニ從ヒ茲ニ其品トシテ置ク。植物名實圖考卷ノ十六ノ圖ハ多分正確ノモノニハ非ザルベシト考フ。

(二)大觀ニ微帶赤色ナ微有黑色ニ作ル。

り、小便後に數點の鮮血が出た。しかし疼きはなく、そのまま一月經過してから酒を飲んだところ、それから病は甚しくなつたが、町醫者の張康なるものが、草藥汁一器に少量の蜜水を入れたものを進め、それを二回服して癒えた。その方を尋ねると、それは鏡面草であつた』とある。

附方

新七。【吐血、衄血】鏡面草を水で洗ひ、酒に擂つて服す。(朱氏集驗方)

【牙齒の蟲痛】乾坤生意では、鏡面草を多少に拘らず水缸下泥と共に擣いて膏にし、香油二三點を入れて研りまぜ、痛む處の腮上に貼る。〇楊氏家藏方では、鏡面草半握に麻油二點、韮半捻を入れて挼み碎き、左が疼くには右耳を塞ぎ、右が疼くには左耳を塞ぎ、薄泥餅を耳門に貼つてその氣を閉ぢ、それで仰臥する。かく耳に泥すること三四時間で泥を去り、耳を塞いだ草藥を取り出して水に入れて見ると、蟲があ



「螺厴草」—鏡面草—

つて浮き出るものだ。久しさに亙つたものの蟲は黑く、比較的久しくないものは褐色、新なるものは白色なものである。この方法を用うるには、午前中がよい。徐克安の一乳婢がこの病に罹つて飲食不能になつたとき、この方を用ゐると數箇の蟲が出て平安になつた、【小兒の頭瘡】鏡面草を日光で乾して末にし、輕粉、麻油に和して傅ける。立ろに效がある。(楊氏家藏方)【手指の腫毒】又、指の惡瘡にも毒を消し、痛を止める。鏡面草を擣き爛して傅ける。(壽域神方)【蛇纏惡瘡】鏡面草に鹽を入れて杵き爛らして傅けるが妙である。【鼠莽の毒を解す】鏡面草の自然汁、清酒各一盃を和して服す。毒を下す。三五回試みたならば肉粥で補ふ。遲れてはならぬ。(張杲醫說)

(一)酢漿草（唐本草）

和名　かたばみ
學名　Oxalis corniculata, L.
科名　かたばみ科(酢漿草科)

校正　圖經の赤孫施を併せ入る。

釋名　酸漿(圖經)　三葉酸(綱目)　三角酸(綱目)　酸母(綱目)　醋母(蘇恭)

(一)牧野曰フ、是レ普通野外ニ多キかたばみ、一名すいものぐさ、一名かがみぐさデアル。小野蘭山ハ赤孫施ヲあかかたばみトシテ居ルガ、之レハ赤ノ字カラ思

ヒ付イタモノト思フ。此あかかたばみハかたばみノ一變種デ能ク諸處デ見ルモノデアル、其學名ヲVar. rubrifolia, Makino. ト稱スル。又うすあかかたばみト云フ一變種ガアル、葉色普通品トあかかたばみトノ中間デアツテ、是レ亦野外デ普通ニ見ル品デ學名ヲVar. tropaeoloides, Makino. ト呼バルル。

(二) 閩ハ今ノ福建省地方。

(三) 大觀ニ枝ノ下ニ端ノ字アリ。

酸箕（李當之）　**鳩酸**（蘇恭）　**雀兒酸**（綱目）　**雀林草**（綱目）　**小酸茅**（蘇恭）　**赤孫施**（圖經）　時珍曰く、これは小草三葉酸である。その味は醋のやうだ。燈籠草の酸漿とは同名異物で、唐愼微の本草には、この草の方を燈籠草の條下に入れてあるが、誤つてゐる。(二)閩出身の鄭樵が著した通志に『福地方ではこれを孫施といふ』とある。して見ると、蘇頌の圖經に『赤孫施は福州に生ずる。葉は浮萍のやうだ』とあるはこの草のことだ。孫施といふもやはり酸箕の音の訛であらう。今はこの一條中に併記した。



〔酢漿草〕
―三葉酸―

【集解】恭曰く、酢漿は道旁の日陰の濕つた場所に生えて叢生し、莖の端に二枚の葉があり、その葉は細萍のやうだ。四月、五月に採つて陰乾する。

保昇曰く、葉は水萍に似て、大葉一枚との他二枚の葉が同一の枝(三)に著く。花は黃で實は黑い。

頌曰く、南方諸地の下濕の地、及び人家の庭や畑に多くある。北方の地にも生えてゐることがある。初生の嫩いときは小兒が喜んで食ふ。南方地方ではこれで鍮石の器を揩つて銀のやうに白くする。

時珍曰く、苗は高さ一二寸、地に布いて叢生し、極めて繁殖し易い。一本の枝に三枚の葉があり、一枚の葉は兩片になつてゐて、晩になると自から合して整然として一枚のやうになる。四月小さい黃色の花を開き、長さ一二分の小さい角を結び、その中に細子がある。冬も凋まない。方士はこれを採つて砂、汞、硇、礬、砒石を制す。

(四)**氣味**　【酸し、寒にして毒なし】　**主治**　【諸小蟲を殺す。惡瘡、瘑瘻には搗いて傅ける。これを食へば熱渴を解す】(唐本)　【小便諸淋、赤白帶下に主效がある。地錢、地龍と共に用うれば沙石淋を治す。煎湯で洗へば痔痛、脫肛に甚だ效がある。搗いて湯火傷、蛇蠍の咬傷に塗る】(時珍)　【赤孫施は、婦人の血結を治す。一(五)搦を洗つて(六)煖酒で服す】(蘇頌)

附方　舊一、新七。【小便血淋】酸草の搗汁で五苓散を煎じて服す。俗に醋啾

(四)木村(康)曰ク、民間ニテハかたばみノ新鮮葉ヲ搗碎シ、疥癬其他諸瘡ニ外用ス。

(五)大觀ニ一ノ下ニ手ノ字アリ。

(六)大觀ニ洗ノ下ニ細研ノ二字アリ。

啾と名けるはこれである。（王璆百一選方）【諸淋赤痛】三葉酸漿草を洗ひ研つて取つた自然汁一合、酒一合をまぜ和して空心に溫服する。立ろに通ずる。（沈存中靈苑方）【二便不通】酸草一大把、車前草一握の搗汁に砂糖一錢を入れ、調へて一盞を服す。なほ通ぜぬときは再服する。（摘玄方）【赤白帶下】三葉酸草を陰乾して末にし、空心に溫酒で三錢匕を服す。（千金方）【痔瘡の出血】雀林草一大握を水二升で一升に煮取り、一日三回服すれば效が現はれる。（外臺祕要）【癬瘡の痒きもの】雀兒草、卽ち酸母草を數回擦れば癒える。（永類方）【蛇虺の螫傷】酢草を搗いて傅ける。（崔氏方）【牙齒の腫痛】酸漿草一把を洗淨し、川椒四十九粒を目を去り、共に搗き爛らして絹片で裹み、いゝしめて箸ほどの太さにし、それを豆粒大に切り、一塊づつで痛む處を塞げば止まる。（節齋醫論）

附錄 **酸草**（別錄） 有名未用に曰く、身體を輕くし、天年を延べる主效がある。名山、醴泉の上の日蔭の崕に生ずる。葉は五枚あつて靑く澤があり、根は赤黃色である。玉を溶し得るものだ。一名を醜草といふ。

弘景曰く、李當之は『これは今の酸箕草のことで、地に布いて生えるものだ、處

處にある』といつてある。しかし恐らくは違ふであらう。

三葉（別錄）有名未用に曰く、味辛し、寒熱、蛇、蜂の螫傷に主效がある。畑の中に生えるもので、莖は小さく、黑、白があり、高さ三尺ばかり、根は黑い。三月採つて陰乾する。一名三石、一名當田、一名赴魚（ふぎょ）といふ。

地錦（宋嘉祐）(一)

和名　にしきさう
學名　Euphorbia humifusa Willd.
科名　たかとうだい科（大戟科）

【校正】有名未用、別錄の地朕を併せ入る。

【釋名】**地朕**（呉普）**地噤**（拾遺）**夜光**（呉普）**承夜**（呉普）**草血竭**（綱目）**血見愁**（綱目）**血風草**（綱目）**馬蟻草**（綱目）**雀兒臥單**（綱目）**醬瓣草**（玉冊）**猢猻頭草**

別錄に曰く、地朕（ちちん）は三月採收する。藏器曰く、地朕、一名地錦、一名地噤（ちきん）といふ。蔓延して地に著き、葉は光があつて淨く（きよく）、露が降ると光る。時珍曰く、莖が赤く、地に布いて生えるから地錦といふ。專ら血病を治するから、俗に血竭、血見愁などと稱へる。馬蟻（ばがい）や雀兒が喜んでこれに聚るから、馬蟻とか雀の單などの名

(一)牧野曰フ、本書ノ地錦ハ田間ニ普通ナルにしきさうデアル。但シ植物名實圖考卷ノ十三ニ在ル地錦ハ蓋シごまのはぐさ科（玄參科）ノいぬのふぐり卽ち Veronica polita, Fries. デ綱目ノ者トハ同名異品デアル。又地錦苗ト稱スルモノガアルが是レハけし科（罌粟科）ノきけまん屬卽チ Corydalis ノ一種デアル。木村（康）曰ク、地錦トシテ生藥ににしき

さうニ類スルモノヲ用ウルヲ見ル。(二)滁州ハ山草類人參ノ註ヲ見ヨ。

稱がある。醬瓣、猢猻頭なる名稱はその花、葉の形容だ。

［集解］ 禹錫曰く、地錦草は近道の野や畑に生える。(二)滁州に產するものが就中佳し。莖、葉は細く弱く、地上に蔓延し、莖は赤く、葉は靑紫色で、夏期中茂盛し、六月紅色の花を開き、細い實を結ぶ。苗と子とを取つて用ゐる。絡石の註に地錦といふがあるが、それは藤蔓の類だ。これとは名稱は同じだが實物は異ふ。



〔地　錦〕
——血見愁——

時珍曰く、野や、畑や、寺院の境內や、階庭の隅などいづれにもある小草だ。地に就いて生えて莖は赤く、花は黃で實は黑く、形狀は蒺藜の朶のやうで、莖を斷てば汁が出る。方士は秋期にこれを採つて雌黃、雄黃、丹砂、硫黃を煮る。

［氣　味］【辛し、平にして毒なし】 別錄に曰く、地朕は、苦し、平にして毒なし。

［主　治］【地朕は、心氣、婦人の陰疝、血結に主效がある】(別錄)【地錦は、血脈を通流する。また氣を治するにも用ゐ得る】(嘉祐)【癰腫、惡瘡、金刃、撲損の出

血、血痢、下血、崩中に主效があり、能く血を散じ、血利小便を止める」(時珍)

附方　舊一、新十一。【臟毒赤白】地錦草を洗つて暴乾して末にし、米飲で一錢を服す。立ろに止まる。(經驗方)【血痢の止まぬもの】地錦草を晒して研り、二錢づつを空心に米飲で服す。(乾坤生意)【大腸瀉血】血見愁少量を薑汁に和して擣き、米飲で服す。(戴原禮證治要訣)【婦人の血崩】草血竭の嫩いものを蒸熟し、油、鹽、薑を淹けて食ひ、酒一二盃を飲んで送下する。或は陰乾して末にし、薑酒で調へて一二錢を服す。一服で止まる。この草は磚の敷き合せ目や、井戸の切石の間などに生えるもので、平地上に在ることは稀だ。(危亦林得效方)【小便血淋】血風草を井水で擂つて服す。三回で癒える。(劉長春經驗方)【金瘡出血】止まぬには、血見愁を研り爛して塗る。(危氏得效方)【惡瘡の血の出るもの】方は上に同じ。【瘡瘍の刺骨】草血竭を擣いて罨すれば自から出る。(本草權度)【癰腫、背瘡】血見愁一兩、酸漿草半兩を焙じ、當歸二錢半を焙じ、乳香、沒藥各一錢二分半を末にし、七錢づつを熱酒で調へて服す。もし生のもののなかつた場合には、酒で擂つて熱服し、滓を傅けるもやはり效がある。血見愁は(三)雄瘡だけに用うべきもので、雌瘡には用ゐない。(楊清叟外科方)

(三)瘡ノ雌雄ハ瘡心ノ凹凸熱氣ノ多少ニヨリ區別ス。

【風瘡、疥癩】血見愁草を(四)滿江紅草と共に末に搗いて傅ける。(乾坤祕韞)【趾間の(五)雞眼】割き破つて血を出し、血見愁草を搗いて傅けるが妙である。(乾坤祕韞)【脾勞黄疸】如聖丸——草血竭、羊羶草、桔梗、蒼朮各一兩、甘草五錢を末にし、先づ陳醋一盌を鍋に入れ、それに皂礬四兩を投じて煎熬し、良久して右の藥末を投じ、再び白麪を多少に拘らず入れ、和して一塊にし、それを小豆大の丸にし、一日二回、三五十丸づつを空腹にして醋湯で服す。數日にして顔色が舊に復する。(乾坤祕韞)

附錄　(六)**金瘡小草**(拾遺)　藏器曰く、味甘し、平にして毒なし。金瘡に主效があり、血を止め、肌を長じ、鼻中の衄血を斷つ。葉を取つて挼んで傅け、また煮汁を服すれば、血疾、及び卒下血を斷つ。又、豫め石灰に和して杵いて丸にして日光で乾し、用ゐる時に臨んで刮つて傅ける。この草は江南地方の村落や田野の間の下濕の地に生えるもので、高さ一、二寸ばかり、薺のやうだが葉が短い。春、夏の間に淺紫色の長さ粳米一粒ほどの花を開く。

(四)滿江紅草、雜草部有名未用ニ出ヅ。
(五)雞眼ハウヲノメ。
(六)牧野曰フ、本草綱目啓蒙ニ此金瘡小草ヲ唇形科ノきらんさう、一名ぢごくのかまのふた(Ajuga decumbens, Thunb.)ニ充テアルガ其根據ハ頗ル薄弱デ、果シテ其レガ正當カ否カ私ハ之レヲ斷言スルニ躊躇スル。

(一)離鬲草（拾遺）

和名未詳　學名未詳　科名未詳

【集解】藏器曰く、人家の階庭の濕つた處に生え、高さ二三寸、苗、葉は(二)幕罨(まくあん)に似てゐる。江東にはあるが、北方地方にはない。



〔離鬲草〕
——脾寒草——

【氣味】【辛し、寒にして小毒あり】

【主治】「瘰癧、丹毒、小兒の無辜(むこ)寒熱、大腹痞滿、痰飮、膈上の熱。生で研つた汁一合を服すれば、古き停滯物を吐出する。瘧を去るに最も好し」（藏器）

(一)仙人草（拾遺）

和名未詳　學名未詳　科名未詳

【集解】藏器曰く、階庭の間に生じ、高さ二三寸、葉は細くして雁齒があり、

(一)牧野曰フ、離鬲草ハ何カ普通ノ雜草ラシケレドモ、形狀ヲ説ク極メテ簡略デ殆ンド考フベカラザルモノデアルガ、或ハ羊齒ノ一種カトモ想像セラルル。

(二)大觀ニ羃罨ニ作ル。

(一)牧野曰フ、仙人草ハ蓋シ羊齒ノ一種ナラント想像スルガ果シテ如何ナル種カ未詳デアル。

離蒿草(りかくさう)に似たものだ。北方地方には生えない。

氣味（缺）**主治**【小兒の酢瘡の頭が小さくして硬いものには、湯に煮て浴し、幷に擣いて傅ける。丹毒が腹に入れば必ず危ふい。冷藥を飲ませ、またこの湯を用ゐて洗ふがよし。又、挼んで汁を目に滴(た)らせば、目を明にし、瞖を去る。（藏器）



〔仙人草〕

(一)仙人掌草（宋圖經）

和名無し
學名未詳
科名未詳

集解　頌曰く、台州、筠州(ゐんしう)に生ずる。多くは石(二)上に壁に貼つたやうに生え、人の掌の形のやうなものだ。それでかく名けたのである。葉は細くして長く、春生えて冬になつてもある。(三)四季を通じて採收す



〔仙人掌草〕

(一)牧野曰フ、仙人掌草ハ如何ナッ草カ判明セヌ、本草綱目啓蒙ニ之レヲさぼてん科Opuntia屬のさぼてんニ充テアレドモ誤デアル。さぼてんハ仙人掌デ仙人掌草デハナイ。
(二)大觀ニ石字下ニ壁字アリ。
(三)大觀ニ無時ニ作ル。

る。

【氣味】【(四)苦く澀し、寒にして毒なし】【主治】【腸痔の瀉血には、甘草と共に酒に浸して服す】(蘇頌)【焙じて末にし、油で調へて小兒の白禿瘡に摻る】(時珍)

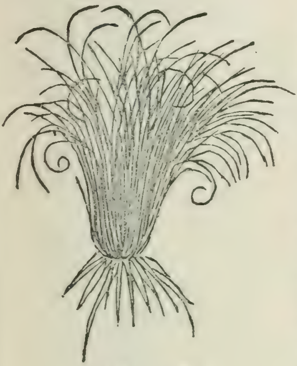
(一)崖椶（宋圖經）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】頌曰く、施州の石崖の上に生ずる。苗は高さ一尺ほどになり、その形狀は椶のやうで、四季共に葉があり、花はない。土地の者は根を採り、粗皮を去つて藥に入れる。

【氣味】【甘く辛し、溫にして毒なし】

【主治】【婦人の血氣、幷に五勞、七傷には、その根と半天回、雞翁藤、野蘭根の四味を洗ひ焙じて末にし、二錢づつ



〔崖　椶〕

(四)大觀ニ微字アリ。

(一)牧野曰フ、崖椶ハ何カすげ屬(Carex)ノモノデモアルカ今遽カニ定メ難イ、之レヲいとすげトスルモ又ささすげ、一名たがねさうトスルモ共ニ穩當デハナイ。

を溫酒で服す。男子には忌むものなし、婦人は雞、魚、溼麪(しつめん)を忌む】(蘇頌)

|附　錄| (二)雞翁藤　頌曰く、施州に生ずる。大木の上に蔓延し、葉があつて花はない。味辛し、性は溫にして毒なし。採收に一定の時期はない。

半天回　頌曰く、施州に生ずる。春苗が生え、高さ二尺ほど、赤斑色である。冬になると枯れる。土地の住民は夏季中に根を採る。味苦く澀(しぶ)る。性溫にして毒なし。

野蘭根　頌曰く、施州に生ずる。叢生で、高さ二尺ほどになり、四季共に葉があつて花はない。その根の味は微し苦し、性溫にして毒なし。採收に一定の時期はない。方は上記の主治を見よ。

(一)紫背金盤 (二)(宋圖經)

和名無し
學名未詳
科名未詳

|集　解| 頌曰く、施州に生ずる。苗は高さ一尺ばかり、葉は背が紫色だ。花はない。土地の住民は根を採つて用ゐる。

時珍曰く、(三)潮湘(こしやう)地方の水石の處には皆あつて、金盤藤と名を呼ぶ。酣筒草に似

(二) 牧野曰フ、雞翁藤、半天回幷ニ野蘭根皆詳カデナイ。

(一) 牧野曰フ、此書ノ紫背金盤ハ果シテ植物名實圖考卷ノ十六ニアル紫背金盤ト同品デアル乎否乎斷言出來ヌ、此圖考ノモノハじふにひとへニ似タ Ajuga 屬(脣形科)ノ一種デアル、集解中ノ酣筒草ハい

だとりデアル。

(三)大觀ニ盤下ニ草字アリ。

(四)湖湘ハ今ノ湖南省ノ中部地方、即チ洞庭湖ヨリ湘水流域一帶ノ地ヲ指ス。

(一)牧野曰フ、白龍鬚ハ多分 Lichen(今日ノ植物學者ノ謂フ地衣)ノ一種ナラント思ヘドモ其品名ハ固ヨリ判明セス。本草綱目啓蒙ニハ之レヲほや、一名しらご



〔紫背金盤〕

て、葉は小さくして背面は微紫色だ。莖は軟くして蔓を引き、黄絲に似てゐる。搓(よ)れば斷(き)れるが、目に付くほどの汁は出ない。方士はこれで汞を制す。他の地方にはあることが稀だ。○醋筒草といふは、葉は木芙蓉に似て偏(ちひさ)く、莖は空で脆く、味は酸い。白色の花を開く。廣地方では鹽醋で淹(つ)けて食ふ。

【氣味】【辛く濇し、熱にして毒なし】【主治】【婦人の血氣痛には、洗ひ焙じて硏末し、酒で半錢を服す。妊婦は服してはならぬ。能く胎氣を消するものである。雞、魚、羊血、淫麪を忌む】（蘇頌）

(一)白龍鬚（綱目）

和名未詳
學名未詳
科名未詳

【集解】時珍曰く、劉松石の保壽堂方に『白龍鬚(はくりうしゆ)は水邊に近く石のある處に生じ、搜風樹の節に寄生するものだ。乃ち樹の餘精である。椶絲(そうし)ほどの細いもので直(ちよく)

け、一名しらがごけトセシモ、ヨイ加減ノ充テ方デアルト思フ。植物名實圖考卷ノ二十一ニ圖説セル白龍鬚ハかがいも科(蘿藦科)ナルかもめづるノ一種デ本書ノモノト同名異物デアル。又萬纏草モ啓蒙ニハ蘚類ノ一種いとごけトスレドモ、是レモ蓋シ Lichen ノ一種デハナイカト思フ。

く起ち、枝、葉がない。眞物は最も得難いものである。一種の萬纏草なるものは、白線樹の根に生え、細い絲のやうで白龍鬚によく似てゐるが、ただこれには枝、莖があり、やや粗い點が相異する。誤つてこれを用ゐては效がない』とある。余が按ずるに、右に擧げた二種の樹名はいづれも隱語である。據として攷證すべきものがない。

［氣味］（缺）【平にして毒なし】［主治］【男子、婦人の風濕の腰腿疼痛、左癱右瘓、口目喎斜、及び産後の氣血流散で脛骨が痛み、頭、目が昏暗し、腰腿が痛んで忍び難きには、いづれもこれを用うるがよし。ただ虚勞の癱痿には服してはならぬ。研末して毎服一錢——氣弱の患者は七分——を無灰酒で服し、密室に居て左右その痛む方を床に著けて臥し、汗が出て自ら乾くを待つ。寝具を多くかけてはならぬ。かくて三日間は床を出て風に當つてはならぬ。ある方では、その病の淺いものは、末三錢を瓷缾に入れて酒一壺で煮て貯ひ、毎日朝一回と夕一回に先づ桔梗湯を服し、少頃してその酒二盞を飲む】（保壽堂方）

［發明］時珍曰く、保壽方に『成化十二年のことである。道士盧玄眞は六十七歳であつたが、その年六月、偶〻癱瘓を患ひ、白花蛇丸を服したために牙齒が盡く

落ちて了つた。かくて三年にして病を扶けて山に入り、この方を得て服し、百日にして舊に復し、世壽百歳にして逝去した。凡そ男子、婦人の風濕の腰腿痛には、先づ小續命湯、及び滲濕湯を服して後にこれを服す。凡そ婦人産後の腰腿腫痛には、先づ四物湯を二服して次の日にこれを服す。癱瘓年久しく、痰が老い、氣が微なるものの場合には、前の藥を服して汗を出し、その三日以後は日毎に龍鬚末一分を好き酒で服し、一日を隔て二分を服し、又一日隔て三分を服し、又一日隔て四分を服し、又一日隔て五分を服し、又一日隔て舊の一分から始め、前の方法の如くにして繰返す。かく一个月餘を繼續すればその病は漸次に癒える。これを升陽降氣、調髓蒸骨、追風逐邪、排血安神の方法といふ。房事、魚、鵞、雞、羊、韭、蒜、蝦、蟹、及び寒冷の物、動風の物を忌む。又、酒、及び麪食を過飲、過食してはならぬ。ただ米粥、蔬菜を食ふがよし』とある。

附方　新一。

【諸風癱瘓】筋骨の收らぬには、白龍鬚根皮一兩、鬧羊花、卽ち老虎花七分、好き燒酒三斤を固く封じ、一炷香の間煮て一夜土中に埋め、平常酒を飲み得るものは三盃、飲めぬものは一盃づつ就寢時に服す。三五盃まで服すれば效

が現はれる。痛みを感ずるやうでさへあれば治癒するものだ。（坦仙皆效方）

本草綱目草部第二十卷　終

本草綱目草部

第二十一卷

本草綱目草部目錄第二十一卷

草の十　苔類十六種

陟釐 別錄　乾苔 食療　井中苔 及び萍藍 別錄

船底苔 食療　石蕊 拾遺　地衣艸 日華 卽ち仰天皮。

垣衣 別錄　屋遊 別錄　昨葉何草 唐本 卽ち瓦松。紫衣を附す。

烏韭 本經 百蘂草を附す。　土馬騣 嘉祐

卷柏 本經 地柏、含生草を附す。　玉柏 別錄

石松 拾遺　桑花 日華 艾納を附す。

馬勃 別錄

右附方　舊三　新三十三

草の十一　雜草九種　有名未用百五十三種

雜草　拾遺四種　嘉祐二種、綱目三種

百草　百草花　井口邊草　樹孔中草　產死婦人冢上草
燕蓐草　雞窠草　豬窠草　牛齝草

神農本經

屈草　別羈

名醫別錄

離樓草　神護草　黃護草　雀醫草　木甘草
益決草　九熟草　兌草　異草　灌草
茈草　莘草　英草華　封華　愼華
節華　讓實　羊實　桑莖實　可聚實
滿陰實　馬顚　馬逢　兎棗　鹿良
雞涅　犀洛　雀梅　燕齒　土齒
金莖　白背　青雌　白辛　赤舉
赤涅　赤赫　黃秫　黃辯　紫給
紫藍　糞藍　巴朱　柴紫　文石
路石　曠石　敗石　石劇　石芸
竹付　祕惡　盧精　唐夷　知杖
河煎　區余　王明　師系　并苦
索干　良達　弋共　船虹　姑活

白女腸　白扇根　黃白支　父陛根　疥拍腹

五母麻　五色符　救赦人者　常吏之生　載

慶　腂　芥

本草拾遺

鴆鳥漿　七仙草　吉祥草　雞腳草　兎肝草

斷罐草　千金鑩　土落草　倚待草　藥王草

筋子根　廅藥　無風獨搖草

海藥本草

宜南草

開寶本草

陀得花

圖經外類

建水草　百藥祖　催風使　刺虎　石逍遙

黃寮郎　黃花了　百兩金　地茄子　田母草

田麻　芥心草　苦芥子　布里草　茆質汗

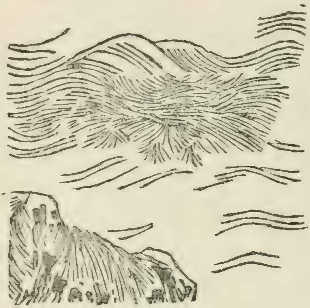
胡堇草　小兒羣　獨腳仙　撮石合草　露筋草

本草綱目

草の十　苔類十六種

(一)陟釐（別錄中品）

和名　いとかはみどろ（總名としての新稱）
學名　Spirogyra spp. et Zygnema spp. etc.
科名　あをみどろ科、等（水綿科、等）



〔陟　釐〕

釋名　**側梨**（恭）　**水苔**（開寶）　**石髮**（同）　**石衣**（廣雅）　**水衣**（說文）　**水綿**（綱目）　**藫**　音は覃（タン）である。恭曰く、藥對には『河中の側梨』とある。側梨と陟釐とは聲が近い。王子年の拾遺記に『晉の武帝が張華に側理紙を賜つた。これは水苔で作つたもので、後世世間では陟釐を側理と訛つてゐる』とある　これは水中の粗苔で作つた紙で、青(二)綠色のものだ。苔紙と名け、(三)青く澁い。范東陽の方には『水中の石上に生える。毛のやうで綠色なものだ』とある。石髮なる名稱はこのゆゑである。時珍曰く、郭璞は『藫は水(四)草

(一)牧野曰フ、陟釐ハ河ノ石上ニ生ズル所謂さい或ハ李時珍ノ集解ニ說ク水綿卽チあをみどろナドナ一ツノ品種ト見做シテノ名デ、畢竟此等ノ淡水藻類ノ總名デ今之レヲいとかはみどろト汎稱スル。あをみどろハ中ニハSpirogyra 或ハ Zygnemaナドノ諸品ガアル。
(二)大觀ニ遺ニ作ル。
(三)大觀ニ體澀ニ作ル。
(四)爾雅郭璞註ニ草ヲ苔ニ作ル。

であつて、一名石髪といひ、江東ではこれを食ふ』といつてある。按ずるに、石髪なるものには二種あつて、水中に生えるものは陟釐である、陸地に生えるものは烏韭である。

[集解] 別錄に曰く、陟釐は江南の池澤に生ずる。

弘景曰く、これは南方の地で紙に作るものだ。ただ(五)斷下の藥に合はせて用ゐるだけである。

志曰く、これは石髪のことである。色は苔に類してゐるが、粗澀なる點が異ふ。水苔は性冷であつて、水中に浮び、陟釐は性溫であつて、水中の石上に生える。

宗奭曰く、陟釐は、今世間で乾製して苔脯に作る。食へるものだ。青苔もやはり脯に作つて食へる。いづれも利するものだ。(六)汴京の商店で甚だ多く賣つてゐる。

頌曰く、石髪は、乾して藥にし、虀、臛に添へて食ふ。尤も美味なものだ。苔の類には、井中苔、垣衣、昔邪、屋遊などあつて、大體に於いて主たる療病上の功力はほぼ同じものである。陸龜蒙の苔賦に『高きには瓦(七)苔あり、卑きには澤葵あり。巖竇に散ずるをば石髪といひ、空田に鋪くをば垣衣といひ、屋に在るは昔邪といひ、

(五) 斷下ハ下痢ヲ止メルコト。

(六) 汴京ハ石部丹砂ノ汴東、汴西ノ註參照。

(七) 大觀ニ苔ヲ松ニ作ル。

藥に在るは陟釐といふ』とあるはこれである。澤葵とは鳧葵のことだ。類は異るが、いづれも瓦石の氣を感じて生えるものだ。故にこの賦には類に隨つていつたまでのことである。

時珍曰く、陟釐は水中にあつて石上に生えるもので、髮のやうにもしやもしやしてゐる。水汚中に石に著かずに自から生えるもので、絲綿のもみくちやになつたやうな狀態のものをば俗に水綿と呼ぶ。性、味はいづれも同じ。述異記に『苔、錢を澤葵と謂ふ』とあるは鳧葵と同名だが、實物は異ふ。蘇氏がこのものを指して鳧葵といつたのは誤だ。苔賦に擧げたものは盡くを詳にしたとはいひ兼る。蓋し苔衣の類には五種あつて、水に在るをば陟釐といひ、石に在るをば石濡といひ、瓦に在るをば屋遊といひ、墻に在るをば垣衣といひ、地に在るをば地衣といふ。蒙として翠で長さ數寸あるものにも五種あつて、石に在るをば烏韭といひ、屋にあるをば瓦松といひ、墻にあるをば土馬騣といひ、山に在るをば卷柏といひ、水に在るをば藫といふのである。

【氣味】【甘し、大溫にして毒なし】

主治　【心腹の大寒に中を溫め、穀を消し、胃氣を强くし、洩痢を止める】(別錄)【擣汁を服すれば、天行病の心悶を治す】(日華)【脯に作つて食へば渴疾を止める。(八)食鹽を禁ずる】(宗奭)【擣いて丹毒、赤遊に塗る】(時珍)

(一)乾苔（食療）

和名　ほしのり
學名　?
科名　うしけのり科、あをさ科等?

集解　藏器曰く、乾苔は海族のたぐひのものである。

時珍曰く、これは海苔のことだ。彼の產地の者はこれを乾して脯にする。これが生ずるところの海水は鹹いものだから陟釐とは同じくない。張華の博物志に『石髮は海中に生ずるもので、長さ一尺餘あり、大いさ韭葉ほどのもので、肉に雜ぜて蒸して食へば極めて美味だ』とあり、張勃の吳錄には『江蘺は海水中に生ずるもので、正靑色で亂髮に似てゐる』とある。乃ち海苔の類だ。蘇恭はこれを水苔としたが、同一物でない。水苔は甚だ鹹くはないものだ。

氣味　【鹹し、寒にして毒なし】大明曰く、溫なり。弘景曰く、柔苔は寒、

(八)大觀ニ食鹽上ニ仍須ノ二字アリ。

(一)牧野曰フ、乾苔ハ食用ニ供スル爲メ乾カシタのりデアツテ、其原料藻ハ何レヲ指スカ分明デナイガ、是レハ或ハあをのり（Enteromorpha屬）或ハあまのり（Porphyra屬）ナドヲ用ヰタモノデハナイカト想像スル。集解中ノ江蘺ハ、其文ニヨレバ正靑似亂髮トアツテ、或ハあをのりヲ指シタモノデハナイカト思フ、之レヲおごのりトスルハ中ツテ居ナイト斷ズル。

(三)殺字、大觀ニ從フ。

(一)牧野曰フ、フルヰドノ水中水面或ハヰドガハニ生活セル種種ノ植物ヲ總稱シタモノデ、一物ニ限定セラレタ名デハナ

乾苔は熱である。詵曰く、苔脯を食へば多く瘡疥を發し、痿黄となり、血色を少くする。瑞曰く、咳嗽ある人は食つてはならぬ。【主治】【癭瘤結氣】(弘景)【痔を治し、蟲を殺す。また霍亂嘔吐の止まぬには、煮汁を服す】(孟詵)【心腹煩悶するものは、冷水で泥のやうに研つて飲めば直ちに止まる】(藏器)【一切の丹石を下し、諸藥の毒を(三)殺す。木の孔へ納れて蠹を殺す】(日華)【茶積を消す】(瑞)【燒いて末にして鼻に吹けば衄血を止める。湯に浸して擣いて手背の腫痛に傅ける】(時珍)

【發明】時珍曰く、洪氏の夷堅志に『河南のある寺の僧が盡く癭疾を患つたとき、洛陽の僧が來て、同一寮に寄寓して毎食に苔脯を食ひ、他の病僧にも共にそれを食はせてゐたが、數个月經つうちに僧の項の贅は皆消えて了つた』とある。して見ると、海物はいづれもよくこの疾を除くものらしい。

(一)井中の苔、及び萍藍（別錄中品）和名　ゐどのなかのくさ

【集解】弘景曰く、廢井中に多く生える苔萍、及び磚土の間に多く生える雜草である。菜藍は元來毒を解すものであるが、井中に在るものが就中佳いのである。

イ。萍藍トハ雜草ヲ汎稱シタモノデアル。

(二)大觀ニ傷字ナシ。

(一)牧野曰フ、水ニ浮ビ居ル船ノ底ニ著キ生ズルモノデ、淡水藻類ノ或ル品種ヲ指シタモノデアラウガ、其品名ハ固ヨリ分明デハナイ。

別に一種の物があるわけではない。

【氣味】【甘し、大寒にして毒なし】【主治】【漆瘡、熱瘡、水腫、井中の藍は野葛、巴豆の諸毒を殺す】（別錄）【湯、火の(二)傷灼瘡を療ず】（弘景）

(一)船底苔（食療）和名　ふなごけ

【氣味】【甘し、冷にして毒なし】

【主治】【鼻洪、吐血、淋疾には、炙甘草、豉汁と共に濃く煎じた湯を呷ふ。（孟詵）【天行熱病、伏熱で頭、目が淸からず、神志昏塞するもの。及び諸種の大毒を解す。五兩を酥餅末一兩半に和し、麪糊で梧子大の丸にし、五十丸づつを溫酒で服す】（時珍）

【發明】時珍曰く、按ずるに、方賢の奇效方に『水の精氣が船の外側の板木を漬し、內側が累りに風や日光に晒されると、久しきに亙つて變じて靑色となる。蓋し太陽に晒されたために中に陰陽を感じたものだ。故にこれを服すれば、能く陰陽を分ち、邪熱を去り、臟腑を調へる。物の氣味が應用に適當する結果だ』といつて

ある。

【附方】舊二。【小便五淋】船底苔一團雞子大ほどを水で煮て飲む。(陳藏器)【乳石の發動】小便淋瀝し、心神悶亂するには、船底青苔半雞子ほどを煎じ、一日三四回、その汁を溫服する。(聖惠方)

(一)石蕊(拾遺)

和名 はなごけ
學名 Cladonia rangiferina, Web.
科名 はなごけ科(石蕊科)

【校正】有名未用、別錄の石濡を併せ入る。

【釋名】**石濡**(別錄) **石芥**(同) **雲茶**(綱目) **蒙頂茶** 時珍曰く、その形狀が花蕊のやうで、その味が茶のやうだから石芥と名けたもので、芥は茶の字の誤だ。

【集解】藏器曰く、石蕊は太山の石上に生ずる。花蕊のやうなものだ。丸、散にして服したといふが、現今では一向この物がない。王隱の晉書に『庾褒は(三)林慮山に入つて木の實を食ひ、石蕊を餌つて遂に長年を得た』とあるはこれである。又曰く、『石濡は石の陰に生じ、屋遊、垣衣の類のやうなもので、雨が降ると展びる。

(一)牧野曰フ、石蕊ハ先輩ノ定メシ如ク之レヲはなごけトスルヲ穩當ナ考ト思フ。

木村(康)曰ク、石蘂ニはなごけヲ充ツルナラバ、はなごけト伴ツテ產スル事多キきはなごけ(安田氏)又みやまはなごけ(三好氏) Cladonia alpestris, Rabenh. 及ビわらはなごけ C. s. lvatica, Rabenh. 等ノ如キモ、石蘂ノ原植物トシテ論ズベキモノナラン。

(三)林慮山、太平御

覽卷四十五ニ『隋圖經曰、隆慮山。一名林慮。蓋隋縣西二十里。——南接大行。北連恒岳』トアリ。漢ノ隆慮。卽チ今ノ河南省林縣ノ西山西省境ニアル林慮山ナリ。

(二) 兗州蒙山ハ石部石膏ノ魯ノ蒙山ノ註參照。

故に石濡といふ。春の早いうちに青翠色になり、端に四枚の葉を開く。山間の住民はこれを石芥と名けてゐる。

時珍曰く、別錄には、石濡としてその功用を具さに記してあるが、形狀の說明がない。陳藏器は、これを屋遊の類のものといひ、また石蕊の一條を別に記載したが、その功力は石濡と同じものだ。蓋し石濡といひ石蕊といひ同一物であることを知らなかつたのだ。この物はただ、諸處の高山の石上のもののみを良しとし、今は一般にこれを蒙頂茶と呼び、(二)兗州蒙山の石上に生ずる。煙霧の熏染日久くして結成するもので、蓋し苔衣の類である。彼の地方では、春初に刮り取つて曝乾し、雲茶と稱して贈進物とする。その形狀は白色、輕薄で花蕊のやう、香氣は蕈のやうだ。味は甘く澁くして茗のやうだが、煎じては飲めない。ただ咀嚼し、または湯に浸して啜るものだ。清涼にして味がある。



〔石蕊〕——雪茶——

唐褒が山に入つてこれを餌つたといふは、茗の代用にしたまでのことであらう。天年を長くする方法として、必ずしも全然この物だけで緣つたといふわけではあるまい。

［氣味］【甘し、溫にして毒なし】時珍曰く、甘く濇し、涼なり。［主治］【石濡は、日を明にし、精氣を益し、饑渴せざらしめ、身體を輕くし、天年を延べる】(別錄)【石蕊は、天年を長くし、饑ゑぬことに主效がある】(藏器)【津を生じ、咽を潤ほし、熱を解し、痰を化す】(時珍)

(一)地衣草(日華) 和名 ぢごけ

［校正］拾遺土部の仰天皮を併せ入る。

［釋名］**仰天皮**(拾遺) **掬天皮**(綱目)

［集解］大明曰く、これは陰濕の地に日に晒されて浮上る苔蘚である。藏器曰く、濕地上の苔衣で、草のやうな形をしたもののことだ。

(一)牧野曰ク、地衣草ハ必ズシモ一種ノ植物デナク、地面ニ平布シテ生活スル綠苔ナドノ總名デアル。中ニハ蘚類モアレバ苔類モアル、又淡水藻類モ交ハリ生ズル、又下等ナ菌類モ雜生スル事ガアラウ。今日ノ植物學者ハ Lichen ヲ地衣ト定メ居レドモ、是レハ必ズシモ正確ナ對譯デハナイ。

木村(康)曰ク、本草ノ地衣ハ蘚苔類ノ總稱ニシテ、現在ノ地衣類ニ相當スルモノニ非ザレドモ、參考トシテ現在ノ所謂地衣類ノ成分ヲアゲレバ、今日迄地衣類中ニ發見セラレタル化學成分ハ殆ンド地衣類固有ノモノニシテ植物ノ他ノ部類ノ何



〔地衣〕
—仰天皮—

〔氣味〕【苦し、冷にして微毒あり】藏器曰く、平にして毒なし。

〔主治〕【卒心痛、中惡には、人間の垢膩で丸にして七粒を服す。又、馬反花瘡に主效がある。生油で調へて傅ける】（大明）【目を明にする】（藏器）【研末して新汲水で服すれば中暑を治す】（時珍）

〔附方〕新三。【身體、面部の丹腫】蛇のやうな形に腫れたるには、雨の滴る階下の苔痕を水に化し、その蛇の頭のやうな部分に塗れば癒える。（危氏得效方）【雀目夜昏】七月七日、九月九日に地衣草を取り、陰乾しに末にし、一日三回、酒で方寸匕づつを服す。一个月で癒える。（崔知悌方）【陰上の粟瘡】水が溜つて濕る處の乾巻皮を取り、末にして傅けるが神效がある。（外臺祕要）

垣衣（一）（別錄中品）和名　かきれのこけ（新稱）

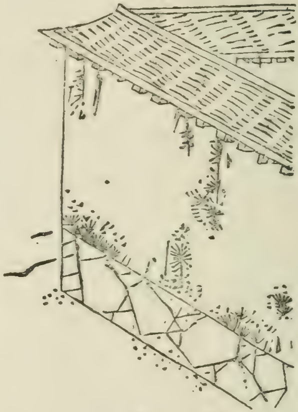
〔釋名〕垣嬴（別錄）天韭（別錄）鼠韭（別錄）昔邪（別錄）

物ニモ產出セザルヲ以テ特ニ之ヲ地衣質（地衣成分）ト呼ブ。含有スル物質ヲ化學的ニ分類スレバ（一）脂肪體化合物トシテハ、中性物質約十七種酸及ビラクトン約十九種及ビ地衣澱粉類（二）芳香體化合物トシテハ、プルヴヰン酸誘導體約八種チオフアン酸類約四種デ、プシド類（殊ニオルチン誘導體）約七十八種アントラヒノーン類約十種及ビ約八十種ノ地衣類ニ檢出セラレタルウスニン酸ト所屬不明ノ物質及ビ色素若干ナリ。朝比奈博士—日本藥報、昭和三（二〇）二（二一）四。

（一）牧野曰フ、垣衣ハ土牆ノ陰或ハ土屋根ニ生ズル蘚苔ノ總稱デアルカラ、中ニ

ハ無論ぜにごけ(M rchantia 屬)、ひめじやごけ(Conocephalus屬)ナドモ雜ツテ居ルデアラウ。

【集解】別錄に曰く、垣衣は古い垣墻の陰、或は屋上に生ずる。三月三日に採つて陰乾する。



〔垣　衣〕
——屋に在る屋遊といふ——

恭曰く、これは古墻の北向の陰に生える青苔衣である。石上に生えるものをば昔邪、一名烏韮といひ、屋上に生えるものをば屋遊と名ける。形はいづれも相似たもので、治療上の效もほゞ同じである。江南には墻が少いところから、陶弘景は『方には一向用ゐぬ。俗間でもあまり見掛けぬものだ』といつた。

時珍曰く、これは磚墻や城垣の上の苔衣である。屋瓦に生えるものが屋遊だ。

【氣味】【酸し、冷にして毒なし】【主治】【黃疸、心煩、欬逆、血氣、暴熱が腸胃に在るもの、暴風口噤、金瘡內塞には酒に漬けて服す。久しく服すれば中を

補し、氣を益し、肌肉を長じ、顏色を好くする】（別錄）【擣汁を服すれば衄血を止める。燒灰を油で和して湯火傷に傅ける】（時珍）

屋遊（一）（別錄下品）　和名　やねのこけ

【釋名】瓦衣（綱目）瓦苔（嘉祐）瓦蘚（綱目）博邪

【集解】別錄に曰く、屋遊は屋上の陰處に生ずる。八月、九月に採る。
弘景曰く、これは古い瓦屋上の（二）苔衣であつて、剝ぎ取つて用ゐるのである。
時珍曰く、その長さ數寸のものをば瓦松といふ。

【氣味】【甘し、寒にして毒なし】【主治】【浮熱の皮膚に在るもの、往來寒熱、小腸、膀胱の氣を利す】（別錄）【消渴を止める】（之才）【小兒の癇熱、時氣煩悶】（開寶）【水で煎じ鹽を入れて口を漱げば、熱毒の牙齦宣露を治す。研末して新汲水で調へて二錢を服すれば鼻衄を止める】（時珍）

【發明】時珍曰く、別錄に主治として擧げた病證は、本經の烏韭の條に記された文と同じである。蓋し一類のものであつて、性、氣も甚しく懸隔あるものではな

（一）牧野曰ク、屋遊ハ屋根ノ面ニ生ズルこけノ總名デ、中ニハ蘚類モアレバ地衣類モアツテ一樣デハナイ。

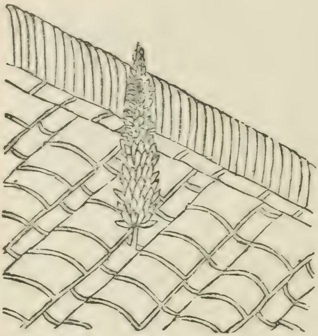
（二）大觀ニ苔上ニ青字アリ。

いらしい。

[附方] 新一。【犬の咬傷】舊い屋瓦の上から刮り下した青苔屑で擦り揉めば止まる。（經驗方）

(一)昨葉何草（唐本草）

和名　たうつめれんげ（新稱）
學名　Cotyledon spinosa, L.
科名　べんけいさう科（景天科）



［昨葉何草］
—瓦松—

[釋名] 瓦松（唐本） 瓦花（綱目） 向天草（綱目） 赤いものを鐵脚婆羅門草（綱目） 天王鐵塔草と名ける。時珍曰く、この名稱は誠に譯が判らない。頌曰く、瓦松とは、松子のやうに層を作してゐるから名けたものだ。

[集解] 恭曰く、昨葉何草は(二)上黨地方の屋上に生ずる。蓬の初生のやうな

(一)牧野曰フ、昨葉何草ハ白花ヲ開ク、我邦ノつめれんげニ酷似セルモノデアルガ、其花ガ黄色デアルユエ之レトハ別種ニ屬スル、未ダ我邦ニ産スルヲ聞カズ。

(二)上黨ハ石部長石ノ註ヲ見ヨ。

ものて、高さ一尺餘になり、遠望すると松を栽ゑてあるやうに見える。

志曰く、處處にある。年久しき瓦屋の上に生えるもので、六月、七月に苗を採つて日光で乾す。

【氣味】【酸し、平にして毒なし】時珍曰く、按ずるに、庚辛玉冊に『向天草、卽ち瓦松は陰草である。屋瓦の上、及び深山の石の割目の中に生ずるもので、莖は漆のやうに黑くして圓く鋭く、葉は背面に白毛がある。大毒があつて、燒灰の淋汁で髮を沐すれば髮が落ち、誤つて目に入れば失明する。擣汁は能く草砂を結し、雌黃、雄黃、丹砂、汞、白礬を伏す』と記載してある。この說は本草の『毒なし』また『眉髮を生ず』とある說と反對だ。注意せねばならぬことだ。

【主治】【口中の乾いて痛むもの。水、穀、血痢。血を止める】（唐本）【眉髮を生ずる膏として重要な藥である】（馬志）【婦人の經絡を行らす】（蘇頌）【大腸下血には灰に燒いて一錢を水で服す。又、諸瘡の斂らぬものに塗る】（時珍）

【附方】舊一、新九。【小便（三）沙淋】瓦松、卽ち屋上の無根草を濃く湯に煎じ、熱に乘じて小腹を熏じ洗ふ。凡そ三四時間で通じる。（經驗良方）【月經を通じ、血を破

（三）沙淋ハ尿石病。

る】舊屋の日陰に生えた瓦花の活きたもの五兩を熬膏し、當歸鬚、乾漆一兩を煙が盡きるまで燒き、當門子二錢を末にし、棗肉で和して梧子大の丸にし、七十丸づつを紅花湯で服す。(摘玄方)【髭髮を黑く染める】乾瓦松一斤半、生麻油二斤を共に煎じ焦して末にし、別の生麻油に浸して塗る。甚だ妙である。(聖濟錄)【頭風白屑】瓦松を暴乾し、灰に燒いて淋汁を取り、熱して洗ふ。六七回を過してはならぬ。(聖惠方)【牙齦の腫痛】瓦花、白礬等分を水で煎じて含漱する。立ろに效がある(摘玄方)【唇が裂けて生じた瘡】瓦花、生薑に鹽少量を入れて搗いて塗る。(摘玄方)【湯火灼傷】瓦松、生柏葉を共に搗いて傅ける。乾いたものならば末にする。(醫方摘要)【灸瘡の斂らぬもの】瓦松を陰乾して末にし、先づ槐枝葱白湯で洗つた後に摻る。立ろに效がある(濟生祕覽)【惡瘡の斂らぬもの】方は上に同じ。【狂犬の咬傷】瓦松、雄黃を研つて貼れば毒が發せぬ。(生生編)

附錄　紫衣(拾遺)　藏器曰く、味苦し、毒なし。黃疸で暴熱し、目黃にして沈重なるに主效があり、水癊を下す。また熱痢を止めるにもこれを煮て服す。灰にし淋汁を取つて頭を沐すれば髮を長くする。これは古木の錦花であつて、石瓦にも

皆ある。物を褐色に染め得るものだ。

(一)烏韭（本經下品）

和名　ほうわうごけ
學名　Fissidens japonicus, Doz. et Molk.
科名　ほうわうごけ科（烏韭科）

校正　別錄有名未用の鬼䴡を移し入る。

釋名　**石髮**（唐本）　**石衣**（日華）　**石苔**（唐本）　**石花**（綱目）　**石馬騣**（綱目）

鬼䴡　䴡は麗と同字である。弘景曰く、垣衣も烏韭なる名があるが、治療上の功力は異ふ。このものの種類ではない。

時珍曰く、別錄に記してある主治の病證は垣衣と同じだ。して見ると、これもその同一種のもので、通じて烏韭と呼んだものであらう。やはり害はない。ただ石髮は陟釐とも同名だがそれは水と陸とで性にやや同じからぬ點があるだけだ。

集解　別錄に曰く、烏韭は山谷の石上に生ずる。又曰く、鬼䴡は石上に生ずる。挼んで日光で乾して末にする。

恭曰く、石苔である。また石髮とも名ける。巖石の陰の日光に當らぬ處に生える。

(一)牧野曰フ、烏韭ヲ私ハ蘚類中ノほうわうごけト鑑定スルガ、若シ其種ニ中ラネバ蓋シ同屬中ノ他ノ種ナラン。先輩之レヲ羊齒類ノほらしのぶニ充ツルハ不可デアル。



〔烏韭〕

卷柏と相類するものだ。

藏器曰く、大石、及び水間の陰處に生ずる。青翠色で茸茸としたものだ。苔に似てゐるが苔ではない。

大明曰く、これは石衣のことだ。長いものは四五寸ばかりある。

氣味　【甘し、寒にして毒なし】大明曰く、冷にして毒あり。垣衣が使となる。

主治　【皮膚の往來寒熱　小腸、膀胱の氣を利す】(本經)【黃疸　金瘡の內塞を療じ、中を補し、氣を益す】(別錄)【灰に燒き頭を沐すれば、髮を長くし黑くする】(大明)

附方　新三。【腰脚の風冷】石花を酒に浸して飲む。(聖惠方)【婦人の血崩】石花、細茶を焙じて末にし、舊漆を碟中で燒いて性を存して各一匙を用ゐ、先づ盌に酒を盛つて鍋に入れ、一滾り滾らしてから右の藥末を入れて一夜露し、翌曉早く藥を入れたまま再び煮て一回滾らして溫服する。(董炳避水方)【湯火の灼傷】石花を焙じ

研つて傅ける。（海上方）

【附錄】

（二）百蘂草（宋圖經）頌曰く、（三）河中府、秦州、劍州に生ずる。根は黃白色、形は瓦松のやう、莖、葉は倶に青い。松葉のやうなものもある。花はない。三月苗が生えて四月に長く伸び、五六寸ばかりになる。四季を通じ、根を採つて晒して用ゐる。乳汁を下し、血脈を順にし、氣を調へるに甚だ佳し。



［百蘂草　—秦州—］

多く瓦上に生じて小なる黃花を開く。

時珍曰く、烏韭とは瓦松の石上に生えたもの、百蘂草とは瓦松の地に生えたもののことである。

（一）土馬騣（宋嘉祐）

和名　すぎごけ
學名　Polytrichum sp.? Pogonatum sp.?
科名　すぎごけ科（土馬騣科）

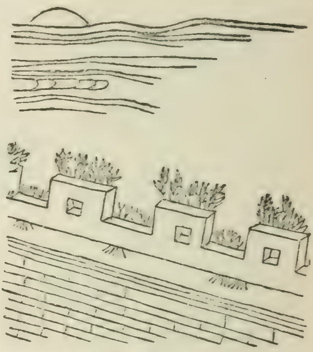
【集解】禹錫曰く、所在の日光に背いた陰の古墻垣の上にある。降雨の多い歳

（二）牧野曰フ、百蘂草ハ百乳草デアルガ、先罹ハ之レヲびやくだん科（檀香科）ノかなびきさう（Thesium chinense, Turcz）ニ充テタ。下ノ附錄ノ文ヲ檢スルト彷彿トシテ其草ノ態ハアルガ、然シ的確ナ斷言ハ出來ナイ。

（三）河中府ハ石部石中黃子ノ註、秦州ハ石部水銀ノ註、劍州ハ金部鉛ノ註ヲ見ヨ。

（一）牧野曰フ、先罹ニ從ヒ和名ヲすぎごけトシテオクガ、然シ其學術上ノ種名ハ判明セヌ。或ハ又にはすきごけ屬ノ方ノ

モノデアルカモ知レヌ。



〔土馬騣〕

にはこれが茂盛する。或はこれを垣衣といふものもあるが、それは違ふ。垣衣は垣墻の側面に生え、これは垣墻の上に生えるもので、垣衣に比すれば更に長い。故にこれを馬騣といふ。苔の類である。

時珍曰く、垣衣とは磚墻の上の苔衣のこと、これは土墻の上の烏韮のことだ。

【氣味】〔甘く酸し、寒にして毒なし〕

【主治】〔骨熱敗、煩熱毒壅、衄鼻〕（嘉祐）【髮を沐すれば長く黒くする。大小便を通じる】（時珍）

【附方】新五。【九竅の出血】墻頭苔を挼んで塞ぐ。（海上方）【鼻衄の止まぬもの】寸金散——墻上の土馬騣二錢半、石州黃藥子五錢を末にし、二錢を新水で服す。再服すれば立ろに止まる。（衞生寶鑑）【二便不通】土馬騣を水で淘り淨め、瓦で煿いて切り、二錢づつを水一盞で煎じて服す。（普濟）【耳上の濕瘡】土馬騣、井中苔等分を

末にし、燈盞の中の油で和して塗る。（聖濟錄）　【若白髮（わかしらが）】土馬騣、石馬騣、五倍子、半夏各一兩、生薑二兩、胡桃十箇、膽礬半兩を末にし、搗いて一塊にし、一彈子ほどづつを絹袋に盛り、それを熱酒少量を入れた汁に髮を浸して洗ふ。一箇月で神效がある。（聖濟錄）

卷柏[一]（本經上品）

和名　いはひば
學名　Selaginella involvens, spring.
科名　いはひば科（卷柏科）

【釋名】萬歲（別錄）　長生不死草（綱目）　豹足（吳普）　求股（別錄）　交時（別錄）時珍曰く、卷柏、豹足（へうそく）は形を形容したもの、萬歲、長生はその久しきに耐（た）へることを表したものである。

【集解】別錄に曰く、卷柏は[二]常山の山谷の石間に生ずる。五月、七月に採つて陰乾する。

弘景曰く、今は近道に出る。石土の上に叢生するもので、葉は細く、柏に似たもので、雞の足のやうに內側に曲（まが）り、青黃色だ。これを用ゐるには沙石に接近した部

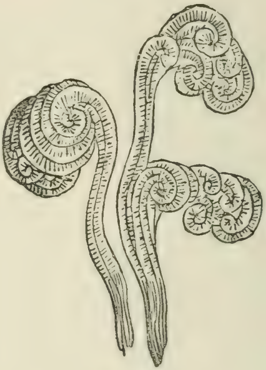
（一）牧野曰フ、卷柏ハ我邦ニモ產スルいはひば、一名いはまつデ山中ノ巖上ニ生ズル。久シク雨ナケレバ乾キテ其枝葉周圍ヨリ內方ニ卷クモノデアル。柏ハ其葉ノ形容カラ名ケタデアラウ。木村（康）曰ク、現今卷柏トシテ行ハルモノ、和漢品共ニいはひばナルヲ認ム。

（二）常山ハ石部鹵石類凝水石ノ註ヲ見ヨ。

(三)建康ハ毒草類狼牙ノ註、三輔ハ山草類知母ノ註ヲ見ヨ。(四)關陝ハ陝西省ノ南半。沂州ハ石部馬腦ノ註、兗州ハ水部井泉水ノ註ヲ見ヨ。

分を取去る。

禹錫曰く、(三)建康に出る。范子計然には『三輔に出る』とある。



〔卷柏〕

頌曰く、今は(四)關、陝、及び沂、兗の諸州にもある。舊根は紫色で鬚が多く、春苗が生え、柏葉に似て細く、拳のやうに內側に卷き込まつて雞の足のやうだ。高さは三寸乃至五寸のもので、花も子も無い。多く石上に生える。

［修治］ 時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、鹽水で半日煮てから再び井水で半日煮て、晒し乾し焙じて用ゐる。

［氣味］ 【辛し、平にして毒なし】別錄に曰く、甘し、溫なり。普曰く、神農は辛し、平なりといひ、桐君、雷公は甘し、微寒なりといふ。

［主治］ 【五臟の邪氣、婦人陰中の寒熱痛、癥瘕、血閉、不妊。久しく服すれば身體を輕くし、顏色を和げる】(本經)【欬逆を止め、脫肛を治し、淋結、頭中の風眩、痿蹷を散じ、陰を

强くし、精を益し、容顔を好くする】(別錄)【月經を通じ、尸疰、鬼疰の腹痛、百邪、鬼魅で啼泣するものを治す】(甄權)【心を鎭め、面皯、頭風を除き、水臟を暖める。生で用ゐれば血を破り、炙いて用ゐれば血を止める】(大明)

附方　新二。【大腸下血】卷柏、側柏、棕櫚等分を燒いて性を存して末にし、三錢づつを酒で服す。また飯で丸にして服するもよし。(仁存方)【遠年の下血】卷柏、地楡を焙じて等分を、一兩づつ水一盌で煎じ、數十沸して通口に服す。(百一選方)

附錄　(五)**地柏**(宋圖經)　頌曰く、臟毒下血に主效がある。黃芪と等分を末にし、米飲で二錢づつを服す。蜀地方の住民はこの方を甚だ神なるものとしてゐる。この草は蜀中の山谷に生じ、河中府にもある。根は黃色で、形狀は絲の如く、莖は細くして上に黃色の點があり、花も葉もない。三月生えて四五寸ばかりに成長する。四月採つて暴乾して用ゐる。蜀中では九月に採り、商店で多く賣つてゐる。

時珍曰く、これもやはり卷柏であつて、地上に生えたものである。

(六)**含生草**(拾遺)　藏器曰く、(七)靺鞨國に生ずる。葉は卷柏のやうで大きく、性は平にして毒なし。婦人の難産に主效があり、含んで汁を嚥めば直ちに子が生れる。

(五)牧野曰フ、地柏ハ蓋シ Selaginella屬ノくらまごけ或ハあたごごけノ一種デアラウト思ヘドモ、其種名ハ固ヨリ判然セヌ。

(六)牧野曰フ、含生草ハ十字花科ノ Anastatica hierochunt-

ica, L. デ俗ニ Rose of Jericho. ト呼バルルモノデ、アラビア、エヂプト、并ニシリア(小亞細亞)ノ特產デ沙地ニ生エル一年生ノ小草本デアル。果實ノ熟セシ頃ニハ葉ハナク乾ケバ其果實ヲ著ケシ枝ハ內方ニ卷テ球狀ヲ呈シ、風來レバ根拔ケテ砂上ヲ轉轉シ其種子ヲ遠近ニ散布スル。孕婦ガ產氣ヅイタ時其乾イタ全株ヲ水中ニ入レ、其開クヲ俟テ出產ノ時期ヲトスル習俗ガアル、故ニ我邦デモ之レヲあんざんじゆ(安產樹)ト稱スル。

(七)韃靼國ハ韃靼種ノ居住地方ノ意ナリ。周ニハ肅愼トイヒ、漢魏ニハ挹婁トイヒ、後魏ニハ勿吉トイヒ、三韓、及ビ隋、唐ニハ靺鞨トイフ。黑龍江、松花江流域地方ヲイフ。

(一)玉 柏（別錄有名未用）

和名 まんねんすぎ
學名 Lycopodium obscurum, L.
科名 ひかげのかづら科(石松科)

釋名 玉遂 別錄） 藏器曰く、舊(もと)は玉伯と書いたもので、これは傳寫の誤である。


〔玉 柏〕

集解 別錄に曰く、石上に生じ、松のやうで高さ五六寸になり、紫の花を開く。莖と葉を用ゐる。

時珍曰く、これは石松の小さいもののことである。世間ではいづれも採つて盆栽などにするが、數年間枯れないので、千年柏(せんねんはく)、萬年松などと呼んでゐる。

(一)牧野曰フ、玉柏ハ先輩ノ定メシ如ク之レヲまんねんすぎトスルハ可デアルト思フ。彼ノかうやのまんねんぐさハ蘚類デ之レトハ全ク別ノ者デアル。

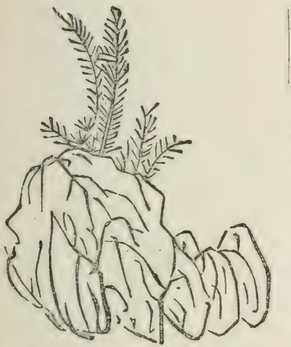
【氣味】【酸し、温にして毒なし】【主治】【身を輕くし、氣を益し、渇を止める】(別錄)

石松(一)(拾遺)

和名　ひかげのかづら
學名　Lycopodium clavatum, L.
科名　ひかげのかづら科(石松科)

【集解】藏器曰く、天台山の石上に生ずる。松に似て高さ一二尺ばかりのものだ。山間の住民はその根と莖を取つて用ゐる。

時珍曰く、これは玉柏(ぎよくはく)の長いもののことである。名山にはいづれもあるものだ。



〔石　松〕

(二)【氣味】【苦く辛し、温にして毒なし】【主治】【久患の風痺、脚膝の疼冷、皮膚の不仁、氣力衰弱。久しく服すれば風血、風瘙を去り、顏色を好くし、白髮を黑く變じ、老衰せぬ。酒に浸して

(一)牧野曰フ、集解ノ文極メテ簡單デ其形狀ヲ摸索スルコト頗ル困難デアルガ、先輩之レヲひかげのかづらニ充テシハ、其原文ヲ玩味シテ多分可ナルコトデアラウト思ヒ玆ニ其レニ從フテオイタ。

(二)木村(康)曰ク、石松子ハ石松屬植物ひかげのかづらノ芽胞ニシテ、獨逸ニ於テハ既ニ一五〇〇年ノ中葉ヨリ糜爛部ニ撒布スル等ノ目的ニ

飲むが良し】（藏器）

(一)桑花（日華）

和名　くはのきごけ
學名　未詳
科名　うめのきごけ科？

【釋名】桑蘚（綱目）桑錢

【集解】大明曰く、桑樹の上に生える白蘚(にくせん)で、地錢のやうでもあり、花のやうな有樣でもある。刀で刮り取つて炒つて用ゐる。花とはあつてもこれは桑椹花(さうじんくわ)のことではない。

【氣味】【苦し、暖にして毒なし】【主治】【脾を健にし、腸を濇(しよく)し、鼻洪、

之ヲ應用セリ。而シテ石松屬ハ寒帶及温帶ノ諸國ニ産シ又本邦ニモ産出ス。石松子ハ露國、獨逸及ビ瑞西ニ於テ多ク採集ス。本邦ニハひかげのかづらノ他石松屬ノ植物約二十種アリ、概ネ石松子ノ採取ニ利用シ得ベシト雖モ、殊ニ適當ナルモノハまんねんすぎトス。蓋シ本植物ハ他ノ同屬植物ニ比シ多ク實穗ヲ生ズレバナリ。（生藥學）

【成分】石松子ハ脂肪油約四九%及糖分三%ヲ含有ス。脂肪油ノ八〇—八六%ハ石松子油酸ノグリセリドヨリ成リ、少量ノミリスチン酸グリセリドヲ混ス。Bödeker 氏ハ近縁種 L. complanatum, L. 中ニ Lycopodin ナルアルカロイドヲ發見セリ。Flückiger 氏ニヨレバ石松子中ニモ其痕跡ヲ含有スト言フ。灰分量ハ三%ヲ超エズ。A. Langer: Arch. Pharm. 227, 248, 208 (188　K. Bödeker: Ann. 208, 363 (1881)

(一) 牧野曰フ、くはノ樹ノ幹又ハ枝ニ著イテ生ズル Lichen ノ一種デ、うめのきごけ樣ノ者デアルガ其種屬ハ今遽カニ明ラメ難イ。木村(康)曰ク、桑花ハ蓋シ Parmelia, Ramalina, Lobaria ニ屬スル梅苔科ノ種類ナリ。

吐血、腸風、崩中帶下を止める】（大明）【熱欬を治す】（時珍）

【附方】新一。【大便後血】桑樹上の白蘚花を水で煎じて服す。或は末にして服しても吐血を止める。（聖惠方）

【附錄】(二)艾納　時珍曰く、艾納は老松樹上に生える綠苔衣であつて、一名松衣といふ。諸香に和合して燒くと、烟が淸く、聚つて散ぜぬ。艾納香といふものも別にあるが、これとは同じ物でない。又、嶺南の海島中の檳榔木上の苔にも松の艾納のやうなものがあるが、その物のみを爇いては極めて臭く、泥香に合せると能く香を發する。甲香のやうなものだ。霏雪錄に『(三)金華山中に樹衣が多い。僧侶はそれを蔬にして食ふが、味は極めて美味だ』とある。

(一)馬勃（別錄下品）

和名　やぶだま（古名をおにふすべト稱ヘタ）
學名　Lasiosphaera Fenzlii, Reich.
科名　きつねのちやぶくろ科（馬勃科）

【釋名】**馬疕**　疕の音は屁（ヒ）である。**馬𤄷**　𤄷の音は疕（ヒ）である。**灰菰**（綱目）　**牛屎菰**

(二)牧野曰フ、艾納ハまつのこけト名クベキモノデ、松樹ニ附著シテ生ズルこけデアレドモ其所屬并ニ種屬名ハ今不明デアル。文中ニアル艾納香ハきく科（菊科）ノ草木デアル Blumea balsamifera DC. ヲ指シタモノデアラウ。此草ハ支那デハ海南島ナドニ生ジ、樟腦樣ノ香料ヲ採ルモノデアルガ我ガ臺灣ニモ產スル。

(三)金華山ハ浙江省金華縣ノ北ニ在リ。一名長山トイフ。

(一)牧野曰フ、馬勃ハ菌類ノ一種デやぶだまノコトデアル。巨大ナ球ヲナシテ居ルノデ自然ニ衆人ノ目ニツキ、從テ諸州ニ種種ノ方言ガアル。後ニハ褐色ノ胞

子ガ飛散スルガ、始メハ内部白色ノ肉質デ食用トナル。木村(康)曰ク、馬勃ハ文獻ニ見ル如ク從來主トシテほこりたけヲ充ツレドモ勿論右一種ノミニ限ルベカラズ。ほこりたけ科ニ屬スル Lycoperdon, Globaria, Bovista, Bovistora, Mycenastrun, Geaster 等ノ屬中最多ク Lycopordon 之ニ次デ Globaria, Bovista 等ノモノモ用ヰラレタルナルベシ。尙我ガ本草家ノ充テ來レル前者ニ近緣ノおにふすべハ商品ニハ之ヲ見ザレドモ、又馬勃ノ一種トス可キカ。尙二三ノ商品ニ類スル種名ヲアグレバ、むらさきほこりたけ(Lycoperdon purp-

【集解】 別錄に曰く、馬勃は畑の中の久しく腐つた處に生ずる。

弘景曰く、俗にいふ馬𤸎勃がこのものだ。紫色で、虛軟で、狗肝のやうな形狀で彈けば粉が出る。

宗奭曰く、濕地、及び腐木の上に生える。夏、秋に採る。大きいものは斗ほどあり、小さいものも一升入の杓ほどある。韓退之が所謂、牛溲、馬勃倶に收め、竝に畜へるといつたのはこの物だ。


〔馬　勃〕

【修治】 時珍曰く、凡そこれを用ゐるには、生布を張り開いた上で馬勃を摩し擦り、下に盤を置いて承け、落ちる末を取つて用ゐる。

【氣味】 【辛し、平にして毒なし】

【主治】 【惡瘡、馬疥】(別錄)【諸瘡に傅けて甚だ良し】(弘景)【膜を去り、蜜を拌ぜて揉み、少量の水で調へて呷へば、喉痺、咽疼を治す】(宗奭)【肺を淸し、血を散じ、熱毒を解す】(時珍)

【發明】 時珍曰く、馬勃は輕虛であつて、上焦、肺の經の藥である。故に能く肺熱、欬嗽、喉痺、衄血、失音の諸病を淸するのである。李東垣の大頭病、咽喉不

urnisens Berk.et Curt.)きつねぶくろ(L. uteriforme Bull.)きつねのちやぶくろ(Globaria Bovsita Quel.)等ナリ。

利を治する普濟消毒飲にもこれを用ゐてある。

附方　新九。【咽喉腫痛】物を嚥込めぬには、馬勃一分、蛇退皮一條の燒末を用ゐ、一錢を綿で裹んで含嚥する。(聖惠方)【走馬喉痺】馬屁勃、即ち灰菰、焰消一兩を末にし、一字づつを吹き入るれば涎血を吐して癒える。(經驗良方)【聲を失して出ぬもの】馬屁勃、馬牙消等分を研末し、沙糖を和して芡子大の丸にして噙む。(摘玄方)【久嗽の止まぬもの】馬勃を末にし、蜜で梧子大の丸にし、二十丸づつを白湯で服すれば癒える。(普濟方)【魚骨の哽咽】馬勃末を蜜で彈子大の丸にして噙み嚥む。(聖濟錄)【積熱の吐血】馬屁勃を末にし、沙糖で彈子大の丸にし、半丸づつを冷水に溶して服す。(袖珍方)【妊娠吐衄】止まぬには、馬勃末半錢を濃米飲で服す。(聖惠方)【斑瘡の眼に入つたもの】馬屁勃、蛇皮各五錢、皂角子十四箇を末にして罐に入れ、鹽泥で固濟して燒いて性を存し、それを研つて一錢づつを溫酒で服す。(閻孝忠集效方)【臁瘡の斂らぬもの】葱鹽湯で洗淨して拭ひ乾し、馬屁勃末を傅ければ癒える。(仇遠稗史)

草の十一　雜草九種　有名未用百五十三種

時珍曰く、諸草の卑小瑣細なもの、或は考證すべき材料もなく、附屬すべき科目、種類のないもの、并に本經、及び別錄の有名未用の諸草にして遺却し難いものを總括し、此に彙(あつ)め記して特殊なる研鑽、考究の資料に供する。

雜　草

(一)**百草**、拾遺)　藏器曰く、五月五日に一百種の草を採つて陰乾し、灰に燒き石灰に和して團にし、煆(や)き研つて金瘡に傅ければ血を止める。また犬の咬傷にも傅ける。又、燒灰を井華水で和して團にし、白く煆いて釅醋(げんさく)で和し、餅にして腋下に夾(はさ)み、乾けば易へる。能く腋下の臭を去る。(二)又能く一身中の瘡の積毒を抽出するものだ。瘡が出たならば止めてこれを小便で洗ふ。三回に過ぎずして癒える。時珍曰く、按ずるに、千金方に『洞注下痢を治するに、五月五日の百草灰を下部に吹入る。又、瘰癧の破れたものを治するに、五月五日に一切の雜草を採つて煮た汁で洗ふ』とあ

(一) 牧野曰フ、百草ハ草名ニ非ラズ、百種ノ草ヲ集メ黑燒ニシタモノデアル。

(二) 此條原文意義通ゼズ、導生八牋ニ據リ改譯ス。

る。

（三）**百草花**（拾遺）　藏器曰く、百病を主治し、長生し、神仙となる。やはり煮汁で酒を釀して服す。按ずるに、異類に『鳳剛は（四）漁陽の人である。常に百花を採つて水に漬け、泥で封じて百日の間埋め、それを煎じて丸にし、卒死者の口にそれを入れてやつた。すると直ちに活きた。剛は藥を服し、百餘歳にして（五）地肺山に入つた』とある。

（六）**井口邊草**（拾遺）　藏器曰く、小兒の夜啼には、母に知れぬやうに私に床の下に入れて置く。

思邈曰く、五月五日に井中に倒に生えた草を取つて燒き研り、本人に判らぬやうに水で服ませれば、酒が嫌になり、飲まぬやうになる。或は飲んでも醉はなくなる。

（七）**樹孔中草**（綱目）　時珍曰く、小兒の腹痛、夜啼に主效がある。暗に戸の上に著けて置けば止まる。記載は聖惠方にある。

（八）**產死婦人塚上草**（拾遺）　藏器曰く、小兒の醋瘡には、これを取つて後を顧みずに持ち歸り、湯にして浴する。三回に過ぎずして瘥える。

（三）牧野曰フ、百草花ハ百種ノ草花デアル。

（四）漁陽ハ秦ノ郡名今ノ河北省密雲縣ノ地ナリ。

（五）地肺山ハ河南省靈寶縣ノ西南ニ在リ。

（六）牧野曰フ、井口邊草ハ井ノ中ノ側面ニ生エ下ガツテ居ル草デアツテ、其品種ハ固ヨリ不明デアル。先翟之レヲ羊齒ノゐのもとぐさトスルノハ謂レノナイモノデ、全クヨイ加減ナ想像デアル。

（七）牧野曰フ、樹孔中草ハ樹ノ孔穴中ニ生エテ居ツタ草デアル。

（八）牧野曰フ、產死

婦人塚上草ハオ産デ死ンダ女ノ墓ノ上ニ生エタ草デアル。

（九）牧野曰フ、燕蓐草ハつばめノ巣ノ中ノ草デアル。

（一〇）牧野曰フ、雞窠草ハにはとりノトヤノ中ノ草デアル。

（一一）先ノ字、大觀ニ據ル。

（九）**燕蓐草**（宋嘉祐）藏器曰く、卽ち燕窠の中の草である。毒なし。睡眠中の遺尿に主効がある。黒焼にして研末し、水で方寸匕を服す。また噦啘を止める。

時珍曰く、千金方に『男子、婦人の故なくして尿血するを治す。胡燕窠中の草を燒いて末にし、酒で半錢匕を服す』とあり、聖惠方には『消渇飲水には、燕窠中の草を灰に燒いて一兩、牡蠣を煅いて二兩、白羊の肺一頭分を切つて晒して研末し、三錢を新汲水で服す。又、一切の瘡痕の滅せぬには、燕蓐草の燒灰、鷹屎白等分を人乳で和し、一日に三五回塗る。又、浸淫瘡の黄水の出るものには、燒灰を傅ける』とある。

（一〇）**雞窠草**（宋嘉祐）大明曰く、小兒の夜啼には、母に知れぬやうに床下へ入れて置く。

藏器曰く、小兒の白禿瘡には、白頭翁花と共に灰に燒き、臘月猪脂で和して傅ける。（一一）先に酢泔で洗淨する。

時珍曰く、千金方では、産後の遺尿を治するに、燒いて末にして酒で一錢を服す。又、不自祕方では、天絲の目に入りたるを治するに、燒灰の淋汁で洗ふ。

(一二)**猪窠草**　大明曰く、小兒の夜啼には、密かに母に知れぬやうに床下へ入れて置く。

(一三)**牛飴草**　獸部牛の條下に記載してある。

神農本經　已下有名未用

(一)**屈草**　本經に曰く、味苦し、微寒にして毒なし。胸脇下の痛、邪氣、腸間の寒熱、陰痺に主效がある。久しく服すれば、身を輕くし、氣を益し、老に耐へる。

別錄に曰く、漢中の川澤に生ずる。五月に採收する。

別羇　本經に曰く、味苦し、微溫にして毒なし。風寒濕痺で身體重く、四肢が疼き、歷節の酸寒痛するものに主效がある。

別錄に曰く、一名を別枝といふ。(二)藍田の川谷に生ずる。二月、八月に採收する。

弘景曰く、方家で適ゝ用ゐたこともあるのだが、今は絕えた。

名醫別錄　七十八種

(一二)牧野曰フ、猪窠草ハぶた小屋ノ中ノ草デアル。

(一三)牧野曰フ、牛飴草ハうしが芻秣ヲ一度食ッテ、復タ口ニ反シ出シタモノヲ云フノデアル。

(一)牧野曰フ、神農本經カラノ屈草幷ニ次ノ別羇共ニ未詳ノ草デアル。

(二)藍田ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。

(一) 牧野曰フ、名醫別錄カラノ離樓以下芥ニ至ル七十八種ハ皆ナ未詳ノ植物デアル。

(二) 隴西ハ石部鹵石類消石ノ註ヲ見ヨ。

(一)**離樓草** 別錄に曰く、味鹹し、平にして毒なし。氣力を益し、子多からしめ、身を輕くし、天年を延ぶるに主效がある。常山に生じ、七月、八月實を採る。

神護草 別錄に曰く、常山の北に生ずる。八月に採る。留守番(るすばん)の役をなし、人を叱咄するので寇賊が敢て門に入らぬ。

時珍曰く、物類志に、これを護門草、一名靈草といひ『彼の地の住民はこれを門上に置く。人が衣類を著てその門を通ると草が必ずそれを叱る』とある。王筠(わうゐん)の詩に『霜は被る守宮の槐、風は驚く護門の草』とあるはこの草のことだ。惜い哉形狀の說明がない。

黃護草 別錄に曰く、毒なし、痺に主效があり、氣を益し、食慾を增す。(二)隴西(ろうせい)に生ずる。

雀醫草 別錄に曰く、味苦し、毒なし。身を輕くし、氣を益し、爛瘡を洗ひ、風水を療ずるに主效がある。一名白氣といひ、春生え、秋白い花を開き、冬黑い實を結ぶ。

木甘草 別錄に曰く、主として癰腫の盛熱を療ず。煮て洗ふ。木の間に生ずるも

ので、三月蛇牀のやうな形狀の大きな葉が生え、四枚づつ相値ふて生える。ただ枝を折つて種ゑても生えるものだ。五月白い花を開き、實の核は赤い。三月三日に採收する。

益決草　別錄に曰く、味辛し、溫にして毒なし。欬で肺の傷んだものに主效がある。山の陰に生じ、根は細辛のやうだ。

九熟草　別錄に曰く、味甘し、溫にして毒なし。汗を出し、洩を止め、悶を療ずるに主效がある。一名烏粟、一名雀粟といふ。人家の庭中に生え、葉は棗のやうで、一年間に九回熟する。七月に採收する。

兌草　別錄に曰く、味酸し、平にして毒なし。身を輕くし、氣を益し、天年を延べるの主效がある。冬生えて草木の上に蔓をかけ、葉は黃色で毛がある。

異草　別錄に曰く、味甘し、毒なし、痿痺、寒熱に主效があり、黑子を去る。籬木の上に生え、葉は葵のやうで莖の旁に角があり、白い汁が出る。

灌草　別錄に曰く、一名鼠肝。葉は滑かで淸白色だ。癰腫に主效がある。

葩草　別錄に曰く、味辛し、毒なし。傷金瘡に主效がある。○葩の音は起（キ）で

ある。

華草　別錄に曰く、味甘し、毒なし。盛傷、痺腫に主效がある。山澤に生え、蒲黃のやうなもので、葉は芥のやうだ。

英草華　別錄に曰く、味辛し、平にして毒なし。痺氣に主效があり、陰を強くし、女勞疸を療じ、煩を解し、筋骨を堅くし、風頭を療ず。沐用の藥にする。木の上に蔓生する。一名鹿英といふ。九月に採つて陰乾する。

封華　別錄に曰く、味甘し、毒あり。疥瘡に主效があり、肌を養ひ、惡肉を去る。夏至の日に採る。

㥀華　㥀の音は腆（テン）である。別錄に曰く、味甘し、毒なし。上氣に主效があり、煩を解し、筋骨を堅くする。

節華　別錄に曰く、味苦し、毒なし。傷中、痿痺、溢腫に主效がある。皮は脾中の客熱の氣に主效がある。一名山節、一名達節、一名通漆といふ。十月に採つて暴乾する。

讓實　別錄に曰く、味酸し、喉痺に主效があり、洩痢を止める。十月に採つて陰

乾する。

羊實　別錄に曰く、味苦し、寒なり。頭禿、惡瘡、疥瘙、痂（三）癬に主效がある。蜀郡に生ずる。

桑莖實　別錄に曰く、味酸し、溫にして毒なし。妊娠、出產の餘病に主效があり、身を輕くし、氣を益す。一名草王葉といふ。荏のやうで、莖が四角で葉が大きい。畑の中に生える。十月に採收する。

可聚實　別錄に曰く、味甘し、溫にして毒なし。身を輕くし、氣を益し、目を明にする主效がある。一名を長壽といふ。山野や道路などに生え、麥のやうな穗が出て葉は艾のやうだ。五月に採收する。

滿陰實　別錄に曰く、味酸し、平にして毒なし。氣を益し、熱を除き、渴を止め、小便を利し、天年を長くする主效がある。深山、及び畑の中に生え、莖は芥のやうで葉が小さく、實は櫻桃のやうで七月に成る。

普曰く、蔓は瓜のやうだ。

馬顚　別錄に曰く、味甘し、毒あり。浮腫を療ず。多く食つてはならぬ。

（三）痂ハ癬ニ同ジ。

（四）丹陽ハ金部赤銅ノ註ヲ見ヨ。

（五）雞山、未詳。

馬逢　別錄に曰く、味辛し、毒なし。癬蟲に主效がある。

兎棗　別錄に曰く、味酸し、毒なし。身を輕くし、氣を益する主效がある。（四）丹陽の陵地に生ずる。高さ一尺ばかり、實は棗のやうだ。

鹿良　別錄に曰く、味鹹く、臭し。小兒の驚癇、賁豚、瘛瘲、大人の疰に主效がある。五月に採收する。

雞涅　別錄に曰く、味甘し、平にして毒なし。目を明にし、中寒風の諸不足、水腫、邪氣に主效があり、中を補し、洩痢を止め、婦人の白沃を療ず。一名陰洛といふ。（五）雞山に生ずる。採收に一定の時期はない。

犀洛　別錄に曰く、味甘し、毒なし。癃疾に主效がある。一名星洛、一名泥洛といふ。

雀梅　別錄に曰く、味酸し、寒にして毒あり。惡瘡を蝕する主效がある。一名千雀といふ。海水、石谷の間に生ずる。弘景曰く、葉と實とは俱に麥李のやうだ。

燕齒　別錄に曰く、小兒の癇、寒熱に主效がある。五月五日に採る。

土齒　別錄に曰く、味甘し、平にして毒なし。身を輕くし、氣を益し、天年を長くする主效がある。山陵の地中に生じ、形狀は馬牙のやうだ。

金莖　別錄に曰く、味苦し、平にして毒なし。金瘡內漏に主效がある。一名葉金草といふ。澤中の高處に生える。

白背　別錄に曰く、味苦し、平にして毒なし。寒熱に主效があり、惡瘡疥を洗ふ。山陵に生え、根は紫葳に似て、葉は燕廬のやうだ。採收に一定の時期はない。

靑雌　別錄に曰く、味苦し、惡瘡、禿敗瘡、火氣に主效があり、三虫を殺す。一名虫損、一名孟推といふ。(六)方山の山谷に生ずる。

白辛　別錄に曰く、味辛し、毒あり。寒熱に主效がある。一名脫尾、一名羊草といふ。楚の山に生ずる。三月に採收する。根は白くして香しい。

赤擧　別錄に曰く、味甘し、毒なし。腹痛に主效がある。一名羊飴、一名陵渴といふ。山の陰に生え、二月銳い花が咲いて草の上に蔓り、五月黑い實を結び、その中に核がある。三月三日に葉を採つて陰乾する。

赤涅　別錄に曰く、味甘し、毒なし。疰、崩中に主效があり、血を止め、氣を益

(六) 方山ハ石部方解石ノ註ヲ見ヨ。

（七）益州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

（八）房陵ハ石部特生礜石ノ註ヲ見ヨ。

す。蜀郡の山石、陰地の濕つた場所に生える。採收に一定の時期はない。

赤赫 別錄に曰く、味苦し、毒あり。痂瘍、惡敗瘡に主效があり、三虫、邪氣を除く。（七）益州の川谷に生える。二月、八月に採收する。

黃秫 別錄に曰く、味苦し、毒なし。心煩に主效があり、汗の出るを止める。生では桐根のやうだ。

黃辯 別錄に曰く、味甘し、平にして毒なし。心腹疝瘕、口瘡、臍傷に主效がある。一名經辯といふ。

紫給 別錄に曰く、味鹹し、毒風頭、洩注に主效がある。一名野葵といふ。高陵の下地に生える。三月三日に根を採る。その根は烏頭のやうなものだ。

紫藍 別錄に曰く、味鹹し、毒なし、肉食の中毒に主效があり、能くその毒を消除する。

糞藍 別錄に曰く、味苦し、身體の痒瘡、白禿、漆瘡に主效があり、瘡を洗ふ。（八）房陵に生ずる。

巴朱 別錄に曰く、味甘し、毒なし。寒に主效があり、血を止め、帶下を止める。

(九)雒陽に生ずる。

柴紫　別錄に曰く、味苦し、小腹痛に主效があり、小腸を利し、積聚を破り、肌肉を長ず。久しく服すれば身體を輕くし、天年を長くする。(一〇)宛句に生じ、二月、七月に採る。

文石　別錄に曰く、味甘し、寒熱、心煩に主效がある。一名黍石といふ。(一一)東郡の山澤中の水中に生える。五色で汁があつて潤澤だ。

路石　別錄に曰く、味甘く酸し、毒なし。心腹に主效があり、汗を止め、肌を生じ、酒痂、氣を益し、寒に耐へ、骨髓を實てる。一名陵石といふ。草石の上に生え、大雨の際にもこの物のみは乾き、日が出てもこの物のみは濡れてゐる。花は黃色、莖は赤黑色で、三年に一回實を結ぶ。その實は赤くして麻子ほどのものだ。五月、十月に莖葉を採つて陰乾する。

曠石　別錄に曰く、味甘し、平にして毒なし。氣を益し、神を養ひ、熱を除き、渴を止めるに主效がある。江南に生ずるもので、石草のやうだ。

敗石　別錄に曰く、味苦し、毒なし。渴、痺に主效がある。

(九)雒陽、即チ今ノ河南洛陽、雒水ノ陽ナリ。

(一〇)宛句ハ山草類沙參ノ註ヲ見ヨ。

(一一)東郡ハ東部ノ州郡、即チ山東地方ヲ指スモノノ如シ。

（一二）踒折ハ踒軟ノコトヲ云フカ、踒軟ハコシヌケ。

石劇 別錄に曰く、味甘し、毒なし。消渴中を止める。

石芸 別錄に曰く、味甘し、毒なし。目痛、淋露、寒熱、溢血に主效がある。一名螫烈、一名顧啄といふ。三月、五月に莖、葉を採つて陰乾する。

竹付 別錄に曰く、味甘し、毒なし。痛を止め、血を除く。

秘惡 別錄に曰く、味酸し、毒なし。主として肝の邪氣を療ず、一名杜逢といふ。

廬精 別錄に曰く、味平なり。蠱毒を治す。益州に生ずる。

唐夷 別錄に曰く、味苦し、毒なし。主として（一二）踒折を療ず。

知杖 別錄に曰く、味甘し、毒なし。疝を療ず。

河煎 別錄に曰く、味酸し、結氣癰の喉頸に在るものに主效がある。海中に生じ、八月、九月に採收する。

區余 別錄に曰く、味辛し、毒なし、心腹、熱癃に主效がある。

王明 別錄に曰く、味苦し、身熱、邪氣に主效がある。小兒の身熱にはこれで浴する。山谷に生ずるもので、一名を王草といふ。

師系 別錄に曰く、味甘し、毒なし。癰腫、惡瘡に主效がある。これを煮て洗ふ。

一名臣堯(しんげう)、一名巨骨、一名鬼芭(きは)といふ。平澤に生ずるもので、八月に採收する。

并苦　別錄に曰く、欬逆上氣に主效があり、肺氣を益し、五臟を安ずる。一名蔵薰、一名玉荊といふ。三月に採つて陰乾する。○蔵の音は彧(ヰク)である。

索千　別錄に曰く、味苦し、毒なし。易耳に主效がある。一名馬耳といふ。

良達　別錄に曰く、齒痛に主效があり、渴を止め、身體を輕くする。山の陰に生え、莖は蔓延し、大いさは葵(き)ほど、子は滑かで小さい。

戈共　別錄に曰く、味苦し、寒にして毒なし。驚氣、傷寒、腹痛、羸瘦(るゐさう)、皮中に邪氣があり、手足が寒して色なきものに主效がある。益州の山谷に生ずる。蜚蠊(ひれん)を惡む。

船虹　別錄に曰く、味酸し、毒なし。氣を下し、煩渴を止めるの主效がある。浴湯藥とするがよし。色は黃なものだ。蜀郡に生ずる。立秋に取る。

姑活　別錄に曰く、味甘し、溫にして毒なし。大風、邪氣、濕痺、寒痛に主效があり、久しく服すれば身を輕くし、(一三)氣を益し、老に耐(た)へる。一名冬葵子といふ。(一四)河東に生ずる。

(一三)氣、大觀ニ壽ニ作ル。
(一四)河東ハ今ノ山西省地方。

弘景曰く、(二五)薬の無用のものをば囲活丸といふ。卽ちこれは野葛の名稱だ。一名冬葵といふが、やはり菜の冬葵子とは異ふ。

恭曰く、別(二六)本に『一名雞精』とある。

白女腸　別錄に曰く、味辛し、溫にして毒なし。洩痢、腸澼に主效があり、心痛を療じ、疝瘕を破る。深い山谷に生じ、葉は藍のやうで實は赤い。赤女腸も同じ。

白扇根　別錄に曰く、味苦し、寒にして毒なし。瘧、皮膚の寒熱に主效があり、汗を出し、人をして(二七)變ぜしめる。

黃白支　別錄に曰く、山陵に生ずる。三月、四月に根を採つて暴乾する。

父陛根　別錄に曰く、味辛し、毒あり。癰腫、膚脹を熨す。一名膏魚、一名梓藻といふ。

疥拍腹　別錄に曰く、味辛し、溫にして毒なし。身を輕くし、痺を療ずるの主效がある。五月に採つて陰乾する。

五母麻　別錄に曰く、味苦し、毒あり。痿痺、大便下痢に主效がある。一名鹿麻、一名歸澤麻、一名天麻、一名若草といふ。野や畑に生え、五月に採收する。

(二五)大觀ニ藥ノ上ニ方字アリ、マタ亦無用者ノ四字藥ノ下ニアリ。

(二六)大觀ニ本ヲ錄ニ作ル。

(二七)變、大觀ニ攣ニ作ル。

時珍曰く、茺蔚の白花のものをもまた天麻草と名ける。

五色符　別錄に曰く、味苦し、微溫なり。欬逆、五臟の邪氣に主效があり、中を調へ、氣を益し、目を明にし、蟲を殺す。靑符、白符、赤符、黑符、黃符、それぞれその色に隨つてその臟を補す。白符、一名女木といひ、(二七)巴の山谷に生ずる。

救赦人者　別錄に曰く、味甘し、毒あり。疝痺、氣を通じ、諸不足に主效がある。人家の宮室に生ずる。五月、十月に採つて暴乾する。

常吏之生　蜀本には、吏の字を更と書いてある。別錄に曰く、味苦し、平にして毒なし、目を明にするの主效がある。實に刺があり、大いさ稻、粱ほどのものである。

載　別錄に曰く、味酸し、毒なし。諸惡氣に主效がある。

慶　別錄に曰く、味苦し、毒なし。咳嗽に主效がある。

腂　音は戶瓦の切(クワ)である。別錄に曰く、味甘し、毒なし。氣を益し、天年を延べるの主效がある。山谷中に生え、白い順理のものだ。十月に採收する。

芥　別錄に曰く、味苦し、寒にして毒なし。消渴、血を止め、婦人の疾、痺を除

(二八)巴ハ隰草類天名精ノ註ヲ見ヨ。

くの主效がある。一名梨といふ。葉は大靑のやうだ。

本草拾遺　十二種

（一）**鴆鳥漿**　藏器曰く、江南地方の林木の下に生える。高さ一二尺、葉の陰は紫色で冬凋まず、珠のやうな赤色の子がある。味甘し、溫にして毒なし。能く諸毒を解すところからかく名けたものだ。山中生活者は酒に浸して服す。風血、羸老に主效がある。

頌曰く、鴆鳥威は（二）信州の山野中に生ずる。春靑葉が生え、九月蓬蒿菜花のやうな淡黃色の花を開き、實は結ばない。癰腫、癤毒を療す。採收に一定の時期はない。

（三）**吉祥草**　藏器曰く、西國に生ずる。胡人が齎し來つたものだ。味甘し、溫にして毒なし、目を明にし、記憶力を强くし、心力を補す。

時珍曰く、今世間で栽培する一種の草に、葉が漳蘭のやうで四季共に靑翠色を呈し、夏紫色の穗に成る花を開き、繁殖し易い草がある。やはり吉祥草なる名稱はあるが、此にいふ吉祥とは異ふ。

（一）牧野曰フ、鴆鳥漿ハ未詳ノ草デアル。

（二）信州ハ金部金ノ註ヲ見ヨ。

（三）牧野曰フ、吉祥草ハ未詳ノ草デアルが、時珍が此ニ記セル所謂吉祥草ハ今日世間デ呼ブゆり科（百合科）ノきちじようさう一名くわんとんさう卽チReineckia carnea, Kunth. デア

ル。時珍ハ之レヲ主品ノ吉祥草ト同名異物トシ、小野蘭山ハ兩者ヲ同品トスルガ、是レハ時珍ノ說ガヨイト思フ。
(四)牧野曰フ、雞脚草以下、無風獨搖草ニ至ルマデ未詳ナル草デアル。
(五)大觀ニ鑼下ニ草字アリ。
(六)桂州ハ毒草類鉤吻ノ註ヲ見ヨ。
(七)如安ハ始安ノ誤

(四)**雞脚草**　藏器曰く、澤畔に生え、莖が赤く、葉が對して生え、百合の苗のやうだ。味苦し、平にして毒なし。赤白久痢で疳になつたものに主效がある。

兎肝草　藏器曰く、初生には葉が細く軟かで兎肝に似てゐる。一名雞肝といふ。味甘し、平にして毒なし。金瘡に主效があり、血を止め、肉を生じ、丹石を服して發する熱を解す。

斷鑵草　藏器曰く、丁瘡に主效がある。白牙菫菜、半夏、地骨皮、青苔、蜂窠、小兒髮、緋帛と等分を合せ、五月五日にそれを灰に燒き、一錢づつを湯で服すれば根を抜く。○菫の音は畜(チク)であつて、羊蹄根のことだ。

千金鑼(五)　藏器曰く、江南に生ずる。高さ二三尺、蛇、蠍、虫の咬毒に主效がある。搗いて瘡上に傅ければ肌を生じ、痛を止める。

土落草　藏器曰く、嶺南の山谷に生ずる。葉は細く長いものだ。味甘し、溫にして毒なし。腹冷、氣痛、痃癖に主效があり、酒で煎じて服す。また搗汁を溫服してもよし。

倚待草　藏器曰く、(六)桂州、(七)如安の山谷に生ずる。葉は圓く、高さ二三尺、八

ナラン。始安トハ今ノ廣西省桂林ノ地ナリ。

(八)四明山ハ隱草類艾ノ註ヲ見ヨ。

(九)威州ハ茅草類蒟蒻ノ註ヲ見ヨ。

月に採收する。味甘し、温にして毒なし。血氣、虚勞の腰膝疼弱、風緩、羸瘦して顔色なきもの、絶陽して子無きもの、婦人の老血に主效がある。酒に浸して服す。病を驅逐することの速なるところから倚待と名けたのである。

藥王草　藏器曰く、苗、莖の色は青く、摘めば汁が出る。味甘し、平にして毒なし。一切の毒を解し、鼻衄、吐血を止め、煩躁を祛る。

筋子根　藏器曰く、(八)四明山に生ずる。苗の高さ一尺餘、葉は圓く厚く、光があつて潤ふてゐる。冬も凋まない。根の太さは指ほどある。また根子とも名ける。味苦し、温にして毒なし。冷熱、遠近を問はず心腹痛、惡鬼の氣注、刺痛、霍亂、蠱毒の暴下血に主效がある。酒か飲に磨つて服す。

頌曰く、根子は(九)威州の山中に生ずる。味苦く辛し、温なり。心中の結塊、久積氣攻で臍下の痛むものに主效がある。

廬藥　藏器曰く、胡國に生ずる。乾茅に似て黄赤色のものだ。味鹹し、温にして毒なし。折傷内損の瘀血に主效があり、膚を生じ、痛を止め、五臓を治し、邪氣を除き、虚損、產後の血病を補す。水で煮て服し、また搗いて傷處に傅ける。

時珍曰く、外臺祕要に『落馬の內損を治す。膏藥末一兩、牛乳一錢を煎じて服す』とある。

無風獨搖草（拾遺）　珣曰く、〔二〇〕大秦國、及び嶺南に生じ、五月五日に採る。また諸處の山野にも往往ある。頭は彈子のやう、尾は鳥尾のやうで、兩片が開合して人を見ると自ら動く。故に獨搖といふ。性は溫、平にして毒なし。頭骨の遊風、全身の瘙きに主效がある。煮汁で淋し洗ふ。

藏器曰く、これを帶びれば夫に愛情を起させる。

時珍曰く、羌活、天麻、鬼臼、薇銜の四種の草にもみな無風獨搖草なる名稱はあるが、實物は同じくない。段成式の酉陽雜俎に『〔二一〕雅州に舞草といふが生える。決明のやうな三葉があつて、一葉は莖の端にあり、二葉は莖の半に相對してゐて、人が近づいて歌を謳ひ、また掌を拍つて拍子を取ると、その葉は舞ふやうに動く』とある。按ずるに、これは虞美人草のことだ。やはり無風獨搖の類である。又按ずるに、山海經に『〔二二〕姑媱の山、帝女が死んだところであつて、それが化して䔄となつた。その葉は相重り、花は黃色、實は兎絲のやうだ。媚藥としてこれを服す』とあ

〔二〇〕大秦國ハ石部玉ノ註ヲ見ヨ。

〔二一〕雅州ハ水部甘露ノ註ヲ見ヨ。

〔二二〕姑媱之山、中次七經ノ三、鼓鐘之山（畢沅ハ今ノ河南省陸渾縣西南三十里ニ在リトイフ）ニ次ギ『又東二百里姑媱之山』トアリ。

り、郭璞の註に『一名荒夫草』とある。この說は陳藏器が『これを帶びれば愛情を起させる』といつたその物のやうである。同一物をいふのではあるまいか。

唐海藥本草　一種

(一)**宜南草**　珣曰く、(二)廣南の山谷に生ずる。莢があつて長さ二尺ばかり、內に紙のやうな大いさ蟬の羽ほどの薄片がある。邪に主效があり、少男、少女が緋絹袋に盛つて臂に佩れば、惡を辟け、驚を止める。この草は南方に生ずるから宜南と名けた。命名の意味は萱草を宜男といふとは同じくない。

宋開寶本草　一種

(一)**陀得花**　志曰く、味甘し、溫にして毒なし。一切の風血に主效がある。酒に浸して服す。西國に生じ、胡人が齎し來つたものである。胡人はこの花を採つて酒に釀し、それを三勒漿と呼ぶ。

(一)牧野曰フ、宜南草ハ未詳ノ草デアル。
(二)廣南ハ今ノ安南地方。

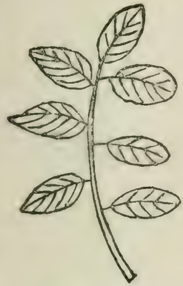
(一)牧野曰フ、蛇得花ハ未詳ノ草デアル。

(一)牧野曰フ、建水草、百藥祖、催風使、共ニ未詳ノ品デアル。
(二)福州ハ石部鹵石類金鹽ノ註ヲ見ヨ。
(三)天台山ハ芳草類芎藭ノ註ヲ見ヨ。

宋圖經外類　二十種

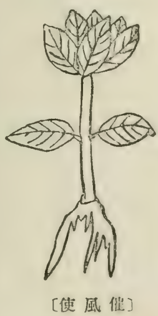
(一)**建水草**　頌曰く、(二)福州に生ずる。枝、葉は桑に似て、四季を通じてある。土地の住民は葉を取つて焙じ乾し、研末して溫酒で服し、走注風痛を治す。


〔建水草〕


〔百藥祖〕

百藥祖　頌曰く、(三)天台山中に生ずる。冬、夏とも常に青い。土地の者は葉を採つて風の治療に用ゐるが、有效だ。

催風使　頌曰く、天台山中に生ずる。冬、夏とも常に青い。土地の者は葉を採つて風の治療に用ゐるが、有效だ。


〔催風使〕

時珍曰く、五加皮にも催風使なる名稱がある。

(四)**刺虎** 頌曰く、(五)睦州に生ずる。冬を淩いで凋まぬ。根、葉、枝を採つて藥に入れる。味甘し。一切の腫痛、風疾に主效があり、剉み焙じて末にし、酒で一錢を服す。



〔刺　　虎〕

時珍曰く、壽域方に『丹瘤を治するに、虎刺、卽ち壽星草の搗汁を塗る』とある。又、伏牛花を一名隔虎刺といふ。

(六)**石逍遙**(七) 頌曰く、(八)常州に生ずる。冬、夏とも常にある。花、實はない。味苦し、微寒にして毒なし。癱瘓諸風、手足不遂に主效があり、末にして煉蜜で梧子大の丸にし、一日二回、酒で二十丸づつを服す。百日で瘥える。久しく服すれば身を輕くする。初めて服した當座は頭痛を感ずるが害はない。



〔石逍遙草〕

黃寮郎 頌曰く、天台山中に生ずる。冬、夏とも常に青い。土地の者は根を採つ

(四)牧野曰フ、先羅此刺虎ヲ虎刺ト同物トシ、之レヲあかね科(茜草科)ノありどほし Damnacanthus indicus, Gaertn) ニ充ツ、今之レニ從ヒオク。

(五)睦州ハ石部石膏ノ註ヲ見ヨ。

(六)牧野曰フ、石逍遙、黃寮郎、黃花了共ニ未詳ノ品デアル。

(七)大觀ニ草字アリ。

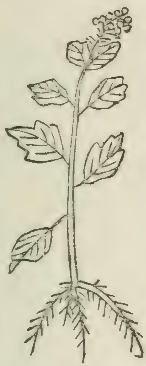
(八)常州ハ隰草類金盞草ノ註ヲ見ヨ。

て風の治療に用ゐ、有效だ。

時珍曰く、按ずるに、醫學正傳に『黄寮郎は俗に倒摘刺と呼ぶものである。喉痛を治す。根の擂汁に少量の酒を入れて滴らせば直ちに癒える』とある。又、醫學集成には『牙痛には、倒摘刺を刀上で燒いてその柴煙を取り、綿に蘸けて痛處を塞げば止まる』とある。



〔黄寮郎〕



〔黄花了〕

黄花了　頌曰く、信州に生ずる。春生えて葉は青く、三月(九)辣菜の花に似た黄色の花を開き、秋季中に實を結ぶ。採收に一定の時期はない。咽喉、口齒の病を治するに效がある。

(一〇)**百兩金**　頌曰く、戎州、河中府、(一一)雲安軍に生ずる。苗は高さ二三尺、幹があつて木のやうだ。冬を凌いで凋まぬ。葉は荔枝の初生のやうで、背面、表面共に青く、秋後には背面が紫になるが表面は青い。初秋に青碧色の花を開き、豆ほどの實

(九)辣菜ハ芥ノ一名。

(一〇)牧野フ、百兩金ハ未詳ノ品デアル。小翟ハ之レヲやぶかうじ科(紫金牛科)ノからたちばなトスレドモ私ハ賛成セズ。

(一一)雲安軍ハ芳草類

百兩金ノ註チ見ヨ。

(一二)牧野曰フ、地茄子、田母草共ニ未詳ノ品デアル。
(一三)商州ハ石部丹砂ノ註チ見ヨ。
(一四)臨江軍ハ宋ニ置ク、今ノ江西省清江縣ソノ舊治ナリ。
(一五)大觀ニ二ニ作ル。
(一六)牧野曰フ、田麻

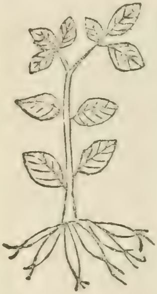
を結ぶ。實は生は青く、熟すれば赤くなる。時期に拘らず根を採り、心を去つて用ゐる。味苦し、性平にして毒なし。壅熱の咽喉腫痛を治す。一寸を含んで汁を嚥む。

河中に産するものは、根が赤くして蔓菁のやう、莖は細く色が青く、四月碎けて小さい星宿花に似た黄色の花を開く。五月根の長さ一寸ほどになつたものを採り、晒し乾して用ゐ、風涎を治す。



〔百兩金〕

(一二)**地茄子** 頌曰く、(一三)商州に生ずる。三月花を開いて子を結ぶ。五六月に採つて陰乾する。味微し辛し、溫にして小毒あり。中風、痰涎、麻痺に主效があり、熱毒氣を下し、堅積を破り、膈を利し、癰腫、瘡瘍を消し、血を散じ、胎を墮す。

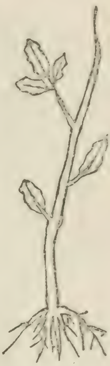


〔田母草〕

田母草 頌曰く、(一四)臨江軍に生ずる。花、實はない。(一五)三月根を採る。性涼なり。煩熱、及

び小兒の風熱に尤も主效がある。

(一六)**田麻**　頌曰く、信州の野や畑、及び溝や谷の旁に生じ、春、夏青葉が生え、(一七)八月中に小莢を著ける。(一八)冬季に葉を採つて瘡癤、腫毒を治す。



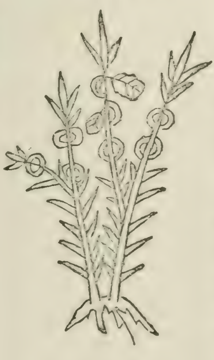
〔田麻〕

(一九)**芥心草**　頌曰く、(二〇)淄州に生ずる。(二一)白色の蔓を引き、根は黄色である。四月苗、葉を採り、末に搗いて瘡疥を治す。甚だ效がある。



〔芥心草〕

苦芥子　頌曰く、秦州に生ずる。苗は長さ一尺餘、莖は青く、葉は柳のやうで、楡(二二)莢に似た白花を開き、子は黒色だ。味苦し、大寒にして毒なし。目を明にし、血風の煩躁を治す。



〔苦芥子〕

ハ未詳ノ草デアル。然ルニ先輩ハ之レヲからすのごま（しなのき科ノCorchoropsis tomentosa, Makino.）ニ充ツレドモ不可ト思フ。

(一七)大觀ニ八ノ上ニ七ノ字アリ。

(一八)大觀ニ冬月ヲ冬三月ニ作ル。

(一九)牧野曰フ、芥心草、苦芥子、布里草、茆質汗、共ニ未詳ノ品デアル。

(二〇)淄州ハ石部代赭石ノ註ヲ見ヨ。

(二一)大觀ニ初生似鷹蕨草ノ六字アリ。

(二二)大觀ニ葉ヲ莢ニ作ル。

(二三)南恩州ハ石部石蛇ノ註ヲ見ヨ。

(二四)大觀ニ苦ニ作ル。

(二五)牧野曰ク、胡堇草 未詳ノ草デアル。先輩之レヲすみれ科(菫菜科)ノえいざんすみれニ充ツレドモ中ラズト私ハ認ムル。

(二六)密州ハ隰草類地膚ノ註ヲ見ヨ。

(二七)東武山ハ今ノ山東省諸城縣ニ在リ。


〔布里草〕

布里草 頌曰く、(二三)南恩州の原野中に生ずる。莖の高さ三四尺、葉は李に似て大きく、夏になつて花が開かずに實がなる。その實を食へば瀉する。根皮を採り、焙じて末にする。味(二四)甘し、寒にして小毒あり。瘡疥を治し、蟲を殺す。

茆質汗 頌曰く、信州に生ずる。葉は青く、花は白い。七月根を採る 風腫を治し、血を行らすに效がある。


〔茆質汗〕

(二五)**胡堇草** 頌曰く、(二六)密州の(二七)東武山の畑に生ずる。枝・葉は小菫葉に似て、花は紫色で翹韶花に似てゐる。一枝に七葉あり、花は二三莖に出る。春苗を採る。

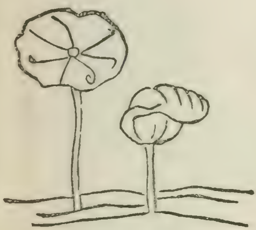

〔胡堇草〕

味辛し、滑にして毒なし。五臟、營衞、肌肉、皮(二八)中の(二九)瘀血に主効があり、痛を止め、血を散ずる。搗汁を金瘡に塗る。凡そ打撲で筋骨を損傷したもの、惡瘡(三〇)腫には、松枝、乳香、亂髪灰花、桑柴炭と共に搗いて彈子大の丸にし、一丸づつを酒で服す。痛は立ろに止まる。



〔小兒羣〕

(三一)**小兒羣**　頌曰く、(三二)施州に生ずる。叢(三三)つて高さ一尺ほどになり、春、夏に苗葉が生えて花はなく、冬枯れる。その根は、味辛く、性涼にして毒なし。左纏草、卽ち奕花根を焙じ乾したものと等分を末にし、湯で一錢を服すれば淋疾を治す。忌むものなし。



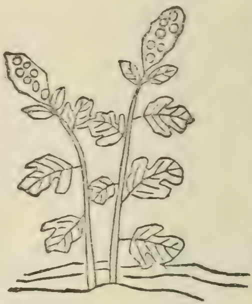
〔獨脚仙〕

(三四)**獨脚仙**　頌曰く、福州の山林の旁に生じ、日陰の泉などの處に多い。春、苗が生え、(三五)葉は圓くして下に落ち、脚は紫で長さ三四寸、秋、冬に葉が落ちる。夏季に根、葉共に採つて焙じて末にし、湯で半錢を煎じて服すれば婦人の血塊を治す。

(二八)大觀ニ皮下ニ膚字アリ。
(二九)大觀ニ瘀ニ作ル。
(三〇)大觀ニ腫上ニ瘡字アリ。
(三一)牧野曰フ、小兒羣ハ未詳ノ草デアル。
(三二)施州ハ山草類都管草ノ註ヲ見ヨ。
(三三)大觀ニ叢下ニ生字アリ。
(三四)牧野曰フ、獨脚仙ハ或ハ獨脚蓮ト同品デハナカラウカト思フ。獨脚蓮ハ卽チ鬼臼ノコトデ一ニ八角蓮ト稱シめぎ科ノPodophyllum versipelle, Hance. デアル。
(三五)三才圖會ニ其葉上青下紫其脚四五寸ニ作ル。

(三六)牧野曰フ、撮石合草、露筋草、共ニ未詳ノ草デアル。
(三七)眉州ハ山草類狗脊ノ註ヲ見ヨ。

(三六)**撮石合草**　頌曰く、(三七)眉州の平田中に生ずる。莖は高さ二尺ほど、葉は榖菜に似てゐる。十二月に萌芽し、二月花が咲き、實は結ばない。その苗は味甘し、毒なし。金瘡を療ず。



〔撮石合草〕



〔露筋草〕

露筋草　頌曰く、施州に生ずる。株の高さ三尺ほど、春苗が生え、隨つて花を開き、碧綠色の子を結ぶ。四季共に凋まぬ。その根は味辛く濇し、性涼にして毒なし。蜘蛛、蜈蚣の咬傷に主效がある。焙じ研つて白礬と水で調へて貼る。

本草綱目　三十九種

(一)九龍草　時珍曰く、平澤に生ずる。楊梅のやうな形狀の紅い子を生ずるもので、その苗は諸毒を解す。喉痛を治するには搗汁を灌ぐ。骨筋折傷には、搗いて患部を罨する。蛇、虺の傷には、搗汁に雄黃二錢を入れて服す。痛は立ろに止まる。又、楊淸叟外科に『喉風の重舌、牙關緊閉には、九龍草、一名金釵草——ただ一本上に伸びたものが妙である。ただ根を用ゐ、皮は用ゐない——を打碎いて綿で裹み、筋上から牙關を擦れば開く、そこで深く喉中に插めば痰涎を取り出す。かくて更にその根を火で炙き熱して鹽を帶びて點ける。直ちに癒える』とある。

荔枝草　時珍曰く、衞生易簡方に『蛇咬、犬傷、及び破傷風を治す。この草一握——約三兩——を取り、酒二盌で一盌に煎じて服す。汗を取り出して效がある』とある。

水銀草　時珍曰く、衞生易簡方に『眼昏を治す。三錢づつに木賊少量を入れ、水一琖で八分に煎じて服す』とある。

(二)透骨草　時珍曰く、筋骨一切の風濕、疼痛、攣縮、寒濕脚氣を治す。孫氏集效方に『癘風、全身の瘡癬を治す。透骨草、苦參、大黃、雄黃各五錢を硏末して湯に

(一)牧野曰ク、九龍草、荔枝草、水銀草共ニ未詳ノ草デアル。

(二)透骨草、一名天芝麻、救荒本草ニ出ヅ。

煎じ、密室中に床を圍ひ、先づ熏じて汗を雨のやうに出してから洗ふ』とある。普濟方には『反胃吐食を治す。透骨草、獨科蒼耳、生牡蠣各一錢、薑三片を水で煎じて服す』とある。楊誠經驗方には『一切の腫毒の初期を治す。透骨草、漏蘆、防風、地楡等分を湯に煎じ、綿に蘸け熱に乘じて手を休めず盪ふ。二三日で消く』とある。

(二)**蛇眼草**　時珍曰く、古井、及び年久しく日光の當らぬ低處に生える。形狀は淡竹葉のやうで、背面は全部蛇の目のやうな紅圈だ。唐瑤の經驗方に『蛇咬を治す。搗き爛らして患部に傅ける』とある。



〔蛇眼草〕

(三)**鷺項草**　時珍曰く、臞仙壽域方に『咽喉に生じた瘡を治す。花を取つて白芷、椒根皮と共に研末し、瘡口に吹けば效がある』とある。

蛇魚草　時珍曰く、戴原禮の證治要訣に『金瘡出血の止まぬを治す。搗いて傅ける』とある。

九里香草　時珍曰く、傅滋の醫學集成に『肚癰を治す。搗き碎いて酒に浸して服

牧野曰フ、此處ノ透骨草ハ未詳ノ草デアル。救荒本草ノ透骨草ハ蓋シ同名異物デ、一名ヲ天芝麻ト稱スル。蓋シ茺蔚、一名益母草ト同品デアラウ。即チ唇形科ノめはじき、一名やくもさうデ Leonurus sibiricus, L. ノ學名ヲ有スルモノデアル。

(二)牧野曰フ、蛇眼草ハ蓋シ羊齒ノ一種ト思ハゲ其品種ハ今遽カニ分明セズ。文中ノ紅圈ハ其葉裏ノ圓キ紅色ノ嚢堆ヲ指シタモノデアラウ。

(三)此草ハ之レヲいはがねさう (Coniogramme japonica, Diels.) ニ充テテ居レドモ全然中ラナイ。いはがねさう・嚢堆ハ線狀ヲナシテ圓形デ

す』とある。

白莛草　時珍曰く、香草である。蟲が最もこれを畏れる。孫眞人の千金方に『諸蟲瘡、疥癩を治す。根、葉を取り、水で煎じて隔日に一回洗ふ』とある。

環腸草　時珍曰く、張子和の儒門事親方に『蠱脹を治す。晒し乾し、水で煎じて日毎に服す。小便の利するを度とする』とある。

劉耳草　時珍曰く、王執中資生經の氣聾を治する方中にこれを用ゐてある。

(五)**耳環草**　時珍曰く、危亦林の得效方に『五痔を治す。軟かに挼んで患部に挿入すれば效がある。一名碧蟬兒花といふ』とある。

(六)**銅鼓草**　時珍曰く、范成大の虞衡志に『廣西に出る。その實は瓜のやうなものだ。瘍毒を治す』とある。

(七)**蠶繭草**　時珍曰く、摘玄方に『腫脹を治す。半斤を、冬瓜皮半斤、紫蘇根葉半斤、生薑皮三兩と共に湯に煎じて熏じ洗ひ、暖く臥して汗を取る。三回試れば小便が淸く長くなり、自然に脹が退く』とある。

(八)**野芗草**　時珍曰く、摘玄方に『痞滿を治す。五斤を用ゐ、一半を烏盆の中に入

ナク、蛇眼ノ狀ハナシテ居ラス。

(四)牧野曰フ、鷺項草、蛇魚草、九里香草、白莛草、環腸草、劉耳草、共ニ未詳ノ草デアル。

(五)牧野曰フ、耳環草ハ鴨跖草即チつゆくさデアル、一名ヲ碧蟬兒花ト云フト本文ニアル。

(六)牧野曰フ、銅鼓草ハ或ハ植物名實圖考、巻ノ二十三ニ出テ居ルききやう科(桔梗科)ノ銅鎚玉帶草[Pratia nummularia, Kurz.]デハナイカト思フ。此草ハ和名ヲさくらださうト呼ビ、我ガ臺灣ニモ産

スル。
(七) 牧野曰フ、鷺繭草ハたで科(蓼科)ノしろばなさくらたでデアル。
(八) 牧野曰フ、野芬草、纈霞草、牛脂芳、鴨脚靑、天仙蓮、雙頭蓮、猪藍子、天芥菜、佛掌花、郭公刺、篷蕪菜、共ニ未詳ノ品デアル。

れ、その上へ雛子十箇を置き、他の一半でその上を蓋ひ、米泔で二晝夜浸すと雛子の殼が軟になる。その時に飯の上へそれを取り、蒸熟して一時に食ふ。それで塊は漸次に消く。これは實驗を經たものだ』とある。

纈霞草 時珍曰く、陳巽の經驗方に『元臟の虛冷、氣攻の臍腹痛には、硇砂一兩、生烏頭を皮を去つて二兩、纈霞草二兩を末にし、小沙罐を固濟し、慢火で赤く燒いた中へ、この草に硇を拌ぜて入れ、口、頂を蓋はずに火一秤で煆き、爐が冷えてから取り出して烏頭末と共に蒸餅で梧子大の丸にし、三丸づつを醋湯で服す』とある。

牛脂芳 時珍曰く、經驗良方に『七孔の出血を治す。粗い末にし、一勺づつを瓦器で煎じて服し、紗で頭と項をつつみ、また小指にこの草の根を結び付けて置く』とある。

鴨脚靑 時珍曰く、普濟方に『疔瘡の連珠の如くなるを治す。薰蘇と共に研り爛らし、糖水を拌ぜて刷く』とある。

天仙蓮 時珍曰く、衞生易簡方に『惡毒瘡癤を治す。葉を搗いて傅ける』とある。

雙頭蓮 時珍曰く、一名催生草といふ。婦人の產難に主效がある。左手にこれを

握れば分娩する。又、腫脹に主效があり、小便を利す。衞生易簡方に『大人、小兒の牙疳を治す。搗き爛らして貼る』とある。

豬藍子　時珍曰く、衞生易簡方に『耳中に膿あるをば通耳と名ける。この草の子を末にし、筒で吹入れる。二三回に過ぎずして癒える』とある。

天芥菜　時珍曰く、平野に生じ、葉は小さく、芥のやうな形狀だ。味苦し。一名雞痾粘といふ。蛇傷に主效があり、金沸草と共に鹽を入れて搗いて傅ける。王璽の醫林集要に『腋下に生じた腫毒を治す。鹽醋と共に搗いて傅ければ、腫を散じ、痛を止め、已に化膿したものも平安になる。また一切の腫毒を治す』とある。



〔天芥菜〕

佛掌花　時珍曰く、普濟方に『櫻桃のやうな疔瘡を治す。根を生薑、蜜と共に研つてその汁を服し、外部に天茄葉を貼る』とある。

郭公(九)刺　時珍曰く、一名光骨刺といふ。葉を取つて細かに搗き、油で調へて天泡瘡に傅ける。虞摶の醫學正傳に『哮喘を治す。根を取つて剉み、水で煎じて服す。

(九)本書ニ公下ニ毎字アリ。

直に止まる』とある。

邊箕柴 時珍曰く、山中に生ずる。王永輔の恵濟方に『癧瘡を治す。皮を取り、湯に煎じて服す。須臾にして耐ひ切れぬほど痒くなつたとき、手で爬き破つて毒氣を出せば癒える』とある。

（一）**碎米柴** 時珍曰く、癰疽發背に主效がある。このを葉を取つて傅藥に入れて用ゐる。

（二）**羊屎柴** 時珍曰く、一名牛屎柴といふ。山野に生じ、葉は鶴虱に類し、四月に白色の花を開く。紅花のものもある。羊の屎のやうな形狀の子を結ぶ。これを鐵草子といふ。根は魚類を毒し得る。夏は苗と葉を用ゐ、冬は根を用ゐる。癰疽發背に主效があり、搗爛らして傅ければ能く瘡口を合し、膿血を散ずる。乾いたものをば末にして漿水で調へて傅ける。又、水を傾け注ぐやうに下血するを



〔羊屎柴〕

（一）牧野曰フ、碎米柴ヲ先輩ハ碎米薺デアルトシテ、十字花科ノたねつけばなトスレドモ信據シ難イ。要スルニ未詳ノ一草ニ屬スル。

（二）牧野曰フ、羊屎柴、山枇杷柴、三角風、葉下紅共ニ未詳ノ品デアル。

治す。生の根一斤を生白酒二斗で一斗に煮取り、空心に隨意の量を飲む。

山枇杷柴　時珍曰く、危亦林の得效方に『湯火傷を治す。皮を取つて焙じて研末し、蜜で調へて傅ける』とある。

三角風　時珍曰く、一名三角尖といふ。石上のものを取るが尤も良し。風濕の流注、疼痛、及び癰疽腫毒に主效がある。

葉下紅　時珍曰く、飛絲が目に入つて腫痛するものに主效がある。鹽少量と共に絹に包み、目に汁を滴し入れ、同時に左の目の場合はそれで右の鼻を塞ぎ、右の目の場合は左の鼻を塞ぐ。

(一二)**滿江紅**　時珍曰く、癰疽に主效がある。膏に入れて用ゐる。

(一三)**隔山消**　時珍曰く、(一四)太和山に出る。白色のものだ。腹脹、積滯に主效がある。孫天仁の集效方に『氣膈の噎食、轉食を治す。隔山消二兩、雞肫皮一兩、牛膽、南星、朱砂各一兩、急性子二錢を末にし、煉蜜で小豆大の丸にし、一錢づつを淡薑湯で服す』とある。

石見穿　時珍曰く、骨痛、大風、癰腫に主效がある。

(一二)牧野曰フ、滿江紅ヲ先輩ハさんせうも科（槐葉蘋科）ノあかうきくさ（Azolla屬）ニ充テ居レドモ、是レハタダ其字面カラ想像シテ極メタモノデ、其レガ果シテサウ乎或ハ何カ他ノ草カ不明デアル。故ニ之レヲ斯クスルコトハ正當デアルト斷

（一五）**醉醒草**　時珍曰く、天寶遺事に『玄宗が興慶池の邊にこれを植ゑると叢り生えた。葉は紫色、心は赤黒色で、醉客がその草を摘んで香を嗅いだところ、立つに醉が醒めた』とある。それでかく名けたものだ。

（一六）**墓頭回**　時珍曰く、董炳の集驗方に『崩中、赤白帶下を治す。この草一把、酒水各半盞、童尿半盞、新紅花一捻を用ゐ、七分に煎じて就寢時に溫服する。發病後幾も經たぬものは一服、久しく經つたものは三服で癒える。その效神の如きものだ。ある僧が此の方を用ゐて蔡大尹の夫人を治療したが、有效であつた』とある。



〔墓頭回〕

（一七）**羊茅**　時珍曰く、羊が喜んで食ふから名けたものである。普濟方に『喉痺腫痛を治す。搗汁を嚥む』とある。

（一八）**阿兒只**　時珍曰く、劉郁の西域記に『西域に出るもので、形狀は苦參の如く、打撲傷損、婦人の損胎に主效があり、豆ほどを嚥めば自ら消する。又、魚鼠瘡を治

言スルコトハ出來ヌ。
（一三）牧野曰フ、兩山消、石見穿、醉醒草ハ共ニ未詳ノ品デアル。
（一四）太和山ハ隰草類ノ千年艾ノ註ヲ見ヨ。
（一五）本書ニ醒醉草ニ作ル。
（一六）牧野曰フ、墓頭回ハ未詳ノ品デアル。先輩ハ之レヲ救荒本草ノ墓頭灰ト同ジトシテをみなへし科（敗醬科）ノをみなへしニ充テ居ルガ私ハ從ハヌ。又植物名實圖考、卷ノ八ニ墓頭回ノ圖アレドモ、其種屬ハ判然セヌガ決シテをみなへしデハナイ。
（一七）牧野曰フ、羊茅、阿兒只、阿息兒、奴哥撒兒ハ共ニ未詳ノ品

す』とある。

阿息兒　時珍曰く、『西域に出る。形狀は地骨皮の如く、婦人の產後に胞衣の下らぬを治す。又、金瘡の膿の出ぬものを治す。嚼み爛らして塗れば出る』とある。

奴哥撒兒　時珍曰く、『西域に出る。形狀は桔梗の如く、金瘡、及び腸と筋との斷れたものを治す。嚼み爛らして傅ければ自から續がる』とある。

（二八）本書ニ阿只兒ニ作ル。

本草綱目草部第二十一卷　終

昭和六年六月十一日印刷
昭和六年六月十五日發行

頭註國譯本草綱目草部（第六冊）

非賣品

監修兼部譯者　白井光太郎
　　　　　　　鈴木眞海

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行者　和田利彦

東京市日本橋區通三丁目八番地
印刷者　木村諭吉

東京市日本橋區通三丁目八番地
刊行所　春陽堂
電話日本橋五一・六四一・三七八八
振替口座東京一六一七

東京・日東印刷株式會社・印行

東京 春陽堂出版